
砂の星、響く声

理祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂の星、響く声

【Nコード】

N41280

【作者名】

理祭

【あらすじ】

海のない惑星で、人々は砂に逐われて日々を生きる。

命の母である水源は限られ、常に枯渴の危険性を孕んでいた。

水の枯れかけた人寂びた集落に吹く“死の砂”。砂海の旅人リトはそこで銀の瞳の少女に出会う。瞳の中に不思議な二重の環を持った少女は砂嵐が轟然と吹きつける中、ただ真っ直ぐに空を見つめていた。

屈折した旅の青年と不思議な目をした少女の出会いから始まる、砂に吹かれる世界の物語です。

水下の幻想、開始しました。(タイトルロゴ 美濃勇侍様)

プロローグ

> i 1 4 5 7 5 — 2 0 1 9 <

風が吹いている。

全てが砂に埋もれ刻々とその姿を変える世界で、それは当たり前
の自然気象であるとともに、生死をわける超常の現象でもあった。

風は砂を運ぶ。砂は生活の場を侵し、奪い、積もる。人はその現
象に抗えない。抗う意味がない。この地における人々の生活とは、
砂との共生ではなく服従である。

生命の源となるべき海が存在しない世界では、各地に点在する水
の沸き場だけが万物の母となりえた。水辺には植物が育ち、動物が
集い、人が憩う。水源の生み出す水量によって範囲は異なるが、砂
の海の中で、水陸と呼ばれる居住空間がそこに発生した。

最も巨大なものは三つの大水源が形作る三つの“大水陸”であり、
次にあるのが十七前後の“中陸”となる。その周辺、あるいは全く
遠く離れた箇所に突然沸き起こる“水島”の数こそ無数であるが、
それは浮かんで消える泡のような不確かな存在であり、人の定住
は難しかった。

史上不動の大水陸はともかく、中陸でさえ不定の周期でその姿を
変えていく。いつ枯れるとも知れない場で悠々と根を生やした生活
を送ることなどできるわけもなく、人は自然、移動可能な様式の文
明を発達させることになった。

人類文化の象徴たる火こそどこにでも見受けられるが、その高度

な鍛冶利用は一部　大水陸を支配するような　の国にしか不可能であり、慢性的な植物の不足から紙も貴重だった。大衆に多く用いられるのは羊皮紙が中心であり、この時代、活版印刷技術もまだ登場してはいない。

四方を砂の海に囲まれた三大水陸ではそれぞれ異なる文明が興り、また滅んでいる。

中央、最も巨大な水陸であるバリーミアは、人類史、その歴史の連続性からすれば最も古い土地ではないかと目されていた。集落の発生、その集合として部族が生まれ、敵対し、その数ある淘汰の結果として国が成り立った。同じような事実の拡大再生産の後、現在ではある一神教を中心とした一つの文明圏が確立されている。

そのバリーミア文明圏から蔑称として蛮国と呼ばれる隣の大水陸では、より過酷な環境による独自の文明が発達していた。一定の砂の流れと風と帆とを利用とした砂海の移動手段が確立され、中陸を経由することで両者は邂逅を果たしたが、平和的交流は長く続かなかつた。

結局、両者が最も相容れなかつたのはその思想、突き詰めれば宗教観に根を下ろした文化そのものであり、そこに起こるのは戦争という表現の他者の排斥でしかなかつた。二つの大水陸を直接移動する手段がない以上、それを結ぶ中陸が主戦場となつたのは必然ではあつたが、ただでさえ水源の不確かな中陸でそのような暴挙に出たことは両陣営ともに軽拳ではあつた。

戦場となつた中陸に伝わる滅びの警句の通り、破滅が訪れた。敵水陸への侵攻の中継点として多くの血を流した両陣営は、やがてその中陸の水源が枯渴しだしていることに気づいたが、時既に遅く中陸はそこにあつた唯一の国家と共に滅んだ。以降、現在に至るまで両者の間に戦争は起きていない。

もう一つの大水陸であるフェムは、当時の人々からは全くの未開の地であった。その水陸の存在は確かに大昔の文献に見受けられるが、果たしてそれが本当に現存するのかどうかについては意見が分かれていた。国家としてその探索に向かった一団や、ロマン的挑戦心からそこを目指した一介の冒険者の名前もあったが、いずれの音信もはるか昔に途絶えてしまっている。

星の名は砂球といった。全てが茶色く薄汚れ、埃にまみれた、黄土色の惑星である。

強い風が吹いていた。

それは一時のものではない。切り立った崖の狭間には常に強風が吹き、激しくあおられた砂で地元の者でなければ目を開けていることもかなわないだろう。

だからこそ意味があつた。内部への砂の侵食を防ぎ、夜盗の類からの襲撃にも対しやすい。もつとも、外れにある対侵入者用の柵は見るからに古く、大人が一押しすればあっさり折れそうだったが、今となつてはそれで十分ではある。

もはやこの集落を襲うような意味などないからだった。集落は死に瀕していた。

伝染病や飢饉の類ではない。もつと根本的な問題、“枯渴”である。この世界において人が生きる場所とはつまり水のある場所であり、それを失つた時、そこは生活の場でなくなる。この集落では何十年と沸き続けていた水源が枯れ始めていた。

表現としては、むしろ枯れ終わろうとしていたというのが正しい。湧き上がる水量の緩やかな減少という事実は当初こそ樂觀視されていたものの（小幅な水量の増減自体は珍しいことではない）、集落の中央にある泉の水位がやがて半分に近づく頃になると、笑みを残していられる者はいなかった。

しかし、だからといって集落に住む人々は絶望しなかった。気まぐれな水源の枯渴。それはこの世界に生きる人間にとっていつでも起こり得る茶飯事である。商航路の途中にあつたオアシスがある日突然なくなるところか、栄歌を誇つた一国でさえあっさり滅びてしまう。人々はいつものように可動式の住居を畳み、旅装を調べ、

持ち運びが難しい物は処分し、携帯の食料と水を十分に用意して以前から見つけておいた水場へと移動を開始した。

集落移動。幾年が経とうともその姿が在り続けるような世に誇る大水源を近くに持たぬ以上、それは避けられない宿命であった。彼らがまず目指した水場はこれあることを予測し前もって定めておいた仮の避難所だったが、その場所は水量が不安定で、立地的にも長の生活には向いていなかった。そこを拠点とし、そこからまた新しい生活の場を探して旅に出るのである。

その旅は上手くいけば一週間で終わることもあった。今までの集落のわずか数里先に新天地を発見したという笑い話もある。一方で数十年と流浪の旅が続くこともあった。例え運良く水場を見つけても、そこに先住の存在がないとは限らないからだった。

旅は過酷を極めた。水場を拠点とした搜索とはいえ、どこで終着するかわかるものはない。喉から入り込む砂は弱った身体に容易に毒となり、不安定な砂場の地面を長期間にわたって歩くことは、慣れた人間にも大変な苦痛を伴う。

故に、それを選ばないという者も少なくない。具体的には若い先短い者、体力のない者、身寄りのない者。つまりは行き抜くことができない存在。そういった人々だけが残り、先のないその場所で慢性的な終わりを迎えるのである。

そういつた集落にはある一つの共通項があった。人気のなさ、寂れた風情。そういつた特徴以外に、その場所の上空には必ず、ひどく強く砂嵐が舞うのだった。

「死の砂はそれを選んだ者の上を舞う」

はるか昔から伝わる通り、それは今まさに集落の頭上で高く弧を

描いていた。

天に舞う砂は人外の起こす不可避の洗礼であり、それを前にした人にできることは文字通りただ見上げるだけである。強風が集落の入り口である裂け目に吸い込まれ、轟音となって不吉なうなり声をあげていた。

そこから少し離れたところに一人の人間が立っていた。全身を防砂衣に包んだ姿は良くも悪くも平凡であり、右手にコブつき馬を引いている。男であるということは隙間から覗かせる眼光の鋭さで分かるが、険しくはあっても深みの浅いその瞳はまだ十分に歳若いことを示していた。

男は旅の人間だった。傭兵や用心棒などで生計を立てる、人々から忌み嫌われる輩の存在は珍しくないが、その馬は何者かを襲撃することを重視したのではなく、長く歩くことを目的とした商隊の所有するようなコブつき馬である。前者は速度に特化し、後者は持久力に富む。人を襲うのに適したものではなかった。

馬には一週間程度なら食いつなぐことができる食料と水が左右に積まれている。男が前に寄った集落で買い集めた荷は片道分としては不必要な程に多く、それはこの集落について、そろそろ危ないらしいという情報を耳にしていたからだだった。行ってはみたが滅んでいました、食料も水も補給できずではこちらの身が危うい。旅の連れの身を捌き、その血で喉を潤わすようなことにならない為には必要だった。

それもどうやら間一髪かというところか、あるいは間に合わなかったかもしれない。

この集落はもう幾らも保たない。男はそう見立てた。死の砂は、吹き出しておおよそ一月もすればその全てを覆い尽くしてしまう。残されるのはただ曖昧な砂の廃墟のみ。この集落の存在を聞いた時

には死の砂が現われたという話まではなかった。町を出てすぐに吹き始めたとして、そろそろこの集落に終焉が訪れていてもおかしくない。

もしかしたらそれはつい昨日きたばかりかもしれない。甲高い叫び声の続く村の入り口に向かいながら、男はむしろそうであることを望んでいるような心情で呟いた。

死者は何も必要としない。食料も水も、貴重品も。そして、ただ風化に晒されるのであれば有効に活用したほうがいい。当然のようにそう考えている。わざわざ墓を荒らすような趣味まではなかったが、かといって誰か他の人間がそれをしていたところで止めようともしないだろう。

それは男のような生活を過ごす者からすればむしろ当然のことであり、彼らが言うところの「お高く止まった」連中、貴族やそこに住む街の人々が眉をひそめたところで知ったことではなかった。豊富な水源と壁に囲まれ、砂にまみれたことのない者の言葉などなんの説得力も持たない。

男は砂の怪物の出す声に怯えるコブつき馬の足を急かし、集落へと進んだ。ともあれ、今日一晩は室内でこのうっとうしい砂から開放される。それだけでも十分だった。

入り口である裂け目に入った辺りが一番、風と砂が強かった。暴れだそうとすることぶつき馬の手綱を引っ張りながらようやく開かれた場所に出た、そこに一人の少女がいた。

十半ばよりは上、といった風情だが、年齢がいくらか不明だったのはその外見のせいもある。

少女は、清貧と表現するにはやや頬がこけすぎている。今にも空へ舞い上げられてしまいそうな少女が身に纏っているのはボロきれ

じみた貫頭衣で、腰元には植物の弦を結った粗末な代物が巻かれている。洗って丁寧に櫛を通せばそれなりの光沢を出しそうな銀色の髪は葉っぱが絡まり土に汚れ、鋼のような鈍い艶すら既に失ってしまっていた。

ただ、埃に煙った薄褐色の表情の中にある瞳だけが爛々とした輝きを放っていた。真っ直ぐな視線に射すくめられ、男は思わず足を止めた。

「やあ」

いくら気をつけても浸入を防げない砂塵が口内に張り付いて、やや声がかすれている。それに対して反応がなかった。聞こえなかったのかと思った男がいくらか近づいて、少女が自分を見ていないことに気づいた。少女は集落の出入り口、正しくはその上空に最もはつきりとした姿を見せている砂の暴流を見つめていた。

眺めていたのではない。もっと厳然とした意志があった。集落を死に追いやる現象への恨み、憎しみ。そういった類のものでもない。奇妙に思いながら男はさらに少女へ歩み寄り、それでも視線を動かそうとしない少女の顔を覗き込むようにして、息を飲んだ。

少女の灰色の虹彩とその中にある瞳孔。その間に、くつきりとした円がまるで描かれるように存在していた。円環。顔を近づけなければわからない、しかし紛れもない異彩だった。水気のある灰色が、まるで銀色の如く濡れている。

見れば見るほどに違和感を覚えてしまうその相貌をしばらくの間見つめてから彼は我に返った。喉を鳴らして整えると、改めて声をかける。

「こんにちは」

水を含まなかったわりには、満足できる声が出た。

初めて訪れる町で如何に信用を得るかには、身だしなみももちろんだが、最初の一声が重要となる。もつとも子供相手ではその計算もしきれない部分があり、少女は初めて男に気づいたように瞳を瞬きさせると、顔を歪ませた。

「……誰？」

透き通った響きに警戒の色をのせた声は鋭い。男は慌てずに頭部を覆っていた布巻きをとって、

「はじめまして。俺はリト」

砂に生きるもの特有の精悍さの現れた素顔は若かった。彼の年齢は二十を越えたばかりだが、口元に笑みを浮かべればたいいていの場合、他人から無用な警戒を受けることはなかった。

しかし、目の前の少女は違った。

刺すような眼差し。敵意さえ感じられるそれを受け止めながら、リトは落ち着いて腰に下げた袋から甘味物を取り出した。

「旅の途中で寄らせてもらったんだけど、長さんはいるかな」

目の前に差し出したそれを、少女は一瞥しただけで手を出そうとしない。そして、無言のまま左の奥にある一軒家を指した。

少女はそれで用はすんだとばかりに背を向けて歩き出した。男の手に持った物になど目もくれない。自らの卑小さを嘲笑された気がして、リトは苦笑みを浮かべる。子供は苦手だった。

立ち上がり、同情するような目線をくれているコブつき馬を一撫でしてから向かおうとしたところで、彼は少し離れた場所で少女が立ち止まっていることに気づいた。肩越しに振り返りながら彼が歩き出すのにあわせるようにして進む、その足の向かう先には先ほど教えられた家があり、それで少女が自分を案内しようとしてくれているのだとわかる。

どうにも捉えどころのない少女だった。時たまこちらを見ては一

定の距離を保ち続ける相手に、リトは大声で訊ねた。

「君の名前はっ？」

返事はなかった。あるいは、聞こえなかった。まるで状況を見計らったかのように一際大きな暴風が吹き、轟音と共に視界が黄土色に染まる。

目を細めるリトの前で、不意に少女が振り返った。

少女は砂埃が舞う中でなんでもないように目を開いたまま、一直線の眼差しを向けていた。その口元が開き、何かの言葉を形作ったような気がしたのだが。

「
」

音は届かなかった。

案内された家屋に住んでいた初老の男性は、疲れきった表情に無理に浮かべた笑みで彼を出迎えた。

その家は集落を見渡した中でもさして大きなものではなく、むしろ年季のある古びた移動式の木製住居である。男は長ではなく、集落に残った者達の取りまとめをしていると言った。この世界で一般的な飲み物である葉茶を勧めながら旅の目的地を聞いてきた男に、リトは水陸の中央とも呼ばれる都市の名を挙げた。

「それはそれは……私など話にしか聞いたことがありませんが、あのような場所まで向かわれるとは、何かのご理由があるのでしょうか」

サジハリと名乗った男は素直に驚いた様子で頷いた。実際はその逆なのだが、リトは黙って首肯しただけである。

「決して水の枯れることのない『妖精の地』ですか。ただの夢物語

かと思つておりましたが、このような状況になつてしまえばただただ羨ましい限りです」

冗談にはいささか苦すぎる成分を含んだ男の表情は、しかし現実を受け入れた清々しさも併せ持っていた。不自然にならないよう、リトは手に持った茶碗に目を落とした。

「水源の様子はいかがですか？」

「十分の一にも満ちません。ご覧になられたでしょう、ついに死の砂まで吹きました。いよいよこの村もおしまいです」

幸いでした、という言葉に眉をひそめると、サジハリは笑った。貴方が間に合つてよかった。こうしてお茶を振舞えたのですから。

リトは微妙な表情を浮かべる。

いつも思うことだが、死を前にした人間と対話をしていると尻が落ち着かなくなるのだった。それはもしかしたら自分が死を覚悟できていないからかもしれない。死を受容しようとするその態度が癪に障るのかもしれない。この世界で死などありふれているというのに。

居心地の悪さに背中を押されるように、リトは早々と用件を告げた。今日一晩の床を貸してもらいたいということと、もう一点。

「書物、ですか。伝承や言い伝えなどの記された？」

食料や水、その他の貴重品の引取りを申し出されることは考えても、まさかそのような要望が出るとは思わなかったらしい。戸惑った様子で顎を撫でるサジハリに、

「ただの趣味なのです」

リトは精々なんの裏もないように微笑んだ。実際、正直な発言だった。

彼は旅の途中、立ち寄った集落や町に伝わる言い伝えや伝承を集めて回っていた。基本的に紙というものがまだ高級なこの時代、大

都市ならまだしもこのような辺境の地にそれが普及していることは少ない。集落にある書物は唯一つ、大陸全体に広がるとある宗教を司る教会から配られた聖典が一冊だけということも珍しくなく、その聖典にしたところで誰も読めないのが冬場の暖のために燃やされた、などという話もある。

だから、実のところ書物についてはもしあればという程度の期待でしかなかった。その代わり、どここの集落にも古くからの伝承を聞き話す役目の人間はいるもので、むしろ本命はそちらだったのだが、「そのような者なら確かにこの村にもおりましたが、先日肺を患いまして……」

失望を顔に出すわけにもいかず、リトは傾けた茶碗の中で息をついた。軽いため息になってしまふ。無駄骨だった。しかし、続いた言葉は彼にとつて幸運でしかなかった。

「ただ、書物なら長がいくつか集めておりました。今でも残っているとしますので、どうぞ見ていってください」

思いがけない返答に礼を述べるリトを見やって、サジハリはやや言いづらそうに表情を困らせた。

「ああ、申し訳ありませんが一人村の者をつけさせていただいてもよろしいでしょうか。このような状況ですが、外の方に一人で歩かれると不安に思う村人もおりました」

案内役兼見張りというところだろう。自分の村の中でよそものに好きにされて不快でない人間はいない。当然の処置だと思えたので、リトは深く考えずにそれを了承した。

寢床には隣の空き家を使っていい旨を聞き、さらに村の中央にある浴場を使用してもよいとのことだった。このような状況下での水はいつも以上に貴重なはずで、それにはリトも驚いたのだが、

「どうせあと数日で埋もれてしまうものです。最後までい豪気に使おうというのが皆の一致した意見ですので、おかまいなく」

明るい絶望とでも題するような表情で言われて答えに困り、リトはただ無言で頭を下げるだけですませた。

水を浴びられるだけでも僥倖だったが、湯を沸かすことさえ可能とのことだった。確かに、空き家はそこら中にあるようなので材木に困ることはないかもしれないが。

そこらの村より贅沢な待遇をいぶかしみながら、せっかくなので存分に使って湯樽に火をくべて、リトは町を出て以来久しぶりの湯に浸かった。髪の毛まで入り込んだ砂を念入りに落とすと、ついでに護身用のナイフで少し伸びていたひげも剃りあげる。半刻ほどもしてそろそろのぼせてしまいかもしれないところで風呂から上がり、いつもの旅装に戻った。

綺麗になって外に出た途端、砂まみれでは意味がない。せめて一晩くらいさっぱりした姿で床に就きたいところだった。いつもより念入りに服装の隙間をなくしてからリトが戻ると、部屋の中でさっきの少女が立ち尽くしていた。

「やあ」

すぐに少女の足元に置かれてある幾つもの水桶に目がいった。ぎりぎりの縁まで水の入ったそれは、洗濯用も含まれているのだろう。やはり水源の枯渇で滅びようとしている村とはとても思えないほど潤沢な量だった。

「君が？」

やってくれたのか。後半の言葉を略して訊ねると、少女は黙ったまま首を頷かせた。

「そうか、ありがとう。飲むかい？」

今度は横に振る。本当に淡泊だなと思い、それはそれとしてなんでもここにいいのかと考えたところで思い至る。

「もしかして、君が案内人なのかい」

「はい」

やっと出た言葉も、息を吐くような一拍子で終わった。

考えてみれば、移動する為の長旅が出来ないからここに留まっているわけで、もともと歩くことが自由な人間が村に少ないのも当たり前のこと。少女のような存在は案内役としては適任だった。

しかし、そうなるとう一つの疑問に行き着く。

見た限り旅をするのに不足ないように見えるこの少女が、なぜこんなところにいるのか。だが、それは彼のような人間が口を挟む問題ではなかった。

「それじゃ、よろしく。なんて呼べばいい」

また頭を横に振られる。

「……名前がないのか？」

少し待ってから、今度は縦に振られた。

「そうか」

かける言葉が見つからず、リトは腰の袋に手をかけて、少女の視線に気づいた。苦笑する。

「それじゃ、さっそく案内してもらおうかな」

反応らしい反応も見せず、少女はやはり頷いたのみだった。

集落の奥まった場所にあったその家は、大きさはともかく造りとしては他のそれとほとんど変わらないように見えた。

教会のないこの集落では最も権威ある場であるはずだが、それに耐えうる外見であるかどうかは微妙なところだった。木製の家屋は横に広がる二階建てで、その隣に不自然な空間の空白がある。そこに前まであったのは可動式住居で間違いなかった。

集落の移動が前提となるこの世界で、大部分の人は本来の意味で根を生やした生活を送ることができない。最低限の財産と言うべき可動式住居は大人が三人両手を広げられる程の円形住居が最も一般的で、腰を落ち着かせることが可能な水源にたどり着いたらその隣に固定式の居住空間を増築するのだ。

その増築部分と可動式の境目が密閉されているか否か。それがこの場合最も重要な違いだった。普通はそんな手間は省かれてしまう。理由は明白で、手間だからだった。自分達がいなくなったあとのとまで気を配る者はいないし、その必要もない。最近は、ある程度の生活水準の集落　村というより、町　では密閉式が一般的にもなっているが、こんな集落に期待できるものではない。

だから、扉を開けた少女に続いて中に入った時、そこに黄土色の侵食がないことにリトは安堵の息をついていた。外気との接触は、すなわち風化の促進に他ならない。紙という保存性の低い代物など、まず初めにやられてしまう。

少女に礼を言って、丸机の横にある木棚の前に立った。数冊の本が並んでいる。表紙は薄汚れ、縁こそポロポロになっていたが、通して見たところでは中身に問題はなさそうだった。一冊以外を取り出して（持ち出さなかったのは聖典だった）安定の悪い椅子に腰を落とし、部屋の真ん中で立ち尽くしている少女にかまわずに頁をめくった。

一冊目の本は、この大陸の歴史について記されたものだった。こういった類もよく見かけるもので、細部が違うものも含めれば教会の聖典の次に多いかもしれない。斜め読みで過去に読んだものとう違いがないことを確認すると、二冊目に移ろうとして、リトは少女がまだ立ったままにしていることに気づいた。

「ちよつと座って待っててもらえるかな」

無断で外に持ち出すわけにはいかないから、彼としてはそうする

以外ない。少女は素っ気のない仕草でうなずくと、向かいの席に座った。背筋を伸ばした姿勢がひどく大人びて見える。そのままこちらへ静かな眼差しを向ける少女を物言いたげに見やり、リトは何か言うのを諦めた。

代わりに、腰から下げた袋からあるものを取り出す。さっきのような甘味物ではない。ちょうど手のひらに乗る大きさの正方形の物体を差し出すと、奇妙な形のそれを見た少女の眉がわずかに寄った。

「色を揃えるんだ。そういう遊びさ」

六面体がそれぞれ九つに分かれていて、今はばらばらの色に彩色されていた。本来なら一つの面には同色が揃うわけで、縦横に動かしてそれを六面とも完成させるといふ玩具だった。

ある街で手に入れたもので、ところどころ塗料が剥がれかけてはいるがまだ使えないこともない。少女は考え込むようにそれを凝視して、それからかちやかちやと不器用に手元で回し始めた。

少女の露骨な視線から逃れられたことに満足して、リトもまた読書に戻った。

二冊目のそれは、この集落に伝わる伝承を書き記したものだ。探していたものを見つけた喜びに口元が緩む。昔話や物語が書き手の違う筆跡で綴られていたそれは何代もの手を渡ったものであることがわかり、たまに濃い墨料で注釈がされていることもあった。

どうやらここで長をしていた人物もそれなりの道楽者だったらしい。同じ趣味人への共感をおぼえながら、読み進める。

水が沸き、動物の集う泉。聖なる獣。一晩で滅びた集落の悲劇。真実と事実が不等分に混ぜられたそれらには、誇張されることはあっても一定の現実を含んでいる。例えば水源の位置や過去に起きた事実を、警句や美麗に修辞した形で残しているのだ。

彼が求めているのはそれだった。御伽話の中に隠された事実。そ

のことに興味があった。

本の中で最も記述が多かったのは、やはり死の砂についてだった。死を告げる舞い。星々の怒り。生命の運び手。死の砂について書かれることは大抵が似通ったものになるが、最後に見つけた表現が気になった。

生命の運び手。

それは一般的な印象と異なっている。死の砂は全てを覆い潰し、その場所には二度と生命が育つことはない。その存在を真逆の意味で呼ぶような話はひどく珍しい。

その伝承は短い詩のようなもので、死の砂を指して一個の生命体のように捉えているようである。

『其はクルルギウ又の怒り。嘆き。悲しみ。

此はアタリアの笑い。叫び。また喜び。

汝は地が求めし一切の演舞者であり、

程なくして全ては天に還らん。

それこそが新生の証にして、

故に汝こそは万物、生命の運び手よ』

恐れるどころか、賛美さえしているような文章だった。この地方独自の固有名詞が連なっており、伝承は最後に死の砂についてだろ。その名を呼びかける形で終わっていた。

「サ、リユ。……サリユ」

死の砂を呼び表す言葉はいくつもあるが、これは今まで聞いた中で最も簡単な呼称かもしれない。どこか耳に残る名前だったので何度か舌の上に滑らせていると、視線を感じて顔を上げた。

少女がなにか言いたそうな、驚いた様子でこちらを見ていて、しかしリトが視線を返すと顔をうつむかせる。と、その手元に置かれ

た正六面体のその色が全て揃っているのに気づいて、リトは驚きに目を開いた。

「もうできたのか」

叱責だと勘違いしたのか、少しだけ身を縮ませる少女からそれを受け取って、まじまじと確かめてみた。間違いなくこの面も色が揃っている。中には塗料がほとんど剥げかけている場所もあるというのに、しかも初めてでこの短時間。自分が初めてこれをやった時には、それなりに時間がかかったことを思い出した。

「ごめんなさい」

囁くように謝罪する少女に手を振って、リトは笑った。素直に感心していた。

「いや、怒ってるわけじゃない。凄いな、慣れるまではけっこう時間がかかるものなんだけど」

返事はない。

沈黙に困り、リトは顔をうつむかせる少女の目の前になにも持っていない右手を出した。擦るようにして手のひらを開くと、そこには白い小さな花が現れている。

驚いて顔を上げる少女に笑って、リトは少女の髪にその花を挿しやめた。窺うような視線が中空をさまよい、それからわずかに口元を綻ばせる。微笑未満の表情だったが、ようやく少しだけ打ち解けられた気分で、リトは改めて甘味物を取り出した。

「ほら。甘くて美味しい」

練った砂糖菓子を小さく固めたそれを、少女はおずおずと受け取って、口に含んだ。途端、その二重の瞳が真ん丸くなる。

ようやく見た、年相応の表情だった。

手強い小動物の餌付けに成功して彼は満足した。一日だけの付き合いとはいえ監視役を懐柔しておいて損はない。思わなくてもいい

感想がわざわざ頭に浮かび、唇の端が自嘲の形に歪んだ。

夜になると、サジハリの誘いを受けて三人で夕飯を共にすることになった。兎肉のスープと炒り豆にパンという簡素な内容だったが、ほとんど乾燥食料しか口にできない旅に比べれば、十分に贅沢な夕餉だった。特にスープはひからびた野菜を使っているとは思えないほど芳醇な味わいで、リトはおかわりまでした。

サジハリは道中の旅の話の話を聞きたがり、リトも人々から好まれるものを選んで話して聞かせた。代わりにこの村の言い伝えや変わった出来事を聞かせてもらい、いくつかの話が終わった頃にはすっかり夜も深くなってしまった。

一緒にテーブルを囲いながら終始無言だった少女の頭がうつらに揺れたのに気づいて、サジハリが柔らかい声で促した。

「もう遅い。湯につかっておいで」

少女は黙ったまま頷き、外に出て行った。その途中で一瞬だけ目が合い、リトが笑うと少女も少しだけ口元が動いた。やはり、笑顔までいかない表情だった。

「愛想なく申し訳ありません」

「いえ。いい子ですね」

社交辞令をリトは言った。サジハリは曖昧な表情で首を振り、「不憫な子です。気がつけば空を眺めている変な娘でして」

そういえば出会った時もそうだった。達観というべきか、それとも諦観というべきなのか。少女のその時の表情が、なぜかリトの脳裡に焼きついていた。

それはともかく、この種の会話は流れとしてあまり好ましくないように思える。他人の苦勞話を聞いて同情するのは簡単だが、それ

だけで終わってくれるようなことは少ないのだから。リトはやや強引に話題を変えることにした。

「昼間は、ありがとうございました。おかげで興味深いものを読むことができました」

「とんでもありません。たいていの村の者は読み書きもできませんで、村長の趣味がまつたくわかりませんでした。お役に立てれば幸いです」

裏のない笑みでサジハリは応えた。

「それにしても。旅の方とは何人もお会いしてきましたが、貴方は少々変わっておいでですな。なんといいですか」

食料より先に本を求める変わり者などそうはいないということだろう。はつきりと口にしない相手の気遣いに苦笑を覚えながら、リトは鼻の頭をかいた。

「変わってる、とはよく言われます」

「ああ。いえ、申し訳ありません。一昨日だったでしょうか。この村に立ち寄られた方からは、村の状況を聞くや否やなにか金目になるものがあれば譲ってくれと言われましたのでな。少しばかり意外だったのです」

全てが埋もれてしまうのなら、生者が有効的に利用してもいいはずだ。その考えにはリトも全く同意するところだった。ただ、彼の場合はそれ以上に本や伝承に興味があっただけであり、

「趣味や嗜好は違いますから」

牽制の言葉に、サジハリは表情を変えなかった。人生という長い年季を積んだ者だけが持ち得る手応えのない異物の感触を前面に感じて、リトは手に持った葉茶を飲んだ。どうも、やはりあまり面白くない方に会話が流れてしまいそんな予感があった。

「ああ。本ですが、もし必要であればどうぞお持ちください」

だから、相手からさらりと言われても、すぐには反応せずに茶碗

で表情が隠れている間にそれがどういう意図から発せられたものであるか思考を巡らせた。それをテーブルに置く頃には彼の表情には笑顔が浮かんでいたが、内心では警戒の鐘を鳴らしている。

「本当ですか？ それはありがとうございます」

好々爺の面持ちでサジハリは続けた。

「ええ。ただし、その代わりと言ってはなんですが、一つお願いを頼まれてはいただけませんかでしょうか」

予想したとおり。リトはせいぜい不思議そうに目線を送った。

「あの娘を、どうか一緒に連れていってもらえませんか」

飲んだばかりの葉茶をまた傾けたのは、返事に困ったからではない。どうやって断ろうか一瞬考えて、結局、彼は型通りの言葉を選んだ。

「それは、無理です」

「なぜでしょうか」

わかっていてなおそう尋ねてくる穏やかな口調に、表情には出さずに微かな反発を覚える。

「わたしも旅の者ですから。そんな余裕は……」

生まれて間もない子供ならまだしも、十代半ばにもなれば、単純に旅の同行が難しいというわけではない。この集落にも少女以外の子供だつていなかったわけではないだろうし、現にそうした子供達の姿はここには見えなかった。だいいち、若者の存在は村の将来に必要不可欠なものだ。

なら、その貴重な働き手と担い手になりえる、この少女が旅に出ずここに留まっている理由はなんだ。今まで接した限りでは特に長旅に不利な要素もないようなので、つまりはやっかいもの扱いされただからだろつと予想できた。

そうなるとまず考えられるのは、あの奇妙な瞳だ。

周囲と異なる特徴を持った人間が忌避されるのは、どこでも同じことだった。サジハリは故意には見えない自然さのため息を漏らした。

「あの子は父なしで、母もあれを産んですぐに亡くなっておりましてな。村の古い役目をしていた婆に育てられたのですが、昼間お話しした通りその者も死んでしまいました」

人生経験の差だろうか。会話のペースを相手につかまれていることを自覚しながら、リトは話の続きを待った。

「お気づきでしょうが、あれの目は少々変わっております。昔から不吉だ、呪いだと言われておりましたが、一人になってからは誰もあの子の面倒を見ようとしませんでした」

「そうですか」

「ご苦労様です、とはさすがに言えなかった。

「あれもわかっているのでしょう。皆から置いていかれた時にもなにも言いませんでした。しかし、貴方のような方がいらっしゃったのはまさに神のお導きです」

「あいにくですが、わたしは無神論者で」

教会もない集落の人間がいったい何を指して神と表現しているのか、そのことに若干の興味はあったが。

男は涼しい顔で皮肉を受け流し、弱り果てたようにリトはため息をつく。

「先ほど、一昨日にも旅人が来たとおっしゃりましたね。その人も引き受けなかったのでしょうか。わたしも同じです」

「いえ。その方にはお願いしておりません」

怪訝に眉をひそめるリトを見て、サジハリは言った。

「長く生きてきましたのでな。人を見る目なら多少、心得ているつもりです」

それを聞いたリトは笑った。それで自分が選ばれたのなら、その目はとんだ節穴と言っべきだった。

「貴方がどのように判断されたかはわかりませんが、勘違いですよ。わたしについてきたところでもくなくにはなりません」

別に彼は少女の不思議な目になにか思うところがあつて同行を拒否しているわけではなかった。単純に独りのほうが気楽だったし、それに。他人が、それも子供が不幸になることがわかつてそれを許容するほど悪趣味もしてはいない。残った良心のかけらなどではなく、それはただ彼の矜持だった。

サジハリは若者の主張を穏やかに否定する老人そのものの表情で、「本当の悪人は自らそのようなことは申されません」

聖書にあるような言葉だ。それとも、読み書きができないというのは嘘か。まさかそこまでとは思ったが、男の目的が見えた以上、裏を勘繰らずにはいられなかった。今までの善意が全て、あの少女を押し付けたいがためのものだったのかもしれないのだから。

席を立つ。食事の礼を言って家から出ようとしたところで、背後から声がかかった。

「一生面倒を見ていただきたいというわけではないのです。どこかの町まで、あの子を連れて行ってやってくれませんか」

リトは振り返った。はじめてその目に冷ややかな怒りが灯っている。

「わたしは自分が小悪党だということを自覚していますが、それより嫌いなものがあります。偽善は本人が正しいと陶醉しているだけなお性質が悪い。知り合いもない町に連れて行って、あんな子供にどうやって一人で生きていけと言うのですか。貴方が言っているのは、ただ自分の満足を得るためのものではないか」

自分は責任を果たしたと。だから自分の見えないところで死ねと、そう言っているだけではないか。

それに対して返ってきた答えは、簡潔だった。

「あの娘はもう子供ではありません。どのようにせよ、生きる術な

らあるでしょう」

それがどのような行為をさすのか、もちろんわからないわけがなかった。今度こそ本気の嫌悪を抱いて、穏やかな表情を崩さない初老の男に吐き捨てる。

「失礼します」

感情のまま外に出たので、布防具を被るのをすっかり忘れてしまっていた。借り部屋に戻ったりトは、砂と砂利にまみれた頭を大いに嘆くことになった。

少女が汲み置きしてくれていた水を使って汚れものまで洗ったあとは、やる事がなくなつてさつさと床につくことにした。

藁が敷き詰められた布団は虫がいる様子もなく、一度横になつてしまえば二度と起き上がることは不可能だと思えるほど素晴らしい寝心地だった。すぐに意識を失くしてしまうのももったいない気がして、彼はしばらく窓から見える夜空とそこに浮かぶ欠けた月を見上げていた。

集落全体を包むような砂嵐は、一時ほど前からその猛威を弱めている。死の砂は昼夜問わずその破壊を尽くすというのが通説だが、あるいはこの集落の土地柄のせいもあるかもしれない。崖の切れ目を吹きぬける気流の関係で、一時の無風状態が生まれているかもしれない。

引き絞つた弓の弦のような姿をした月は、これからその姿を膨らましていき約二週間で満月になる。それを見てわかるのは太陽とこの惑星の現在の位置関係、それだけであるはずなのだが、その月の満ち欠けにさえ不吉を感じるのが人というものだった。

曰く、満月の日に死の砂は現れる。あるいは、月がない晩にこそ死の砂が誕生する。

二通りの通説があるだけで論理としては矛盾していると思うのだが、大部分の地域で似たようなことが信じられているのだった。

リトはそれを全く信じていなかった。

彼は懐疑主義者だった。まず疑うべきは自分自身であり、だからこそ他者のことなど信じられるはずもなかった。昨今、新学派として学問都市を中心に蔓延っている懐疑論者と違う点は、行動でそれを証明しようとしているところにある。

世に学者は数いれど、放浪の旅にて死すは我が友のみよ 歌詠
みを生業とする友人が、皮肉気に彼に贈った言葉。理想郷とまで称えられる帝国首都を出てから、十七の時に勘当同然に実家を飛び出してからは五年になる。世界最水陸であるバーリミア水陸の各地を放浪してわかったことは、机上の論理と実生活との甚だしいまでの乖離だった。

例えば月の満ち欠けは見せかけのものであり、大いなる存在なくしてその説明はすることができる。しかし、だからどうしたと答えるのが辺境に生きる人々だった。小理屈をこねたところで、ある時期の満月の日にある種類の魚が大量に獲れるのは事実だし、そしてそこにはやはり大いなる存在が関わっているとそこに生きる人々は思うのだ。知識と経験。あるいは知恵と知識。学者と呼ばれる一握りの人間はそこを埋めることがまだできないでいる。

それを成す為に自分はこうしているのだろうか。皮肉に口が釣り上がった。そうではない。結局、自分は中途半端なのだ。本物の学者なら、知識を追求することで最終的に知恵と結ぶことも可能だろう。自分にはそんなひらめきはない。

では、それすらもただの代償行為だったとしたら。

なんとも心安らかになる自問だった。寝込みを襲われる心配がな

いような場所では、ろくでもない考えが次々に頭に浮かんでくる。答えのない螺旋のような思考に区切りをつけて、リトは頭元のランプの灯を消した。

すぐに暗闇が訪れた。立て付けの悪い部屋にも砂が紛れてくるようなことはなく、今は外を鳴る風の音も静かだった。

目を閉じてゆっくりと意識が沈みゆくままに任せていたリトは、意識が完全に消失する前に物音を聞きつけて、まぶたを開けた。枕の下にある護身用のナイフを持つ。虫の音もない静寂の中に、空気の揺れのような気配を感じる。

滅びかけの集落で襲われるとは思っていなかったが。さて、なんのつもりだ。蝶番が小さな音を上げて、侵入者がその姿を現した。その影は男より小さく、それどころか成人にも見えなかった。

「君は」

ようやく目が闇に慣れてくる。そこにいたのはあの少女だった。

昼間の貫頭衣を着て、真っ直ぐに彼を見つめている。なんの用だろつと疑っている間に少女は衣服の腰元を解くと、その裸体を晒した。

なにを、とは問わない。訊くまでもない意思表示がすでにされていた。あの娘はもう子供ではありません。言葉がよみがえった。

町や村で、旅人の夜の相手をつとめる女はいる。しかし、それは集落全体の為に健康な外部の子種が必要なのであって、今のこの集落にそのような意味があるとは思えない。

十代も半ばになれば子を生む女もいる。特に辺境に行けば行くほどその傾向は強かったが、都会でも同じ年頃の少女が花を売っていることなど珍しくはない。

それが事実で、現実だった。

少女は確かに子供ではないかもしれない。だが、それだけだ。不快に歪んだ表情で、リトは今度は舌打ちを我慢しなかった。大きな音にも反応せず、少女は無言で彼を見据えている。不愉快だった。不愉快でたまらない。胸の檻の加虐心のままに、リトは呼びかけた。

「こつちに」

少女はやってきた。

太陽の下で小麦色に見えた肌は、暗闇の中に半ば埋没していたが、その形作りははつきりと見ることができた。長くしなやかな四肢。貧相な胸。腰。曲線の少ない体つきは、栄養不足もあつてのことだろうが、まさに未成熟の一言に尽きた。それを好む嗜好もあるのかもしれないが、目の前の状況はまったく彼の趣味ではなかった。

だが、月夜に照らされる少女の裸は、それとは違う意味で美しかった。無遠慮に観察するリトの視線に耐えるように伏し目がちに、少女の表情が浮かんでいる。

湯に浸かったからか、少女は髪が特にさっぱりした印象だった。頭には昼間やった白い花が挿されていて、それが下種な隠喩を彼に連想させる。埃の落ちた顔もよく見れば整っていて、出来ることから五年後の姿を見てみたいものだった。銀色にも見える相貌は薄暗闇の中でもはつきりとわかる二重の円を描いており、それが背景の闇とあいまって異様な雰囲気醸し出している。

伝承にあるような、人を騙す魔性の何か。そんなことを思っていると、少女の長い睫毛が、細かく、だが確かに震えているのが目に入って、リトはため息をついた。

「あの人に言われたから？」

少女は首を振って答えた。

「違います」

少なくともその声は震えていなかった。それがますます気に入ら

ず、ほとんど睨むように少女を見やって、リトはおもむろに胸部に手を伸ばした。おうとつの少ないそれを無理やりに掴みあげる。少女の身体が硬直し、喘ぐような悲鳴があがった。

「悪いけど趣味じゃないんだ」

手を放すと、腰が砕けたらしく少女はその場にへたり込んだ。ようやく感情の綻びをみせた、上目遣いに睨むその顔が屈辱にか小刻みに震えており、あまりの揉み応えのなさにむしろ感心しながら、そういう反応は女だなとリトは思った。肩をすくめる。

「君は、生きようと思ったんだろう」

少女から返事はない。

「なら生きればいい。明日にでもここを出て歩き出して。俺を殺して荷物を奪うのも手だな。あのコブつき馬はいい。君ぐらいなら乗せたまま次の町まで行ってくれるだろうさ」

冷たい目で少女を見下ろして、告げる。

「生きるってのはそういうことだ。たかが抱かせるから連れていってもらおうなんて、そんな簡単な話じゃない」

そして、手に持ったナイフを少女の前に転がした。それで話は終わりとはかりに寝台に横になって、眠りに入る。

しばらくしてから気配が動くのを感じて薄目を開けると、すぐに少女の姿があった。その手にさつき床にやったナイフがあり、切っ先がまっすぐこちらに向けられていて、少ない光を集めて冷たい輝きを刃の先に零していた。不可思議な二重を描く、人を惹きつけてやまない妖魔のような銀色の瞳が、また感情の色が見えないままに自分の姿を映しこんでいるのを確認して、リトは改めて目を閉じた。

「おやすみ」

そして、今度こそ眠りについた。

やがて寝息をたてはじめた男に、ナイフを突きつけたままの少女はわずかに顔をしかめ、かぼそい息を吐いた。その手が力なく下ろされ、小さな手をすり抜けたナイフが床に突き立った。

少女は散らばった衣服を集めて、裸のままそつと部屋から出ていった。

リトが目を覚ました先は天上の楽園ではなく、細かい砂の漂う地上の屋内だった。

ということは、自分は刺されてはいないわけだ。非力な少女に致命傷を負わされる前に飛び起きる自信はあったが、それにしても夢の一つも見なかったのはよほど疲れていたからか。まさか、食事に何か含まれていたとは思わないが。

いずれにせよ、少し不注意だったと反省せざるを得ない。あんな啖呵をきつたあげく、あっさり咽を切り裂かれて死んだとあっては、詠読みの知り合いの笑い話にもなりはしないだろう。

部屋を見渡せば少女の姿はもちろんなく、しかし昨夜の出来事が夢ではないことは寝台の下に刺さったナイフの存在が証明していた。窓を見ると、すっかり日が昇っている。リトは洗面台で顔を洗い、髭をそって念入りに旅支度を整えた。

昨晚聞いたところによると、ここから半日過ぎたところに前の旅人が残したほったて小屋が残っているらしい。もちろん水源があるわけではないが、昼夜の気温の差が激しい外で眠るよりは幾分体力の消耗は抑えられる。今日の陽が落ちるまでにそこまで行くつもりだった。

天候はよく、風も夜から無風状態のままだ。食事は道中にとればいい。出発に最適な気まぐれが続いているうちに、サジハリに挨拶をしておこうと向かった家の先、扉の前に少女が立ち尽くしているのが見えた。

「やあ」

声をかけるが、返事どころか視線も向けてこない。

そのまま、少女は幽鬼のような足取りでサジハリの家に消えた。

眉をひそめ、誘われるように家へと向かい、中に男の姿がないことにリトは眉をひそめる。不在。あるいはまだ眠っているのだろうか。まるで家主の所在を知っているかのように、少女の足取りには迷いがなかった。奥に進むその様子を怪訝に思いながらリトは少女の後をついていき、寢床の上で穏やかな表情を見せている男の姿を見つけた。

それが目覚めある眠りではないということは、すぐにわかった。

少女は寢台の側に立ち黙って男を見ている。文字通り眠りについたサジハリの近くまで行つて、その横の机に粉末状のものと水の入った碗があるのに気づいた。その薄い紫が混じつたような粉末の色には見覚えがある。部屋の中を見回したリトは、部屋の隅に無造作に投げ捨てられたやはり覚えのある植物と、小さな石臼を見つけてため息をついた。

毒。そう多くない量で、人一人ぐらい致死に至らせるには充分な類の。リトの視線に気づいた少女が机の上に手を伸ばそうとするのを制止して、それだけで少女も理解したらしい。小さく唇をかみ締めた。

飢餓の苦しみは想像以上に辛い。末期の集落ではよくあることだが、今という機にそれをされることに他意を感じずにはいられなかった。しかし このまま何も見なかったことにして集落から出ていくわけにもいかない。

「誰か、村の人を」

さっそく予定を狂わされた忌々しい気分で、言う。少女は首を振った。横に。

「だが、このままにはしておけないだろう」

「いません」

少女がぼつりとつぶやいた。

その言葉の意味するものを頭の中でゆっくりと咀嚼してから、リトは訊ねた。

「……いない？」

少女の返事は、あくまで感情なくその場に響いた。

「この人が、最後でしたから」

集落には完全に人の気配がなくなっていた。そして、それはただの気のせいだった。そんなもの昨日の段階からほとんどなかったのだから。気づかなかった自分こそが間抜けなのだ。

死の砂が落ち着いていることもあって、不気味なまでの静けさが全体を包んでいる。それはもうこの集落に終わりが訪れたからこそなのか。まさかと思うが、薄気味の悪い時機の良さではある。物理的な重さすら感じさせる沈黙に抗うように背伸びをして、リトは手に持った木製の鋤を振るった。

深い穴を掘るのにもっといい道具があれば良かったのだが、出て行った人々に持っていかれたのだろう。どこにも見つからなかったやがて苦勞して一人が入れる大穴ができると、リトはその中にサジハリの遺体を横たわらせた。硬直した死体は適度に動かしやすく、いつものようにそれが不気味だった。少女がどこからか黄色い花を何輪か持ってきた。サジハリの家に飾ってあった花だった。それを遺体の両手に持たせるようにしてから、土をかけてサジハリを埋めた。少女もそれを手伝った。

その後、「どうするんだ？」と訊ねたりリトに、少女は「手伝ってくれますか」と応えた。それが男を土葬することだった。

彼が訊いたのはそういうことではなかったが、結局手伝うことにした。出発の時間はさらに遅れるが、少女一人ではさすがに無理な作業だと思ったのだ。一宿一飯の恩もある。

それから黙って二人は作業を続けた。

最初は足。腕。胴体。やがてサジハリの顔が完全に見えなくなる
と、リトは盛った土の上に一本の木を立てた。なにも記していない、
ただの材木だった。記すようなことを彼はなにも知らなかった。

少女は黙ってそれを見ていた。彼女は涙を流さず、なにも喋らな
かった。淡々とした態度で、最後に少女は即席の墓の前でひざまず
くと手を組んだ。

祈る神を持っているのか。なんとなく意外に思っているうちに、
少女の黙祷は終わった。真っ直ぐな瞳がリトを見上げる。

「それで、どうする？」

少女に口を開く気配がなかったので、改めて彼は訊ねた。今度は
少女も間違えなかった。

「ここを出ます」

サジハリの家に残されたものを使えば、楽に死ぬこともできる。
それも見越したうえであの男はあれを残しておいたのだろう。なに
も言わず、なにも言わず、ただ一方的な選択を押し付けて初老の
男は一人でこの世から去った。

そして少女と同じく残された彼自身もまた、否応なくその言葉に
縛られることになった。

男はあの子を連れて行ってくださいと言っていた。そして、もは
や彼に対してそれを否定することは出来ない。言いたいことだけを
残してあの男は逃げたのだ。

昨夜の件もあの男の差し金で間違いはない。自分が少女に情を持て
ばそれでよし。そうでなかった時の為にこんなことをしでかしたの
か いや、そうではない。奴はただ自ら死を選ぶ理由がほしかっ
ただけだ。少女も、自分も、その都合のいい言い訳に利用されたに
過ぎない。

ただの卑怯者だ。リトはサジハリをそう断じた。自らの生命をか
けた行為、などとは思わなかった。彼は自分が今までとってきた行
為に他人の為という思考をしたことはなかったし、他者の行動にも

それを認めなかった。

だが、それで現実に今ある状況が何か変わるわけでもない。もし男が生きていればいくらでも罵ってやりたい気持ちで途方にくれていると、

「手伝ってくれて、ありがとうございました」

目の前で少女が深く頭を下げた。そのまま、誰もいない集落に戻っていく。彼は黙ってその後ろ姿を見送った。

これで正しいのだと頭の中で冷静な自分が囁いている。

少女は選択した。ならば彼女は彼女なりの準備と意思と行動で持つて道を進むだろう。その結果、砂漠に骨を埋めることになるのが、盗賊に襲われようが、無事どこかの町に辿り着いてそこで花を売ろうが、それは自分には関係ないことだ。

そう。関係ない。むしろ関係するべきではない。昨日サジハリに言ったとおりだ。自分と関わればろくな目に遭わない。断る為の口実ではなく、本気で彼はそう思っていた。

ため息をついて、彼は思考を切り替えた。

考えてみよう。例えばあの兎肉のスープ。あれは美味かった。サジハリは作ったのはあの少女だと言っていた。あれをもう一度食べる機会があれば、調理法を聞くこともできるかもしれない。いや、そんなことよりもっと重要なことがあるのではないか。待て、俺はいつたい何を考えてる。

大きく息を吸い込んで、リトは大声で呼んだ。

「サリユ！」

叫んだのは、死の砂のことではない。

十丈程は離れている少女が、ぴたりと止まった。ゆっくりと振り返る。その顔に少しだけ驚いたような表情があつて、二重の瞳が真っ直ぐに彼を見た。

それこそが少女の名前なのではないかと思つたのは、実はただの

勘だった。それを名乗らなかつたのは、気味悪がると思ったか、それとも名がないことに同情して自分につけさせることで、まず情に絡めようとした老人の策略か。

今となつてはわからない。なぜ少女にそんな不吉な名前がつけられているのか、少女がこの集落でいたいどのような扱いを受けていたかも彼にはわからないが、そんなこともどうでもよかつた。

問題は自分がその名前で少女を呼んでしまったことで、そして呼んだからには何かを続けなければならぬ。近づきながら、リトは口を開いた。

「例えば この集落はもう終わりだ。君は旅の準備をするつもりだろうが、俺の旅にも役立つものがまだ残ってるかもしれない」

不思議そうに眉をひそめて、少女は聞き入っている。

「でも、どこになにがあるかなんて俺にはわからないし、探し回るのに時間をかけるのは効率が悪い。俺は風がひどくなる前にここを出たいんだ。そこでなんだが。君が準備をしながら俺の探し物を手伝ってくれるのなら 代わりに近くの大きな町までの道案内ぐらいしてやれる」

目の前まで来て、リトはそこで天を仰いだ。砂嵐のない空は遠く雲を見ることがもなく、ただ蒼々とした深みだけが続いている。太陽の日差しに目を閉じて、

「そういう提案なんだけど」
告げた。

素直でない物言いだつた。一言で言つて彼は屈折していた。とどのつまり、男は度し難い捻くれ者なのだつた。

誰よりも自分自身そのことを認識しながら、リトは顔を戻して、そこでちよつとした驚きに目を見開いた。

少女が笑っていた。

子供の純真なそれではなく、どちらかといえば子供に対する大人が、目の前の存在のちやちな嘘を見破った上で慈愛を与えようとす
る笑み。ではあるが、彼が初めて見る少女の笑顔には違いなかった。
改めて訊く。尋ねるまでもないことだと知りながら。

「……それで？」

少女は、ゆっくりと頷いた。

定期的に沸き場所が変わりながら、その箇所にはさほどの誤差が見られない為に安定した水の供給が可能であり、複数の航路で重要な中継地点とされているオアシスの泉のほりでは、常に多くの人が一時の休息を得ている。そんなとあるオアシスの一つ、その泉の手前側で全身を投げ出すようにしていた男は、ふと近くで空気が揺れる気配を感じてうっとうしげに目を開いた。

時刻はちょうど天頂に太陽が昇りきった頃で、きつい日差しを避ける為にかぶっていた布切れの隙間から、横目で新しい客の姿を確認する。そこにいたのは男も旅の供として連れているこぶつき馬をひいた、二人連れの旅人だった。

砂の侵入を防ぐため体中に巻き上げるようにした防砂具は砂塵にまみれ、見事なまでに砂粒色に染め上げられている。荷をかついたこぶつき馬を近くの木につないでから水をやり、染み付いた砂ごと剥がすように全身を包んだ防砂具を脱いだその二人の素顔がやがてあらわになった。

若い。

ただそれだけなら珍しくないが、加えて若い男女の旅人となればそれなりに目を引いた。

男は二十を越えたあたりで、一見して旅慣れた雰囲気を持っていた。こぶつき馬の扱いも手際がいい。商人のようには見えず、かといって賊の類とも思えなかったが、いずれにせよそれなりの修羅場をくぐってきているようで、若くともどこか達観したような視線をしていた。

その隣にいるのは連れ合いよりはだいぶ年の幼そうな、細身の女である。肉付きが薄いせいにかまだ少女のようにも思えた。防砂具を

脱ごうとする仕草にもたどたどしさが残っており、その両者のアンバランスが男の興味を引いた。

少女は整った顔立ちながら身に着けているものは上等なものでなく、あまり恵まれた生活を過ごしてきていないようだった。その点一般的旅人そのものである男とはただの連れのように見えない。奴隷の使用人かとも思ったが、ようやく防砂具を脱いだ少女にすぐそこですくった飲み水を渡す男の態度を見ればそういうわけでもなさそうだった。

その場に居合わせた他人に相對するそっけなさで男は水入りの袋を手渡し、それを受け取った少女も控えめに頭を頷かせただけで応答がすんでしまっている。なにかの縁で旅を共にするような親しい間柄には見えない。老成、というよりは人形のように覇氣のない少女の姿を見ているうちに、男はふと喉元に小骨がささったような違和感を覚えた。

何かが気になる。

退屈な旅の道中には心の渴きを癒してくれる怪談や艶聞の類が必要だし、外に生きる以上、自分の直感には少なからず意味があるものだ。違和感の正体を探ろうと首を持ち上げかけた男は、そこで少女の隣にいる青年の視線がこちらを向いているのに気づいた。

刺すような警戒心が、油断なくこちらに固定されている。

男は笑って頭を元の位置に戻すと、自分がその興味からすでに関心をなくしたことを行為にして示した。

大抵の物事は二つに分けることが可能であるが、この地の場合、多くの分け方の一つとしては、砂漠と砂海というのが代表的である。その境目についてもまた議論の残るところであるが、一般的に砂海は流れがあり引きずられてしまう箇所。砂漠とは流れずに地に足

をつけていられる場所と理解されている。砂以外にも岩や礫などから成る砂漠と違い、砂海は文字通り砂でしかないのも大きな違いとなる。

最も、砂漠にしたところで実は長い年月をかけて動いているのだと主張する者はあり、砂海と砂漠の違いはその奥深くにある板状の地層の有無に他ならないと唱える者もいた。人の生活の根本となる水源。それが長短様々にその位置を変えるのもそれが主な原因であるという主張は、現在、中央学会において高い注目を浴びているが、その立証、また、もしそれが正しかったとしても、それを生活に役立てることが出来るまでにはまだ長い年月が必要だと思われた。

いずれにせよ、明確な線引きも色の違いもない以上、人にとってそのまったく同じようでありながらまったく異なる状況にあるという二つの見極めは、生きる上でなにより重要となる。旅人の足をとって地底まで引きずりこむ砂地獄などそうそうあるものではないが、休んでいるうちに砂の流れにはまり、二度と水場に戻れなくなった人間や動物の哀れな死骸やその骨なら至る所に見ることが出来るからだ。

その際、なによりもまず初めに指針となるのが行路と言われる道なき道である。商隊や旅人、その他大勢の人間が実際に通った道は安全が確認されていることから、人々の通る場所は自然と知られていくようになる。そこは通商路の要所となり、場所によっては水源に栄えるオアシスとなり、水源の乏しい所でも簡易宿泊所のある宿り島となった。

中には、特に一部の商人などには砂海を突っ切ることで独自の行路を開く者もあり、それによって巨万の富を築くことに成功した者もいる。それはもちろん商売以外でも同じであり、大陸の東方には一週間はかかる行路を無視して砂海を越え、わずか三日で他国に侵略した王の伝説も伝わっていた。

もちろんそれらは無数の失敗の上に立つお伽話であり、一人の成功者の存在はその下に万を超える死者の群れが山高く積み上げられているからこそのものでしかない。しかし、あるいはだからこそ、今も一攫千金をかけて砂海に挑む者は多く、例えほんの一握りであろうと成功者は今日もその名を新しく馳せているのである。

しかしながら、一般的にはそういった危険を避ける人間の方がはるかに多いわけで、その為に砂海を避ける手法についてはある程度明らかになっていた。

一つ。砂海には水源が存在しない。それがどの程度の距離を測れるものであるかは不明だったが、一般的には砂漠にしか水源は存在しないとされていた。しかしもちろん、島のような砂漠が砂海に囲まれているということは考えられるため、ゆえにこれはあくまで気休め程度の見極めだとされている。

二つ。砂海の境目には物が集まっていることが多い。これは砂海にある流れが起こす現象であり、倒木から死骸まで、多くのものが砂海と砂漠の間には流れ着くのだった。これははつきりと目に見える形であることから信用度は高いが、砂海の流れは向かうこともあれば遠ざかることもある。前者はともかく、後者においてはその判断方法はまったくの無力だった。

三つ。砂海と砂漠の間には不自然な高低差が存在する。これが現在のところもつとも有効視されているものである。風に飛ばされる砂によって砂漠には多くの高低差が生まれるが、砂海との境界では地中の動きによってもつと連続的な差が生じることになる。山や谷のように落ちれば生死に関わるようなものはまずないが、多くは一目見ればわかるものである為、このことさえ十分に理解していれば危険を避けることは難しくなかった。

もちろん砂漠と砂海についてはいまだ大部分が謎に包まれている為、これらの常識が通用しない状況も当然ありうる。しかし、存在している行路を通り、先に述べた注意点に留意することでその危険性は大きく下がる。

何よりもまずは危うきに近寄らず。臆病な、しかしそれが絶対の正解である。オアシスのほとりで休んでいた男が示してみせた行動も、つまりはそういうことであつた。

太陽が空の階段を下り始めた頃になつて、二人の旅人は出立した。休憩の間、水場の畔で座つた彼らは共に静かだつた。若者は水面を眺め、少女は木蔭の気持ちよさに船をこぎ、うたた寝をしていた。目を細めて太陽の位置を確認して少女を振り返つた若者が一瞬、ためらうような仕草を見せた。はつと目を醒ました少女が立ち上がる。若者が何かを問いかけるのに首を振る様子をじつと見つめ、若者は少女に背を向けて歩き出した。その後を少女が追う。

周囲でも出立する旅人や商人の姿が多く、雑多な喧騒だつた。コブつき馬を曳く青年の歩く速度は決して早くはなかつたが、少女と青年の間に距離があき、少女が足を駆けよつとした、その横合いから彼女に向かつて手が伸びた。

意識する間もなく腕を捻られ、口を押さえられる。軽々と小脇に抱えられ、その段階になつて少女ははじめて危機を認識した。くぐもつた悲鳴を漏らし、暴れ叶わず、眩暈を覚えて息を吸う。口をふさぐ手が外れ、彼女が声をはりあげる前に口の中に詰め物が押し込まれた。不自由な形で圧迫された舌の根に痛みが走つた。

「へへ」

少女を抱えた男が下卑た笑い声をあげた。

その男はこうした人の集まる場所にならどこにでもいる存在だつ

た。盗み、攫い、殺す。連れからはぐれかけた少女など、男にしてみれば格好の獲物に過ぎなかった。彼女が視界に入った次の瞬間、男は少女を攫うための行動を開始していた。

少女は恐慌していたが、それでも抗うことをやめなかった。しかし大人の腕力に打ち勝てるはずもなく、やがて抵抗を諦めたように力が抜ける。それを感じ取った男が拘束する力を弱めた瞬間、彼女は全力で暴れた。

腕が外れる。地面に落ちた。走り出そうとする少女の髪を男の手が捉えた。

「逃がすかよ……！」

力いっぱい引き絞られ、体重の軽い少女はあっけなく引き戻された。羽交い絞めにされ、顎を掴んで無理やりに顔を向けさせられる。男は戦利品の出来を見定めた。磨けば物になりそうだし、そうした感想を抱く前に、奇怪なものが男の目に入った。

灰色の瞳。二重に輪を描いている。その中に、男の驚いた顔が映りこんでいた。

それ以上を考える前に腰に激痛を感じて、男はのけぞって悲鳴をあげた。肩越しに振り返れば、そこに冷やかな瞳が輝いていた。

腰に手をまわすと、べったりとした感触が男の手のひらに伝わった。さらに激痛。突きたてられた短剣か何かを容赦なく捻られたのだと、今まで生きてきた経験が男に事実を教えた。念の入った行動はそのまま明確な殺意の現れだった。

「くそ、つたれ」

怨嗟のうめきを残して、男はそのまま砂地に倒れた。

苦痛にもがき苦しむ男へ一瞥も与えず、血に濡れた短剣を持った若者が屈んだ。人攫いの男の手から解放され、その場にへたり込んだ少女に声をかけるのではなく、赤く濡れた刀身に地面の砂をかける。刀身が全て砂に隠れてから外套の裾で丁寧に二、三度ふき取る

と、綺麗に血の汚れが落ちていた。

「行くぞ」

何事もなかったように若者が言った。

少女は呆然と若者を見上げ、頷いた。立ち上がると少しふらついてしまう。それを見て、若者は何も言わずに歩き始めた。先ほどよりも歩く速度が緩やかになっていた。

今度こそ若者から離されないように気をつけながら、少女は後ろを振り返った。倒れた男の周囲には人だかりが出来ている。

「あの、人は」

振り返らずに男は答えた。

「まだ死んじやいない。すぐに死ぬ」

「……周りに。集まっている人達は」

「助けようとしてるわけじゃない」

男が言った。乾いた声だった。

「死ねば何もいらぬ。水も食料も衣服も。尊厳も、血も肉も髪も」
倒れた男の周囲に集まり、去っていく人々がその手に何かしらを掴んでいることに少女は気づいた。

「何もかもがなくなったら、誰かが脇に捨てるだろう。水場が近ければそれさえも無駄にはならない。養分になる」

淡々とした男の声を聞き、少女はぼつりと呟いた。

「死」

「死んだ後にどうなるかが関係ない。ああなるのが嫌なら、気をつけることだ」

若者は言った。

コブつき馬を曳く男の手がわずかに汚れている。砂色の防砂具の一部もだった。男の警句を耳にしながら、少女はその赤色が意味するものについて考えていた。

砂漠の気温の差は激しい。植物が生息していないことと水分が不足していることがその主な原因で、日中温度が高いほどその差は顕著だった。季節にもよるが今の時期なら夜は水が凍るほどに冷え込むこともある。

ゆえにリトも、途中で先人の作った休憩所があるはずの航路を通っていたのだが、日が暮れる頃になってようやく着いた先にあったのは、ろくに形を残していない廃屋でしかなかった。

二方向からの砂風を遮ってくれる土壁が残っていることが、まだ救いといえるのかもしれない。舌打ちしたい気分を抑えながらコブつき馬を繋ぎ、リトは餌と水を与えて宿泊の用意を整えた。

その間、サリュは近くの材木を集めて火を熾す準備をしていた。日中はコブつき馬の背に乗っていたにせよ、炎天下の砂漠ではただいるだけでも容赦なく体力を奪われていく。少女は目に見えて疲労の色が濃かったが、男が休むように言っても首を横に振るばかりだった。

旅では体調管理が生死を分ける。手にしていた木片を強引に奪って、リトは厳しい目でサリュを睨んだ。

「いいから。休んでろ」

俯いた少女は「はい」とかすれるような声で返事をした。

寝袋代わりになる防砂衣と、水の入った袋を手に渡す。水袋には唇を湿らせるだけでほとんど手をつけず、防砂衣を引きずるようにして壁の側に寄ったサリュは、襪に包まるように横になった。

水が貴重なことは常識以前のこと、旅でそれを無駄にしない心掛けは立派というべきなのかもしれない。だがそれも程度問題だった。苛立ったリトはサリュの下に行くと、少女の肩を揺り動かした。やはり限界だったのだろう。反応鈍く、うつすらと目を開ける少女の口元に水袋を持って行って、

「水がなくなつて死ぬのは馬鹿で、死んで水が余つたなら大馬鹿だ」

それは旅慣れた者が初心者の旅人に贈る警句、というより皮肉だった。飲水の程度を知ることが、まず旅に慣れる事でもあるからだ。サリュは弱々しく微笑み、水袋を傾けるリトにあわせて少しだけ水を飲んだ。すぐにおもねるように首を振って、その横から零れた水が顎を伝って落ちていった。

水を飲もうとしない。それは単純に遠慮からか、それとも飲んだ後に襲ってくるさらなる渇きに耐えられないからか。後者だとするなら、あまり好ましい状況ではなかった。

いくら促しても、ぐずるように飲み口を拒否するサリュに業を煮やして、リトは自ら水を含むと強引に少女に口付けた。二重を描く目を見開いて、しかし抵抗しようとはしないサリュに口移しで水を送り込んでいく。渴いた唇の感触と薄い体臭を感じながら少しずつ含ませていき、最初の方こそほとんどが零れ落ちていたものの徐々に嚥下していくのを確認して、彼はようやく少女を解放した。小さく息を荒げるサリュの口元を拭って、

「……面倒かけないでくれ」

腹立ちは、半ば以上自らに向けてのものだった。

集落を出てから、既に三つのオアシスを抜けている。それまでの行路はせいぜい二日から三日。少女が全く平気そうな顔をしていたから今回はその倍かかる行路をとったのだが、彼女の平静さがただのやせ我慢であったことを知ったのは昨日の事だった。

その朝、サリュの表情に隠し切れない疲れの色を見てから選んだ行動はどれも誤算続きだ。急いで日中の日差しが厳しい時間に歩いたことも、やっとなつた宿泊場所が全壊していたことも。結果論とはいえ、最悪の犀の目をあえて選んで振っているような思いだった。

夜のうちに少しでも移動した方がいいかもしれない。しかし、少女の体調は見るからに悪く、まずは休ませるべきだろうと思えた。

一晩で少しでも回復させて、明日の移動に備えるしかない。残る道のりはあと半日程度。難しいようであれば日中いっぱい休んでから歩いてもいい。食料にはいくらか余裕があるし、昼に通りかかった小さな湧き水場　主に動物が使うような、いつなくなるかわからない小さな水島　で予定外の水も確保できていた。贅沢をしなれば三日は保つ。

それにしても。青ざめた顔で寝息を立てもしないサリュウを見やつて、リトはなんともいえない表情を浮かべた。こうまで手間をかけさせてくれるものか。

一人旅なら余計なことに思い煩う事はなかった。自分の体調だけ気をつければいい。今までのほかの誰かと旅を共にしたことはあっても、お守りをしながらの旅は初めてだ。

すぐにわかったことだが、サリュウは頭の回転が早く、手先も器用だった。そしてひどく我慢強い。いや、あれは強い弱いというものではなかった。我慢することをなよりの美德としているような、まるで行き過ぎた摂生に努める教会人のように。

いったいどんなふう生きてくればあんな性格になるものなのか。それを思うだけで嫌な気分になるが、我慢されることで事態が悪化するなら、それもただの迷惑でしかなかった。

自分がいけないのか、と思わなくてもない。脅えさせているつもりはないが、見知らぬ人間に相対する時のような仮面を今さらつけるのも億劫だった。だいたい、一緒に旅をしていてそんなことをしては気が休まらない。

だから言ったんだ、ろくなことにならないって　誰とも知らぬ相手に言い訳を始めている自分が無様に思えて、リトは大きく息をついた。

それから火を熾して夕飯の支度を始めた。

夕飯には消化しやすいものと思い、スープを用意した。豆と味噌肉と乾燥野菜をたっぷりの水で煮込んで旨みを抽出したそれは、普段の旅であれば正気とは思えないような贅沢である。こんなことができるのは昼間に水源で水を汲めたことと、あと半日で目的地に着くことがわかっていたからで、それもなにかがあるかわからなかったので作ったのは結局一人前だけだった。

サリュを起こして、いつも以上に目に力のない彼女にスープを渡す。思いがけない馳走に驚いた表情を見せる少女に自分の分は先に食べたことを告げて、リトは自分は固いパンを齧った。スープの入った椀を大事そうに、よく冷ますようにしながら口に運ぶサリュの様子に安心する。食欲があるのなら、脱水症状というわけではなさそうだった。

彼がスープを食べていないことなどお見通しなのか、ほとんど手をつけないまま渡そうとしてくるサリュに、「また口移しされたいのか」とからかうと、少女は顔を俯かせた。その表情が赤らめて見えたのは、焚き火のせいだろうか。

千切ったパンをスープに浸して、たまにサリュの口に持っていつて食べさせてやる。二重を描く銀色の瞳に爆ぜる炎を映しながら、居心地が悪そうに身体を竦ませていたサリュは、長い時間をかけてようやくスープを食べきった。念の為にもう一口水を飲ませてから、すぐに横にならせる。

「おやすみなさい」

かすれた、少しは潤いの戻った声に、彼は答えなかった。

すぐに規則正しい呼吸が聞こえてきて、リトは片づけをはじめた。食料と水の残りを確認し、馬の様子を見て、念の為に方位をとって現在地を確認する。宿泊小屋が壊れていたのが少し気になったのだが、星座との位置関係から異常は確認できなかった。

それから眠っている少女の隣で火の番をした。一晚中火をくべているつもりだった。一日程度の徹夜なら問題ない。少女の体調が悪

化しているようには見えなはいえ、女子供は彼の知っている常識の範疇から外れていた。もつと率直に表現すれば、慣れていなかったのも不安だったのである。

それをそのまま心配だからと考えることが出来ないのが彼という男だった。リトは少女の集落から持ってきた本を読みながら、本に集中することも出来ずにサリュの寝顔の変化に気をつけていた。

小心であった。その姿は闇を恐れる子供と変わらない。

膝の辺りを強く引っ張られて、気づくと焚き火がほとんど消えかかっていた。一瞬の睡魔から開放されたリトは、焚き火に追加の薪をくべる前に薄闇の中でサリュが震えているのに気づいた。

「おい、……どうした」

呼びかけても返事はない。彼女は起きてはいなかった。うなされていた。掴んだ右手は夢中で近くのを手繰り寄せただけに過ぎない。

顔を近づける。苦悶に歪んだ顔色は悪く、月明かりのせいも蒼白にも見えた。唇に触って、乾いているわけではないことを確認する。脱水ではない。では、なんだ？

わからなかった。彼はこの時代の人間としては高い水準の知識を持っていたが、学生の時に学んだ知識とそこを飛び出してからの今までの経験では見当がつかない。サリュの身体は熱かったが、震えているからには本人は寒いと感じているのかもしれない。水で濡らした手ぬぐいを額にあて、唇に水分を含ませて、それでは埒が明かないのでリトは少女の身体を抱きかかえた。

刺激を与えないようにそっと胸元に抱いて、包み込む。小刻みな振動を伝える彼女が手を伸ばして彼の襟首をつかみ、必死に引っ張った。その力が弱い。丸まった身体は力を込めればすぐに折れそうなほど華奢で、しかし確かな存在を感じさせる体温は熱かった。

不意に、リトは場違いな昂りを感じた。生命というものの得難さ、

神秘、そして恐れ。それを他者と触れ合うことで強く認識する。

強い衝動が彼を襲った。情欲ではなかった。あるいは似たようなものであるかもしれないが、ただしそれはもっと汚らしい欲望だった。

一人になりたい。

サリュのそれが伝染したかのように、今やリトも震えていた。あと一日、とつぶやく。あと一日で街につく。バーリミアでも一番の大都市だ。そこでこの少女と別れることができる。あとは彼女の自由だ。そして自分は一人になることができる。

そうすれば、他者と触れ合うことはない。自分を認識させられることもない。冷静な思索にふけることができる。孤独は例え独りよがりのものでしかなくても、それは彼の精神を安定させた。

一日、一日、とつめきながら、リトは完全に火が消えて闇に落ちたその中でサリュの身体を抱きかかえていた。必死に宝物を隠すような姿だった。守るべきなのが内と外どちらの闇からかは、彼自身にもわかっていない。

身体の震えはしばらく続いていたが、やがて落ち着いた寝息を立てるようになり、夜が明ける頃には顔色もだいぶましになっていた。身じろぎする気配で目を覚ましたリトの腕の中で、目を開けたサリュが静かに微笑んでいる。

「……ありがとうございます」

その言葉はふさわしくなかった。あるいはこの場合には正しいのか。いや、やはり間違っている。彼には感謝されるようなことをしたつもりはなかった。

「大丈夫か？」

微かに頷いた。念の為に熱を見るとやや高いが、平温といえる範囲だった。手を当てると信頼する相手にそうするように目を閉じる少女の姿に、リトは反射的な反発を覚えて乱暴に立ち上がった。

「飯にしよう」

焚き火の跡を片付けて、馬に餌と水を与える。その間、サリユは水で濡らした手ぬぐいで顔の汚れを拭き、銀色の髪に簡単に手櫛を通していた。それから見覚えのある白い花を大事そうに頭に挿しているのを見て、リトは声をかけた。

「そんなに気に入ったのか？」

答えずにただ頬を緩ませるのを見て、相手を騙しているような気分になった。いつまでも枯れることのないそれは、もちろん本物ではない。前に露天商から買ったただの手品道具だった。誰かと打ち解ける為に買った打算のための代物だ。

「それ、本物じゃないぞ」

不思議そうに首を傾げる少女に、ため息をつく。

「本物ならとつくに枯れてる」

サリユは頭にあつた白い花を手にとって眺めると、

「あなたの魔法ではないのですか？」

そんなことを言った。その言葉があまりに的外れなものだったので、彼は一瞬返答に詰まった。

魔法。それを使う人間。魔法使い。その存在は辺境だけでなく、王国や都市でもいまだに信じられている。城にはお抱えの占い師がいるし、街中にも大抵そういつた職で生活をしている人間がいた。

彼は、もちろんそんなものを認めていなかった。そんなものはただのオカルトでしかない。少なくとも、今まで出会った魔法使いを自称した者の中で、手も触れずなんの仕掛けもなく火を起こすことができた人間はいなかった。高価なレンズを使って日光を収束させて火を起こしたところで、それが魔法ということにはならないだろう。そこには原理もあれば原則もあるからだ。

「魔法なんて使えるわけがない」

もしそんなものが使えるのなら、それこそ街まで飛んで行きたいものだと考える。そうすれば面倒はない。

サリュはなにか考えるように沈黙していたが、やがて頷いた。それだけで、

「でも、これは花です」

と続けた。

真っ直ぐな視線がリトを捉えて、それから逃げるように彼は視線を逸らせた。少女の感情の少ない瞳は、まるで鏡のようだった。そこに映るのは自分自身で、彼女を見ると彼は剥き出しの本性を見せつけられる。

リトはその目が嫌いだった。

栄養摂取だけが存在意義である固形食糧を投げて、
「食べたら出発だ。今日中には街につく。そしたら」
お別れだ。

最後の言葉は口にはせず、リトは濃い味の塊を齧った。

サリュは何も言わず、ただ黙って彼を見ていた。

巨大な湖の中に浮かび上がるように存在する、その街の名をトマスという。

辺境の人間でもその名を知る、水陸最大の商業都市。この世界で移動を前提とせず存在する数少ない街である。

初めてそこを訪れた人間がまず驚くのは、四方に伸びる河川の存在である。大都市と呼ばれる町には必ず豊富な水源がある。水源があつたからこそ大都市成り得るわけだが、トマスほど豊富な水量を誇る都市は他に例がなかった。

この世界において水はまずもって地下から沸き、そして流れるものである。つまり、土地を支配する者にとって第一にすべきはその管理と運用に他ならなかった。湧き上がる水には限界があり、誰も彼もが河川から水を引こうとすれば、残るものは誰もいない。一人分の水で十人が喉の渇きを癒すことはできないのだ。

トマスは、国家によって管理された河川の中で、各地にある大都市の水源と全て河川で繋がっている唯一の都市だった。当然、その通商路としての価値は計り知れず、世界中の全ての物は必ず一度トマスに集まるとまで言われる。

商業都市トマスと、大陸の中央とも呼ばれる城塞都市・首都ヴァルガードの二つを支配するツヴァイ帝国こそ大陸の最大勢力と言つてよかつたが、その首都をもトマスに移すべきだという意見が、彼がまだヴァルガードにいた頃からあるほどトマスは栄えた街だった。

そうなれば確かに便利だろうなと思つたが、便利と面倒は裏表ではない。面倒事を好まない彼にはトマスは故郷であるヴァルガードの次に近寄りがたい場所であり、前に訪れたのはもう三年も昔のことだった。

高い塀で囲むのではなく、水掘りで街の四方を囲んでいる姿がその存在の異質さを示している。不法に出ようとする者も入ろうとする者も、哨戒から見つからずに泳ぎきることはほぼ不可能だろう。この都市の守りに高さはいらぬ。それは堂々たる宣言であった。大陸の経済を握っているといつてよいトマスの外からの制圧に成功した例は過去にない。

町の入り口は東西南北にそれぞれ一箇所ずつ。どここの門番は賄賂が利きやすいなどという話なら昔聞いたことがあったが、三年前の門番がまだ仕事を続けているとも思えず、リトは一番近い南口から街に入ることにした。

ほとんど荷を持たないリトは高い税をとられずにすみ、検問も伏し目がちなサリュウを見て怪訝そうに顔をしかめただけだった。「トマスの財産はまず人の流れにこそある」高い人頭税をとるのではなく、人を呼び込み、そこから多くの機会が生まれ街に財が集まる結果になったその言葉は、確かに至言だろう。言ったのは確か初代の街長だったか。

もちろん物品への税はあるが、頭の中にあるアイデアには金はかからなかった。街には多くの有能な人材が集い、甘い検問は結果的に犯罪者紛いの人間を入れることはなかったが、犯罪を失くすのではなくその検挙数を上げることで治安を守ろうとするのがトマス流だった。泥の交じった水でなければ作物は育たない。固苦しい規律に縛られたどこかの城塞都市よりは、確かに住みやすい街だと言えた。

長く架かった橋を渡り、一步を踏み出す。目の前に広がった光景に、頭に巻いた布防具を取ったサリュウが感嘆の声をあげた。

「人が大勢……」

四つの入り口から街の中央に走る四本のメインストリートの一つは、『冬の道』という名前で呼ばれており、蒸し返るような熱気に

溢れていた。

左右には石造りの建物が延々と並び、いたる所で行商や露天が行われている。視界に見えるだけで数百人の人間が蠢いていた。サリュの集落は多い時で五十人いたかどうか。驚くのも無理はなかった。「水陸でも一番の都市だ。酔うなよ」

夢を見ているように惚けているサリュに注意する。あの集落でただ人生を終えるだけなら、こんな街があることを知るのも確かに悪くないのかもしれない。そんな考えが頭に浮かんだ。

だが、この街で生きていくとなるとそれだけでは済まない。トマスは決して優しい街ではなかった。金持ち、成功者にこそ優しい街であった。メインストリートにしてみたところで、一本外れればそこには家もない人間が路上に生活しているし、裸足で行商をしている年端もいかない子供の姿もある。

サリュのような人間が、どうやってこの街で生きていくというのか。多少手先が器用だとしても、彼女の奇妙な目を見て奉公人に雇おうという物好きがいるだろうか。

頭を振る。それ以上は考えないようにして、リトは隣で立ち尽くす少女に声をかけた。

「頼むから迷子にならないでくれよ」

まずは宿を探すつもりだった。少女の体調は悪くないように見えたが、外からうかがい知れる様子だけでは安心できないのはすでにわかっている。身体を休めて、満足な食事を取り、なんなら一晩くらい少女も泊めてやってもいい。そして、それでお別れだ。

それが、彼自身嫌っている偽善であることはもちろんわかっている。情が移ってしまっているという認識もある。しかし、だからこそリトはこれ以上少女と一緒にいるわけにはいかなかった。少女を両腕に囲いながら抱いた暗い感情を彼は忘れていなかった。

珍しそうに周りを見ながら、道行く人にぶつかってすぐに迷子に

なつてしまいそうなサリュの手をリトは取った。そのまま黙って歩いていく。しつかりとした力で握り返してくる少女の手の温度が伝わってきて、彼は顔を歪めた。

不快な熱さだった。

トマスの構造は、簡単に言えば中央に行くほど質が高くなる。円を中心にはこの街の支配者達が住み、有名貴族の別荘地が立て並び、逆に外円にあるのはいわゆる貧民街で、リトが選んだのは真ん中より少し外側に位置する宿屋だった。

三年前の記憶を頼りに道を歩いてみたものの、覚え方が間違っているのか街の様子が変わっているのか、なかなか馴染みの風景を見つけることができない。左手に引かれたコブつき馬に急かすように嘶かれて、リトは自由になった右手で馬の頭を撫でてやった。

サリュは、目に入る全てのものが新鮮だという様子で、感情の乏しい表情の真ん中で物珍しそうな視線を街中に飛ばしている。さっきまでの混雑はないので迷子にはならないだろうが、あまり歩かせてまた体調を崩されてもやっかいだ。彼が初見の宿屋に泊まることを決めた時、怒声が裏路地に響いた。

「なんだこのガキ！」

振り返れば、すぐ隣にいたはずのサリュの姿がない。嫌な予感が出て、リトは近くの柱にコブつき馬の手綱を縛り、人だかりへと向かった。

思ったとおり、騒ぎの中心に小麦色の少女の姿を見つけることができた。その他にもう一人いる。より正確には一人と一匹だった。

さっきの怒声の主らしい男は、柄の悪さがそのまま顔に出たような容貌で、その後ろにある大小様々な木の檻とその中の動物から察するところ、動物の密売人だと思われた。その男をいつもの真っ直

ぐな瞳でもってして見上げているサリュと、そしてその腕の中にあるものを見て、リトは驚いた。

「砂虎か」

銀色の少女に守られて耳を伏せて震えているのは、確かに砂虎と呼ばれる猛獣の子供だった。成長すれば一丈、大人二人分にもなんなんとする、人さえ襲う凶暴な肉食獣である。基本的には単体で砂漠を生活するが、居合わせたもの同士で協力して狩りをすることもあり、何十人いた商隊が襲われて一晩で全滅したという話もある。一人で砂漠を歩くような旅人にとってはなにより恐れるべき天敵だった。

「ガキ、どけつ。商売の邪魔なんだよ」

男に凄まれても、サリュは動かなかった。砂虎の子供を抱えたまま、睨むように男を見返している。二重に描かれた銀色の瞳に気づいた男が、不気味そうに顔をしかめた。

あいつはなにをやっているんだ。怒りを通り越して呆れるしかなかった。動物の命なんて気にしている立場ではないはずだ。

それとも、あるいはここが別れ時か。やや都合よい思考を浮かべ、リトが背中を向けようとしたその背後で、遠巻きに見物していた者達から悲鳴が上がった。

「やめる！」

気づけばそう声に出していた。

周囲の注目が集まる。サリュにむけて今にも拳を振り下ろそうとしていた男と、それでも腕の中のものを守ろうと身を丸めた少女がこちらを見あげて、ほっと息をつくのが見えた。

リトは仏頂面を崩さず、輪の中に進んでいった。内心では激しく後悔している。なんで自分はこんなことをしているんだと思い、行

動したあとになってもそんなことを考えている自分がますます嫌になっただ。

「なんだ、てめえは」

「ただの通りすがりさ」

男は威嚇するように歯をむいた。

「格好つけてんじゃねえぞ。怪我する前に失せやがれ」

少なくとも、その程度の暴言で頭に血を上らせるほど彼は子供ではなかった。嘆息交じりに告げる。

「そっちこそいいのか？　すぐに憲兵が来る。見られたら不味いものもあるだろう」

リトの視線が背後に注がれて、男にあきらかな動揺が生まれた。

「なに言ってるやがる……」

「さあ。ここで時間を食って困るのはあんたじゃないのか？」

後ろの荷については何も言わない。それで手打ちにするつもりだった。相手にとってもそれが一番、損害が少ないことになるはずだ。だが、男は理性的な判断よりも自己のプライドを大事にすることを選んだらしい。

「うるせえ！」

殴りかかってくる男の勢いに嘆息しながら、リトは冷静にその拳を避けた。通り過ぎ様に足をかける。バランスを崩した男は前のめりになって盛大に転び、周囲から歓声が起こった。

「やめておけ。憲兵隊が来るぞ」

紛れもない親切心でそう言ったのだが、全身を紅潮させた男にはもはやなにも聞こえていなかった。

腰からナイフを取り出す男にもう一度ため息をついて、リトも腰からナイフを抜いた。ここにきてようやく、見物人から悲鳴が上がる。むしろその声を合図に男が突っ込んできて、そのナイフを捌こ

うとリトも動き出したところで、第三者の声はその場を制した。

「動くなッ」

同じように言ったりトのそれとは、聞いた者への強制力が明らかに異なつた。人山を掻き分けるようにして現れたのは三人の憲兵で、その先頭に立っていたのは白銀の鎧を身に纏つた騎士だった。

凜とした姿と、長く伸びた金髪。女騎士、しかもここまで様になつているのはめつたに見なかつた。もちろん、中身までがそうであるかはまた別問題だが、皮肉げにリトは思い、慌てて逃げ出そうとした密売人の男の目の前に、騎士が一瞬で抜き打ちの剣を突きつけるその鋭さに、心の中で前言を撤回した。中身も様になっている。

女騎士は木檻の中を確認すると、「保護対象ありだ。連れていけ」と憲兵隊の一人に指示を出した。もう一人には野次馬の解散を命じている。

手早い処理というべきだった。感心しつつ、すぐに布防具を被り、少女を促して野次馬に紛れようとしたリトに、騎士が冷やかな言葉を投げつけた。

「どこに行くつもりだ、ニクラス」

驚きに足を止めた同伴者を見上げて、サリュが不思議そうに首を傾げた。

商業都市トマスと双璧と謳われる帝都ヴァルガードは別名を学術都市といい、純粋量ではトマス以上を誇る水源にかけて『知識の泉の沸く妖精の地』と称される。なんとも大げさなことではあつたが、その表現に決して引けをとらないほどの学術施設が揃っていたことは事実だった。

大陸最大勢力の首都であるそこには大陸中の優秀な学者が集めら

れ、有望な生徒も集まっていた。各国王族の高弟や有名貴族の子息、社交場としてもこれ以上ない程の規模である『大学』は、まさに大陸情勢の縮図であった。もちろんホストたるツヴァイ国からも数多くの若者が集められており、学問にせよ、政治にせよ、軍にせよ、次代を背負って立つ人材がそこで育成される。

リトはそこで幼少時代を過ごした。出身国同士で派閥を作り、いざこざを起こすような馬鹿げた争いには興味がなかったが、学問塔の図書室に貯蔵されている書物や、最先端の研究内容にはおおいに惹かれた。

馴れ馴れしい人付き合いは好まなかったが、代わりに出身国で人間を選ぶようなこともなかった。すぐに彼は変わっていると有名になったが、それを恥じるようなことはなかった。彼は自分の異常に昔から気づいていたし、まことに捻くれたことに、異常であることが異常であるのかとさえ思っていた。理屈っぽく捻じ曲がった、現在の彼の性格の徴候はその頃から既にあつた。

彼は初めのうちは周囲から忌避されていたが、やがて気の合う仲間ができるようになった。その多くが他国の人間で、性格にそれぞれ癖のある人物だった。

クリステイナ・アルスタは、彼が大学に入った当初から付き合いのある、数少ない同国人の一人だった。古くから続く、戦場で名を馳せた騎士の名門の一族である。自身もまた騎士たらんとした彼女は愚直なまでに真面目な性格で、剣の腕では女ながらに有名なほどだった。

その性格上、リトは真面目な人間とは性格が合わないことが多いが、彼女とはすぐに打ち解けることができた。真つ直ぐにしる、曲がっているにしる、頑迷な部分がひどく似通っていたからかもしれない。

十七の時に大学を出ることを決意した時、一番反対したのは彼女で、最初に賛成してくれたのも彼女だった。三年後、初めてヴァルガードに帰った時には彼女は既に地方での軍務についており、それから顔をあわせたことはない。

かれこれ五年振りになる。名乗られるまで記憶の底に沈み込んでしまっただけでも仕方がないと思うのだが、

「私は一目でわかったぞ。薄情者め」

不満そうに言っただけ、彼女は手に持った果汁水を飲んだ。

彼らがいるのは宿屋の一階にある食堂スペースだった。その後、旧友との再会を知らされたりトは、彼女の薦めで宿屋に案内してもらった。最初は街でも最上級の宿に連れて行かれるところだったが、サリュが腕に抱いて離そうとしない砂虎のこともあり、質はいくらか落ちるが話が通りやすい知り合いの宿屋を教えてもらったのだ。

その砂虎の子供は今、彼らの着いた丸机の下で主人から出されたミルクを一心不乱に舐めとっている。その様子をじっと眺めているサリュに文句の一つでも言いたいところではあったが、まずは旧友への礼が先だった。

「クリス、さつきは助かった。久しぶりだな」

「五年振りだ。我が目を疑った」

不満そうな口調のまま、クリスは口元を綻ばせた。

「天外の再会だ。まさかこんな所で会えるとはな」

懐かしい口調に触発されて昔を思い出し、自然とリトも笑顔になる。

「変わらないな」

「そうか？ 多少は軍務に励んできたつもりだが」

辛く厳しい軍生活は容易に人を変える。意外そうに瞬きして、それからクリスは小さく笑った。

「ニクラス。五年だぞ。変わっていないほうがおかしい」
もちろんそうだった。外見はお互いに変わっている。

昔から人気があったクリスだが、彼より一つ年上の彼女はいまや十分に成熟した女性になっていた。辛くないはずのない激務の中でもその輝きは褪せることなく、むしろ昇華する形でそれを助けている。彼女が信じ、目指していた通り、まったく騎士というのは彼女の天職だったのだ。

「それはそうだが、でも変わってない。安心したよ」

「その言い方こそ変わってないな。私も安心した」

いや、と彼女は続けた。

「やはりお前は変わったな」

「どこが？」

「目つきが悪くなった」

「砂に吹かれてるからな」

顔を合わせて、二人は笑いあった。それから遅ればせながらに杯をあわせて、よく冷えた果汁水を飲んだ。クリスが職務中である手前、酒を飲むわけにはいかない。それに。

思い出した、確か彼女は下戸だったはずだ。「弱点がなさすぎる」と言われた彼女の唯一の弱み。思い出の断片が脳裏をよぎって、リトはもう一度笑った。

「それにしても、今はどうしてるんだ？ いや、詳しい話はまた聞かせてもらうが」

クリスの視線がサリュを見て、声に少しだけ険がこもった。

「人買いかなにかをしているわけではないだろうな？」

まさか、と否定して、リトはクリスに掻い摘んで事情を説明した。
「そうか」

彼女はそれ以上何も聞かず、沈痛な表情で眉を寄せた。それまでひたすら砂虎に注意を注いでいたサリュがふと顔を上げて、そのク

リスと目を合わせる。二重に描かれた瞳を見て驚かなかったはずがないのだが、表面上は少しも動揺を見せずにクリスは微笑んだ。

「私はクリスだ。よろしく」

挨拶を受けたサリュはクリスを見て、それから一度リトに視線を移してすぐにまた戻した。頭を下げる。

「サリュ、です」

「サリュ……」

口の中で繰り返すように呟く、その様子は初めてその単語を聞いた自分自身と同じだった。柔らかく頷いて、それから改めてリトのほうに視線を送る。

「それで、これからの予定はどうなってるんだ？」

訊かれて、リトは答えに詰まった。隣のサリュを見る。

「……とりあえず、ついさっき着いたばかりだからな。ゆっくりするさ」

「そうか。なんなら私の家に泊まりに来てもいいぞ。借り家だが、余っている部屋もあるし、そのあたりの宿よりはゆっくりできると思うが」

その提案は非常に魅力的なものに思えた。少なくとも、砂虎がどうだこうだという面倒ごとはなくなるだろう。クリスの家のほうが食事の質も高いだろうし、サリュも疲れた身体を休められるかもしれない。と考えていたところで名前を呼ばれた。

「リト」

囁くように呼ばれた言葉に、彼は妙な違和感を覚えた。少女が彼のことを名前で呼ぶのはそれが初めてだったのだ。

サリュは無言でテーブルの下を見て、そこには満足した表情で寝顔を見せている小さな猛獣の姿があった。これは動かせそうにない。苦笑いを浮かべながら、クリスに断った。

「すまない。せっかくだけど、ここでゆっくりさせてもらうことにする」

クリスは納得したように笑った。

「わかった。それでは、よければ夕飯を一緒にしないか？ 色々と話もしたい」

今度は断る理由はなかった。幾つかの事情を考えてこの食堂で晚餐を開くことになり、三刻後にここで落ち合うことを約束してクリスは出て行った。

ふと下からの視線を感じて、リトはサリュを見た。

目で問うと、サリュはぐっすりと寝入っている砂虎の子供を抱きかかえたまま、視線を逸らせた。

「……なんでも、ありません」

通された部屋は、不必要に広がった。二人と一匹どころか、十人は寝泊りできそうな空間がある。

「さすがは帝国貴族、というところだな」

これで今日の分の宿代は無料だというのだから恐れ入る。放浪の根無し草としては素直に知人の威光に甘えることにして、リトは部屋の中央に荷物を置いた。それから洗面台に行った。風呂にすでに湯が張られてある。まったく至れり尽くせりだった。

ソファに砂虎の子を寝かせているサリュに風呂に入るように言って、リトは荷を解き始めた。食料と水に処理を施してから、ベッドに横になる。部屋にベッドは一つしかなかったが、大きさは大人が四人は並んで眠れるほどあった。

すぐに襲ってくる睡魔に抗いながら、さてどんな風に切り出そうかとリトは考えていた。前もって覚悟を決めなければ話をできない小心さにうんざりしながら、緻密な飾りの描かれた天井を見る。

やはりあの砂虎のことか。少女の一人でも怪しまれるのに、あんなものを抱いてはどこの売春宿でも雇ってはくれまい。それともそんなものでさえ売りにするのだろうか。砂虎と共に育てられた

哀れな少女、とでも銘打って？

物好きな客にはさぞかし喜ばれることだろう。

「……最低だな」

クリスは自分のことを変わっていないと言ったが、確かに昔の自分ならこんなことは考えなかっただろう。

わかっている。それはただそういう現実を知らなかっただけで、知ってさえいれば昔にだって同じことを考えただろう。では、やはり自分は変わったということになるのだろうか。

だとすれば知は罪なのか。無知こそ喜びか。

そんなのは彼には認められなかった。それでは人が生きている意味などない。

何も心配することがないから、そんなことを考えてしまう。そしていつも答えが出るようなことはなかった。昔からそうだ。あの頃からずっと彼はそうだった。

思考を遮断して、彼はそれから逃げ出すために睡魔を受け入れた。いま眠ってしまったえば起きられないかもしれない。しかしクリスならきつと不機嫌な声音で叩き起こしてくれる。「おい、ニクラス。私まで説教につきあわせるつもりか？」それもまた、彼の中にある懐かしい思い出だった。

しかし、実際に彼を起こしたのは湯気を含んだ甘い香りだった。それが鼻腔をくすぐり、リトは目を開いた。

視線の先にサリュウがいる。旅の垢を落として、全身がさっぱりとしていた。艶を取り戻した銀髪にはやはり白い花が飾ってあって、二重の輪を見せる潤んだ瞳は水気とともに十分な生気も含んでいた。「気持ちよかったか？」

少しだけ口元を綻ばせたようにして頷くサリュウに頷き返して、彼は荷物から着替えを取ると洗面台に向かった。

「休んでろ。夕飯になつたら起こす」

砂虎の様子を覗き込んでいた少女が振り返つて、微笑んだ。

サリュはどうか考えているのだろう。彼女が売春なんて嫌だと考えていれば、あるいは いや、だとしてもなにができるというのか。自分は定職もない根無し草で、誰か一人を養えるような人間じゃない。経済的な理由ではなく、むしろそれ以外の方こそが一番の問題だった。昨夜のことで、彼はそれを痛感していた。

一人が良い。

クリスに引き取ってもらつたという考えはなかった。彼は他者にただ依存するような思考を持たない。あきらかにそれは長所ではなく短所であり、恐らく彼という人間のそれが限界であった。

鬱蒼とした気分は湯に浸かつて流れ落ちることなく、身体だけはすつきりして風呂から上がると、少女は砂虎の子の横ですやすやと寝息を立てていた。その表情が隣の獣と同じく、まるで巣穴の中で安心しきつて眠っているような小動物そのものに見えて、彼は唇をかみ締めた。

ろくなものじゃない。この少女も、成長すればその少女を食い殺しもする猛獣の子供も、光り輝く一方で強い闇もあるこの街も、そんな何もかもを許容する世界も。

そして、なによりもそんなことを思う自分自身が最もろくでもないのだと、冷静にリトは断じた。

約束の時間になっても、クリスは食堂に姿を現さなかった。代わりに身綺麗な格好をした若い男がやってきて、「クリス様からのご伝言です」と告げた。

「少し遅れるので、先に食事を始めておいてほしい。とのことですが了解して、リトは適当なメニューと果汁水を二人分注文した。机の下に案外行儀よく座っている砂虎の子供用に、ミルクも頼む。人の良さそうな顔をした宿の主人は、心得た顔ですぐに常温のミルクが入った平皿を持ってきてくれた。

昼間に遭遇済みの主人はともかく、少しずつ入り始めた食堂の客達は皆、好奇の視線を彼らに送っていた。なかには露骨に顔をしかめている者もいる。面倒事になるかもしれないとリトはサリュに部屋においておくように言ったのだが、彼女は頑として頷かなかった。少女が初めて見せる不可解な頑固さにリトは驚いたが、しかし考えてみればこれはいい話のきっかけだった。砂虎の子がミルクを舐めとる様を見つめているサリュに、リトは訊ねた。

「どうするんだ、それ」

「……クアル」

なんのことかと眉をひそめて、

「飼うつもりか」

信じられずにリトはうめいた。

名前までつけて。睨むように見ると、サリュは無言で頷いた。

「知ってるのか？それは砂虎だぞ。大人になれば人間なんて数秒で食い殺す」

「私の村にもいました」

目線を合わせずに少女は言った。

「あの子は人なんて襲いませんでした。私が、育てたんです」

リトは驚いた。獣を子供の時から手なずけることで優秀な供とする話はあるが、彼の知る限り最も凶暴な獣だと考えられている砂虎でもそれが可能とは聞いたことがない。

「その砂虎は？」

少しの興味もあつて訊ねると、サリュは感情のない口調で、

「死にました」

殺されたということか。

考えればすぐにわかることではあつた。水源が無くなり始めた集落では、不必要なものから切り捨てられていく。何も生み出さない家畜以下の行く末など一つしかない。

「あの子は殺される時も唸り声一つ出しませんでした。この子も。だから」

だから助けた？

「くだらない」

言葉をさえぎり、彼は一言で切り捨てた。

「動物なんてそこら中で売られてる。親なしなんてどこにでもいる。それを全部救おうとも言うつもりか。いったいお前は何様なんだ」
辛辣な言葉を投げるリトに、しかし少女はそこで初めて顔を上げて、

「でも、あなたはわたしを守ってくれました」

それが何かとても大切なことのように、そう言った。

まっすぐな視線を受けて、一瞬、なんのことかリトにはわからなかった。昼間の件か。それとも昨夜のことか。もしかするとあの集落で声をかけたことなのかもしれない。

とんでもない勘違いだった。

だが、この上なく真摯な表情で見上げる彼女の姿を見ると、横道にそれるようなことをわざわざ口に出すのもおっくうに思えて、リトはため息をついた。話を戻す。

「どうやって飼うつもりだ。食費は。住処は。自分一人の食い扶持を稼ぐあてもないだろう」

「わたしはもう子供ではありません。生きることならできると、そう言われました」

何を言われたというのか。胸が悪くなって、彼はテーブルにきた果汁水を喉の奥に流し込んだ。それでも不快感は消えず、胃の辺りに溜まっている。

サリュは果汁水に手をつけようとせず、少し戸惑うようにしてから、口を開いた。

「あなたが、かっつけてくれませんか」

不明瞭な言葉は、あるいはわざとだったのかもしれない。その程度には少女の頭がいいことを彼は知っていた。だから意地悪く訊ねた。

「なにを」

答えはない。ため息をついてリトは言った。

「断る」

自分の手で新しい商売女を一人作るつもりはなかった。この際、相手が自分の趣味であろうがなかるうがそんなことは関係ない。

「……わかりました」

ほんの一瞬だけ傷ついた表情を閃かせて、サリュは席を立った。宿屋の主人のもとに行つて、話している。驚いた表情になった主人が、困惑した顔でこちらを見たのがわかったが、リトはそれを無視した。

やがて渋る主人から何かを書きつけてもらったサリュは、テーブルに戻るくアルを抱きかかえた。砂虎の子供はミルクの入った皿

から離されて文句の鳴き声をあげたが、彼女が少しだけ抱く力を強くすると渋々と押し黙った。

「さようなら」

顔を背けているリトの耳に、その言葉がいやに大きく聞こえた。そして少女は宿から出て行った。

「……お客さん。いいんですかい」

テーブルに近づいてきた主人が非難するような目を向けてくる。なにがいいんですか、だ。文句があるなら自分が引き止めて、養ってやればいい。俺なんかよりよほど幸せにしてやれるはずだろう

八つ当たりに噛み付きたくなるのを堪えて、不貞腐れたようにリトは告げた。

「親父。エール」

ため息が返ってきた。

すぐに運ばれてきた酒を、一気にあおる。久しぶりの酒だというのに、ひどく喉に不味い。店のせいではないことはわかっていたので、文句も言えなかった。

それからリトは、友人が現れるまで酒を飲み続けた。運ばれてきた食事には手もつけなかった。

約束の時間を一刻ほど過ぎてから現れたクリスは、仕立てはいいが簡素な服装に身を包んでいた。恐らく周囲をはばかりのことだろう。この宿は庶民からすればかなり質はよかったが、それでも彼女のような貴族が顔を出すのは場違いでしかない。

「なにかの嫌がらせか、これは」

すっかり冷え切った料理を嫌そうに突つきながら、クリスは料理を下げさせようとはしない。

あの子はどうしたんだ、と聞かれ、リトは肩をすくめただけで答えなかった。クリスは問いたげな視線で、しかしそれ以上何も言っ

てこなかった。

「勝手に飲んでいて悪いな」

エールをいくら飲んだところで酔いはなかったが、旅の疲れもあってか少し眠気は感じていた。

「遅れたのはこちらだ。気にするな」

「忙しいのか？」

そういうわけではないのだが、とクリスはわずかに疲れたような息を漏らした。

「いつものことだからな」

トマスを支配しているのはベラウスギ公爵家である。ツヴァイ建国からの忠臣であるその家は、臣下というよりはむしろ盟友としての立ち位置から始まった。高位高官ではなく、当時まだ一地方都市でしかなかったここトマスの受領を望んだという初代ベラウスギは、その先見の明を生かして一代でこの街を大商業都市へと築き上げた。

最大の軍はヴァルガードに。最大の富はトマスに。

やがて両者が危険な天秤の両側と例えられることになるのに時間はかからなかった。五代皇帝アンドレスの暗殺など、その影にトマスの手があったことを囁かれる事件も多かった。一方のヴァルガードにも過去にトマスの軍事的占領を試みた事実があり、現在は一触即発とは言わないまでも、蜜月とは程遠い関係になっている。

「いまの私は名代のようなものだからな。肩が凝ることさ」

少なくとも三年前までは、アルスタ家はヴァルガード側に立っていたはずだ。その彼女がここにいる理由としては、あまり多くの可能性は考えられない。目付け役、といったところだろう。

ふと昏間のことになって、リトはクリスに訊ねていた。

「それじゃあ賓客じゃないか。なんで憲兵隊なんて真似をしてたんだ」

「暇だったからな」

あつさりと彼女は答えた。それに、と続ける。

「騎士たる者、人々の生活を守るのは当然のことだ。役目云々ではない」

大した騎士の鑑と言うべきだった。呆れたように頭を振って、リトは手に持ったエールを飲み干した。それを呆れる様な、しかし羨ましそうにも見える表情で眺めているクリスに気づいて、

「飲まないのか？」

と訊くと、彼女は心底嫌そうな顔になった。

「暴れて欲しいか？」

「……治ってないのか」

「病気のように言うな。が、酒は飲まん」

彼女がそう言うからには、きっとあれ以来二度と飲んでいないのだろう。

仲間内での飲み会の時だった。学生達が酒を飲むことは禁じられておらず、飲み会が開かれるのもそう珍しいことではなかったが、その日は堅物で有名なクリスが参加するという事で皆が驚いていた。

不機嫌そうに眉間に皺を寄せたまま杯に酒を受けた若き彼女は、無言で果実酒を一気におおひ 弾けた。

それは、今までいっただい何を溜め込んでいたのだろう、と誰もが思うほどの暴れっぷりだった。歌って笑って騒いで、危険を感じてその場から逃げたそうとしていたリトはあつさり彼女に捕まり、一晩中その相手をさせられることになった。

「あれは酷かったな。あれからクリスには酒を飲ませるな、が俺達の合言葉だった」

懐かしそうに笑う男を軽く睨み、クリスは視線を外した。

「誰のせいだと思っている」

ん、と問う彼に「なんでもない」と邪険に返して、

「たまに、酒を飲みたくなる時はあるがな」

忌々しげにつぶやいた。

「そうなのか？」

「私をなんだとと思っている。私だって事に思い悩むことぐらいある」
気分を害したふうに言われて、リトは苦笑いを浮かべる。

「……初めてそう思ったのはお前が家を出ると言った夜だ」

クリスは果汁水をあおつて、酒が入っているわけでもないのに酔ったような半眼で彼を睨んだ。不思議そうにしている彼に、

「許婚を失くすことになったのだぞ。当然だろう」

彼女の言っている意味がわからず、やがてそれが徐々に浸透していつてリトは大きく目を見開いた。言葉のめぐりが悪いのは、やはり酔っているのかもしれない。そうだとしても、あまりに突飛な言葉ではあった。

ふん、と鼻を鳴らしてクリスは続けた。

「やはりいまだに知らなかったか。そんなことだろうとは思っていたが」

「……初耳だ」

「知らなかったのはお前だけだ。お前のご両親はもちろん、私も、私の両親も知っていた。大学の連中だって知ってるやつは知っていた」

「俺だけ。知らされてなかったのか」

「聞けばどうした。お前は嫌がっただろう」

それについては否定できなかったので、沈黙するしかなかった。

「少しは私の怒りも理解できたか？ 大学で未来の主人と出会って、それをまんざらでもないと思っていたら、当の本人からいきなり近いうちに家を出て行く相談だ。おかげで今では立派な次期女当主。」

暴れたくもなる」

それで思い出した。クリスが酒を飲みたいと言ってきたのは、彼が家を出るつもりだと彼女に相談した次の日だった。誰でもわかるようなその因果関係に気づけないのは、迂闊としかいいようがない。

「すまない」

五年越しの真実を受けて、彼は言った。それ以外、口にできる言葉はなかった。

感情を凍らせた瞳で彼を睨んでいたクリスは、やがてその鎖を解いて口元を緩ませた。

「まあいい。昔のことだ。私だつてもう、姓が変われば自分の名の響きがどうなるかなどと口ずさんで頬を染めるような、乙女ではないよ」

言葉に一抹の寂寥感を伴っていた。

やはり、変わらないわけがないのだ。確かな現実を受け止めて、リトは碗をあおった。中にはなにも入っていないかった。

「それにしても、だ」

主人に互いの飲み物を注文して、場の空気を換えるように彼女は話題を転じた。

「お前があんな連れと一緒になのにも驚いたがな。昔は子供嫌いだっただじゃないか？ 大学の後輩連中もあれだけ邪険にしていたお前が」
肩をすくめる。今でもそのつもりだ。

「それにしてお前に懐いているようだったぞ」

「気のせいだろう」

鼻で笑われる。

「お前と私、どっちに人を見る目があると思っている」

昔の色々な出来事の記憶に頭を巡らせてみれば、納得するしかない言葉ではあった。

冷えた剥き豆を口に入れて、リトは壁にかけられた時計を見た。

嫌なことを思い出してしまった。

少女がここを出てそろそろ二刻が経とうとしている。時間に罪はないが、不快になる「間」だった。古い壁時計を親の敵でも見るかのように睨んだまま、彼は旧友の名を呼んだ。

「クリス」

「なんだ？」

「あの子は、お前から見て幸せそうに見えたか？」

クリスはすぐに答えず、からかうような口調で言った。

「何が幸せかは当人にしかわからない。他人がそれを決め付けるのは傲慢だろう。少なくとも俺は、そんなのご免だ」

リトの表情が歪んだ。その台詞には覚えがあった。他でもない、彼自身が五年前に舌の上に乗せた青くさい言葉だった。

「だが、その上で私から言わせてもらおうなら、悪くはなさそうだったがな」

その言葉も、むしろ彼の方が使うような表現だ。彼女はわざとそういう言い方をしていた。

「……悪くなさそう、か」

「ああ。それ以上にを求める、贅沢者め」

クリスへの返事に唇の端を上げて、リトは飲み物を持ってやってきた宿の主人に声をかけた。

「親父。さっき言ってた店の場所を教えてください」

ぎよつとして、クリスのことを気にする様子を見せる主人に肩をすくめる。彼女はジョッキを口に、そ知らぬ顔をしていた。

「この宿に迷惑はかけない。頼む、教えて欲しい」

店の場所を聞き出すと、リトは席を立った。

「剣は要るか？」

そっけなくたずねてくる友人に、しかしリトはこれ以上迷惑をかけるつもりはなかった。果汁水を傾けながら訊いてくる彼女に首を

横に振って、詫びる。

「クリス、すまない。用事ができた。近いうちに改めて挨拶にいかせてくれ」

実直な女騎士は、薄く笑って見せた。冷やかな笑みだった。

「なに、そのまま座って酒を飲み続けるつもりだったら私が叩き斬っていた。気にするな」

彼女らしい言葉に笑い、リトは外套を羽織って外に出た。

宿屋の主人から聞いた建物は、宿から貧民街に向かって少し歩いた路地裏にあった。位置的に貧民層とのちょうど境目になるような場所で、だからこそ、その手の建物も多く立ち並んでいるのだった。立て付けの悪い扉を開くと、褐色の男が歯の欠けた口を大きく笑わせてリトに近づいてきた。

「いらつしゃい、お若い旦那。今日はどんな女をお求めで？」

「銀髪に褐色の女が来ただろう。小さな砂虎を連れた。どこにいる？」

男はとぼけるように自分の顎を撫でた。

「さて、なんのこと、で」

そこで言葉が途切れる。男の喉元にはナイフが突きつけられていた。

「どこにいる？」

繰り返すリトの目が、暗く沈んでいる。そこに単純な脅し以上の気配を感じて、男はひきつった悲鳴をあげた。

「お、奥に……奥の部屋に」

それきりその男には目もくれず、リトは店の奥へ向かった。

進むにつれ、据えた匂いが鼻をさした。蝋燭が燃え、男と女の体臭と、汗と香料の交じり合った香り。一番奥の部屋の前にたどり着

いたリトは、一気にその部屋に入った。

中には三人がいた。正確には三人と一匹だった。

扉のすぐ横には、この店の女主人だろうか、中年の女が驚いた表情でこちらを見ていた。その足元に砂虎の子が力なく伏している。

部屋の中央にいたのは頭部が禿げ上がった屈強な男で、右手に黒光りする鞭を掲げていた。もう一方の左手には鈍い輝きの鎖を握っていて、その鎖は一度地面に落ち、それからまた伸び上がって最後の人物の元へと続いている。左の頬が赤く腫れ上がり、見覚えのある服にはあちこち裂け目できていた。薄く涙の溜まった瞳が、驚きに見開かれて彼を見上げた。

状況を確認するには、それだけで十分だった。

「……あら、気の早いお客だねえ」

女の問いかけを無視してリトは部屋の中央に向かった。男が野卑な笑みを浮かべて、

「おいおい兄ちゃん、もうちょっと待ってなつて。いまこいつを躡けてるところさ。なんなら、その後であんたに」

それ以上の言葉を吐かせず、リトは男の股間を容赦なく蹴り上げた。声にならない声をあげて悶絶する男の顔面を、大振りの拳で真横から打ち抜く。

男は倒れた。加減を間違えたせいで、殴ったリトの拳にもかなりの痛みが走ったが、気にせずには彼は首輪を外すとサリュを抱きあげた。呆然としていたサリュは、やがて少しずつ身体を震わせ始める。首にしがみついた。

それからクアルに近づき、抱きかかえるリトの後ろで、女が震えた声であとずさった。

「……な、なんなんだい。いったい、あんた」

女をじろりと睨んで、リトは一方的に告げる。

「これは俺のものだ。連れて帰る」
部屋を出た。

外には店の人間がいたが、誰も止めなかった。奇妙な沈黙の中を
いつそ堂々と、彼は店を出た。耳元ではわずかにすすり泣くような
声がしていた。

宿屋に戻ると、すでにクリスの姿はなかった。食堂の奥から顔を
覗かせた主人が安堵したような表情を見せて、リトは彼に一つ頷い
て部屋に戻った。

扉に差し込まれていた紙片を開くと、住所が書かれてあった。「
落ち着いたら顔を見せてくれ」達筆な文字が踊っている。

なにか嗅がされたのか、目覚める気配のないクアルをソファに寝
かせてから、彼はサリュをベッドの上に座らせた。洗面台に行つて
水の張った桶と手ぬぐいを持ってきて、少女の服を脱がせる。そし
て傷跡から滲む血を拭つていった。

「……なぜですか？」

サリュが口を開いた。売春窟を出てから初めて喋った言葉だった。
リトは答えなかった。傷の手当てが終わると、手ぬぐいを洗つて
水を切り、赤みがさした左頬にあてる。少女と目が合った。灰色の
二重の瞳はもう乾ききっていた。

「あなたはわたしが、嫌いなんだと思っていました」

「俺は、俺が嫌いなんだ」

唸るような声で本心を告げ、彼は手ぬぐいを押さえておくように
促して立ち上がった。

少女が脱いだ服を確認する。もどがつくりの粗末なものだったと
はいえ、あちこちが裂けてこれ以上はとも使えそうになかった。
それを見ているうちにまた怒りがぶり返してくる。あの男、腕の一
本ぐらい折っておけばよかったかもしれない。

サリュはじつと彼を見つめていた。

意識してそれに気づかない振りをしていて、やがて耐え切れなくなつてリトは口を開いた。

「すまなかつた」

サリュが眉を寄せたのが気配でわかつた。

少女のほうを見ずに続ける。

「なにをしようと思つたの？　俺なのに、邪魔をした。すまない」

リトの言葉を聞いて、サリュは心の底から不思議そうな顔になつた。

「わたしは、あなたのものじゃないのですか？」

なんのことだ。

思つてからリトは売春宿で自分が言つた言葉を思い出した。首を振る。

「そうじゃない。君は自由だ」

人は自分自身のものであるべきだ。例えその立場が貴族でも、奴隷でも。

「自由」

「ああ。だから好きにすればいいんだ。俺は止めない。そんな権利はない」

そう、止める権利なんかなかつたのに、いつたい俺はなにをしてるんだ。

これからどうするといふのか。少女に身体を売らなくても生きていく術を教えるとも？　読み書きからものの数え方まで？　いつたいどんな偽善だ、それは。

クリスが変わることを言うからだ、という思考が脳裏をよぎる直前に、彼はそれを押さえ込んだ。この上、自分が起こした行動を他人のせいにするような愚劣さだけは受け入れるわけにはいかなかつた。

全て自分の意思であり選択なら、せめてそのぐらいは責任を取れ

「わたしの、自由にですか？」

いつのまにかサリュウがベッドから立ち上がっていた。ベッドに腰掛けているリトの目の前まで来て、訊ねる。彼は頷いた。

「ああ」

「それなら」

静かな瞳で、真っ直ぐに彼を見て、彼女は言った。

「わたしは、あなたに食べられたいです」

真摯な表情は、冗談を言っているようには聞こえなかった。突然の言葉に笑おうとして失敗して、リトは唇を歪めて聞き返した。

「なに？」

「わたしの意志です」

聞いたことのある台詞だった。

死の砂に覆われた集落に泊まった夜、サリュウが言った言葉だ。あの時の彼女はサジハリという老人に吹き込まれていただけだった。だから、言葉はともかく彼女の身体は震えていた。

いま、彼の目の前にいる少女はあの時と同じように裸で、身体も震えてはいなかった。

「意味がわからない」

「どうか、わたしを食べてください」

リトは苛立った。さっきから目の前の相手は何を言っているんだ。食べるだど？ 焼いて食えとでもいうのか。そんな趣味はなかった。自分は小悪党かもしれないが、人肉を喰らうような趣味までは持ち合わせていない。

いや、本当はそれが比喩表現だということにはわかっていた。ただ、

それで何を例えようとしているのかが、彼にはちっともわからなかった。一つだけわかるのは、彼女が決して自分を売ろうとしているわけではないらしいことだけだった。

こいつは、なんだ？

「あの夜、思ったんです」

不意に少女の手が伸びて、リトの手を掴んだ。そのまま自身の胸に近づけて、僅かな脹らみに触れさせる。

温かい体温を感じる。穏やかな心臓の鼓動が響いた。そこにあるのは生命だった。

ぞっと背筋が粟立つ。それを見透かしたかのように、
「あなたはなにが怖いのですか？」

少女が囁いた。

その時、リトを支配していたのは確かに恐怖だった。他者。それによって映し出される自己。共通する命という存在。生という概念。その何が彼を恐れに駆り立てるのか、彼自身にもわからなかった。ただ怖いのだった。怖くて怖くてたまらないのだった。

だからこそ彼は昂ぶっていた。それは恐怖とは全く違い、少ししか異ならなかった。

彼の中にある深淵から、黒い衝動が突きあがってくる。少女の右手に覆われたリトの右手に力がこもり、未発達な胸が乱暴に歪められた。僅かに顔をしかめ、しかしサリュはその行為を拒絶しなかった。その手を包み込む。

深く暗いものを瞳の奥に宿して、彼は言った。

「お前は、誰かに食われてもいいのか」

少女は頷いた。

「はい」

その返事が彼の耳に届いて、そして少女は身体ごと強引に引き寄せられた。

彼は混乱していた。

錯乱といっても良かった。思考はまとまらず、自身の行動と結果に因果を見つけられない。何を考え、何を求めているのかすら遠く意識の外でしかなかった。

唯一つ、これが決して高尚な何かなどではないということだけは彼にはわかっていった。

例えば貴族令嬢達が、流行の物語を読んで甘ったるく想像するよ
うな、そのようなものでは決してなかった。そんな理想概念でしか
ない代物が自分の中にあるとは彼には思えなかった。思えない以上、
それは彼の中にはなかった。

これはそんなものではない。もっと違う何かだ。

では何だ。わからない。もしかすると、そういつた曖昧な何かこ
そを、人はある概念で表現するのかもしれないが、しかし彼は
それを認めなかった。自己を正当化するような逃避などまったく認
められるはずがなかった。

だから彼は、これをただの食事だと結論づけた。

俺は食っているのだ。

血と肉をではない。一個の人間としての尊厳や自由、決して侵す
べきでないそれらを食い尽くしているのだ。生きる為に。自らの為
に。

なんとという傲慢。なんとという罪か。そう思いながら行為を止める
ことができない、それこそがまさに罪であった。

やがて、泥のように意識を侵食していく闇が訪れる中で、彼は願

った。
他の誰でもない、自分が殺されることを願った。

目覚めは窮屈な呼吸とともに訪れた。

窒息しそうな息苦しさに目を見開く。自分が息を吸っているのか吐いているのかもわからず、混乱がさらなる危機を招いた。ようやくのところでか細い呼吸を整えると、リトは左側に自分以外の重みを感じて視線を送った。

穏やかな表情で眠る少女の姿がそこにあつた。

それで昨夜のことが一気に思い出されて、彼は目を閉じてうめき声を上げた。

今までの人生の中でも飛び抜けて大きな自己嫌悪に襲われた。目眩がする。目を閉じてまぶたの裏で世界が歪んで崩れ、リトは大きく息を吐き出した。

最悪だ。考えるまでもなく最悪だ。偽善の方がまだましだ。

その場に丈夫な紐があればすぐにでも首を絞めたくなるような気持ちで彼は天井を見上げて、それから改めて自分の胸元で眠る少女に目を移した。彼の胸を枕にする少女の寝顔はただ健やかで、しかしそれが唯一の幸いだと考えるような思考は彼にはなかった。

他者の受容によって許される行為などない。つまり彼は自分自身をとても許せそうになかった。あの集落で出会ったサジハリの得意げな顔が浮かんで、振り払う。

ふと、寝台の向こうからの視線を感じて顔を向けると、横椅子の上からクアルが物言いたげな表情で彼のことを見ていた。

「……なんだよ」

不満そうに一鳴きしてそっぽを向かれる。

サリュはこの猛獣を人を襲わないように育てると言っていたが、

彼女は無事でも自分は食い殺されることになるかもしれない。

どうでもいいことに思考を漂わせながら、リトは少女が起きるのを待った。

やがてサリュが目を覚ますと、少しだけ恥ずかしそうにする彼女に仏頂面で接して、まずはすっかり常温になった風呂で順番に汚れを落とした。

衣服のない彼女に手持ちの中から適当なものを渡して、クアルを連れて食堂に降りる。宿屋の主人はひどく嬉しそうに笑って、それからサリュの頬の怪我を心配した。

サリュは小さく首を振って大丈夫だと答えた。その姿に何を感じたのか、

「今朝の食事は奮発させてもらいますよ」

厚い胸板を叩いてそんなことを言いだした主人に、能天気な性格だなと皮肉っぽい感想を抱いて、リトはすぐにそれを自省した。能天気だろうがなんだろうが、自分よりは何十倍もましだと思えたのだ。

どうやら、しばらく自虐的な思考に困ることだけはなさそうだった。

大人でも食べきれないほどの量の食事を用意され、サリュは目を白黒させながら朝食を済ませた。クアルは思う存分にミルクを舐めた後、途中からさつさと床に丸まって眠っている。

「しかし、その格好は少しいけません」

ほとんど自分の娘のような感覚になっているのか、客足が一段落してから近づいてきた主人が言った。

確かにそのとおりだった。もともと小柄なことに加えて細い体つきもあって、背の低くないリトの服ではさすがに無理がありすぎる。袖や裾はともかく、胸元から肌がはだけているのはあまり好ましくなかった。

「服を買うような店をどこか知らないか？」

主人は、近くにある服飾屋と、自分の名前を出したら少しはサービスしてくれるだろうことまで教えてくれてから食堂に戻っていった。能天気というより、単純に人が良いだけの性格らしい。

心配そうにサリュウが見上げているのに気づいて、彼は訊いた。

「どうした」

「お金……」

リトは肩をすくめた。

「別に金欠つてわけじゃない」

強がったわけではなかった。一般的な旅人は当然のことだが定職を持たず、基本的にその日暮らしの生活をしている。リトとてそれは同じであるが、しかし彼には他と違う点が二つあった。国の最高学府で教育を受けてきたという事実と、そこで得た人脈である。

辺境では作物の育て方や灌漑手法を教えて謝礼をもらうこともあるし、代書書きなどで賃金を得ることもできる。死の砂に魅入られた集落を救うようなことは出来ないが、学のある旅人という特性は食いはぐれない程度には活用できた。加えて、昔からの付き合いが続いている友人が地方の街にすることがあり、そこでやっかいになることもある。

その辺りでは、人を襲い、しのぎを削つても生きなければならぬ旅人と彼は意味合いが異なっていた。言うなれば、彼の立場は道楽者であるからだった。

もちろん、無駄をすればその限りではない。部屋に戻るとリトは手早く荷物を片付けた。昨日の礼もある為、クリスに会うまではこの街にいるつもりだったが、今いるような高い部屋の代金を払ってはいはすぐに財布が空になるのは目に見えている。

宿ごと変えても良かったのだが、せつかく主人が良くしてくれて

いることもあるので、部屋の質だけを一番安いものに変えてもらうことにした。

「荷物はこちらで運んでおきます。どうぞいつてらっしゃい」

主人の好意に甘えて、ついでにリトは起きようとしないうアルも彼に任せることにした。

顔をややひきつらせ、しかしサリュの前では笑顔を崩そうとしない主人に、リトは尊敬に近い感情さえ覚え始めていた。

『冬の道』には朝早くから大勢の人が溢れていた。

宿屋の主人に教えてもらった服飾屋は南のメインストリートの外れにあり、そこに向かう途中、サリュは昨日と変わらない興味深そうな視線を周囲に投げかけていた。

はぐれないように彼女の手をとろうとしたリトの動きが止まり、元の位置に戻る。すると少女の方からその手をとってきて、彼はぎよっとして少女を見た。

控えめな表情の中に不安を混ぜて見上げるサリュの顔がある。手を離れたくなる衝動をかるうじて抑え、彼は洗面になって耐えた。

小さく温かな生命の感触は、そのまま昨夜のことを生々しく思い出させる。それがなによりの苦痛だった。鬱々としたものを振り払えずにしながら、リトは歩みを進めていた。

ふと、サリュが一所から目を離さずにいるのに気づいて、彼は足を止めた。慌てて視線を戻す少女を連れて、そちらに向かう。

そこは飾り道具を専門に扱っている露店商だった。色鮮やかな石をあしらっただけのものから細工に日々凝ったものまで、大小様々な飾りものが並んでいる。眩しそうにそれらを眺めている少女を見て、リトは素っ気無さを装った口調で言った。

「どれがいいんだ？」

昨夜の行為への負い目が言わせた台詞だった。小心者の考えそんなことである。サリュは瞳をまばたかせ、しばし考えるようにしてから結局首を振った。頭にあるものにそつと触れると、

「これで。十分です」

言った。

店に並んでいる品物とは比較するのもおこがましい、その白い偽花のどこをそんなに気に入っただのか、彼にはわからない。

彼には少女が理解不能だった。

服飾屋では、恰幅のいい女店主が彼らの対応をした。仕立てが良く、丈夫で長持ちするものを。彼女は彼の要求に過不足なく応え、すぐに何着かの衣類が並べられた。

会計の際にリトが段階で宿屋の主人の名を出すと、店主は心得た顔で値引きをしてくれた。それでも彼が思っていたより総額の値段はいくらか高かったが、今日の前で起きていることがまるで信じられない夢のように、目を白黒させているサリュの様子を見れば何も言えたものではなかった。

さつそく新しい服に身を包み、淡々とした仕草の中ににじみ出るように嬉しさを隠し切れない様子でいる少女を連れて、リトはクリスの家に向かった。

高級貴族の邸宅が並ぶ街の中央部では、サリュよりむしろ彼の服装の方が場違いだったが、周囲の視線を気にせずに向かった先でリトは主人の不在を告げられただけで終わった。明日は在宅予定と聞き、訪問を改める旨を伝言に頼んで宿に帰る途中、広場に人だかりができてるのが目に入った。

判決。有罪。魔女。火炙り。物騒な単語を聞きとがめて立ち止まると、隣にいるサリュが彼の手を握る力を強めた。

サリュの二重に描かれた不可思議な瞳と、その名前が意味するもの。彼女が故郷の集落でどのように扱われていたかを思い出して、リトはサリュの手を引くと足早にそこから去った。

宿屋に帰る前、彼はサリュが目深に被ることのできる外套を新たに買い与えた。

その日の夕食も豪勢だった。

彼らを出迎えた宿屋の主人には誰の仕業か一目で分かる引っかけ傷が生々しく残っていて、リトは迷惑料を払うつもりだったのだが、主人は新しい服を着て嬉しそうにしているサリュを見ただけで十分らしい。無言の笑顔で突き返されてしまった。

食事を終え、部屋に戻りながら、リトは胸の裡に湧き上がるものに気づいていた。それが何であるか考えるまでもなかったが、それでも彼は意識してそのことを考えないようにして、サリュを風呂に入らせた。

そして、程なく浴場から出てきた彼女に先に寝ているように告げると、自分はいつもより長く湯に浸かった。

風呂から出てきた時、部屋の中は蝋燭が消えていて、既に暗闇に沈んでいた。安堵の息をついてベッドへ向かう。その端に、丸まるように寝ている少女の膨らみが見えた。

そうではなかった。サリュは眠ってはいなかった。

リトがベッドに近づくと、彼女はゆっくりと起き上がった。音もなく床に降り立った、そこには肌着が身につけられていない。

月夜に照らされて、銀色の髪とそこに挿された白い花、二重に円を描く銀色の瞳が光っている。思わず声を失う彼を見上げて、彼女は言った。

「どうぞ、食べてください」

ぞっとする言葉だった。事実、リトは恐れを抱いていた。昨晚の行為そのものや、そのことを思い出しているの恐怖ではない。

目の前の少女そのものに、恐れを抱いた。

彼は拒絶するべきだった。しかし、それは今この時ではなく、昨晚の話であった。一度口にした以上、否定には意味がなかった。どこかで聞いた笑い話を思い出す。

知ってるか。不作続きで食べ物が増えてなくて、近くに鶏がいたっていうのに、ついに餓死してしまった間抜けな男がいるらしい。いったいどうして、男はその鶏を食べなかったんだと思う？

そりゃ、そいつが人生で一度も鶏を食べたことがなかったからだろうさ。

彼は、彼女を食べた。

なんだこれは。

行為の中、何十度目かに至るその問いを、リトは自身へと投げかけていた。これはいったいなんだというのだ。

「お前はなにがしたいんだ」

「あなたに食べてもらいたいのです」

意味が分からない。わけがわからない。

「死にたいのか」

「生きたいです」

「なら、俺を殺せ」

「あなたが食べてくれたら。そうします」

その時、彼女の小さな顔を至近距離にして、彼は彼の人生で初めての思考に奪われた。

食っているのか。それとも食わされているのか。

あるいは、実は俺のほうこそが食われているのか。

自分の行動が果たして自分の意思のものなのか。人生の中で一度たりとも崩したことのなかったその不文律を、彼は始めて飛び越えた。そして絶望的に思う。

もしかすると自分は魅入られてしまっているのではないのか。

銀色の瞳の中で二重に描かれた円。昼間、聞いた言葉を思い出す。集落で聞いた話。呪われた子供。呪われた名前。死を呼ぶもの。

サリュ。

少女は微笑んだ。

昨日の笑みそのままに。

人を越えた妖艶さがそこにはあった。

翌日、朝食をとってから改めてクリスの邸宅に向かった二人を、ゆったりしたシルクのコットに身を包んだ主人が出迎えた。

中庭のサロンで読書に耽っていた彼女は、二人が現れるとかけていた眼鏡をとり、薄く微笑んでみせる。細作りの装身具に目を向け

て、リトは訊ねた。

「目を悪くしたのか？」

「少し前にな。生活に不便はないが、物を読むときには少し困る」

この時代、眼鏡をかけられるのは一部の特権階級で、その多くが男性である。不恰な姿を見られたことを恥ずかしかるるように肩をすくめ、クリスは二人に席をすすめた。使用人を呼び、新しい葉茶と果汁水を用意させる。昨日買ったばかりの服を着たサリュが胸に抱えているクアルには、冷たくないミルクを出すようにも言いつけていた。

「買ってもらったのか？」

サリュの真新しい服を見てクリスが訊ね、嬉しそうにサリュは頷いた。リトに視線を移す、クリスの表情に意地悪そうな光が瞬いた。

「珍しいな」

「必要だったから買ったただけだ」

仏頂面で答えるリトだったが、その品が「必要」以上のものであることは誰の目にも明らかだった。

「大学にいた頃はあれほど異性へ物を贈ることを毛嫌いしていたお前がな」

「不要だと思つてたからな」

彼は吝嗇ではなかったが、必要でもない高級品をねだることも、それをただ買い与えるだけの行為も軽蔑していた。

「確かに浪費は好ましくない。お前が必要と感じたというだけで私には面白くあるが」

からかい、渋面になった友人の表情を察して、クリスはそれ以上の追求を控えた。

「昨日はすまなかつたな。公務で一日留守にしていた」

「いや、こつちこそ急に悪い。街を出る前に挨拶だけはしておきた

「いと思ったんだ」

クリスの眉がぴくりと動いた。

「出るのか」

「ああ」

手に持っていた陶磁のカップを下ろして、彼女は息をついた。

「そうか……。せっかくの再会だ。引き止めたくはあるが、そういうわけにもいかないか」

「この街での生活は高くつくしな」

「じゃれつこうとしているクアルを押さえるのに懸命なサリュの、むしろひっかかれて早くも傷みだしていそうな服のほうを見ながら、リトは言う。

「滞在費ぐらいなら都合するが……まあいい。話もある」

彼女が口を閉じたのを見計らって、使用人が飲み物を運んできた。リトの前に葉茶、サリュには葡萄の果汁水。テーブルの下にはミルクが置かれる。

ミルクの入った平皿に飛び掛かるクアルにほっと息をついたサリュに微笑んで、クリスはテーブルに置かれてある菓子皿を少女の目の前に置いた。

「よかつたら食べてくれ。私には少し甘すぎる」

銀の輪の瞳を伏せる。

「……ありがとう」

礼を言う少女に柔和な表情を浮かべるクリスを見て、仕返しの意味も込めてリトは言った。

「確か、そっちこそ子供嫌いなはずじゃなかったか」

「子供だったからな。大人になれば変わる」

それなら自分はまだ子供というわけか。皮肉な感想を抱いた彼に、クリスは至極当然とばかりに頷いた。

「そういうことだ」

これにはさすがにリトも渋面になって、首を振った。

「心を読まれるのは気分がいいものじゃないな」

それを聞いたサリュが驚いたように顔を上げた。まじまじとクリスを見て、恐れを含んだ声音で言う。

「魔法使い？」

クリスは笑った。

「そうではないよ。付き合いが長いからな。サリュもすぐにこれぐらいわかるようになる」

本当かと真摯な瞳で彼を見る少女に、なんと答えることもできずにただ視線を返したリトは、場を保たす為にカップを持ち上げた。品のいい香りが鼻をくすぐる。しばらく飲んだことがないような高級な茶の葉だった。飲んでみると、刺激がなく舌に心地いい。

「それで、話というのは？」

「ああ。まず、これはアルスタ家の名代としてだが」

一旦、葉茶を口に運んでから、クリスは言った。

「まだ家に戻るつもりはないのか？」

彼女の真意を確かめるように、リトは傾けたカップの向こうで視線を細めた。

「今でも何かと懇意にして頂いているからな。あちらに戻れば、お前の父君とお会いすることもある。いまだに嘆いておられるぞ、帰ってきて欲しいとな」

そこで肩をすくめた。

「安心しろ。連絡はいれていない」

リトはカップを置いた。告げる。

「帰るつもりはないよ」

彼が五年前に家を出たのにはもちろん彼なりの理由があり、一度そう決心した以上、考えを変えるつもりはなかった。彼の頑迷さを知るクリスも、ただ苦笑いするだけである。

「だろうとは思ったが。しかし、これだけは覚えておけ。父君は健在だが、最近は病気を召しがちとも聞く。お前の兄君は慈君だが生来お身体が弱い。お前の家が乱れば、国が迷う」

言葉に抜き身の剣のような冷たさが含まれた。射るような友人の瞳に対して、

「俺のような人間がいたほうが乱れるさ」

リトはそう答えるだけでその舌鋒を交わした。

甲高い音が鳴り、「クアル！」という制止の声が響いた。ミルクを飲み干したクアルが中庭に駆け出して、それを追いかけようとしたサリュが彼を振り返る。

「転ばないようにな」

少女は頷いて、やんちゃな砂虎を捕まえに走っていった。

明るい質のいやらしさを笑い声に交せて、クリスが茶化す。

「なかなかの保護者振りじゃないか」

「そんなんじゃないさ」

保護者なら、少なくともまともな保護者なら、あんなことはしない。

「さっきの話だがな。いまさら議論を蒸し返そうとも思わん。昔さんざんやったことだからな。納得もしている。そうするしかない我が身が齒痒くはあるが。結局はお前の意思次第だということも承知している。だからこそだ」

クリスは彼の顔を見ないようにして、言った。

「私にお前を怨ませるなよ」

リトは返事をしなかった。

「……家の話は終わりにしよう」

視線を戻し、表情を和らげて、クリスは中庭の向こうで駆け回っている一人と一匹の姿を視界に入れた。

「それで、あの子はどうするつもりだ？ この間は確か、街に連れてくるだけと言っていただろう」

「連れて行く」

リトは答えた。

いまだに迷いが無いわけではないが、かといってそうするしかないというのが結論だった。それが消極的な答えであることが、彼にしてみれば珍しい。

「あいつの勝手を止めた責任があるからな」

「言っただろう。意志だろうがなんだろうが、あのような処に落ちるのを見過ごしていたなら、私が許さん」

不快に眉をしかめる、その感性が騎士としてのものが、それとも女性としての情によるものか判別しづらかった。恐らく両者だろう。「どこか働き手を見つけてやろうかとも思ったんだが　そういうわけにもいかないようだ」

その言葉を聞いたクリスの顔に翳りが差したのを、リトは見逃さなかった。それをあえて指摘せず、彼女から口を開くのを待つ。

「話というのは、実はそのことだ」

頷いて、クリスは言った。

「出るつもりなら、むしろ早いうちのほうがいい。そうお前に言うと思うっていた」

街がぶっそうなことになるかもしれない。清廉な女当主の表情は暗かった。

「昨日、公務だったことはさっき言ったな。そのことなんだが」
珍しく迷うような仕草を見せるクリスの言葉を、彼が補った。

「魔女裁判か」

「……知っていたか」

「昨日、広場で大声で叫ばれていた。有罪だったそうだな」
「ああ。例によってな」

唇の端を歪めて、彼女は苛立たしそうにテーブルの上で指を躍らせた。

魔法使いの存在は広く信じられている。そして、魔法使いがいるのならその中に好い者と悪い者がいると考えるのが、人間という生き物だった。その悪い魔法使いの別名が、魔女。明らかな女性蔑視の風潮が透けて見える、時代を端的に現した単語と言えた。

何か悪い出来事があれば魔女のせいだとして、集団から見つけ、そこから追い出し、時に殺害することで不吉を取り除こうとする習慣。被害にあうのはあくまで「魔女とされた」人々でしかないのだが、常に大勢の前に少数は力を持たないのだった。

「しかし、いまさら魔女狩りとは」

皮肉な想いだった。この国ではさほど遠くない昔、国中でその魔女狩りが横行した時代がある。燎原の火として燃え上がったその風潮は、最終的には勅令が下りたことでやがてその終焉を迎えたが、辺境の地でならともかく、トマスのような大都市でその名残を見ることになるとは思わなかった。

「何があった？」

苦虫を噛み潰したような表情で、クリスは説明した。

事の始まりは公爵家に一人の高名な魔法使いが招かれたことだった。齢不明な老女はいくつかの秘蹟を見せ、さらにはトマスを襲った災害を予見してみせたことで公爵の信任を得ることになる。その老女が最近発した言葉が「この街に魔女がある。その者を捕まえねば街が滅びる」であったという。

リトは呆れた。今時流行の物語でも、もう少しましな文言を使っているだろう。

「公爵はそれを信じているのか？」

「というより、公爵夫人がな。大層可愛がっておられたご令嬢を流
行病で亡くされて以来、そういったものに傾倒されている」

公爵もいい顔はしていないものの、妻の悲しみが晴れることを期
待して、口出しすることもないらしい。家が乱れれば国が迷う。彼
女の言葉通りの事態というわけだった。

リトは言葉を吐き捨てた。

「馬鹿馬鹿しい」

「お前にはそうだろう。私だってそうだとも。くだらん。ただ一言
だ。だが、先週捕まった占い師は質の悪い奴でな、人を呪い殺すよ
うなことまで喧伝していた。しかも有力貴族にも人脈があつて今ま
ではなかなか裁けなかったから、つい静観してしまつたんだが」
ため息をつく。

「その占い師が捕まつて、魔法使いが昨日、この者以外にも魔女が
存在するなどと言い出した」

「……なるほど」

ありそうな話ではある。

「私の失態だ、不法で不法を正そうとしたのが間違いだつた。一度
目を許してしまったのがいけなかった。二度目はもつと軽い。三度
目もあるだろう。罪なき人が投獄されるのは時間の問題だ」

まさに魔女狩りというわけだ。その惨劇が大陸でも最大の都市で
これから起こるかもしれないという。リトは不愉快になつて葉茶を
飲み干した。

「そこまでわかつていて、打つ手はないのか？」

クリスは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「向こうとトマスの関係については説明は不要だろう」

向こうというのはもちろん、ヴァルガードのことだろう。リトは
頷いた。

「今の私は緩衝材だ。だからここにいて。下手に動けば均衡が崩れかねん」

「中立か？」

「政治は好きではない」

まぎれもない帝国の上層にあつて、そうあっさりと言つてのけるからこそクリステイナ・アルスタであつた。愚直。あるいはもつと卑下する言葉ならあるだろうが、リトには彼女のその生き方が羨ましかつた。王道は、彼の行く道ではない。彼は逃亡者だつた。

「流れなき沈殿は水を汚すが、かといつて掻き混ぜる事がいつも最善とは限らん。この街はまだそこまで腐つていないと思いたい」

「帝国二大都市の行く末を担う女騎士、か。大した立場じゃないか」「皮肉か？」

クリスはびくりとも笑わなかつた。リトは謝罪の意味で手を上げて、ため息を吐いた。

「なら、確かに早くここを出たほうがいいな。あいつの風貌は」「ああ。妙な疑いを持つ人間が出てきてもおかしくないだろう」

瞳の中で二重に円を描いた目。魔女狩りで被告の身体的特徴が訴えられることは多い。より正確には、訴えたい人間の身体的特徴こそを挙げへつらうのだが、サリュの外見は十分すぎる嫌疑となるだろう。

ふと、リトはこの街に入ってから出会つた人々について思い出していた。彼らの中でサリュの瞳に気づいた人間がいないはずがない。何を言っている。彼は晒つた。彼らより先に、そんなことの前にまず疑うべき人間がいるじゃないか。昨日の夜、お前は何を考えた。クリスから話を聞いて、一瞬だけ彼は思ったのである。もしかすると、だからこそなのではないか、と。

サリュが魔女だから、自分はあることをしてしまうのではないか。

全くもって馬鹿馬鹿しい話だった。愚かしさの極致と言える。自分分は己のやった行為を、他者の所為にしようとしている。度し難い。お前のような人間こそ魔女ではないか。そう思った。

「私の屋敷ならかくまうことも出来るが、それでは外を出歩けなくなってしまう恐れもあるからな」

それに、魔女狩りがいつ収まるかもわからない。この街に長く留まるつもりはなかった。リトは頷いた。

「今日中に出ることにしよう。クリス、世話になった」

テーブルから立ち上がり、大声で呼ぶ。

「サリュ！」

芝の上に転がっていた一人と一匹がすぐにやってくる。服はぐしやぐしやだったが、彼は叱らなかった。子供はそういうものだと思っている。彼自身はそうではなかったが、だからこそそう思っていた。

「帰ろう」

告げると、サリュは大きく頷いて、それからクリスの前に立った。

「ありがとうございます」

クリスは少女の服装を直し、頭についた葉を取り除くと柔らかく撫でる。ついでに彼女の胸元に収まったクアルの喉をくすぐると、気持ちのよさそうな一声がそれに応えた。

「気をつけてな。よかつたら、また遊びに来て欲しい」

「はい」

その光景は何かを幻視させるものではあったが、彼は目を逸らし、それを無視した。過去から派生したかもしれない現実など、自分には想像する資格もないはずだった。

サロンから出ていくリトの背中に声がかかった。

「ニクラス」

彼が肩越しに振り返った先で、クリスは自身、表現に困ったような顔をしていた。笑っているような、泣いているような、複雑な感情が交ざりあつた表情で、

「探し物は見つかったか？」

その問いかけにリトは答えず、黙って旧友の前から去った。

街はざわめいていた。昨日までとは明らかに空気が違っている。通りを歩く人も、露天や行商の数も目立って少なかった。

これと同じような雰囲気のリトは知っていた。例えば施政者の死、紛争の終わり。あるいは始まり。まだ見えないはずの前兆を、敏感に肌を感じているゆえの小波だった。

大陸一の商業都市をしてこれか。ため息をつきたい気分だった。魔女という悪しき風習が過去のものとなりきっていない、証明のよくなものだ。魔女の証明。魔女ではないという証明。

「悪魔の証明だな」

リトを見上げてサリュが不思議そうに訊いた。

「悪魔？」

彼は少女に一つの問題を出した。手のひらぐらいの大きさの石の真ん中には実は、水が隠されているんだと誰かが言った。さあ、それが本当か嘘かどうやって確かめる？

すぐに少女は答えた。

「実際に割ってみれば、わかります」

「そうだな。それに水が入っていればいい。では一つ割ってみて、それには入ってなかったら」

「……他のも割ってみる」

「そうだ。だが、世界中の石を割って確かめることなどできない。だから『完全なこと』は証明しがたい。そういうのを悪魔の証明という」

世界中の全ての石を割って中に水が入っていないと確認しなければ

ば、「石の真ん中には水が入ってない」ことを証明することはできない。あることの証明は一つでいいが、ないことの証明には全てが必要なのだ。

「神と呼ばれる存在もそうだ。だから神がないこともまた、証明するのは難しい」

少しの間考え込むようにしていた少女が、ぽつりと言った。

「そうでしょうか」

少女から否定的な発言を聞くことは極めて少なかったので、リトは意外に思いながら続きを促した。

「悪魔がいるのなら、神様がいたっておかしくないでしょう?」

それを聞いた彼は笑った。

少女の答えは理屈ではない。屁理屈というのだ。しかし、それがまかり通るのもまた、世の中ではあった。

彼らがその集団と遭遇したのは、宿の入り口のことだった。

前に街で騒ぎがあった時にも見た憲兵隊。違ったのは、今日はそれを引き連れているのが清廉な女騎士ではなく、厳めしい顔をした老齡の魔法使いということである。

忠告は一日遅かったな。リトは思い、外套を目深に被らせた少女の前に進み出た。

「なにか?」

「獣を連れた幼子がいると聞いてやって参った」

顔中の皺そのものが喋った様な印象を与える、嫌な声だった。細く眼光の感じさせない瞳がサリュの胸元のクアルを見て、

「そなたか」

「……確かにこれはわたし達が拾ったものだが、なにか問題でもあるだろうか」

「砂虎を飼うなど普通の人間にできることではない」

断定的な言葉に、しかしリトは反論しなかった。

アルスタ家の名を出すべきか。しかし、本人が現状を間に挟まれて動きづらいついていたのに、なんの断りもなく巻き込んでしまつわけにはいかない。思考を巡らせてから口を開いた。

「もちろんその通り。だから、すぐに殺そうと思つている」

非難の視線が隣から向けられるのを無視して、続ける。

「それで文句はないだろう」

粘つこい笑みが、可笑しそうに肩を震わせた。

「なるほど。確かに連れる猛獣がなければな。よかるう。ならばそれを引き渡すがよい」

「サリュ」

感情のない声で、リトは少女に命じた。

サリュは胸の猛獣を固く抱きしめて、大きく首を振つた。顔をうつむけて、前に出ようとしなない。渡そうとしなない。

妥協点となるべきものを放棄しない、その結果がなんであるか、お前は知っているのか。リトは苛立つて、そして自分で答えを出した。きつとそうなのだろう。少女は承知の上で、獣一匹を渡すのを拒否しているのだ。

少女が動こうとしないうちに、老人が擦り寄つてサリュの外套を持ち上げた。少女の顎を持ち上げて、そこにあるものを確認する。

リトはそれを制止しなかった。

「見よ、なんとも不吉な目をしておる。悪魔の目。こやつこそ魔女じゃー」

周囲からどよめきがあがった。憲兵が近づいてくる。宿屋の中の主人が、二トと視線が合うと気まずそうに目を逸らせたのがわかつた。なるほど。まったく人間だな。彼は口の端を持ち上げた。

「魔女だ、魔女がみつかつたぞっ」

色めき立つ周囲の中でこちらを振り向いたサリュに、リトは無言

のまま侮蔑の視線を向け続けた。

二人は投獄され、すぐにリトだけが牢から出されることになった。かび臭い匂いが鼻につく格子を出て、無言で案内された部屋で彼を待っていたのは、予想していた人物だった。

白金の鎧に身を包んだ固い表情で口を真一文字に結び、クリステイナ・アルスタがそこにはいた。背後には、執事服に身を包んだ前に食堂で会った男だとリトは思い出していた。男が控えている。

「久しぶりだな」

「ああ。天外の再会だ」

挨拶代わりの皮肉を応酬して、彼は腰掛けた。

「状況は？」

「悪い」

きっぱりと、クリスは言った。

「あの子は捕らえられた。三日後には魔女嫌疑の裁判が開かれる。お前は、直接の容疑ではないこともあって、私の方で解放することができたが、彼女は無理だ」

「ありがとう、と言うべきだろうか。言えば彼女は烈火の如く怒るだろう。だからこそその欲求に耐えがたい魅力を感じて、しかし結局リトはそれを実行しなかった。」

「助ける手は？」

「……難しいな」

長いまつげを伏せて、クリスは答えた。

魔女裁判が開かれることは既に街中に知らされている。裁判を知った教会からは検証の為に日程を遅らせるよう要求が来ているが、

恐らくそれは認められない。

「クリス。正教会は、先日の魔女裁判への関与があつたのか」

「いや、していない。今回も中央から異端審問を呼ぶと言っているが、間に合わないだろう」

それに、呼ばれたところで事態は改善せん。憎々しげに呻くクリスの言い分は、実は全く異なる意味でそのとおりだったのだが、思わず笑みが浮かんでくるのを自制して続きを待った。

「わたしもそうは動けん。公爵家への介入行為ととられれば、そのまま政治問題になる。あの子の弁護すらしてやれない」

「俺が弁護に立つことは？」

当然考えたのだろう。クリスは頷いて、言った。

「……可能だろう。しかし、それにはお前が名を明かす必要がある」
素性の知れない人間が弁護台に立つことはできない。当然ではあった。しばらくの黙考を経て、リトは口を開いた。

「あいつに会いたい」

リトがいた部屋と似たような独房に、サリュは入れられていた。

日の光の届かない、暗闇を薄く引き伸ばしたような牢獄の中で、部屋の隅で膝を抱えていた。その隣にはクアルが丸まっていた。

サリュはリトが来たことに気づくと、一度顔を上げて、それからまた元に戻した。

「来い」

リトは命じた。少女はやってきた。牢番に乱雑にでも扱われたのか、右頬に擦過傷ができていたが、彼はそれを見ても表情を動かさなかった。

「状況は理解しているな？」

サリュは頷いた。そうか、と彼は言った。

「裁判は三日後らしい。ろくな弁護もつかないだろう。十中八九、有罪になる。当然死刑だ。恐らく火炙りだな。もちろんお前の猫も

一緒に。なにか言いたいことはあるか？」

隣のクリスから非難めいた視線が注がれるのを無視して、彼は返事を待った。

少女は首を振った。

「そうか。こつちにはいくつか聞きたいことがある。あの時、なぜそれを渡さなかった」

沈黙が落ち、牢を打つ水滴の音が聞こえた。

「……怒っているのですか。あの子を渡さずに、捕まったから？」

「そうじゃない」

リトは否定した。それは感情の否定ではなかった。

「渡したところで、奴等に初めからあたりがあったのなら難癖をつけられていた可能性はある。それが魔女狩りだからな。俺が聞いているのはなぜ渡さなかったのかだ」

あの時点では砂虎の子供を渡すことで見過ごされる可能性ももちろん存在した。それをしなかった理由を、少女は「あなたが見捨てなかったから」と言った。

「……なに？」

「あなたはわたしを見捨てませんでした。だから、」

わたしもあの子を見捨てない。同じようなやりとりを前に宿の部屋でもしたことを思い出した。リトは何も言わず、ため息だけで済ませた。

「お前はそのまま死んで悔いがないのか」

「……ないわけじゃ、ありません」

けど、と少女は続けた。

「あなたに、毒を食べさせてしまうわけにはいきません」

それを聞いて、自分はいま笑うべきなのかとリトは思った。これ

は目の前の少女の冗談なのだろうか。

「そうか」

もう一度、そうか、と呟いて、彼は表情を歪めた。

「なら勝手にしろ」

背中を向けてそのまま出口へと向かう。

「あ、 まって」

後ろから聞こえる少女の声には振り向かず、足も止めず、部屋から出た。

少女の姿と声が重い木枠の扉で閉ざされて、牢番達の元から十分に距離を置いたところで、クリスが低い声で問いただしてきた。

「今の言葉。本気か？」

「もちろんだ」

あつさりとリトは答えた。声も態度も本心も、何一つ隠すものはなかった。

クリスが足を止めた。怒気を孕んだ声で、前を行く男の背中を睨みあげる。

「私は。お前が名を名乗ってくれるものと、そう思っていた」

腹を立てているのは彼も同じだった。しかし彼は少しもそのそぶりを見せなかった。

「期待するのは勝手だ。必ずしも結果が伴わないだけで」

怒りに目を見開いた彼女は、しかし剣を抜くには騎士に忠実でありすぎて、拳を振るうには年を取りすぎていた。ただ、女としてのものが溢れようとしていた。

「俺の荷は？」

それをごく自然な表情で受け流して、訊ねる。

「……こちらで用意してある」

「そうか。世話になったな」

有り余る感情を抑えるために身じろぎさえできずにいる友人に背

を向けた。その背中に、

「あの子は私があるとかしてみせよう」

気安く彼は応えた。

「信じるよ」

一瞬の沈黙の後、廊下にあざけ笑う声が響いた。

「信じる？ お前は何も信じてなどないだろう。私も、自分自身さ

えな」

友人の言葉は正しく、ゆえに彼には何も言うことはなかった。

外に出て荷を受け取り、久々に再会したコブつき馬にそれらをくくつてみると、後ろから男がやってきた。執事服を着た男だった。

「クリスマス様より、街の外までご案内するよう申しつかっております」
無言で、彼は手綱を執事服の男に手渡した。

街では新しい魔女が捕まったという噂が流れていた。『冬の道』
を出口へと向かいながら、リトはそこを歩く自分に違和感があることに気づいた。

「ニクラス様のお話は、昔からよくお嬢様よりお聞きしておりました」

男の声で、ああ、と理解する。自分はその少女の姿が隣にいないことにそれを感じていたのだ。たった一週間の旅の同行でそんなことを。笑いたくなる。代わりに男に答えた。

「アルスタ家の執事は聞いてもない口を開くのか」

「申し訳ありません。しかし、帝都では一度もお会いする機会がありませんでしたので」

慇懃無礼な態度に、隠す気もなさそうな彼への悪意が潜んでいた。ため息をつくのも煩わしく思い、リトは彼を無視することに決めた。「よく仰られておりました。変な男と会ったと。変人で、頭が良くて、勇気がある。それがなんと私の将来の旦那様だったのだと、きらきらと目を輝かされておりました。私どもは、かくもお嬢様の心

を捉えたお方に対して嫉妬心まで覚えながら、一体どのような方なのかお会いできることを楽しみにしていたものです」

「失望させて悪かったかな」

あっさり前言を撤回して、彼は言った。

「そのようなことはございません」

見事なまでに感情を裏切った、凹凸のない口調。
「なるほど」

そう答える以外にない言葉だった。変哲も諧謔もない。頷いて、リトは今まさに通り過ぎようとしている店内に視線を送った。つい先日訪れたばかりの見覚えのある店の中では、やはり見覚えのある女主人が誰かを相手に品物の売り込みに励んでいる。その顔がふとこちらを見て、表情が強張るのを見ながら口に出した。

「それで。腹いせでも？」

「とんでもありません。私どもはお嬢様が望まれないことは致しません」

彼の中に、宿屋の主人や服飾屋の女主人への感情は特になかった。彼らのどちらか、あるいは両方が通報者であるか否か興味もない。強い情がある者こそ、憎しみで人を殺すだろう。好意の逆にあるのは憎悪だが、真の意味で対極にあるものは無関心なのだ。彼らはそうではなかった。それだけだ。

しかし、今の発言は聞き捨てならなかった。

「つまり、あいつが望むことなら何でもするという事だ」

皮肉げに笑って、リトは吐き捨てた。挑発するように執事を見る。馬鹿にしたわけではなかった。むしろ羨ましく思ったのだ。他人の為に何かするという事が、彼にはなかったからだった。

サリュは闇の中にいた。

牢獄には彼女と彼女の小さな猫以外に誰もいない。でも孤独ではなかった。

日に一度の食事は酷いものだった。しかしそれより酷いものを食べていたことはあった。

あと数日で自分は殺される。だが、そもそも今までまともに生きてきていなかった。

だから怖くはなかった。

ただ後悔だけがあった。

彼に最後の言葉を伝えられなかったのが心残りだった。

なんとかしてそれだけは伝えようとして、できれば自分から良かったけど、それが無理ならあの女性へ伝言だけでも頼もうとして、しかし彼女が来た時、もうあの人が街から去ったことを少女は聞いた。

それから彼女はずっと闇の中にいた。

唯一の温かさは震えながら寄り添ってくるクアルの柔らかな毛皮と体温だけで、少なくともそのおかげで凍死することだけはなかった。

彼女はその温かさを捨てることができなかった。例えばそれで自分が捨てられることになっても。

そうじゃない。少女は思った。捨てられたわけじゃない。あの人は私を捨てたわけじゃない。自分で選んだ。これはその結果ではない。

夜、すぐ側に彼の体温がないことが物寂しかった。たった数日一緒にいただけなのに。しかし、それを捨てたのは確かに彼女自身に他ならなかった。

裁判の日が近づいていた。

クリステイナ・アルスタは、その三日間を極めて精力的に活動した。

まず彼女は自分の家名と、仕える国家、ひいてはそこに生きる人々を守らねばならなかった。だからこそ何もかもが許されるわけではない。しかし、だからといって無垢な少女をこのまま火に炙らせる事など彼女に許せるはずがなかった。

政治的立場での制限の上で自分に可能なことを思考し、計算して、彼女は動いた。慣れもせず、好きでもない政治という行為は彼女の精神をひどく消耗させたが、文字通り寝る間を惜しんで彼女は策を練った。

裁判に参加する者達への根回しと承諾。貸しと借り。その結果、彼女が手繰り寄せることができたものは少女のちっぽけな命だった。

彼女はそれを誇る気にはなれなかった。少女の命はなんとか助けられるだろうが、罪そのものが消えるわけではない。処刑に代わり、奴隷としての生涯の強制労働が課せられるだけだった。

男の大人でも一年も経たずして死ぬ。女など、それもまだ二十にも満たない少女にそれがどれほど耐えられるだろう。そして、腰が立たなくなつた後の女に待ち受けているのは、奉仕という名の慰みものの道だった。

娼婦のほうはまだましだ。大変彼女らしくない感想を、彼女は吐いて捨てた。

少なくとも、娼館で働く者達には報酬は支払われる。殺されることもない。意もしない子を孕み、それを胎内に宿したまま死に行く無念さもなかった。それは、地獄だ。

彼女は少女を助けたかった。それは生来の人の良さと、世の正義を信じる愚直さと、そして一種の代償行為でもある。彼女は少女に自分自身を投影していた。

宴席の勢いで吐露したように、彼女は大学からの友人に好意を抱いていた。許婚であることがわかる前からそうだった。五年が経ち、再会した時にもその気持ちは薄まっていなかった。そして同時に、自分と彼の間にその可能性がないことを悟っていた。

彼と自分の道は交わらない。生き方も、生きる道も違う。だからこそ 彼女はそう思っていた。

勝手な理屈だと言える。自身そのことは理解していた。

しかし、少女と一緒にいる友人は、五年前とは違った。それは年月の差だけではないはずだと、彼女は決め付けた。

もちろん、ただの勘違いかもしれない。現にあの男は少女を見捨て、街から去っていったのだ。少女に対してなんの伝言も残さなかったと、見送りにつけた使いは言っていた。

だが、生きている限り道はある。再会の可能性は。その時に少女が、自分の分もあの馬鹿を殴ってやればいい。そう思うのだ。

彼女の最後の望みは、遠くヴァルガードへ宛てた手紙だった。下手な密告はヴァルガードとトマスでくすぶる火種に炎を呼び込む結果になるかもしれない。だから彼女は学生の頃からの知人である一人にだけ事の次第を相談し、助力を請うた。その手紙が間に合えば、あるいは

しかし、願いは届かなかった。

裁判の行われる当日。彼女は出廷ぎりぎりまで邸宅でその便りを待っていたが、ついにそれが手元に届くことはなかった。

全ての希望は費えた。それが帝国上流貴族であり、武家の名門であるクリステイナ・アルスタの限界であった。彼女は沈鬱な表情で陪審席に座り、この三日でさらに頬をこけさせた少女が連れてこられるのをただ見守るしかなかった。

他の陪審席には、この数日で彼女が会い、協力をとりつけた人々がある。彼らのおかげで、少女の命だけは救うことが出来る。が。本当に、それでよいのか。彼女は悩んだ。終生の強制労働という生き地獄よりは、苦痛だが一瞬で終わるほうが彼女の為ではないか。その想いに答えが出る前に、

「あの馬鹿」

思わず、言葉が口をついて出ていた。

裁判長から向かって右。中央に立たせられる銀髪の少女とその胸の猛獣の左側に位置する弁護人席に現れた人物を見て、そう呟かずにいられた。なかった。

公式には五年前に出奔したとされる、ニクラス・クライストフ。貴族然とした身なりに自然と他を圧倒してやまない毅とした態度を見せる、帝国宰相次男の姿がそこにはあった。

彼は帝国歴二百十二年に帝都ヴァルガードでその産声をあげた。本名をニクラス・クライストフ。この時、齡二十二歳。帝国の重臣、宰相ナイル・クライストフの実子である。

彼は幼少の頃より非凡な才能を發揮した。それは突き抜けた何かという意味ではない。しかし、全てにおいて通常を逸脱していた。

彼は他の者より少しだけ早く喋り始め、少しだけ多くを知り、少しだけ足が速かった。やがて大学に入るとその興味は智に傾けられたが、方向性は変わらなかった。

正しい例えであるかは不明だが、一種の比喻として、彼は「天才」の才ではなく、「秀才」の才の持ち主だった。ただし、努力の必要がない秀才であった。逆説的には、努力をしないから天才にはなれなかったと言えるかもしれない。世に大功を遂げ、天才と称される人間の中に努力をしなかったものなど存在しない。

なぜ努力をしようとしなかったのか。それには彼の精神内面が大きく関わっている。彼は始めてその自己を認識した当初から、あることを理解していた。つまり、自分が欠陥した人間であると。

彼には生まれたときから根本的な自己愛が欠如していた。だから彼は誰かを信じることなどできなかった。自分を信じることができないう彼にはそれが当然だった。彼は産まれついでに懐疑論者だった。学問に傾斜したのも、その客観性に魅入られてのことだったのかもしれない。

その理由が如何なるものであるか、それは推測の域を出ない。幼少時代に獲得する基本的な関係性。愛情や愛着の欠如は、しかし家庭環境に問題があるわけではなかった。父は厳格だが不条理では

なく、母は優しかったが盲目的ではなかった。兄は彼より病弱だったが、誇り高かった。他の兄弟姉妹も含め、もちろん全てに欠点がないわけではなかったが、帝国でも最上級貴族という区分において、むしろ例外的に良好と表現しうる環境がそこにはあった。

あるいは、だからこそか。なにもなかった事、それこそが彼を育んだのであろうか。しかしそれは笑止な言葉遊びでしかない。彼自身もそれには否定的だった。

自分はただ、生まれついてこうだったただけだ。そう彼は考えていた。無論、誇るのではない。開き直りとも違う。寧ろ蔑視という感情が伴っていたが、淡々とした客観視であった。

次のような推論もまた可能ではある。

彼はあえて努力をしようとせず、天才たろうとしなかった。

己のような存在が壁を突き破った時、そこに何が生じるのか彼は知っていたのかもしれない。だからこそ、彼は自身を無害の立場へと置き続けた。それはまったく周囲の為ではなかった。

彼が十七の時に家を出た、それが全て以上のような思考から成り立っていたわけではない。彼の知的好奇心だけは人並み外れており（考えることに害はない）、彼はある問いを持って外に出たのである。

神は存在するのか。

それはつまり世界とは何かを知ることでもあった。そして恐らくそれは彼自身を知ることにも繋がっていた。彼は自身の存在を認める為の外に出た。

もちろんこれらは推論に過ぎない。事実はともかく、真実がどのようであったか知る術はない。彼自身がそのどちらを重視していたかもまた同様である。もつとも、彼は自分が家を出て、大学を出た

理由を「逃避」の一言で片付けてはいたが。

確かなこととして、彼は異常であった。

彼はこの世界の全てをそうあるままに認められない存在だった。まず何よりも、自分自身のことを。

それではその日、彼がとった行動の意味とは如何なるものであったのか。それこそ真実の領域にしか値しない問題ではある。サリュウという、銀髪と、二重に円を描く灰色の瞳を持っただけの少女。その関係性がどのようなものであったか、どのような想いを持っていたのか。語る意味はない。

だが少なくとも、彼はただ一人の為にその行動を起こした。そこにだけは、疑いの余地はない。

「裁判を始める」

厳かな声はその開幕を宣言した。

時は正午。場所は中央広場から程近い大講堂である。中には多くの貴族と、そしてそれ以上の聴衆で溢れかえっていた。

そこに存在するのは大きな好奇心とほんの少しの同情と哀れみで、その全てが被告である少女に注がれていた。

裁判は、まず参加者の紹介から始められた。裁判長が名乗りを上げ、書記、そして陪審員となる街の名士たちが紹介される。弾劾する審問者にはあの皺に埋もれた魔法使いが立っていた。ヤーガス。老女はそう名乗った。

紹介が弁護側に移り、彼は周囲に軽く一礼をして述べた。

「ニクラス・クライストフです。今回、弁護人を勤めさせていただ

きます」

その名前を聞き、不可解そうに顔をしかめた陪審員席の名士もいた。あまりにも聞き覚えのありすぎる姓と、名前の方にも幾つかの尾ひれつきで噂話の中に聞いた覚えがあるのかもしれない。中には、隣に座るクリスに探るような視線を送ってくる者もいた。

そのどれらにも反応を示さず、彼女は厳しい目つきで弁護席のその男を睨みつけていた。目が合う。自然と逸らされた。

やってくれたな。あの馬鹿。内心で彼女は歓声をあげていたが、喜色を周囲に知らしめるわけにもいかず、知らないものが見れば顔を青ざめかねないほどの厳しい表情を続けるしかなかった。

肩の荷が失せるのを感じて、彼女はあくまで不自然にならないよう自身にこもっていた力を抜いた。息が漏れそうになるのを噛み殺しながら、目を閉じる。

こうなれば、彼女に出来ることなどなかった。安心して任すことができた。長年の友情にも信頼という形を返すことができないその人でなしのことを、彼女はその程度には信用していたのである。

幾つかの視線が注がれるのを感じながら、くだらない、とリトは思っていた。思うが、それを表情に出すことはなかった。そういつた行為を少しでも嗅ぎ付けられてしまっただけではない。

魔女裁判。いや、実はそんなものではすらない。

これはただの茶番だった。

しかし、だからこそ完璧に演じてみせなければ意味がない。彼はせいぜい緩やかな微笑を口元にたたえて、周囲からの注目に応えていた。

最も高い位置から場の全てを見下ろす格好で座る裁判長は、その

空間に流れた奇妙な空気に戸惑っていた。彼はあまりに有名すぎるその姓名から、周囲が連想したような事実を思い浮かべることが出来なかった。ただ、すっかりとした身元の弁護士である旨が事前に伝えられていただけだった。

前にリトの姿を直接目にしたことがあるヤーガスという名の老女は、しかしそのことに気づかなかった。それも無理はない。あの時のリトは布帽子を被って老女には目しか見えていなかったし、なにより服装が違いすぎた。トマスでも一部の人間しか敷居をまたぐことができないような御用達専門の服飾屋のそれは、違いなどわからずとも眩いばかりの差をもって老女の視界に映っている。

サリユは、気づいた。名前を聞いた瞬間、それまで俯けていた顔を弾けるように上げて彼を見た。

その瞳が驚きに目を見張るのを視界の端に、リトは自然な態度でそれを無視した。まるで少女の存在など見えていないかのような態度だった。それで少女は、また顔を俯かせた。

「あー。続ける。最後に被告、サリユ。以上である」とりなすような進行があつて、裁判は開始された。

容疑は魔女であると疑われること。ヤーガスと名乗る老女が高らかにそれを告げた。ただし、本人は高らかなつもりでも実際にはひどくこもった聞き取りづらいものにならなかった。

「この少女は街を滅ぼす魔女である。災いを失くす為には浄化の炎をもってするしかない」

馬鹿馬鹿しい。リトの唇の端が歪みかける。どうやら最大限気をつけなければならぬことは、すっかり素の表情を見せてしまわぬことらしい。

「被告人サリユ。汝は自身が魔女であることを認めるか」

裁判長が問いかけたその瞬間だけは、リトはやや視線に力を込めて少女を見た。自分から魔女であることを認められれば話はややこしくなってしまう。だいたい、そんな相手を救う必要がどこにあるというのか。

「……いいえ」

少女は否定した。ここまでは通例どおりである。魔女の嫌疑をかけられた者は、その全てが泣き叫び、自身の潔白を主張する。その労力の無為を悟り、少女のようにはじめから無気力な者達もいた。この種の裁判において予想される最後は例外なく一つでしかない。舞台に関心を向ける聴衆達は、人間の持つ汚らしい一面をそのまま表しているような楽しい表情でその台本どおりの展開を見守っているのだった。

「では、審問者はなぜこの少女を魔女と弾劾するか。説明を」

「魔女である証拠の一つは、その連れた砂虎の子供でございます」

指を指されたクアルが、ヤーガスに歯を剥いた。

「なんと恐ろしや！ 人をも食い殺す猛獣を人の身で従えることなどできるはずもない。まさに魔性の業でありましょう」

老女の口調はおどろおどろしく、人々の恐怖を煽るには十分な迫力が込められていた。なるほど、と少しリトも感心する。それなりの役者ではあるらしい。広場で口上劇でも開けばそれなりに人を集められそうな気がする。まったく、そうしてくれていればこちらの面倒にもならなかったものを。

虚栄心でも満たされているのか、皺だらけの表情の奥底に至福をかいまみせるその人物を一瞥して、リトは口を開いた。

「意義あり」

あまりに自然な態度に、その場にいた誰もが怪訝な顔になった。

被告人への一方的な弾劾が基本的な流れである魔女裁判において、開幕早々に弁護人の手が挙がることなど本来ありえない。それどころか、裁判中に一言も発しない弁護人がほとんどなのだ。

裁判といっても、あくまで見世物としてのものでしかないからだった。答えは既に決められており、弁護人の存在自体が体裁ではない。

魔女裁判というものは、開かれた時点で既に決着がついているものなのだ。進行も弾劾も、台本どおり。それを見守る聴衆もまた文字通りの観客でしかなく、自分ではない人間の死が決定される瞬間を見ようという下種な野次馬根性があるだけだ。

だからこそ、彼の言葉は今回はそうでないことを強烈に示すために必要な、最初の一言だった。

「審問者は間違っておられる。帝都ヴァルガードが東方、自ら馬に乗り砂漠を駆けたという伝説の王の国では、砂虎が飼育されていたことが史書にて確認されています。飼育は難しいが決して不可能ではありません」

滔々と天上の神に語りかけるような声で、彼は告げた。

少しの間、全体に戸惑うような空気が流れた。

型通りの展開から外れた出来事に、聴衆同士も顔を見合わせている。老女の進めようとする流れに楔を打つことは、どうやらできたようだった。

自らの独壇場となるはずだった舞台に割り込んできた登場人物に、老女は毒気をぬかれた表情で立ち尽くしていたが、それでも裁判長からの催促の視線があることに気づくと気を取り直し、自身の台詞を続けた。

「二つ目はその瞳。銀色に輝く怪しい瞳の中には不吉の強調である二重の円が刻まれております。これは明らかな魔女の証。いかなる

言い訳も神の前には通用致しませぬ」

老女の発言が終わると、不自然な空白が生まれた。

また無礼な乱入者からの反論が来るかという老女からの警戒と、さあどうなるんだという聴衆の身勝手な興味の視線が集まる。しかし、リトは悠然として口を挟まなかった。

それを見て、得意げにいつそう顔の皺を深くした老女がさらに言葉が続けたが、その時点で聴衆の興味はすでに老女一人でなく、少なくとも等分以上には得体の知れない青年へと向けられていた。さきの一言だけで、既に彼は舞台の登場人物としての存在感を獲得していた。

それから時間にして四半刻近くもの間、湯水の如くに喋る老女がやや空回り気味に周囲に訴えかけようとする間、周囲からのリトへの視線は消えなかった。彼はただ黙って聞いていたが、やがて言いたいことがなくなり、というよりは息が続かなくなった様子で老女が口を閉ざすと、次に裁判長の視線はやや戸惑い気味に、しかし興味を湛えながらリトへと向けられた。

「弁護人。反論はあるかね？」

「はい、裁判長。許可をいただきまして発言致します」

礼を尽くした応対　自然に演技がかった態度で、リトは立ち上がった。

「どうも審問者は東方についてご存知ではないのではないかと思われます。審問者の仰る瞳孔の特徴は、数こそ少ないが同国において今でもなお存在しており」

「嘘を申すな！」

老女の甲高い声が、彼の口上を阻止した。

聴衆からの非難の視線が老女へと向かう。彼らは今、この正体不

明の人物の拳動に注目していた。最初の一言から一向に喋ろうとしなかったその人物がようやく口を開いたというのに、なぜ邪魔をするのか？

裁判を円滑に進行するための形式上からも老女の発言は好ましくないものでしかなかったため、眉をしかめた裁判長にとりなすように手を上げて、リトは老女へと振り向いた。

「何を持って嘘と仰るのでしょうか」

「そのようなこと、でたらめを申しておるだけであろうが！」

噛み付きそうな老女を落ち着かせるようにしながら、彼は首を振った。

「心外です。史書については我が国の誇る中央図書館に今も存在しております。もちろん今この場にはありませんが、日数さえ頂けたら取り寄せることは可能だったでしょう。無論、この私はすでにそれを読んでいるからこそこうして申し上げさせていただいているわけですが」

陪審席に注意を向けながら最後に付け加える、それが、リトが自身の姓名を利用できるぎりぎりのラインだった。

クリスが両天秤の重さで動けぬ以上、例え自分が帝国宰相の息子であることを明かしたところで、彼もまたそれに引き込まれてしまっただけだ。いや、もっと直接的に天秤のバランスを崩しかねない。だから、あくまで含ませただけである。この青年が本物なら、その史書について知っていてもおかしくない。そう陪審員たちが考えてしまう程度に。

彼の名前の有効性というのはこの場合、実はその程度でしかなかった。それでも充分なのだ。出てしまえば。その自信が彼にはあった。

そして、彼が気にしているのは実は罪の可否を決める陪審員達で

もなかった。彼は何よりも周囲を取り囲む聴衆達に注力していた。目の前にいる愚かな老女などはなから相手にしていなかった。これはそういう裁判なのだった。

「それはなんといい本かね」

裁判長の言葉に、リトは計算され尽くした笑顔で応えた。

「はい。『東方史書』という著書です。執筆者はD・ランウェイ。彼は生涯を東方で暮らし、その歴史の探究に明け暮れました。慢性的な水不足に悩む東方で『死ぬ時はあのトマスで、裸で河川に飛び込んで溺れ死にたい』そう言い残して亡くなったとか。なんでも最後は素っ裸で砂海に飛び込んだと……さぞ無念であったことでしょう」

芝居がかった大仰しきで述べる彼の仕草に、聴衆から笑いが起きる。それは決して否定的なものではなかった。

「嘘に決まっておりますっ！」

場を読めずにいる老女がわめき散らした。冷やかな感情を薄皮の下に隠して、リトは哀れな道化を嘲笑した。

老女の言葉は実は正しかった。リトが言ったことのほうが嘘。そのような史書は存在しないし、そんな虹彩を持つ種族の話も彼は聞いたことはない。だが、それらはまったく問題にならない。

そう、必要なのは事実などではない。

当然のことではあるが、裁判は人が人を裁くものである。では、誰が何をもってして裁くのか。それは、王権ある者からそう任じられた者に他ならない。

それでは宗教的な裁判になるとどうだ。神の代弁者が裁くのである。つまりは教会である。

ひるがえってこの裁判はどうなのか。

魔女裁判を起こしているのは、たかが自称魔法使いだという老女。

まったく馬鹿馬鹿しいにも程がある。

だから最初から、これは茶番でしかなかった。

砂上の楼閣で胡坐をかいていた老女が自らの尻の下にあるものの存在を気づく間もなく、状況はもはや喜劇になるうとしていた。

「だからといって、この者が魔女でないという証拠はないであろう！」

その一言を彼は待っていた。重々しく頷いて、首を振る。

「それは確かに。そうかもしれません」

初めて相手を言い負かす喜びに老女が顔を崩しそうになる瞬間、リトは冷たい表情で囁いた。

「しかし、それはあなたも同じではありませんか」

老女の表情が凍りついた。

悪魔の証明。つまりないことを証明することは難しい。ゆえに、あることを証明しようとして、でっちあげようとする。不可思議な瞳を持つ少女が魔女でないことを証明することより、魔女であることを証明することのほうがはるかに容易なのだ。そしてそれは、なにも少女に限ったことではない。

「魔女とはなにか。それは人を惑わす悪しき存在に他なりません」

もはや彼の言葉を妨げるものはいなかった。聴衆も皆、このいつもにはない展開を作り出している目の前の男に、いつの間にか引き込まれている。

そのことをはっきりと自覚しているのは陪審席にいる女騎士一人だけだったかもしれない。詐欺師め。口の端を歪めた彼女は視線でそう壇上の男に語りかけている。

「では魔法使いとは。それは人を惑わさず、人を助ける存在こそで

しょう」

リトはその場を見回して大声を上げた。彼は裁判長も、陪審員達も、聴衆すらも見ていなかった。彼が相對しているのは「場」そのものであった。空気。流れ。雰囲気。最初から彼が戦っていたのはそれであり、その戦いに勝利にしたことを確信してもいた。

「審問者ヤーガス。わたしはあなたにこそ問いましょう。罪なき人々に疑いをかけ、年端もいかぬ少女をいま火炙りにかけよと言う。あなたこそ何者ですか」

辛辣な逆弾効だった。

通常、このようなことが起こる道理はない。魔女裁判において審問者は神の代理人である教会関係者であり、まずその事実によって彼らの立場は保障される。

だが、今回はそうではない。相手もまた魔女と呼ばれても仕方がないような人間でしかないのだ。それを忘れ、得意気に審問者を気取ることこそ、いい面の皮と言うべきだった。

「あるいは、皆さん。わたしはあなた方にお聞きします。もし、あなた方のご家族やお子さん、友人が魔女という嫌疑をかけられてはどうでしょうか。腕にある黒子の位置だけで魔女だとされてしまえば？ もちろん悪しき魔女がいるのであれば、それは裁かれねばなりません。しかし、その前にあなた方を裁こうとしている者の正体を、我々はよく見極めねばならないでしょう」

ざわめきが生じる。疑いの目がサリュではなく審問する側であるはずのヤーガスに向けられ、どこからか同意の声が上がった。そのまま波紋のように広がっていく。

聴衆の心に刃を突きつけるべく、最後の台詞を彼は言った。

「魔女は、あなた方の正しき良心をこそ迷わそうとしているのです」

それで流れは定まった。あとは後押しがあればいい。そして、既にナイフを刺した彼ではなく、この場でそれを遂げるべき人物がいることをリトは知っていた。

「わ、わしは魔女などではない。魔女はその」

逃げを打とうとする老婆の視線がさまよい、自身の庇護者の姿を捜し求めた。だが、そんなものはない。前回の裁判において、妄信の炎を瞳に宿しながら自分を神のように崇拜するようだった公爵夫人、そのお忍びの姿が今この場にないことに、初めて気づいていた。その訳に思い当たることもできず、聞き取ることも容易ではない見苦しさを垂れ流す弁明を吹き飛ばすように、凜とした声がした。

「まずは自らの潔白をこそ明かされよっ！」

陪審席に座るクリスが、堂々とした態度でそこに立ち上がった。その姿は人々にとって罪人を裁く女神そのものであり、同時に哀れな幼子を救う為に使わされた天使にも映っただろう。最も人々の望む形で、まったく、その姿は民衆の期待する貴族そのものだった。

歓声が沸いた。

ヤーガスを糾弾する叫びと、サリュの無実を訴える声。ファンフアーレの鳴った舞台上で、リトは少しだけ仮面を外したため息をついた。

やはり、くだらない道化だった。

やがて異例の速さで判決へと進んだ裁判は、裁判長の厳かな声によつて終焉を迎えた。

「被告人を無罪とする」

歓声がさらに爆発した。正義の象徴となったクリスの手によってサリュの縛めが外され、拍手が巻き起こる。

自らの与り知らぬところで一気に結末まで進まされてしまったサリュは、呆然とした表情でただされるがままになっていたが、クリスに肩を掴まれるとようやく我に返って、間のクアルごと彼女に抱きついた。柔らかな圧力に押され、クアルが悲鳴を上げた。

ヤーガスは倍以上の年齢にでもなったように脱力して、憲兵隊に保護されている。他の陪審員達は正義を成した自分達に酔うように、聴衆に向かって手を振る者までいる始末だった。

リトはゆっくりと二人に近づいた。クリスが感極まった様子を素直にさらけ出した表情で彼を迎え、彼女に合図されたサリュが戸惑ったように彼を見上げるのを、彼は無視した。

他意があつたわけではない。彼はまだ注意をといっていなかった。講堂内の雰囲気明らかに異常な盛り上がりを見せていた。結末が予想されていたはずの芝居の、見たこともないような逆転劇。そこに自らも参加していたという事実。誰もがその興奮を口にし、声に出されたそれが周囲をさらなる興奮へかきたてている。

「出口は？」

不審そうな表情をつくるクリスに、彼は手短かに告げた。

「危ない。場が壊れるかもしれない」

周囲では大合唱が始まっている。ヤーガス。魔女。殺せ。ようやく異常に気づいて血相を変えたクリスの先導で彼らが足早に出口に向かった背後で、聴衆の一人が叫んだ。

「魔女を殺せっ！」

その一言で、その場にいた聴衆全員が暴徒と化した。

講堂の廊下に逃げ込んだリトは、彼を見る二人に向かって肩をすくめた。

「少し盛り上げ過ぎたな」

「仕向けたのはお前だろう」

「止めをさしたのはお前だぞ」

ぐ、と口を閉ざすクリスから視線を外して、彼は考え込んだ。順調に物事が進んだとはいえ、まさか聴衆が暴れだすとまでは思っていなかった。思惟のかけらが、ぽつりと彼の口からこぼれた。

「扇動者でもいたかもな」

無言で形の整った眉をひそめる彼女に、視線を送る。

「暴動をけしかけた奴さ。俺のように」

「馬鹿な」

クリスは絶句した。

「なぜそんなことをする意味がある。暴動など」

「公爵家にちよっかいをだす口実になる」

あっさりトリトは断定してみせた。

「ヴァルガードとトマスは常に互いを追い落とそうとしてる。今回の魔女騒ぎもそのあたりが噛んでるんじゃないか」

「待て。聞き捨てならんぞ。どういふことだ、ニクラス」

足を止め、クリスは冗談のない表情で訊ねた。

ただの仮説だが、という前置きを入れて彼は自分が思うところを説明した。例えば公爵領において魔女狩りが起き、人心が乱れたとする。それで最も利益を得るのは誰か。治安を正す為といって介入の口実を得る帝都側だろう。そして無実の罪で人々が殺されたとなれば、それをもって為政者失格の烙印を押すことも可能になる。

「まさか、その為に帝都が？ あの老女はその為に仕組まれたと言
うのか」

「さあ。でも、その企みが失敗したから、せめて なんてのがこ
の暴動だとしたら、どうだ？」

信じられぬ。苦虫を噛み潰したような表情で押し黙るクリスに、
リトは軽い感じで鼻を鳴らせた。

「まあ、もちろん証拠はないしな。けどそのぐらいの搦め手を使い
そうな奴、あそこにはいくらでもいるだろう。さっきの暴動はさす
がに不自然すぎる。そうじゃないにしても、裏になにかあっただろ
う」

思い当たる顔が多すぎるのだろう。クリスは考え込んだきり黙っ
てしまった。

元々、権謀術数を嫌う彼女がその可能性に思い至らなくても当然
と言える。むしろ、だからこそ彼女は選ばれてこの地に送られたの
ではないかとリトは思うのだった。帝都の意思を伝える表の顔とし
て。裏があることなど知らされませず。

だが、どちらにせよ彼には関係ないことだった。取引はすでに済
ませていた。

「取引？ 公とお会いしたのか？」

彼はあっさりと言った。

「俺の身元の保証も公からのものだよ。あの魔法使いの庇護者だっ
た奥方は今この街にはいない。病気療養なんて名目で、すでに遠く
別荘にいるんじゃないか」

今まで妃の勝手を許していた公も、ようやく重い腰を上げたとい
うわけだ。あくまで表には立たずに。

もちろん、リトが今回の裁判の弁度に失敗したなら彼自身が何ら
かの処置に動いただろうが、その時には事が起こってしまった責任

も彼自身問われることになる。酔狂人と噂の帝国宰相の次男坊がもし事を納められるのであれば、それが公にとつても最も望ましかったのだ。加えて、帝国宰相に貸しを作るきっかけにもなる。

「まさか……まあいい。それは後だ。それで、どうする。すぐに連中は外を取り囲むだろう。これでは袋の鼠だぞ」

「わかつてる。裏口は？」

あそこだ、と告げるクリスの先に、古い大きな木製の扉が見えた。近づいて耳をそばだてる。厚い板の向こうに、興奮に狂った暴徒の声は聞こえなかった。

その扉を開ける前に、彼はサリュを見た。裁判が終わって、初めて視線を交わした。すぐにその胸元にいるクアルへと視線を向けて、「連れて行くのか」
言った。

サリュは一瞬だけ迷うようなそぶりを見せたが、すぐに唇を結んで、それから頷いた。

その少女に、

「……好きにしる」

とだけリトが告げたところで、不意に扉が開いた。

少女が身を固くし、クリスが油断なく身構える。やや西に傾いた眩い光が彼らの目を射して、その中から逆光になって人影が進み出た。

「お待ちしておりました」

礼儀正しく腰を曲げてみせる。

「お前は」

再び絶句するクリスの前で、黒い執事服に身を包んだ男は一瞬、悪戯に成功した子供の表情で微笑んだ。

「つまり、私は自分の使用人にまで騙されていたというわけか」

執事服の男の案内でとりあえずは安全な場所まで移動すると、無人の廃屋の中でクリスは不機嫌をあらわに呻いた。

「申し訳ございません。しかし、そのようにとのニクラス様からのご指示でございましたので」

さらりとした言葉で全ての責任を押し付けられ、リトは悪びれた風もなく肩をすくめた。

「知った上で、器用な立ち振る舞いができるとは思わなかったからな」

今回の裁判に弁護人として参加することについて、リトは男に頼ることが多かった。そうそう名を明かすわけにもいかない状況では人脈や手段も不足している。そこで、彼の主人であるクリスに内密で協力を求めたのである。

もちろん彼女に話を通さなかったのには理由があった。

クリスは、彼女なりに全ての手を尽くした。だからこそ帝都への言い訳もたつというものだ。そこで彼の企みに関わってしまったえば、立場が悪くなるのは彼女である。少なくとも、彼らは帝都側の意図したものを一つ蹴り捨ててしまった可能性があるのだ。恨まれる危険は避けるべきだろう。

「……気に食わん」

頭の回転の早い彼女である。理解はすぐにできただろうが、それでも感情がついてくるものではないらしく、何かを反芻するように押し黙った。

既に昼の時間は過ぎ、あたりには夜の帳が落ちていた。小屋から外に出て、周囲の様子を確認する。

「いかが致しますか。経路は複数用意しておりますが」
執事の男が訊ねた。

「屋敷までで行けるな？」

無言で頭を下げる。頷いて、リトはクリスを見た。

「騒ぎが収まるまで匿ってくれるか」

問われたことで逆に名誉を傷つけられたように、彼女は顔をしかめた。

「当たり前のことを言うな。お前達二人ぐらい」

「いや」

冷たい声音がその言葉をさえぎった。

「かくまってもらうのは一人でいい」

「なに？」

クリスの顔が険しくなり、サリュが彼の服の袖を強く掴んだ。それに気づきながら、あえて意図した冷酷さでリトは続けた。

「俺はこのまま街を出るよ」

「馬鹿な。街には今、暴徒がうろついているのだぞ。数日は様子を伺うべきだ」

彼女の言葉は正しかったが、そもいかな事情がある。

彼は生家の名を出してしまった。それだけで本人だと言う証拠があるわけではないが、このままただの同姓同名にするには、当の本人がいてはまずい。彼が姿を消すしかないのだ。街の騒ぎが落ち着けば人目にもつくようになる。帝都からも様子を探る為の密偵も来るだろう。そうなった時、彼らから見つからずに姿を隠すことは不可能だった。

今回の件が何者かの策謀だったとして、その何者かがもし彼の実家と敵対している貴族だった場合、それは彼の家にとって汚点となりうる。もちろんアルスタ家は言うに及ばず。自俣に家を出た以上、どちらにも迷惑をかけるわけにはいかなかった。

消えるのなら、今このタイミングしかない。

「しかし、正門はどこも閉じられているはずだ。外に出ることなど

不可能ではないか」

なおも反論しようとするクリスだったが、

「川を下る。水門の前あたりで岸に上がれば、いつもは監視が厳しいが今なら兵士達の目も街に向けられているだろう。前もってポートを用意して荷物も積んでもらってある、問題ない」

男の筋の通った説明に言葉が出てこず、やがて悔しそうに下を向いた。

「お前は、いつも。いつもそうやって。私を置いて」

声が震えていた。日ごろ、常に冷静であろうとしている理性の檻が壊れ、過去から溜め込んできた感情が今にも爆発しようとしている。それを遮るように、

「クリス。サリュを頼む」

男が投げかけた、それは逃げの言葉だった。

最後の最後まで、ニクラス・クライストフはクリステイナ・アルスタから逃げようというのだった。それを悟り、しばらくの沈黙の後にクリスがその顔を上げた時、そこにはいかなる戦場画にも登場し得ないような、凄烈な瞳を湛えた女騎士の瞳しか残っていなかった。少なくとも、表面上には。

「 剣に誓おう」

頷いて、リトは手を差し伸べた。彼女もそれに習った。固く握手を交わす。

「また会おう」

「必ずだぞ」

彼はその隣に視線を移して、黒服の男を見た。そう言えば名前も聞いていない。ゆえに言葉の別れは必要なかった。彼は無言で首を引いて、男はそれに微笑と直角に近い辞儀で応えた。あくまで執事の分を越えない応対だった。

そして、最後にリトは最後まであえて見ないようにしていた少女へと目をやった。爪が手のひらに食い込むほど強く彼の服を掴んで、必死な表情で見上げている彼女に、呼びかける。

「サリュ」

「いやです」

彼が何か言う前に、初めて見るような必死さを瞳に込めて少女は言った。

「わたしも連れて行ってください。邪魔なら途中で置いていってもかまいません。盾にしても。突き落としても。だからどうか、どうかわたしも一緒に連れて行ってください」

悪魔も哀れむ声だった。彼が見ているうちに、少女の魔女の証とされた二重の瞳にみるみる大粒の涙が溜まり、頬を伝って落ちた。

「サリュ。聞け」

「聞きませんっ」

濡れた声は、情けないほど言葉になっっていなかった。あまりに切実なその光景に、クリスと執事服の男が息を呑んでいる。彼らが固唾を飲んで成り行きを見守る中で、リトは口を開いた。

「俺は生まれた時から一人だった」

反発しようとした少女が、なにかに押さえつけられるように口を閉ざした。

「ずっと一人だった。それは悲しくもなんともなかった。自分と周りが違うことはわかっていたからだ。だから俺は今までずっと一人だった」

そこで出会った少女を見て、

「そしてこれからも一人だ」

はつきりと告げた。

「俺は自分の為にしか生きてこなかった。自分の為にしか何もしなかった。そしてこれからも自分の為にしか生きないし、自分の為にしかない」

目に深い暗闇が灯っている。少女の不可思議な瞳孔に映る自分自身、その黒い虚無の底をこそ見るようにして、彼は続けた。

「勘違いしているみたいだけどな、俺はお前を助けたことなど一度もない。守ったことも一度もないんだ。想ったことも一度もない。全て俺が、俺の為にやっただけのことだ。全部、俺なんだ」

それは何一つ偽りのない事実だった。

あの集落で気まぐれに旅の共を申し出たのも。砂漠で倒れかけたのを介抱したのも。街で騒動から助けたのも。売春宿に迎えにいったのも。服を買い与えたのも、裁判で弁護したのも。全て自分の為。彼が自分自身の為にやったことだった。少女の為になど欠片も脳裏に浮かんだことはなかった。本当にそうだった。

少女はただそこにいただけだった。

彼は一人だった。そのことを生まれながらに自覚していた。

世界には膜がかかり、思いは鏡で歪められ、言葉はからっぽの空洞に虚しく響く。それが自分自身故にであることもわかっていた。

この世界を汚らしく見てしまうのは、その人間が汚らしいからに他ならないことを理解していた。

だが生を受けた以上、それを途中で放棄するような弱さ。あるいは強さもまた彼にはなかった。あの晩、少女に告げた言葉はそんな彼が初めてもらした弱音であったかもしれない。

彼は答えを探していた。

たった一人で。自分だけの答えを。その問いそのものの内包する矛盾に、二十数年を生きて気づかない。それはつまり、これからも永遠に気づけないということでもあった。

「お前が魔女なのかどうか そんなことどうでもいいんだ。その奇妙な目も、お前のように砂虎を飼える人間がいるのかどうかなんてことも興味ない。俺はただ、あのままにするのが気に食わなかったから弁護しただけなんだから。だからな、サリュ」

そして、言った。

「お前はお前で勝手に生きて。勝手に死ね」

少女の呼吸が止まった。そう錯覚させる程、表情が凍りついた。目を見開き、口を開いたまま身動き一つしない。彼女の時は完全に止まっていた。

リトは背中を向けた。

歩き出すその後ろ姿に、声をかける者はなかった。

彫刻のように動かない少女にクリスはかける言葉を見つけることができなかった。

彼女はその時初めて、友の持つ闇の奥深さを直視した。

彼が大学の頃から周囲と違っていたのは、誰でも認めるところだった。何事も達観して、くだらない争いに関わらず、どこか淡々と生きている変人。その中にどうしようもない渇きがあることに、少なくとも彼女だけは気づいていた。

しかし、彼がそれをクリスに打ち明けることはなかった。

打ち明けてくれることはなかったのだ。いくら残酷な言葉だろうと。別れの為の言葉であろうと。

「……追いかけてなさい」

やがて、彼女の口をついて出たのはひどく冷たく、同時に灼熱のマグマのように煮立った感情の込められた嫉妬の言葉だった。

人形のように感情のない瞳で振り返った少女が、彼女を見る。その年端も行かぬ少女を憎しみの交じった瞳で睨み、クリスは言った。
「追いかけるんだ。サリユ」

少女の瞳に、微か戸惑いの気配が生まれた。無理もない。あれほど強烈に否定されたのだ。まだあのひねくれた孤独者に立ち向かうと思える者など果たしているだろうか。

しかし、少女は言われたのだ。自分とは違って。

「頼む。あいつを……一人にしないでくれ」

声が掠れてしまった。少女の顔が歪んだのは、自分の視界が歪んだからだと彼女は気づいた。

その瞬間、クリスは騎士であることを放棄していた。五年前の十八歳の少女に戻って、涙を流して懇願していた。

「お願いだ」

私は一緒に行けなかった。

なぜ行かなかったのだろう。あの日以来、そう思わないことはなかった。家を捨て、身分を捨て、なぜ私は彼と共に進まなかったのだろう。そうすれば未来は変わっていたかもしれないのに。彼からその言葉を聞いたのは自分だったかもしれないのに。

しかし、現実にはそれはただの夢想でしかなかった。彼女は武家の名門アルスタ家の名代として、近い将来には当主になることが既に定められている。彼女には守るべき人々がいた。それは五年前にも存在していたが、今ではその数と質は何十倍にも膨れ上がってい

た。

自分にはもう、あの馬鹿な男に何を言う権利も、機会もない。
だから。

「サリユ。行ってくれ」

驚きに目を見張った少女の瞳に、光が戻った。ゆっくりと頷くと、胸に砂虎の子を抱いたまま駆け出した。すぐに闇の中に消えた少女の姿をいつまでも見続けるように、クリスはその場に立ち尽くしていた。

彼女が騎士の顔を取り戻すのに、あと僅かばかりの時間が必要だった。その間、執事服を着た男はただ黙って彼女の側を離れなかった。

暴徒は中央の広場から、やがて飛び火するように街中に拡散していった。

中央から憲兵によって制圧されていき、その結果より外へ外へと押し上げられていく。外側のほうが経済的に貧しく、暴徒の波が膨れ上がることが懸念された。

実際に、街の四方を取り囲む水掘りのすぐ中、外円部では中央とは異なる発火での暴動が起きているようだった。経済的不満、その機に乗じた富裕層の襲撃。考えられることは幾つかあるが、背後に扇動者の存在があることは想像がついた。

暴動の発生が明らかに不自然だからだった。そして、不自然だからこそ収束まで時間はかからないだろうと思えた。次々に燃え広がらない火ならすぐに消されるだけだ。そういった意味では、このタイミングで出火したのは仕掛けた側に見てもやはり想定外だった。

たのдарろう。

いい気味ではある。しかし、貧民街の危険度が増すことは、そのまま彼の逃亡が難しくなることも意味していた。身なりのいい服装をしているだけで襲撃されかねない。目立つような装飾は既にちぎり捨てていたが、根本的な仕立てのよさは遠い夜目にもすぐわかるだろう。

個人は集団に決して敵わない。一度に向かわれてしまえば三人にも勝てないのが個人というものだ。そして、暴徒と化した人間の行いは日頃の人間性と関わりなく、極めて残酷に変わりうる。

しかしこの街から出るには外に向かうしかなく、つまりは注意して進むしかない。松明を掲げて闊歩する住人から避けるように、彼は川べりへと向かった。

その背後から、

「っ」

人の気配を感じると同時、リトは振り向いてナイフを突きつけていた。その小柄な体格に嫌な予感がして、その人物の顔を確認した彼は表情を凶悪に歪めた。

「なにをやってる」

そこにいたのは、サリュだった。目の前に光るナイフに身を竦め、胸のクアルがそれを威嚇して必死に前脚を伸ばしている。

「クリスの家にいけと言っただろう！」

いっそ憎々しげな口調で、リトは言葉を叩きつけた。少女はその感情に顔を緊張させて、しかし正面から彼を見返した。

「わたしの行動はわたしが決めます。あなたのように」
毅然とした態度で言う。

「俺のように？」

虚をつかれたように、リトは目をしばたかせた。

「はい。あなたこそ勘違いしています。わたしは、わたしの意志で、わたしの為にあなたの側にいたいのです」

そこで一旦息を吸い、

「わたしが何をしようと、わたしの勝手……ですよね」

精一杯の感情を込めて睨みつけた少女を見て、瞬間、リトの背負う憎悪が極限まで膨れ上がったかに見えた。そして、それでも顔色を変えない少女の姿に、

「……好きにしろ」

毒づくような言葉で答えた。

「はい」

嬉しそうに微笑んで、少女は彼の隣に並んだ。

街の中央部から輪を広げるように暴動の鎮圧を行っていた憲兵隊は、やがて街の外円部にも迫ろうとしていた。両者の争いに巻き込まれるのは好ましくない。しばらく機を見ていたリトだったが、結局強引にその場を突っ切ることにした。

「走るぞ」

隣の少女に声をかけて、駆け出す。

「おい、誰かいるぞッ」

「追え！」

やはり見つかった。

すぐに背中からかかった声を振り切るように、彼らは走った。

「あっ」

不意にサリュが小さく声を上げて、頭のあたりを押さえた。怪我でもしたのかと思ったが、そうではない。彼女の頭を飾っていた白い花がなくなっている。どこかにひっかけてしまったのだろう、立ち止まって戻ろうとする彼女を強引にリトは引っ張った。

「馬鹿、捕まるぞっ」

目の前に月光を照らして光る河川が見えて、ようやく走るのをやめた。肩で呼吸をするサリュの様子を見ながら、リトは棧橋を探す。すぐそこにあつた。いくつかのボートが停留されている、その一つに荷が積まれていた。あれだ。

暴徒はまだ追いついてきていなかった。今のうちに出れば逃げられる。さすがにほっとして、彼は傍らの少女の様子を伺った。

サリュは消沈していた。理由はすぐにわかった。あの偽花だ。

あれの何がそこまで重要なのか。まったくわからなかった。ため息をついて、リトは彼女を引っ張って棧橋へと向かった。その途中、川原の風にそよぐあるものを見つけ、彼はそれを手に採った。そのままボートへと向かい、沈んだ表情のサリュとクアルを乗せる。

リト自身はすぐに乗らなかつた。ボートはこれ以外にもいくつかある。もしかすると、追っ手はこれに乗って追いかけてくるかもしれない。

彼はナイフで棧橋に結ばれた綱を切つていった。左手に持ったそれが邪魔で、まずサリュに渡そうと顔を向けて、その少女の顔がはつと強張ると同時に、

「いたぞ！」

声が響いた。

無数の松明が土手の上に見えた。舌打ちして、リトは棧橋に残るボートを見た。まだ数がある。この状態が出るわけにはいかない。

彼はサリュの待つボートへと向かうと、その停留策を乱雑な手つきで切り離れた。

「先に行け！」

驚きに目を見張る少女の右手にさつき採ったそれを押し付けて、力を込めてボートを離岸させると、

「リトも、早くっ」

その声を無視して、彼は棧橋を戻った。

「リト!?!」

残っているボートと岸を繋ぐ綱に向かう。切って、ボートを押す。あと三艇。

「ボートで逃げるぞ!」

声がすぐ側まで近づいていた。被さる様に、もう一つの声が届く。「早く! リトっ」

両者の声を同時に耳に入れながら、平静を装ったリトの頭は混乱していた。

自分でも何をしているんだという思いがあった。さっさとボートに乗るべきだ。時間稼ぎが必要ならあの少女を差し出せばいい。本人が言っていたように、盾にするなり、突き落とすなり。それで多少とはいえ時間は稼げるかもしれない。

しかし、自分は今、念には念を入れようとも言うかのようにこんな行動をとっている。これは慎重なのか。そうとは思えなかった。ただ自分だけの生存を考えた上での行動としては、論理的でなかった。

困惑しながらも、彼の手先は冷静にその行為を続けていた。残る一つの綱を切って、押す。ゆっくりと、だが確実にボートは岸から離れていき、そして、

「リトっ!」

悲鳴が上がった。と同時に遠慮のない力で背中を引っ張られて、身体が棧橋を転がった。受身を取って回転する視界の中で月が笑い、松明の火とそれに浮かび上がる悪魔のような形相の人々の姿が見えた。

すぐに立ち上がると油断なくナイフを構え、距離を計る。熱狂と

いう名の業火に身をやつした暴徒は、それを見てもまったく怯まなかった。

「貴族だ」

「あのボートにも誰かいるぞっ」

「きつと金目のものが積んでるんだ」

「追いかける！」

その言葉を聞いて、リトはちらりと後ろを見た。少女の乗ったボート。それと棧橋との距離はまだ、近い。あれじゃ駄目だ。あれでは追いつかれてしまう。

その自分の思考に、一瞬彼の動きが止まった。

俺は、いったいなんの心配をしている？

その隙を突いて、暴徒の一人が突っ込んできた。松明を槍のように突きだされて、腹の辺りに激痛が走った。かまわず、彼はナイフでその暴徒を斬り捨てた。下から、何か焼ける匂いがした。

「リト　っ」

さつきから叫び続けているサリュの声が、濡れている。振り返って、月光に照らされて、身を乗り出しながら涙を流してこっちを見ている少女にリトは心配させまいと笑いかけて。

その瞬間、唐突に彼は全てを理解した。

理由。

理由はくだらなかった。

彼はサリュを守ろうとしていた。逃がそうと、助けようとしていた。

走りながら、思う。事実と真実の相似した関係性について、全くとりとめのない、くだらない考察を。

なるほど。確かに神はいた。

小太りした中年の男を突いて、退く。狭い棧橋で奴らは複数ではやってこれない。狂人のような顔相を月光にさらしながら、それでもリトは冷静に考えていた。

可能な限り時間を稼いでから、泳いでボートに向かう。その為にも暴徒に恐怖を与えなければならぬ。こちらが狂っていると感じさせることで彼らの中に躊躇を生まなければならぬ。

彼にはここで命果てるつもりなどなかった。

当たり前だ。自分はやつと探していたものを見つけたのだ。それを手離すつもりなどなかった。諦めるつもりなどなかった。ここで死ぬわけにはいかない。

しびれを切らして飛び込んできた若い男の胸にナイフを刺して、引き抜こうとしたその手が止まった。男は自身の胸に生やしたナイフを、自らの手で押さえつけていた。彼もまた狂っていた。

身動きが取れないリトに、別の男が襲い掛かった。身体を捻ってかわそうとするが、背中から別の手が伸びた。後ろから視界に入った手が、その指がそのまま視界を塞ぎ。

リトの右目が潰された。

彼は絶叫を上げた。後ろにいる男を力任せに振り落とし、ナイフを生やした男を蹴り倒した。男はナイフを刺したまま川へ落ちた。

「リトっ……駄目、もういい、はやく……！」

暴徒から距離をとって、彼は振り向いた。半分閉ざされた視界、

ようやく遠くになったボートの上で、それでもはつきりとわかる少女の顔がこれ以上ないほどに歪んでいた。

「生きる！」

右頬に血の涙を流しながら彼は叫んだ。遠くで泣き喚く少女に届くよう、喉を裂いた。

「生きる！　生きる！」

そして、駆け出した。体格のいい男にタツクルしてそのまま川に落ちる。離れようとして、しかし男がしがみついてきて上手くいかなかった。したたかに水を飲む。男に水中に押さえつけられる。必死に抵抗して、逆に男の顔を水の中に埋め込んだ。

万力で抵抗してくる男のものがく腕から逃れるように顔を背け、天を見上げた。月が見える。大いなる存在の化身とされるもの。事実ではなく、真実の証。

一瞬、サリュの不思議な二重の瞳が重なって見えた。それに対して吠えるように。

彼はもう一度叫んだ。

「生きる！」

彼の姿が桟橋から水面に落ちたのが見えて、サリュの頭は真っ白になった。

「リトっ！」

あらん限りの声を張り上げて、呼ぶ。そして、少しでも彼に近づこうとして。船が揺れた。投げ出され、気づいた時には彼女は水中に落ちていた。

冷たい水温が全身に突き刺さる。反射的に空気を吸い込んだ口から大量の水が入ってきて、彼女は大きくむせた。手をばたつかせる固いものに当たった。ボートの縁だった。周辺をまさぐって停留索の切られた綱を掴み、彼女はようやく水面から顔を出すことに成功した。

ぎゃう、ぎゃう、という情けない声がある。慌てて見れば、少し離れた水面に飛沫があがっていた。その中央で足をばたつかせているのは、クアルだった。

「クアル……っ」

もとが砂漠に生きる生き物なうえ、生まれてまだ間もない。泳ぐことなどできるはずもない。今にも溺れそうなクアルへと、サリュは手を伸ばした。届かない。綱を持っていた左手を離れた。

小さな体を捕まえると、クアルは必死にしがみついていた。震えている。爪が食い込んでいたが、すでに刺すような水温の冷たさがあったので気にはならなかった。目に見えて衰弱しているクアルを自分の肩に寝かしつけるようにして、彼女はボートを探した。

すぐ近くにあったボートに何とか近寄って行って、縁にクアルを横たわらせる。ほっとして、自分もボートに上がるうとするが、

その力がなかった。

意識せずに身体が震えているのがわかる。水温は予想以上に冷たく、酷い勢いで体力を奪っていった。牢暮らしでもともと体力が落ちていたせいだった。視界が暗転しかけ、なんとかロープだけは放さないようにしながら、彼女はふと全身から力が抜けるのを感じた。そのまま、彼女の小さな姿が冷たい水の底へと沈もうとした瞬間、

「生きる！」

声が響いた。彼女の男の声だった。

遠くで水面を叩く音がする。彼は生きている。こっちに向かってきている。早く、あの人がやってきた時にわたしがひっぱりあげないで。

意識は一瞬で覚醒した。失われた体温と力は戻るはずもなかったが、彼女は震える両手でなんとか、水を含み嘘のように重い自分の体をボートへと持ち上げた。

歯を食いしばり、木の温もりを肌におぼえ。そして急な浮遊感を感じたのと同じ、そこで彼女の意識は闇に落ちた。

気づいた時、少女は砂浜に倒れていた。

うつすらと目が開いた先に、黄土色の砂粒が見える。無数のそれは日の光を反射して、目に痛いほどに輝いていた。

視界の隅にある左手に力を込める。まるで自分の手ではないような、ずれた感覚しか返ってこなかった。拳いっぱい握り締めようとしてほんの少ししか動かない自分の肉体を彼女は笑った。

駄目だ。

これはもう、駄目だ。

どのくらい倒れていたのか。体中に水分がなく、喉はぴくりとも動かない。

思考を麻痺させる頭痛、それに吐き気と倦怠感が全身を支配していて、もう起き上がることにすら叶わなかった。

ここで自分は死ぬ。干からびて死ぬ。砂に埋もれて死ぬ。たった一人で死ぬ。

たった一人で、

「生きる！」

声がした。

少女は、いつの間にか視界の半ば以上をさえぎろうとしていたまぶたを開いて、必死に頭を持ち上げた。声は視界の外から聞こえた。残った渾身の力を込め、顔を這いずらせるように顔の向きを変える。皮膚に触れた地面は焼ける様な熱さだったが、喜びに打ち震えた彼女にそれはまったく問題にならなかった。

いてくれた。

近くにいてくれた！

そうしてようやく視界に入ったのは、自分の右手だけだった。誰かの姿はなかった。

「生きる！」

だけど、声はした。

幻聴だった。

泣きたくなくて、だけどそんなことができる水分は自分の中からとつくになくなっていて、少女はただ全身を細かく震わせた。ふと、握り締めたその右手の端に、何か白いものが見えたような気がした。

「生きる！」

そこから声がした。

彼女は全ての力を振り絞って手のひらを広げた。

そこにあつたのは白い花だった。

水分を失くし、しわくちやに萎れた本物の花。魔法がとけた、ただの枯れ花だった。

視界が滲む。もう出ないはずの涙が一気に溢れてきて、動かないはずの喉が震えて叫び声を上げた。

「ああ……あああああ……」

「生きる！」

それでも声は消えなかった。

「うあああああああ……っ」

「生きる！」

わたしはあなたと生きたかった。

わたしはあなたに食べられたかった。

あなたの為に生きたかった。

あなたの為に死にたかった。

「生きる！」

なのにあなたはそんなことを言う

今はもう滅んでしまった集落で、それまでの彼女は全てを受け入れて生きてきた。

物覚えがついた時から、いつも村人からは薄気味悪そうにしか見られておらず、その原因が自分の目と名にあることがわかった。呪われた子。影でそう言われていることが、聞きたくもないのに耳に入った。

両親はなかった。名前も、育ての親である変わり者の老婆がつけてくれたものだった。彼女は優しくもなく冷たくもなかったが、一度なぜ自分にこんな名前をつけたのか尋ねたことがある。老婆はなにも答えず、火をくべた暖炉の前で椅子に座り皺くちやの顔でどこか遠くを見上げているだけだった。

水面に映る自らの瞳孔が意味するものも知らず、いつしか少女は自分のことを村の噂通りの存在だと思いつつ始まるようになった。そして、その名前で呼ばれるものの存在に興味を持った。それから彼女は村の外れで舞い上がる砂を見るようになった。

死の砂を、見てみたかった。

そんな少女の姿に不吉なものを感じた村人達は、老婆に彼女を村から追い出すよう言い迫った。生きることにはさして執着をもてなかった彼女は別部屋で自分の処遇が決まるのを待っていたが、隣から今まで聞いたこともない老婆の怒鳴り声が響いて驚いた。

老婆の台詞まではわからなかったが、その日から少なくとも表立って少女の追放を唱える声はなくなった。彼女の砂が舞い上がる様を見上げる日々は続いた。

病がちだった老婆が死んだ時、少女に悲しみはなかった。一緒に住んではいたが、ほとんど他人と違っていいほど互いに親交はなかったからである。もちろん、老婆が幼い自分を助け、今まで育ててくれたことには感謝していたので、老婆の友人だった男、サジハリと葬儀を行ってせめてもの恩を返すことは忘れなかった。

葬儀が終わった後も、意外なことに少女は村から追い出されなかった。かといって引き取るうなどという酔狂な人間も現れなかった。それからはサジハリの家に住むことになった。

もし村から追い出されていても、少女は淡々とそれを受け止めていただろう。そして恐らくは砂海に埋もれてあっさりとその人生を終えていたはずである。彼女にとって、生とはその程度のことではなかった。

少女が唯一、感情らしい感情を行動に示したのは村に一匹の小さな砂虎が現れた時のことである。村人の誰もが怖がり、殺そうとしたところを少女が根気をもって手なずけて見せた。村人は気味悪がったが、サジハリのとりなしもあって番犬がわりに飼ってみてはどうかということになり、少女が世話役になった（それなら、猛獣が牙を剥いた時まず最初に殺されるのは彼女だった）。

いつも砂を見上げる姿が、一人と一匹になった。

時がたち、真ん丸い毛むくじやらでしかなかった砂虎も大きく成長し、その存在が村を襲った盗賊まがいの連中を追い返したこともあった。村人は少女の努力と献身は少しも讃えず、ただ自分達の先見の高さを誇ったものだが、それも水源の枯渇という事態に襲われるまでのことだった。

貴重な水の消費を抑えるため、あっさりと砂虎の毒殺が決定された。

彼女はその決定に反論しなかったが、もちろん納得したわけではなかった。夜中、彼女は砂虎の繋がれた小屋に行き、村の出口まで連れて行ってからその鎖を解いた。殺されるなら、逃がして悪い道理はない。

しかし砂虎は出ていこうとしなかった。

村はずれの、いつも少女と見上げていた場所で座り込み、彼女がいくら押しても言い聞かせても動こうとしなかった。やがて世が明けるとき、ようやく立ち上がったかと思うと自分でまた小屋の中に戻り、そして村人が持ってきた毒入りの餌を食べてあっけなく死んだ。

少女は泣かなかった。

空を見上げるのがまた一人になった。

水源の水量低下が決定的になり、新天地を求めた村人達が出て行った。少女は当然のようにその旅には呼ばれず、村にとどまった。

他にいた村人はそれぞれ毒を飲むなり、あるいは限られた生を静かに全うするなりの行動を起こしていたが、少女はいつものように村はずれに立つ日々を続けていた。

そして、いつからか村に死の砂が吹いた。幼い頃から待ち望んでいた瞬間だった。

死の砂は、ただ圧倒的なまでの奔流で集落を包み込んだ。まさにこの星を支配する力そのものの姿を前にして、少女はただまなじりを見開いて立っていた。

その中から男は現れた。

透き通った瞳の奥に多くの揺れを包んでいるような、そんな男を一晩もてなした夜、サジハリに呼ばれ男の部屋に行くように言われた少女はそれに従った。言いつけのとおり、身の穢れを綺麗に落として。それが何を意味するのかわかって訪れて、そして彼女は男に否定された。

彼女は男の言葉に戸惑い、同時にその見下してくる視線が心の波紋を呼び起こすのを感じた。

軽蔑しきった態度で男がこちらに放り投げた短刀を、手に取る。闇夜の雫を集めてうつすらと光り輝くそれは、人の悪意を吸い取って存在するかのような禍しさを持っていた。

「生きるってのはそういうことだ」

その時、少女の胸に沸き起こったのは確かに男への敵意だった。知らないくせに。なにも知らないくせに、知ったようなことを言いたいだけ告げて寝入ってしまったている。それならば言葉どおり、喉をかききってやれば。そこまで考えて、彼女は内心のざわめきに自身の動きを止めた。

驚いていた。

こんな風に激しい感情を抱いている自分に戸惑い、そして不意に彼女は理解した。自分は今まで、全てを受け入れて生きてきたのではない。全てを諦めてきたただけなのだ。

何故、あの時砂虎とともに村を出なかったのか。

それで生き残れたかどうかはわからない。今まで集落から外に出たこともなかった子どもが、ろくな準備もせずに砂海に飛び込み、無事に渡りきれたとは思えない。

しかし、それが生きるということなのではないか。

自分はそれをしようともせず、ただあの砂虎を死なせてしまった。もしかしたらあの子は、自分がいつか歩き出すのを待っていたのかもしれない。最後の朝の、最後の瞬間まで。

涙は出なかった。かわりに月夜の零れた光が短刀に揺れた。男への悪意は一瞬で霧散し、彼女の胸の裡にそれとはちがう感情が芽生え始めていた。なぜこの人の言葉は、私に届いたのだろう。その疑問にやがて彼女自身が出した答えは、

似ているのかもしれない。

結論から言ってしまうえば、つまるところそれは大いなる錯覚に過ぎない。ただ確かに、真実の類ではあった。

しかし、それが正しいかどうかはともかく、少女はやがて人生で初めて、自ら生きる目的を見出した。彼女は壊れ物を扱うように真摯にそれを信じようとしていた。

「生きる!」

それが、再び否定された。

「生きる!」

その声はただひたすらにそれを告げていた。

それは呪いだった。

ある小心者の魔法使いが残した、彼女の耳から一生離れない呪いだった。

手を動かさないことを許さない。

目を閉じることを許さない。

足を止めることを許さない。

諦めることを許さない。
強い、とても強い呪いだっただ。

「生きる！」

力の抜けきった身体で、少女はゆっくりと這いずっていく。
灼熱の砂を掴み、張り付いた頬を砂で焼きながら獣のような声をあげ、きらきらとまがい物のように輝く水辺に向かい、身体を震わせて進む。

やがて、叫び声を上げるのをやめて。目を閉じて暗い闇に落ちゆく中で、彼女は呟いた。

誰かに伝えようとして、言えなかったその言葉。

孤独な砂漠の夜、腕の中の彼女にしがみつくようにして一晩中震えていた、まるで幼子のような男の姿を思い出しながら、夢つつつの中で紡いでいた。

なにかに脅えていた。

なにかを探してた。

あなたは

「あなたは……ただ、寂しかっただけでしょ？」

自分自身を見つけれず、ただ泣いていただけだった。

一人では、人は自分の姿も見ることも出来やしないのに。
わたしの瞳に、あなたはいつだって映っていたっていうのに。

その日、水陸最大の商業都市トマスを襲った暴動事件は公爵の迅速な対応もあり、一両日中に完全に鎮圧された。

「敵対国による許されざる策動」の結果、街には一時火の手があがったが、帝都から招かれていたアルスタ家の若き名代の指揮もあり、被害は最小限に抑えられた。

暴動を扇動した者として数名が捕まったが、その素姓や目的などについての詳細は不明のまま、公には敵対国からの間者とだけ発表されただけである。

当該事件での負傷者及び死亡者についての調査は、ひどく難航した。

やがて一月が経ち、公爵家からようやく発表されたその負傷者名、あるいは死亡者名の一覧に、ニクラス・クライストフの名は、ついに載ることはなかった。

エピローグ

風が吹いている。

黄土色の砂が舞い、全てがぼやけてしまっている一面の砂漠を旅人が歩いていった。防砂衣に身を包み、しょぼくれたコブつき馬を引いている。

黙々と足を投げ出し続ける旅人がふと立ち止まり、布防具の下から手を入れて指笛を鳴らした。甲高い音が薄汚れた空を縫って響き渡り、遠くから一匹の獣が姿を現した。

体長が半丈以上もある巨大な肉食獣は音も立てずに指笛の主の前までやってくると、その凶悪な本性を現して旅人を食い殺すのではなく、甘えるようにその頭を擦り寄せた。

旅人の細くしなやかな腕が猛獣の喉を撫であげ、やかいな旅の連れにいつまでも慣れてくれないコブつき馬が頭を振って脅えるのを見て、笑うように目が細められた。布防具の隙間から僅かに覗く流麗な睫毛の下に、二重の円を描く銀色の瞳が輝いている。

やがて旅人は一匹と一頭の供を連れ、まだ遙か遠く塵気楼にさえその姿を現さない、自身の旅の目的地へと歩き出した。

辺りにはいつ止むことのない砂嵐が舞っている。

天高く巻き上げられて渦孤を描く、それはまるで一個の巨大な生命体のようにあり、空を奔るその姿はまるで大きな顎を開き全てを飲み込もうとしているかの如くにも見えた。

轟音が鳴り響く。その中で、旅人には声が聞こえていた。自身へ語りかけるその大いなる言葉を聞いていた。

死の砂が舞う下、延々と止むことのない声を胸に、呪われた少女はただ真っ直ぐに足を前へと進める。

強い風が吹いていた。

序編
完

プロローグ

> i 1 7 1 9 6 — 2 0 1 9 <

見渡す限りを一色の黄金が支配していた。

さえぎるもののない遠くの地平で、真っ赤に熟れた太陽が今にも燃え落ちようとしている。昼間、雲一つなく冴えきっていた空にはすでに朱色の侵食が始まり、それを反射させた地の砂粒はいまなお強すぎる日差しに全く異なる色彩へとその姿を変化させていた。

燃え上がる地面。美しさよりもまず攻撃的ななにかを感じさせるその風景に、黄金の砂以外のなものも見ることにはできない。

砂漠。そして一口で砂漠とは言っても千差万別である。岩だらけの砂漠もあれば、水源が近いために短草が生え進んだステップまで。もちろん気候の差も大きく異なる。大別して言うならここは砂漠、一般的には砂海と分類される場所だった。

一見すると何の変哲もなく、何十年の時を経ようとも姿を変えな
いでいるように思える風景だが、実はそうではない。砂海には人をも飲み込む急激な流砂があり、例えゆっくりとした流れの場所であっても常に移動している。そこにまだ解明されていない水源。水の沸き場が変化することで、この惑星における生活圏は大きく変化した。水源に根を下ろす植物も、その水と植物を求めて集まる動物も、その水と植物と動物を求めて集まる生物も。

つまり砂海とはこの惑星において、母なる大地、その気まぐれを最も顕著に表す存在であった。

水源と水源の間にはどうしても砂海を通らなければならない。携

帯可能な水と食料に限りある以上、長距離の移動のためには複数の水源を通過しなければならぬが、その途中の水源が不意に枯渇していることなど珍しくもなかった。

近場に他の水源がある場所なら引き帰すことも出来るが、そうでない場所でそのような事態が起こった場合、そこにはただ物言わぬ死骸が落ちることになる。自身以外ほとんど水分がないためせつかくの養分も肥やしとなることすら叶わず、ただ朽ちて抜け落ちた眼窩の暗闇から怨嗟の視線を空へと仰げる。そうした骸の姿は砂海に無数に存在していた。

もちろん、人とてその例外ではない。

世界に存在する三つの大水源　その下でこそ安定した生活を送れるが、その肥沃な水源の恵みも下流になればなるほど乏しくなる。ゆえにこの惑星の人々の根底には移動を前提とした生活風習があった。また、そういった集団規模以外にも、物品と情報の流通を行う商人や旅人は商隊を組み、あるいは個人で砂の海を渡り歩くことになる。必然、先のような不幸にめぐり合った者の結末は同じであった。

人と動物が異なる点は数多いが、群体としての情報の共有は人が砂海に生きる上で最も重要な能力といえる。どこに水源があり、どの水源が枯れ果ててしまったか。自然と通る道が集約されていき航路と呼ばれ、そうしてその途中にはオアシスや、また集落そのものができていくこともある。

ここもまた一つの航路だった。ただし人の往来は少ない。途中にもろくなオアシスがなく、そのことがいつそう過疎化に拍車をかけているのだった。今も砂上を歩く人影はなく、なだらかな丘の上に一人の旅人の姿があるのみである。

背は低い。一般的な防砂具に身を包み、隣にはこぶつき馬を連れ
ている。顔立ちはほとんどうかがえない。西の地平に沈む太陽を眺
めていたその旅人がやがて丘の麓へと足を向け、そこには以前この
航路を通った、名も知れぬ旅人が一夜を過ごした名残が残っていた。
焚き火の跡と、いくつかのまだ使えそうな木材の切れ端。水源など
なく休憩所と名づけられるようなものでもないが、航路が決まっ
ている以上、人が休息を得る場所もまた限られてくる道理だった。

もつとも、刻々と地形が変化する砂海では場所の定置観測はほぼ
不可能であり、方角と夜空に浮かぶ星々から自身の位置を特定し、
前持って伝え聞いた休憩場所の検討をつけるしかない。杭を打っ
てこぶつき馬の曳き綱を固定する。火種を起こし、手馴れた仕草で焚
き火を組み上げた旅人の周囲で、急速に夜の帳が落ちようとしてい
た。

瞬き始めた満天の星を見上げ、旅人は懐から取り出した地図とそ
の位置を照らしあわせて現在地を確認する。そのすぐ後ろに、音も
なく一対の獰猛な光が生まれた。

近寄る気配も足音もなく、座った旅人とほとんど変わらない高さ
の縦に細い虹彩を輝かせた光の持ち主は、そのままゆっくりと歩を
進めて旅人の背後に近づくと、その肩にのっそりと巨大な顎を乗せ
た。

焚き火に照らし出された姿は、この星に生息する砂虎と呼ばれる
ものである。砂海で最も凶暴な肉食獣。単体で人を襲うこともあれ
ば群れを作り商隊を襲うこともあるその獣は、肩に急な重さがかか
って体勢を崩しかけた旅人の頬に自らを擦り寄せると大きく喉を
鳴らした。

人一人よりさらに大きなその姿は、実は砂虎としてはまだ成長途
上のものでしかないのだが、人の体からすれば充分以上に巨大な子

猫に遠慮なく身体を押し付けられ、旅人は大きくよろけそうになりながらその顎を撫でた。

困ったような嘆息と共に、鈴の音が漏れる。豊かな毛がくすぐる耳元で名前を囁かれた砂虎は大顎からぞろりとした剣歯を覗かせ、機嫌よくそれに応えた。

子供とはいえ広く大きい砂虎の身体に身を預けて、旅人が再び空を見上げた。

東の空には月齢のやや欠けた月が昇っていた。昼に空にある燃え上がるものと、夜に静かに浮かぶもの。常に同じ姿で地上を照らす太陽と違い、月は日によってその姿を変える。その形の変化の周期と、それによって天頂に上る時刻との関連性について、昔、短い旅の同行者から教わったことがあった。

月の姿を映した瞳が一瞬だけ揺らぎ、瞬いて消える。

空へ向けられた銀色の瞳孔に、不可思議な二重の線が浮かび上がっていた。

水は地下より沸き出で、低きへと流れる。最も高き場所　水源を確保した者が強者となり、源泉から離れば離れるほどその立場は弱く、貧しくなる。

ゆえに、源泉の存在はこの世界において最も単純な闘争の理由と成り得る。より多く、より高い位置にある水源、その地上への表出地を人々は争い求め、そこを手にしたものが権力を握る歴史が続いていた。

一つの大大陸の中央、ツヴァイ帝国は帝都ヴァルガード自身のそれと水陸最大の商業都市トマスの水源を併せ持つ一大勢力であり、その軍事力は他を凌駕していた。特にトマス水源は各地に散在する多くの水源と直結された商業・交通の要路であり、『唯一の水源』の名称を冠してもいる。トマスはツヴァイに属するがその立場は大都市としては危険なほどまで巨大であり、両者の関係は張り詰めた糸のような状況が続いていた。水陸最大の軍事国家の潜在的な敵の最大は、このトマスであるとすら言えた。

そのトマスから南東に、こちらは敵対がすでに顕在化している強大な国家が存在する。はるか昔、東方に存在した騎馬民族の末裔を自称する国の名前はボノクスといい、ツヴァイと長らく水陸の覇を競ってきた国である。その版図は一時、ツヴァイをも凌駕するほどまでに膨れ上がった時期もあったが、領地拡大における空洞化、そして近年のバーミリア水陸東方における水源量減少の事態が直接の引き金となって以降、全体的に見れば領土縮小政策をとっている。

水源量が不安定なことを懸念してツヴァイも積極的な逆襲を控えており、両者は一種の小康状態に陥っていた。人間の国家が起こす

軍事活動など、惑星の気まぐれにかかれば砂上の一粒のように吹き飛ばされるものでしかない。

そこに加えられるツヴァイの懸念が富の象徴であるトマスの存在である。建国の忠臣によつて切り開かれた土地であるトマスはその起源に加えて商業的な意味からも、一地方都市という枠組みからは明らかに外れており、表立った抗争こそないものの、もし次にどちらかが相手国への遠征を企図した場合、トマスはボノクス側に立つのではないか。最近ではそのような噂までもが酒場をにぎわしている。

ある意味では、その三すくみのような関係こそが無用な戦火を鎮めていとも言えた。もちろん、いつかくるその日に備え、誰もが今もいずこかへと騒乱の種火を溜め込んでいるのに違いなかった。

ヴァルガードとボノクスとの間に直接の交易水路はないが、トマスとの間には築かれている。国家として時に戦争も辞さない関係でも、互いに互いの交易品を必要とすることに変わりはない。特にボノクスは良質な毛皮の産地として随一であり、互いに槍を突き合いながらもトマスを介することで貿易関係は続けられていたほどである。

トマスから南へ流れ、それから分派する水路の一つがそのままボノクスへと続いている。それ以外にも砂漠を中継して複数の商航路は存在したが、この地方における大規模な水源減少によつてその多くが廃れていた。航路は厳選され、限定されるゆえに行き交う品々の価値は急騰している。そのことが、最近では両国の新しい火種にもなるうとしていた。

その廃れた航路の一つを今歩いている、猛獣を連れた旅人は商人ではなかった。

傍らに連れられたこぶつき馬には水、食料以外の荷は見えず、後ろに荷車も引いていない。野盗でもなかった。そういった類はまず人の往来の激しいところに集まるものであるからだ。

砂上での一泊を終えた旅人は、簡単な朝食をとると、取り出した地図を確認して改めて南東へと足を向けた。こぶつき馬の手綱はひいているが、近くに砂虎の姿はない。体躯に見合うだけの食料が必要なその猛獣は、今頃自らの餌を探し求めているところだった。とはいっても旅人の風上へ行くことは稀で、一日以上の距離を開けることもない。今も、旅人が呼べばすぐにその姿を現すだろう。

しかし旅人はそうせず、こぶつき馬だけを共に歩を進めている。

元来、人と相容れぬ存在である砂虎は、長い年月を経て家畜化された様々な動物種と違い、人と共存することは不可能だと思われていた。必ずしもそれが正しいわけではないことの証明が旅人とその一匹の砂虎の存在であるのだが、他の人間が彼らを見たときに見せる反応は概ね一致している。恐れるだけならまだしも、なかには槍を向けてくる者もあり、それを連れられた旅人自身まであやしげな術を使うとして町を追われたこともあった。

命を落としかけたことさえある。それから彼らは日中、互いに距離をとって移動するようになった。航路もなるべく人通りの多いものは避けている。今、旅人が寂れたこの航路を使っている理由の一つも、そうしたものに他ならなかった。

太陽の位置はまだ空の半ばだったが、日光は既に充分な脅威を持って地上へと降り注いでいた。昼夜での激しい寒暖差は砂海の特徴の一つで、旅慣れた者でも容赦なく体力を削られていく。手綱を引くこぶつき馬と無口を競うようにして、旅人は歩を進めていた。風もなく、動物の息吹を感じることもない。だから、こぶつき馬の吐く呼吸と砂を踏みしめる音にまじって響いた遠吠えを聞き逃すこと

もなかった。

雄叫びには聞き覚えがあった。その声が威嚇と、同時にさほどの緊急性を告げてはいないことにも気づいている。だから旅人は口元に右手をあてて高く指笛を鳴らすと、さほど急がずに声のした方へと向かった。隣では、耳元で騒がれたこぶつき馬が五月蠅そうに耳を動かしている。

いかなる風象の影響か、小高く盛り上がった砂丘を迂回するように回った旅人は、そこで視界に飛び込んできたものに軽く目をしばたかせた。それまでの青と黄の世界とは全く異なる世界が目の前に広がっていた。

そこは水島とも呼ばれる、砂海の憩いの場だった。濃く、薄い緑と茶に囲まれるよう中央にひっそりと姿を現している水源。その脇に見慣れた巨体と、それを目の前に腰を抜かしている一人の姿があった。

砂虎は攻撃態勢までとっていない。つまりその必要はないと判断したのでろう。獲物を逃がさず、また自身いつでも逃げられる慎重な距離で円を描くようにしていた肉食猛獣は、旅人が姿を現すとひらりと身を翻してそちらに駆け寄った。挨拶のように身を寄せてくる砂虎の咽喉をなで上げながら、旅人は地に伏した誰かの目の前に進み出た。声をかける。

「きみ、大丈夫？」

そこにいたのは、まだ十を数えたばかりのような少年だった。近くには不釣り合いな大きさの、一見してよく使い込まれていることわかる弓が落ちていた。砂虎を目にしたことがよほどのショックだったのか、大きく見開かれた目がゆっくりと旅人に焦点をあわせ、その隣の砂虎の姿まで捉えて再度悲鳴を上げた。頭を抱えて何者かへ祈り始めた少年の姿にため息を漏らし、旅人は砂虎に合図して後

るへさがらせた。不満そうに一鳴きしてから数歩下がり、行儀よく腰を下ろす連れに微笑んで、少年へと振り返る。

「きみ、……きみ。もう大丈夫だから」

まるで角があればそこから全身を食いつかれてしまつても思っているかのように必死に姿を丸めている少年は、旅人が何度か声をかけるうちによやく恐慌状態から脱することができたらしい。脅えの残つた色の瞳が、旅人を見た。

少年から砂虎の姿を隠すように身体をずらしながら、旅人は懐から水袋を取り出して目の前の相手に差し出した。まだ震えの収まらないまま受け取り、ゆっくり口に運んだ少年が大きく息をついたのを確認してから、改めて訊ねる。

「近くの子？」

そうあたりをつけたのは、少年が旅装ではなかったからだ。日差しと、砂を防ぐ最低限の格好ではあるが、日中はともかく夜の急激な冷え込みにまで耐えられるような姿ではない。少年は頷き、南の方角を指し示した。

「すぐ向こうに、あるんだ。もうだいぶ、人が減っちゃったけど」
「そう」

頷いて旅人は水辺へと近づいた。

泉は、動植物を癒すのに十分な水量を誇っていた。この程度の規模であれば、文字通りのオアシス。砂海を行きかう人々の憩いの場になつてもおかしくはない。それがほとんど誰もいないというのは、つまり商航路が寂れたことの影響だろう。水がないところに人は生きられないが、それだけではない。

実際、前に寄つた集落で聞いた話にも少年のいう集落の存在は出ていなかった。ようするに、忘れられた村というわけだ。

「あれ」

退屈そうに尻尾を振っている砂虎を直接見ないようにして、少年が恐々とした口調で聞いてきた。

「飼ってるの？」

旅人は即答しなかった。

「一緒に旅してるの？」

はつとして少年が旅人を見やり、なにかを確認するように嚴重に巻かれた防砂具の奥を覗き込むようにしてから、慌てて視線をそらした。

「でも、……怖くない？ あれつて。砂虎だろ？」

「子どもの頃から一緒だから。大丈夫」

少年から水袋を受け取り、水を汲みながら旅人は答え、立ち上がった。こぶつき馬を引いて水を飲ませ、旅人が現れる前にすでに水分補給はすませてあるらしい砂虎の様子を確認して、

「驚かせてごめんなさい。それじゃ」

「待って！」

去ろうとしたところで声をかけられる。

「うちに泊まっていきなよっ。この先は夜までに着くようなオアシスなんてないし、明日の朝早くに出たほうがいい。日の出の前に出れば夜には次の村に着くはずだよ」

一般的な旅なら少年の言い分は正しいのかもしれないが、この場合はまた少し事情が異なる。水と食料が充分にある上、旅の同伴に砂虎がいる以上、集落に寄ることは極力避けるべきだった。砂海の夜は危険だが、砂虎が側にいれば温かさも、他の猛獣も恐ろしくはない。

「せっかくだけど」

断るために肩越しに少年を見た旅人は、そこにある必死な表情にそれ以上続けることができなくなってしまった。

なんの意図があつてのものかはわからない。だが子どもながらの真剣さには、相応の理由があるのだろう。だからといってそれにつ

きあつのはただのお人よしでしかないが。旅の連れである砂虎を見ると、呆れた様な上目づかいがあった。もう一方の連れであるこぶつき馬を見れば、いつもどおりの無表情。

旅人は、防砂具の中で薄いため息をついた。

「それじゃあ、一晚だけ。お世話になるわ」

「ほんとうかいっ」

目に見えて表情を輝かせた少年が旅人の手からひったくるようにこぶつき馬の手綱を取ると、意気揚々と先導をはじめめる。

「ありがとう！ 俺はセスク。お姉さんは？」

「サリュ。こつちの子は、クアル」

「よろしく。えっと……クアルもなっ」

傍らを歩く砂虎に半ばおびえながら声をかける少年の後ろを歩きつつ、サリュと名乗った旅人は遠くに見え始めた古びた集落の姿を視界に、なにか思い出す表情になっていた。

忘れられた村。子ども。そして旅人。別に珍しい組み合わせではない。おそらくこの星のどこにでもあり、起こったと同時に砂に掻き消されていってしまう些細事だろう。しかし彼女が決して忘れることのできない過去を、それは呼び起こすのだった。

多くの土壁が立ち並んだ集落は、全体が煙るような灰色に包まれていた。慢性的な砂の侵食に風のない時でも色彩を奪われてしまう、それもまたどこにでもある光景ではあったが、視界の全てに活気のなさを感じてしまうのは少年からすでに人通りのないことを聞いていたせいかもしれない。

集落の中央道を歩きながら誰ともすれ違わず、それがいつそう彼女の記憶にある故郷を思い出させたが、一つだけ異なっているのは固く閉ざされた住居のあちこちから息を殺した雰囲気を感じられることだった。そうして、じっとこちらを窺っている。

やはりクアルを連れてこなくてよかった。排他的な視線にさらされながら、そんなことを思う。敵意にも似たこんな環境の中では彼は歓迎されないだろうし、たとえそうでなくとも人より敏感な砂虎は落ち着かないだろう。オアシスの木陰でうたた寝している方がよほどいい。

また少年のような誰かに遭遇する恐れも少ないはずだった。あの沸き場は集落の離れに存在していて、人通りの多かつた昔こそよく使われていたそうだが、今では村の中にある沸き場だけで充分にまかなえてしまっているらしい。

「だから、今じゃあそこに行くのは獵師くらいなんだ。俺も行くんだぜ」

少年は得意そうに胸をそらしたが、砂虎とはいえクアルを前に頭を抱えて震えているようでは、見習いもいいところではないだろうか。意地悪くそんなことを思っているうちに、目の前に数人の男達が現れた。

それぞれ弓や槍を手にした精悍な男達が、厳しい視線をこちらに

向けていた。その中央、飛びぬけて厚い体格の男が底響きの声を発した。

「セスク」

「親父っ」

男は駆け寄った少年の背にある弓にちらりと目をやると、無言のままその頬を張り飛ばした。地面に飛ばされる少年を見下ろして声を荒げる。

「馬鹿野郎。外の泉に一人で行くなって言ってるだろうが」

「ご、ごめん……でもよっ」

「でもじゃねえ。泉の方から獣の音がしたからって、大勢で行くところだったんだ。村の皆に余計な心配かけさせやがって！」

押し黙ってしまう少年を怒りの収まらない瞳で睨みつけ、男は後ろを振り返った。

「すまねえ、倅はこのとおり無事だ。わざわざ集まってくれてあげがとよ。迷惑かけて本当に悪かった」

頭を下げる姿の後ろで、少年は下唇をかみ締めてなにかを耐えようとしている。迷惑そうな表情を浮かべながらも少年の無事を喜んでみせた男たちが散り散りになる前、サリュのことを気にするようになっているのに父親がうなずいて、

「旅の人、お見苦しいところを申し訳ない。たいしたもてなしもできねえが、よかったら家で休んでいってくれ」

声にはむしる強制に近い響きがあった。サリュは黙ったまま頷いた。

案内された家屋は、一般的な移動式住居に仮設の木居を増築されていた。他の住居より大きいのは、村の宿場としての役割を持っていた。

いるからだろう。

だからこそ、人気がない寂しさもまた大きい。こぶつき馬を隣接した厩につなぎ、閑散とした屋内に案内されたサリュは、暗がりから内部から家全体を押しつぶそうとしているような印象を受けた。窓を閉じきっているせいかもしれない。彼女の心に生じた思いを聞き取ったように男が木枠に手をやり、たてつけの悪い窓を勢いよく押し開ける。さつと音がするように、日差しが射しこんだ。砂の侵入を防ぐための白い布を下ろし、

「セスク。水だ。それと、弓はきちんとなおしておけよ。弦を外し忘れてたりしたら、ただじゃおかねえぞ」

中央の丸机を指し示した男に従って腰を下ろしたサリュの対面に座る。

「さて。ぶしつけで悪いが、旅の人。少し話を聞かせてもらえないかね」

伏し目がちに、机の中央を見るようにしている彼女に対して宿の主人は言った。

「気を悪くせんでくれ。ただでさえめつたに人が来ることのない村なんだ。それに、女子どもの一人旅なんてなると、どうしたって珍しい」

男と会ってからまだ一言も発していなかったが、さすがに客商売をしているだけあって、その程度はお見通しらしい。そこではじめてサリュは目線を上げ、宿の主人と正対した。

小さく息を呑む音が響いた。

「あなた、その目……」

防砂具の隙間から覗く彼女の瞳孔の中に輝く二重を見た主人は、しばらく口を閉ざした後、気を取り直すようにかぶりをふった。

「いや。すまねえ。それで、いったいどんな用事でこの村に？」

「いえ」

静かに彼女は否定する。

「この村に用があつたわけではありません。タニルというところへ行くつもりだつたのですが、さっきの泉で出会つた彼に一泊していただくよう勧められたので」

それを聞いて、男がちらりと感情を揺らした。残念なような、ほつとしたような表情が一瞬よぎり、すぐに元に戻る。

「ああ、そうか。じゃああいつを助けてくれたのは本当にただの偶然なんだな」

でかい獣に蹴り飛ばされそうなのを、この人に助けてもらった。セスクはそう自分の父親に説明していた。

彼女は答えなかった。言葉にして嘘をつくつもりはなかった。かといつて、全てを説明するつもりも。クアルの存在を隠すこと。それが彼女が少年に了承させたこの村に滞在する条件だった。

「悪い。命の恩人に向かつて失礼な口をきいちゃまった。そういうことなら、そうだな。ぜひここに泊まっていつてくれ。ご覧のようで、たいしたものが出せるわけじゃないが、砂の上よりはましなはずだ」

男はファラルドと名乗った。村で唯一の宿屋と、獵師を兼ねていると言う。一人息子のセスクとここに住んでいるらしく、そのセスクがこぼしそうな勢いで水を持ってきたのと入れ替わりに席を立ちあがると、

「それじゃあセスク、俺は拵えにもどるから客人を部屋にお通ししておくんぞぞ」

そのまま奥へと去ろうとするファラルドを呼び止めて、サリュは前払いで代金を支払おうとした。彼女の取り出した、辺境では通貨よりも金銭的な価値を有することも多い岩塩のかけらをじろりと睨み、男は鼻を吹かせた。

「息子の恩人だ。そんなもんいらねえよ。あとで昼食代わりのスーブでも持っていかせるから、ゆっくりしてくれ」

そのまま何も言わずに姿を消した父親へ肩をすくめて、少年が口を開いた。

「気にすんなって、村一番の頑固親父なんだから。それに、そんなものうちじゃ大した価値はないぜ」

「……そう」

考え込むようにする彼女の様子にまるで気づかない明るさで言葉が続く。

「それより、部屋にいこうよ。一番いい部屋に案内するからさっ」

水差しを持った少年に連れられて案内された二階の部屋で、食事や風呂について一通りの案内を終えた少年が去ってから、サリュはまず窓際へと向かった。見下ろした外の景色に、数人の村人が見える。その中にファラルドの姿もあった。おそらく他の村人に自分の説明をしているのだろう。悪意があつてのことではなく、それも村の渉外係としての役目なのだ。

そう警戒する必要もないと思われたが、彼女は部屋の間取りと、万が一の時に窓から脱出する公算をつけるのを忘れなかった。直接飛び降りるにはやや高いが、ちょうど良い距離に低木があるのを覚えておく。

それから村の遠く、集落から離れてうっそうとした緑に包まれた泉　ファラルドは外泉と言っていた、に目をやった。砂海に生きる生態系の中で頂点に位置する砂虎への心配はなかったが、ここでは指笛で吹けばすぐに再会というわけにはいかない。そのことへのわずかな不安と、そんな我俣を許してくれたことへの申し訳なさを思ってから、窓に背を向けた。

こぶつき馬から下ろした積み荷の横で、彼女はゆっくりと防砂衣を剥いだ。幾重にも巻いた布を丁寧に脱ぎながら、いたるところに紛れ込んだ砂塵がなるべく飛び散らないように気をつける。宿に入る前に丁寧に叩き落としたというのに、全身の防砂衣を取り払った

頃には床に少くない砂が舞い落ちていた、その上に覆いかぶせるように防砂具を敷いた。そして横にあつた積み荷を上から蓋にすれば、これで砂塵が部屋に飛ぶことはない。

儀式めいた一連の動作を終えると、実際の重さよりもむしる精神的な開放感に、彼女は息を吐いた。砂に生きる者にとって防砂衣は水と等しいほど大切なもので、また外見に人と異なる点を持つ彼女にはそれ以上の意味を持っていたが、だからといって空気のように身軽に思えるものでもなかった。

少年が置いていった水差しから水を汲み、口に運ぶ。旅の途中に飲むものより格段に舌あたりのよい冷えた水だった。大きな町の宿で出る、一度沸かして不純物を取り除いた後で改めて冷やしたそれのように美味い。

続けて満足の吐息を漏らし、彼女は積み荷の整理にとりかかった。

大したものがあるわけではない。保管した乾燥食料と水の確認。それから地図を取り出して、小さな布にくるまれた欠片を引っ張り出す。黒石と呼ばれるそれで地図の今自分があるだろう付近に、集落の印を書き足した。前回測った位置からの詳しい距離と方角は、夜になってから確認するつもりだった。

そうして一通りが済んだ頃、不器用にドアを打ち鳴らす音が響いた。

「セスクだけど。入っていいかい？」

手早く拾った外套だけを羽織り扉を開けると、少年が立っていた。両手に盆を持っていて、その上では平皿が湯気にのせて食欲をそそる香りをたたせている。

「今朝とれたばかりのカウデイのスープと、黒パンと、あとラウのチーズね。チーズはサービスだから、親父には内緒だぜ」

受け取りながら、彼女は少年の示す直接的な好意の意味について考えた。

村に入った時のやりとりから、村人達と少年の間にずれのようなものがあるのは感じていた。閉鎖的な大人達と積極的な少年。それはもしかしたらただ年代の差、それに伴う価値観の相違かもしれない。経験上、かつたし、あるいはもつと単純なものかもしれない。経験上、子どもの方が彼女の連れた砂虎　そして彼女自身への恐怖を見せないことが多いのは少し不思議に思う。その少年と目が合った。

「……なに？」

盆を渡した後も少年がその場を去ろうとしないことを怪訝に思うと、なぜかそれまで呆然としていた少年が、我に返ったように背筋を伸ばし、勢いよく後ろを振り返った。

「じゃ、じゃあ、風呂。沸かしてくるからさ！　準備できたら呼びにくるよ」

しゃちほこばった態度で階段を降りる少年の姿が消えるのを見送り、彼女は部屋に戻った。固い感触のベッドに座り、ひざの上に置いた盆からスープを一すくいして、口に運ぶ。美味しい。

旅の同行者達のことを思った。こぶつき馬はきつと今頃、既に餌い葉を食しているだろう。もしかしたら少年に身体を梳いてもらっているかもしれない。クアルはなにをしているだろうか。思う存分堪能した水浴びを終えて、木陰でうつらうつらと頭を揺らしているかも。夜か、明日の朝には外泉の様子を見にいこうと決めて、サリユは目の前へと意識を専念した。

突然送り込まれてきた思わぬ豪華な食事に驚喜した胃がようやく落ち着いた頃、再び少年がやってきた。風呂の準備ができたということだった。

火焚きがよほど熱かったのか、すずみに混じって頬が赤くなってい

る。逃げるように去っていった少年の動向を不思議に思いながら彼女が準備を整え、階下におりたところで少年と父親のやり取りが聞こえてきた。

「セスク。客人には言ってきたのか？」

「へっ。ん、ああ。伝えたよ」

「……わかっているとと思うが、おめえ、命の恩人になにか悪さしようなんて考えてたらはっ倒すからな」

「ば、馬っ鹿じゃねえの！」

そんなやり取りを耳に流しながら、立て付けの悪い扉から浴場に滑り込んだ。

風呂のつくりは古かったが、潤沢なお湯が張られていた。入浴の前に汚れた衣服の洗濯をして汗をかき、身体の隅々の砂粒を洗い落としてのぼせ上がるまで湯船に使った。この時間、わざわざ沸かした風呂に入れることは最上の贅沢だった。

豊富な水に食料。商航路の中継地点として十分に機能できるだけの両者が揃っていて、しかし肝心の利用者がいないというのはひどくもつたない気がした。思いは、もちろん村人達の方がよほど鬱積させていることだろう。

人は水がなければ生きていけないが、それだけでも生きていくことはできない。必要なのは、人。そして物の流れだからだった。数年前に起きたバーミリア水陸東方の大規模干ばつ。この地はまさにその一端であり、トマスとボノクスを介在する貴重な航路であった幾つかは途中のオアシスと共に砂に埋もれ、まだ十分な水量を誇っていたとしても、人の行き来がなくなったことで村はさびれてしまう。むしろ、周囲の同じような村落が次々に無くなっていく状況の中で、数年も集落としての体裁を保っているこの村がむしろ稀有

な存在といえた。

それにはなにか特別な要因があるのかもしれない。考えをめぐらしているうちに湯あたりしそうになっていて自分に気づき、サリュは名残惜しく思いながら浴槽から出た。

疲れが出たのだろう。部屋に戻るとすぐに眠気が押し寄せ、夕食までのそう短くない時間、サリュはベッドの脇の椅子に座って目を閉じた。ベッドに横にならなかったのは、起きられなくなるのを心配したからだ。せつかくの準備を無駄にしまうのは悪いし、自衛の問題もある。

夢を見た気がした。しかしそれがどのような内容だったかは起きた途端に忘れていく。彼女はぼんやりと開いた瞳で外を見た。開け晒した木窓にかけられた防塵布を通した日差しが強さにはまだ驚がないようで、どの程度眠ってしまったかはわからない。立ち上がり、サリュは防砂具を頭から被って部屋を出た。

気配の沈みこんだ廊下を歩く。一歩進むたびに床板がきしむ、それが意図した作りかどうかはともかく、自然と彼女は慎重な足取りになった。砂虎を師に仰ぐような静かさで進み、階段を下りる手前で、壁にかけられた剥製に目が留まった。

大型の草食動物が肢体を伸ばした形で飾られている。彼女の知らない種類の動物だった。半弧を描いた角と、長く垂れた柔毛。その下に記された碑文に眉をひそめた。

『アタリアの奇跡に喜びを皆で。祝いの地で』

短い文のあとには、恐らくその日の日付だろう数字が並んでいる。この狩人が獲物をしとめたのは、今からもう十年近く前のことらしい。

サリュは文字に弱い。子どもの頃はそんなものを学習できる環境ではなかったし、今では多少読み書きができるようになったものの、そのほとんどが独学のために詳しい修辞や文法についてはあいまいだった。碑に書かれた中身も、大雑把に意識された彼女の解釈でしかない。しかしそれでも気になったのは、いま触れた言葉にどこかで聞き覚えがあったからだ。

どこだっただろう。文字に触れる機会というのは決して多くない。すこし記憶をさらえば思いつくことが出来そうだったが、

「 客人。飯の用意ができてるぜ」

階下からの声に振り返った先でファラルドがこちらを眺め上げている。精悍な顔つきでなかに鋭い眼光が彼女を捉え、サリュは意識を目の前に戻すことができなかつた。男に頷いて、彼女は階段へと足を向けた。

がらんと広い食堂の一角で、三人は食卓を囲んだ。

サリュとファラルドとセスク。彼らはなぜ二人きりで住んでいるのだらうという疑問が沸いたが、もちろん彼女はそのことを尋ねはしなかつた。

用意された食事の中身は豪華だった。肉菜とりどりの、華やかさ色彩の皿が卓上に並んでいる。自分がいる室内、その内装とのあまりのそぐわなさに、サリュは一瞬戸惑いを覚えた。ここまで贅沢な食事は過去一度しか彼女には覚えがなかつた。

ファラルドとセスクが、眉間に中指をあてる仕草で目を閉じる。恐らく彼らの信じる存在への祈りを捧げているのだらう。黙って彼らを待っていると、やがて二人が同時に目を開いた。

「さあ飯だ。の前に、客人。それ、外すわけにはいかねえのかい」
ファラルドの言葉に、サリユはしばらく黙して答えなかった。

男が言っているのは彼女の格好のことだった。サリユはこのまますぐに外に出てもいいよう、しっかりと防砂衣を身につけていた。

「ここには砂も、なにか隠さなきゃならんようなそれ以外もねえ。そんなんじゃないの？この気が落ち着かないんだがな。せつかくの飯がまぶくなっちゃう」

つまらなそうに言うファラルドの横で、少年が緊張した面持ちで顔を強張らせている。いくらかの沈黙の後、彼らに届かぬよう息を漏らしてから、サリユはゆっくりと頭に被った布防具を剥いだ。

露わになった彼女の顔を見た男がわずかに目を見開いた。

「こりゃ……驚いたな。えらいべっぴんさんじゃねえか」

サリユは表情一つ動かさない。

「なるほどな。あんたが顔を隠したがるのもわかる。それに」

言いかけて、ファラルドは頭を振ってから肩をすくめた。

「まあいい。とにかく食おう。熱い皿を冷やすことは我らが火の神への冒瀆だ。セスク、なにぼさつとしてやがる、肉を切れ」

なぜか顔を赤くしている少年が怒鳴りつけられ、あわてて主菜のとりわけにかかるのを見ながら、サリユは男の言った火の神という単語を心のうちに書きとめた。

ファラルドは決して雄弁な男ではなかった。性格的にはサリユも似たようなものであり、昼間話した限りでは快活な印象を受けたセスクという名の少年もこの場では黙して食事を続けている。誰もがしばらく無言だったが、サリユが断わり一人で酒を傾けていたファラルドが、やがて酒精のまじった息を吐いた。

「客人。あんたはどのあたりの生まれだい」

問われて、サリユは自分の生まれた小さな集落の名前をあげた。

「聞かねえ名だな」

「もうなくなつてしまつた、小さな村です」

淡々と告げると、男は渋面になつた。

「すまん。嫌なことを聞いちまつたかな」

「いえ」

答えるサリュの口調は静かに凧いでいる。

「まあ、うちも似たようなもんだ。ここら一帯じゃ、どんどん集落がなくなつてる。これでも昔は人の往来がとだえない頃もあつたんだがね。この宿にも、あんたは本当に久しぶりのお客だよ」

投げやりに言い捨てる男の言葉に、サリュは思考した。男が何を言いたいのか。あるいは何を言わせたいか。短い検討の結果、口を開く。

「けれど、この村はとても潤沢です。水も食料も無くなる気配などなさそうに見えます」

男は大きく口の端を歪めた。それが笑顔であると、少しして彼女は気づいた。

「まあな。しかしそれだけだ。ここは取り残された村さ。いずれ滅ぶことがわかりきつてる。残されるつてのはそういうことだ。そうだろう？」

記憶に埋もれかけた過去の、あの集落を思い出す。新天地を目指して出て行つた人々から捨て置かれた、過去の残骸としての生活体そこに生きていた極少数の人々の死人のように虚ろな表情を思い出し、彼女は男に首肯した。

だが、内心では不思議に思つてもいる。彼女が最後を見届けたあの村とここでは微妙に差異があるように感じられた。その違和感の正体がなんなのか、彼女は男の歪な笑顔を見て悟つた。

不平だ。この男は、今ある状態に不満を抱いている。

彼女の集落ではそんなものを持つた人間はいなかつた。あの集落

に残ったのは、様々な事情があるにせよ、胸に絶望を残した者たちだけだった。男は違う。不満はすなわち、将来に対してまだ希望を捨てきれずにいるということでもあるはずだ。

それがあの砂に埋もれた集落と、ここの違いだ。では何がそれをもたらすのか。今度はすぐに思い至った。男はさきほど、こちらの言葉を否定はしなかった。つまり、

「このまま忘れ去られてしまうのは、もったいないですね」

この村の水源は枯れない。少なくともファラルドはそう考えている。恐らく、他の村の人々も同じだろう。だからこそ彼らはここに残っているのだ。水だけのことではない。普通なら価値を有するはずの岩塩の固まりを見て彼らが顔色一つ変えなかったことをふと彼女は思い出した。

男は答えなかった。探るような視線が向けられる。

サリユはそれに気づかない振りをして、セスクの取り分けてくれた肉料理に手をつけた。瞬きする。よく脂の乗った肉に柔らかく火が通り、それでいて外側はぱりつと絶妙な加減で焼かれている。中に詰められた香草も芳しかった。率直に言って、とても美味しい。

少年が、得意げな表情で自分を見ていることに彼女は気づいた。

なにかを待ちわびているのがあまりにみえすいていて、意地を張る気にもなれずにサリユは言った。

「美味しい」

「へへっ。だろ、うちの得意料理なんだよ、それ。香草のチヨイスがちよいと秘伝ってやつでさ、こっちではけっこうとれるんだけど。知ってつかない。ザベージャっていい」

それまでの籬が外れたようにしゃべりだす少年の頭を殴りつけて黙らせると、いつのまにか真剣な表情に戻っているファラルドが彼女を見た。

「なあ、客人。あんた、タニルに行くと言ってたな。ボノクスへ渡

るつもりか？」

タニルはツヴァイとボノクスの国境近くにある大きな街で、近年の水源枯渇騒ぎのなかでもなんとか安定した水量を保っているという噂が響いている。この時期、わざわざ砂海を通ってその街に行きたがる理由をそう考えるのは当然だったが、サリュはあいまいに首を振った。

「そうと決まっているわけでは。ただ、そうなるかもしれませんが彼女の旅にははっきりとした目的地が定まっているわけではないからだった。どこどこにいけばよい、という答えがでていけば如何にも楽そうではあるが、彼女の探し物はそうしたものではない。

男は黙り込み、それから言った。

「そうかい。なら、一つ頼みがあるんだが」

サリュは黙って続きを待った。ファラルドの隣で、セスクが不思議そうに自分の父親を見上げているのが視界に映る。

「タニルについたら、この村のことを伝えてくれねえか。水も食料も十分に溢れてる、航路の中継点に使いそうな場所があるってな」

「……その程度なら。私が生きてたどり着くことができればですが」

「星は読めるんだらう？ この村からタニルまでの正確な方向は、あとで伝えるよ」

彼女は頷いた。

意外だった。もつと難解な頼みごとをされるものと思っていたのだ。例えば、彼の息子のことについてといったような。もしそうなら、自分は何と答えていたのだろうか。考えたが、答えは容易に出なかった。

彼女が頼みを受け入れたことで、ファラルドの機嫌は多少上向いたようだった。嬉しげに酒を注ぎ、思い切り飲み干す。それからやや多弁に村のことを語りだした。

サリュは無言でその話を聞いた。他人の話を聞くのは苦痛ではなかった。言葉を交わすことも、いつもの旅の連れとはそうしたことではないから、嫌いではない。昔を懐かしむようなファラルドとそれに茶々をいれては怒られるセスクのやりとりは、無関係の彼女にも微笑ましいものだった。

やがて食事の終わりごろ、思い出したようにファラルドが訊ねたのは、彼女の旅の目的についてだった。サリュは銀色にも見える不可思議な瞳を伏せ、囁くように言った。

「人を探しているんです」

薄い希望を抱きながらその名を口にする。

それを聞いた彼らの反応はしかし、やはり彼女の想いに応えるものではなかった。

夕餉を終え、サリュは部屋に戻った。

本当はクアルの様子を見に行きたかったのだが、外を歩きたいという彼女の希望を聞いたファラルドはいい顔をしなかった。恐らく他の村人の感情を考えてのことだろう。思えば、宿屋の食堂といえば酒場、村人の夜の集い場も兼ねることが多いはずなのに、まだ時間がはやかっただとはいえ、今夜は誰一人としてそこを訪れてくることがなかった。警戒されているのだ。

久しく訪れなかった外からの訪問者となれば、それも当然だろうか。少し符に落ちない部分もあったが、わざわざ彼らの警戒心を煽る真似をするべきではないと思ひ、彼女は外出を諦めた。

となると、他に何かすることがあるわけでもない。彼女は防砂具を脱ぎ捨て、護身のナイフと荷物の奥底から取り出した一冊の本を手を寝台へ向かった。

獣脂のランプを枕元に置き、ナイフを隠す。それから清潔なシー

ツの上に横たわって本を開いた。

その本は、元は彼女の故郷にあった物である。近くの伝承やお伽話の書かれた伝奇的な内容で、古めかしい表現やわかりづらい比喩も多く、全てが理解できるわけではない。しかしこの本が彼女が文字を学習するうえで最も身近な教本だった。より正確に言うなら、この本を読むために彼女は読み書きをおぼえたのである。

そつと表紙を撫でる。本に触れる度に思い出すのは、砂漠の夜の下、焚き火の前で黙してこの本を読んでいた一人の姿だ。昔は、いたいそこに何が書かれているかまるでわからなかった。今でもまだ大部分については理解が及ばない。しかし、この本が彼女のものになってから一年近く、少しずつ中身を読み解きながら、サリユはまるでそれを暗唱しようとするかのように毎夜読みふけてきた。

今夜もそうしようと思ったのだが、実際横になってみると、自分で思っていた以上の疲れが身体に残っていた。明日は早くに出なければいけないし、早朝にはクアルの様子も見にいきたい。サリユは早々に読書を諦め、灯りを消して意識を闇に任せることにした。

輪郭を失った部屋の中で、空虚な広がりとともに閉ざされた圧迫感を感じる。宿に止まって湯を浴び、美味しい食べ物と安全な睡眠を得ることは確かに喜びではあったが、いつも彼女は寂しかった。

ここには誰もいない。

自らを抱くよう、サリユはシーツの中で丸まって眠りについた。

何かが響き渡る音にサリュの意識は揺り起こされた。

まだ夢と現の狭間にある思考の中で、沈殿した空気の重みと、いつもとは異質な匂いに触れる。警戒が即座に頭を叩き起こし、視界に飛び込んだ見慣れぬ風景に彼女はようやく自分の今いる状況を思い出した。

早朝の淡い光が、閉めきられた木窓の隙間からかすかに入り込んでいた。うつすらと伸びた光の筋に細やかな砂の粒子が舞っている。立ち上がり、窓に寄るとサリュは一気にそれを開け放った。

ひやりと乾燥した空気がまとわりつく。村はまだ静まり返っていた。夜の残りがあちこちにわだかまって残っている不透明さに混じって動くいくつかの人影もあるが、数は多くない。

空を見上げる。薄く横に伸びきった雲が段々に遠く、気配はとも静かだった。彼女の目覚めのきっかけとなった、その片鱗さえもそこにはないように思える。まぶたを閉じて耳を澄まし、やはり静寂しか辺りにないことを確かめると、サリュは安堵とも失意ともとれる息を漏らした。

聞こえない。

あるいはそれは夢の中で聞いたのかもしれない。その経験は今までもあったから、彼女は特に不思議に思わず自分の推測を受け入れ、室内へと意識を戻した。テーブルの水入れの中身を使って顔を洗い、髪には簡単に手櫛を通してただけで済ませ、防砂具を念入りに身体へ巻きつけていく。準備を終えた彼女は部屋を出て階下に降りた。

集落の朝は早い。このくらいの時間ならば既に二人も起きているだろうと思っただが、一階に彼らの姿は無かった。食堂の奥の料理場に顔を出すと、そこではすでに朝食の用意がされはじめている。やはり、もう起きている。どこにいるのだろうか。一瞬、あまりよくないことを疑りそうになり、すぐに思い直した。彼らは猟師の役も兼ねていると言っていた。

早朝は狩りに適した時間である。親子二人でどこかに向かい出ているのだろう、そう考えた彼女が危惧したのは旅の供の身の安全だった。クアル。あの甘えん坊の若い砂虎は、種としての強靭さを既に充分に持つてはいるが、ドジを踏むことがないわけではない。寝ぼけ頭の彼とファラルドがうっかり鉢合わせなどしたらいいことになることか。

一人の人間に砂虎がどうこうできるとは思えないが、不意をつかれればあるいは。彼女は宿を出て、集落の外へと足を向けた。

ひっそりと水を湛えたオアシスのほわりには、複数の動物の姿があった。いつもなら視界に入るだけで身を固くする小型の草食動物の近くに立つても、相手はこちらなど気にもしない様子で水面へと首を垂れ続けている。まるで厳格なルールにのっとっているかのようなオアシスの光景をはじめて見たときは、サリュもとても不思議に感じたものだ。

今、あたりに大型の肉食獣の姿はないが、彼らでさえも朝のこの時間、水辺に近い場所での狩りは避けるという。飢餓に苦しむ何者かが現れたらその限りではないだろうと思うのだが、そんな話も信じてしまえるほどの静謐さがこの場所にはあることも確かだった。いっただいどうして。彼女の疑問に答える言葉は昔、隣で独り言の

ように呟かれた。

「血が染み込めば、水は枯れる。そういう言い伝えがある」
こちらを見ようとしないまま続けた。

「そんなこと気にしない生き物もいるけどな」
布防具の下で、男の口元が晒っていた。

そう広くもないほとりの淵を視線でなぞるが、探している姿は見つからない。砂虎はその巨大な体格に見合っただけの食料を日々必要とする為、獲物を求めてあたりを徘徊しているのかもしれないかった。

サリュは指笛を吹くか躊躇った。近くにはファラルドや他の集落の人々がいるかもしれない。セスクは外泉には村人はあまり近づかないと言っていたが、砂虎と一緒にいるところを見られる危険は避けておきたい。

まずは探索から始めることにして、彼女は低木の生い茂った周囲を歩いた。この星の各地に点在する水島だが、そこがどの程度長く在るかは近くの植物群から推定することができる。樹木の存在は、水島としては最長期の区分で営みが続いていることの証だった。

森というまで鬱蒼と生い茂っているわけではないが、それなりの用心をしながら進む。口笛の代わりに口の中で舌を打ち鳴らし、もしかしたら連れが気づいてくれるかもしれない合図を出しながらさまよっている、果たして目の前にぬつとした巨体が姿を現した。

「クアル」

呼びかけると、彼女の連れは短い一鳴きでそれに応えた。

もとは黄色と白の体模様は、砂色に交じって判別が難しくなっている。その口元に鮮明な赤が広がっていた。どうやら食事は既にすませたらしい。嬉しそうに舌で舐めてこよよとするのを、彼女は慌てて手のひらでうけとめた。血の色をつけて集落に戻るわけにはい

かなかった。

強引な愛撫をかわして喉元をさすってやると、途端に大人しくなった彼女の猫は、くるとまるで巨体に似合わない可愛げな喉声を鳴らしてみせた。

「元気だった？」

訊ねるサリュの声も甘い。彼女にとって彼はかけがえない存在だった。言葉がわかるわけではないが、それでも気分は伝わってくる。機嫌は良さそうだった。

充分に細かい夏毛に顔をうずめると、ほこりっぱさがサリュの鼻をくすぐった。

「……あとで一緒に水浴びしようか」

この集落を出て、どこかよい水場が見つければの話だが。木片を踏みつける音が響き、彼女はそちらへ視線を送った。傍らでくつろぐ砂虎の様子からさほど警戒はしていない。セスクだった。

「あ、お、おはよ」

まだ慣れない砂虎に萎縮しているのか、声が硬い。

「おはよう。　ファラルドさんは？」

質問の意図を察した少年はややぎこちないまま首を振った。

「大丈夫。親父なら、さつき獲物を捕まえて宿に戻ったところだよ。でっかいカウデイがとれたんだ」

「どうしてここに？」

昨日、あんなにもこっぴどく怒られていたのに。サリュの放った疑問に、セスクは罰が悪そうに顔を伏せて、

「なんとなく。会えそうな気がして」

消え入りそうな声で言った。

少年の態度を不思議そうに見やり、サリュはそっけない口調で応えた。

「そう」

立ち上がり、名残惜しそうなクアルの頭を撫でる。不承不承といった感じで地に伏せる彼に微笑んで、彼女は少年へと告げた。その表情からは一瞬前までであった笑顔の余韻さえ消え去っている。

「帰りましょう」

ファラルドは宿屋の外で、血抜き作業に入っていた。二人をちらりと見ると、すぐに視線を戻す。

「セスク。飯の準備はお前がやれ。客人あんた、すぐに出るつもりだろ？」

サリユは頷いた。

「飯の間にこっちはすませとく。渡したいもんがあるから、ちょっと待っててくれや。セスク、なにしてやがる！ さっさといけ」

鉈を投げられそうな怒号に追われて駆け出していく。その後を追おうとしたサリユの背中に声がかかった。

「どこ。行ってたんだ？」

立ち止まり、彼女は平静な口調で答える。

「近くを散歩していました」

ふん、という鼻息がそれに対する返答だった。

旅の途中なら二日分にも相当しそうな量の食事を終えて少し待った頃、両腕の血を洗い落としてファラルドは戻ってきた。息子の用意した自分の膳には目もむけず、奥から一通の丸めた羊皮紙と拳大ほどの固まりを手にして帰ってきた男がサリユの対面に座り、「うちの村長が書いた挨拶状だ。タニルについたら、門番にでいい。渡してくれ」

それから机の上に転がされた大きな欠片に顎をしゃくった。

「こっちはその礼だ。重いだろが、馬に乗せりゃあ、ま、大丈夫だろ」

「ごろりと音を立てた、それは大きな岩塩の結晶だった。

この時代、通貨の流通はすでに始まっているが、その制度はいまだ整備されているとはいいいがたい状況にある。各地を治める国や領主によって幾種類もの硬貨が市場に流れ、その価値も上下の変動が激しかった。硬貨の元となる鉱物資源の供給が不安定なこともその一因である。岩塩を物流の祖としながら、いまだにそちらのほうが（特に辺境に行けば行くほど）汎用性で他より勝っているのにはそんな理由があった。

今、サリュの目の前にある岩塩の結晶は水晶のように純度が高い代物だった。それが子どもの頭ほどの大きさともなれば、その価値はほとんど宝石と同等といってよい。問いたげな視線に、ファラルドは皮肉そうに口の端を歪めた。

「このままじゃ村は砂に埋もれちまう。水や塩と一緒に。そんな自分達の命運をたくそうってんだ。別に破格ってわけでもないと思うがね」

「どうして、私に？」

「誰でもいいのさ。いや、そうでもないか。あんたは息子の命の恩人で、タニルにも行きたがってた。そのついでに手紙を渡すことくらい、やってくれねえ人間には見えねえからな。それに」

男は大きく肩をすくめて、言った。

「この村に次、いつ旅の人間が来てくれるかなんてわかったもんじやねえ」

サリュは納得した。一人で砂海を渡るといえるのは、慣れぬ者にしてみれば恐怖でしかない。自分達で行けないのなら誰かに頼むしかないが、それでもこの報酬はあまりに不相応な気もした。それはつまり、この村の資源の豊富さを物語っているのだろうか。

「届けた、というご報告には戻ってこれないかもしれませんが、そ

れでもかまわないのですか？」

「問題ねえ。あなたにも都合つてのがあるだろう」

即答するファラルドの前でしばらく考え、サリュは頭を頷かせた。
「……わかりました。必ずお届けします」

ファラルドは安堵の表情を浮かべた。書状を受け取り、サリュは出発の準備に入った。ほんの数刻でそれをすませ、部屋を出る。ファラルドとセスクの二人が玄関で彼女を待っていた。

少年が暗い顔をしているのに気づいて、彼女は訊ねた。

「大丈夫？」

「うん、あ。の。元気で」

俯いた表情で去っていく。彼の父親が呆れたように言った。

「気にせんでくれ。あの野郎、いっちょまえに色づいてやがるのさ」
答えに困り、彼女はわずかに首を引いて宿を出た。

一日振りに再会したこぶつき馬は、彼女が荷物をくくりだすといかにも面倒そうな顔つきで一鳴きし、それからため息をついた。足元には食い散らかした乾草があり、よほどいい待遇だったのがわかる。外に出ることを渋って足踏みする連れの機嫌をとりつつ村の外に向かう途中、何人かの村人とすれ違ったが、彼らは彼女と目をあわせようとしなかった。遠まきにこちらを眺めている粘つくような気配が、あまり気分の良いものではなかった。

「じゃあ、気をつけてな。タニルの方角は昨日の晩言ったとおりだ。途中のオアシスも俺達が知ってる限り伝えはしたが……実際に目で見たわけじゃないし、昔聞いたただだからな。あんまり期待はできねえ。水、もう少し用意しとかないで本当に大丈夫なのか？」

サリュは頷いた。荷を運ぶことに強いこぶつき馬だが、だからといって無駄に多く持たせても負担が大きくなってしまふ。それに、もし持ち水が半分を切ってしまうのなら、即座に戻ってくるつもりだった。無謀は砂海に生きるうえで何も良いことをもたらしはし

ない。

ファラルドからは馬がひける荷車を用意するという申し出もあったのだが、彼女はそれも断っている。商売をしているわけでもない一人旅でそれは物々しすぎるし、なにより目立ってしまうからだ。「どうするつもりだ。まさか、そのままタニルまで行くつもりか?」「はい。教えていただいた航路を辿れば、うまく廃墟で砂をかわせそうですので」

「……まあ、砂海についてはあんたのがよほどベテランだろう。タニルまで無事についてくれればなんでもいいがな」

正直な男の言葉に小さな苦笑を返し、サリユは村を出た。

色彩のない村から、さらに色彩のない景色へと視線を移し、そのなかで原色の緑が映える外泉へと足を向ける。その泉を抜けたはるか先にタニルがあるからだが、もちろん理由はそれだけではなかった。

オアシスでは一組の小型動物が水を飲んでいた。ほとりまで進み、やはり逃げようとしないうたカウディの傍らに立ち、彼女は小さく呼びかけた。

「クアル?」

返事がない。彼女がもう一度口を開きかけたところで、がさりと林の隅が揺れた。若い砂虎が姿を現し、これには番いのカウディも驚いたらしい。身をすくませる彼らに詫びて、サリユは自ら砂虎へ寄った。

問いかける視線で見上げてくる連れに返事のかわりに頭を撫でると、クアルは嬉しそうに身を寄せてきた。頬をすり、その勢いの強さにバランスを崩してしまう。サリユは手綱を放した。のしかかり、ごろごろと大きく喉を鳴らす彼をしばらくされるがままに甘やかしていた彼女は、クアルの口元に血の固まりがこびりついているのに気づいた。

起き上がり、物足りなさそうに唸る砂虎を連れて泉に向かう。カウディに警戒させない距離をとってクアルの毛皮の汚れを落としながら、ふとこのままここで水浴びさせてしまおうかという考えが浮かぶ。だが、村に近いこの場所からはなるべく早く離れるべきだった。彼女が迷っているうちに不意にクアルが耳をそばだてて、サリユはそちらへ鋭い視線を放った。

出てきたのは、さきほど村で別れたばかりのセスクだった。警戒の糸を緩め、

「フアラルドさんも近くに來てる？」

訊ねる言葉に首を振り、近づいて来るセスクが弓以外の荷物を背中に抱えていることに彼女は気づいた。

「どこに行くの」

「タニル」

短く言い切る少年の様子をいぶかしみながら続ける。

「お父さんは知っているの」

沈黙の返答に、サリユの口からため息が漏れた。つまりこの少年は一緒に行きたいと言っているのだ。

いったいいつから。とどこどこで不審だった少年の今までの態度を思い出し、ふと昨日の出会いを思い出した。少年があれほど熱心に村に寄るよう誘ったのは、このためだったのか。

「どうして？」

「あんな村、嫌いだ」

搾り出すように言う、それが旅に出る理由になるのかどうか彼女にはわからなかった。自分とは違う。だがこの場合、共感にさほど必要性があるとは彼女は思わなかった。

「そう」

砂虎に合図し、退屈そうにしていたこぶつき馬の手綱をとって歩

き出す。困惑した表情の少年の横を通り過ぎる際に、囁くように言った。

「自分で決めたなら、そうすればいいと思う。自分の意志で。自分の足で」

それが生きるということだから。

最後の言葉はほとんど彼女以外には聞き取れないほど小さく、すぐに宙に霧散して消えた。

タニルまでの距離は、村から仮に休みなく歩いたとして四日というところだった。砂の流れや丘陵などの地形の迂回、疲労と休息を考えれば一週間は見るべきで、その間に一度もオアシスに出会えない、となればかなり厳しい行程となる。

オアシス。つまり水島の生まれる仕組みははっきりとわかっていない。大きな水源の近くに派生して散在すると考えるのが妥当ではあるのだが、出発した村の豊富な水資源を異常とするなら、楽観的な思考はできなかつた。近年、このあたりでは大規模な範囲にわたつての枯渇が取り沙汰されている。タニルまでの道のりの途中にある集落の場所を幾つか聞いてはいたが、いまだ残っているかどうかは疑わしがつた。

途中で引き返すことも十分に検討すべきだつた。その場合、今度は荷車を用意しなければならなくなるだろう。そこまですてタニルに向かう必要があるか彼女にも疑問だつたが、依頼の件もある。もしかしたなら村で安く用立てることができるかもしれない。動きに制約がつくことは、あまり好ましくはなかつたが。

黄土色の世界を黙々とサリュは歩いていた。その後ろを歩いている少年が、声をかけてくる。

「あのだ。お姉ちゃんは、どうしてタニルに行こうとしてるんだい？」

サリュは答える代わりに、防砂具の奥から静かな視線を向けた。セスクはオアシスを出てしばらく無言だつたが、少し前から熱心に喋るようになっていた。旅慣れぬ者にはよくあることだつた。砂海とは一面の砂景色である。ところどころの高低差、あるいは岩や

礫などの違いがある以外には全く似たような風景が延々と続いていく。それはなにより、人の精神を摩耗させる。

振り返って自分の出た村が見えているうちはまだいい。しかし、それすらも遠く背景からなくなってしまうたなら、世界に残されるのは自分だけだ。時がたつほどに見えぬ目的地への不安と疑念が襲い、それらを振り払うために人は多弁になる。

そして、その行為は喉の渇きを誘う。有限な水が貴重であることはもちろんだが、旅においては過度の飲水も控えなければならなかった。それは発汗と体力の消費を促し、不要な分泌物と共に必要なものまで体外に排出してしまうからだ。いくら水を飲もうと、砂の海で喉の渇きが止むことはない。地に落ちた水滴のようにただ貪欲に次を求めるだけである。

サリュウが見たところ、セスクはその典型的な悪循環に陥っているようだった。少年は背に大きな荷を担いでいたが、今の調子ではどれほど手持ちが残っていたところでもちそうにない。少年に近づき、彼女は防砂具の隙間から彼の身体に触れた。乾燥した気候の中で、じっとりとした感触が返ってくる。突然のことに言葉を失って身を固くしているセスクに訊ねた。

「水はどのくらい持つてきてるの？」

戸惑いながら、腰に下げた水袋と、背の荷を見せてくる。そこにあるのは彼女ならタニルまで充分にやりくりできそうな量だったが、少年の様子では二日ともたないだろう。銀色の環をひやかに輝かせて、彼女は冷淡に告げた。

「生きたい？ それとも死にたい？」

唐突な二択を迫られ、少年は息を呑んだ。

「……生きたいに、決まってるよ」

「なら、帰ったほうがいいと思う。慣れてないあなたじゃタニルまでは無理」

今更の言葉だ。思いながら彼女は続けた。

確かにその台詞は村を出る時点で言うべきものだった。あるいは、彼の意思を尊重するのなら、何も言うべきではなかった。それが最終的に少年の死という結果をもたらすとしても。だが、彼女は言った。

セスクは俯いて、固い声を漏らした。

「嫌だ」

その答えは予測したものだった。サリュは「そう」と短く答え、指笛を鳴らした。顔を上げる少年に、

「それじゃあ、私の言うことを聞いて。歩きながら口を開かないで。背中の積荷はこっちで預かるから、あなたは腰にある分の水だけで今日一日を過ごすよう考えて。太陽が一番高い時間帯は休むから、それまで黙って歩き続けて。出来る？」

見上げる少年が、やがて決意のこもった視線で頷いた。彼女が荷を受け取り、それを見て嫌そうな顔をするこぶつき馬にくくりつけている間に、遠くから砂色に交じって向かってくる大柄な獣の姿があった。

駆け寄り、挨拶とばかりに身をすりよらせる砂虎に、サリュは自分の水袋からてのひらに水を垂らし、それを舐めさせた。ざらついた舌を這わせ、上目遣いで見てくるその顎を軽く撫でると、砂虎は了承の意を伝えるように咽を鳴らした。やってきた時と同じように無音で駆け去っていく、そのやりとりを不思議そうに見ていた少年に応えず、サリュは告げた。

「行きましょう。日が高くないうちに少しでも歩いておきたいの」

それから二人は黙々と歩み進めた。

村を出てから三刻ほどの時間が経っていた。空は雲ひとつなく晴れ渡り、煌々と輝く火の星が頂へとその座を進めようとしている。

風も穏やかで、濁いた空気に彼らの砂を踏みしめる音だけが響いた。時折、獣の遠吠えが鳴り、サリュはその声を耳にする度にそちら

へと足を向けなおした。地図と方位を確認し、ファラルドから聞いたタニルへの方角とのずれだけはよく気をつけておく。

やがて、天頂に太陽が昇りきる頃になって、ようやくサリュは足を止めた。小高い砂丘の麓で再び指笛を鳴らし先行するクアルに合図してから、後方の少年を振り返る。

「ここで休みましょう」

セスクは頷いた。既に動作にやや疲労の色が見えていた。

杭をうつてこぶつき馬を休ませ、その近くにも同じように杭をうち、大きな布で天幕を張って日除けをつくる。あまり広くない面積に並んで座ると、セスクは重苦しい嘆息とともにうなだれた。彼が腰に手をやるのを見て、サリュは声をかけた。

「あまり急に飲まないように。あと半日、その水で過ごすのも忘れないで」

「わかつてるよ」

不貞腐れた声音で少年が言う。ほんの一口だけ飲み、名残惜しうに水袋を戻すのを見ながら、サリュも水を含んだ。彼女自身は、唇を湿らせた以外では村を出てほとんどはじめての給水だった。

昼食をとる。セスクのもってきた食料には日持ちしないものもあり、彼女は彼の了承を得てまずそちらから消費することにした。干し肉をナイフで削り、麦粉を練った生地挟んで食べる。

村で潤沢な水と食料に囲まれていたセスクは、水なしで喉を通すのにひどく難儀している様子だった。物を詰まらせ、あわてて水袋に手を伸ばすのを横目にサリュは自分の分の食事を終えた。

遠くから姿を現したクアルが、布陰の側にやってきて腰をおろした。毛を梳くと火傷しそうなほどに熱い。しかし元が砂漠の生き物である砂虎はなんでもないうちに地に寝そべり、長く垂れた尻尾を彼女へと絡ませてきた。

「探している人が、向かったかもしれないから」

サリュは言った。だいぶ前に少年が発した質問への遅れた回答だ

った。

「だからタニルへ行くの」

トマスから南下する水路に沿って、これまで彼女は旅をしてきていた。それは当てがあつてのことではなかった。水路沿いの街や集落を点々としながら噂話を聞き、似た人相の話があれば実際に足を運ぶ。そうした日々が続いていた。

決して楽な旅ではなかった。学も経験もない女子どもが生きていけるほど砂海の生活は優しくない。一年前、河川の浜に倒れて死に瀕していた彼女を保護してくれた恩人からも、彼女はそのまま街に留まるように言われていた。探し人と知己でもあるその人物は、出来うる限りのことをして彼の行方を捜すことを約し、彼女に温かい食事と、身を休める場所を提供してくれた。さらには探し人が見つかるまで、ずっとそこにおいてくれていいとさえ言ってくれたのである。

だが、しばらくしてサリュは彼女の元を離れた。

街を出た理由は幾つかある。その中で最も大きな理由がなんであるか、彼女自身にもあいまいだった。ただ、自分はここにいるべきではないと強く感じたことは確かだった。

探し人が残した幾つかのものうち、こぶつき馬と一冊の本を譲り受けて彼女は砂海に出た。もちろんその隣にはクアルもいた。彼の存在が旅をさらに困難なものにしたが、彼女が今日まで生き延びることができたのもまた彼のおかげだった。それは単純な意味での自衛ということではなかった。

「……その探してる人って、お姉ちゃんの恋人？」

サリュは首を振った。

「いいえ」

彼と自分は、決してそういう関係にあつたわけではない。ではどういう仲なのかといえはよくわからない。彼と交わした数少な

い言葉のやりとりを少年に言っても意味はないだろうし、出会いからの経緯を語る気にもなれなかった。確かなことは、彼を探すことが自分にとって必然だということだけだ。

だが、一年が経って得られた彼の情報はほとんど無に等しかった。それは仕方のないことではあった。特に話に目立ちやすい何かがあるわけではなく、せいぜい片目を隠しているかもしれないということ程度しか彼について知る特徴はない。膨大な数にのぼる砂海の旅人の中、人一人を見つけることはほとんど砂漠に落ちた宝石を探すようなものだった。

「あなたは？ なぜ村を出たりしたの？」

自分のことを語るのはあまり慣れない。話を向けると、少年は顔をしかめさせて、

「言つたろ。嫌だつたんだ、あの村が」

「水も食料もあんなにあるのに？」

「関係ないよ、そんなこと。あそこは引き籠もりの村さ。あんなところ、砂に埋もれちまえばいい。自分達でそう願ってたんだから」

サリュはわずかに眉をひそめた。生まれ住んだ故郷が砂に埋もれてしまえばいいというのは、あまり穏やかな言葉ではなかった。枯渴による集落移動が日常的に行われる人々の間でさえ、冗談でも口にするのは控える類のものだ。

「お姉ちゃんもおかしいと思っただろ。大人達の態度。村の大事なことを任せようつてのに、頼むつて声もかけずに遠まわしに見てるだけ。ずっとそうさ。よそ者を嫌ってる、怖がってるんだ」

確かに村人達の警戒心は、一般的な辺境の集落に比べても高かったが。

「何か理由があるんでしょ？」

「……水だよ。このあたり一帯が枯れてるっていうのに、うちの村だけ水が溢れてるなんて、変だろ」

むしろ、少年があっさりとそれを口にしたこと意外さを覚えながら、サリュは頷いた。

「特別な場所があるんだ。村の人間は“祝いの地”って呼んでる、塩の固まりみたいな、全部塩でできた綺麗な洞窟。その水は、絶対に枯れないんだ」

水源とは、つまり地下水脈のことである。その涌出地は砂ではない固い岩盤が下にあることに誘導されて生まれると言われている。そこには貴重な鉱物資源が多い。岩塩や鉄鉱石がその代表的なものだが、そんなものが水源と共に眠っているとすれば、確かに並の水島とはまるで価値が異なってくるだろう。

彼女が気になったのは後半部分だった。絶対に枯れない。まるで三大水源の一つを足元に得たかのような、自信に満ちた発言だった。「よくわかんないけど。うちに沸く水は、しょっぱいんだ。塩が溶けてる。多分、村はその大きな岩塩の塊の上にあるんだ。信じられるかい？うちの村ってもう百年近くずっとあそこにあるんだぜ」それにはサリュも驚いた。一日で枯れる水源すら珍しくないというのに、その年数は泡のように浮かんで消える水島の常識を超えている。

疑問が沸いた。そのわりには、水源の及ぼす範囲が狭いように思えたのだ。安定した水と固い地盤は植物の群生を促す。その植物の根がさらに水を溜め込み、短草のステップを生み、それが更なる土壌となっていくはずだった。それとも水の量それ自体は決して多くないということだろうか。乏しい知識を思い出して彼女はいぶかしんだが、セスクの答えは違った。

「そうじゃないよ。隠したんだ。水を独占できるように、村の連中ね」

吐き捨てるように少年は言った。

「水がある場所には人が集まるだろ。枯れない水源なんて、特にさ。

だから昔の村の連中は、水源を隠したんだ。目立たないよう、自分達で木を切って緑をなくしたり……村に来た人を殺したりもしてたって」

顔を歪ませて、続ける。

「貧しい村の振りして、水に困ってる振りして。ずっとそうやってたんだ。そうなるや段々人なんて来なくなるから、若い人間がいなくなる時がある。そしたら今度は、迷い込んできた旅の人間を襲うんだ。それで、男は殺して。女には無理やり子どもを生ませて、村で生きさせる。お袋みたいだね」

少年の表情に暗い灯火が浮かんだ。

「お袋は、一回も俺のことを名前と呼んでくれたことなんてなかった。笑いかけてくれなかった。ずっと、俺のことを睨んでた。憎んでたんだ」

はっと水気のない笑みが漏れた。十を越えた程度の顔つきに似つかわしくない苦々しさが、濃い影のなかでさらに鬱として沈んでいる。

「しょうがないよね。だって、俺なんか生みたくなかったんだから。それでも村で生かされて　でもそのうち死んじゃった。最後まで、お袋は俺を睨んでたよ」

言葉を切り、少年は顔を俯かせた。肩が震えていた。

なんと声をかければよいのかわからず、サリュは言葉に迷った。彼女の生い立ちもあまり恵まれたものではなかったから、彼が憐れみや同情を求めているわけではないことはわかっていた。数瞬の戸惑いの後、彼女はそっと手を伸ばし少年の頭に触れた。クアルにやるように防砂具の上から撫でると、いつもとは異なるざらついた布と砂の感覚があった。

熱のこもった頭がびくりと跳ね、身体の震えが大きくなる。必死に感情の昂ぶりを殺したうめき声が聞こえた。

「……ちくしょう」

その言葉に含まれる拭い難い湿っぽさも、砂粒の隙間に瞬く間に
吸収されていくようだった。少年の頭に手を置いたまま、サリュは
砂の首みを見守り眺めていた。

しばらく身を震わせていたセスクは、やがて気分を落ち着かせるとそのまま崩れるように眠りについた。激情が残りの体力を消費したのだった。少年の衣服を緩めて少しでも風通しをよくし、サリュは自分は眠らずに目の前の代わりばえのない光景を視界に映していた。水を飲む量を極端に減らした少年の身体には熱がこもっているかもしれない、目を離すべきではなかった。

辺りには酷な日差しが降り注いでいた。太陽が降り始めようとしている今、気温は一日で最も厳しい時間帯にある。砂海の旅人はこの時間、無理に行動を起こさず身体を休めるものだが、日影に座る彼女の隣に人ならぬ若い砂虎の姿はなかった。退屈を嫌ったクアルが獲物を探しに行ったのは少し前のことだった。

少年の呼気が穏やかなことを確かめながら、サリュはさきほどの話を思い出していた。枯れない水源と、集落。

水の争いは、この星で最も普遍的な闘争要因である。乾燥した気候に降る雨は少なく、例えば少量が注がれても土を濡らす前に干上がってしまうような大地では、地下から湧き出る奔流こそが全ての命を紡いでいた。

故に水源の周囲には常に血が耐えることがない。枯れることを恐れない生き物。セスクの村の祖先が、自分達が見つけた水源を秘匿したのも無理はなかった。水と塩、そこに集まる動物。そこには生きるための全てが揃っている。いや、そうではなかった。それだけでは生きていけなかったから、今の彼らの状況があるのだ。ひっそりと隠れるように過ごしていた集落。航路の中継にあるという地の利によって彼らの傲慢さは許されていた。しかし、昨今の大規模な干ばつによって村は本当に忘れられてしまった。航路その

ものがなくなつてしまつては迷い込む旅人も現れず、村には豊富な水と食料がありながら滅びが迫つた。そこに訪れた、タニルへ行くといった自分に書状を渡した彼らの心情をサリュは考えようとしたが、とても理解できそうになかつた。苦渋の末の決断ではあつただろうと思う。自ら排してきた外界との関わりへの不審と不安。村人達が遠巻きにしていた理由はそれだつたのだ。

もう一つ、彼女に理解し難かつたのは、隣で寢息を立てて休む少年についてだつた。

セスクが村を恨んでいることはわかつた。村の入り口で感じた少年と周囲との奇妙な空気の違いは、その生い立ちが影響していたのだろう。もしかしたら集落の中でも白い目で見られていたのかも知れない。自分がそうであつたように。

サリュにわからないのは、少年が父親のことをどう思っているのかである。夕食を囲んだ昨晚の様子を思い出す。傍目には、仲の良い親子に見えたのだが。

それには彼女の個人的な事情もあつた。まず家族というものについて想像が働かない。これまで共にあつた人達で、最も長く過ごした人、最も優しかった人。もつと一緒にいたかつた人。それぞれ異なっているが、そのどれが家族という概念にあてはまり誰がそうでないのか、彼女にはよくわからなかつた。

わからないのなら、考えても仕方がない。サリュは立ち上がり、荷物から丁寧に布に包まれた一冊を取り出した。表紙を軽く撫であげて頁をめくる。なるべく本が痛まないよう注意を払いながら頁を進めているうちに、ふと前に読んだことのある一節に行き当たつた。

「そちらはクルルギウヌが怒り、老人が悲しんでいる。

こちらでアタリアが笑い、子どもが喜んでいる。

あなたは大地が呼んだ神。やがて全てを天に導く。

だから、そして新しい流れを作るあなたは命の母』

それを見た彼女の目が見開かれた。アタリアという単語は、つい最近目にしたばかりだった。宿の二階、大きな動物の剥製の下に記された碑文にそれは刻まれていた。彼女は戸惑った。本の中で、それはある現象について記述されている箇所だったからである。サリュ。彼女と同じ名で呼ばれる、この世界で最も凶暴な自然現象について。

既視感の種は身近なところにあつた。そして、それはそのまま疑問となつて彼女の中にわだかまった。アタリアという言葉が何を意味するのか。

比喩的な表現と固定名詞を使った文章が、何か　サリュ。だろう　を讃えていることは確かだった。あいまいな訳に決して自信があるわけではないが、彼女はそれよりも単語の意味を知りたかった。クルルギウヌ。アタリア。セスクはこれらの言葉が指すものを知っているだろうか。

サリュは傍らで休む少年を見た。声をかけてすぐにも問いたい欲求が沸く。思いがけないところで探し人との思い出の断片を見つけ、彼女の胸は高鳴った。

彼女の探し求めるその人物は、自身また何かを探してさまよう旅人だった。その何かについて断定的な確信をサリュは持っていたが、しかし、その人物が旅の中で感じた全てを彼女は知りたかった。それらの足跡を辿ることが、彼へのさらなる理解と再会に通じる道だと彼女は信じていた。

彼はこのことを知っていたのか。あるいはどう考えていたのだろうか。その現象、サリュという言葉をあの人には、どのように思っていたのだろうか。

ここ最近なかった高鳴りに、はやる気持ちを落ち着かせようと瞳を閉じる。サリュ、アタリア。リト。口の中で呟くと、気づかず砂に埋もれかけていた心に爽やかな風が吹き払ったような思いがあった。そして、その風は同時に一抹の不安も彼女に与えた。囁きに、サリュはまぶたを開いた。周囲は風もなく静まり返り、隣には少年と、やや離れたところに佇むこぶつき馬の姿しかない。クアルの遠吠えも今は聞こえず、砂の光景はまるで一枚の絵画のよう

に在る。
小さく耳に届いた声は、彼女の中から響いたものだった。
予兆と警戒。サリュは出立の時間を少し早めることに決めた。

それから少ししてセスクは目を覚ました。咽の渴きが彼を起こしたのだろう。身を起こすや否や水袋に手をやる姿を咎めようとはせず、少年が一息ついたところで彼女は訊ねた。

「セスク。アタリアという言葉を知ってる？」

少年の瞳が見開かれた。それは質問の中身ではなく、名前を呼ばれたことへの驚きだったようである。彼女がその名前を呼ぶのは確かに初めてだったが、彼女にはどうでもよいことだった。

「あ、え？ アタリア？ うん、知ってるけど」

「どういう意味なの？」

「意味っていうか　うちで信じられてる、神様みたいなもんだよ。水とか火とか、命。そういう、嬉しいことの神様」

「クルルギウヌ、というのは」

セスクは眉をひそめた。首を振って、

「そっちは、あんまりいい意味じゃない。砂とか風、病気。声に出すと呼び寄せるから、口にもするなって言われてる」

「……そう」

良い象徴と悪い象徴、ということか。

土着信仰は土地によって異なる。この時代、水陸ではある唯一神を崇める宗教が最も布教活動に熱心だったが、辺境まではその声も届いていなかった。人々はそれぞれの集落において崇め奉る存在をつくり、それを信じていた。

近い生活圏では信仰の対象が共通することもあるから、アタリアという言葉が生まれ故郷にあつた本とセスクの村の両方で見かけられたことを不思議には思わなかったが、彼女の集落でそれが崇められていたわけではなかった。むしろこの本で見ると、そんな名前は聞いたこともなかった。砂に埋もれたあの集落で信じられていたのは『大いなるもの』というだけの、名前のない存在だった。彼女の育ての親がその語り手としての役割を担っていた人物だったから、サリュはそのことをよく知っていた。

あの本は周辺で語られる神話や伝承話をまとめたものらしいから、おかしくはないかもしれない。近くのこと、耳にしたことを記述しただけということもある。しかしそれはそれとして、気になることは他にもあった。

二つの言葉がセスクの言ったことを現す概念だとしたなら、その対比される言葉を同時に綴ったあの文章にはいったいどのような意味が込められているのか。サリュという自分の名前について、彼女は疑問を思った。神、流れ。命の母。

「サリュ。というのは？」

少年は不思議そうに首をかしげた。

「お姉ちゃんの名前だろ？ 他になにかあるの？」

サリュはかぶりを振った。これ以上考えても意味がないと思っていた。だが、頭の隅には容易に忘れがたく声が響いている。あの人は、どう考えていたの？ 思いを振り切るように立ち上がり、彼女は言った。

「行きましよう」

荷を片付け、歩みを再開する。サリュの言いつけを守ってか、あるいはただ疲れているからか、セスクも無言で足を進めていた。彼の顔色に気をつけながら、サリュは指笛で先導するクアルと合図を送り合った。

やがて、傾きだした日差しが色を変え、ゆつくりと景色そのものを塗りつぶしていった。地平の先に沈みゆく火の星を眺めたセスクが呟いた。

「金色だ」

茜の光を受け、一面がきらきらと輝いていた。それは確かに黄金にも見えた。

「……うちの村。イスム・クっていうんだ。黄金の隠された処。そういう意味」

それそのものが貨幣としての価値も有している金は、貴重な鉱物資源である。多数の黄金を所持することは、この地で次に次ぐ権力と富の象徴だった。逆光だけでない鬨りを伴って言葉が続いた。

「馬鹿みたいだ。そんなの、外にだっていくらでもあるじゃんか」
彼女は答えなかった。

景色が闇に取って代わった後も彼らは歩き続けた。夜の活動は危険だが、体力の消費が少ない利点もある。日が落ちれば一転して急激に気温が冷え込む砂海の上では、早々とひとところに身を留めることも決してよい選択肢ではなかった。

満天の星明りを頼りに砂の大海を進んでいた二人の前に、光り輝く獰猛な獣の双眸が現れた。立ち竦むセスクを置いて、サリュは止まらずに光の持ち主へと歩み寄る。輝きを放っていたのはクアルだった。指笛もなく彼らを待っていた若い砂虎は、サリュに頬をこすりつけるとその隣で歩き始めた。自分の少し前を先導する彼の後を追って、彼女はやがて前方に黒い大きな影を見つけた。その影は微かに揺らめいていた。次第に近づくにつれ、白く反射するものが視界にかすめる。いつの間にか、踏みしめる地面の感触が変わってい

た。

そこは小さなオアシスだった。湧き出したばかりの水島。航路や前もって聞いていた集落からは離れた方角にあるため、まだ人の目にも見つかっていない。ここを利用できるのは砂海をさまよい、奇跡的な偶然に出逢えた幸運な人間か、人間にない感覚でそれを探り当てる動物だけだった。

砂虎の嗅覚は鋭く、その活動範囲は人より遥かに広い。飢えに耐えながら砂海で獲物を探し徘徊する彼らは水場を探し当てる能力にも長け、サリュが今までの旅を無事に過ごしてきたのも、この連れの能力のおかげという点が大きかった。若い砂虎の能力に全幅の信頼をおけるからこそ、人の多い航路を避けつつ、無事に次の集落に着くことができた。

大人が十人ほど腕を広げてやっと囲めるかどうかといった水場に近づき、サリュはその水をすくった。匂いを嗅ぎ、わずかに口に含んでみる。やや鉱物の臭みはあるが、飲み水として十分に利用できる質の湧き水だった。隣で期待に顔を輝かせているセスクに、彼女は頷いてみせた。

「大丈夫。飲める水。……お腹、壊さないように気をつけて」

後半部分は、布道具をはぎとって勢いよく頭を水面に突き入れた少年にはあきらかに聞こえていなかった。息を吐き、サリュは周囲を見渡した。

少し窪んだ地形に他の動物の姿はなく、硬い感触の土に植物の気配もまだない。真正正銘、生まれたてのオアシスだった。この水場があと何日在り続けるかはわからないが、彼女にとっては今日ここに沸いていてくれただけで充分だった。得意げにも見える上目でこちらを見上げるクアルに礼を示すよう、サリュは咽元をさすった。くるるる、と甘え気味の喉声がそれに応えた。

安堵の思いだった。水が確保できたことで、どうやらセスクの村に戻る必要はなさそうだった。クアルに一日探してもらい、補給が出来そうな水場が見つからなかった場合、一旦村に戻ることも彼女は考えていたのである。旅慣れないセスクの存在を考えれば当然のことだった。だが、ここで余っている布袋に水を詰めていけば、タニルまでの行程にもいくらか余裕が出るだろう。今日はそれなりに歩いてきた。星を読んでタニルまでの距離を測ろうとした彼女の耳に、こぶつき馬の不満げな嘶きが飛び込んできた。

荷を持たされたままのこぶつき馬に謝り、サリュは彼の背から積み荷をおろし、水場の近くで彼を休ませた。ふんと鼻息を鳴らして水面に顔を近づける。隣にきた誰かの気配に顔をあげたセスクが、驚いて身をのけぞらせていた。

現在地を確認し、手持ちの地図に黒石で印をつける。それから彼女は夕飯の用意を始めた。近くにはもちろん枯れ木の類などなかったので、固形燃料を取り出してそれで焚き火を作った。

昼と同じ食事でささやかに胃を満たすと、彼らは床に着いた。積荷から毛布を取り出し、天然の毛皮であるクアルを傍に手招きしたサリュは、少年が所在なさげに立ち尽くしているままなのに気づいて声をかけた。

「なにしてるの。こっちにきて」

「いや、その。さ」

砂海の夜は冷える。セスクはたいした寝具も用意していなかったようで、一人離れたところで丸まっていては朝の冷え込みに耐えられないと思うのだが、彼は躊躇いを見せたまま動こうとしなかった。「一緒の方が温かいわ」

「う、うん」

ようやく頷いて、おずおずと自分の側にやってくるセスクに、彼女は眉をひそめて言った。

「なにしてるの？」

「え？」

「抱きつくなら、クアルの方が温かいと思う」

若い砂虎を挟み、二人と一匹は砂の上に身を休めた。サリュとの添い寝に慣れたクアルも両側から圧迫を受けることにはさすがに窮屈を覚えるらしく、牙を剥いてしばらくセスクを威嚇していたが、彼女が機嫌をとってなんとかなだめることができていた。

空には無数の星々が浮かんでいた。上空の風も落ち着いているらしく、強弱様々な輝きはゆらめくことも少ない。毛布にくるまり、クアルの柔らかい毛並みの温かさを感じながら彼女は夜空の宝石を眺めた。今日はあまり本を読む気分にならなかった。隣でそんなことをしていればセスクが休みにくいかもしれないし、どうせ目がいくのは同じ頁だけだとわかってもいた。

「……旅するのって、大変だね」

昼間少し休んだからか、疲れているはずのセスクはなかなか寝付けない様子だった。盛り上がった毛皮の向こうから彼女に語りかけてくる。

「今までずっと村にいたから知らなかった。砂海を渡るってしんどいんだ」

「そうね」

あれほど豊富な資源に囲まれた村の生活からすれば、水を制限され、貧相な食事で生を食い繋ぐことは苦行以外の何物でもないだろう。サリュも意外に思ったのだが、まだ初日とはいえ、セスクはそれについてまったく愚痴をこぼさなかった。実のところ、サリュは彼が弱音を吐いた段階で村に戻り、ファラルドに引き渡してしまえばよいと軽く思っていたのだった。

この少年はタニルへ行き、それからどうしようというのだろう。

少年は、彼女がはじめて砂海に出た時よりもさらに幼い。生きる術に力、そのどちらも持ち合わせてはいなかった。それでもよいという覚悟を持っているのか　いや。そのことがわからないほど、子どもなのだ。

息が漏れた。勝手についてきたのだからどうなるうが知ったことではない。そこまで頭を割り切らせることが、どうやら彼女にはできそうになかった。あの人とは違う。いいや、それも違う。あの人だって、決してそうじゃなかった。

サリュは目を閉じた。そのまま意識を忘我の淵に沈めようとしていたところに声がかかる。

「お姉ちゃんはさ、どうして旅するようになったの？」

月光を受けて怪しく光る銀環の瞳を開き、彼女は言った。

「　そうしないと、生きられなかったから。私の集落は、水が枯れて滅んでしまったの」

「一人で。旅に出たの？」

「……村に来た、男の人と一緒に。私はその人を探しているの」

あまり気が進む話題ではなかったが、少年への子守唄がわりになればと思い、彼女は答えた。なんだ、と明快な声が響いた。

「やっぱりお姉ちゃん、その人のこと好きなんだね」

彼女は答えなかった。

「だって、その人がいなくなって寂しいんですよ。だから探してるんだから　絶対、そうだよ」

他人に自分の感情について決め付けられるのはあまり気分がよくなかった。寂しい。そうかもしれない。好き。それはよくわからない。その時サリュの脳裡に浮かんだのは、一人の女性の後ろ姿だった。何かを胸に抱き、必死に声を押し殺そうとして耐えきれず小さく嗚咽を漏らしていた若い女性。恐らくは、それが彼女が街を出る決定的なきっかけとなった光景だったかもしれない。

わからない。その時に感じた衝撃や、罪悪感が何を意味するのか。

自分の感情さえわからず、彼女は頭の中のそれと自らの気持ちから逃げるために視界を閉ざした。

「会えるといいね。だってお姉ちゃん、綺麗だし。その、目だって……最初はびっくりしたけど。でもすごい綺麗だよ。きっとその人もお姉ちゃんのこと、探してるよ。生きてるよ。絶対」

根拠のない言葉は少年なりの励みだったのかもしれないが、煩わしくもあつた。言葉を返すこともおっくうに思い、サリュは黙って彼の言葉を聞き流した。少年の何気ない台詞が胸に響いていた。

生きてるよ。絶対。

わかるものか。いつもは心の奥底に封じ込めて決して吐き出さない感情がちらりと舌を覗かせ、彼女は欠けた姿を見せる月から顔を覆って腕で伏せた。

「……お姉ちゃん？」

「休みましょう。夜明け前が、一番冷えるから。できればその前に歩き始めておきたいの」

一方的に告げて、サリュは隣のクアルに寄り添うように丸まった。彼女の気分を感じ取って慰めるように、若い砂虎が頭を押し付けてくれるのを嬉しく思った。

水場には砂海で生きる多くの動物たちが訪れるかもしれない、その中に凶暴な肉食獣が含まれている危険性はもちろんあつた。だからこそ、旅人は火を焚くか交代に夜番することで夜を過ごすのだが、こと彼らに限ってその必要はなかった。近づく気配があればすぐに気づいてくれる、砂海の生態系で頂上に位置する猛獣が側に寄りそべっていたからである。

この上なく頼もしい護衛者に守られたサリュが目を覚ましたのは夜明けの色のない、まだ早朝とも呼ぶにも早過ぎる頃だった。暗闇に包まれ、自身が吐く白い呼気さえ見ることの出来ないその中で、隙間から刺しこむような冷気が忍び寄り、意識せずに身体が震える。

ぴくりと隣で暖かさを提供してくれていたクアルが反応するのがわかった。起こしてしまっただろうか。

少ない光にもはつきりと輝く一対の瞳が彼女を覗き込んできた。どうやら起きていたらしい。幼子のように身を寄せる人間達を、じつと動かずに守ってくれていたのだ。忠実な砂虎の顎を撫でて感謝を伝え、彼女は身体を起こした。

視界が徐々に濃淡の影を成す。星空にも水面にもきらめきはなく、無風だった。風があれば、遮蔽物のないこんな開けたところではとてもゆっくり眠ることなどできなかっただろう。ありがたい大地の気紛れだったが、一切の音を無くして静まり返る光景には奇妙な不気味さがあつた。

ランプを灯し、サリュは荷物から耐火性のある碗　彼女の持ち物で最も高い価値を有している　をとりだして水場に向かった。セスクが起きた時に、せめて白湯でもあればと思ったのだが、彼女が起きたことでクアルは自分の役割を終えたと認識したらしい。あつさり少年を見捨てて立ち上がり、彼女のあとをついてきてしまう。暖かさを失いもぞもぞと身じろぎしたセスクが、くしゃみとともに目を覚ました。

「おはよう」

「あ……おはよ。さ、寒ッ」

「今、お湯を沸かすから。少し待って」

ランプの上部に設けられた平底に碗を置き、彼女は寒さに身を縮めている少年の隣に座った。クアルが嫌がるなら、人間同士で暖をとるしかないが、クアルはそのことも不満に思ったらしく、鼻面を押し付けてサリュとセスクの間に割り込んできた。結局、三人が横に並ぶ形で、周囲に対してあまりに頼りなげに揺れる赤い灯火を見つめた。

弱い火力がゆっくりと温める間に、周囲に削った干し肉と麦粉の

練り物もかかけ、それに火が通る頃にサリュは碗を取り上げた。火傷しないよう厚布をあててセスクに手渡す。恐る恐る口をつけた少年がほっと息をつき、彼から碗を受け取って彼女もお湯を含んだ。温かさが喉から全身を溶かしていく心地に、同じようにため息が漏れた。

それから充分に温まった食事をとり、すぐに出発の準備にとりかかった。水を補給し、予備の水袋にも満たしておく。荷が増えたこぶつき馬の責めるような視線を苦笑いで受け流し、半刻ほどで彼らは準備を整えた。出発前、中身が空になった碗に手ごろな大きさの石をいれ、赤くなるほど熱されたそれを碗ごと布にくるんでサリュはセスクに渡した。

「これを。しばらくならもつから」

「あ、ありがとう」

頷いて、彼女は歩き始めた。

夜明けはまだ遠かった。少し風が出てきて、寒さに耐えるために防砂具の上から毛布を巻いて彼らは歩いた。クアルは獲物を求めてすでに視界に見えなくなっていた。

まだ空に星が見えるうちに、サリュは現在地の確認も怠らなかつた。水場の下の地面は安定しているというのが通説だが、一晚のうちに砂海に流されてしまっている可能性は常に疑っておくべきだった。

どうやら、その心配はなさそうだった。それから彼女は地図上に一日で届きそうな集落の位置を確かめ、今日の目標をそこに定めた。既に集落がなくなっていたとしても、室内で暖を取る事は出来るだろう。

やがて東の地平から太陽が昇り、落ち際と比べて透明度の高い光が空と大地を照らし始めた。薄まった闇が瞬く間に溶け去っていった。まだ気温は寒かったが、それもわずかな間のことだった。日差

しはすぐに厳しさを増し、温度が跳ね上がる。毛布を片し、彼らは
厳しい時間帯に休みを挟んでなお歩き続けた。

水が枯れ、住む者が誰もいなくなった集落に彼らがついたのは、
陽が落ちるほとんど間際のことである。土壁で作られたどの家屋に
も人の気配はなく、手入れをする者もないそれは文字通り、砂に
埋もれかかっていた。その一つ、最も砂の侵食の少なかった屋内で
彼らは身体を休め、朝焼け前にはそこを発った。

そうした旅がそれから三日続いた。

集落を出て五日目の昼前。彼らの視界の果てにまず塵気楼となっ
てその街は姿を現した。土色の城壁と街並みが、盛り上がった岩壁
に沿うようにして立ち並んでいた。

街を視界に捉えても、そのまますぐに向かえるわけではない。砂海で最も危険な生物と恐れられる猛獣を連れて、タニルほどの街に入ることはあまりに危険だった。街に寄っている間、クアルに待っていてもらう水場を探さなければならなかった。

条件はそこが有る程度の規模の水源であること。加えて、なるべく航路から離れた場所にある必要もある。周辺の水源枯渇によつて国境の街タニルへの他からの航路は現在、非常に限られたものになっている。そのため後者はさほど問題ではなかったが、適当な水源の発見は多分に運に左右されるし、成否は全て若い砂虎の嗅覚にかかつていた。先導するクアルの後ろを歩いて彼らは水源を求め歩き、その日の夜になつてようやくそれなりの量の湧きがある水場にたどり着いた。

半日ほど開いたタニルまでの距離はやや遠い。しかしあまりに小さな水場では明日にも枯れ果ててしまう恐れがあるし、砂海に飲み込まれるだけでなく“流される”可能性すらあつた。水の沸く土地の質は安定しているはずではあるのだが、用心は当然のものだった。水場の近くに杭を打つて砂虎への合図を残し、そこで一泊してから彼らは街に向かつた。自分が残されることを察したクアルは不満げで、最後まで尻尾を巻きつけて離れようとしなかつたが、結局は渋々と身を離して水場に座り込むと、二人を見送つた。

こぶつき馬を連れて二人は街へ向かつた。昨夜は一晩中、甘え性の砂虎に好きなようにさせていたから、サリュの全身にはクアルの匂いが移つてしまつていた。防砂具についた抜け毛を払いながら歩く彼女の横で、セスクが顔を俯かせている。

「もう少しで街だから。頑張つて」

村を出てから一週間近くが経っていた。初めての旅で、しかも幼い身体では辛くないはずがない。サリュは彼の体調には気を遣っていたが、旅の途中ではどうしようもないことも多い。留まっていたのは水と食料がなくなる一方だから、多少のことでは進むしかないのだった。

むしろ少年はよくやっている。素直にそう思った。セスクは決して弱音を吐かず、喉の渇きにも懸命に耐えていた。その気力に報いるために声を掛けたのだが、少年の顔色は晴れなかった。

「どうしたの。具合、悪いの？」

首を振り、ぽつりとセスクは呟いた。

「お姉ちゃんさ。タニルからボノクスに行くの？ その人を探して」
「……わからないわ」

彼女はトマスからの河川を下流に沿うように旅してきた。もし探し人がボノクスに向かったのなら、その途中で必ずタニルに寄ったはずである。現在、タニルを経由しないツヴァイ ボノクス航路はほぼ壊滅しているからだ。自分のように砂虎を連れていない以上、水場の怪しい砂海を踏破するような愚かな真似を彼がするとは思えなかった。

タニルなら、何かしらの情報が入るかもしれない。あるいは、それでも何の手がかりもなかったなら。いわばタニルはこれまでの彼女の一年近く続いた旅、その一つの節目だった。得るものがあるがあるかどうかはともかく。

「あの人がボノクスに向かったと決まっているわけじゃないから。だから、街で色々話を聞いてみて、もしそういう旅人が出て行つたと聞いたなら、もちろん向かうけれど。そういう話がなかったら、また戻らと思う」

「そっか」

言葉が途切れた。何か言いたそうな表情のまま口を結んで喋らない少年に向かつて、サリュは訊ねた。

「セスク。あなたはどうするの」

答えが返ってくるまでに少しの間があった。

「わかんない」

途方にくれたような表情で、セスクは言った。

「ずっと村を出たたって思ってた。泉でお姉ちゃんと会って、ああ、今しかないって思ってた。出てみたらなんか、こんなものかって。

そんな感じ。今」

「そう」

「ねえ。俺も、お姉ちゃんの旅にくつついていたら、駄目？」

二重の環を持つ瞳を向けるサリュに射すくめられ、すぐに視線をたじろがせる。

「……やっぱ、駄目だよな」

「別にいいわ」

そっけなく告げた彼女の言葉に、少年は目を丸くした。

「いいの？ほんとに？」

「ええ。ただ」

勢い込んで顔を輝かせる少年に、サリュはそこで一旦言葉を切った。これから自分の言う内容が的確な表現であるかどうか考えてから、再び口を開く。

「例えば、今から向かう街がただの幻で、行ってみたら街なんかなかったら」

怪訝そうに少年が眉をひそめた。

「そこで流砂に巻き込まれて、元の水場に戻れなくなって、砂漠に投げ出されて。そのままずっとあてもなくさまよって、飲む水がなくなったら 例えば、そうしたら私は、まずこの子の喉を裂いて血をすすると思う」

手綱をひいたこぶつき馬を指した。冷淡な口調は、あえて意図したものである。

「私は、絶対に生きる。そのためならどんなことをしてでも。生き

てみせる」

言葉こそ静かだが、その底には聞く者の心胆を冷やす響きが含まれていた。防砂具の隙間から覗く銀色の瞳。その中にある輝きが彼女を人外のもののように思わせるようだった。怪しさに飲まれて、少年がごくりと喉を鳴らした。ひたりと視線を見据える。変わらぬ音程のまま彼女が言った。

「それでもいいなら。一緒に旅をしましょう」

返事はなかった。

太陽が天頂に差し掛かるうとした時間、二人はタニルの街元へと辿り着いた。地中から牙の如く巨大な岩盤が突き出しており、そのせり出した岸壁に段々に群生している茶色の家々が見える。城壁の類がないのはそもそも必要性が薄いからだろう。周囲はほとんど、人の手では登ることも不可能なほど険しい。街は天然の要塞だった。

ただ一箇所、大きく拓かれた街の出入り口に検問所があった。二名の武装した歩哨が立っており、胡散臭そうな表情を隠そうともせず二人を待ち構えている。瞳を伏し目がちに落としてサリュは彼らに近づいた。

「これはまたえらい方向からおいでなすったな。あんたら、どこの砂海を渡って来たんだい」

背が低く恰幅の良い、小さく愛嬌のある瞳を持った男が言った。その隣で髭面の男も頷いている。その表情は疑わしげだった。

現在残っている航路とは異なるところから現れたのだから、彼らの言葉は当然だった。サリュは荷の中から布に包まれた書状を取り出した。

「イスム・クという、オアシスを経由して来ました。この手紙はこの長から預かったものです」

珍妙な顔つきで二人の番兵は互いの顔を見合わせた。

「イスム・ク？ 聞かん名前だが」

「その村長が、手紙？ いったいなんだってんだい」
サリュは首を振った。

「そのオアシスにはまだ枯れない水源がありました。けれど、最近のこのあたりの枯渇で全く人通りがなくなってしまう、困っている様子でしたが」

「水が？ このあたりで残ってる村がまだあったのか」

大仰な驚きぶりでは男は言った。やや過剰な態度にも見えたが、それだけ驚くということは、もしかや近隣の水源枯渇はここでも問題になっっているかもしれない。サリュは予感じみたものを覚えた。

手紙を受け取った丸顔の男が胡散臭そうに丸められたそれを見て、それから改めて探る視線を彼女へと向けた。

「それで、あんたは？」

「……人を探しています。最近、ボノクスに向かった若い男の人はいませんか？」

「そりゃあ、いるにはいるがね。どれだけ水が枯れても だからこそ、現れる連中がいるからな。探し人つてのも、商人かい」

彼女が首を振ると、男は怪訝に顔を歪めた。

「商人でもないのに、こんな辺鄙なとこに来たってのかい。そんな物好きは、最近見かけた覚えはないが……いつぐらいの話だい？」

「だいたい一年近く前から、最近までの間なのですが」

男は苦笑を浮かべた。

「そんな昔のことなんざ覚えちゃいないよ。だがまあ、何人かはいるかもしれん。俺達以外で見たやつがいるかもだ」

「できれば、中で街の人に話を聞いて回りたいのですが」

控えめに言ったサリュの言葉に、男達はもう一度互いの視線を絡ませた。

「それはまあ、かまわんが。積み荷を調べさせてもらっていいかね」

大きな街では珍しくもないことだが、街に入るためにもある程度の人頭税がかかる。直接交易品の売買に関わり、特に稀少な物品の出入りについては監視の目も厳しかった。商人はともかく、一般的な旅人にはさほど関わりのないことではあるが、今回はそうもいかなかった。彼女の荷には巨大な岩塩の固まりが積まれていた。

「こいつは、また」

見事な純度の岩塩を見た丸顔の男が息を呑んだ。

「あんた、こんなのをどこで手に入れた？」

「前に立ち寄った場所で。お礼にと、もらいました」

少し迷ってから、サリュは言葉を濁して答えた。その必要性があったかどうか彼女にも確信があったわけではない。ただ、正直な反応がいつも報われるわけではないことは、今までの旅で散々経験してきた。

男達は岩塩の出所を気にしているようだったが、それ以上にその透明な輝きに目を奪われている様子だった。この大きさでこの純度なら、彼らの一月の給金でどうにかなるものではないだろう。

「しかし、あんたの手持ちの水や食料はともかく、これはけっこうな額になってしまふと思うがね」

ようやく岩塩から目を引き剥がした男が、ちらりとした視線を向けた。

税には現金と現物を収める場合がある。サリュは即座に後者を選んだ。驚いた表情で男が聞き返してくる。

「いいのかい。割つちまつて」

「かまいません」

迷いなく彼女は頷いた。どうせ予定外に手に入れた代物である。持っただけでも荷になるだけだし、可能ならこの街で売り払ってしまいたいところだった。もつとも、商人でもない彼女の立場で商会の門を叩いても安く買い叩かれるのが落ちではあるのだが、この程度の大きさの街ならそういう物でも買い取ってくれる場所がないわけではないはずだ。

むしろ男達が戸惑いを見せる中、彼らから借りた鑿で岩塩の端を削り落とした。小さくない欠片と、それと同じ程度の大きさの二つを彼らに手渡す。その一つは税として、もう一方は彼らの懐に収まることとなる。

「ん。悪いね。記録にはちゃんと書いておこう、行っでいいぞ」

そ知らぬ顔で賄賂を受け取り、丸顔の男が言う。臨時収入に嬉しそうな態度を隠しきれない男の隣で、髭面の男は渋い表情をしていたが、口に出しては何も言わなかった。

最後まで伏し目がちなまま、彼らに頭を下げたサリュは門を抜けた。その後ろからセスクがついてくる。緊張した様子の少年に向けて彼女は告げた。

「とりあえず宿を探しましょう。……はぐれないようにね」

幾つかの宿屋の看板が見えたが、サリュはその中からもっとも外れにある建物を選んで中に入った。採光性の悪い室内ではカウンターの向こうに陰気な表情の男がおり、愛想笑い一つ浮かべないその主人に頼んで部屋を一つとってもらう。

「できれば、明るい部屋をお願いします」

という彼女の言葉はもしかすると相手には皮肉に聞こえたかもしれないなかった。彼女の払った汚れた銅貨を受け取りながら男は口を歪ませて、そっけなく部屋の番号を告げた。頭を下げ、振り返った先に入り口あたりで尻込みしているセスクの姿があった。足元に、厩舎に繋いできたこぶつき馬から下ろした荷がある。

サリュも手伝って残りの荷も降ろし、土塗りの階段をのぼって部屋に向かう。角部屋のそれに足を踏み入れると、中は光に溢れたとまでは表現できないものだったが、恐らくもつとも外気に近くはあった。

部屋に入るなり、セスクは気が抜けてしまったようだった。力尽きたように腰を落とす少年を尻目に、彼女は窓際に寄って建物の周囲を確認した。眉が寄る。街の外に近くはあったが、周りには建物がなく、なにかあったときの非常経路として足場になりそうなものもなかった。部屋をかえてもらおうという考えが一瞬サリュの頭に浮かんだが、少し首を伸ばして探ってみたところ、隣の部屋にすれば解決される問題というわけでもなさそうだった。それなら、宿を変えられないが、四肢を伸ばし、全身で脱力した状態を表現しているセスクを見て諦める。それに、疲れているのは彼女も同じだった。

しかし、身体を休める前にやらなければならないことがあった。彼女は防砂具を脱ぎ、床に敷いてその上に荷をおくいつもの儀式を神妙な態度ですませたあと、すぐに水と食料の確認にとりかかった。羊皮紙を開いて今回使った行程、その道のりや日数について黒石で記載する。単語の羅列は暗号じみていたが、この場合自分にだけわかればいいのだからそれで充分だった。

彼女がそうする間、セスクはびくりも動かずにいた。どうせなら寝台で休めばいいと思うのだが、そうしないのは防砂具を脱ぐことすら疎ましいからだろう。硬い土床では気休めにならないことを知っていたから、彼女は声を掛けて少年にそれを促した。セスクはのろのろと起き上がり、羽織っているものを剥ぎ取り始めた。

部屋には汲み置きの水も、飲料水の差し入れもなかった。この程度の宿ではむしろそれが当然といえる。手持ちの水袋をセスクに手渡したサリュは改めて窓に寄り、そこから空を眺めた。太陽の位置はまだ高い。岩塩の処分や尋ね人の情報について、今からでも動いておく猶予は充分にありそうだった。

いや、処分は後回しにすべきだ。彼女はそう判断した。この街の様子もわからず、あれだけの代物の話題をだしては下手に目立って

しまつ恐れがあるからだつた。日持ちしないわけではないのだし、事は慎重に進めるべきだろう。連れのこぶつき馬などからすれば、一刻も早く売り払って欲しいと考えているだろうが。ああ、そういえば外に出る前に彼の様子も見にいかなければ。宿屋の主人や、今のセスクの様子から見る限り、こぶつき馬の世話までしてくれているとは考えにくかつた。

外套だけ床に敷いて残したまま、サリュは改めて防砂具を身につけ始めた。寝台から首をあげたセスクがその様子を見て、驚いたように顔をしかめさせた。

「どこか行くの？」

「ええ。あなたは休んでいて」

あわてて起き上がるうとする少年に彼女はそっけなく言った。別に体調を気づかつたわけではない。実際、一緒に来ても何もすることはないだろうと思つたからこそその発言だつたのだが、セスクは一瞬ひるんだ様子を見せたものの、すぐに起き上がって自分の頬を張つた。

「俺も行くよ」

「……そう」

それが何を思つての決意かは不明だが、あえて否定する必要もない。外に出る元気があるのならついでに昼食もとれる。サリュは少年と連れ立って階段を降り、主人に少し街を見てまわつてくることを告げて外に出た。男からは返事一つなかつた。

厩舎にまわり、こぶつき馬の様子を見る。彼女の予想に反して、彼の目の前には水桶と飼い葉の山が積まれていた。無言で視線を向けると、得意げに頬を緩めたセスクが鼻をかいている。

「ありがとう」

「全然。いつも、宿でやつてるからさ」

言つてから、何かを思い出した顔が顔がわずかに強張つた。その

ことには気づかない振りをして頷きながら、こぶつき馬の短毛に覆われた身体をさする。水桶に頭を垂れたまま、旅の連れはわずかにも反応を返してこなかったが、気にせずサリュは厩舎から出た。

大通りだと思えるほうに足を向ける。全体が切り立った崖のようなタニルだが、中ほどにある程度平坦な一面があり、どうやらそこが街の中心部になっている様子だった。外れの方には家屋やわずかな面積の土地を用いた段畑の存在がある。傾斜のある街を登るように彼らは歩いた。

街には人通りが多かったが、あまり栄えた印象ではなかった。それには街の在り方そのものが関わっている。サリュの知る、もっとも人と物の溢れた街はトマス　水陸でも最大の商業都市だが、タニルはそういった分け方で表現するなら軍事都市といふべきだった。

もともと、タニルは領土防衛の為の防衛施設として生まれた。はじめは一時の兵を休めるためだけの簡易的な存在だったのだが、戦争の長期化によって恒常的な生活体系を必要とし、それがやがて街と呼ばれるほどの規模になった経緯がある。その顕著な例が、この世界では街と呼ばれるものにとって不可欠であるはずの河川の存在がないことだった。

水源と水源を結ぶ河川は人と物の交流の素である。トマスからボノクスに向けて連なる河川は存在するが、それはここから南方を巡るようにして掘られていた。そこから遠くはないが決して近くもない距離にタニルの街は存在する。いわばトマスとボノクスを繋ぐ最短距離にこの街はあるのだった。

その意図は当然、防衛目的に他ならない。この世界において、領土とはつまり水源の確保であり　水源、そして河川がそれにあたる。一つの河川によって繋がる二つの水源があった場合、その河川のどこまでをどちらが保有するかということについて問題が生じることは考えるまでもないことであり、“河川を赤く染めてでも”と

という言葉があるように、それらは過去に多くの争いを起こしてきた。その領土線とでも呼ぶべき河川を巡る主導権と、その周囲の（比較的安定した）水源を如何に得るかがこの世界における戦争の勝敗といえる。そして、タニルはその意味で非常に重要な意味を持っていた。

水源としての有用性はもちろん、地理的条件からも容易には無視できなかった。しかし小高い山のような天然の要塞は守るに易く、攻め手は例え河川に沿って軍勢を進めたところでタニルを経由して背後を攻められる危険を抱え込むことになる。一方、それは守り手がもし攻勢をかける時にも同じ事が言えるため、その軍事的な価値は高かった。

そうした背景があるため雰囲気も一般的な街とは異なっている。通りは兵の姿も多く、彼らを対象に商売を行う店もあつた。女衒じみた者の姿まであるが、そうしたものを徹底的に排除することは難しかったし、それによって起こる問題もあつたから仕方なかつた。治安という意味では決して悪くない。むしろこうした街では酔つた兵達の狼藉が問題になることのほうが多かつた。

あまり目立ちたくないサリュのような立場からすれば、極力寄り付きたくない類の街ではある。しかしタニルは河川を使わずにツヴァイとボノクスを結ぶ重要な航路拠点だったからこうして訪れたわけで、ファラルドから頼まれた手紙も渡したことだし、あとはせいぜい人相聞きをすませて早々に街を出たいところだつた。

サリュが向かつたのは街の中心部近くにある食堂だつた。昼時を終え、ようやく忙しさが緩まつた店内には食事終わりの談笑にふける客と、卓の片付けに励む女給の姿があつた。肩より少し長い髪を後ろでまとめた若い女性が来客に気づき、世慣れた笑顔を向けた。

「あ、いらつしゃい。お好きなどこにどうぞ、すぐいきますねー」
サリュは店に残る客達から離れたテーブルを選んだ。木製の盆に水入りのコップを持ってやってきた女性に二人分のランチを頼む。

女中が去り、卓上に残されたコップの水を飲んだセスクの顔が歪んだ。続いて手を伸ばしたサリュはすぐにその理由を知ることになった。水は、あまり質のよいものではなかった。セスクの村どころか、彼らが手持ちのそれより不味い。

「ごめん。飲み水つてさ、もしかして、こつというのが普通？」

声をひそめたセスクが訊ねてくる。サリュは頷いた。この水は確かに上質ではないが、決して珍しい程のものではない。不純物を一度沸かしてとりのぞき、口当たりをよくするような手間はよほどの店でなければしないし、そうしたものが不要な水が得られる水源の数は限られている。異常なのは、それまで少年の過ごした村なのだった。

セスクは衝撃を受けた様子でしばらくコップを眺めていたが、やがて意を決した表情で恐る恐る口に含んだ。彼女は黙ってそれを見守っていた。特に気にはしていない。少年のこれまでの生活を考えれば驚きは無理もなかったし、一度でも砂漠で水に飢えてみれば、多少の味など気にはなくなる。要は慣れの問題だからだった。セスクもここまでの旅で少しは慣れてきていたはずだ。それを耐えたのだから、何も問題はない。そうは思いながら、再びコップを戻すセスクの様子を見て、彼女は店内を忙しそうに行き来する女性に果実水を追加で注文した。

すぐに届けられた果実水とともにランチもついてきた。パンとスープ、それに豆と肉を炒めた平皿を手際よく並べた女性に駄賃がわりの銅貨を手渡すと、彼女は心得た表情で片目を閉じて言った。

「ちよつとあたしも、他のテーブル片付けてくるんで。また後で来ますね。まずはご飯のほう、ごゆっくりどうぞ」

彼らの空腹さと食事以外に話があるだろうことを見越した発言は、年の頃はサリュとさほど変わらない風情ながらも接客商売の年季を感じさせる気の遣いようだった。セスクが食前の祈りに目を閉じ、それが終わってから二人は食事を始めた。

ほとんど無言で全てのものを胃の中に収めた頃、見計らったかのように女中が席にやってきた。

「ご飯、どうでした？」

「おいしかったあ。これって、なんの香料？ ザベージャ使ってるっぽいけど」

「あら。キミ、料理するの？ これはね、炒ってるの。そのあと浸けてるからだいぶ風味が違うでしょ？」

「へえ、そんなやり方知らないや」

感心した様子で頷くセスクに微笑んでから、女性はサリュへと振り向いた。

「あんまりお口にあいませんでした？」

「いえ。美味しかったです」

こころもち抑えた声音で彼女は答えた。女中はちらりと視線を少し離れた場所に座る他の客に向けると、

「あの人は、あんまり心配しなくても大丈夫。常連さんだし、ヘータイさんでもないから。もう少ししたら早番の人達が来てお酒を飲みますから、気をつけたほうがいいかもですね」

言って、自然な動作で椅子に座り、小首を傾げる。媚びるようでありながら相手に不快感を与えない仕草だった。

「それで、あたしで何かお役に立ってますか？ 女の人と子どもの二人旅なんて、どう見てもわけありとしか思えないっばいですけど」
子ども扱いされたセスクが頬を膨らませている。

「人を、探していて」

ここまで話のわかる相手なら、むしろ主導権は相手に任せただほうがよい。そう判断して、サリュは訊ねた。繊細な睫毛を瞬かせて、女中が逆側に首をかしげた。

「男の人ですか？ 恋人？」

またか。それこそが大事なことであるかのように、後半部分を強調してくる言葉をかわして、サリュは続けた。

「年は若くて、二十歳頃の。商人じゃない旅の人なんですが」

「ううん。それだけじゃちょっとなあ。なにか特徴とかないんです？」

軽口を流された彼女は一瞬だけ苦笑を閃かせると、すぐに表情を真面目なものに切り替えた。

「髪は濃い茶で、肌は焼けた白。背はあの扉より少し低いぐらい。

もしかすると、目を　右目を、隠しているかも。あまり目立つような人では、ないです」

「その人の名前とか、聞いても？」

「リト。……多分、そう名乗ってる」と

女性は、しばらくの間自分の脳裡をさらうように瞳を閉じていたが、やがて目を開けて残念そうに首を振った。

「ごめんなさい。記憶にはないですね。お店に来て話したら、大抵の人は忘れないって自信はあるんですけど」

「ここ以外で、旅人が寄りそうなお店はありますか？」

「とりあえず、食堂なら街にもいくつもありますけど、場所的に一見さんはほとんどうちに来るんじゃないかなあ。お客さん達みたい」

「　　そうですか」

少ない言葉に、隠された感情が垣間見えていた。申し訳なさそうに女性が言った。

「あ、でも、あたしが話してないだけかもしれませんし　　気休めですね。ここには、絶対に来てるんですか？」

サリユは首を振った。

「一年前に、トマスで別れて。どこに向かったかもわかりません」
「すごい。ずっとその人のこと、探してるんですか」

大きな瞳を輝かせた女性が言った。罰が悪そうに、

「あ、ごめんなさい。でも、なんだか物語みたいだなあって。商隊と一緒にきた詩人さんが前に歌ってくれたんです、離れ離れになっ

た人を探して砂海をさまようお話」

彼女はその歌の一節を口ずさんでみせた。有名な歌曲だが、サリユははじめて聞くものだった。

「ほんと、ごめんなさい。でも、あたしって生まれてからずっとこんなんで。ちよっとそういうのに憧れたりしてて」

「お姉ちゃん、ずっとこの街にいるの？」

「そう。あたしのお母さんがね、働いてたの。あたしみたいにお店で接客やってて、そこで知り合った人と一緒になって。　こんなところ絶対でていってやるって、そうずっと思ってるんだけど。それでも結局母親と同じことやってるんだから、人生ってねえ」

嘆くのではなくむしろ楽しむように、彼女は肩をすくめた。

「あ、関係ないですね。えっと、ごめんなさい、とりあえず覚えはないです。ここを出てちよっと行った先にボノクスに向かう人達相手の店がいくつか並んでるんで、そっちで聞いてみた方が確実かもですね」

「わかりました。ありがとうございます」

「あ、お名前、聞いておいても？　もしこれからその人が来たら、絶対にお伝えしますから」

礼を言っ立ち上がるサリュに、女中が訊ねた。

「サリュ、です。もしリトという人が来たら　ずっと探していますと。トマスにも、あなたを待っている人がいると。そう伝えてください」

女中の真剣な顔に背中を向けて外に出る。彼女の後ろを黙ってセスクもついてきていた。

「セスク。これからまだ少し歩くつもりだけど。帰っておいても平気だから」

セスクは悩む素振りをしてから、

「俺がついていくと、邪魔？」

訊ねた。彼女が首を振ると、少年は嬉しそうに笑った。

「なら、一緒にいるよ」

そっけなく頷きながら、彼女は思いついた。もしかしたら気を遣われたのだろうか。自分より五つ以上は違うはずの相手の心配りとそれに今更のように気づく自分に苦笑したい思いで、彼女は音を立てずに嘆息した。

それから周囲の店をまわったが、彼女の探す人物に関する情報はなかった。水や食料の仕入れに砂海で夜営するための道具の手入れや購入、あるいはボノクスへの道のりや航路周辺の最近の動向についての確認。街に来た人間がそれらの何一つとして行わず、誰とも言葉を交わさないことはありえない。それでいて何の手がかりも掴めないことはつまり、唯一つの事実を指していた。見渡す範囲の店に足を運び尽くした結果、ようやくサリュはその結論を受け入れた。

彼は、この街を訪れていない。

まったく頭になかったわけではなかった。食堂で女中から話を聞いた時、あるいはその前から。もしかするとこの街に着くより先に自分は半ばその結果を思いついていたかもしれない。果たしてそれは予測か、それとも諦観なのだろうか。

陰鬱な気分が足元から忍び寄り、そのまま喉元まで這い上がるような思いを覚えた彼女はそれを吐き出す息を吹いた。隣で心配そうな表情で見あげるセスクにわずかに目元の和らいだ一瞥を送り、「戻りましょう。ごめんなさい、疲れているのに」
気遣わしげな表情で、少年は何も言わなかった。

今になって身体が旅の疲れを認識したかの如く、宿への道を歩く全身に重さがのしかかってきた。これからについて。セスクについて。考えるべきことは多いが、それを行うだけの余裕が今の彼女にはない。振り払ったはずの気配がまだ足裏に残り、彼女を砂地獄に引きずり込もうとしていた。

何の手がかりもなかったことに自分でも思っている以上に衝撃を受けていることを自覚して、無意識の動作で隣に手を伸ばしかけ、

そこにいるのが砂虎ではないことに気づいて首を振った。クアルは、今頃どうしているだろう。

すぐにも街を出て合流したいところではあったが、しかし身体を休めずにこれからまた一週間近くの日程に出ることは文字通り自殺行為でしかない。それに、自分以上にセスクは疲れきっている。

心と身体の双方に鎖が纏まりついているようだった。煩わしさに顔をしかめ、ふと思う。あの人も、そうだったのだろうか。

今は何を思っても、良い様には考えられそうになかった。思考を遮断して彼女は足元に視線を落とす。一步一步地面を踏みしめる自分の足だけに意識を集中させて、砂海をそうするようになだ歩くことへと専念する。

宿に戻り、仏頂面で鎮座する主人に会釈を向けて階段を上った。

その背後から、主人が声を掛けた。

「客だよ」

振り返った先に、複数の男達の姿があった。いずれもさっぱりとした服装に身を包んだ、壮年よりは幾らか若く見える集団。表情に貼り付けられた笑みにむしる警戒をおぼえ、彼女は油断なく周囲に目を配りながら口を開いた。

「……なにか」

「失礼。先ほどこちらに到着された旅の方、というのは貴女方で間違いありませんかな」

一団の中の一人、最も小柄で痩せこけた様相の男が言った。奇妙に甲高い声だった。質問口調でありながら、実際にはそれは確認でしかない。門番や宿屋の主人も含め、裏をとっていないはずがなかった。否定してみせて得るものはない。無言で頷くサリュに目を細めて、男は口上を述べた。

「我々はケッセルト男爵様の使いです」

控えめな　そう本人は思っているだろう、自尊心を忍ばせた言葉に、サリュは沈黙で応えた。

目の前の相手が驚きを示さないのに、男が露骨に顔をしかめた。もしや聞こえなかつたのかと、やや声高に繰り返す。

「我々は、ケツセルト男爵様の使いの者です」

「その使いの方々が何の御用でしょうか」

男の眦が吊り上がった。連動するように笑みの形だったはずの口角まで持ち上がると、途端に不自然に歪んだ顔相を晒す。階段の下から見上げる相手の下手な百面相じみた変化を、頭に被った防砂服の奥から冷めた眼差しでサリュは眺めていた。

別に挑発したつもりではなかった。疲れていたし、目の前のこの男のように権威を笠に着た存在を好ましく思っていないだけだった。その居丈高な態度は、彼女が知るある若い貴族の姿からあまりにかけはなれている。

なんとか怒声をあげるのだけは必死に堪えた様子で、男は口ひげを震わせた。

「砂海を越えてこの街に現れたという旅の人間に、男爵様は大変強い興味をお持ちでおられます。ぜひ直接お話を聞きたいとの旨、たまわっておりますれば、我々にご同行いただけますかな」

丁寧を装ったその言葉もやはり、同行を前提としたものでしかない。彼女は傍らで不安そうに立つセスクを一瞥し、それから階下に向かつて首肯した。ただし、と付け加える。

「この街に着いたばかりで、酷く疲れています。この子は宿で休ませてあげたいので、伺うのは私一人ということでお許し頂けませんでしょうか」

多少、相手を慮ってみせた言葉で、男の自尊心は満たされたようだった。鷹揚に頷いてくる。

「けっこう。それではご案内しますので、お支度があればお早く」

「ありがとうございます」

うわべだけの礼を述べて隣に視線を向けると、言いたい台詞がそのまま顔に書いてある少年が口を開きかけ、サリュはそれを遮って声を上乘せた。

「それじゃ、セスク。少し行ってくるから、あなたは部屋で休んでいて。もし帰りが遅ければ、ご飯は……お願いできますか？」

それまで彼女と男達の話を一瞥もくれないまま、ただ顎を引いて了承の意を示した。

「ご飯はそういうことで。荷物のお手入れ、よろしくね」

少年が眉をひそめた。それが男達から見えないよう、微妙に立ち位置を変えながら、彼女は少年にだけ聞こえる大きさの声で囁いた。「準備だけ、しておいて」

その言葉の意味を正しく少年が理解したか確認しないまま、彼女は背中を向けた。男達の面白がるような視線を受け流して、瘦せかけた男の前に立った。男は彼女より背が低かった。

それをなじるように見上げて、

「では。こちらへ」

言葉に呼応して彼女の両脇に二人の男が立った。客ではなく、ほとんど連行するような応対にも表情を動かさず、彼女は淡々とそれに従った。

男達の先導を受けて外を歩く間に、考える。

ケッセルト男爵というのは確か、この街を治める地方貴族の名前だったはずだ。

文字通りの意味での「領土」という概念の意味合いが薄い世界ではこの時代、地方貴族というのは単に身分の低さを表すものではなく、武門の者であるかどうかという意味合いが強い。特に、現在は小康状態にあるとはいえボノクスとの国境線、その趨勢を左右する重要な拠点を任されている人物が、無能なはずがなかった。

どのような人物か、彼女が半日ほど街で聞いた話の中ではそれを判断する材料はない。せいぜい、人並み以上に女遊びを好むというだけのありふれた醜聞のみだった。ただ、この街の在り方を見てみれば想像がつくところはあった。武断的でありながら、決して後方の存在を軽視しているわけではない。

そのような人物と相対するなど、考えただけでもあまり気が進むものではなかった。できれば丁重にお断りしたかったが、そうもいかない。権威者である彼らは、自分達の権威を軽んじられることに何より怒りを覚えるからだ。今、先頭を歩くこの小男のように。

彼女が案内されたのは、険しい地形の最上段に設けられた屋敷だった。とはいえ、屋敷というにはいささか以上にこじんまりとしている。無理もなかった。土台となるべき広い地面が存在しないのだから、横に広く間取りをとるわけにはいかない。

それは屋敷というより、砦と呼ぶほうが似合いの姿をしていた。街の上部にあるのも、たんに見下すことを好んだわけではなく、物見の役割を兼ねている雰囲気がある。ここを拠点にしている人間が極めて実際のな性格の持ち主であることが窺えて、サリュはこっそりため息をついた。

厳しい顔つきの番兵に誰何を問われ、小男が答える。十字に遮られていた槍が胸元で捧げ構えられ、男が彼女を振り向いた。

「それでは、どうぞ。男爵様はすぐにもお話を聞きたいとの仰せです」

男は、野で鍛え抜かれた獣のような気配を身に纏っていた。そう思ったのが自分の過剰な感想であるか、一瞬サリュには見当がつかなかった。

部屋には、多くの獣の燻製が壁に飾り立てられていた。肉食獣から、大型の草食獣まで。いずれも砂海を生きる生態系の上位に存在するだろうと思われる物ばかりで、なかには砂虎のそれまでがあった。クアルなどとは体格が倍ほどは違うのではないかと思われる、その砂虎の毛皮をそのまま剥いで座椅子にかけた敷物の上に、その男は腰掛けていた。若い。多く見積もっても彼女と十は違わないように見える。

「おう、来たか」

無数の野獣の死骸を従えて、彼女を見るその瞳には意外に知性の光が強い。

「キーチェン、あんがとよ。下がっていいぞ」

「しかし」

「なんだよ、じゃあ茶でも持って来いよ。そしたら仲間に入れてやつから」

なにか言いたげな小男を追い払って、男は気さくな態度で肩をすくめてみせた。

「すまなかつたな。偉そうな態度で腹が立ったんじゃないか？」

「はい、少し」

豪快に笑う。

「正直だな。いや、悪かった。俺が行けばよかったんだけどな、いい顔しない連中が多いんだ。立場があるとか言ってるな。肩が凝る話さ」

愛嬌のある表情で言われても、彼女はもちろん警戒を解かなかった。むしろ、いっその注意を払うべきと自身に言い聞かせているところに、ふんと見透かしたような笑いが空気を打つ。

「そう緊張しなさんな。別にとつて食おうってわけじゃない。いや、そのボロい旅装の下に何が隠れてるのかわつてのには、興味が沸いてしょうがないってのは確かだがね」

彼女は応えなかった。例え内心で驚いていたとしても、その気配

はわずかも外に漏れ出ではないはずだった。男はにやりと笑って、「さすがにひつかからねえか。だが別に無理してだんまりなんかしてくれなくていいんだぜ。ちょっとした男なら、相手がどんなやつかなんてわかるもんだ。匂いでな」

獣じみたことをうそぶいてみる男の軽口はとりあわず、彼女は平坦な声で訊ねた。

「私に、お話があると聞きましたが」

「なんだよ、つまんねえな。ああ、今日着いたばかりだったか。そりゃ疲れてるとこに悪かった」

男の表情が変わった。

「この街を預かるケツセルトだ。男爵、なんて流行りもしない爵位をつけて名乗ってるくらい、気に入ってない名前だけだな。別にどつちで呼んでくれてもいい」

さっきまでと同じように語る冗談さえも、意味合いが全く異なつて聞こえる。今の男には確かに人を従える気配があつた。平民であればそれだけで萎縮してしまうようなケツセルトの威風に、サリュは身じろぎせずに応じた。

「砂海を旅しています、サリュといひます」

ケツセルトが面白そうに口の端を歪めた。

「まあ、ちゃっちゃといこうか。聞きたい話つてのは大体、見当がついてるだろ？ あんたが通ってきたっていう水島に、航路。それから、こいつについてだ」

そう言つて男が脇から取り出した物を見て、さすがにサリュも少し眉を動かした。

白い欠片は、街に入る時に彼女が番兵に渡した物だった。岩塩。人頭税として提出されたそれが領主であるケツセルトの手に渡っていることはおかしくないとしても、あまりに手早い。さらに言うなら、その欠片は税として提出したのではなく、もう一方を目的として彼女が供した物であるように思えた。

その視線の意味を感じ取った男が、ひょいと手を広げて言った。
「安心してくれていい。うちは、別に賄賂を禁止しちゃあいない。
賄賂を受けたことを隠すな、って言うてるだけだな」

貴族というより、砂賊の頭目じみた物言いだった。番兵にまで行き届いた自らの統率を誇る様子もなく、男は手のひらに転がした岩塩を興味深そうに、

「トマスでもそうはお目にかかれないくらいの上物だ。そりゃあ気にもなる。だが、俺としちゃこっちは二の次だな。さっそくだが、いくつか質問させてもらおうか」

彼女の立場なら、否応もない。無言のまま相手の言葉を待った。
「年はいくつだ？」

いったい何の冗談かと、一瞬反応が遅れた。ケツセルトが眉をひそめる。

「何だよ、教えてくれんのか？」

「……正確なものはわかりません。必要な時は、十八と答えていきます」

「おお、若いな。二十と見立ててたんだが。俺もまだまだ甘い」

腕を組んだ頭を振る男の態度が、サリュには全く理解できなかった。それまで知られていなかった航路を使って街に現れた旅人相手に、その最初に聞くべき質問とは到底思えなかった。しかし、男は真剣そのものの表情で、

「好みの男はどんな奴だ？」

頭痛に近いものを感じて、彼女は目を閉じた。

「私は、からかわれているのでしょうか」

「からかう？」

豪胆そのものというくつきりとした眉を持ち上げる男に、

「オアシスを使った航路と、それに岩塩のことを聞きたかったので
は」

「その前に言つたらう。その下に興味がある、と」

臆面もなく言つてのける、その男の顔は端正というより精悍さの
にじみでたものではあつたものの、女好きのする類のものではあつ
た。確かな自負が男の魅力を人並み以上のものへとしており、それ
は男を目の前にしたサリュにも感じられる。稚気めいた言動が嫌悪
に至らず、むしろ人間的な器の大きさでさえあるかのように映る、
しかしそのことに惑うつもりはなかつた。

「場をわきまえない男の人は、好ましくないと思ひますが」

「そうかい。そりゃ残念」

いつの間にか、部屋に入ったときのような雰囲氣に戻っている。
やりづらさを彼女が感じた次の瞬間、

「それで、どこの間諜だ？」

鋭い言葉が剣のように突き刺さつた。

言葉の音程も、口調も何一つ変わらない。顔には笑みさえ浮かべ
ているというのに、与える印象だけで全く異なっている。これがこ
の男のやり方なのだと思ひ、サリュは小さく息を整えた。

「どつという意味でしょうか」

「まあ、普通に考えてくれればわかるだろうさ。どつから突然現
れた。荷にはばかりかかい岩塩。怪しいと思ひないほうがどうかして
る」

「私は、人を探してこの街を訪れただけです。オアシスについては、
偶然立ち寄つただけで、その長からの手紙をお渡ししたはずですが」
「ほう。なら、その偶然見つけたオアシスの存在を知らず、どうし
て砂海を渡ろうなんて考えたんだ？ まさか適当に歩いてれば水場
が見つかるだろうなんて、安易に考えて砂海に飛び込んだわけじゃ
あるまい」

自身の劣勢をサリュは感じた。

砂虎の存在を隠したまま、彼女が強行した砂海の突破を説明する
ことは確かに不自然だつた。しかし、そのことを話せばそれはそれ

でまた面倒なことになる。

「探している人が、通ったかもしれないと思ったただけです」

「どこもかしこも干上がった砂海を？ そりゃただの自殺行為だ。ありえないと思うがね」

自殺したがっている、その後を追うのも自殺行為だ。そう言いたげに男は顔をゆがめる。

「河川沿いで探し人の話は聞けませんでしたから。可能性として残っているなら、リスクをとる価値はあると思いました」

「リスク」

男は繰り返した。

「そのとおり、リスクだ。その大きすぎるリスクを賭けて、いったい何が得られたのか 得られると思ったのか。それに興味があるね。もしかしたらその何重にもなっってそうな旅装を剥ぎ取ること以上」

部屋に小男が戻ってきた。盆に三杯の碗を持ってきているそのキーチェンと呼ばれた自分の部下に、ケツセルトは手を振って言った。「面会は終わりだ。彼女には少しここに留まってもらおう。部屋の準備をしろ。……そういうわけだ。もう少し詳しく話を聞かせてもらおうか、旅のお嬢さん。ああ、下の安宿よりはマシなくらいの待遇はできると思うから、安心してくれ」

反論の為に口を開きかけ、鋭い眼差しを受けたサリュは答える言葉を持たなかった。痛恨の思いが胸に沸く。横柄な態度で顎をしゃくる小男の後について、部屋を出た。その背後で、男がつまらなそうに欠伸を噛み殺していた。

男の言葉どおり、サリュの連れて行かれたのは牢ではなく客間だった。普段はそのまま兵の詰め所に使っっていそうな質素な風情ではあるが、窓に格子はなく、壁を叩いても内側に鉄板が埋めこめられ

ているような音は返ってこない。もつとも彼女の体格ならなんとか身をくぐらせることもできそうな窓の外にあるのは断崖であり、その必要がないというだけのことかもしれない。

唯一つ客向けかと思われるのが、中央に置かれる羽毛の敷き詰められた長椅子の存在だった。ふわりと肌をくすぐる天然の毛皮に腰を下ろし、彼女は部屋の内装を確かめた。時計はある。武器になりそうなものはない。ただし、謁見の時に所持品についてはたいして調べられることはなかった。寛容、あるいは横着。そのいずれもしつくりとこない。この館の主の態度を思い出し、彼女はようやくそれに似つかわしい言葉を見つけ出していた。

自負。目の前の相手に殺されることなどありえないという、不適さ。それが倣岸であるかはともかく、在り方の一つとして留めておくべき事ではある。長くかかるかもしれない。確信めいた思いに、サリュは細く長い息を吐いた。

後悔はある。しかしそれがどれを指してのものかについて、ということになる。彼女自身にもいささか不明瞭だった。この街に来たことが、あの岩塩の処置か。セスクの存在、あるいはその村で頼まれたことを了承したことが

この街を訪れることは確かにリスクではあった。国防の最前線。その周辺では水源の枯渇が頻発し、戦時とは違った意味でびりびりと空気が張り詰めている。それでも訪れたのはケツセルトに述べたとおり、それが彼女にとって何より大きな旅の目的だったからだ。リスクというなら、それは無視するしかないものだ。だから問題は別にあつた。岩塩。あるいは街で聞き込みを終えてすぐここから去らなかつたこと。それができなかつた理由。今ある状況を作り出したのは彼女自身だった。つまりは、自分のせいということになる。過ぎたことを思い悩んでも仕方がない。疲労で頭が鈍くなってい

ることを自覚しつつ、サリュはこれからの展開について考えを進めた。

男はこちらから情報を得ようとしている。一つはあの岩塩の存在。二つは枯渴した砂海を渡ってきたという事実。三つ目は、それをした理由。岩塩についてはセスクの村でもらったのだから、と答えるしかない。後の二つに関しては、すでに男に向けて口にしたとおりだった。砂虎のことを話すわけにはいかない以上、先ほどの抗弁で既に彼女は全てを語っていた。

せめてあの岩塩の存在についての説明で、相手を納得させることができれば、それを考えた彼女の頭に浮かんだのはセスクの存在だったが、かといってこの場所に少年を呼ぶことが果たしてどう物事に影響を及ぼすか。別々の場所に置かれている状況そのものが、すでに相手の狙いに適ったものである可能性もあった。当然、こちらが動くことを予想に入れていることも考えられる。いずれにせよ一日程度なら問題がなくなるとも、いずれはセスクに連絡を入れる必要が出てくるが

思考の洪水がめまいを起こしかけ、サリュはまぶたを押さえた。元々、あまり考えることが得意な方ではない。疲れもあった。案内人が置いていった水差しの中身を注ぎ、一応の風味の確認のあとに口に含む。保存と匂い消しを目的とした柑橘系の香りが広がった。ぬるいが、昼に食堂で出たものとは比べようもない。それがもたらす意味について考え、ろくにまとまらず、いい加減に自身の体調に限界を感じた彼女は、少しばかり仮眠をとろうと長椅子の上で身を丸めた。

ここは敵地であるのだから、むろん熟睡するような隙は見せられない。手元に短刀を備え、何かあればすぐに跳ね起きられるよう抱え込んだ膝に頭を伏せるようにして、ひと時の眠りについた。

防砂具ごしに触れる何者かの気配で、彼女はうつろいながら意識を戻した。クアルだろうか。しかし今、彼女の頭にあるのはざらりとした舌の感触とは異なっている。もつと滑らかで、こちらへの気配りを感じさせた。それらが思い起こした古い記憶に、願ってそのまま再度意識を委ねかけ、そこで唐突に思い至った。

掴んだままの短刀を滑らせる。使い慣れた刃物が相手の急所へと深く突き刺さる前に、その動きを止めた。目の前に、ちよつかいをかけていた両手を挙げ、おどけた態度をとるケッセルトの姿があった。

「……何をしていますか」

険悪な声に、男は気にした様子もなく肩をすくめた。

「いや、起きねえから」

「忍んで部屋に入る理由になるとは思いませんが」

「声ならかけたぜ？ そっちが気づかなかっただけだろうがよ」

白々しい言葉に、齒噛みする。砂虎のようにはいかないまでも、誰かが近寄れば目を覚ます程度の自信が彼女にはあった。それが出来なかつたのは、自分の疲労がそれほど根深かつたのか、それとも相手が一枚上だったからか。どちらにしても不快なことには変わらない。

「なんの御用です」

飄とした態度に、猛りそうになるのを抑えつけて言葉をぶつける。

男は背後を指し示した。

「飯でも一緒にどうかと思ってね」

長椅子の前の卓に食膳が二つ並べられていた。ちらりと目線を巡らせれば、窓の外にはすでに光が消えている。相手の技量はともかく、奇襲は彼女の不覚による部分が大きかつたらしい。

「……領主ともあろう方が、得体の知れぬ客と食事を共にするのですか？」

確かにそれは、随分と腰の軽いことではある。ただ食事に招くならなくはないが、わざわざ主人が客間に足を運んで、しかも用意されているのは下の食堂で出たものと同じ大差がないように見える。彼女の警戒は当然のものだったが、

「気さくだろ」

男はただの一言で彼女の疑問に答えたつもりであるようだった。

向かい側に腰をおろし、端に置かれたガラス瓶の中身を碗に注ぎ、手馴れた動作で食事の用意を整える。サリュが黙ってそれを眺めているうちに、男は手のひらに収まるほどの小刀でパンを切り分け、その上にまぶす乾酪をそぎ落とし、同じように削り取った何かの調味料を主菜の盛り合わせの上に振るった。ひどく手際がよかった。

「さて、食おう。といっても大したものじゃねえが。正直に言えば、下で食うのとそうは違わんよ。ただ、これがあるだけでだいぶ違う」
にんまりと男が碗を掲げてみせる。

「ほれ、乾杯」

辟易した思いを口にするのも馬鹿らしくなり、サリュは黙って言葉に従った。碗の縁がこすれあい、純度の低い音を響かせる。そのまま杯を傾ける男の前で、彼女はそのまま碗を置いた。美味そうに表情をほころばせたケッセルトが、怪訝にしかめる。

「なんだ。飲まんのか」

無言で目の前の食事に手をつけるサリュに、男は不満そうに鼻を唸らせた。

「せっかくの晩餐だ、旅の話でも聞かせてくれたら嬉しいんだがね」

男のやり口は身に染みていたから、相手にしないのが一番かもしれない。しかし黙秘を貫いたところで事態が改善するわけではないだろう。せいぜい慇懃な態度でサリュは言った。

「芸で身を立っているわけではありませんので」

「別に歌え踊れと言ってるわけじゃないさ」

苦笑するようにしてから、ちらりと犬歯を覗かせる。

「砂海を渡っていれば、いろんなことに巻き込まれるものだろう？
特上の岩塩。知られていないオアシス。それに、人になつく砂虎
なんてものはどうだ」

男が空中を掴むようにした指先に、きらりとしたものが見える。
それが自身の防砂具に残り、取り払いそこねていたクアルの体毛で
あることに気づき、サリュは鋭い視線を返した。笑い、手にしたそ
れを払い捨てた男が言う。

「話したくなければそれでもかまわんが。しかし俺はこれでも忙し
い身でね、明日話を聞く暇があるかどうかはわからん。そうなる
困るのはそっちじゃないか？ 下で待つてる相手もいるらしいじゃ
ないか」

全ての手札は向こうに握られているだということ、改めてサリ
ユは実感した。クアルの存在さえ嗅ぎつかれては、対等な舞台に立
つことすら難しい。もはや黙っているという選択肢すら彼女には残
されていなかった。それならばと、少しでも相手の手札を探れるか
試みるべく口を開く。

「私がお話できることは、すでに昼間にお伝えしていますが」

「なら、身の上話でもいいさ。女子どもが砂海を渡るなんざ、なに
かあるんだらう。お涙話は嫌いだが、人情モノで酒がすすむっての
も事実でな」

「あなたを喜ばせると？」

「その方が身の為だと思うがね」

不意に権威者の傲慢さをまとわせたケッセルトに、彼女は防砂具
の中で眉をひそめた。まるでもう酔ってしまったかのような態度で、
くつくつと男は肩を揺らせる。

「とりあえず、その頭のを脱ぐだけでだいぶ興に入ると思うが。飯
だって食べづらいだらう？」

「慣れていきますので」

「そうかい。なら言い直そう。見ててつまらん、いいから脱げ」
ひやりとした冷気が室内を吹かした。

サリュは無言で、酩酊しきった様子のケッセルトを睨みつけた。

男の態度が演技であるということは考えるまでもない。問題なのはそれに対してどう受け答えるかということだった。形としては主人自らのもてなしの中にあつて、旅装をとらない非礼はどう考えても客の側にある。下手に勘気に触れれば、咎められるのは彼女だった。頭に巻きつけた布切れを取り払ったサリュの素顔を見たケッセルトが楽しげに頬を緩めた。

「おう、驚いた。覆面の下には美形、話の筋としちゃありきたりすぎるが、人間つまりはお約束が好きってところはなかなか変わらんらしい」

俯きがちに伏せるサリュの、その瞳の中の二重の環について目に見えなかったわけがないのだが、男はそれについて言葉を追わせなかった。それどころか、

「そんなものを見せられちゃ部下どもの士気に関わるな。覆面についていちゃ、触れないように達しておこう。せいぜい、うっかり晒したりしないでくれると助かるね」

サリュの視線の意味を察したケッセルトが笑い、

「勘違いしないでくれ。別に嫌がらせをしたかったわけじゃない。隠されたら見なくなるのが人情だろう？ それに、とっておきの秘密は自分だけのものにしておきたいってのも。すまんが、俺は我侭なんだ」

あけすけな台詞に、サリュの口元に小さく苦笑が浮かんだ。演技や抜け目のなさはともかく、この相手に悪い印象をおぼえるのはひどく困難な作業であると彼女は思った。それでも杯をかわす気にはなれなかったが、男はそれも気にしないことにしたらしい。一人で瓶を独占して手酌で二杯目を注いでいる。

「で、あの岩塩だが。それともオアシスの話からの方がいいかね」
どちらでも、とサリュは軽くまぶたを伏せて応じた。

「ならオアシスだ。お前さんが持ってきた書状は読ませてもらったが。正直に言つて、なかなか信じがたい。あのあたりで、まだそんな水場が残っているなんてね。そのあたりについては、どうだ？」

「どう、とは」

「見た感じさ。オアシスなら渡り歩いてきたんだろう」

少し思案してから、サリュは口を開いた。

「オアシスとしては十分すぎると思えました。潤沢な水、動植物の生息。周辺が枯渴している現状を見れば、航路の中継点としての価値は高いのでは。河川沿いをまわるより確実に距離は早まります。当然、かかる時間も」

「河川を短縮するわけにはいかんからな。思うが俥にくにやりと曲げられるなら、それが一番だが」

言葉を切り、ケッセルトが顎を撫でて笑う。

「そんな村が今まで見捨てられていた理由はなんだろうな」

「……村人達は、あまり外の世界と関わろうとしていませんでした。だからではないですか」

「ひきこもってた。まあそれはわからんでもない。水を持つってことは、つまりそれを奪われるってことだからな。だが、それならどうしてそいつらは今頃、手紙なんてよこしてきたんだ？」

「航路がとれたからでは。村の中だけで全ての生活用品をまかなうのは難しい。物流から孤立しては、いずれ滅びるだけです」

「滅びる、ねえ」

含んだ口調で呟き、それから男はくつくつと肩を揺らせた。眉をひそめるサリュを見てひよいとすくめてみせる。

「まあ確かに、言うとおりでな。こんな状況で砂海のご真ん中に水場がある。それだけでほとんど奇跡のようなものだ。砂上に身を投げ出して神への感謝を表現したい程に」

男の台詞は何か含むところがあると意図的に示していると思えなかったが、それが意味するところまでをサリュには把握できなかった。沈黙を貫く、その反応を見定めるような視線で眺めていたケツセルトが、

「それで、お前さんはこの後どこに向かうつもりなんだ？ ボノクスか？」

話題が一定しない。一々そのことに抗うのにも疲れたサリュは正直に答えた。彼女は意識しなかったが、ある意味で男の話術に屈した瞬間だった。

「探し人の話は聞けませんでしたので。戻ります」

「どこにだ。トマスにか」

それには、いくら疲れきった頭でも考えなく頷くことはできなかった。この男にトマスから来たなどと言ったおぼえはない。確かにここから戻る航路で最も近く大きな街はトマスしかありえないのだが、かまかけのつもりかとサリュは鋭い視線を男に向けた。それを受けても男は余裕の態度を崩さず、むしろその態度から何かを読み取った様子で片眉をあげて、

「いやなに。少し思い出しただけさ。一年くらい前か？ トマスでちよつとした騒ぎが起きた時のことだよ。なんでもその原因となったのが街で流行りかけていた魔女狩り裁判で、それに被告として訴えられたのが、砂虎を従えた奇妙な瞳の少女だった。そういう内容だったか」

サリュは黙して答えない。その沈黙こそが答えになっていたとしても、それ以外の反応は出来なかった。

「ずいぶん、突拍子もない話だったが。その裁判に出奔した宰相の実子を名乗る男が現れたとかな。あそこには宰相家と懇意にしているアルスタ家の次期当主が駐在しているから、妙に生々しい話ではある。そういえば出奔した次男と当主ってのは、許婚の間柄ではなか

「つたかな」

愉快そうに言ったケッセルトが、演技ぶった仕草で両の手を広げた。

「どうした。もう食わないのか？」

食欲など完全に失せている。これ以上一切の隙を見せない決意でサリュは男を見返し、それを受け流して男は自身の杯を乾かす。しばらく無言が続いた後、男が言った。

「まあ、所詮は噂だな」

男としてはそれで矛を収めたつもりだったのだろうが、それでサリュの気分が落ち着くはずもなかった。ほとんど親の敵を前にした気配を放っている彼女に、ケッセルトが苦笑ってみせる。

「正直すぎるな。慣れてないのか、それとも日が悪いのか？」

立ち上がると、自分の膳を手に扉へと向かう。広い背中を見せたまま、言った。

「今日はしまいだ。休むといい。そちらの都合はしらんが、まあ焦る必要もないだろう。ここに逗留しているうちに、お前さんの探し物もひよっこり顔を出すかしらんぞ」

「……そこまでご迷惑をおかけするわけにはいきません」

砂虎の唸り声にも似た謝絶の言葉に、男は肩越しに振り向き、「気にするな。飲食代が気になるなんて殊勝を言うくらいなら、客人じゃなくて俺の女になればいい。砂虎仕込みの閨技というのも、興味があるしな」

扉が閉じる。

去り際の言葉に不快感をおぼえる間すら惜しんで、サリュは残された食事をいそいで片付けると、早々と横になった。内心で焦る気持ちは押し殺し、ひっそりと息を整える。獣脂のランプが消され、暗闇に包まれたその中で、二重の環に光る銀色の光だけがしばらく爛々と輝いていたが、それもすぐに消えた。

居室に戻り、一人で杯を重ねていた男のもとに報告が入った。腰を屈め、椅子に座る自分と同程度の高さの視線を向けてくる相手に胡乱な視線を返し、気のない口調で男は幾つかの指示を与えて下げさせた。

追加の報告が入ったのはその夜遅く、ほとんど早朝といいいい宵明けの頃である。蒼白な顔つきの部下から受けた言葉をほとんど夢うつつなままに聞き、退出する間にふと思いついて急備えの客間を調べさせる。

すぐに兵は戻ってきた。招いたばかりの客の姿がないという報告に、男はむしろ満足げな笑みを浮かべ、兵を下がらせた。男がそのことについて指示を与えたのは彼が再び目を覚ましてからである。時刻はとうに昼前になっていた。

門のかかった木扉を叩き、不機嫌な表情で戸を開けてくれた宿の主人に口早に詫びを入れて、サリュはすぐに部屋に戻るとベッドから転び落ちそうに眠るセスクを叩き起こした。寝ぼけ眼の少年が頭をふらつかせている横で瞬く間に荷を整えはじめる。

「……街、出るの」

静かな双眸を向けて彼女は答えた。

「ええ。あなたは、残ってもいいのだけれど」

少年が首を横に振ったのに、サリュはむしろほっとする思いだった。こんな年頃の子どもが一人、街に置き去りにされてどうなるのかということ考えたからだった。それを表情にはおくびにもださず、

「そう」

ランプの灯りを近づけて少年の顔色を窺う。一日休んだところで体調が戻っているわけがないのは自身のそれでわかりきっていたが、少年の目、肌、唇、それから心臓の鼓動と握力を確かめて一瞬目を閉じ、逡巡を振り払うように開いた。

「河川沿いに行くから夜には、休める処に着けるはずだから。それまで我慢して」

「……あのさ。村に寄る道、通りたいたか言ったら。迷惑かな」

「村に帰るの？」

訊ねる言葉に、彼女自身気づかない感情がこもっていた。慌ててセスクは頭を振って、

「そうじゃないけど。そうじゃなくて、やっぱり、挨拶しときたいなとかって。親父と、あと、母さんの墓に」

視線を逸らして言った。サリュはすぐに答えなかった。容易に答えうるものではなかった。

今の体調で往路と同じ道を行くなどということは、とても薦められたものではない。確かに砂海を突っ切る方が直線距離としては短いだろうが、自分達の体調が万全で無い以上、そのような利は些細なものではなかった。

だが、セスクの村に行くためには水源の枯渴した砂海を渡る以外に方法はなかった。そして、そんな無謀な少年の希望を引き受ける旅の同行者など、自分以外には望めないだろうことも彼女にはわかっている。

「それに。俺、聞いたんだ」

少年が思いつめた表情をしているのにサリュは気づいた。

「昨日姉ちゃんが行ったあの食堂で、兵士みたいな連中が話してたんだ。この領主が、どこかに兵を出すって。水場が見つかったとか、そんな噂」

サリュは眉をひそめた。

水場。一帯での水源枯渴が取りざたされる中で、そんな場所がたやすく見つかるとは思えない。つまりそこは彼らの知る場所である可能性が高い。

セスクの故郷である水と塩と緑に溢れた集落。そこに兵を送る意味があるだろうか。あるだろう。今の状態で安定した水場というのはそれだけで価値がある。河川から離れた位置にあるタニルからすれば、その存在は貴重な生命線にもなりえた。実際にこの街を治める領主と話した彼女には、その可能性を否定する理由が見つからなかった。

セスクが不安に思うのは当然だった。村はツヴァイに反抗しているわけではない。それどころか、それまで隠遁していた自らの在り処を伝えてきたのだから、積極的な恭順の姿勢と見るべきだった。そこに向かつてあえて兵士を向かわせるとするのは、それは村に対する姿勢そのものだ。

ケツセルトという、あの獣のような雰囲気を纏った男がそう愚かな行為に出るとは思えなかったが、どんなことでもやってのけそうな気配もある。村が自分達で選んだ道とはいえ、セスクにしてみれば兵が向かうかもしれないことを伝えたいのだろう。例えどれだけでも憎く思っている、彼にとってその場所は故郷なのだ。

「……わかったわ」

家族。大切な人との別れ。結局、彼女の判断をそう傾けたのは、それを持たないことへの引け目と、それに近い存在を無くした事の経験からきた感傷のようなものというしかない。到底、合理的なものではなかった。もしかしたら自分はまた間違っているのかもしれないという予感がサリュの頭をよぎった。

「けど、来た時よりも辛い旅になると思うから。それは覚悟して」
決意を固めた表情で頷くセスクに、彼女はこれからのことを説明した。その必要があった。

領主の元から勝手に抜け出して、出兵の噂まであるのだから、そんなに街を出られるとは限らない。そうした達しが出ている可能性は高かったし、商人ならまだ日の昇らないうちに立出することもありうるが、旅人がこの朝方に出ようとすることだけで門兵から不審を抱かれる恐れもあった。

天然の要害である街から抜け出すことそれ自体は、そう難しくはない。自然の地形をそのまま利用しているから、逆に目に行き届きにくいところが必ずあるはずだった。外から登るのは困難でも、中からそうだとは限らない。切り立った崖のどこかから砂海に出られる道を探してもよかった。

ただし、その場合にはこぶつき馬や積荷を諦める必要がある。最悪の場合、それを選択することも彼女は考えており、だから荷物は最低限、必要なものだけを選び抜き、水、食料、航路図などの旅道具と、一冊の本、不要な物はここに置いていく予定でいた。彼女の懐には分不相応な岩塩の結晶もその一つだった。

荷をまとめると、サリュは宿の主人に迷惑料込みの後金を払って宿を出た。不機嫌そうな顔のまま、最後まで主人は何も言わなかった。それが消極的な黙認であれば助かるが、あるいはすぐに裏口から館に密告に出たかもしれない。こぶつき馬をひいてすぐに街の出口に向かい、そこに出立間近の商隊らしき一団を見つけて、サリュはそれを率いる男に金を払って街の外までの同行を願い出た。

「なんだってそんな必要がある？ お前さんら、なにかやらかしたのかい」

胡散臭そうな視線と言葉を向けられる。当然の疑問に、打ち合わせどおりにセスクが答えた。

「あのバカ領主、姉ちゃんに声かけてしつこいんだよ。俺の女になるまで街を出さないぞなんて言いやがるから、すぐに逃げたいんだ。お願いだよ、俺、あんなバカに姉ちゃんのこと取られたくないんだ」期待していた以上に真に迫った演技に、それを聞いた男が目を丸くし、大きく笑った。

「この領主の女癖の悪さは有名だからな。お前さん、いい根性してるじゃねえか。よし、わかった。ちゃんと外まで送り届けてやるから、それからは姉ちゃんのこと守ってやるんだぞ」

サリュは幌で覆われた荷車にかくまわれることになり、セスクは見習いとして一団に加わりそのまま街を出ることに成功した。この時点で、門兵にはサリュ達に対する通達など届いてはいなかったのだが、もちろんそのようなことがわかるはずもなかったから、事が上手く運んだことをサリュは素直に安堵した。

街の外で、よければこれからの道程も一緒するがという男の誘いを断り、二人は彼らの後ろ姿を見送ってから航路ではない方角へと足を向けた。

南西に半日程行った水場で、彼らは旅の同行者と再会した。クアールは水場にいなかったが、口笛を聞きつけてすぐにその姿を現した。大げさな感情表現でサリュへのしかかってくる若い砂虎にじゃれ

つかねながら、そこで日が落ち始めるのを待った。少しでもタニルから離れておきたかったが、今の体調で日射のきつい時間帯を歩くのは危険すぎる。

昼前までたつぷりと睡眠をとったケツセルトが私室で遅い朝食をとっていると、事務官を務める小柄な男が入ってきた。

「飯がまずいぞ、キーチエン」

文句の形で口が開かれる前に、機先を制して告げる。

「は？ はあ、左様ですか。私には普段のものと変わりなく感じましたが」

「起き抜けに景気の悪いツラを見せられたせいで不味くなった」

渋面になって押し黙る事務官に、木匙をくわえた口を歪めてケツセルトは報告を促した。不満げな表情のまま、男は口を開いた。

「姿を消した旅人の宿に兵をさしむけましたが、もぬけの殻でした」
「逃げたか」

「はい。どこか別の宿に身を隠しているだけかもしれませんが、昼までに何組か街を出た連中があります。二人連れの姿はなかったようですが、南との定期商隊が一つ、流れの商人も幾つか。その中に紛れ込まれた可能性は高いでしょうな」

「ふん。まあ、そんなところだろ」

「すぐに門兵に指示を出しておけば、見つけられたかもしれません」
「が」

恨みがましい視線に、男は片眉をあげた。

「見つける？ どうしてそんな必要がある」

思いもがけないことを言われた事務官が戸惑いをみせた。

「あの旅人にお尋ねになりたいことがあったのでは」

「ないな、そんなもの」

昨夜のやりとりを思い出しながら、男は手を振って言った。

「あの娘はなにも知らんよ。人を探してここに来たらしいが、本当にそれだけだろうさ。どうも巻き込まれたらしいな。世慣れてもなかったから無理もない。人が好いんだな」

「しかし、それではなぜここから逃げだすような必要があります」「さて。なにも知らんとはいえ、秘密にしておきたいことぐらいあるだろうさ。女に隠し事はつきものだ。俺が昨夜、少し虐めすぎたかもしれん。できれば悦んだ顔も見てみたかったが」

それを聞いた相手の表情が、またか、という呆れたものになる。

「あなたの死に場所はきつと寝台の上でしような」

「そうありたいもんだ」

部下の皮肉を軽く受け流して、ケツセルトは話題を変えた。

「幸福な人生の終わり方についてはともかく。準備は」

「は、明日の夕刻までには全て整います。お言葉どおり馬ではなく、輜重用にて二週分。……本当に百名でよろしいので？」

「ここらで戦場楽を聞かなくなって久しいが、一応今でも最前線だからな。独断でそれ以上抜くわけにはいかんだろう。集落程度の示威行為には十分すぎる数だ」

「は」

「拙速は大事だが、砂海に出ようというんだ。焦ったところで得はない。手抜かりのないようにな」

「……しかし、やはりどうしても信じられません。そのような場所が本当にあるとは」

「なんだ。疑り深いな。あの岩塩は見たんだろう」

「見ました。宿にも、大きな結晶が捨て置かれていたそうです。街を出るのに荷になると思ったのでしょうな」

「ああ、それは 悪いことをした。やはり、虐めすぎたか」

心の底からすまなそうな表情をつくる上司の態度に、小男は内心

で肩をすくめた。

「確かに、極めて純度の高い岩塩のようです。あれだけのものが採れて、安定した水源まで確保できる。普通なら妄言としか思えません」

男はつまらなそうに鼻息を鳴らし、卓上に置かれた羊皮紙に目をやった。

「だが実際に塩は辛いし、こうして手紙も届いてある。砂に定まる道理はないぞ」

「ですから、砂海を渡ったなどというのが虚言なのは。どこか別のところから用意した岩塩と架空のオアシスの存在で我々を騙し、出兵したところを攻めてくることも」

「寡兵でもって奇襲、占拠か？ 俺が相手方ならぜひやってみたいところだが」

「……ご冗談でも、そのようなご発言は」

「気にするな。まあ、無理だな。ここら一帯の枯渴は向こうとて同じだ。南の河川域は現状、我が国が占有している。補給線が整わずに兵は動かせん」

「しかし。例えばその手紙にあるオアシスがあるのは実は敵方で、そこに兵を隠しているということも考えられます」

むしろそうした事態を心待ちにしているように、男はうつすらとひげの生えた顎をなぞった。

「ああ、いいな。そういうのはとてもいい。しかしだからこそその少数派遣だろう。百名が抜けたところに敵が来たところで、半月も持たせられないほど無様な部下は持っていないはずだがな」

「それは、そうですが」

「ならその間に、こちらは包囲する奴らの背後を迂回して兵站を切る。件のオアシスがそちらにあるというならそのまま奪うまでだ。

こちらが先手を打てる限り自由にさせてやればいい。誘い水に終わるならそれもよし。挟撃を阿吽で図れるくらいには俺とお前の付き

合いも長いと思っていたが、違つたか？ 違わんだろう」

「もちろんです」

「だが、そこまで考えての謀略なら、届けられた手紙とあの娘の言い分に食い違いがある理由がないな。騙すために、統一されていない情報を与えることになんの得がある。こちらの足を鈍らせるだけだ。下手に細工を弄して大本の謀略を崩すような阿呆ならともかく」

ひらひらと羊皮紙を揺らす。挨拶状といって渡されたそれには、確かに初めて聞く村、その長からの言葉が並んでいた。ただしそれはただの挨拶状では終わらなかつた。あの若い旅人は中身を知らなかつただろう。知っていれば、あのような態度をとれるはずがない。つまりはそれが男の結論だつた。

反駁する言葉を持たずに事務官は沈黙したが、

「あの娘はシロだよ」

という強い断定の言葉にはうるんな視線を向けた。

「どうしてそのような自信がおりなのでしょう」

「さあ、どうしてだろうな。勘みたいなものじゃないか？」

忠実な男の部下は何も言わなかつたが、表情が何事かを雄弁に語つていた。とりあわずに男は続ける。

「まあ、行つて何もなければ笑われるのは俺さ。付き合わせた兵どもには申し訳ないが。ともあれ、間諜らしき存在が外に逃げだしてくれた以上、兵を動かす名分は立つ。気をつけるべきは南の河川域の状態だけだ。そこさえ落ち着いていれば、もしここが取り囲まれたところで行動の主導権はこつちにあるからな。斥候は密に、もちろんこちら側の連中にも怪しまれないようにしろ。漏らす情報は商人どもの噂程度で留めておけ。せつかくの手柄を嗅ぎ付けられても、なんだ、困る」

男が独占したがるものが女だけではないことを知っているキーチエンも、それについては何の不満はなかつた。誉れは自分達に在る

べきだと当然のように考えている。今回の件は戦場の武勇とは異なるが、比べ物にならないほどの価値を持っていることを正しく理解していたし、自分の上司がそうした高みからの視野を持っていることを尊敬してもいた。このタニルという街を治める人物は、ただ戦場働きに優れるだけでは許されない。

「準備のあとに出発だ。念は入れて、だが遅滞させるなよ」

「時は砂底に黄金を埋もらす、ですな」

「そして我々が向かう先にも黄金が待つてくれている。せつかく降つて沸いた奇跡のような機会だからな。せいぜい、どちらも手広く頂くべきだと思うね」

ケツセルトは笑った。己の行動に一切の疑問を感じていない、邪気のない笑顔だった。

空の色が変わる頃、二人は水場を出た。

本当なら日が翳りだした時間に出発する予定だったが、クアルの横で膝を抱えたままいつかうつらうつらとしていたサリュが気づいた時には、もう西の地平線が朱色に落ちかけていた。目の前で心配そうにセスクが彼女を見ている。

「大丈夫？」

返事をしかけて、開いた唇が乾燥して張り付いていた。防砂具の隙間から入り込んだ砂塵が喉をくすぐり、咳き込んだ彼女にセスクから水袋が渡される。わずかに口をつけて水気を得た彼女は改めて礼を述べた。

「ありがとう」

「ううん。ごめん、起こしたほうがいいかなって思ったけど、疲れてたみたいだから」

確かに起こしてくれたほうがよかった。だが悪いのは眠りこけていた自分なのだから、少年にあたるわけにはいかない。それよりも、ここまで自分の体調が芳しくないことの方が彼女には恐ろしかった。

頭には疼痛がへばりつき、四肢がひどく重く、だるい。セスクの村まで約一週間の道のりがある。果たして乗り越えられるだろうか。こちらを見る少年の瞳が不安そうに揺れているのを見てとって、サリュは内心の動揺を押し殺して立ち上がった。

ここで死ぬわけにはいかない。セスクを殺すわけにも。二言目に頭に浮かんだものに、彼女は自分でも少し意外に思った。いざとなれば、彼の血で咽の渴きを癒すことも考えているはずなのに。それは決して大げさな表現ではなく、実際にそうするしかない状況になったなら、ためらわずにそれをする覚悟がサリュにはあった。

それなのに、そんなことを思う自分に違和感をおぼえ、少年の瞳に映る自身の姿がぶれ、そこに誰かの表情を見出して彼女はいまさらのように得心した。

自分は、この少年にあの頃の自分を重ね合わせていたのだ。セスクを殺したくないのは、自分が殺されたくないから。自分が殺されなかったと思いたいからだ。何かあればいつもすぐに胸に起こす短い言葉をサリュは呟いた。あの人なら、どうしただろう。

流砂に巻き込まれ、水を枯らして二人で砂海をさまようことになったら。私の咽を裂き、血で渴きを癒しただろうか。それとも、達観した瞳で薄く晒い、何もせずに死を享受しただろうか。わからない。前者のような気もするし、後者のほうがあの人の生き方には似つかわしいとも思える。ひどく短い時間しか共有しなかったその人物について、サリュにはその程度の認識しか持ち合わせていなかった。

確かなことは、彼は私に生きると言ったことだ。それと、もう一つ。彼は私を守ってくれた。実際に水に飢えるような状況になったことはなかったけれど、しかし事実として、私の喉は裂かれてはいない。だから私は死なないし、セスクを殺したくもないのだ。

そのために必要なことは明らかだった。歩かなければならない。足を留めていたところで、終わりの無い砂の果てにまで流されるだけだ。

「行きましよう」

声をかけ、こぶつき馬の手綱をとって彼女は足を踏み出した。

それからの道中を、彼らはほとんど無言で歩き通した。

往路より救われた点は、既に休息に使える水場や、村の跡の場所を把握できていたことである。もちろん、水島ならこの数日の間に枯れてしまっている可能性はあるが、一度知った航路を歩くというだけで心理的には気が楽になる。

あとは自分達の体調に気をつけながら、一步踏み込むたびに疲れを訴える体の各部位を騙し騙し、足を進めるだけだ。まだ目標ははるか彼方に塵気楼となつてすらいなくとも、一步前に進むたびに目的地に近づいているはずだった。

四日目。航路図では行程の半ばを既に過ぎたあたりで、セスクが体調を崩した。急性の脱水症状というよりは、疲労で身体全般の機能が低下しているような症状だった。成長期前の未成熟な身体を思えば、よくここまでもつたというべきであった。

サリュは近くの水場、あるいは村の跡で休まずに先を急ぐことを選んだ。追っ手の存在もあるが、ここで多少休んでみたところで、セスクの体調の悪化が緩和することはあつても、上向くことはないと判断したのだった。かわりにセスクの荷を全て自分で抱え、セスク自身はこぶつき馬の背に跨らせた。

背中のこぶの盛り上がりへこませたこぶつき馬は、とびきりの不平に口を歪ませて、いつものように何も言わなかった。のそりと近づいてきたクアルがサリュを見上げる。視線が、まるで自分に乗るかといわんばかりの態度に見えて、彼女は自分にとって弟のようなその砂虎の小さな額を揉んで好意に応えた。

「……あと二日で着くから。頑張つて」

ほとんど気を失つて青ざめた表情のセスクに声をかける。少年は弱々しく口元に笑みを浮かべて頷いてみせた。サリュも微笑みを返したが、それが笑みの形になっているかあまり自信はなかった。体調が悪化しているのは彼女の連れだけではなかった。

歩き出す。いつもはほとんどかかない汗がにじみ、それが目に入つて視界を歪めた。ぬぐつてもぼやけたまま景色が戻らない。きつくまぶたを閉じて、闇の中で平衡感覚を崩しかけた彼女はこぶつき馬に寄りかかった。手綱に引かれたこぶつき馬が煩わしげに首をもたげる。足元になにかの温かみが触れた。ようやく視界を取り戻し、目を開いたそこに心配そうに見上げるクアルの縦に切れた虹彩があった。

声をかけるどころか、防砂具の奥で相手に向かつて瞳を和らげる余裕も彼女には残つていなかった。無言で砂虎の頭を撫でて、再び足を持ち上げる。鉛のように重いそれを一步、一步、踏みしめた。

そう遠くない先に訪れるだろう限界まで、彼女は僅かに残された余力を両足に集中させ、頭の中は空白に染め、ただひたすらに足を前へと投げ出し続けた。

その日の夜には、サリュは昼間とは逆にまるで唾が出なくなった。危険な兆候だった。身体に負担のない範囲で水を補給し、干し肉をかじつて唾液を促して、なんとか滋養を確保する。彼女以上に体調の悪いセスクはほとんど水しか受け付けようとせず、半ば無理やりに水に浸したパンを含ませて、喉の奥に嚥下させた。無理にでも食べておかなければ、明日まで持たないことは明白だった。

何か消化のよいスープでも作ればよかったのだが、手持ちの水にも余裕がなかった。恐らく明日には村に着けるはずだが、かといつて全てを使い切ることにはできない。あと一日、我慢してもらつしかなかった。

衰弱しきつた身体では、砂漠の夜の冷え込みは一人では到底耐えられない。サリュとセスクは互いの身を寄せ合い、その二人をクアルが囲むようにして彼らは夜を明かした。

身を切るような寒さに耐えられず、彼らは日が昇る前に出発した。朝焼けが東から大地を照らし、それまでの冷え込みが嘘のように吹き払われる。かわって大気に熱がこもり、すぐにじりじりと身を灼く暑さとなった。朦朧とする視界の先に、何かが見えた。

「……セスク。前、見て」

ぐったりとこぶつき馬に倒れ掛かっていたセスクが目線をあげた。地平の果てに、緑色の靄がかかっていた。森。その層気楼が遠くに浮かんでいる。

「もう、少し？」

かすれきつた声でセスクが言う。サリュは頷いた。

「そう。もう少し」

追いかければ逃げるそれをただただ追いかける。

夕方前によく、幻はその姿を地に根付かせた。実在のものとなったその麓に小さな集落の存在が見える。サリュは隣を歩くクアルの首を撫で、先へと送り出した。村に砂虎は連れて行けない。すぐに意図を察した若い砂虎が地を駆け、少し進んだところでこちらを振り返って心配するように一鳴きしてから身を翻した。森に直接向かわず、砂海を縫うように駆けてゆく。そのまま遠回りに水場へと向かってくれるだろう。

やがて、砂海の中でぽつんと浮き出るように緑に囲まれた集落の姿が近づいてきた。入り口に立っていた誰かが彼らに気づき、慌てて村の中へと戻っていく。その態度を怪訝に思う余裕もなく、ファラルドがすぐに出てきてくれることを祈りながら集落へと向かい、入り口の手前でついに彼女は力尽きた。

足から崩れ落ち、そのまま前のめりに倒れこむ。ざらついた砂の感触とそこにこもった熱が一瞬だけ彼女の意識を覚醒させ、目線だけで見上げた先で何人かの村人がやってくるのが見えた。

その中に見知った顔があった。他の人間より隆々とした体格の壮年の男。こちらへと一直線に足を向けるファラルドの顔つきがひどく険しく、その視線が憎々しげな気配をたたえていることに彼女は気づいた。

村人達は半死半生のサリュを引きずって村の中へと運んだ。どこかの家屋ではなく、集落の奥、半地下に伸びた地下道へと連れられる。

そこは洞窟だった。何かの気配がひっそりと濃く沈殿しているような、闇の集合体。水気を帯びた空気が喉を湿らせ、混濁している頭脳に推測を与えた。自分が運ばれているこの場所がいったいどんなのかということは、心身ともに衰弱しきった今の彼女の頭でもすぐに推測できた。

男達は、松明を手に先導する一人の後に続いて彼女を適当な場所で打ち捨てた。手荒な扱いに顔をしかめるが、もはや文句を言う力も残ってはいない。去り際、松明の灯りに下半分が照らされた顔の中心で険悪な視線が彼女を睨み、その男達がいなくなった後には暗闇が訪れた。

彼らの気配が遠く、一切の灯りの漏れもなくなってからサリュは苦勞して身を起こした。上半身を起き上がらせる、たったそれだけのことに渾身を込めなければならなかった。

浅い呼吸を繰り返す度に胃の中のを吐瀉してしまいそうになり、頭の中では大音声の銅鑼が鳴り響いている。黒塗りの視界がたわなに歪んでいた。音のない世界には彼女がそのままに自身の意識を沈めるのを誘っている甘美な雰囲気すらあったが、今の時点で気を失って次に目を覚ますことができるかどうか。

水が飲みたかった。それは決して無茶な願望ではないはずだった。

すぐにも奈落へと落ちいきそうな意識を舌を噛みつぶして保ちながら、サリュは這いずるように身体を伸ばして周辺をまさぐった。起伏の激しい床はひんやりとして、濡れた感触を手のひらに伝えて

いる。いくらか這いずつた先で深い段差に巡りつき、そこに腕を落とすと、柔らかい水音が跳ねた。

濡れた指先を舐めると、辛味を帯びた味に乾ききっていた舌が痺れる。かまわずに彼女はその水をすくい、飲み下した。渴きはまるで癒されなかったが、身体の中に水分が染み渡るのを感じる事が出来た。後味に残る塩分に嫌気がさすまでその水を飲み続け、それから彼女はようやくそこで意識の手綱を放した。

少しして意識を取り戻した時、気だるさはまだ身体の奥に居座っていたが、頭痛の尾は少し引いているように思えた。渴きもいくらかはマシになっていたが、塩分の多く含まれた水を大量に飲んだせいか、かわりにひどく苦々しい粘りが口腔に張り付いている。塩水というものが渴きの助けにならないことを彼女は知った。

相変わらず、体調は最悪の状態が続いている。自分がどれほど気を失っていたのかわかりようもない。普段なら空腹の具合でいくらか検討もつけられるが、ここ数日ろくなものを食べていなかった彼女の感覚はあらゆる意味で麻痺しきっていた。

周囲にあるのは闇と岩と、塩の水だけだった。時間の流れを感じさせるものはなにもない。自分の荷も一緒にどこかに放られていないかと探してみたが、両手に擦過傷を増やすだけの徒労に終わった。

「あ
」

筋張ってひきつる喉を震わせて、細長い声をはりあげる。反響は想像以上に大きく、遠くまで響き渡ったが、ここがどの程度の空間かわかるわけではなかった。そんな知識も経験も彼女にはない。せいぜい、広大な場所なのだろうと思えただけである。

地下空洞。村の中にある。つまりここは、村の生活を支えるその水場だろう。祝いの地、とセスクは言っていたか。そんなところに自分を放り出した理由は何故だ。

村人達の表情を思い出せば、自分が戻ってくるのが歓迎されなかつたらしいことはわかるが、その理由がわからない。フアラルドに頼まれた手紙は確かに手渡した。それとも、セスクを連れて行ったことを怒っているのだろうか。考えるための材料に乏しく、本調子でもなかつたから思考はともまとまりそうになかつたが、それでも彼女は考えるのを止めなかつた。恐ろしいからだつた。

一切の光のとだえた闇の中では、そうやって何かを考えておかなければ自分自身を正常でいさせられそうになかつた。閉じ込められた暗闇という状況にはあまりよい思い出がない。その時には傍にクアルの温かさがあつた。

歩き出すべきか。洞窟に入ってから確か一刻もしなかつたはずだから、出口に着く可能性はゼロではない。しかし、道が一本道であるとは限らない。むしろそうではない可能性がずっと高い。灯りもなしに彷徨つては遭難するのが関の山だ。

ではここにとどまつていてどうなる。塩と水は近くにあるからすぐに餓死するようなことはないが、やがてくる結果は見えて透いている。あるいは、自分の気が狂う方が先か。村人の狙いは案外それなのかもしれない。

殺意のあるなしは重要ではある。このまま打ち捨てられておく場合も当然ありうるが、殺すつもりならこんなところに放っておくわけがないという推測は、自分でも馬鹿馬鹿しいほど根拠に乏しいように思えた。

そもそも、その決断が正常なものかどうかも判断に怪しい。意識が闇に侵食されるのを認識して、彼女は我が身を抱きかかえた。

何かしらの決断をしてみせなければならぬ。その前に、せいぜい手に入る情報はないかと彼女は足掻いた。水面に指先を浸し、頭上に掲げてみる。流動する大気の動きは微塵も感じ取れなかつた。闇の中でさらに目を閉じ、耳をすませてみるが、何も聞こえない。

鼓膜の内側では、自身の鼓動の音だけがうるさかった。普段より早く打ち鳴らされているそれが、抑えきれない心象を容赦なく教えている。不安に押しつぶされそうになりながら、彼女は思いつく限りの行為を試した。

いつしか、その耳に聞きなれた言葉の響きが入り込んでいた。

たった一言の単語は、彼女自身がさがるように囁く呪いの言葉だった。

最初に感じたのは音だったか、それとも灯りだったのか、ともかくそれを認識した瞬間、磨耗しかけていた彼女の認識に彩りが戻った。誰かの来訪が、そのまま事態の改善を意味するわけではないにせよ、焦りと恐怖に無根拠に歩き出したくなるのをこらえて待ち焦がれていたものである。身体を屈め、獲物に跳びかかる砂虎のような姿勢で彼女はその何者かを待ち構えた。

やがて姿を見せたのは、掲げた松明に造作の陰影を濃くした男だった。記憶にある最後の表情そのままに、険しい視線が彼女を捉える。男の手元の光源が視界を灼き、眩暈を覚えたサリュは顔をしかめた。

「よう。調子はどうだい」

なじみの客に対するような台詞には、それ以外の感情は込められていなかった。

「……あまり。特に口の中が、最悪です」

は、と発したファラルドの笑い声が空洞に反響する。

「そりゃそうだ。塩の水なんて、外の人間には飲むことはそうそうないかもしれんがね。ほらよ」

投げ渡された何かを受け取る。水揺れの音と香ばしい麦の匂いがした。無言でファラルドを見やり、何も問わずにサリュはそれらに

手をつけた。水袋を傾けて、口の中に流し込む。塩気のない透明な味わいはいくらでも身体が欲していたが、飲みすぎないように注意して彼女は細かくちぎったパンを一旦水に濡らしてから胃に押し込んだ。

いまさら毒物の恐れもなかった。この状況でわざわざそのような手の込んだ真似をする必要がない。自分から問いかけることもせず、咀嚼を続けながら目線だけを向けるサリュへ、つまらなそうに鼻を鳴らしたファラルドが口を開いた。

「ずいぶん冷静だな。言いたいことがいくらでもあるだろうと思っただがね」

「セスクは、どうしてですか。身体の具合は」

「寝てるよ。衰弱しきってるが。どうも迷惑かけたらしいな、悪かった」

「……そうですか」
安堵の声色を聞きつけたファラルドが表情を固めて、目線を逸らした。

「悪かった。だから、こんなことを言える立場じゃないんだがね。正直、戻ってくるとは思わなかったよ」

「タニルからの兵が来ます。セスクが、街でそういう話を聞いたようです」

「ああ、そうかい」

男は驚かず、冷たく見下ろしたまま言った。

「だがこつちとしては、あんたが捕まりもせずに逃げ出してきたってことが問題だね」

サリュは無言で顔をしかめた。

「……手紙は渡してくれたんだろ。それで捕まるか、逃げ出してもまさかこつちに戻ってくるとはな。おかげで面倒事だ。ああ、気にしないでくれていいさ。ようは、あんたの始末をどうつけるかって話だ」

その言葉を聞いた瞬間、サリュは男に向かって飛びかかろうと地面を蹴りつけかけたが、燃やした松明を突きつけられてそれは適わなかった。隙のない視線が、獣じみた姿勢のサリュを射抜いた。

「やめとけ。あんたの処遇をどうするかってのは決まってるが、暴れられたら今ここでどうこうするしかなくなっちゃう」

水とパンを得たばかりの体調では、不満でもその言葉を認めるしかなかった。

「大人しく死の裁定がくだるのを待てと？」

「この洞窟は村の大人でも一度迷えば出てこれやしねえ。そんなところを灯りもなしに彷徨うってんなら、とめはせんがね」

つまらなそうな言葉を残して、ファラルドは視線を彼女に固定したまま後ずさり、そして灯りとともに消えた。すぐに追いかけるようにするが、手元の火を消してもしたのか、わずかな光量の残滓さえない。音も、気配も一瞬の間に消えうせてしまっていた。舌打ちして、サリュはその場に座り込んだ。それから手元にある水と、食料へと意識を向ける。一食分のそれが運ばれてきたことを考えるなら、次もあるはずだった。ならば機会はその時に掴めばいい。

全くの暗闇の中で一瞬、二重に描かれた瞳孔が怪しく輝くようだった。

すぐにその機会は訪れた。ファラルドが去ってから、どれほど待ったかはもはや感覚が狂っていてわからない。

灯りのかげらを捉えた瞬間、彼女は襲撃の態勢を整えていた。近くの地形は、それまで手に無数の傷をつくりながら把握していた。左側に水流。右側に五歩ほど歩いたところから急に地面のおうとつが激しくなり、身を隠すのに適した盛り上がりがあった。その一つに身を潜め、灯りを持った何者かが横を通り過ぎようとした瞬間、サリュは一息の間にその相手へと襲い掛かった。

松明を持った手を握り、捻る。その手が幼いことに気づかなかつた。そのまま関節を極めて相手の足を払い、体重をかけて地面に叩きつけようとしたところで、

「あつっ」

甲高い声に、半ば反射的に腕の力を緩めた。近くに転がった松明を拾って近づけると、あどけない少年が顔を苦悶の表情に歪めている。

「セスク……？」

「い、痛いよ、姉ちゃん……」

弱々しい声でセスクが言った。

「ごめんなさい。……身体は、もういいの？」

「うん。それより、姉ちゃんを逃がさないとして」

「村で何があつたの」

少年は大きく首を振った。

「わかんない。大人達は、みんな大声で怒鳴りあってる。街から兵隊が来るから、そんな場合じゃないって言うてるのに、あの女を村を滅ぼす魔女を殺せって。そんなことばかりだ」

セスクの舌に乗せられた単語は、サリュにとって耳慣れた呼ばれ方だった。魔女。

そう呼ばれる理由が確かに彼女にはあつた。名前と瞳。しかし、サリュという名前の意味を村の人間であるセスクは知らず、尋常ではないその異相を村で見たのはセスク以外にはファラルドだけで、つまりは彼から村人に広まったということだろうか。

「……そう」

「はやく出よう。今は夜だから、みんな寝てるよ」

第三者の気配が盛り上がった。反射的にセスクの口元をふさぎ、引き寄せて羽交い絞めを装った先で、松明に照らされたファラルドの幽鬼じみた顔が浮かび上がった。

「っ！」

セスクがくぐもった声をあげた。拘束された格好の息子をちらりと見てから、男は視線を上げた。

「少しは体調も戻ったらしいな」

「……セスクに、危害を加えたくありません。通してもらえますか」
ファラルドは乾いた笑いを打った。

「そいつの声は洞窟の入り口まで反響してたよ。下手な芝居で取り繕う必要はねえ。別に止めようとしてるわけでもな。ついでにそいつも連れてつてもらえると助かるんだがね」

サリュは嘆息した。思わず本音が漏れる。

「……状況がまるで理解できないのですが」

「のんびり話をしてる暇はねえだろう。よくある話さ、この村にもようやくと滅びが訪れただけのことだ」

男は言った。ひどく疲れた声音だった。ファラルドの様子に戸惑いを覚えながら、サリュは訊ねた。

「それは誰のもたらした滅びです」

「あんた、つてことになるな」

素っ気ない口調に、腕の中のセスクが暴れた。

「あなたの思惑通りに？」

「そこまで深く考えてたわけでもねえ。実際、こんなことになるのはちつとも思わなかった。馬鹿息子が村を出て行くことも、あんたの度が過ぎたお人よしさ加減もな」

忌々しげに見やる男を不思議そうに眺めて、サリュは言った。

「あなたは。あなたも、村のことが憎いのですか？」

男は答えなかった。サリュの胸元で暴れるのを止めたセスクを見おろして、繰り返した。

「訪れるべきものがきたただけだ」

「あの手紙は、村長からのものなどではないのですね」

確信をもって訊ねた質問に、返答はなかった。無言で顎をしゃくったファラルドが言う。

「あなたの荷は馬とまとめてある。水と食料も、あのこぶつき馬に背負えるだけ持たせてある。夜が明けないうちにさっさと行っちまうことだ」

簡単に言ってくれる。呆れにも似た思いを抱いた彼女は唇を歪めた。ろくに身体も休めず、最悪の体調のまま砂海に戻れという。それは死ぬというのにも等しい。とはいえ、そうしなければどのような状況に陥るか想像がつかないわけでもない。村人の手で拷問にあうか、体調不良のまま砂海に出て干からびるかどちらかを選べと言われているようなものだ。

目の前で小さな怒気が膨らんだ。サリュは黙って口枷をしていた右手をはずした。

「どういうことだよ、親父！」
悲鳴じみた声が感情を増幅させて反響した。

「村が滅ぶって。親父がそうしたのかよ、それで姉ちゃんの仕業にってことかよ。わけわかんない、なんでそんなことしたんだよ。ちゃんと説明しろよ！」

「……声を落とせ。誰か来たらどうする」

「いいから答えてくれよ！」

「お前は村を捨てて出て行ったんだろっ、ならもう関係ないこった」
冷淡に突き放され、セスクが言葉を詰まらせた。

「タニルからの派兵を村に伝えたいと言ったのはセスクです。捨てたわけでは」

「そのせいでとっ捕まっただってのに、まだそんなことを言えるのかい。……いいからそいつを連れてどこにでも行ってくれ」

「あなたはどうするのですか」

男が聞く耳を持たないことを悟り、最後に彼女は訊ねた。ファラルドは達観した眼差しで睥睨し、

「ここは俺の村さ」

とだけ告げた。

「セスクはどうなります」

「……好きにすればいい。砂漠で打ち捨てるのも、町で人買いに売り飛ばすのもあなたの勝手だ」

男の心情をサリュは理解し始めていた。何か言いかけて、口にす
るものがないことに気づき、口を閉じる。彼女の手前では、俯いた
セスクが震えていた。

「こつちだ、早くしな」

ファラルドの先導にサリュが続き、拳を握り締めたセスクも続い
た。

誰も彼もが沈黙して歩き、闇の境目のないまま洞窟の外へ出る。
欠け月の昇りに今が深夜だと知り、そのままひっそりと静まり返っ
た村を出た。こぶつき馬を曳きながら肩越しに振り返ると、闇に溶
け込むようなファラルドの姿が見えた。隣を歩くセスクは顔を上げ
ず、振り返ることもなかった。

村からすぐの水場では、すぐにクアルと再会することが出来た。
口笛を吹くまでもなく、彼の方から姿を現したのだった。擦り寄ら
せてくる砂虎の背を撫でつけながら、サリュは言った。

「今のうちに距離をとっておきましょう。次の水場くらいまでいけ
ば、追手の心配もなくなるだろうから……」

返答はなかった。故郷を離れることになった相手の気持ちを無遠
慮に忖度しようとは思わず、歩き出せば少年がその後ろについてく
ることだけ確認して砂海を進み、朝になる前に以前に通った水場へ
と辿り着いた。典型的な水島と呼ぶべきその水場は、十日ほどのあ
いだに半ば枯れかけていた。

日差しよけの幌を張り、食事をとって休息に入る。ファラルドの
準備してくれた水と食料の備えは十分に過ぎるほど多く、日中は少

しでも身体を休めておくつもりだった。今の体調で、長の旅に耐えられるとも思えなかった。

万が一、村からの追手が来たときにも、まずはクアルが気づいてくれる。絶大な信頼を与える砂虎の横腹に沿うようにして身体を丸めたサリュの背中に、ぽつりと言葉が響いた。

「親父、死ぬのかな」

彼女は答えなかった。

黄土色の風が砂を払い、まぶたを閉じる。次に目を開いた時、少年の姿はなくなっていた。

タニルを進発したその軍勢は、行軍の途にあつた。

百名からなる隊列による砂海の横断には、十数頭の輜重馬が用いられている。その先頭を進む男が跨っているのもやはりこぶつき馬である。偵察、強襲を主な役割とする軍馬は水と糧秣の消費が激しく、運用が難しいと判断されたのだった。

帝国の軍事力を支えるツヴァイ騎兵の精強さは水陸中に鳴り響いているが、そのような理由からしなやかな四肢と鬣を振る軍馬は伝令用にわずか数頭が連れ出されたのみであり、斥候に出ている一頭が今まさに戻ってきたところだった。廃墟と化した集落に設営された幕内でケツセルトはその報告を受けた。

「あつたか」

「はい、西に十里といったところに。嘘のような緑が生い茂っていました。思わず、我が目を疑いましたが」

「村の規模は。おおよそでいい」

「全てを見渡したわけではありませんが、土塗りの家屋が二十といったところかと思われませう。ご命令どおり、遠目からに留めておきましたので」

それでは集落に住む数は多くて百といったところか。当然、子どもや老人も含まれる。先遣隊でも充分に示威に足りることを確信し、男は頷いた。

「次に頼むときは後ろに駆けてもらうことになる。馬を休ませておけ」

「は」

脚を飛ばし、疲労の色が濃い兵を下がらせて、男は手元に広げた地図に目を落とした。

そこには大水陸の中心に繁したツヴァイ領を中心とした流動的な地形が記されている。帝国の中心ヴァルガードから、水陸の中心トマスへ。そこから不必要なほど大回りに伸びた河川との円弧の内側、ぼっかりと空いた空間に無数の印が跳ねていた。

それら全てが、最近の大規模な地下変動で水源枯渇が認められた水場、及び集落の跡地である。航路途中にあつたオアシスで、いまだ湧出が確認されている場所はない。その失われた航路を辿るように、せめて砂と風を避ける目的で男は軍を進めていた。

地図の右下半、ボノクスとの国境圏にあつて孤立するように記されている文字をなぞった男の唇が歪む。タニル、と崩れた字で書かれたそこから西に延長した先に、報告を受けたその座標がある。

イスム・クとかいうのだったか？ 男はその地図上の一点を小突いた。何度かそうするうちに興に乗り、くつくつとついに我慢しきれなくなった笑みがこぼれる。これから向かう先にあるものは、それほどまでに男の心を浮き立たせるものだった。

水、水源。この惑星においてはそれと、それらを繋ぐ水路こそが“領土”である。いかに広大な版図を持つが、そこに住むことができるなければ意味がない。何人も砂には逆らえないのだ。たとえば、それほど強大な帝国、そこに君臨する王であろうとも。

自然の気まぐれによって、国境を含めた一地域が広く枯渇した状況に陥ったツヴァイとボノクスは、それ故に長い硬直状態に陥っている。結ばれた水路を押し引くことしかできない。そこでは水路を介した両国の商取引も表に裏に行われているのだから、これは全く馬鹿馬鹿しい茶番というべきだった。全ては航路が河川のみ限定されているからこそである。

タニルという街がどれほど特殊かは、その事実を考えれば自然と浮き上がってくる。そもそもが水路に近いとはいえ、枯渇した砂海

の只中に在り続けていることの不自然さ。その理由は、タニルが奇跡の水源を持っているからなどではない。

事實はむしろ逆だった。タニルの水源はとうに枯れきっている。それはタニルの中でも一部の者しか知らないことではあったが、少なくとも水の湧出量が周囲一帯と同じく激減しており、人を養い、軍が駐留するのに必要量には明らかに不足しているだろう程度のこととは、街に住む人間だけでなく、相手方であるボノクスにもとうに見透かされているだろう。

生活用水として消費される莫大な水は、全て南の河川水路との間を商う旅商によって運ばれている。無論、そうした実態も敵国に全て隠しとおせるものではないが、それでもこの地にしがみつづけるにはそれなりに意味があった。

一個の軍事拠点と見るだけでも、相手方の点に対して、こちらは二つの点となる。二正面を強いることもできれば相手の後背を突くこともできるから、戦略の幅は当然、あるとなしでは大きく異なる。政治的な意味もあった。あるいはもしかしたならば、ツヴァイ側にはまだ生きた水源が残っているのではないか。そう敵国に思わせられるからだった。

ツヴァイ帝国の上層が、もはや人の住むことのできないはずの拠点を莫大な経費をかけて存続させているのはこれらの理由による。つまりは政治であった。もちろん、砂漠に突如突き上がって聳え立つ天嶮の要塞であり、防衛に適していることもそこが選ばれた理由にはなっている。

その街を治めるケッセルトはもちろん、それを理解していた。その問題点についても。

タニルの存在は、南の河川域が勢力化にあることを前提としてい

る。補給がままならなくなればそれはただの孤立であり、当然、水がなくて戦える兵など存在しない。国防の最前線とうそぶきながら、つまるところこの街の平穩はその程度のものでしかなかった。

タニルには後方が存在しない。一枚めくれば中身がたかが知れる、所詮は砂虎の被りものだ。だが、その事実も話によっては変わってくる。例えば、タニルにほど近い砂海に潤沢な水源があれば、夢想のような望みが、しかし現実のものとなった。

水と、塩。特別な水源の近くでは鉱物等の資源が産出されるということを若い頃を帝都で過ごしたケッセルトは学んでいる。そこが価値ある源である可能性は大いにあった。

なぜその場所だけが、というような疑問についてはどうでもよかった。彼は学者ではない。その水源を中継した航路の復活がツヴァイにおける商交易へどのような影響を与えるかについても頭にはなかった。そんなことは、金稼ぎの業にまみれた商人どもが考えればいい。

男にとって重要なのはただ一つだけだった。これでもう少し、まじな戦争ができる。

精悍な顔つきには子どものような表情が浮かんでいる。内心もそれと同じく、枕元で英雄譚を聞いて眠れない心境に等しかった。身体の不ずきを紛らわせるため女の身体を欲したが、さすがにこの場に帯同させてはいない。ケッセルトは脳裏に若く鋭い眼差しを思い出した。

怪しげな瞳を持った、冷えた獣のような少女。様々な意味でそえられる相手であったことは確かだが、今の今まですっかり忘れてしまっていた。奇妙な縁を感じるから、あるいはまた会うこともあるだろうが。

その少女を介して封書を渡してきた何者かについても、同じよう

にどうでもいい。旅の人間である少女は特に疑問にも思わなかったらしいが、少なくともその何者かが、その行動が自死にも等しいものであるとわかっていないはずがない。しかし、その選択が如何なる苦難と熟慮の結果のものであろうともそれに興味はなかった。それほどもでに、男の意識はただ道の先にある集落へと注がれている。

瞼にかかった砂を払ったサリュはゆっくりとその場に立ち上がった。一面の黄土色に塗りつぶされた視界に頭を巡らせると、先ほどとほとんど位置の変わらない太陽の下、保護色と化した色彩を纏ってかすかに蠢く人影が見えた。

遠く、地平の奥に見える緑の茂りに向かう少年の後ろ姿を眺めた彼女の顔が歪む。胸中に感情が飛来している。

集落に戻ろうと決めた少年の決意は、彼自身のものだ。それは尊重されるべきものだった。その結果に何が待ち受けていようと、自分で決めたのだから。それをわかっていて、サリュの内側では靄が晴れなかった。

奇妙な感覚があった。

自分がセスクに過去の自身を映し合わせていることは既に自覚するところだったが、それではこの判然としない思いは何なのだろうと彼女は疑問に思った。今自分から遠ざかっていく少年が、過去の自分だというのであれば、今のこの自分は、いったいなんの感情に引きずられているのか。

問うような視線に気づいた。若い砂虎が彼女を見上げていた。その瞳は野生の獣に特有の、澄んだ感情の色を映している。

「……ごめんね」

その耳元をなぞるように手を沿えて彼女は言った。クアルの瞳に映った表情に、なぜかそんな謝罪の言葉が浮かんでいた。

若い砂虎は応えず、ただ砂を吹かす微風に髭を揺らしている。荷をとり、達観した眼差しでいるこぶつき馬の手綱を掴む。去り行く少年に背を向けて歩き出し、ふとクアルがついてこないことに気づいて肩越しに振り返った。

砂色と同じ体毛をしなやかにびかせた若い砂虎が、じつと彼女を見つめていた。成熟した大人の砂虎に比べればまだ肉の薄い顔つきに、先ほどから変わらない静かな眼差しがこちらを捉え、ぴくりとも動かない。

「クアル……？」

声をかけた彼女を無視してクアルは歩き出した。サリュと反対側の方向へ。のっそりとして少し進んだ先で立ち止まると、誘うように振り返った。その延長線上には、はるか先をセスクが歩いている。クアルの示す態度の意味を凶ったサリュは戸惑った。彼女を叱るように、砂虎が咆哮した。

空間を裂いた轟声は、遠くに行く人物にも届いたらしい。ほとんど麦粒ほどになったその動きが止まり、確かにこちらを振り返ったようにサリュには思えた。

もはや顔色どころか上背さえ把握できないその人影が誰なのか、一瞬彼女は幻視した。それはいつか過去の遠ざかるうとする彼の姿であって、いつか未来に自分の下から離れる彼の姿にも思える。気づけば、彼女の足はそちらへと向けて歩き出していた。

さつと風が吹き、乾いた砂に何かが目染みた。想いが喉元までを浸し、そこからあえぐように言葉が漏れる。待って、と彼女は言った。

ふらりと引き寄せられるように身体が揺れ、亡者のような足取りで砂漠に行く彼女の姿を哀れむように眺めた砂虎が、ひらりと身を翻してその後を追った。

「ごめん」

近づいてきた彼女を迎えるなり、セスクは早口で告げた。緩い防砂具から覗いた幼い顔が、今にも泣きだしそうになっている。

「ごめんなさい。俺、やっぱりほっとけなくて。ごめん」

どうしてそんな顔をするのだろう。目元以外を隠したこちらの表情が見えるはずはないのだが、しかしサリュユはそのことについて問わなかった。わずかに覗く目尻に、まだ泣き顔の名残が残っていたのかもしれない。

「村に戻って、どうするの？」

口ぶりに意図しない感情がのらないよう、注意を払いながらサリュユは訊ねた。

「……わかんない」

セスクの返答は途方にくれていた。

「ぜんぜん、わかんない。なんでこんなことになったのか、どうして親父があんなことしたのか。でも、だから、話がしたくて。もしかしたらもう会えないのかなって。あんな村、大嫌いだけど、母ちゃんの墓だって。あるんだ」

沸きあがる情動をもてあまして、その事を自身で苦しみながら少年は言った。静かさを装った視線でそれを眺めやって、

「そう」

「だから、一緒にいけなくて、ごめん」

少年らしからぬ苦渋に満ちた表情に、ようやくサリュユは少年の言葉の意味に気づいていた。同時に、可笑しくもなる。こんな年頃の子にまで気を使われていたということを考えると恥ずかしさに我が身を呪いたいほどだが、それを表に出さない程度の自尊心もまだ残ってはいた。首を振って、彼女は小さな苦笑だけですませた。

「いいえ。……行きましょう」

歩き出すと、慌てて横に並びながらセスクが訊ねてくる。

「どうして？」

ついてきてくれるの、という省略された言葉に彼女は答ええない。少年を納得させ、自分をごまかせるだけの答えを持つていなかったからだ。話題を転じて、サリユは訊ねた。

「セスク。村の人達は、タニルから兵がくると知って驚いていたの？」

「……うん。初耳って感じで、それでお姉ちゃんのことを話したら、皆が怒り出したんだ。俺も、すっごい叱られたけど。親父も何か言われてて、何も言い返してなかった」

「他には何か聞いた？」

セスクは申し訳なさそうに首を振った。

「ずっと寝てたから。……起きたら姉ちゃんが悪者にされてて、それで祝いの地に閉じ込められてるって親父に聞いて。助けなきゃって」

「そう」

情報はあまりに少なかった。それでも、洞窟で聞いたファラルドの台詞を思い出せばいくつか推測することはできる。

考えられる仮説としては、彼女に託された手紙が村の総意に基づいたものでなかったというのがもっともわかりやすい。集落の一部あるいは誰かの意思で秘匿されていた水源の存在が勝手に公になる。軍や国家レベルの戦略など彼女にはとてもではないが想像につくものではなかったが、貴重な水源が近くにあれば、それを占拠に来るのが彼らという存在だということは理解していた。

水源の確保と管理は国の存在意義の根底にあった。国家に属する以上、貴重な水源の秘匿はただその一事だけで大罪である。周囲の地域で水源が枯渇している状況の中、イスマ・クの枯れない水源セスクによれば百年続いているというその水源の価値は計り知れ

ない。

それを考えれば村人達の態度は納得がいく。自分達の水源を知られるということは、奪われることと同義であるからだ。それを納得した上で手紙を出したか出してないかでは、まるで意味が異なる。

しかし、それが何故、村の滅びに繋がるのかわからない。恐らくは今回の一件を考えた犯人、少なくとも主犯格であるはずのファラルドが晚餐で言ったことは、それとは全く違った内容だった。あの時、あの男は航路と共に人の流れが途絶えた先に訪れるものが滅びだと言っていたではないか。

その言動がただの演技である可能性はもちろんある。しかし、男の動機が掴めなかった。確かなのは、ファラルドがその“滅び”に自分の息子を巻き込まないことを選んだということである。だからこそ自分をあの洞窟から逃がしたのだとしか思えなかった。

そのセスクが村に戻ろうとしていることを男は好ましく思わないだろう。かといって、いまさら彼を止めるつもりはなかった。では、どうするというのがか。セスクの供をして村へ行き、それから？ 自分の行動と感情の意味するところを把握できず、彼女はため息をついた。セスクに聞こえないように、ひっそりと。

内面に矛盾を溜め込み、せめて表情から一切の感情を削ぎ落とそうとする行為は、彼女には気づきようもないことだったが、彼女がごく短い時間を共に過ごした人物のものとよく似た思考のそれだった。

昼前には集落まであと少しというところに来たが、正面から村に入ってはもちろん村人達に捕まる恐れがあった。集落の隣に広がる外泉、その生い茂った緑にこぶつき馬とクアルを残し、二人は夜にまぎれて村へと忍び込んだ。

村の入り口には炎が焚かれ、夜番が立っている。セスクの案内で

監視の目を潜り抜け、宿屋の裏戸を叩くと、重苦しい悲鳴をあげて開いた扉の向こうから現れた顔が驚きに歪んだ。

「お前達」

絶句し、周囲を憚って中に招き入れてから振り返った顔に柳眉が逆立っている。

「なんのつもりだ」

射殺するような眼差しはサリュへ向けられていた。それと静かに相対して、彼女は傍らへと視線をやった。忌々しく男も隣へと視線を落とす。高みから見下ろされ、堪えて歯を食いしばったセスクがまっすぐに自分の父親を見返した。

「どうして帰ってきた」

「自分の家に帰って、なにが悪いんだよ」

「ここは俺の家だ。村を捨てたお前に戻る家などない」

雷鳴にも似た言葉。セスクが身体をびくりと震わせる。拳が強く固められた。

「でも。俺の家で、村だ」

それを聞いたファラルドの表情がますます険しくなる。睨みあう両者から等分に距離を置いて、サリュは口を挟まなかった。挟む気もなかったが、どちらの言い分もわかるような気がしたし、どちらともが自分とは遠いところにあるようにも感じられていた。故郷。彼女には縁のない言葉だった。少し胸がうずいた。

「死ぬことになるんだぞ」

苛立ちを隠さずにいるファラルドに、セスクが噛み付いた。

「なんでさ。なんでそんなことになるんだ。村でなにが起きるっていうんだよ」

答えず、ファラルドは視線をサリュへと向けた。恨みがましい視線を受け流して彼女は言った。

「話すべきではないでしょうか」

「よそものが、勝手なことを言ってくれるな」

「確かに私は外の人間です。しかし、手紙を届けたのは私です、捕まりかけてまで、などとは言いませんが。何が書かれていたかくらいは、聞かせてもらってもいいのでは」

ひとまず話を進めるためにサリュは言った。ここまで来た以上、彼女としても何かしらの結果を見届けたいという思いはある。その何かというのが、現状ではまるで検討もつかないのが問題だと思ってもいた。

それでもなお、ファラルドはしばらく口を開こうとしなかったが、彼らが部屋にあがった際に舞い上がった砂埃が全て床に落ちきった頃、ようやく重苦しい息とともに口を開いた。

「この集落はな、このあたり一帯の王様だった。自分達ではそう思っていた」

砂色の声を響かせて男は言った。

「祝いの地は、祝福だ。村にとっては信仰そのものだ。ここが、この場所こそが選ばれた土地で、自分達が選ばれた人間だとずっと信じていた。もちろん表向きにはそんなこと出しはしなかったがな。おおっぴらにする必要なんてなかった。ただ自分達が知っていればそれでよかったのさ」

無数の航路のなかにまぎれてひっそりと存在し続ける。胸の中を、傲慢な自尊心で満たして。

しかし、水源を隠し、訪れた旅人を騙してまで自分達の我侭を貫いたことの是非はともかくとして、その現実があっけなく崩れ去った。

「……十年前。一帯の水源が枯れ始め、少ない人の往来が途絶えた時、俺達は思い知らされた。自分達がやってたのが結局、王様の真似事だったってな」

たとえば村に豊富な水と塩があっても、生活に必要なものが全て揃

うわけではない。鉄をはじめとする鉱物、それを扱うための技術。流通に取り残されるということ。それは、治めるべき人を持たない王の愚かしさの比ではなく 一人きりの世界で自分こそが王なのだ、とほくそ笑むような空しさだ。

「まわりの土地が豊かなのも、この水源のおかげだとすら考えてたんだがな。実際にはまわりの水源は俺達とまったく関係なく湧き、まったく関係なく枯れていった。少なくとも俺達にとってはそうだった。なぜならどうしようもなく分かれてたからだ」

男は繰り返した。

「分かれていた。俺達と周りの世界は、まったく別だった」

「……それは、水源の問題ではないのでは」

控えめにサリュユが言うと、男はじろりとした視線を向け、自嘲気味に笑った。

「その通り。問題は俺達だ。自分達は周りと違う、なんて思い込んで、引きこもっていたんだからな」

「だからこそ、タニルへの連絡が私に任せられたのではないのですか」
自分達の過去を改め、他者との繋がりを求めた行為ではなかったのか。

男は答えなかった。その表情は暗く、例えようのない重さを含んでいる。それに違和感をおぼえて、彼女は気づいた。

前にファラルドの表情を見て感じたのは不平、あるいは不満だった。しかし今の彼にはそれが無い。男はただ疲れきっていた。その表情に彼女は覚えがあった。それは彼女の村で、ただ死を待っていた人々が顔に浮かべていたものとよく似ている。苦い確信を込めて彼女はうめいた。

「……あの手紙は、はじめからこの村を滅ぼすつもりだったのですね」

答えず、男はその混沌とした瞳孔の奥に秘められた感情を彼女へ向けた。

「なぜです。あの手紙は、閉塞したこの村の状況をかえるためのものではなかったのですか」

「ファラルドはタニルから兵が来ることを聞いても驚かなかった。最初からその可能性を考えていたのだろう。それどころか、そこそが男の臨んでいたものだったのだ。サリュには目の前の人物の考えが理解できなかった。」

「お前さんにはわからんよ」
「ファラルドは言った。」

「自分達が間違っていた。なら改めよう。そんなわけにいけばどれほど楽なものかね」

「吐き捨てるように続ける。」

「自分達の信仰。自分達の生き方。砂にまみれ、祖先がいきついた土地。村の人間にそれらをいまさら捨てることができると思うのか。そんなことを選ぶくらいなら今のままの状態で、いつそ孤独な死を選ぶ。それが村の総意だ」

矜持、などではないはずだった。ただ頑迷なだけだ。サリュは顔をしかめた。自分ではない他者が決めたことだから、自分には関係がない。しかし、何かがひどく不快だった。

かといってファラルドに共感ができるというわけでもない。村の意見に納得しなかった男がとった行動はつまり、
「滅びるくらいなら、滅ぼされる？」

「埋もれるなら、せめて奪われるべきだろうさ」

「勝手ですね」

「はじめてはつきりと不愉快さの含まれた言葉がサリュの口から漏れた。それを聞いたファラルドはわずかに眉をあげ、平静に応える。「その通りだ。しかし、とやかく言われるいわれはねえな。俺があんたに非難されるとしたらたつた一つ、騙して手紙を届けさせたってことだけだ。それにしたって、騙されたあんたが悪いとしか言いようがないがね」

眉をひそめ、しかしサリュは声を荒げはしなかった。彼女としても、いまさらあの手紙の中身を聞く気は失せていた。

恐らくは内容などどうでもよかったのだ。村の所在と、水と塩のことを伝えることができたなら。それに加えて彼女の外見がもたらすものも少しは考えたのかもしれない。旅装に身を包んであたりをばばかり旅人。その瞳の異質を見れば当然のこととして、そうでなくとも不審に思われるのは予想に難しくない。懸念、疑惑。そこから必然的に生まれる興味を結びつけるための餌に、たまたま通りかかった自分が選ばれただけ。

確かに文句をいう筋合いではなかった。巻き込まれ、いいように利用された自身の浅はかさを呪うしかない。岩塩に対する処置の不味さも、セスクを連れていたせいではないというときの動きが鈍ってしまったのも。そもそも危険があると承知したうえでのタニルへの旅だったのだから。沈黙するサリュから視線をはずし、ファラルドは自分の息子へと顔を向けた。

「この村は滅ぶ。お前が村と一緒に死にたいというのなら、好きにしろ」

「……なんでだよ。なんでそんな。お袋だって眠ってるのに」
「眠っているだと？」

言葉を震わせたファラルドが何かを言いかけ、それを飲み下した。顔を背けて、そのまま振り返ることなく男は部屋から出て行った。残されたサリュとセスクはしばらく無言で、その長い沈黙を破ったのはサリュだった。

「休みましょう」

情けない表情で見上げてくる少年に向かって彼女は言った。

「疲れてるわ。そんな状況で考えても、ろくなことは思いつかないから。ファラルドさんの決意は固いから、いったいどうすればいい

のか。あなたは考えないと」

「……俺、どうしたらいいんだろ。どうしたら、いいと思う？」

途方にくれた様子に、

「わからないわ」

そっけなくサリュは言った。本心からの言葉だった。自分のことだつてよくわからなかったから、助言のしようもない。途方にくれた思いは彼女も同じだった。

「どちらにしても、時間はあまりないと思う。早ければあと数日で、タニルからの兵が来るかもしれない」

サリュが一度外へ出て、こぶつき馬を繋いでから戻ってきた時も、セスクはその場に立ち尽くしたままだった。

思考にとらわれて身動きできないでいる少年を一瞥し、声をかけずに彼女は二階へとあがった。ファラルドの許可は得ていないが、身体を休めるのに適当な部屋を使わせてもらうつもりだった。

階段をあがったすぐそこにあつた部屋に入る前、最後にもう一度、階下へと視線をめぐらせる。セスクはやはり、たたずんだまま動いていなかった。

闇と埃が沈殿した部屋を進み、外に光が漏れないよう木窓を確かめて灯りをつける。外套を剥ぎ取り、おっくうさを覚えながらいつもの一連の行為をすませて寝台へ腰掛けた。そのまま横になる。

疲れは骨の髄まで残っていたが、睡魔の訪れはなかった。昼間、日陰で身体を休めていたせいもあるが、それだけではない。

この一日中、自分のなかですつとなにかがざわめいている。不定形のそれを手には掴めなくとも、せめてそれがなんなのかだけでもわからないものかと、彼女は目を閉じた。

どうしてこの村までついて来たのか。セスクと別れることができ

なかったのか。集落に近い将来、訪れるだろう未来にまで思いを巡らせてから、自分が村についてなどどうでもよいと考えていることに気づく。

彼女の心にあるのはセスクのことだった。いや、そうではない。

正確には　あの少年に投影された、過去の自分。しかし同時に昼間、彼女は去り行く少年の姿にそれ以外のものも重ねていた。

息を吐く。

結局、自分は寂しいだけだ。そう認識せざるをえなかった。

トマスを出てから彼女は一人だった。それがセスクという旅の供を得て、そのたった一週間のことで誰かということに慣れきってしまった。それまでもクアルと一緒にいて、これから先もあの忠実な友人は自分の側にいてくれるというのに、おかまいなしにそんなことを感じる性根がひどく弱々しく、彼を裏切っているようにすら思えた。

それほどまでに、誰かの存在は甘美な毒物に似ていた。表情が自嘲に歪む。今さらのことではあった。彼女の生は根底から一人の人物に囚われている。ではあの人は私にとって毒のようなものなのと考えると、昔は自分の方がそうだと考えたことがあることに思い至って、笑みに苦みが増した。つまりは、どちらにとっても有害なだけかもしれない。

それでも彼を探すことを諦めるという選択肢はなかった。言葉どおり、それが彼女の生きる目的だった。なんとしてももう一度あの人に出会い、そして。

頭を振る。それ以上の想像には苦痛が伴った。螺旋に彷徨いかけた思考を終わらせ、荷物から飲み水を取り出そうと身を起こしかけたところで、部屋の扉が叩かれた。

「……どうぞ」

蝶番をきしませて姿を現したのはファラルドだった。手に持った灯りで顔に深い陰影をつくりながら、男は言った。

「どうしても出ていかないつもりか」

男の発したのは、うなるような声だった。

「明日にでも。その前に、少しは身体を休ませないといけませんから」

男は噛み締めた歯の隙間から押し出すように、

「悠長なことを。村の連中に見つかったら、ただですむと思っっているのか」

「あなたが黙っていてくれさえすれば、一日程度は潜んでいられます」

ファラルドはあきらかにセスクを村から遠ざけようとしていた。

洞窟から自分を逃がしたのも、温情というわけではないだろう。もちろん、利用したことへの罪滅ぼしなどでもないはずだ。

セスクに生きてもらいたがっている。その意図はわかっても、理由についてはよくわからなかった。親だから？ それだけで納得できるほど、彼女は家族というものを理解していない。

「むしろ聞きたいのは私のほうです。どうして、セスクと一緒に村を出ないのですか」

「あなたにはわからん」

先ほど聞いたその言葉は、なんの感銘も与えはしなかった。暗い顔の男が出て行き、部屋に残された彼女はふとセスクのことを思い出したが、様子を確かめようと廊下に出ることはなかった。

少年が何を思い、悩んだ末にどんな結論を出すのか。出せるのか。関心がないわけではない。しかし、自分の感情が少年ではなく、過去の自分に向けられたものであるとわかっていたから、偽りの気持ちで彼に接するべきではないと思った。

実際には、そうしたくないだけかもしれない。ファラルドとセスクの、自分には理解できない関係性について思うところがあった。家族。親子。故郷とともに自分が持ち合わせていないそれらに対して、嫉妬しているのかも。いいや、あるいはもっと別種のものではないか。たとえば 誰かがいないことの代償を他に求める。そんな自分を認めたくないだけなのではないか。

ならいつそ、一人がいい。

ああ、とサリュはうめいた。他者の存在を否定する眩きは過去、彼女の捜す人物が漏らした本心と近似していた。少しはあの人に近づけたのかと思い、しかしそのことに喜びを感じるよりも無性に悲しくなつて、彼女は寝台へと身体を投げ出した。

引き寄せた腕にひっかかるのはシーツの手触りだけで、小さく丸めた身体に触れるものはない。温かな毛皮も、少年の息遣いも。求めて与えられないものの代わりに胸に抱こうとしたそれらを思い、自分のその浅ましさが彼女は嫌になった。

思考から逃げるように目を閉じても、しばらくのあいだは寝付けそうになかった。

「大いなるもの？」

かけられた声に、興味を引いたような口調がうかがえて、彼女は隣を見あげた。

まだ若い、それなのに乾いた。澄んだようで濁り、奥底まで容易に見通せない混沌とした色の瞳が、少女の顔を映し込んでいる。静かな声で男は言った。

「それがお前達の集落で信じられていたものか」

少女は黙って首を頷かせる。男もそれ以上聞かず、思案げな表情を宙にさまよわせるようにした。そのことを少し不満に思ったから、彼女から口を開いた。

「それが、どうかしましたか」

ちらりと醒めた視線が見下ろし、

「変わってる。それは、名前がないままに呼ばれていたんだろう」

「はい」

その回答だけでは、少女は満足しなかった。男は嘆息をして続けた。

「人はたいてい、何かを表すのにまず名前をつけることから始める。他者との間で共通させるのには、それがてっとりばよい。自分達の生活の根っこにあるような文化、宗教ならなおさらだ。それがないということは、つまりその必要がなかったのか。それとも名前の必要性以上にまずい理由があるのか。それとも」

肩をすくめ、

「まあ、お前が聞かされてなかっただけかもしれないな」

そんなことはない。と思しながら、少女はそれを告げなかった。

視線をはずした少女に、少ししてから男の声が届いた。

「……育ての親、だったか。村の語り部をつとめてたという人には、会ってみたかったな」

意外に思えて、彼女は男を見上げた。

男はわざとつくったような表情でこちらを見ないまま、

「村長とも。あんな田舎で本まで集めてるような変わり者なんてそうはいない」

本。文字。確かに、村でも簡単な数字はともかく、文字まで読める人間は少なかった。少女の育ての親である老婆もそうだ。

「文字は、必要ですか」

との問いには、男は少しだけ眉をひそめて考えたようだった。

「なくても生きていけるのなら、不要だろう。必要とする奴が必要としていればいい」

「名前のように？」

「……そうだな」

「それが、呪われた名前でも」

鋭い視線が射抜くように少女を見た。そこにある感情の意味を汲み取ることができず、彼女はまっすぐにそれを見返した。

「サリュ」

「はい」

少女は応えた。それが彼女の名前だった。

「お前の親がつけたのか？」

「いいえ」

「なら、育てた相手か」

「はい」

「意味は。知っているんだな」

「昔から、村の人達に言われていましたから」

淡々と答える少女の、二重の環を描いた不可思議な瞳を見ながら、男は不快そうに顔をゆがめ、言った。

「嫌なら変えればいい」

「……え？」

「嫌なら変えろと言った。普通、名前はついていてるものだよと言ったが、それが絶対だなんて俺は一言も言っちゃいない」
ほとんど憎々しげに続ける。

「俺はリトだ。だが違う名で呼ぶ相手もいる。どちらで呼ばれたからって自分が変わるわけじゃない。サリュというのが嫌なら勝手になんでも名乗れ。嫌なら嫌と言え」

言い捨てて、むっつりと押し黙った。なぜ男がそこまで感情を害したのかわからない。少女は戸惑ったまま沈黙した。

「夜に昇る、大きな星があるだろう」

いくらか経ってから、囁くように男が言った。

「お前達のところではどうだったか知らないが。あれは、月という。昼間にあがる燃える星とは対照的な存在だ。激しさと静かさ。昼と夜。光と闇。色々な呼ばれ方がある。意味も。たとえば、大いなる存在なんて呼ばれることもある。月は日によって姿を変える。膨らみ、細くなり、忽然と消える。その姿が一周してまた元に戻るまでを一月。多様に変化し、見るものを惑わせる。怪しく、実態が知れない。それでいて、月をこんなふうに呼ぶものもいる。真実。その象徴だと」

「……昼間の、あの大きな星は」

「太陽。中天にあり、姿を変えない黄金の作り手。命の育み。天上神の御姿。そして 真実。そう呼ばれもするな」

少女の混乱した表情を見て、男は小さく笑った。

「地域による。似ていることもあればまったく異なることも。大いなる、ということだけでは共通しているか。 サリュ。そう呼ばれる自然現象についても同じことだ」

わずかに息を呑み、少女は訊ねた。

「死の砂、以外にも？」

「……さあな。だが、死とはなんだ。生とは。お前にとっては何？」

お前は何を生かし、何を殺すんだ。それはお前が考え、認めたことなのか？ 他者がそう言うから、そうだというのなら、それは愚か者の思考だ」

再び、男の口調に熱がこもった。

「“それ”はたんなる自然現象だ。意味などもたない。持たせるのは人間だ。だから、お前も持たなければならぬ。わからないなら探さなければ。考える。悩め。その上で選択しろ。その必要がある、そうしないといけない」

男はこちらを見ていなかった。だから、少女はその台詞が、自分を通して違う相手へ語りかけているのではないかと考えた。その時は訊ねることが、できなかつたが。

「自ら生きるというのは、そういうことじゃないのか」
ため息のように言葉を締め、男はそれ以上何も言わなかつた。

昔の夢を見て目を覚まし、うつらとしているうちにまた別の夢が訪れる。そんな風になっているうちにどれほどの時間がたったのか、茫洋とした意識の中でサリュは扉を叩く音を拾った。

「はい」

そつと短刀を右手に忍ばせて答えると、気難しい表情をはりつけたファラルドが姿を現した。手に盆を持っている。

「……飯だ。いつまでたつても降りてこないんでな。そろそろ昼になるんだが」

「すみません」

窓際の机に食事の載った盆を置き、そのまま出て行くこととする男に彼女は声をかけた。

「セスクは、どうしていますか？」

「出かけたよ」

立ち止まり、こちらを振り向かずには答える。

「村の連中を説得するんだと。何を説得するつもりかはしらんが」

サリュは眉をひそめた。

「村の人達は、私があ洞窟にいないことを」

「まだしらんよ。だが、時間の問題だろう。あの馬鹿が騒げば、あんたを引っ張り出そうとする連中もいるだろうからな」

もともと一日程度の違いかもしれないがね、と続ける。

「それは、あなたの方にとって都合が悪いのでは」

「……あいつはあんたが捕まってるって聞いたときにずいぶん騒いでいたし、あんたを殺さずに様子を見るべきだと言ったのは俺だ。そのあんたが逃げだしたなら、最初に疑われるのはどうしたって俺達だろうな」

肩越しにこちらを見て、男はあっさりと言った。

「止めないのでですか」

サリュの言葉を、むしろ意外なものであるかのように、男は片方の眉を持ち上げた。

「あいつが勝手にすることに、どうして口をださなきゃならん」

「……あなたが、セスクに生きてもらいたがっているから」

それを聞いた男は口を歪めた。誰かを馬鹿にする表情で沈黙する。

「なぜ、そこまでこの村に固執するのです」

背中を向けて歩き出した男は、今度は立ち止まらなかった。

サリュは寝台から降り、男の後を追った。すぐに追いついた。男は廊下の壁にかけられた剥製の前で立ち止まっていた。アタリアの、祝福。確かそんな言葉が書かれた、記念碑のようなもの。

「水もあれば塩もある。あんた、もったいないと言ったな」
ファラルドが言った。

「その感覚からして、俺とあんたじゃあもう天と地ほどに違う。だから あんたには、わからんさ。なあ、それじゃあ、水と塩以外に何があればこの村はやっていけた？」

問われて、サリュは少し考えてから答えた。

「……人、でしょう。旅人や、商人。物を運ぶ流れ。そこから取り

残されたから、この村は苦しんでいる」

男は何も言わなかったが、表情がそれが正解ではないことを告げていた。口の端を持ち上げたさきほどの表情で階段を下りながら、話題を変える。

「出られるなら、今のうちに村から出たほうがいい。が、見つからんようになってしまうのはまず無理だろうから、中でじっとしてるのが賢明だろうな」

「私を突き出せば、あなた方が許される可能性はあるのでは？」

そんなことを受け入れるつもりがあったわけではなかったが、サリュはそう訊ねた。それを聞いたファラルドは面白くもなさそうに鼻を鳴らし、

「今さらあなたが生きようが死のうが、俺にとっちゃあどうでもいいことさ。騙した借りも、洞窟の件で返したつもりだからな。後はあなたの自由にすればいい」

ゆっくりと階段を下りていった。ぽつりと言う。

「重く、錆びず、価値のある。それがこの村だというのなら、滅ぶのは当然なことなのさ」

去り際の言葉は謎かけに似ていた。

部屋に残された食事を取り、いつでも動けるように防砂衣をしっかりと身につけて、サリュは室内で考えをめぐらせた。

考える以外にはろくにすることがなかった。ファラルドが指摘したとおり、昼間、人の目があるうちに村から出るのは危険が大きすぎた。とはいえ、セスクの行動次第で村人が宿に乗り込んでくる可能性もあったから、逃げる算段はつけておかなければならなかったが。それに関しては、前にここの部屋に泊まったときに見当をつけていた。この部屋なら、窓から低木をつたって外に出られる。

木窓を閉じているため暗い室内には、それでも砂の粒子がどこからか入り込み、浮かんでいる。日中とは思えない静けさは建物の中

も外も変わらないらしかった。あまりに人の気配に乏しいため、まるで生きている人間がいないのではないかと錯覚してしまいそうになる。

むずがゆさに頭を振る。何か大切なことを忘れているようなひっかかりを覚えて、彼女は立ち上がった。廊下に出て巨大な剥製の前に立つ。古びた文字で刻まれた言葉をなぞった。

アタリア。祝福の土地。その言葉の意味について、セスクはなんと言っていただろうか。確か、水や火。それから生命だったか。彼女が持っている本にある記述では 笑い、喜んでいる？ ようするに、良いことの象徴。大いなる存在。

また、何かが頭にひっかかった。

なんだろう。何か見落としている。漠然とした不安に目を閉じて、光の無い視界に浮かんだのはセスクだった。

セスクのことは心配に思っていた。それがたとえ過去の自分を投影しているだけであっても。しかし、違う。今、自分が感じている焦燥はもっと別のものだ。クアルか、それとも自分の生命の危機か

。

背筋を刺すような震えが駆け巡り、彼女は急いで部屋へと戻った。木窓にとりつき、はめこまれた枠に手をかける。彼女がそうしている間も、やはり周囲は静かだった。否、実際にはあまりにも彼女にとって身近でありすぎて、かえって騒音として認知されていないかっただけに過ぎなかった。

開け放ち、愕然とする。視界に広がった彼女にとって見慣れた光景、それをたった今まで忘れていた自らの愚かしさに彼女はきつく

唇を噛み締めた。

そこにあつたのは黄土色の侵食だった。

この惑星で最も純粹であり、最も凶悪な自然現象。

死の砂が吹いていた。

轟然と吹いた風が螺旋を巻き、互いに喰いあうように空を駆け上がる。集落全体を包む砂の怪物は停滞していた室内の空気を一瞬で吹き飛ばし、無数の砂粒を彼女に叩きつけた。

木窓を閉めることも忘れ、しばらくサリュはその場に立ち尽くした。

死の砂。自身と同じ名前を持つその現象について、決して予感がなかったわけではなかった。気配はじめてこの集落に足を踏み入れて宿泊した、その朝からあつた。タニルへ向かう途中でも。それは常に彼女と共にあつたのだ。

驚いたのは、死の砂が吹いたという事実についてではない。何故、今になって　ただの自然現象であるはずのその出来事の意味について思いを巡らせ、脳裏で男の嘆息を聞いたような気がした。

木窓を閉め、荷物をとって部屋を出た。一階へ下りてファラルドの気配を探すが、宿には誰も残っていない。そのまま扉を開けて、こぶつき馬のいる厩へと向かった。

砂嵐のせいでひどく視界が悪い。積み荷を乗せたこぶつき馬を引いて村の入り口に向かいながら指笛を吹いた。どこかに村人が待ち構えているだろうと思ったが、その気配を感じたのは前ではなく、後ろの方である。

振り向いた先にいたのはセスクだった。後ろに数名の村人達の姿も見える。彼らの表情は皆一様に暗く、何かを思いつめている様子が伺えた。

「お姉ちゃん、助けて」

泣き腫らした表情でセスクが言った。

「親父を助けて」

全身を振り向かせたサリュは、セスクではなく、その背後に幽鬼じみて佇む村人達へ訊ねる。

「ファラルドさんになにを？」

「あいつは」

村人の誰かが答えた。奇妙に調子の平坦な声だった。

「あいつはこの村を裏切った」

「村のことを話した」

「祝福の地の秘密をばらした」

「あの男は話した。誰が知っている。誰が来る？」

喋りながら、誰も口を開いてはいない。そう見えるのに、呪詛のまじった囁きが途切れることなく次々に連鎖する様は、まるで集落全体が彼女にそれを訊ねているかのような不気味さがあった。

サリュは答えた。

「タニルから、じきに兵が来るでしょう。もうすぐそこまで来ているかも」

「お前が呼んだっ」

悲鳴にも似た告発に、あっさりと頷く。

「頼まれて手紙を渡したのは、私です。内容まで知っていたわけではないですが、その手紙で兵が動いたのなら。私の行為の結果ということになります」

「なにを、ぬけぬけと」

表情に殺意を抱いた村人達が足を踏み出した。それを静かに眺め

ながら、

「そんなことより、支度をはじめたほうがよいのではないですか？」

「……支度？」

「旅の支度を」

砂と風を身に纏い、砂のうなり声に負けぬよう張った声でサリュは言った。

「これは死の砂です。すぐにここは砂に埋もれる。いまさら兵がどうこうではないでしょう」

その単語を聞いた村人達に、はつきりと動揺が生まれた。

顔を見合わせ、ひきつった表情で何事か確かめるようにしたあと、代表した一人が口を開く。

「馬鹿なことを。そんなもの、ここに吹くはずが」

「実際に死の砂を見たことのある人がいますか」

沈黙する一同に、静かに続ける。

「私は何度も見てきました。故郷や、旅の途中で。そんなわけがないと思いたいのはわかりますが、すぐに準備を始めるべきです。水や食料。この村の人達は皆、旅慣れていないのですから、準備にも時間がかかります」

「ふざけるな！」

遮った声は、隠し切れない恐怖で彩られていた。憤怒の形相で中年の男がサリュに掴みかかるようにするのを、砂の向こうから現れた巨体が跳ね飛ばした。よろめいてそのまま尻餅をついた男の目にしたのは、まだ幼い、しかし人間の大人と比べてもはるかに容量の巨大な若い砂虎の、縦に裂かれた虹彩だった。

「ひいつ……」

足音一つなく現れ、男に歯を剥こうとしているクアルの頭に手をあてて抑え、

「この村は、一月もしないうちに埋もれます。離れる準備をしてください」

「勝手なことを……」

怨嗟の声を涼しげに受け止め、さっきだった気配の中で泣き顔で立ち尽くしているセスクに近づいて、声をかける。

「ファラルドさんは？」

「……洞窟。お姉ちゃんがいた、あそこに」

「そう。なら、行きましょう。灯りは用意できる？」

「う、うん」

「私達は洞窟に行きます。なにか御用があれば、そちらまで」

そう宣言してから、少年を連れて歩く。村人達は皆、何か言いたげなままこちらを遠巻きにするだけで、背後ではクアルが目を光らせてくれているから、危険はないはずだった。

「ああ　じゃあその洞窟とやらに、俺も一緒に連れて行ってもらおうかな」

飄々とした声が、彼女の足を止めた。

いつの間に現れたのか、背後に男が立っていた。砂嵐の中で平然と、ろくな防砂衣もつけずに軽装でいるその人物の名前をサリュは知っていた。タニルの領主ケツセルト。

もう現れた。予測の最悪を突かれたことに内心で舌を打ちながら素早く視線を走らせたが、ケツセルト以外には村人ではない兵士の影は見つけられなかった。もとよりこの視界の悪さである。いくら彼女が砂に慣れているとはいえ、容易に見通せるわけがなかった。

傍らのクアルが気づかなかったのも同様に、この暴風ではろくに鼻も利かない。ケツセルトは図ったように彼らの風下に位置していた。

その場に漂う険悪な雰囲気をまるでものともせず、男は気さくな様子で近づいてきた。顔を寄せ、彼女だけに聞こえる声で囁く。

「今ここで兵を呼ばれたくはないだろ？」

兵。不安と恐れにおののく村人達の前に兵士達が槍を向けた時、何が起こり得るだろうか。少なくとも、行動の自由さが失われることは確かだった。

無言で睨み上げ、サリユは黙ったまま歩みを再開した。不安げなセスクと、口元に笑みを浮かべた男がそれに続く。三者三様の彼らを、遠くから、亡霊の視線が取り囲んでいた。

「兵は、どこに潜めているのです」

「村の外れさ。長旅を終えたところにけっこうな水場があったからな。ちよつど兵どもを休ませようとしてたら、ぶっそうな獣が村の中に駆けていくじゃないか。これは面白そうだと思って様子を見に来てみたわけだ」

「……一人ですか」

貴族の、それも領主ともあろう人間が。信じられない思いでサリユが訊ねると、男はあっさりと頷いた。

「気さくだろ」

返す言葉もなく呆れ果てたが、口を閉じずに彼女は続けた。

「目的は？」

「行つただろ。おもしろそうだったからさ。砂虎なんて、間近で見れるもんじゃない。……しかし凄いな。どうやって手なずけた？」

興味深そうに頭に手を差し伸べるのに、クアルが威嚇のうなり声で応じたのでケツセルトはその手を引っ込めた。自分の心情を感じ取ってくれている友人に感謝しつつ、

「あなた方の目的は、ここの水源なのでしょう」

「俺の質問は丸ごと無視かよ……まあいいが。そりゃあまあ、な。」

領水は国家に管理されなければならない。下流源の不当利用すらた
いがい重罪だつてのに、それが基水源だつてんなら。それに、
この状況だからな」

男の発言内容、その意味の詳細はわからなかった。しかし、地域
一帯が枯渇しているのに豊富な水源があることを言っているのだろ
うと想像できた。祝福の地と呼ばれる特別な水源が、この村にはあ
る。

「それを奪うために、やってきたのですね
「管理だ」

短く、強い口調で男は言い直した。

「村人がそれを承知しなかったら？」

「聞かなきゃわからんか？ 兵士つて因果な職業はいつたいどうし
て存在していると思う」

揶揄する口調に一瞬沈黙し、サリュは言った。

「この集落がすぐに滅ぶとしてもですか」

「なんの話だ」

はじめて、ケッセルトの表情に眉が寄る。

「村に吹いているのは死の砂です。水源ごと、すぐに砂に埋もれて
しまつはずです」

「……へえ。そりゃ大事だ」

男の声にはまるで真剣さが欠如していた。サリュは不快に顔を歪
めた。

「怒るなよ」

苦笑したケッセルトが肩をすくめる。

「だとしたらなおさら、様子を見に来てますます正解だったな。集
落が砂に飲み込まれるところなんざ、軍人やっていたつてそうはめ
ぐり合えんよ」

変わった演劇を楽しもうとでもいうかのような軽薄な台詞に、心

底から軽蔑しそうになって、サリュはふとタニルの街でのやりとりを思い出した。この男は油断ならない。うわべで何を言っている、腹には他に一物あると考えるべきだった。気持ちを引き締めた彼女の眼前に、大きく口を広げた洞窟の入り口が姿を現した。

こぶつき馬とクアルを連れたまま暗がりへと進む。徐々に外からの光が届かなくなり、セスクが用意した灯りをともした。照らされた周囲の視界に、ケッセルトが小さく息を吐いた。

「おう。こいつは 岩塩か。岩塩の洞窟か」

暗がりの中、灯りを薄く反射する岩肌は確かに普通のものではないとはいえ、それを一目見て言い当ててみせた男にサリュは目を見開いた。

「なるほど。あの岩塩の出所はここってわけだ。水と塩ねえ。はっ、実際この目で見ても信じられんな、こりゃ」

皮肉げな視線が彼女を見たが、サリュは答えずにセスクの先導に従って足を進めた。

歩数とともに数えて一刻もしないほどのところで、彼らはたどりに着いた。恐らくサリュが連れられたのと同じであろう空間に、うずくまるように腰を下ろした何者かの存在がある。

「父ちゃんっ」

駆け寄ったセスクに、顔を上げたファラルドの顔面はひどく腫れ上がっていた。暗がりの中でもはつきりそれとわかる打撲に、唇から流れた血がそのまま跡に残っている。

「私刑か？」

鼻を鳴らしたケッセルトがつまならそうに言った。

村への裏切り行為に対して、村人達が制裁を加えたのだろう。近づくと一層、ひどい怪我の具合だとわかったが、ファラルドは薄くしか持ち上がらないでいる。瞼の奥から彼女を見あげると、笑いかけてみせた。自らの様を笑ったものではなく、まだこんなところにい

る彼女に呆れたような笑いだった。

「……あんたは」

視線を移し、しわがれた声でファラルドが言った。咳き込み、あわててセスクが水袋から水を飲ませようとする。問われたケッセルトは極めて軽い口調で答えた。

「タニルの人間さ」

口中で水が傷に沁みたのか、苦痛に顔を歪め　ファラルドは笑った。

「そうかい。ようやく来てくれたわけだ……」

「つてことは、手紙の主はお前さんつてことだな」

「ああ　そうだ。その嬢ちゃんに、頼んだ」

「押し付けて、の間違いじゃないのか？」

にやりとしてケッセルトが訂正すると、表情に苦味を増してファラルドは頷いた。

「そう、だな」

「興味をひかせるよう土産まで持たせて」

「……ああ。そうだ」

「自分達の自殺に、利用しようとしてくれたわけだ」
ファラルドがこちらに視線を送るのを、サリュは感情なく受け流した。

「　自殺？」

驚いたように声をあげたのはセスクだった。少年を一瞥しただけで何も言わず、ケッセルトはファラルドへと視線を戻した。

「父ちゃん？　それって」

「……セスク。村の連中はどうした。全員、死んだか？」

「死って」

息子の質問に答えず、痛みに歪んだ壮絶な顔で訊ねるのに、セスクが声を失う。代わりにサリュが答えた。

「生きています。ひどくうるたえています」

「うるたえる？」

「今、外では砂嵐が吹いています。恐らく、止むことはないでしょう」

「死の砂が？」

ゆっくりとサリュが頷くを見て、男は笑った。乾いた声が洞窟内に反響する。

「なんとということだ。今になって……今さら。いや、だからこそ、か」

それから、低いくぐもった声で笑い続けた。狂ったように。恐ろしげにそれを見やるセスクの向こうで、ケツセルトがどこかにいると見かけ、サリュは立ち上がった。

「セスク。ファラルドさんの様子を見ていて」

当然のようについてこようとしたクアルにもその場で待機するよう言いつけ、追いかける。自分の存在に気づいているはずなのに気にしたそぶりのない背中に声をかけた。

「どこへ」

「散歩。よければ一緒にどうぞだ」

いつの間に用意したのか、手に灯りを持っている。黙ってサリュはその背後に寄った。男の行動には警戒していたし、セスク達のないところで話したいこともあった。

洞窟はひどく入り組んでいた。この洞窟がどういった経緯で作られたものかわからないが、天然のものと、人間が掘り進めた部分も当然あるだろう。

「こつという洞窟がどうやってできるか、知っているか？」

どういった基準で道を選んでいるのか。勝手知ったる場所を歩くように気楽な様子で足を進める男の態度に若干の不安をおぼえながら、サリュは答えた。

「土が。土や岩、砂より重く、大きなものが集まって、固まったも

の。それらが砂中で長い時間、四方から押しつぶされ、隆起して作られると」

「……よく知ってるな。ちょっとした街の学校でもなきや教えないようなことだが」

感心した風に言われ、途端に無表情になるサリュウを笑って、

「この世界では全てが流れている。と、いうより、流れている砂が全ての基礎になっている。大いなる砂に追いやられて右往左往と生きている。人も、動物も植物も。砂の中でまざりあつたさまざまな重さのものが流れをつくり、ある場所ではせきとめ。その隙間を通つた水が地上に沸き、はじめて生活の場を生み出す。全ては砂の悪戯のままに」

詠うように言う。

「だからこそ、基水源。基となる水の源という。三大水陸。それを司る大水源。そのことも知っているか？」

知ってはいる。だが、詳しくはなかった。サリュウの持つ知識は正式な教育の中で授けられたものではなかった。沈黙を知っているものと受け取り、男は続けた。

「つまり、それは抵抗なのさ。流れよという自然の声に対する、俺達人類のな。砂に逐われながら生きることをやめ、地面に打ち込んで生きていくための、軸。それが基水源。三大水陸、三大水源だ」
ふと立ち止まり、男は息を吐いた。

「だが、不安はある。なあ、お前さん、石造りの街に行ったことがあるか？　つまり、流れない類のだ」

黙したまま、サリュウは頷いた。トマスの名をだすつもりはなかったが、男にそれを気にした様子はなかった。

「それが大水源の恩恵だな。なら思わないか？　本当にその水流は、いつまでもそこにあるのだろうか、とな」

言葉の内容より、自分を見る男の意外なほどに真剣な表情が、彼女には驚きだった。にやりと表情を崩して、男が笑う。

「なんてな。まあ、こういうのは本来なら俺の興味の範疇外なんだが。特に最近、このあたり一帯の枯渴なんてことがあったもんでな。ちよつとばかし不安にも思っちまうわけだ。で、そんなときに、ぽっかりと沸く水場なんてものが見つかる。いったいどういふことなんだらうなあ」

ふらりと歩き出すケツセルトに問いかける。

「ここが、その基水源だと？」

男の答えはなかった。

不意に広い空間に出た。続けて発した自らの言葉で彼女はそれを確信した。

「ここは……」

声がかもらず、浅く残響に木霊している。立ち止まったサリュの前を歩く男の足音が強い水気を帯びていた。

光源が増えた。男が手持ちの灯りを分けたのではなく、壁際に何かを灯したらしい。男が壁に沿って歩く度に橙色の光が灯り、壁際に寄った彼女はそれが蝋燭の類だと気づいた。幾らとも知らず壁に配置されているそれらは、この場所に度々人が訪れてきていることの証でもあった。

半円状の照明がその場を仄かに浮き上がらせた。

無数につけられた灯りが闇を照らし、それでも行き届かない奥深さがかえってこの場所の広がりを示している。白さのある壁は純粋な色合いでないのか、蝋の灯りに様々な光となって表れていた。光はゆらめいている。風がある。

音はない。奇妙な既視感をおぼえて、彼女はすぐに理解した。静謐な空気が、動物も争わないという砂海の水場の雰囲気と似ている。空間の中央には水が溜まっていた。巨大な水溜りのような、つまりここが。

「基の 水の、源」

「ま、ここの水場の源ではあるんだろうがな」
灯りを手に戻ってきたケッセルトが言った。

「小難しい話は学者どもに任せるとして、どうやらこいつは本物だな。やれやれ、うちの近くにこんなものがあつたとは よくもまあ、今まで隠し通せてきたもんだ」

「砂が」

サリュは呟いた。

「あ？」

「……砂がありません」

洞窟には砂の気配がなかった。外にできれば轟々と響くあの唸り声もない。いったいいつからだろう。

「ああ。そっぴや、砂っばくねえな。ここまでは入り込まんか」

風はあるのに？

どこかに繋がっているはずなのに。人の手が加わっていない場所で、こうまで砂から解放された空間があることが彼女には不思議だった。まるで、この洞窟が隔絶されているように思える。

「ふん。荒ぶる風の神も大地母の御許ではお行儀よくってとこだな」

「この場所は。どこに繋がっているのでしょうか」

「……さて。まあ、そのうち帝都から調べたがりどもがやってきて説明するだろ」

確定した未来を語る男へ、サリュは鋭い視線を向けた。

「村の人達をどうするつもりです」

問われた男は灯りに浮かび上がった口元を面白くもなさそうに歪めた。

「知らんよ。それを決めるのは俺じゃない」

ぐるりと周囲を見回し、

「ようするに、ここは奴らの祭壇だろう？ 自分達の水と信仰を持った、奴らは一個の“国”ってことだ。なら、従うか、滅びるか。それだけだろうよ」

嘲笑うように男は言った。

「不思議なんだがな。そっちこそ、こんなところで何をしてる。死にたがりに利用され、用済みになった拳句、どうしてこんなところを彷徨っているんだ？」

サリュは押し黙った。男の言うとおり、いまだに彼女は自分がここに意味を認めずにいた。

村の住人については特別な思いはない。この村で彼女と関わりがあるのは二人で、そのうちの一人であるファラルドは恐らく死にたがっている。セスクは？ 彼らに対して、いったい何ができる。「ここでお前さんの探し物が見つかるのか、それとも情にほだされただけか。砂海の旅はよほど人を乾かせるからな。毎晩、砂虎に慰めてもらっただけじゃ寂しくなっただか？」

男の言葉を無視し、彼女は見通せない底深さを誇るその空間に對峙した。

黄暖色の灯りに照らされた水場。男が祭壇と表現した、確かにそれに似た儼かな雰囲気がそこにはあった。祝福の地。

「アタリア」

「ああ？」

「この村の人達が呼んでいました。この場所のことを、アタリアの喜び。祝いの地と」

「火と水の豊穰か」

「……その神様は、このあたりで信じられているのですか？」

ちらりと彼女を見下ろして、ケッセルトは答えた。

「水陸南方の古い土俗信仰だな。端に追いやられているが、融合化教策の煽りを受けた類だから、名前が知られているところは多いだろ。本流から遠ければ遠いほど、信仰が残っていても不思議じゃない。もともと、このあたりは土俗が強いからな」

やはり男の知識には相当なものがあつた。あるいは、彼女が短い期間を過ごした人物達に近い教育を受けてきているのかもしれない。サリュの疑問に応えるように、男は肩をすくめてみせた。

「これでも一応、貴族なんぞな。火と水。太陽と誕生。転じて豊かさの象徴となるんだっただか」

「つまり、善いものの」

「どちらかといえば、好ましいもの、か。どっちだっていいが。死の砂なんてものと対極にあるのは確かだな。死の砂が祝いの地とやらに吹いてどうなるかは　まあ、興味がなくはない」

「埋もれることはないと？」

「砂の恐ろしさくらい承知してるとも。だがな、あれが死の砂だとして断定できる。いったい何をもってお前はあれを死の砂だと？」

からかうように男は言った。

「何か死の砂の秘密を知ってるのか。それとも、あれを呼んだのはお前なのか？　そのおかしな瞳で。砂虎を手なずけた魔術が、砂をも従えると思ひ込んででもいるのか」

サリュは答えず、振り返った先にいつのまにかファラルドの肩を抱いたセスクの姿があった。少年が何か言いかけて視線をそらし、抱えられた男が辛そうに口を開く。

「死の砂は……死を望む者の前に現れる。なら　あれは、そうだ。死の砂だ」

は、とケツセルトが嘲笑した。

「たった一人の死にたがりに呼べるんなら、ずいぶんお手軽なことだ」

口調にわずかな怒気がこもっているように思えて見上げたサリュを、男は舌打ちを我慢する表情で見返した。

「くだらん。水源は確認できた。俺は戻る」

言い捨てて歩き出す。唸りをあげるクアルにも動じず、去っていく男の姿を見やり、彼女はセスク達に告げた。

「……私達も、出ましよう」

父親と息子は無言だったが、あえてこの場にとどまろうとはしなかった。先に行くケツセルトの灯りが先導する。先行する男は洞窟内を迷いなく歩き続け、やがてうっすらと外の光が視界に入り込んだ。

洞窟を出たすぐのところ、ケッセルトが立ち止まっている。男の後ろに追いつき、サリュはその理由を知った。砂嵐の中、青ざめた表情で立ち並ぶ村人達が周囲を取り囲んでいた。手に鍬や鋤、それぞれ農具をかまえている。

「いいね。実にいい」

ケッセルトが言った。背中から聞こえる声は、さっきとは一転して機嫌よく響いている。

「それでこそだろ。砂に埋もれるくらいなら殺される。それが矜持ってヤツじゃないか。なあ？」

吹きすさぶ砂に抗い、唐突に男が吠えた。

「“ 氣勢を示せ”！」

突然のことに何事かと眉をひそめる前に、暴風が応えた。

暴風のような、それは声だった。大勢の男達の地を揺らすような雄たけび。砂声を駆逐して轟いた集団の絶叫に、サリュは身のすくむ思いを味わった。

姿はないが、それはケッセルトの率いた兵のものに違いなかった。声は集落全ての方角から聞こえた。取り囲んでいる。雄たけびはそのまま、集団の持つ暴力性を体現していた。砂海で出会った砂虎のそれと同様に。思わず恐怖に身震いしながら、サリュはおびえる村人達の間を悠然と通り抜けるケッセルトの後ろ姿を見送った。

誰にもなく声が残る。

「一日待つ。それまでに決める。死ぬか、生きるかだ」

男が去った後、集落には砂の吹く音だけが訪れた。

唐突な勧告を突きつけられた村人達は茫然自失として、不条理な

現実に対する怒りを誰かに叩きつけることもできずにいる。彼らが凶暴な集団性を思い出す前に、サリュはセスク達を連れて宿へと戻った。

ファラルドの自室に入り、古びた木製の寝台に横たわらせる。傷の手当ての為にセスクに大量の水と清潔な布を準備させ、その間に彼女がファラルドの衣服を脱がせていった。

砂が入り込むのを防ぐ目的で木窓を閉めており、室内でも部屋に明るさはない。あらためて見る男の身体には無数の傷が刻み込まれていた。打ち傷、切り傷は全身に広がり、拷問の真似事のもりか、両手は指先が潰されている。職人にとってそれは、ほとんど死に等しいものであるはずだった。

傷跡から熱を帯びたのが、ファラルドは意識を朦朧とさせていた。我が家に戻って気が休まった部分もあるのだろう。脂汗を浮かべて苦悶に浮かべた表情が、悪夢にうなされているように何事かを呟いた。

「ヘシカ……」

何かではなく、誰かへの声だった。

セスクが戻り、彼から受け取った大量の布を湿らせて傷口を拭う。セスクにアルコールをとってきてもらい、消毒はそれですませた。濃度の高そうな香りのする酒精を傷に染み入らせても男はくぐもつた声しかあげなかった。ずいぶん体力も落ちてしまっている。

全身に処置をほどこし、清潔な布で覆った頃には、ファラルドは意識を失ってしまった。浅い呼吸が男の腹部を上下させている。熱と痛みはこれからさらに増すだろう。栄養を、とらなければならぬ。

傍らで心配そうにしているセスクに向けて彼女は言った。

「食べるもの、作ってくるから」

「あ、それなら俺が」

椅子から立とうとするのを制止し、サリュは部屋を出た。厨房に向かいながら途中の廊下の窓で外の様子を窺ってみるが、村人達が取り囲んでいる気配はなかった。既にはこぶつき馬とともにクアルが待機しているので、何かあれば遠吠えで報せてくれるはずだった。

使い込まれた厨房で適当に材料をあさり、肉と野菜をふんだんに使ってスープを作る。弱火で具材が煮込まれるのを待つ間、セスク達の様子を見に部屋へ戻ると、男の寝息は少し落ち着いたものに推移したようだった。

「……何か、お父さんと話せた？」

少年は無言で首を振った。その隣に腰をおろし、かける言葉を思いつけずにいると、ぽつりとセスクが言った。

「外のつて。死の風なの？」

顔の向きを動かさないまま訊ねるのに、サリュは返事のかわりに頷きで答える。

「……どうしてわかるの？」

一泊の間を置いて、彼女は言った。

「声がするから」

少年の振り向く気配を感じながら、

「聞こえるの。耳に、響く。そして風が吹く。……何故かは、私にもわからないけど。ずっとそうなの」

外からの風が木窓を叩き、寝台横の机に置かれた灯りを揺らした。彼女の陰影のついた表情の中央で二重の環が輝いている。その怪しげな相貌に意識を吸い込まれたように、セスクは沈黙した。

「……声なら、俺も聞く」

いつから意識があったのか、寝台のファラルドが擦れた声で囁いた。

「あいつの声。いつもあいつは言っている……滅んでしまえ、と」

「ヘシカ、という方ですか」
ぴくりとセスクの肩が震える。

「……母ちゃん？」

ファラルドは息子に答えなかった。儂く、千々に細切れた呼吸の後に声が漏れる。

「あいつは……怨んでいた。俺を、この村を。いつか自由になれることを夢見て、元の家族のもとに戻ることを期待して。それが叶わないとわかってからは、ずっと空ばかり見ていたよ。きつと呼んでいたんだろう」

椅子を蹴り上げたセスクが立ち上がった。

「そんなの当たり前じゃんか！ 自分の家族を殺されて、無理やり身籠らされて！ 怨んでたに、決まってる……！」

「……わかっているとも」

男は穏やかな声で応じた。

「どれだけ砂が流れても許されはしない。あいつが癒されることもない。だが 変わっていけるんじゃないかと思った。村も俺も、あいつも」

男の顔が痛み以外のもので濁る。

「そんなこと、できるはずがなかったんだがな。いつまでたってもここは止まったままで。そしてあいつは死んじまった」

「……だから。こんな村滅んでしまえって？ そういうことかよ」
非難に、ファラルドは苦笑するように口元を歪めた。

「お前もそう思っていたんだろう。だからここを出た。そうじゃないか？」

重苦しく嘆息し、答えないセスクに男は続けた。

「それでいいんだ。外は広がったろう。こんな村とは何もかもが違ったはずだ。それでいい。なのにどうして戻ってきた。ここは滅ぶ。昔のまま、何も変わらずにな。黄金なぞ砂に埋もれればいい……」

…お前までそれに引きずられることはない」

叱りつけない声が、諭すように語りかけている。彼女がこの村を訪れてから初めて見る光景だったが、セスクにとっても慣れないものだったらしい。大きく頭を振って、叫んだ。

「勝手なこと、言うな！」

部屋から飛び出していくセスクを追いかけようとして、寝台の男を振り返ったサリュは、体中に激痛があるはずなのに満ち足りて見える男の表情に顔をしかめた。

「私も。あなたは勝手だと思います」

ゆるやかに首を振り、男は視線を落とす。

「親つてのは……そういうもんさ。あいつのきっかけにまで、あなたを利用してもらったのは申し訳ないが。本当に、あのまま帰ってきてくれなかったらよかった」

「どうして、もっと早くに話し合わなかったのですか」

ファラルドの妻、セスクの母親が死んだのがどれほど前のことかは知らないが。二人の間にはいくらでも時間はあったはずだった。

「……どうしてだろうな。いつまでも時間はあると勘違いしたのか、この村の空気に浸りきってたのか。そんなわけがないと、あいつが死んで思い知ったはずなのにな。あいつはもう……俺と同じことしか言ってこないよ。お前さんにもそれは、わかるだろう？」

求められた同意は、単純に不快だった。怒りを気色に乗せ、扉へと向かいながらサリュは告げた。

「一緒にしないで欲しい。確かに私にも聞こえる声はあります。しかし、それは私に死を囁きはしない。声はいつも言います。生きると」

それ以上の反論が届く前に彼女は部屋を出た。

建物の空気は低く静まり返っている。セスクを探して宿の中を歩き、部屋の隅で膝を抱えている姿を見つけた。

泣いているのかもしれない。そう思ったが、顔を上げた少年の目に涙はなかった。

「……クソ親父」

そこにあつたのは反抗の光だった。砂を見上げるような。そして、そうした眼差しを砂に向けることができるのは常に子どもなのかもしれなかった。彼女自身がどうであつたかは別として。感情の激しさに違いはあつても、似たような視線を誰かに向けた覚えがあつた。だから訊ねた。

「どうするの？　これから」

「皆を、説得するよ。絶対に　ここで生きてやる。負けるもんか。絶対」

言葉には迷いがなかった。

それはつまり、ケッセルトに服従する道を選ぶということだ。自分達だけの水源を独占し、隠者のように生きてきた人々にそれが可能だろうか。変化は、ファラルドが望んで諦めたものであるはずだった。

「そう」

頷いて、サリュは手を差し伸ばした。

「　なら、行きましよう」

見上げてくるセスクの手をとって、引き上げる。

「……手伝ってくれるの？」

「ここにいるもの」

不明瞭な答えに少年が眉をひそめるが、彼女はそれ以上言葉を重ねなかった。

セスクがこの村で生きようとするのなら、それを手助けするのが自分がここに居る意味だろう。死の砂が吹いているのに、とは思わなかった。そもそもが少年の為などではない。過去の自分の為にそうするのだ。それは一年前の自分には叶えられなかったことだった。納得していない様子のセスクの頭を撫で、外へ向かう。セスクが

村人が集まっているだろう建物まで案内した。戸を開くと、陰気な視線が針を飛ばしてくる。中には暗がりや濃くわだかまっていた。

話し合いをしていたのか自分達の不幸を嘆いていただけなのか、顔を付き合わせた男達の表情はほとんどその暗がりやに同化しているかのようにくすんでいる。

「なに、やってんだよ」

情けない大人達に向かって、セスクが吠えた。

「外には砂が吹いて、兵隊まで取り囲んでるんだ。明日まではどうするか決めないと、皆、死んじゃうんだ。なにやってんだよ」

「……裏切り者の息子が、何を偉そうに」

部屋にこもった空気そのものが口を開くように、声が響く。

「帰れ。お前達と話すことはない」

「死を引き連れた罪人め」

「呪われる、……ファラルドはどうした。せめてやつに報いを受けさせねば」

「うるさい」

少年は一言で亡者の声を断ち切った。

「親父のやったことは、俺のやったことさ。責任とれっていうならいくらでもとってやる。俺が言ってるのは、じゃあ村の皆はこれからどうするんだってことじゃないか。親父が仕組んだとおり、皆して死んじゃうのかよ」

熱弁に応えたのは冷えた空気だった。開け放たれた扉から吹き荒れる砂風をもつてしても、室内から追い出すことができないほどにこびりついた何か。歴史や慣習といった汚泥に対して、サリュは息を吐いた。

「死にたいなら、死ねばいい」

隣に立つ少年が仰ぎ見るのがわかる。彼女は続けた。

「私はあなた方がどうなろうと、あまり興味はありません。もう二

度と訪れない昔を想って、そのまま砂に埋もれるというのならそれでもいいでしょう」

防砂具に隠れた口元が自嘲に歪んだ。すぐにそれを消し去り、「ですが、この子はあがけと言っている。私もそうするべきだと思います」

サリユは身を翻した。

ここはセスクの戦場だった。彼女の役割は他にあった。

向かった集落外れの泉で、男は優雅に水を浴びていた。

「おう、一緒にどうだい」

鍛え抜かれた裸身を晒し、盛大に水しぶきを上げてみせる。砂の猛威も幾重に茂った木々に阻まれ、ここの水場まではまだほとんど届いていなかった。

「……遠慮します」

周囲にいた兵達が下卑た笑みを浮かべるのに、彼女の傍らに侍るクアルが一睨みして黙らせる。濡れた黒髪を後ろに流したケッセルトが水面に立ち上がった。

「それで、何の用だ？」

「村の人達の処遇について。お聞きしたいことがあります」

「そりゃまた、一介の旅の人間が言うには過ぎた話だな」

「それが私の受けた依頼ですから」

男は片方の眉を持ち上げた。

「依頼？」

「あなたにお渡しした手紙。タニルと村との橋渡しが、私の役目です」

「ああ……なるほどな」

可笑しげに笑う。

「なるほど、筋は通る。つまり村の交渉人として来たわけだ」

「はい」

「しかし、交渉の余地がどこにある？ 従うか、滅ぶか。さっき言ったとおりなんだが」

「その後のことについて、あなたからはまだ何も伺っていません」
サリユは言った。

「従った結果、村人はどのような扱いを受けるのでしょうか」

ケッセルトの眼差しに鋭さが増した。為政者として油断のない表情を垣間見て、サリユは胸の中で緊張の息を吐いた。男が彼女の立場を受け入れた以上、話は公的なものとなる。周囲には男の率いる兵達の姿があるから、ケッセルトが発言に気を遣うのは当然だった。「……奴らは長きに渡って明かすべき水源を不当に隠し、占拠していた。罰せられて当然だろうよ」

「具体的にはどのようなもの？ それによって、私も対応の行動をとらなければなりません」

「ほう。例えばどんなだ」

「村は自ら恭順の意を示したはずですが。確かに被るべき罪について、その情状を斟酌されないとあれば、村には、それを訴える用意があります」

その台詞が一線を越えた発言であることを承知の上で口にした。笑みを消したケッセルトの視線が突き刺さる。自分の推測が正しいことを祈りながら、サリユは続けた。

「この地域一帯は水が枯れ、空白状態になっています。そこで生じた問題を治めるべきなのはいったい誰なのか。場合によっては、砂海を渡った先へ使いに出る必要もあるでしょうか」

「……できると思うか？」

声色が、危険なほど低く奏でられる。クアルの咆哮が応えた。

砂の巻く音だけが遠くに鳴り響く中、ひやりと底冷えた緊張感が辺りを支配した。周囲に散らばる兵からもからかいの気配が消え、近くの武器を探り寄せる者の姿が見えた。

不穏な空気を察知した砂虎が齒を剥き、いつでも飛びかかれるよう身を屈めた姿勢をとって周囲を威嚇する。サリュは平静な態度を取り繕い、男に向かい合った。

ケツセルトが外部の介入を嫌うのではないかという推測は、半ば以上当て推量によるものではあった。以前、彼女自身が巻き込まれた出来事で、そうした支配者同士の牽制、あるいは策謀が日常茶飯事であるということを知った。それならば、と考えたのである。

どうやらそれは正しかった。少なくとも、男を交渉の卓に引きずり出すことには成功している。必要なのは、これからそれをどうまとめるかだった。そうした交渉事について根本的に経験が少なかったから、彼女は沈黙に耐えられず自ら口を開いた。

「村に、抵抗の意思などありません。どうか寛大な処置を願います」それを聞いたケツセルトが不快そうに鼻を鳴らした。言葉を掛け違えたかと、さらに言い募ろうとするのを止められる。男は言った。「どうしてそこまでする？」

「……先ほども言ったとおりです。依頼を」

「赤の他人であるはずのお前が、どうしてそこまでして手間を折るのかと聞いている」

重ねて訊ねる口調には、いつもの不真面目さが欠けていた。

「私にも覚えがあります」

眉をひそめる相手に、サリュは本心からの言葉を吐いた。

「失くしたくないと思って。でも失くしてしまいました。理由は、それだけです」

「つまり感傷か。女子どもの」

くだらん。と吐き捨てる。尊大に男は告げた。

「我々は黄金を手に入れる為にやってきた。その功も罪も、良きも悪しきもだ」

奇妙な言い回しだったが、男がこちらの言い分を認めないということは理解できた。臍を噛み、脳裏で瞬時にこれからの展開を考えて、サリユは隣にそつと語りかけた。

「殺しちやダメ」

周囲では兵達が武器を構えていた。徐々に包囲を狭めようとしていた男達へ向けて、クアルが再び咆哮した。

先ほどとは質も量も異なる、本気の雄たけびだった。村でケツセルトが兵達に吐かせたものに比するほどのそれを、たった一匹の獣が吼えた。

動揺が生まれた。動じなかったのは、それを知っていたサリユの他にはケツセルトのみだった。

身をすくませた男達が肉体の自由を取り戻す僅かな間に、サリユは駆け出していた。口元に笑みを残すケツセルトに背を向け、男達の一角へ走る手にナイフがある。長槍を構えた髭面の男が手に持った槍を振る前に、彼女はその懐に入り込んだ。

鮮血が舞った。男の二の腕を浅く切りつけ、悲鳴をあげた兵士が槍を落とす。すかさずサリユは隣の男にも切りかかり、同じように得物を失わせたところで奇襲の効果は尽きた。

「貴様……！」

怒気を膨らませ、近くの男が槍で突こうとする。兵士から見れば小柄な彼女の身の、その背中を飛び越えて影が現れた。

砂虎に爪を抑えた一撃を加えられ、半ばで折れた槍ごと兵士は弾き飛ばされる。そのまま空を駆けるように跳躍する猛獣の脚に腕を絡め、サリユは男達の包囲を突破した。

空中にいる間に手を離し、着地と同時に二手に分かれる。クアルが凶悪な突進力で蹴散らし、その隙間を縫ってサリユは地を駆け抜けた。

悲鳴と怒号が交錯する。攪乱された兵達は、たった二人の襲撃者に翻弄されて無様を晒した。牽制としては充分過ぎるだろう。戦果を確認し、機を逸しないうちにこの場を離れようとサリュが指笛を吹きかけて、

「　　」

半身に捻った眼前を、一本の殺意が貫いた。

ぞつと血が引く音を聞きながら、彼女は目の前のそれを見た。樹木に突き刺さった槍の柄が振動している。穂先は彼女の頭部に巻かれた防砂具の一部をひっかけていた。

遠く離れた水面から、投擲した姿勢のまま、涼やかにケッセルトが笑った。

「せっかく面白い見世物なんだ。もう少し続けるよ」

男を睨みつける余裕はなかった。縫いつけられた布防具を剥ぎ取り、サリュは周囲の様子を窺った。悲鳴が途絶えていた。クアルの姿を探し、背後で静かに息を吐く音に無事を知ってほっとする。

周りは再び男達に囲まれていた。取り囲む兵の表情には怯えも混乱も残っておらず、先ほどまでとは明らかに異なり、その統率を成し得た人物の器量が窺えた。

奇襲と強襲。一方的にこちらの戦力を示し、それを相手との交渉の材料にする。彼女の考えは破綻した。こうなった以上、ケッセルトを人質に　　？　　しかし、それでは対立が決定的になってしまう。意味がなかった。

考えがまとまるより先に、兵達が危険なまでにその包囲を狭めていた。明らかに一人で飛び掛る愚を控えている。水平に構えられた槍が、呼吸をあわせて一歩一歩距離を詰めていた。

これ以上、留まることはできなかった。態勢を立て直す為に解囲するしかない。サリュは駆け出した。

彼女達の手法は常に一人が切り込み、残った方が生じた隙をつくというやり方である。この際、サリュが先手を務めたのは小柄さと応用の幅の度合いによる。クアルは砂虎としては若くとも巨体で、その力は手加減して振るうのにさえ大きすぎた。

連携した動きは、既に相手する兵達も把握するところだった。穂先が一斉に突き出される。如何に身軽でも、砂虎の体ではその全てをかわしきることは不可能だっただろう。ほとんど転がるようにして、サリュはその刃の群れをかくぐつた。

伸び上がった切りつけようとすると、その動きが阻害され、彼女は背後を振り返った。防砂衣の裾が、一本の槍の先で再び地面に縫いつけられていた。歯噛みする。上空を影が差した。

砂虎が一足飛びに挑みかかる。襲い掛かる脅威に、男達が即座に槍を手放し、道を空けるように左右に散るのを見て、サリュの脳裏に不吉な予感がよぎった。その影を探す。すぐにそれは見つかった。

前方に弓を構えた一団がいた。立ち姿勢の一行と膝斜に構えた一行が、それぞれ鋭い視線を放っている。それらの瞳に映る目標の姿が彼女には見えるようだった。

「逃げて……！」

悲鳴にも似た指示に、砂虎は従わなかった。大きく跳躍することなく、逆に四肢で地面を踏み抜き傲然と身を反らす。背後の彼女をかばうかのような態度にサリュの思考は絶望に塗りつぶされた。

「ま、こんなところか」

猛獣を射殺す矢嵐に代わり、言葉が降った。

地面に突き立った槍を引き抜き、自由になった彼女の腕をとって身体を立たせる。下半身に布を巻いただけのケツセルトは、砂虎の

威嚇の唸り声にもまるで動じず、からかうような表情を浮かべていた。

「頭は良く回る。度胸もいい。少々、行動が感情的に過ぎるが若い娘にしては上出来だ。まだ可愛げもあるしな。そう思わんか、お前ら」

どつと笑いが起きた。傷を負った兵までが苦笑まじりに笑っていることに気づき、サリュは屈辱に頬を染めた。遊ばれていた。

一気に弛緩した空気が気に入らないのか、クアルが吠えた。男はおどけて肩をすくめてみせた。

「いいぞ」

短い言葉の意を汲み取れず、サリュはとつさに反応できない。

「連中の処遇、保障してやってもいい。あの集落が砂でどうなるうがな」

二重の環を持つ瞳を驚きに見開いた彼女が一呼吸する間に、言葉は続いた。

「ただし、お前は俺の女になれ」

「……っ？」

男の顔が不自然に近づくの、反射的に身をよじらせた。距離をとろうとするが捕まれた腕がそれを許さなかった。声を荒げる。

「何を、ふざけたことをっ」

「俺のものになれよ。そうすれば、村の奴らの話を受けてやる」

返答の代わりにナイフを振るった。ようやくケツセルトが拘束を解き、後ずさる彼女と男の間にクアルが立ちふさがった。

「ふざけてる？ お前が言った交渉事の、正式な回答だが。引き換えに、奴らの罪は俺が全部飲み込んでやる。施政に刃向かわん限りな。我ながら大した条件だと思うぜ。キーチエンの奴が聞いたら泡吹いて卒倒するだろうよ」

「そんなことを。一人の人間のどうこうで決めると」

「喜べって。それくらい、お前を気に入ったってことだ」

馬鹿げている。怒声をあげかけ、それが男の「手」ではないかと疑ったサリュは無理やりに頭を落ち着かせた。昇った血流を冷やす。

村のことに関する言質を取った、その一事で行動の甲斐はあった。彼女にとつては最も懸念すべき事柄でもあった、砂の影響。それについてまで男の方から口にしてくれたのだから、これは即席の交渉人に得られる成果としては望外の収穫といつていいはずだった。

「誰か探してるんだろ？ それも力になってやる。一緒に、お前の乾きだつて癒してやるさ」

傲慢な物言いに眦を吊り上げる。感情の迸りを抑え、彼女は身体ごと男から顔を背けた。

「……明日、お待ちしています」

村へと戻るサリュの背中を追つて、届いた声は気安かった。

「日没だ。いい返事を期待してる」

日の入りを控えた集落には砂が吹き続けていた。風が人の気配を飛ばし、辺りは沈滞して生気に欠けている。それは死の風の吹いた場所に見られる大きな特徴だった。

そうしたところだから死の風が吹くのか。それとも死の風が吹くからそうなのか。砂の声を聞く彼女にもわからない。ただ、風が吹いた場所に生きること絶望した人々が溢れているのは彼女が今まで多く見てきた事実だった。

しかし、この村にはまだ絶望していない者もいる。昔の自分とは違う眼差して砂を見上げ、昔の自分と同じように求め、あがいている少年の気概は好ましかった。

セスクはまだ宿に戻っていなかった。暗く落ち込んだ建物の中で灯りをともし、サリュは厨房に向かった。スープを火にかけたままだったことを思い出し、鍋の様子を見る。中身を一舐めし、彼女は

再び鍋を火にかけた。充分に温まったそれを器に移し、ファラルドの寝室へと持っていく。

部屋に入ると、男は閉じた木窓の向こうを眺めるようにしていた。やや憔悴した表情だが、熱に朦朧とした様子はない。

「食事を持ってきました」

木の匙とともに器を渡すと、ファラルドは黙ってそれをすくい、口に運んだ。

「……焦げてるな」

上澄みをよそったのだが、あっさりとその風味を看破する。男は唇を歪めて言った。

「あいつの作ったような味だ」

それが生者ではなく死者を指しての感想だったから、サリュは眉をひそめた。過去にすがっている姿に苛立ちを覚えるのは、セスクに好感を抱く理由と根幹が等しいことは自覚している。だから、彼女は何も言わなかった。

「この村では、金が採れるのですか？」

かわりに訊ねると、ファラルドは怪訝な視線を向けた。

「金だと？」

「少し、気になったので。この村の名前の由来でもあると聞きました」

男は擦れた笑い声をあげた。

「ここにあるのは水と塩だけだ。いや、もちろんあるにはある」
「そこで口を閉じた。皮肉げな表情で、男はそれ以上語るつもりがないようだった。扉を開いたままにしていた廊下から誰かが宿に戻ってきた音が聞こえ、サリュは席を立った。

「……死の風が、生きると言うのか？」

ファラルドが訊ねるのを、彼女はあえて答えないうまま部屋を出た。

入ってきたのはセスクだった。見るからにくたびれ、疲れきっている。

「ただいま」

村人相手にどれほど声を荒げたのか、声が老人のようにひび割れていた。辛そうに喉をさするのに、サリユは厨房からすくってきたばかりの深皿を渡した。一口して、セスクは顔をしかめた。

「なんか、……苦い」

黙って飲み水を差し出す。

「待っていて。お風呂、沸かしてくる」

「そんなの、俺がやるって。ちよっとだけ休ませてくれれば」
彼女は首を振ってそれを断った。彼女が湯を焚き、戻ってきた時、食堂にセスクの姿はなかった。大きな器に注いだ湯と布を抱え持ち、サリユはファラルドの部屋に向かった。

父親と息子は互いに視線をあわせないうまま、部屋の中には収まりの悪い沈黙が幅を利かしていた。両者の中央の床に器を置き、
「セスク。あとであなたも入ってね」

声をかけて彼女は部屋を出た。セスクが父親にかかりきりな間に自分が湯を浴びてしまうことも考えたが、その前に様子をみなければならない相手が残っていることを思い出し、厩舎へと足を向けた。

厩に入った途端にクアルに押しかわられた。積みまれた飼葉に倒れこみ、痛みなく埋もれる。嘆息し、しばらくされるがままになつてから、クアルの身体がいつもより熱を帯びていることに気づいた。

先ほどあった争いが砂虎の気を昂ぶらせていた。彼女の言いつけを守り、爪を立てず、兇戯のような争いに終始してくれたことに感謝して、サリユは砂虎の大きな頭を抱きかかえた。

今日はここで寝ようと心に決める。飼葉の寝床には虫も湧き、寝心地の点では宿のそれと比べべくもなかったが、今夜は懐かしい匂いの近くで眠りたかった。湯は明日、水を浴びればいい。

こぶつき馬がいなかった。耳元ではクアルが喉を鳴らしている。
轟々と鳴る砂の響きさえも彼女にとっては不快ではなかった。

集落での最後の夜が過ぎていった。

「お姉ちゃん。朝だよ」

夢を見ないほどに深い睡眠だった。砂と獣の匂いに薄く瞼を持ち上げたサリュを、呆れたような顔のセスクがのぞきこんでいた。

「どうしてこんなところで寝てるんだい。部屋、探したんだぜ」

のそりと顔を持ち上げた砂虎が、邪魔するなとばかりに少年に牙を剥く。大きく開かれた顎に怯えることなく、セスクが何かの野菜をその口の中に放り込んで、クアルが奇妙な顔でそれを齧ってみせるのを見て、サリュは口元をほころばせた。

「朝メシ、作ってあるよ」

「ありがとう」

「いいって。うん、今朝のは焦げてないよ」

厩舎を出る。普通の村落なら日の出前に外で働きだす人間がいるものだが、外には誰の気配もなかった。つまりはそれが砂の恐ろしさなのだった。生活を、壊す。

人智を超えた圧倒的な力が全てを吹き飛ばし、埋めていく。砂に満ちた星でそれは人が順守しなければならぬ絶対的な法則だった。その中で生きる。抗って、生きる。ケッセルトの言葉が脳裏に蘇った。黄金を手に入れる為に。

黄金。彼女が知る希少な鉱物の意味以外に、そこには何らかの比喩が含まれているように思われた。昨晚のファラルドの口ぶりにもそれは感じた。

何かがひっかかるのだが、うまく結びつけることができない。考え込む彼女の眼前にセスクがよそった朝食が差し出された。

「ありがとう」

白い湯気から芳醇なミルクの香りがたっている。中には豪勢に振

舞われた乾米が顔を覗かせていた。

「親父のヤツが寝込んでるからさ、貯めてあった材料をこれ以上ないってくらい警沢に使ってやったんだ。親父、目を白黒させるはずさ」

悪戯っぽく少年が言った。陰気さのない表情につられ、サリュも口元を緩める。

ふと、セスクの顔から笑顔が消えた。

「……どうして笑えないんだろう」

手元の皿に視線を落とし、

「皆、死んでるみたいに陰気さ。口を開けば、下を向いてぶつぶつ文句を言うだけ」

セスクは重く息を吐いた。

「親父、村の皆が兵隊相手に戦って死ぬなんて考えてたみたいだけど。そんなこと起きるはずなかったんじゃないかな。だって、実際そうだし」

どうだろうか、とサリュは声には出さずに反駁した。

衝動とは発作的なものだ。特に集団の場合、それは本当に些細なことでも容易く燃え上がる。昨日、洞窟から出てきた自分達を農具をとった村の間人達が困んだ、あれがそのまま自暴自棄の暴走を招く恐れもあったのだ。

その機先を制して鎮圧してみせたのがケツセルトという男だった。砂嵐に姿を隠し、実際には何名いるかわからない兵達の訓練されたときの声に、村人達の暴走しようという意思はあっさりとくじかれた。

個人的な感情は抜きに考えて、あの人物が有能であることは確かだ。約束も、守られるだろう。

その人物を知らなかったことが、ファラルドにとっては誤算だったのかも知れない。そうなのだろうか。妻を亡くし、村に絶望

した男が滅ぼしたかったのは、どちらだろう。村か、それとも村人達か。

「セスク。……あなたはこの村が砂に埋もれてしまったら、どうするの？」

問われたセスクは瞬き一つほどの時間を考えて、答えた。

「お姉ちゃんと一緒にさ、夕日を見たじゃないか」

瞳の中にいつかの光景を思い出しながら、

「あれ、すごい綺麗だった。俺、あれだけで村を抜け出して、姉ちゃんについて行ってよかったと思ってる」

少年は笑った。

「どうもしないよ。どこか別の場所でもた、生きてけばいいんだもん。ここはイスマ・ク　黄金の在る村なんだ。だったら、ほら。黄金なんてどこにだってあったじゃないか」

その答えは恐らく正しいものなのだろうと、彼女は思う。

食事を終え、セスクは宿を出て行った。生きる希望を失った村人達に、最後まで尻を叩き続けるつもりらしい。今日の日没頃、あの男が兵とともに現れることを告げると、緊張した面持ちで少年は頷いた。

サリュは朝食を持ってファラルドの部屋を訪れた。皿の中身を一瞥した男が、セスクの言ったように渋い顔になるのが少し可笑しかった。

「あいつは？」

「外へ。村の人達に話をしにいきました」

「無駄なことを……」

「そうでしょうか」

彼女がさきほどセスクと交わした会話を話すと、息子の言葉を聞いたファラルドは無言で、視線を宙に彷徨わせた。表情には複雑な

想いがよぎっているようだった。様々な色がまじりあつて混沌としていた。

「私には家族がいませんでした」

男へ、静かにサリュは言った。

「こんな目をしていましたので。故郷も。だから、正直に言つて、よくわからないのです」

ただ、と続ける。

「羨ましく思います。私は持っていなかったから」

あなた方は。あなたは、違う。

言外に込めた台詞に、ファラルドは何も言わなかった。

部屋を出て、彼女は建物の中で研ぎ石を探し、それを持って浴槽に向かった。一晩の間に冷え切った水を浴び、ナイフを研ぐ。ついで、少し伸びてきたように思える髪も切っておいた。

身を清めた後、しっかりと防砂衣を着込んでサリュは外へ出た。とはいえ、頭部に巻く布防具は昨日、泉で失くしまつていたから顔は素顔のままだった。激しい砂風が彼女の髪をなびかせた。

約束の刻限まで余裕があった。その時間を使って彼女は村を見てまわった。当然のようについてきたクアルを伴つて、様々なところを歩く。閉じきった家屋。砂の被さった畑。一件の家からは、セスクが声をはりあげるのが聞こえてきた。

村の周辺には兵達の姿があつた。ある程度の距離をとつて、数名が一組になっている。腰に弓矢を携えていた。彼女とクアルとだけでならともかく、これでは荷とこぶつき馬を連れて村を出るのは不可能だろう。もちろん彼女にそんなつもりはなかった。

あらかたを巡り終え、最後にサリュは洞窟を訪れた。祝いの地と呼ばれるその中を迷わないように注意して進むと、程なくして大きな空間に出た。

ゆっくりとサリュは壁沿いの灯りをともしていった。先日よりは

数が少ないが、半円状の光が自然の祭壇に灯る。

静かなその場の中央に佇み、サリュは瞳を閉じた。耳を済ませる。声が聞こえた。

彼女は小さく微笑んだ。

砂は一日、吹き続けた。

雄たけびが村に轟いたのは、煙った空を太陽が降りきる前の時間である。宿に戻り準備を整えていたサリュは、心を乱さずに外へ出た。

村の入り口にケツセルトが立っていた。背後には整列した兵達の姿が見える。

「日没までにはまだ早いと思いますが」

問いかけると、男は悪気のない表情で言った。

「すまん。日が落ちてからだだと、色々面倒になる。明るいうちにすませてたほうが楽だ」

「……我侂ですね」

「そついう男なんでな」

背後に、人々が集まる気配を感じた。村の人間が集まってきている。

「姉ちゃんっ」

聞き覚えのある声を無視して、サリュは男へ告げた。

「村の人達の保護を、お願いします」

ケツセルトは片眉を持ち上げたまま答えない。

「あなたから伺った条件についてですが、お断りします」

サリュはナイフを引き抜いた。

「それでも言うのなら、ご自分の力で従えてみては」

男が快活に笑った。

「なるほど。単純でいい」

傍らに立つ兵から長剣を譲り受け、一歩進み出る。

「今の台詞、忘れるなよ？」

「そちらこそ」

鞘から引き抜いた長剣を確かめるように眺め、顔を上げたケツセルトが荒ぶる砂に負けないよう、よく通る声を張り上げた。

「ツヴァイ帝国臣、ケツセルト・カザロの名において宣言する。イスム・クに生きる者、全てツヴァイの良民である。もし罪があるならばそれは全て我が罪である。その生命と財産は、必ず我が剣の誓いに守られるであろう」

驚きと困惑の気配が彼女の背後で生まれた。無理もない。水源の秘匿という重罪に対してどのような罰がくだされるかと思っていた村人達にとって、その沙汰はありえないほどの寛大さであった。波紋のようにざわめきが生じる、それを背中に感じながら、

「ありがとうございます」

そっけない感謝とともにサリユは駆けた。

疲れは完全に消えている。昨日よりもさらに鋭い強撃を、しかしケツセルトは余裕をもって受けた。一撃し、男からの反撃が来る前に、サリユは後ろ飛びに距離を空けた。

宙に身を置く刹那、彼女は思考した。

ケツセルトが持つ得物は一般的な長剣、ショートソードと呼ばれる歩兵用の剣である。見た目と打ち合った返りから察するところ、切れ味よりも打撃力と耐久度を重視したもの。男の体格なら片手でも容易に扱いうるだろう。本来なら盾や補助武器とともに用いられることが多いが、目の前の男はそのどちらも持っているようには見

えなかった。

とはいえ、それが有利に働くものかどうかはわからない。長剣を構えて自然にこちらを見据える姿勢には、はるかに高い男の技量を窺わせた。まずもって武器の間合いが違う上に、性別による単純な力の差は如何ともし難い。正面からまともに組み合っている相手とは思えなかった。

こちらが勝っている部分があるとするなら、俊敏性だろう。体格に勝る相手との立会いは、常のことでもあった。このまま接近と離脱を繰り返して男を焦らし、体力の消費を狙う。一瞬の間に、サリュはそう考えたのだが。

彼女が一步後ろに飛ぶ、それ以上の速さで男が迫ってきた。

気迫のこもった斬撃が斜めに打ち下ろされる。驚きに声を上げる暇すらなく、両手に構えたナイフの刃元近くでサリュはかるうじてそれを受けきった。その視界の右から、握った拳が腹部に向かって撃ちだされた。

左肘で受ける。激痛が走った。勢いを殺せず、そのまま彼女は吹き飛ばされた。それでもなんとか転ぶことだけは耐え、苦痛に顔を歪めたサリュを見て男が口元を緩めた。

「お、よく防いだな」

サリュは答えなかった。

戦慄している。ケッセルトが片手で繰り出した一振り、彼女の両手と同等以上の力だった。それをなんとか弾いたとしても、男にはもう一本の腕が残る。男の拳を受けた左腕は痺れきっていた。受け方もよくなかった。しばらく自由になりそうにない。

大人と子どもだ。冷静に彼女は考えた。

遊ぶようなケッセルトの態度に腹は立たなかった。実際、それを

許される程度の力量差があるのだと痛感する。ならば余裕も油断も、いくらでもしてくれればいい。圧倒的に劣っているのなら、必要なのはむしろ男のそうした傲慢さにあるはずだった。

しかし、馬鹿にした口調とは裏腹に、ケツセルトはあくまで慎重だった。口元は笑っていても眼差しは真剣で、不用意に踏み出すようなこともない。男は彼女から動くことを誘っていた。どんな一撃でも受けきる自信があるのだ。攻撃の直後なら、いくら素早い相手だろうと、剣は届く。

それはつまり、単純な速度ならこちらにも決して分がないわけではないということでもあるはずだった。わずかな勝機をそこに見出し、サリュは息を整えた。左腕は、もう少しかかる。今はまだ全力で走れば痛みがある。それでは相手を振り切れない。

「どうした、かかってこないのか？ なんなら可愛いペットを呼んだっていいぞ」

冗談ではなかった。あるいは、ケツセルトは自分には最低限の手加減をするつもりでいるのかもしれないが、だからこそそれ以外には容赦しないだろう。殺さないように、等という制限を押し付けられたクアルが殺されてしまうことだつて充分にありえる相手だ。タニルの男の居室に飾られた砂虎の毛皮を思い出していた。昨日の泉での一幕でわかるとおり、男と男の兵達は、明らかにそうした戦いに慣れていた。

握力が戻った。我慢できるほどの痛みを無視して、サリュは男へ掛かった。

刀身ではなく、わき腹を狙ってナイフを走らせる。右手一本でそれを受けようとするのを確かめて、彼女は空中で大きく切り上げる軌道に変化させた。剣の柄を握る、ケツセルトの指へ向けて刃先が伸びる。

「おっと」

男が右手を離した。手放された剣が宙に置かれ、かすらせるようだったナイフの刃があえなく空を切る。静止した長剣が地面へ落ち始める前に、ケッセルトは左手でその柄を握りこんだ。

容易く行われた軽業師のような曲芸に舌打ちする。今度は速度を落として後退するのではなく、横を抜けるように駆けた彼女を追いかけて、男の右腕が迫った。牽制でそれを払い、再び対峙する。

「危ね。容赦ねえな、おい」

「そういう女ですから」

「容赦ない女は好きだがね。容赦ない女に容赦なく迫るのもな」

互いの呼吸に変化はなかったが、消耗しているのは自分だけであるようにサリュには思えた。このまま男が徹底した待ちの姿勢を続ければ、派手に動き回るしかないこちらの体力が先に尽きるだろう。長期戦しか望みがないというのに、それすら封じられようとしている。じわりと焦りの気持ちが生まれ、彼女は覚悟を決めた。

短慮だった。繰り出された攻撃は、そう思われても仕方ない程に直線的だった。

斜めに切り上げられた一撃は、鋭さはあっても男には十分に防ぎ得るものでしかない。右手の長剣でそれを受け止め、ケッセルトが左腕を伸ばした。サリュは身をよじらせて逃げるが、反応はともかく、全力後すぐの行動にはどうしても無理があった。

ケッセルトの左手がサリュのまとった防砂具を掴んだ。男が嘆息するように言う。

「経験を生かさなかったのが敗因だな」

幾重に布を纏う防砂具は裾が風になびき、確かに戦闘には向かないものだった。昨日、それで二度も槍に縫い付けられて動きを邪魔された。

そして、その事実は当然、彼女の記憶にも残っている。

「生かさないと。思いますか」

その場でサリュは回転した。留め具を外された防砂具がただの布と成り果て、そのまま男の全身を包み込む。腰に備えたもう一本のナイフ　右手に構えるものより刀身が長いそれを空いた左で逆手にとり、サリュは視界の塞がれた男の脛に向かって振り下ろした。

勝利を確信したそれが、虚しく空を切った。

防砂具が地面に落ちる。そこにケツセルトの姿はなかった。

「……今のはやばかった」

さすがに引きつった表情で、数歩を遠のいたところに男は立っている。

両手に長さの異なるナイフを構え、サリュは硬い表情でそれを眺めた。

たった今見せた男の挙動は、あるいは彼女以上の機敏さのそれだった。必ず勝負をつけるはずだった、一度きりの奇襲もかわされてしまった。

「最初から狙ってたのか？　いいね、ますます気に入った」

ふと、何かに気づいたケツセルトが空を仰いだ。

「砂が止んでやがるな。お前さんの仕業か？」

答えずに、サリュは駆けた。

両手にナイフを構えている。この場合、それで殺傷能力がどうこうという話ではなかったが、男が素手を向けてくる、それに対抗する手段としては有効だった。

一方のケツセルトも、今度は一転して自ら先手を打ち始めた。長剣を片手で、時に両手で扱い、決してサリュに劣らない速度で打ち

込む。力、技量ともに勝る男が一旦攻勢に出れば、斬撃を一本だけでは防ぎ切れず、彼女は二本目のナイフで守るのに精一杯だった。状況は明らかに彼女に不利だった。勝っていたはずの俊敏性でも同等以上のものを見せつけられ、じり貧に追い詰められる。長短二本のナイフを駆使した防御にも限界があった。

風向きを読みながら地面を転がったサリュユが目を閉じ、すぐに見開いた彼女の背後から不意に強風が吹いた。無数の砂粒を顔面に受けたケツセルトが顔を背ける。その隙を突いて放たれた一撃を、ケツセルトはこともなげにかわしてみせた。目を閉じたままの状態で。

……そんな。はじめて彼女の口から弱音じみた喘ぎが漏れた。

「おい……洒落にならんぞ。偶然にしても、出来過ぎじゃないか？」
すばめた目の端を拭いながら、男が言った。

サリュユは唇を噛み締めた。対峙すればするほど相手との差が思い知らされる。それどころか、彼女にはまだ男の底さえも計れきれずにいた。

これ以上は相応のリスクをとらねばならなかった。自身が敗北する、あるいは手酷く負傷する危険性を踏まえ、彼女が次の行動にどのような直前、朗々とした声が響いた。

「タニルの兵よ！」

ファラルドの声だった。視線を巡らせようとしたところでケツセルトの攻撃が迫り、すんでのところまでそれを捌いた。

「なんだ、ありゃ」

男の隙にナイフを打ち込んで、かわされる。

「お前の差し金か？」

「……知りません」

実際、男の行動は彼女にとっても全く予測していないものだった。意図が掴めないが、それに目の前の男の意識が少しでも囚われるなら好都合だと考える。

しかし、実際に男の発言に衝撃を受けたのは彼女の方だった。吹き荒れる砂嵐に負けない声量で、ファラルドは言った。

「全ての罪は私にある！」

彼女は身体ごと振り返った。

そうせざるを得なかった。せつかくケッセルトから村人の安全を保障する言葉を引き出し、問題を個人同士の決闘にまで落とし込みまでしたというのに。それまでの行為を全てご破算にする口上をやめさせようとしたところで、後ろから男の舌打ちが響いた。

同時に濃密な殺意。身をかわす間もなく二本で受け止める。振り下ろされた一撃に、正面から受け止めた刀身が折れなかったことがサリュには奇跡のように思えた。それほどまでに本気の打ち下ろしだった。

「つまらん」

不機嫌そのものの表情でケッセルトが吐き捨てた。

「おい。もういいぞ」

サリュは眉をひそめる。

「何がですか」

「私は貴重な資源である水と塩を隠すよう、長に強要した。その上で、一人だけ助かるうとそれを街に密告した。村と街、全ての罪は私にあるのだ！」

「……意気に免じて、芝居じみた一幕まで打ってやったがな。ああも潔く宣言までされてはどうにもならん。お前の落としどころにも興味はあったが、あれでは無理だ。俺はあの男を処罰しなきゃならん」

単純な力では負けているのに、押し切られない。会話の為に剣を重ねた形で、至近に鋭い視線が睨みあった。

「約束が、違います」

「俺の破ったことか？ そっちの不手際だろうが。賢しげに交渉の真似事してみせるなら、まず手前の駒の把握をしっかりとっておくべきだったな。お前にけつたいな喋り方の手ほどきをしたやつは、そんなことも教えなかったのか」

じわりと刃が押される。渾身を込めてそれに対抗するサリュを、冷え冷えとした視線で見下ろして男は言った。

「あの男の言い分をこの場にいる全ての人間が聞いている。後からここにやってくる連中のことを考えれば、禍根を残さないために処刑は確定だ。この場を収めるには、どうしてもあの男の命がいる。お前のやったことは無駄だったわけだ。やれることもない いや、もう一つくらい残ってるか？ とにもかくにも、ご苦労なこつた」

ケッセルトの全身が膨れ上がった。そう錯覚するほどの力を込められ、あっけなくサリュは吹き飛ばされた。地面に転がる彼女に背を向け、ケッセルトはファラルドへと一歩踏み出した。

サリュはナイフを構えた。投擲の構えをとり それを成し得ずに腕を下ろす。ケッセルトの背中にはあまりに無防備だった。投げれば容易に突き刺さると確信できるほどに。それでは何の意味もなかった。

男に気づいたファラルドは声を張り上げるのをやめ、相手が近づくの待ち受けていた。砂の垣間にその表情が見て取れる。穏やかな顔だった。死を受け入れたような。

ふざけるな。声によらず、彼女はその男の態度を憎しみにも近い感情で罵倒した。

一人の男が全ての罪を被って処罰される。確かにそれで問題は解決される。村は自分達の罪を全てなすりつけ、街はその人間を罰することで面子をたもち、施政者としての地位を改めて確立する。一人の犠牲のうえに両者の立場は守られる。

だが、それでは残されたセスクはどうなる。サリュはその姿を探した。呆然と、目の前で次々と起こっている出来事についていけずに少年は立ち尽くしていた。その周囲にいる村人達とともに、声もなく事の推移を見守っている。

父親が犠牲になった平和など、セスクが喜ぶとは思えなかった。泣き、嘆き、少年はケツセルトを憎むだろう。復讐の為、剣を手にとるかもしれない。それを哀れには思っても、もはや彼女にできることは何もなかった。

そうではなかった。ケツセルトの言葉を思い出す。やれることは、確かにあった。

声が響いた。砂が、彼女の知る声で囁いている。

考える、とその声は言っていた。その意味は自分で考える。サリュ。彼女の名前を。選べ。

死の砂の魔女。

立ち上がり、彼女は歩き出した。徐々に足が早まる。わざとかと思っほどゆったりとした歩調のケツセルトに即座に追いつき、その隣を過ぎる時、視界の端で男がかすかに笑っていることに気づいた。

サリュはファラルドを刺した。

吐息が漏れる。全身が強張り、微細に震えるファラルドが寄りかかってきた。抱きかかえるように身を寄せ、そのまま崩れ落ちていく男の声が耳に届いた。

「ああ。最後まで……すまねえな。やつかいなもんまで、あんたに渡しちまう」

セスクと目が合う。

砂が止んだ。

エピローグ

程なくして、先遣隊の出発後、周辺の状況を見定めた上でタニルを出た一団が到着した。隊を指揮してきた小柄な中年の男は、自らの上官にむかって皮肉のこもった口調で言った。

「ご活躍だったようですね」

そうでもないさ、と男は肩をすくめた。

「寝物語に女に聞かせるような話なら幾つかできたがな。聞きたいか？」

「遠慮します」

鼻を鳴らし、ケツセルトは目の前の光景へと意識を戻した。

日没前の集落には、駐留の準備を進める男の兵と、それに狩り出される村人達の姿があった。村人達の顔色は一樣に暗い。まあ、征服されて喜ばれるようなことは滅多にない。反抗の気配をむき出しにされないだけ、首尾は上々と言うべきだった。

視線を感じて顔を向ける。一人だけ、敵意のこもった視線を向ける相手がいた。

村の子どもだった。名前はなんといったか。この一連の出来事であつた一人だけ出た犠牲者の家族が、激しい感情を秘めた双眸で男を睨みつけていた。

男は動じなかった。その視線の焦点が、自分を通過した先で結ばれているのを理解していたからだつた。

村の罪を背負つた男は、流れの旅人に殺害された。両者の間にとつたような経緯があつたかはわからない。そういうことになった。旅人は凶行に及んだ後、そのまま逃亡している。もちろんこれも、実際には手を出さなかつたわけだが。

少年の感情はまずその旅人へと向けられていた。落ち際に大地を射す夕日の、その黄金色に染められた意思がこの後どうなるのかについて、俗っぽい興味ならあった。

黄金は錆びない。それは重く、深く沈み込む。砂の持つ黄土色に似て決して異なる輝き

まさに人の業だ。多少の感慨をもって男は思った。喜ばれ、祝い呪われ、それ故に誤解も生み、争いを助長する。功罪というにはあまりに負が大きすぎる、しかしそれでも人はそれから目をそらすことができない。

だが同時に、その憎悪が少年を生かすことになる。自分の身内を殺した人間が、どこかで生きている。それを憎く思えばこそ、焼け鉢の復讐などに身を投じることはなくなる。死ぬなら、まずあいつを殺してから。あの少女が願ったとおりに、それは生きる為の理由にも成り得るのだった。

いずこかに去った旅人を思いながら胸に灯った種は成長する。根を張り、やがて実をつけ、頭を垂らすまで。それがどのような形で地に落ちるか、神のみぞ知るといったところだろうが。

哀れには思わなかった。村の罪を背負って死んだ男も、全ての業を背負って去った少女も、その黄金に魅入られた子どもも。成り行きとはいえ、集落の敵意を外に向けさせるためにそう仕向けたのは自分なのだから、腐ったような同情を抱くことはなかった。

実際、男の思考は既にこれからについて向けられている。

「キーチェン。速使を出せ。こつそりとな。いつまで隠し通せるわけでもないだろうが、少しでも努力しておく意味はある」

「は」

「内容は短くていい。詳細は、追って伝えと。直の報告には俺が

出向く」

男の言葉に、副官は大きくは驚かなかった。かすかに持ち上げた眉だけが、その内心を表していた。

「自ら行かれるので？」

「それだけの価値はあるだろう。向こうじゃ、久しぶりに顔をあわせた相手もいる。面白い土産話もできたしな。ああ、楽しみだな、キーチエン。天秤が動くぞ。これはちよつと、凄いいことになる」
自らの能力に絶大な自信を持つが故の、燎原の火を望んで止まない態度だった。獰猛な笑みを浮かべる上官に、男は深々と頭を下げてその忠誠と敬意を表した。

辺り一面が黄金に染められていた。

落ちかけた日が地平にかかり、世界の全てにその色であることを強制していた。黄土色の砂はもとより、水も、緑も、人の身までが塗りつぶされている。見下ろした衣服に映しこまれた黄金色には朱が混じり、それが血の色を連想させて彼女は顔をしかめた。

隣を歩く砂虎が気を遣うように身体を寄り添わせてきた。手綱を引かれるこぶつき馬は、いつもと変わらない半眼で黙々と足を進めている。一頭と一匹の連れの、どちらの態度も彼女には嬉しかった。

立ち止まり、後ろを振り返る。生い茂る緑とその奥にある小さな集落は、当然のように黄金色に埋没していた。

布防具に巻かれていない頭部の、晒された素顔の中で不可思議な輝きを放つ瞳が、わずかに歪んだ。

一切の想いを吐き出すことなく、彼女は再び歩き出した。主人の気持ちを代弁するかのように若い砂虎が大きく咆哮する。それに応える声はなく、ただ風が哭いていた。

黄金の稻穂 完

プロローグ

その惑星において、砂は天を舞い、地を流れ、人を逐うものである。

地表を覆う黄土の群れは手に摘めば微細な一粒でしかないが、しかしそれこそがこの星に生きる全てのものの在り方を決定付けていた。

砂は命を生み出さない。

万物の生命の母が水であるということはこの時代においても既に知られていた。不定期に湧き、枯れる水源で、いったいどのような経緯をもって生命が発生したのか、それについて議論も多くなされている。それらの中で最も一般的に信じられていたのは、大水源と呼ばれる希少な水源の存在が深く関わっているという説である。

明日にも枯れるかもしれないという不安定な水源がほとんどを占める中、大水源とその下流にだけは安定した水が約束されている。現存する最も古い時代の記録にすでにその存在が確認されている通り、その水源の在り様が生物の繁栄を促した事実については疑いようがない。それらは基水源と呼ばれ、人類及びその他の動植物が息するための地盤となった。

一方で、ただ基水源の存在だけでは生命の誕生について語ることはできないと唱える者もいた。彼らは、むしろ基水源とは「何かが起こった後に残されたもの」なのではないかと言う。真の意味で始祖と呼ぶべき生命が生まれたのはそれ以前、つまり今の世界の在り方とは違った環境が過去にはありえたのではないか。

彼らはその証拠として挙げるのが、流れる砂、砂海の果てに集まる漂流物の存在である。

流れがあるからには終わりがあり、一時的にせよそれらが溜まる場所もある。砂漠で果てた動物の死骸や枯れはてた植物の他に、岩層などの砂とは異なる地質の欠片が大小に渡って流れ着き、ぶつかりあい、盛り上がって他にはない奇観が様々な場所で現れる。そこには貴重な鉱物類も多く含まれていることもあり、また砂海の境として一目でわかるものでもあるため、航路として使われることとなったが、少なくともその流れ着く地質の存在は砂中にある砂以外の物質の証になった。

あるいは太古の昔には、この地表が砂に覆われていない時代もあったのではないかと、学者達の想像は大いにかきたてられたが、その仮説を証明するまでの学論は未だない。逆に言えば、どれほど突飛なものもその全てを否定はできなかった。とはいえ、現時点で有力な学説として語られるのは、水陸で最も信仰される一宗教の観念が多く含まれるものになっている。

そうした学者達と異なる視点で日々を生きる者達には、また違う見解があった。

彼らにとつて、生命の誕生やこの惑星の在り方になどなんら意味はなかった。彼らは遠い過去や遙か未来に生きているわけではなく、今この時を砂に吹かれて生きているからであつた。

必要なのは事実ではなく真実であり、客観的なものではなく、主體的な経験と物語りが人々の世界を形作っている。その最も顕著な例が、宗教の東西を問わず似たような意味で語られる自然現象である。

死の砂と、それは呼ばれている。

切り立った崖の狭間に伸びる細い道を駆ける一人の男がいる。

一般的な防砂具に身を包んだ男だった。頭部から足の先まで幾重に布を巻いたような格好は、砂の侵食を防ぐとともに夜間の防寒の為でもある。当然、通気性は悪くなるので昼間は意図的に緩めて着崩すこともあるが、その男がほとんどはだけるように外套をなびかせているのは、そうした理由からではなかった。

男は追われていた。その背後に迫るのは馬に跨った複数名の姿で、一見して野盗の類とわかる輩だった。

広大な砂海の中で人が通る場所は限られる。それがすなわち航路と呼ばれる存在で、当然それを狙って悪事を働く連中も集まってくることになる。特に、砂海の漂流物が流れ着いて険しい地形と化するような場所ほど物騒になった。見通しの悪さが、不意の襲撃を受けやすくするからであった。

男もそうした襲撃を受けた被害者の一人だった。懸命に手足を交互に振りながら、悪罵を向ける。怒りの矛先は航路に出る前に雇った護衛に向けられていたが、遠く背後の砂の上で喉を切り裂かれて死んだ当の護衛人には恐らく異なる主張があるだろう。この道を通るのは止めた方がいいという忠告を聞かずに断行したのは雇い主の男本人だった。

こんなことなら、どこか大商人の商隊が通るのを待って、その尻尾にくっついていけばよかった。隊列を組み、多くの護衛に周囲を見張らせる彼らを襲おうとする盗賊はまずいない。後悔の想いは、いまさらのことではある。危険を踏まえた上で、男は行動したはずだった。

しかし、砂海の商いに身をやつす者として、危険はむしろ当然のことでもあった。男は一介の行商人であり、そんな彼が儲けを出すために周りと同じことをしては埒があかない。大商人の後ろにくっついていては、飲み干された水場しか残されないというのは常識だった。

故に、誰もが多からず少なからず、賭けに出る。それに打ち勝つたものが巨万の富を得て、外れをひいたものは軀となって砂漠に骨をさらす。砂海の商人とはつまりそうした存在である。

男はその賭けに負けたのだった。だからといって、すぐ傍に訪れようとしている死を淡々と受け止められるものではない。

「誰か」

息が切れ、言葉はほとんど飛ばないうちに掻き消えた。それでも足を止めるわけにはいかない。野盗達はまだ追いついてきていない。追いつこうとしていないのだった。肉食の猛獣が故意に獲物を追いつ立てる稚気を見せていたぶるように、野盗は逃げ惑う男の姿を嘲笑っていた。

かまうものか、と男は思う。如何に見苦しかろうが、命はたった一つなのだ。一秒でも長く生きれば、生き残る機会が訪れる可能性はある。命乞いだろうが泣き落としだろうが、使えるものはなんでも使ってみせるのは商人という生き物でもあった。

少しでも足を進めれば、どこかの商隊に追いつけるかもしれない。こうしているあいだに砂嵐が吹いて逃げ切れるかもしれない。その為にも、今は少しでも無様に逃げ惑い、野盗達が飽きないように努力するべきだと考えていた。必死な芝居を打ちながら、男は逃げた。

男は特別な信仰を持たない。商いこそが彼の宗教だった。今、この場で命を助けてくれるのならいくらでも宗旨替えをするつもりでいたが、もちろんそのような不信心に応える神はなかった。

男に応えたのはもつと別なものだった。

遠吠えが響いた。

この世に存在する全ての不吉さを含めた咆哮に、男は思わず足を止めた。あわてて周囲を見回す。馬に乗った野盗達も同じように、警戒した表情で周囲に気を配っている。

彼らの態度は当然のものだった。先ほど響いたのはそれだけの意味を持つ凶兆である。

砂虎。砂海に生きる生態系の頂点に位置するその獣は、砂を渡る人間にとつても災厄でしかなかった。成長すれば一丈にも届く巨体に似合わぬ俊敏性を併せ持ち、獲物によっては徒党を組んで襲う程度の知恵も持っている。大商隊といえども油断のならない、交渉の余地がないことを考えれば野盗などよりも遥かに性質の悪いのがその生物だった。

その恐るべき砂海の猛獣の雄たけびが、高らかに鳴った。このようなれば人間同士の争いどころではない。行商人の男と野盗達は、ともに周囲に警戒し、その姿を探った。

「上だ！」

野盗の一人が悲鳴とともに指差す。顔を上げた崖に男はその姿を目撃した。

黄色と砂の毛皮に包まれた大柄な肢体。堂々と下界を見下ろす様は、この場における彼我の優劣さをそのまま示していた。砂海の王者と呼ぶのにふさわしい風采。砂虎の遠い眼差しが自分を見据えているように見え、男はいつのまにか口の中に溜まっていた唾を飲み込んだ。

まさか砂虎にでくわすとは。どうする。この隙に逃げ出すか。いやしかし、砂虎がこちらに掛かってきては困る。いざという時に盾にする為にも、今は野盗達の側を離れないでおくべきだ。そんな

ことを考える男の耳に、野盗同士のやり取りが届く。

「こいつをぶつ殺して逃げれば、そっちをあさるんじゃないか？」

「……馬の方が狙われるかもしれんが、釣ってみる価値はあるな」

「ちょよ、ちょよとまった！」

慌てて男は彼らの会話に口を挟んだ。

「あいつら、他にもまだ群れてるかもしれない。俺を殺すなら、それを見定めてからでもいいんじゃないか？」

群れて住む動物ではないのに、狩りでは複数匹が示し合わせたかのように連携をとることもある狡猾な砂虎であるから、男のその場しのぎの弁解にも説得力はあった。考え込むように視線を交わしあう野盗達に、男はさらに語った。

「奴らは頭がいい。自分達が不利な狩りは決してしないはずだ。頭数は揃えておいて間違いない」

「ふん。まあそうだな」

頭役の野盗が頷いた。

「ならせいぜい、仲良く谷を抜けるとしようか。ただし、商人。先頭はてめえだ」

いざという時に生け贄にしようという魂胆だが、男に不満はなかった。前はともかく、左右と後ろについて野盗達が目を光らせてくれることになるのだと考えることにする。

前に砂虎、後ろに野盗。ひとまず自分が打ち捨ててきた積荷へと戻る道すがら、依然、進退窮まる状況に違いはない。愛想よく薄ら笑いを浮かべて集団の先頭に立ち、なんとか両者を食い合わせる策はと考えを巡らし、ふと気づいた。

崖の上の砂虎が姿を消している。かわりに、前方に誰かが立っていた。

旅の人間だろうか。小柄な体軀を防砂具で念入りに覆っている。商人には見えないのは、こぶつき馬を連れてはいても荷車を曳いて

いないからだつた。護衛の人間と考えるのが妥当ではあるが、それなら一人、馬という理由がわからない。

しかし、そうした考え事はこの際どうでもよかった。男にとっては紛れもなく、その存在は救いの手になりえる。その人物の近くに商隊があるにせよ、ないにせよ。

男は大声をあげた。

「その人、危ないぞ！ 助けてくれっ」

後半の言葉には、二重の意味が込められている。

彼ではない。

遠目にただけで判別がつき、目深に被った大外套の下でサリュは嘆息した。

とはいえ、落胆はない。彼女は人探しの旅の途中であり、誰かが襲われている悲鳴を連れが聞きつけ様子を見に来たのだが、そんな情けない声をあの人物が出したところは見たことがなかったし、そうする姿も想像できない。それでも万が一にと、確認に来ただけのことだった。

視界には四人の男達の姿があつた。馬に乗った三人は野盗の類だろう。その男達に突っつかれるようにしているもう一人が、悲鳴の主らしい。商人、あるいは逃げ出した護衛崩れかもしれない。

かかった声に応えず、身を翻して彼女は歩き出した。あわてた様子で声が追いかけてくる。

「お、おい。ちょっと待て！ さっき聞こえなかったのかつ、近くに砂虎がいるんだつて！」

もちろん、聞こえたとし、知ってもいる。だからといって恐れる道理がないことまで答える義理もなかった。そのまま歩を進めると、背後に近づいてくる気配を感じた。

「おい、あんたっ。聞こえないのかよっ」

まあ、そうだろう。野盗に襲われ、今にも殺されようとしているのが相手の立場なら、通りがかつた人間をそのまま見過ごすようなことをするはずがない。彼女はちらりと隣のこぶつき馬を見た。どうしようか、と目線で訊ねてみるが、相手はいつものように達観した眼差しで遠くを眺めて答えない。砂虎とは違った意味で澄んだその瞳を見ながら、彼女は息を吐いた。仕方ない。足を止め、振り返る。

砂漠に水場を見つけた表情で、男が近づいてくる。その後ろをゆつくりと馬を進ませてくる野盗の姿をちらりと眺め、彼女は低くかすれた声音で言った。

「なにか」

そっけない言葉に、男がきよとんと瞬きする。はだけた防砂具から見える素顔が一瞬、若く見えた。髭がないせいかもしれないが、自分とさほど変わらないかもしれない。

「え。ああ、いや、砂虎だよ。聞こえたる？ 一人でいちゃあ、危ないって」

砂虎が危ないから、野盗と一緒にいると言う。少なくとも彼女にとつては、前者より後者と共にあるほうがよほど面倒だった。

醒めた瞳を大外套の奥に隠し、サリュは言った。

「商人ですか」

「ああ。あんたも？ それとも商隊の人かい」

期待にうわずつた声を無視して、彼女は周囲を取り囲むような野盗達へ視線を移した。

「早く積荷を取りにいった方がいいですよ」

三人の中で、恐らくまとめ役だろう髭面の男に告げると、男は精悍な顔つきを歪めた。頬についた刀傷が笑う。

「なんだと？」

「さきほど通りかかってきました。まだ砂群にはあさられていませんでしたが、いつ彼らがやってくるかわかりませんし、それに。すぐに大勢がやってきます」

探るような視線が彼女を見た。

砂群とは砂海に生きるコボイと呼ばれる生物である。群れを成し、集団で襲い、強者には立ち向かわない。狡猾さの点で、砂虎とは違った意味で砂を渡る人間にとってはやっかいな連中だった。彼らは浅ましく、執念深い。食べ物ではないとわかった後の積荷まであさられることもあった。打ち殺して捌いた腹の中から、未消化の異物が取り出されたという話もある。

もちろん、野盗達をより警戒させたのはその砂海に生きる獣のことではなかった。

男は油断のない眼差しで彼女の身なりを確かめている。手慣れた旅装に、こぶつき馬。それを曳く荷には最低限の物以外、商品になりそうなものは含まれていない。商人でも野盗でもない人間が、一人でこんなところにいるはずがない。彼女の狙い通り、慎重な野盗はそう判断を下したようだった。

ふんと鼻を鳴らした男から、わずかに警戒の気配がそがれている。「面倒ごとはごめんってか？」

「そこまでの仕事はもらっていません」

「なるほど。ガキのくせによくわかつてるじゃねえか」

「お、おい、ちょっと待てよ。何を勝手に、人の積荷のことをさ」若い商人が言うが、それは野盗達の耳には届いていないようだった。彼女にしても、取り合うつもりはない。

「いいだろう。見たところ金目の物も持ってなさそうだし、それで手打ちにしてやる。ただし、後の連中に余計なことは言つなよ」

黙ったままサリュが首肯するのを見て、男は満足げに頷いた。

「おい、行くぞ」

不満そうな二人を連れて去っていく。

話のわかる人間でよかった。男が自分のことを商隊の斥候だと信じたかどうかはわからないが、もしも本当にそうであった場合と、二人の人間に刃向かわれるリスクを考えただろう。損得を考えるのは何も商売人ばかりではない。砂に生きる者なら、自然と引くべきところを弁えている。

「おい」

野盗達を見送りながら、怒りのまじった声に彼女はそちらを振り向いた。若い男が眉を逆立てている。

「なに勝手に人の荷物を交渉に使ってんだ」

瞬き一つ分だけ思考して、彼女は答えた。

「命が助かったのだから、いいでしょう」

「いいわけあるか！」

怒鳴り声に冷淡に告げる。

「なら、今から追いかけては？ 私は止めません」

そもそも、こちらを巻き込もうとしてきたのは男の方なのだ。命を救ってやったとまでは言わないが、それで怒鳴られる筋合いはなはずだった。サリュはこぶつき馬の手綱を曳いた。少し歩いてから、その前に男が立ちはだかったのに足を止める。

「……まだ何か」

睨むようにした男が、ふと表情を和らげた。

「いや、悪かった。確かにあんたを引き込もうとしたのは俺だ。とりあえず命が助かったことに礼を言わせてくれよ」

言いながら、そのまま道を空ける気配がない。

「それで？」

「ああ。あんた、本当に護衛の人なのか。少なくとも、商人じゃないよな？」

確信を持った眼差しだった。彼女が答えないうちに男は続ける。

「なら、商談だ。あんた、俺の護衛にならないか。今の倍、払うよ」
何を言い出すかと思ったら、馬鹿なことを。大方、荷物を取り返した上での出来高払いで言うつもりなのだろうが、そんな言葉にのる人間がいるはずがなかった。

「前払いの料金も支払えるようには見えませんが」

護衛の仕事を請け負ったことならサリュにもある。そうした依頼では、成功報酬とは別に前払いが渡されることになっていた。

「ああ、そのとおり。だからそこは信用払いつてことにしてもらいたい。俺はメツチという、クアガイ商会の人間だ。これが身書。サハンコユ様からのものだよ」

焦っているのだろう。口早に言いながら、男が懐から羊皮紙を取り出した。

それぞれの土地には治水権に基づいた領主があり、多くの商人はどこかの組合に所属して商いを行う。その証となるのが商会を通じて発行される身書で、いわゆる身分証明だった。砂海で商売するには信用が大事で、顔の知られていない場所ではそれだけがその支えとなるのだから、命や積荷と同じく、彼らにとっては最も大切なものの一つである。

広げられた羊皮紙には、確かにメツチ、サハンコユという名前が見て取れた。ざっと見たところ、商売の許可を云々という文章に読める。細部までの自信はなかったが。

クアガイという名前にも聞き覚えがあった。確かトマスから南場を中心に交易路を持つ大商会だったはず。それを信用に前払いを勘弁して欲しいということだが、もともとそんな依頼を受けるつもりもない上に、図々しい物言いだった。

「商会に顔売れるぜ。この辺りで商売するなら、うちに顔が利くのはかなり便利だと思うけどな」

恐らくそれが切り札だったのだろう。しかし、彼女は護衛業を生業としているわけではない。男の台詞は完全に的外れていた。

一方で、男の思惑を理解していないのは彼女も同様だった。男が口早に交渉を進めようとする理由を彼女は勘違いしていた。

商売品を失くした男には同情するが、だからといって情けに流されるほどお人よしではない。今は特に、人と関わりたくない気分でもあった。強引に押し通ろうとして、彼女はふと男の様子が異なることに気づいた。笑っている。

「なあ。どうしても駄目かい」

サリュが答えないでいると、これみよがしに男がため息をついた。「そっか。ならしょうがない。……あんた、さっき命が助かっただけでもって言ってたろ。今後の勉強にさ、いいこと教えてやるうか」聞きたくもないが、不吉な予感があった。思わず足を止めた彼女へ、男は悪意ある笑顔で告げた。

「商人に取っっちゃ、積荷が命より大事な時だつてあるんだぜ。切羽詰ってたりなんかすると、特にさ」

まさか、と思い、それを止める間もなかった。

「なんだよ！ 商隊が通るなんて嘘なんじゃないか！」

わざとらしすぎる大声に、視界の隅で野盗達が振り返った。

立ち止まった野盗がこちらへと馬首を返す。舌打ちして、サリュは男へと詰め寄った。

「何を……」

「へへ。これであんたと俺は一心同体つてわけだ」

ひきつった笑みで男が言った。絶句の後に怒りが湧き起こる。交渉が無理だと知れた途端、強引にでも巻き込ませる。たくましさといえば言葉はいいが、ただ身勝手な意地汚さだった。

こんな男などうち捨てて逃げたいが、彼女が連れているのはごぶつき馬である。野盗達の馬と足で競って勝てるわけがない。背には荷も載っている。

「礼はするよ。一緒にさ、なんとか切り抜けようぜ」

それ以上言葉を交わすのも嫌になり、サリユは男から顔を背けた。

ゆったりとした足取りで近づいた髭面の男が、気だるげに馬上から彼女を見下ろした。

「商隊がどうしたつて？」

サリユは答えなかった。

今更、どう言葉を繕ったところで意味はなかった。この愚かな商人がやった行為はただ言葉の信用を失わせただけでない。暗黙のうちに取り交わした契約を破ったのだから、今更どう弁解しようとしたところで不可能だった。隣の男を突き出すのは容易いが、それで話が収まるわけでもない。

面倒な事情は野盗の男にとっても同じだろう。少なくとも、話を壊したのは野盗達ではない。非はこちらにあるのだから、彼女は申し訳なく思った。

「とりあえず、一緒に来てもらおうか。話は住み家で聞く」

当然、そうなるだろう。

サリユは天を仰いだ。心情を表した行為だったが、それだけではない。砂防具の下に指を入れ、思い切り息を吐く。甲高い指笛が響いた。

「……何の真似だ」

その場の注目が集まり、男達は誰も崖上に現れた影に気づかなかった。音もなく飛び降りる。傾斜の厳しさをものともせず谷底に降り立ち、四肢を張った獣が一声吠えた。慌てて野盗達が後ろを振り返った時には、既に彼らの眼前に凶器が迫っている。

一薙ぎとともに血飛沫が跳ねた。猛獣の接近に驚いた馬がいなき、乗り手を振り落とさん勢いで駆け出す。悲鳴がそれを追いかけた。追い落とされ、そのまま走るように逃げ出した後には、一撃で

絶命した一人と、腰を抜かした様子の商人だけが残っていた。

返り血に模様染めをした体軀を悠然と揺らし、若い砂虎が寄ってくる。

「ひ……！」

情けない声をあげる男を無視して近づいてきたその喉元を撫でると、ごろごろと機嫌良さそうに喉を鳴らした。

「ありがとう。クアル」

感謝しつつ、彼女の気分は優れなかった。砂海で命のやり取りが行われるのは日常のことではある。だが、これは避けられたはずのものだった。気分がいいはずがない。

地面にへたりこんだ商人へ冷たい一瞥を向け、砂虎とこぶつき馬を連れて歩き出す。

「ま、待ってくれ！」

声を無視するが、再び男が前に立ちはだかった。サリュは大外套の奥から険悪な声で言った。

「いい加減にして」

はつと男が表情を改める。

「女？ あんた、女の人のなか」

「いい加減にしてというのが、聞こえなかったの？」

彼女の剣幕を察知した砂虎が同調するように唸り声をあげる。男があわてて両手を投げ出した。

「待ってくれ、さつきはすまなかった。こっちも必死だったんだよ！」

「早く積荷を取りにいけばいいでしょう。これ以上、関わらせないで」

「いや、礼をするって言ったんだ。ちゃんと受け取ってもらわないと、商会の名前に傷がついちまう」

まるで本気でそう思っているかのような真剣な表情に、彼女は呆

れた。

商人らしからぬ、あるいは信用を大事にする商人だからこそその発言かもしれないが、同時に彼らがどんな時でも得を考える人種でもあるということは知っている。

「護衛の話ならお断りよ」

見透かしたように言つと、若い商人は口元を引きつらせた。やはりそんなところか。

「まあ待つてくれ。話を聞いてからでも遅くはないぜ」

「話を聞いているうちに日が暮れるわ」

砂虎の恐れではないが、夜が訪れる前に野営場所を探さなければならぬ。地面の安定ということではこのあたりは問題なかったが、だからこそ先ほどのような連中も多いはずだった。

にやりと笑みを浮かべ、男が言つた。

「だから言つてるのさ。このあたりは普段からよく回つてる。ここから一番近い野営どこだつて判るし、穴場の類も知つてる。普通の奴が通らないようなところだつてな」

さりげない一言に、少なくとも表面上から得られた感触はないはずだった。頭巾つきの大外套を目深に被つた彼女は男と目線すらあわせてはいない。それでも男は脈ありとばかりに笑みを強めた。

「何か理由ありなんだろう。情報を取り扱ふのだから商人だ。手伝えることだつてな、あると思うんだよ」

得意げな口調を不愉快に思い、彼女は頷き一つすればすぐに相手を噛み殺しそうな姿勢でいるクアルの額に手を置いた。熱を帯びた体毛を撫でながら、空を見る。

白い鬩りのない蒼天には砂の濁りも少なく、ただ乾いた遠さだけが永永と続いていた。外套の隙間から二重の環を持つ瞳で仰ぎ、青色を取り込むようにしばらく空を見上げ、顎を引き戻す。

緊張した面持ちでこちらを見る若い商人に、彼女は小さく頷いた。

男の放り出した荷を取りに戻ると、仲間を猛獣に殺された野盗達は一目散に逃げ出しており、手付かずのままコブつき馬が暇そうに立ち尽くしていた。砂虎を連れて近づくと、さすがに暴れだす。

サリュの連れるコブつき馬は慣れか、生来のふてぶてしさなのか、日頃から怯えた反応をまるで見せないが、砂虎とは本来そういった生き物である。彼女はクアルの喉を撫で上げ、そのまま誘導するように崖上へと腕を伸ばした。心得た砂虎が別れを惜しむように頭を擦り、それから新参の連れ者に威嚇の唸り声を発して駆け出す。重さを感じられない軽快な足取りで崖を上る姿に、気が抜けた声で男が言った。

「大したもんだなあ」

歩き出したサリュの隣に馬車をつけて、声を掛ける。

「なあ、こつちに乗ったらどうだい。あんたの馬も繋げてさ、二頭曳きにすればいい」

簡単に男は言うが、多頭曳きには馬同士の相性もあるし、片方だけ負担がかからないようにするのも訓練がいる。乗り手の技量も同じだった。そうした面倒もあるし、そもそもがこの相手を信用したわけではなかった。サリュは冷たい声音で告げた。

「同行はリスールまで。それ以上は聞かないわ」

「わかってますって」

リスールはこの先にある比較的大きめのオアシスで、航路の途中にある水場によくある例に漏れず、人と物が集まって村のような集合体を作っている。男との交渉で、そこまでの護衛を彼女は引き受けていた。

「そうツンケンすんなよな。なら、荷物だけでも後ろに載せなよ。あんたのこの馬も、その方が喜ぶだろうぜ」

彼女は応えない。控えめに異議を唱えるよう、彼女のゴブつき馬が息を吐いた。

「つれないなあ。旅は道連れって言うだろ」

「そんなことより、野営先の場所を教えて」

リスールは今日中に着く距離にはない。どこかで野営する必要があったが、このあたりを通るのは初めてであるサリュはその検討を男に任せていた。それが男の護衛を引き受けた理由の一つでもある。まだ日は落ち始めたばかりだが、場所によっては急ぐ必要もある。こういった地形では闇に落ちてからの移動はよほどのことがない限り控えるべきだった。空の色が変わるまでに、着いておきたい。

「はいはい。とりあえず、ここを抜けてからだけだな。陽落ちの方向に向かったらステップに出るんだ。その辺りを遊牧してる部族がいる」

部族とは文字通り、家族を中心とした社会体系のことを指す。移動を前提としたこの世界で安定した水場を持たない、あるいは持とうとせずに生活する人々のことを特にそう言うことが多かった。一家族のみで形成される場合もあるが、多くは親戚や近縁の者達で集まっており、移動する小さな村ほどの規模になることもある。

彼らはそれぞれ自分達の縄張りを持ち、不安定な水場を移動しながら生活している。自衛の為の武力を併せ持つことから、人為的な意味での治水権を持つ領主の存在とは異なる意味で、その土地の有力者と言えた。

「元は東から流れてきたっていう、おっかない部族だね。野盗連中も近寄ろうとしないんだけど、うちの商会と関わりがあつて。安心できると思うぜ」

大商会故の人脈。地元で商うからこそその広い交友関係は、人との関わりを極力避けながら旅をする身分には望めないものだった。

部族という存在にも苦手な印象が強い。彼女は人が多く選ぶ道を外れて砂を渡ることが多いが、その途中で偶然に出会った部族の人

々からは決まって警戒を持たれた。人が通らないような場所にいるのだから、それも当然のことと理解はしている。だが、以前には弓矢まで射掛けられた経験もあったから、男の言葉を聞いて身構えてしまう。

「大丈夫だよ。俺だって何度か顔出してるし。証書だってあるから、ひっ捕まったりしねえよ」

気安く請け負う男をちらりと見ながら、サリュはいぶかしんだ。先ほどから、黙っているのにこちらの言いたいことをあてられることが続いている。顔どころか目も出していないのにどうやって探っているのか。それとも自分の気配はそれほど正直なのだろうか。交渉事や駆け引きに弱いということは、つい先日、身に沁みて知ったばかりだったが。

「それで、あんたの名前はなんてんだ？ 自己紹介はさっきしたよな、俺はメツチ。商人の端くれさ」

「……サリュ」

「へえ。いい名前だな」

注意深く様子を窺ったが、メツチという商人はその呼び名を聞いても特に反応を示さなかった。気安い態度で続ける。

「で、護衛もしないでこんなところを　ああ、待ってくれ。悪イ、聞かないって話だったな。じゃあ、あれだ。そっちから聞きたいことは？　それがあんたの報酬だろ」

サリュが商人と交わした契約ではそうなっている。それとは別に積荷の売り上げの幾らかという算段になっていたが、そちらについてはあまり関心がなかった。もともと人が多い場所に寄り付かない彼女にとって、通貨やその類には興味がない。報酬も、塩と食料でもらうことになっていた。

その代わり、護衛業を受ける場合には必須とされる前払いには、情報を求めた。決して安い報酬とはいえない。砂海を渡るうえで鮮度の高い情報は塩や水と同じく貴重だった。黄金の在り処という名

の小さな集落を逃げるように出てから、彼女は極力人との関わりを避けてきている。今いる航路も、往路に使った道とは異なるから、この地域に根を張った商人から周辺の話聞けるといふのは悪い話ではなかった。

だからこそ彼女も男の護衛を引き受けたのだった。個人的な感情はこの際関係ない。それでも声に不快な名残が表れてしまう程度には、彼女は幼かった。

「この辺りを回っているって言ったわよね」

「ああ。師匠から交易路の一つをゆずってもらってね。まだペーペーだけどな」

「その部族との交易路を、ゆずってもらったの？」

相手にもよるが、下手をすれば村ほどにもなる彼らとの商売は極めて大規模な取引口になる。それを新米の行商人に任せるといふのは、あまりある話と思えなかった。

まさか、と男は笑った。

「俺の師匠がね、まあずっと行商一筋の人だったんだけど、そろそろ腰もやばいってんで、商会から話をつけてもらって、奥さんもらって町にひっこむことになって。それで交易路をそれぞれ分けようって話になったのさ。俺がもらえたのはそのほんの一株。部族との商権なんてもちろん商会のお偉方が持つていつちまったよ」

行商人はそれぞれ自分の縄張りとなる行商路を持ち、そこを定期的に回って商いをする人が多い。

「あなたの商路は、この近く？」

訊ねると、メッチは微妙な表情を浮かべた。

「いや。近くっちゃあ近くだけど。……まあ、こんなところを自分だけ行商で通るヤツはいないだろ」

それはわかる。砂の流れで切り立った峡谷となったこの一帯は、航路としてはわかりやすくても、治安の悪さから避けられる類のものだ。ここを通るためには獣や野盗の襲撃への十分な配慮が必要と

なる。ある意味では、商隊を組み、護衛を雇える身分だけの独占路
と言えた。

「どうして一人で通ろうとしたの？」

「抜け駆けってやつさ。俺みたいな下っ端が儲けを出す為には、そ
れなりに無茶もいるからな」

「どこかに急いでいるの？」

「あなた、どつから来たんだ？ 話を知らないのか？ 最近、
枯れた東側で新しい水源が見つかったって話」

無言で彼女は首を振った。自然な態度を装えたと思うが、自信は
ない。ちらりと視線を投げてから、なんだ、とメツチが息を吐いた。
「もしかしたらタニルから来たと思ったのに。まあ、そうなんだよ。
タニルとトマスの中に、見つかったらしいんだ。水源が。どうい
うことかわかるだろ？」

緩められた防砂衣から覗いた瞳が輝いている。

「……商売のチャンス」

「そう！」

子どものような表情でメツチは大きく頷いた。

「どこもかしこも水源が枯れちまってさ、トマスとタニルはずつと
南周りの水路しか航路がなかったんだ。そこに砂漠を横断しての航
路が出来てみなよ。このあたりの商売はがらりと変わるぜ」

それだけじゃない、と熱っぽい口調で続ける。

「水源が一個見つかったってことは、それ以外にもまだ沸いてる水
場があるかもってことだろ。東じゃあ航路がすたれて集落が潰れて
いって、今じゃほとんど人がいなくなってたけど、これからは噂を
聞いてどんどん人が戻ってくるはずさ。もし本当なら、もう、とん
でもないって！」

人は水なしに生きることができない。移動式の住居で遊牧する部
族達にも、当然拠点となる水場が必要となるから、どうあっても生
態圏は水の行き届く範囲内に収まってしまふ。

だからこそ、新しい水場が見つかるというのは可能性の固まりだった。新しい航路。新しい人々の集まり。そこには当然、商売の機会も多く生まれる。手付かずの航路とは商人にとってまさに宝の山なのだった。

商人ではないサリュにも、その興奮のいくらかは理解できる。だが、内心では冷えた心地が乾いた風を吹かせていた。

「だから俺、一刻も早くその新しい水源のあるところに行きたいんだよ。大商連中が来る前なら、銀貨どころか、金貨になりそうなお話にだってありつけるかもしれない」

「そう」

熱のない相槌に、男が怪訝そうな視線を向けてくるのを感じながら、彼女は脳裏に思い出していた。金貨。金、黄金。その色に包まれた集落と、そこに生きる人々。憎しみを込めてこちらを見る双眸。黄金の業とその意思。あの男は、そう言っただろうか。

息が漏れた。

あの集落を出て一月近くになるが、そこで体験した出来事は強く彼女の中に残っている。あるいはこの先ずっと夕日を見る度に思い出すことになるかもしれない、それを悔やみはしなくとも、やるせなさはあった。

気分が沈む。訊くべき質問はまだほとんど出来ていなかったが、今は口を開くことも億劫に感じてしまっていた。

なにやら話し続けている男の言葉を適当に聞き流し、サリュは黙したまま足を進めた。

峡谷を抜けた先には、岩地の砂漠が青空の下に広がっていた。

ひび割れた地面のあちこちにはまだ短草の名残が見える。日陰にはまだ薄茶色の枯れ草が揺れているのが、最近まで水が近かった証だった。

ステップと呼ばれる短草地帯にそうした岩肌を覗かせる場所が多

いのは、植物の自生には砂より高い保水性が求められるからだ。あとは水源に恵まれるかどうかであり、そればかりは自然の差配頼みになる。雨季という極めて限られた期間に訪れる恵まれた気候以外、最も一般的な水源、水島と呼ばれる不定期の沸き場の近くでは、比較的安定した場所でも乾土と草原の風景が繰り返されるのが常だった。

とはいえ、砂海ではまだ生きるに易い場所であることには変わらない。穏やかな砂の流れにあって、こうした地形を拠点に遊牧して生活するのが部族と呼ばれる人々だった。

やや低い位置を緩い上下で連綿と繋がる砂と黄土の光景を視界にふと小石の欠片の落下を感じて振り返れば崖上からクアルが降りてきている。つかず離れずの距離を保ってくれていた頼もしい護衛の労をねぎらいながら、彼女は天頂から落ちかけた太陽の方角を眺めた。きつい日射の向こうには特別な何かは見えない。視界の限り、人の営みはなかった。

日没まであと二刻といったところだった。遊牧部族の居住は今ある水場によって大きくその場所を変えているだろうから、今日中に合流できるかどうか。最も、この辺りが部族の勢力下というなら野盗の類も活動には慎重になるはずだった。最悪の場合は野宿することになる。

「まあ、あっちの方で見つけてくれると思うけどな。この時期はそう遠くに家を張っちゃあないはずだ」

言いながら、メツチは狭い傾斜を慎重に手綱を操っている。彼の馬車の後輪が外れないよう注意しつつ、サリュもその後続いた。

しばらくは段差のある岩土が続き、一見すれば馬車で通るのにも苦勞しそうだったが、遠目には先に行くのが難しそうなところにも、いざ近づくと通れる幅が確保されてある。景観に溶け込み、自然のままに整備された道を行くと、やがて平ら続きの地面に変化した。

踏みしめる感触も異なる。柔らかい、重さのある砂。枯れた短草群が黄土色から顔を出していた。

崖と平地では得られる爽快感もまた違うのだろう。隣のクアルがいかにも駆け出したがって彼女を見たが、サリュはクアルを手元に留めておいた。見晴らしのよい大地で砂虎が不意を突かれることなどまずないだろうが、狩りに秀でた人間、しかも集団が相手となれば単独行動させることに不安があった。

しかし、同行させておくことにも問題はあつた。ちらりと遠慮がちに、メツチが窺うような視線をつくつた。

「あおさ。そいつ、なんとかならない？」

これから部族達に会うのに、砂海の猛獣が一緒にいてはまずい。それでもクアルを遠くに行かせようとしなのは、心細さがあるからかもしれない。

毛むくじやらの頃からつきあいのある砂虎は、彼女にとって家族に等しい。先日、一時の旅の供を手に入れ、それを喪つてからはさらに彼のありがたさを痛感するようになっていた。

「これから会う連中、気の悪い連中じゃないけど。けっこう荒っぽいんだよ。あんたらのことをどうってんじゃないけど、穏便にすますためにはさ。ちよつとまずいかなつて」

あくまで提案としての言葉だったが、道理が向こうにあるのは明らかだった。防砂具の中で息を吐き、サリュは身を屈めて傍らの砂虎を抱きしめた。耳元を数回なぞり、それから喉を撫でる。腕で後方に押し上げるように身を離すと、頭を擦り寄せ、クアルは背後へと駆け去つていった。ほとんど人同士が別れを惜しむ行為に似たそれに感心したように、馬車の上からメツチが言う。

「ほんと、大したもんだね」

砂虎の姿は地形の色にまぎれ、すぐに見えなくなった。それを確認してから、サリュは徒歩を再開する。

「なあ、どうやったたらあんな風に躡られるんだい。砂虎なんてさ」
気安さは旅慣れの有無ではなく、ただ性格らしかった。幼い言動

が前に立ち寄った集落の少年を思い出させて、それでまた気分が落ちるのを自覚した。

「何かコツでもあるのかい？ 人間の言うことを聞く砂虎なんて聞いたこともないぜ。なあ、あんたさえその気ならさ、あれで上手く金を稼ぐことだって」

「それ以上言ったら、護衛の話は断るわ」

剣呑な声で彼女は男の言葉を遮った。

家族も同然の相手のことを言われればそれだけで不快だったが、それ以上に男の最後の言葉が彼女を苛立たせた。 金を稼ぐ。商人という人種は、好きになれない。

「……悪かったよ。なんだい、短気なヤツだなあ」

彼女がとりあわないことがわかると、メッチはしばらく黙っていたが、すぐにまた口を開いた。反応がないことも気にせず語りだす。自分が商人になろうとした理由。師事した商人との出会い。愚痴。そんなものを延々と聞かされ、そのほとんどを右から左に聞き流している、ふと見知った単語を聞いた。

「タニルの、食堂？」

「なんだ。行ったことはあるんだな。中央にある大きな食堂だよ。行ったかい？ 可愛い子、いただろ？ 若い、茶色の髪の、看板娘のさ」

恐らく彼が言っているのだろう、その人物のことは覚えていた。気配りの利く、頭のよい女性だった。

「顔見知りでさ。つっても、前に師匠に連れられていった時に一回、話したことがあるってだけなんだけど。その時に意気投合したんだよ。タニルまで行こうと思ってるから、久々に会えたらいいなあ。なあ。彼女、元気だったかい？」

食堂勤めなら、客と話をあわせるのも仕事のうちだろう。そうは思ったが、わざわざ伝えるようなことでもなかった。首肯すると、嬉しそうにメッチは笑った。

「そつか。よかった」

広大な砂海で、共通の知人を持つというのは不思議な気分だった。元々、可能な限り人と関わろうとしないせいというのもある。如何に砂漠が広くとも、そこを通る航路と集まる場所は決まりがあるのだから、理屈としては決しておかしい話ではないのだろうが。

あるいはという期待が胸をかすめ、サリュは訊ねた。

「リトという人を、知らない？」

「リト？ それって」

予想外の反応に、むしろ彼女の方が驚き、しかしそれに言葉を重ねる前に気づいた。

視界の端に動く影があった。砂虎ではない。もっと体高のある、それが馬に乗った人であることを悟り、素早く周囲を見渡す。人影は一人だった。クアルは、近くにはいない。彼女の様子に気づいたメツチもそちらを振り向き、その人影に向かって手を上げた。

「ああ、部族のヤツだな。　　おーいっ」

点のような遠くから近づいてきたのは、一目見て馬格の良さがわかる月毛の駿馬と、それに似た薄い色の防砂具を纏った乗り手だった。サリュに劣らぬほど念入りに巻かれた頭巾からわずかに窺える眼差しで、相手が女性であることがわかる。纏った布防具のあちこちには装飾の類が飾られていた。

「何者だ」

鷹のように鋭い目が二人を見据えた。

発せられた声は意外に若い。さらりと水気のある透き通った声音に険しい視線との齟齬を感じて、サリュは返事に戸惑った。隣に立つ商人が答える。

「ああ、俺はメツチ、クアガイの者だ。すまないが、藁を恵んでもらえないだろうか」

羊皮紙の中身を一瞥し、その若い女性は鋭い視線をサリュへと移した。

「そっちは」

「彼女は、俺の護衛で

「お前。外套をあげる」

肩をすくめたメツチから促す意味の目線を受け、無言でサリュは頭巾をあげた。

念入りに布防具が巻かれてある、そこから覗いた瞳がまだ衰えない強い陽射下に晒される。瞳孔に二重の環を描いた異相を見て、女性がわずかに目を細めた。それを見たメツチも驚きを隠せずにいる。

「名前は」

「……サリュです」

女性の刺すような視線と、それを受け流す瞳がしばし中空で絡み合った。眼差しを和らげないまま女性が顎をしゃくる。

「ついてこい」

身を翻した馬を追って、外套を被りなおしたサリュも続く。その隣を馬車で行くメツチの視線が、恐々とその横顔に向けられていた。

「それで？」

「え、いや。別に、なんでも」

びくりと目をそらす男を振り向かないまま、彼女は訊ねた。

「さっきの話」

「ああ。リトって人かい」

「知ってるの？」

コブつき馬の手綱を握る手に力がこもった。腹を空かした砂虎が獲物に向かう如く、相手に飛び掛りそうになるのを必死に抑え込んでいる。

「知ってるってどうか。一年くらい前、師匠と一緒に会った人に、そんな名前の方がいたなって」

一年前。彼女がその人物と出会い、別れた時期だった。

サリユは心臓の鼓動を抑え、慎重にメツチの様子を窺った。表情に嘘についている気配はないが、商人の言葉はもしそこに嘘はなくとも、それが真実であるかどうかはまた全くの別問題だった。彼女を護衛に巻き込むために、餌を吊るしてみせているだけという可能性さえある。あくまで平静を装ったまま、彼女は質問を続けた。

「どういう人。背は。髪は？」

「背はその時の俺より頭一つくらい高かったなあ。髪は、茶色だった。頭に防砂具あったから、長さとかはちょっとわかんないな」

「年はどのくらい？」

「二十そこそこってとこじゃないか。やけに落ち着いた感じだったから、もうちょい上かもしんないけど」

風貌は合致する。しかし、それだけで意中の人物と同じという証拠にはならない。

「目は」

「目？ 髪とおんなじ、茶色だったよ」

「傷は、なかった？ 右目か。その上か」

彼女の記憶では、あの夜、小船から見た彼の顔の右側には血が流れていたように思う。月明かりしかない闇夜のこと、彼まで相当に距離もあったから正確にはわからないが、もしかしたらひどい怪我をおっていたのではないか。額の傷はよく血が出るし、残りやすい。そう聞いていた。

「傷？ いや、なかつたなあ。他には　ああ、ちょうどあんたが連れてるみたいな、コブつき馬を連れてたっけな」

その言葉にサリュは一気に脱力する思いを味わった。傷はなく、コブつき馬。もしその人物が想像通りの相手だったとしても、恐らく自分と出会う前だろう。トマスで別れてからの彼ではない。しかしそれでも、彼女の捜し求めた人物と思われる足跡には違いなかった。

旅に出て一年以上。人目を避けるように砂を渡り歩き、逐われ、殺されかけ、時に誰かを殺して求め続けた。陽炎のようにあいまいな探しものの、その服の裾を掴んだように感じ、自分でも思いがけないところでその幸運に巡り至った偶然が、彼女に不思議な虚脱感をもたらした。

夢ではないか、と思い、はつと我に返る。その人物がリトと決まったわけでもなければ、この若い商人が本当のことを言っている信じられるわけでもない。旅に出てすぐの頃、サリュは彼を知るといふ商人に騙され、身包みをはがされかけたことがあった。

「その人は、あなたの師匠と知り合いなの？」

「そうみたいだ。うちの師匠もけっこう手広く商売やってたしな。」

……探し人？」

買い入れようとする商品に欠品を見つけた商人の目つきになったメツチに一瞬、言葉をかわしかけ、しかし彼女の心と身体の双方がそれを裏切った。

「……ええ」

メツチが会ったというその男が本当に彼女の探している人物なら、そこから彼の消息を掴むことができるかもしれない。それが不可能でも、若い頃に帝都を出奔して以降、親しかつた友人も知ることのないという彼の交友関係を知ることができたなら、そこから足取りをたどることも考えられる。

下手な交渉にかまける余裕などサリュにはなかった。せつかく見つけた手がかりを失くすわけにはいかない。いくら護衛の報酬を安く叩かれようが、例え無償でもかまわなかった。

「ふうん。なら、紹介してやるよ。うちの師匠」

メツチの言葉は意外なほどにあっさりとしていた。情報を玩ばず、出し惜しみもしないそのあけすけさは、その持つ金銭的な価値を理解していないはずのない商人らしからぬ台詞で、そのことに強い警戒を覚えてサリュは言った。

「どうして？」

困ったようにメツチが眉をしかめる。

「どうして、って。さっき、俺も無理やり巻き込まれたし。おあいこってことでいいだろ？」

「ありがとう」

瞳を瞬かせ、若い商人は照れるようにそっぽを向いた。

「よせやい。あ、でもそれとは別件ってことで、護衛の件も頼まれてもらってくれるか？」

「それは、かまわないけれど……」

彼女にしてみれば護衛の報酬そのものがそれだとしても全く問題はない。しかし、気になることはあった。

「いいの？ 部族の人に頼めば、私じゃなくても頼める相手がいるんじゃない」

先ほど瞳を晒した時の表情を思い出し、彼女は訊ねた。決して騙すつもりがあつたわけではないが、意図して隠していたことにはなる。砂虎を連れた奇妙な瞳の女。気味悪くないはずがないが、問いかけに男はあつげらんとした表情で答えた。

「なんでさ。あんたほど頼れる相手なんていないだろ」

クアルのことを言っているのなら、それはそうかもしれないが。砂虎の存在を知らない部族の女性の前でうかつなことを喋るわけにもいかず、黙然としてサリュは頷いた。男がそう言うのなら、こちらでとやかく言うことではないだろうと考える。

リスールまでの護衛を終え、メッチから紹介文をもらってどこかの街にいる彼の師匠の下へ行く。タニルまでの捜索行が全くの徒労に終わり、後味の悪い手ごたえと血に濡れた金色だけを胸に得て、それから行くあてのない旅をすること数週間。久しぶりに砂塵が晴れた気分になり、彼女の口元が綻んだ。大外套つきの頭巾と布防具におおわれ、決して外に漏れでないはずの感情の揺れを感じ取ったように、メッチも笑う。

「んじゃま、そういうことで。改めてリスールまでよろしく」
サリュはこくりと頷いた。

話の決着を見計らい、先に行く女性が振り返った。
「着いたぞ」

円幕を広げた形の移動式住居が立ち並ぶ光景が目の前に広がっている。棟の総数は二十や三十を優に越えている、下手な集落よりも規模の大きな部族の住居群だった。

砂土には短草が茂り、水源が近くにあることが窺える。周囲にそれを見かけることがないのは、水源の極めて近くに幕を張ることを良しとしないという風習のせいだろうと思われた。その理由についてまで彼女は詳しくないが、水源を神聖なものとしてみる思考はこの水陸で特に珍しいものではない。

「こつちだ」

馬に乗った女性が常足で歩く。幕居の傍で石臼を曳いている集団が興味深そうにこちらを眺めていた。ふわりとした衣装に身を包んだ小さな子どもが数人、駆けてくる。敵意のない無邪気な視線にむずがゆさを覚え、気づかないように歩くサリュの隣で、懐から何かを取り出したメッチが子ども達に袋を放り投げた。中身を見た少年が歓声をあげる。

「……あれは？」

「ん。ああ、甘味だよ。モパのさ、干したやつ。土産みたいなもん

さ

ふと、自分の集落を彼が訪れた時にも甘いお菓子をもらったことを彼女は思い出した。

「それは、商人の風習？」

「別にそういうの決まってるわけじゃないけどな。挨拶しておいて損はないだろ」

「子ども相手に手抜かりのないことだ」

冷やかな声で女性が口を挟んだ。その言葉が何を対象に向けられたものであるか考え、男の反応を窺って隣を見ると、メツチは苦笑いをしていた。

「いつかあの子達がお得意様になってくれるかもしれない。投資ってやつさ」

「投資」

はじめて聞く言葉だった。商売用語だろうか。

「植物が実をつけるためには、水をやらないといけないだろ？ そ

ういうこと」

「砂漠に水をやってなんになる」

挑発するような馬上からの物言いに、涼しげに笑う。

「そりゃ見解の相違ってやつだな」
ふん、と不快そうに鼻を鳴らした女性が馬から降りた。しゃらりと全身に身に着けた装飾が音を鳴らす。サリュはわずかに目をみはった。馬上ではわからなかったが、その女性は小柄だった。自分も決して大きな方ではないが、さほど変わらないかもしれない。

「繋いでくる。少し待っている」

返事も待たずに去っていく女性の背中を見送りながら、サリュは隣の男へ視線を送った。

「あの人は、何を怒ってるの」

おおげさに肩をすくめる。

「さあな。前に来たときも、あんな風にぶすつとしてたっけ。話し

たのは今日がはじめてだけど、余所者嫌いなのかもな」

とぼけた口調に、サリュは自然と半眼になる。

「……本当に大丈夫なの？」

既に彼らは集落の半ばまで入り込んでしまっている。仮にこの部族達が敵対行動に出た場合、抜け出すのは容易ではなかった。指笛でクアルを呼んだとしても、砂虎といえど多数相手の勇戦に限界はある。

「大丈夫だって。それに、砂虎に襲われるよりはマシさ。とりあえず連中には言葉が通じるからな。……あんだ、砂虎と言葉がわかりあったりするの？」

そんなわけがない。クアルには多々、自分の言葉を理解しているような節が見受けられることはあったが、少なくとも彼女には愛猫の言葉はわからなかった。繋がりには、言語を介したものではなかった。

「ふうん。ま、砂虎が人を襲わないってだけで凄いいもんだよな。……睨むなよ、もう金稼ぎなんて言わねえってば」

睨んでいるつもりはなく、ただ男の距離感に困惑に近いものをサリュは感じていた。砂虎を恐れず、奇妙な瞳を不気味がらず、気安い態度で接してくる。もとより人とのつきあい方に疎い彼女ではあるが、男の態度は見知った誰かを思い出させた。あの人ではない。ケツセルトか、あるいはセスクか。ああ、と思い至り、彼女は苦い気分を飲み込んだ。

確かに目の前の若い商人には、成長したセスクの幻影があった。幼さを残した雰囲気が特に重なって被る。もつとも、あの少年が次に目の前に現れた時、決してこの男のような眼差しで自分を見ることはないだろう。

「……ついてこい」

物思いを閉ざす声に顔をあげる。外套を外し、身軽な格好になった女性が戻ってきていた。刺繍のあしらわれた衣装から髪を隠した

素顔がのぞいており、半ばの納得と驚きをサリュは抱いた。黒瞳を向ける女性はひどく年若かった。自分よりも恐らくは幾つか下だろ
う。

「長がお会いになる」

親戚筋の家族連中が集って形成される部族において、族長は当然
大きな発言権を持つ。決して集団の最年長が務めるわけではないの
は、砂を渡る生活の過酷さを現わしていた。年老いたものは、すぐ
に死んでしまう。

「その前に荷物を置かせてもらえるかい。馬を休ませたいんだ」

「わかっている」

ふてくされたように頷いた女性の先導で集落の中を進み、馬の並
べられた厩に着く。馬を繋いでいると、女性が水桶を持ってきた。

「ありがとう」

礼の言葉を述べたサリュに向けられた一瞥が厳しい。無言のまま、
身体ごと顔をそむける女性の後についていき、一つの円幕に案内さ
れた。

「連れてきました」

「入れ」

砂避けに上げられた織物の隙間から香の薫りが漂った。メツチの
あとに入った中は暗く、決して狭くないが物に溢れた印象がある。
中央の一本の支柱を背に、男が座っていた。

「よくぞ参られた。旅の方」

豊かな髭をたくわえた男だった。年のころは四十頃だろうか。薄
闇にあつて溶け込むような砂に灼けた肌色と落ち着いた深みのある
眼差しが、部族の長としての貫禄を醸し出している。

「砂の流れの幸運にあります。私はメツチと申します。クアガイ
の者でございます」

布防具を取り、恭しく頭を垂れたメツチが捧げるように羊皮紙を
差し出した。相対する男は部族の王といってもよい立場にある人間

であるから、そうした態度は決して仰々しいものではない。頭巾を払い、サリュもメッチの後ろに控えて頭を下げた。

「……確かに。行商の方と見受けるが、今回はどのような？ そちらとの商いは先日済ませたばかりだったと思うが」

女性の手から渡された羊皮紙の中身を検めた男が、隙のない声で言った。

「実は、近くの峡谷を渡っているところで賊から襲われました」

「なんと。ご無事だったか」

「はい。ここにいるサリュのお陰で命拾いを致しました。元々、強行して危険な道を選んだ私の不徳と致すところではあるのですが、リスールに向かうまでの一晩の恵みを頂ければと」

メッチの言葉を聞き、族長は顎をなぞった。

「では、商売が目的ではない？」

「お恥ずかしい限りです。もちろん、なにかご入用でありましたら、なんなりと」

「ふむ……」

沈黙があいた。頭を下向けたままちらりと視線をあげ、サリュは族長の視線に気づく。直視を避け、視線をそらしたところに男の柔らかな声が降った。

「なるほど、ご事情はわかった。砂の訪れは天意のもの。せめて今日一日、我が家にてゆるりと身体を休まれよ」

「感謝します、長」

「今、寢床の用意をさせている。娘に案内させよう。ユルヴ」

「……はい」

「ご案内しなさい」

「はい」

どこか不服そうな表情の女性に促され、部屋を出る前、再び男の視線をサリュは感じた。

少し歩いた先にある円幕に案内される。何人かが中の物を運び出

していた。

「寢床は。二人一緒でかまわないな」

メツチが窺うような眼差しを向ける。サリュは黙って頷いた。

「なら、休め。夕食には呼びに来る」

一方的にそれだけを告げ、ユルヴと呼ばれた若い女性は去っていった。

「どうも、歓迎されちゃいないみたいだ」

「そうね」

村を歩いた限りでは、あからさまに悪意を向けてきたのは案内役の少女一人だけだったが、族長の態度にも何か胸の中に持ち合わせているようではある。メツチの口ぶりから、彼もそれに気づいていることが知れた。

「ま、話があつたら向こうからやってくるか。荷物、取りにいこうぜ」

厩場に向かう途中で何人かとすれ違ったが、やはり誰もが好意的だった。睨むような視線をしてくる人物は一人もおらず、部族というのは排他的な傾向が強いと思いついてサリュには少し意外だったが、そのことを言うつと男は得意げに答えた。

「なんだかんだ言つて、俺達みたいな行商人が物流の要だからな。部族にも最近じゃ開放的な連中だつて多いさ。うちの商会もここことは長いから、その積み上げてきた信用つてとこ」

「前に来た時と変わりはしない？」

声を潜めると、言葉の意図を察したメツチも油断のない目つきになる。

「今のところは、別にないな。荷物を運んだら少し探ってみるかな」

男の性格をまだ把握しきれてはいないが、商人としての用心深さは持ち合わせているようだった。同意の頷きを返し、サリュはコブつき馬の背にあった積荷を降ろした。ようやくか、と言いたげにわざとらしく息を吐くコブつき馬に苦笑し、餌になる食べ物と想っているところに、メツチから声がかかる。

「ああ、馬の世話はこつちでしとくよ。これ、一緒に運んでおいてくれない？ ちょっと知り合いを探してみるからさ。そつちはゆっくりしときなよ」

様子を探りにいくつもりなのだろう。不審な外見の彼女が同席すれば返って邪魔になる可能性があった。了承して、二度往復して荷物を運び終わり、砂の立った円幕の中でサリュは息をついた。大外套を脱ぎ、その下の防砂具をどうするか一瞬考えたが、結局は全て剥ぎ取ってしまう。その上で改めて外套を羽織れば、それだけでも随分と心地が異なる。閉じきった幕中は、決して風通りはよくなかった。

積荷の確認と処理を終えた後には、手持ち無沙汰気味に時間があいた。

不審な人物が外をうろつくわけにもいかず、サリュは薄暗がりの中で時を過ごした。瞳を閉じれば脳裏に浮かぶのは探し人と黄金色の双方で、躁鬱な気配の波を漂いながら、じつとはやる気持ちを抑え続けた。

どれほど砂が流れたか、入り口にかけられた砂避けの織物を揺らして姿を現したのは、メッチではなかった。半身を入れた小柄な女性がいぶかしむように顔をしかめる。

「どうして灯りをつけない」

「……気づきませんでした」

サリュは答えた。

いつの間にか室内の暗さが濃さを増し、隙間から入り込む陽光も衰えていた。眠っていたわけではなかったが、色々と思い巡らせているうちに時間が経ってしまった。

偽りのない返事だったが、相手のほうではそう受け取らなかったようだった。鋭い眼差しがサリュを見据えた。

「……夕飯だ。来い」

「はい」

メツチは戻っていない。日が落ちたのであれば既に一刻以上にもなるはずだが、よほど話が弾んでいるのだろうか。念の為に護身の短刀を外套の裡に隠し、彼女は外に出た。

外には朱赤を越え、夕闇が既に忍び寄っている。かがり火が点々と配された道を歩き、案内されたのは一個の円幕ではなく、賑やかな気配の広場だった。大勢の人々が集まり、中央に組まれた大きな焚火の前を車座に囲んでいる。宴会だった。

「何かのお祭りが？」

サリュが訊ねると、ユルヴという名の少女はきょとんと瞳を瞬かせた。そうした表情をすれば、途端に子どもっぽさが現れる。すぐに険しく戻した視線で彼女は言った。

「旅の人間を歓迎しての晩餐だ。別に珍しくもないだろう」

別に私が歓迎したいわけではない、と言いたげな口調を聞きながら、そういうものなのかとサリュは感心した。今までこつもあけっぴろげに歓待された試しは記憶になかったから、彼女が新鮮に思っても仕方のないことではある。全てメツチという存在、というより男の所属する商会の肩書きがあつてのものだが、そうした扱いを受けることはもちろん不快ではなかった。

だからこそ行いには気をつけなければならぬだろう。大外套を被りなおし、その旅の連れはどこにいるのだろうかと探す。すぐに見つかった。もとより案内役の彼女もそちらへ向かつていたのだった。数人の男性に囲まれ、和やかに談笑する男が彼女を見上げた。

「お、きたな。こつちだこつちつ」

その顔色が赤色に染まっているのは、あきらかに焚火のそれを映しているものではなかった。手に持った碗には濁った液体が満ちており、そこから強い匂いが漂っている。

「まあ座りなよ。今ちようど、あんたのことを話してたところさ」

遠くから吐く息に酒精が混じっていた。呆れ、酒にあかして何を話していたのかと勘繰るが、それからメツチが詠うように語りだしたものには、多分に彼の創作がまじっていた。恐ろしい砂虎は崖上に現れただけで失せ、もちろんクアルの存在も出てこない。かわりに砂賊を撃退したサリュの活躍が、本人が恥ずかしくなるほど派手に脚色されていた。男自身はあくまで情けない被害者で登場しており、その軽妙な語り口と話術の巧みさが周囲の笑いを誘った。

「こんな小さな女の子が、三人もね。そりゃあたまげた」

「族長のとこのユルヴとそう違わないじゃないか。気の強そうなところもあいつ並か」

各自が持ち寄ったらしい食べ物を方々から一気にさしだされ、サリュは困惑と共にそれを受け取った。

「酒は？ いけるクチかい」

という勧めには首を振る。経験はあるが、あまり美味しいと思わなかったし、それにメツチの様子がこれでは自分まで酒の精と仲良くするわけにはいかなかった。男はあきらかに酒色に取り込まれ、陽気にけたけたと笑っている。

「なんだよ、下戸なのか？ ちょっと初めはきついけど、慣れると上手いぜ」

村人から話を聞きだすためには、食って飲んでみせるのは確かに必要だろう。男の行動はその為のものと思いたかったが、それを信じるにはあまりに強く不安を感じさせる表情だった。

すぐにまた周囲との歓談に興じるメツチを呆れるように眺め、ふと視線を感じてサリュはその元を探した。

中央の焚火の向こうに、こちらを鋭い眼差しで捉えるユルヴの姿が見えた。彼女の隣には族長がおり、何事かを語りかけている。視線をかわし、直視しないようにそちらへ注意を配りながら、サリュは手に渡された器から肉菜の一枚を口に運んだ。臭みのある羊肉に香草を巻いた薄切りのもので、味付け自体も濃く調理されている。

飲み物が欲しいところだったが、それを言えば八方から酒が伸びてくるのが判りきっていた為、唾液にまぶしながら彼女は柔らかい肉を胃の奥に流し込んだ。

通りがかつた女性から吸い物を渡される。礼を述べて受け取り、近づけると塩味の香りが鼻腔をくすぐり、彼女は笑みを残して去った女性に心から感謝した。

まだ夕闇ではあるが、宴は早くも十分な盛り上がりを見せていた。サリュに寄って話しかける者も多かったが、彼女が反応こそ返すものの自分からはあまり語ろうとせず、近くにメツチという口巧者がいたから、自然と注意は彼の方へ集まることになる。

それを狙つてのものなら大したものだが、ただ場の勢いに飲まれているだけという可能性もあった。男に暴走の気配があればすぐに止められるよう気を配りつつ、サリュは饗宴から身を引いた態度で食事を続けた。

警戒は当然のものとして、こうした場を楽しめないのは損なことではある。だが、素直に歓待を受けることが難しいことをサリュは理解していた。彼女は異質な存在だった。今この場で頭巾を外すだけでそのことは知られてしまう。一頭と一匹の連れとともに旅を続ける彼女にとっては、人々が宴を楽しむその近くにいられるだけで十分なもてなしと言えた。

それを寂しく思う気持ちも当然あった。むしろ日が強いほどに濃く浮き上がる影のように、他者の存在が近いからこそ痛感する寒々しさだった。

サリュが身を屈めたのは日の暮れた涼風が身体を過ぎたからではない。

自分は弱い、と彼女は思う。それが結局、あのイスマ・クの惨状を招いてしまった。今でも何が正解だったかわからないし、決して後悔もない。それでも、一度は自分自身を投影した少年から親殺し

の憎しみを向けられて、平然としていられるはずがなかった。

一人は嫌だ。だから自分は旅をしている。
でも、一人がいい。あんなことになるくらいなら。

彼はどうだった？ 砂海の旅人であつたあの人物も、同じように人々の騒ぎのなかに自身を置いた経験はあるはずだった。そうした時、彼は何を思ったのか。彼の強さと弱さは心中に何を囁いただろう。

それがわからないことがサリュには寂しかった。

彼女が探し人を求めて一年と一月になるうとしている。それはつまり男の存在を失くしてから年月でもあつた。今では彼の温かさも記憶の砂に埋もれかけている。表情や仕草、一挙手一投足まで脳裏に刻み込んでいるつもりでも、いつしかそれは彼女の想像や願望が摩り替わつたものになつているのかもしれない。

私は何を探しているのだろう。彼か。それとも彼の幻か。

思考が下降していることを自覚し、サリュは息を吐いて暗い想念を払つた。せつかく彼の足取りを掴めそうなのにこうした考えをすることは全くふさわしくないはずだった。ふと目についた碗を取り、きつい香りを無視して一口すれば、苦さと臭みがたちまちに胸の中で熱く燃え広がった。

乾いた寒さに目を覚ます。無意識に身を寄り添わせようとした生きた温もりがなく、香の焚かれた薄地の感触があった。クアルと別行動である時はいつもそうであるように、その違和感がサリュの意識を覚醒させた。

周囲にあるのは早朝の気配で、布越しの明るさもまだ微かだった。薄暗闇の中で誰かの寝息を聞き、サリュは寝入る際に手に握り締めたままだった短刀をしまう。急な客人の身分であるから、男と同じ円幕で眠ることは了承しても、もちろん寝床まで共に寄り添うつもりはなかった。もっとも、そんな心配は実際には無用のことだったが。

したたかに酔いつぶれ、いったい昨夜の記憶をどれほど覚えているのだろう同室の連れは、幕の反対側でらしくなく四肢を伸ばしている。用心の欠片もない寝格好に呆れ、サリュは外套を羽織り水袋を持って外に出た。ついでに、男の側に落ちている水袋も拾っておく。

薄く延ばした朝靄がかかっていた。砂漠では珍しい現象だった。近くに水源があるからか、それとも夜中に季節外れの雨でも降ったのか。この一帯が雨季に入るのはまだ当分は先であるはずだから、多少の驚きをもってサリュは息を吸った。いつもと違う湿った空気が肺に満ちる。

踏みしめた地面にも重さがあった。静まり返った集落は靄に包まれ、幻想的な雰囲気、彼女にある街を思い出させた。トマス。大陸の最大都市と呼ばれるそこには街全体を囲む大きな湖があったから、朝靄の光景もそう珍しいものではなかった。

胸の中にうづくものを覚え、サリュはそれが何であるか考えた。望郷という言葉が浮かぶが、自分はその街で生まれたわけではない。彼女の故郷は既に砂に埋もれていた。

しかし、その想いは決して間違ったものではなかった。故郷を失った彼女にとつて、その街こそが確かに帰るべき場所だった。彼女の生きてきた時間の中で最も温かな記憶がそこにはある。穏やかに微笑む金髪の女主人と、その屋敷に勤める人々。

身近な間に世話になった記憶が懐かしく思い出され、それを里心というのなら、間違いなく自分は弱っているのだらうとサリュは自嘲した。あるいは彼らしき人物の影を掴み、浮き足立っているのか。

霧の中から足音が近づいた。外套を目深にしたサリュがそこから現れた少女に会釈すると、ユルヴは険しい目つきで口を開いた。

「どこへ行く」

「水場へ。口の中に昨日のお酒が残っていて」

「……お前の連れの醜態はひどかったな」

それについては擁護する必要を感じなかった。宴の佳境に始まった焚火の周りでの踊りに意気揚々と参加して、そのまま倒れこんでしまった。周りの男手の力を借りながら、酔いつぶれた男を円幕にひきずったのは他ならぬ彼女である。

「水場までどのくらいですか？」

サリュが訊ねると、ユルヴは靄のかかった南西を指差した。

「半刻もしないで着く」

頭を下げ、歩き出したサリュの後ろをついてくる。肩越しに振り返ると、そっけない声が言った。

「私も行く」

別に自分を心配してのことではないだらうから、断つてどうにかなるものでもなかった。頷き、サリュは霧の中へと足を踏み出した。

朝靄に煙る草原の視界は、ひどく近い距離で閉ざされていた。遠く東におぼろげながら太陽が昇ってきているから方角に迷うことはないが、獣が身を伏せていても気づけない恐れがあった。

短い指笛を二度、サリュは鳴らした。隣から向けられる視線に答える。

「獣避けです」

実際、その意味もないわけではなかった。ただし全てではない。一人ならクアルを呼び寄せられたが、今の状態ではそれは控えなければならなかった。どこか自分の合図を聞き取れる場所に行ってくれるはずだろう彼に、近づくなと伝えるためのものだった。

砂虎が近寄らないように、というのは確かなのだから、嘘ではない。別段それを気にしたわけでもなかったが、彼女の言葉を聞いた同行者は薄く晒った。

「はじめて聞く類だな」

皮肉げな口調だった。サリュは隣に行く相手を見あげた。部族の少女は昨日の昼間と同じく見事な刺繍衣装の上に布防具を羽織、馬に乗っている。腰に弓矢を備えているのは猛獣と鉢合わせた場合を考えてのことだろうが、その意識は半ば自分に向けられているように思えた。

鋭い舌鋒をかわし、彼女は話題を変えた。

「いい馬ですね」

優雅な肢体と雄々しい鬣を持つその生き物は、部族に限らず、砂海に生きる人間にとって特別な意味を持つ。重い荷を運ぶ為にはコブつき馬が用いられることが多いが、より飼育が難しく、手間のかかる馬の方が貴重とされていた。速度に富み、その上で持久力を併せ持つ名馬となれば家一つ建てるほどの財産にも成り得た。

「わかるのか？ 馬に乗るわけではないだろう」

押し黙るサリュを傲然と見下ろすようにして、ユルヴが言う。

「獣の匂いがする。お前は何者だ。災いを招きに來たか？ 死の砂を名乗る女」

馬の脚を止めたユルヴの、サリュからは見えない右手が腰元のあたりに伸びている。返答次第によってはただでは済まさない、弓によらずその視線が真つ直ぐに射抜いていた。サリュは足を止め、湿った息を取り込み、吐きだした。

「……私は、人を探しているだけです」

「それで砂海をさまようのか。行く先々に不吉を呼んで」

サリュは目を伏せた。少女の言葉は正しい。その事実には頷きながら、答える。

「私は死ねません。獣になっても、生きてます」

例え、人の血をすすって渴きを癒してでも。必ずあの人物を見つけて出す。

布防具の中で親しい相手から贈られた短刀を握り締め、射殺すような眼差しを向ける相手に正対する。

先に殺意を収めたのは馬上の少女だった。

「迷惑な話だ」

吐き捨て、手綱を振って歩き出す。短刀から手を離し、サリュもその後ろを追った。

「……あなた方にご迷惑をかけるつもりは、ありません。メッチが起きれば、すぐにでも集落を出ます」

言葉に、前に行くユルヴは答えなかった。

サリュは怒らなかつた。自分の容姿を見たのだから、相手の反応は当然だという諦念を持っている。サリュという言葉の意味を知る彼女に訊ねてみたいことはあつたが、声を掛けられる雰囲気ではなかつた。不機嫌な気配を漂わせて揺れる部族の少女について、左右に揺れる馬の尻尾を眺めながらサリュは歩いた。

黙々と歩き続けるうちに、靄はさらに濃さを増すようだった。溶けるような乳白色を生み出すものが目的の場所にあることを悟り、サリュはもう一度、指笛を連続して吹かせた。

やがて、馬が歩を止めた。一見するとそれまでと変わらない、靄に包まれた平原の一角にしか思えず、目を凝らしても窺えない。足を伸ばし、その一步の足先に透明な揺れがあることにサリュは驚いた。いつの間にか、水場の縁が目の前にあつた。

鞍から降りたユルヴが、乗り馬を導いて水を飲ませている。優しげに手漉きをする彼女にサリュは訊ねた。

「ここはいつもこうなのですか？」

「……靄は珍しくない。これほど濃く出るのは珍しいが」
ユルヴは言った。

「雨の後ならともかく。恐らく、ここの水の沸き方のせいもあるだろう」

水場に手を差し入れ、そのことをサリュも確認した。

霧や靄といった現象は、昼夜の急激な温度差が原因だと考えられている。早朝は冷え込むような砂漠の外気にあつて、そこに沸く水源には暖かさがあつた。

砂地下に発生する水源とそこに行く水流の仕組みについては多くの推測が立てられているが、その実態についてはまったくわかっていない。どこを流れ、その途中でどうやって暖められてきたものであるのか、遠大な思索にふけりながら手ですくい、一口する。透明な甘さが広がった。

持ってきた二つの水袋を開き、水を詰める。手持ちのものしか持つてこなかったので、部族達の集落を出てからもう一度寄ることはなるだろう。ふと顔を上げ、少し強まった日の光が白く薄まった光景をにじんでたゆらわせる光景にサリュは見とれた。クアルの様

子を見ることはできなかったが、目の前のこれだけで無駄足ではなかったと考える。

日の光が靄を晴らし、さらに風が吹いた。

それまで隠されていた一望がサリュの目の前に現れた。水島としては十分な広さを持った水場だった。場は水源に特有の静けさに満ち、遠く向こう岸で何頭かのカウディが水を飲んでいいる。

水場で争う動物はいない。人間以外には。

陽光が水面にきらめき、それが赤色と黄金色のどちらにも思えて、サリュは顔を背けた。自分を見据えるユルヴに頷く。

「ありがとう」

それから集落に戻る道中では、互いに一言も口を開かなかった。帰り着いた頃にはすっかり靄も晴れ、空も明るさに満ちている。あちこちの円幕から炊事の煙が立ち昇っていた。

黙ったまま去っていくこうとする背中に改めて礼を述べ、無視して離れていく彼女を見送ってから、サリュは自らの寝泊りした円幕に戻った。中ではメツチが険しい表情で頭を抱えている。

「おはよう」

「……おはよ。えらく元気そうだなあ」

サリュは肩をすくめる。昨晚、いくらか酒を飲んではいしたが、今まで彼女は酔ったという経験がない。酔わない上に味も好きではないから、わざわざ好んで飲みたくもないだけだった。

「ちえ。下戸だなんて嘘じゃないか。一人で頑張ったのが馬鹿みただい」

「聞いた話をちゃんと覚えてるの？」

「覚えてるさ。失礼な」

むっとして、気まずげに付け足す。

「……半分くらいならな」

サリュは首を振って男への返答に代えた。

あきらかに酒が残っている相手に、手に持った彼の水袋を渡す。メツチが怪訝そうに見上げた。

「水場から汲んできたばかりだから、少しは気分がいいわ」

「ああ、そいつはありがたいや」

喉からこぼしながら水袋を呷るメツチから目を外し、サリュは部屋の間気が出る前と異なるのに気づいた。

「誰か来た？」

「ああ」

水袋を放して、メツチが頷いた。しかめ面には気分の悪さ以外の理由が覗いており、嫌な予感を覚えながらサリュは続きの言葉を待った。

「族長がな。ちょっと頼まれごとをしたいんだってさ」

部族の長がわざわざ客の円幕を訪れてする話など、面倒以外には思えない。一瞬で翳ったサリュの表情を読んで、苦々しくメツチは笑った。

「ま、多分あなたの想像してるのと違わないと思うぜ。俺はこんなざまだし、あんたはいないし。俺一人で返事できるもんじゃないから、とりあえず後で改めて話を聞くってことになって。朝食にお呼ばれされたよ」

サリュはため息をついた。肩をすくめたメツチが両手を仰ぎ、伸びを打つ。

「まあ、とりあえずあなたも話を聞いてみてくれよ。俺から、あなたにこうしたいなんて 命令できる立場じゃあさ。ないんだし」

男の言葉は理屈にあっているが、しかし彼の師匠が探し人の手ばかりを持っているかもしれない以上、最終的にはその意見を尊重せざるを得ない。もちろんそのことをメツチも理解しているのだろう。

まず族長の話を聞いて欲しいというのは悪意ではなく、商人のせめてもの誠意だとサリュは捉えた。

災いを招く、死の砂の魔女。

あの少女は族長の話を知っていたのだろうか。先ほどのものは知った上での発言か、それを認めたくないからこそか。水場への同行を申し出た彼女の意図や、昨日からの言動の数々にまで思考を巡らし、結局は話を聞かなければ何もわからないと諦めた。

わからないが、面倒事に巻き込まれようとしていることは確かだった。イスマ・クを出てから人を避け、一月ぶりに近づいた途端にこれだ。人の世の煩わしさに、今はいない砂虎との穏やかで孤独な旅を思い出し、苦笑う。人より砂虎という方が好ましいというのであれば、そのうち本当に自分は獣になってしまうのではないか。

もし自分が言葉を失って、いつか彼と再会したら。あの人はどう反応するだろう。哀れむか。蔑むか、怒るだろうか。それとも悲しんでくれるだろうか。

それを楽しみにするのかもしれない。

澄んで濁った男の瞳を思い出しながら、彼女は胸の中で呟いた。

族長の円幕に向かうと、既に朝食の準備が進められていた。

大きな幕の中で十人以上の近しい家族達と共に、中央に並べられた大小様々な器を囲んで円を作る。幼子を連れた若夫婦もあり、にぎやかな雰囲気だった。

食事が始まると、昨日の宴会でうちとけたメツチは、まるで家族の一員であるかのような自然さでその会話に参加している。和やかなやり取りを聞きながら、サリュはそれに加わらず黙々と厚手の練り生地を口に運んでいた。

ふと、小さな瞳が不思議そうに自分を見上げているのに彼女は気づいた。

「……大丈夫？ どこか痛いのか？」

頭巾を被り、黙り込んでいるのを怪訝に思ったのだろう。立ち上がったてやや高い位置にある幼い眼差しへ、サリュは口元をほころばせて答えた。

「なんでもないの。平気。……ありがとう」

粒をつけている頬に手を伸ばし、柔らかな肌をかすめるように取り除く。綿のようなふわりとした髪の子息が、にっこりと微笑んだ。「うん！」

それを見た父親が客人に粗相をするなど叱り、それに子が頬を膨らまして反抗する。母親がとりなし、途中から父親と母親の口論と化してしまい、最終的には厳粛な声音で族長が両者を諫めた。その隣では、また好き嫌いがどうだという言い合いが始まっている。

大変な喧しさがサリュには新鮮さだった。大家族の朝の風景。自然に集まって笑顔の絶えない彼らの在り方に、言いようのない羨ましさを覚える。

「……頭巾、とればいいのによ」

彼女にだけ聞こえる声でメツチが言うが、サリュは答えなかった。小さな子どもを怯えさせるつもりはなかった。

食事を終え、女達が片づけを始めると、食器を運ぶだけでも手伝おうと腰を上げかけたサリュだったが、それを族長が留めた。

「さっそくだが、先ほどの話をしたい」

女は片付けに出て行き、男も子ども達を連れてその場から離れた。サリュとメツチの二人に族長、その傍らで険のある表情をしたユルヴの四人だけが残った。

「メツチ殿、護衛の方には話されたのか？」

「いえ。私も、ひどい有様でしたので。恐れながら長からお話いただくのが一番かと思い、私からはまだ話しておりません」

頷き、族長は深い眼差しでサリュを見た。

「護衛の方、貴殿はこの辺りでの生活を生業とされているのだろうか？ ……そうか、ではあまり実感がないかもしれないが、最近このあたりはひどくざわめいている。理由は、お分かりか」

「新しい水源の噂、ですか」

サリュは言った。族長は頷いた。

「いかにも。今やトマスとタニルの間に大きく広がった枯渇地。そこに安定した水場が沸いたという。到底、信じられないような話だが。しかし実際にその噂を聞きつけ、既に多くのものが動き始めている。人も、物も」

イスム・クという、水と塩に満ちた集落がタニルの領主によって見い出され、その存在も一月の間に知れ渡ったのだらう。トマスからポノクスへと続き、タニルの南を往く水路は大回りに歪曲して掘られている為、距離としては長い。交易という観点から見た場合、さらに問題となるのはそれを使用することでかかる莫大な税金だった。

治水権とそこにかかる税収権は、治める立場の人間に与えられる重要な特権である。水路を利用するのとしなのでは、そこを運ばれてきた物の値段が段違いに異なるのはその為だった。それでも、大規模な枯渇に襲われ、砂海を渡る航路を失くした以上、トマスとタニルでは水路を利用した商いしかされていなかった。

その前提が今、崩れようとしている。イスマ・クを介した航路の開拓と、周辺にまだ眠るかもしれない水源の発掘。人々の思惑が砂の流れとは別の動きを活発化させていた。そこを目指し、夢を見るまさに文字通りの存在にあの集落は成り果てたのだ。黄金の在る村。

「……全ての行いは天意による」

外套の奥のサリュの表情を見たわけでもなく、族長の声は穏やかだった。

「我らはそれに抗わない。北の地に水場が生まれれば、人の声で騒がしくなるのは道理だろう。それを嫌うわけではない」

この部族は、枯渇地帯と河川域の狭間を遊牧して過ごしている。水源の噂は、彼らにとって決して他人事ではなかった。

しかし、と族長は続けた。

「自分達の安寧が崩されるのなら、それに対する備えも報復も忘れない。我らは誰も縛るつもりはないが、縛られるつもりもないのだ」
やはりややこしい話になりそうだと、サリュは胸の中で息を吐く。
水源に拠らず、砂海に生きる部族。彼らはツヴァイ帝国の領下にあつて、微妙な立ち位置にある。彼らは帝国民ではない。国という在り方に捉われないのが彼らの生き方だった。それが認められているのは、帝国の統治の邪魔になつてはいないという、ただそれだけのことである。

より正確には、認められているわけですらなかった。部族の多くは独自の宗教を信仰しており、帝国内で大きな影響力を持つ一神教の有力者などは、事ある毎に彼らを邪教徒として排斥を唱えていた。

実際に弾圧が起こった歴史もある。

バーミアリア水陸一の大国として強大なツヴァイだが、その実情はもちろん、全くの不満がくすぶっていないわけではないわけではなかった。部族との争いは内乱というほどではないが（そもそもが、内ではない）、周囲の外敵と同程度には、問題は自らの中であつた。最近の事件では、サリユも居合わせた商業都市トマスで起きた騒動というものもある。

もし、族長がそうした帝国と部族の問題について語るのであれば、それはサリユ個人にどうこうできるものではない。それは族長とて判らないはずがなかつた。だからこそもっと具体的な、個人の身に収まる厄介事の類なのだろうと予想がつくのだった。

「先日のことだ。我々と縁のある家族が、一家ごと姿を消した」
族長は言った。

「我らは部族の全員が一ところで生活するわけではない。大地にかかる負担が大きいのでな。その家族は自分達の羊を連れ、ここから北方を遊牧していた。とはいえ豊かな水源がそうあちらこちらにあるわけではないから、それは共有することも多い。最近、彼らが姿を見せないというので、身内の者に様子を見にいかせたところ空の住処だけが見つかった」

「……砂賊に襲われた、というようなことは？」

サリユの言葉に首を振る。

「周辺に争った形跡はなかつた。獣でもない。近くでは羊達が柵に放置されたままだった。辺りの草の根まで食い尽くしていたから、少なくとも三日以上経っていたようだが」

家財や家畜に一切手を出さず、そこで生活していた人間だけが姿を消す。確かに不可解な状況だった。

「我々には、砂隠しという伝承が古くからある。まさにその通りの

状況だ」

「砂隠し？」

「人を攫う砂のことだ。子を攫い、親を攫い、家族を攫う。時には集落一つ飲み込むこともあるという」

どこかで聞いたことのある話だとサリュが思い、その彼女に向けて視線を定めたまま、族長が言った。

「それは、死の砂の前兆とも言われている。一人、また一人と人が減り、そして最後には集落を死の砂が覆うのだと」

サリュは目を伏せた。

族長の隣から、ユルヴが強い眼差しを向けている。今朝方、少女が見せた態度の理由を彼女は理解した。自分達の周りで奇妙な事件が起こり、そこに死の砂の名前を持つ人間が現れた。誰でも彼女のようには警戒と敵意を抱くだろう。

「……勘違いなさるな。先ほど言ったとおり、それが天意であれば、我々は逆らわぬ」

族長が口調を和らげた。サリュは視線を上げ、その穏やかな表情を見た。

「懸念しているのは、あくまで人同士のことだ。先の新しい水場の件で、最近は砂賊の動きも盛んになっている。血の跡も家をあさった気配がなくとも、やはり最も考えうるのは、そうした連中ではあると思う」

サリュは頷いた。

「もしそうなら、我々は奴らを許すつもりはない。もちろん、血気にはやって早まるつもりもない。その為に今は様々なところに人をやって情報を集めているところだ。それにはそこにいるメツチ殿の所属する商会にも協力を得ている」

横目で隣を見る。緊張した面持ちの若い商人が、族長を見つめていた。

「だが、その好意だけに甘えているわけにもいかん。我々も独自に話を聞いて回っている。このあたりを遊牧しているのは我らだけではない。商人には商人の繋がりがあるように、部族には部族の繋がりがある」

ごくり、とメツチが喉を鳴らす音が届いた。表情を変えず、サリユは彼の様子をいぶかしんだ。彼は一体、何を怯えているのだろう。「そなた達に頼みたいというのは、そのことだ。ここから北西で家族の姿を見たという他の部族の者がいた。詳しい話を聞こうと人をやったのだが、その者はこの先の町　リスールへ出かけてしまっているという。こちらもそれを追いかければすむ話なのだが、方々に馬を飛ばしたせいで、町に慣れた者が不足してしまっていてな。それで、誰か案内役を頼める人間はいないかと探していたのだ」

「それを、私達に？」
族長は顎を引いた。

「そちらも何か目的がある旅の途中ゆえ、無理にとは言えぬ。しかし、もし受けてくれるなら相応の礼はする。砂漠で水を受けた恩義を、我らは忘れない」

ずるい言い方だとサリユは内心で苦笑した。それでは、一宿の恩を得た自分達は何も言えなくなってしまう。

「すぐにここを発つ予定でいることだろう。その前に一度、考えてみてはいただけぬか。この通り、どうかお願いする」

頭を下げる族長の前で、サリユとメツチは視線を交わしあった。

集落を出る前に返事を聞かせて欲しいと言われ、二人は族長の円幕を辞した。自分達の円幕へ戻らず、そのまま密集した集団から少し離れる。おおっぴらに密談をするのにはそれが一番安全だった。幕の中では、裏で誰が耳をひそめているかわからない。

「どう思う」

草原に腰を下ろし、困りきった表情でメツチが訊ねた。サリユは平淡に答える。

「受けたら？」

「簡単に言っちなよなあ」

情けない声をあげながら、商人が顔をしかめる。

「元々、リスールに向かうところだったんだもの。同行者が一人増えるだけなら、私はかまわないわ」

そっけない言葉は、本心の全てを含んではいなかった。現状ではそうとしか答えようがないと彼女は言っていた。何か問題があるなら、まずそれを教えてもらわなければ話にならない。

降参するようにメツチが両手を広げた。

「わかった、わかりました。……けっこうさ、あんたって嫌な性格してるよな」

「あなたみたいな商人には、前に騙されたことがあるの」
サリユにしてみれば斜に構えて当然だった。

ふんと鼻を鳴らし、男は話し始める。

「部族の連中が特殊な立場にあるってのは、あんたも知ってるだろう。中には恭順してるのもいるけど、ここの連中はそうじゃない。彼らとは、あくまで対等な関係なんだ。ま、だからこそうちらみたいなの行商人がいい商売できてるわけだけだ」

サリユは頷いた。部族とはつまり、領土を持たない国である。そういう事実については、極めて短い期間に受けた教育の中でも教わっていた。

「だから、まあ問題ってのはいくらでもあるんだ。例えば 殺したとか、殺されたとか」

この星では全ての基に水の存在がある。人の命もまた、飲んだ水の場所に属するものとされていた。その治水権を持つのがそれぞれ

に任命された領主であり、彼らがその上に冠するのが国となる。

部族は国家に属さない。つまり彼らの人権もまた、国が護るべきものではなくなる。

彼らが強い武力を持つのも、歴史的にそうした自衛の必要性があったからに他ならなかった。彼らは自由を得たかわり、自ら以外に頼るものを持たないからだった。

「人死に云々つてのは、昔からよくあるいざこざでさ。同じ国の人間なら、領主に裁を下してもらうつてのができるけど、部族連中じやそうはいかないだろ？ いいとこ、仲裁くらいなのさ」

「その仲裁役に入るのが、あなた達のような商人でしょう」

サリュの言葉に、メツチは苦虫をかみつぶした表情で頷いた。

「そう。まあ、実際に仲裁に入るのは領主で、俺らはその下でつて形だけだな。実際に動くのは俺らみたいな商人だ。部族との商売で、結局はそれが一番やつかないとだよ。交易先としちやとんでもなく美味いけど、揉め事が起きた時は大変なことになっちゃう。どこの商会でもよほど年季があつて、腕に自信のある人間しか涉外役になりたがらないのは、誰だつてリスクつてやつを考えるからさ。一つ間違えれば、自分の首なんか簡単に飛んじまう」

なるほど、とサリュは頷いた。そういつた商売人としてのあれこれは、彼女の知識になかった。彼女が教育を受けたのは上級階級に位置する人々のもので、紛れもなくこの時代の最高水準のものであり、その知識の幅も可能な限り普遍的に努められていたものの、やはり観方に一定の限界はあった。その教育を受けられた時間そのものが不足していたこともある。

「でも、あなたの商会にも、そういう交渉役の人がいるんでしょう。族長も言つてたじゃない。協力してもらつてるつて」

「ああ、言つてたな。でも、それがどこまでのものかなんて、わかりゃしない」

サリュは眉をひそめた。

「どういうこと」

「人死にとか、そういうのは。面倒なんだよ」

言葉を選ぶように、慎重な口調になってメツチが言う。

「もちろん、商会だつてつきあいのある相手に不義理なんてしたくないから、やれることはやるさ。でも、商会の本音としちゃ、下手に騒がないですむのが一番って思ってるはずなんだ」

「……本気で協力するつもりはないってこと？」

メツチは黙り、押し殺すように言った。

「それがわかんない」

頭をかき、大きく息を吐く。

「だから参つてんだ。商会の上がどういう考えでいるのか。それがわからないから、どう動けばいいか。動いちゃいけないのか」

「ごめんなさい。わからないわ」

「……さつき、長が言つてたろ。部族には部族の繋がりがあつて。もしかしたら、うちの商会に圧力をかけてるのかもしれない」

その言葉の意味を考え、すぐにサリュは理解した。

「彼らの方も、あなたの商会が本気で動いているか疑つてる？」

メツチは首を振つた。

「疑つてるかどうかまでは。けど、交渉の一つなんだろうぜ。そっちがしつかりやらないなら、こつちにだつて考えがあるぞつていうね。事はこれからの商売づきあいまで関わるから、商会の一員である俺だつて下手な真似はできない。つたく、やっかいな時に顔見せちまつたよ。ほんと」

個人では収まらない。人と人が複雑に絡み合い、思惑を重ねあふ図に一瞬、サリュは言葉を失つた。世慣れない自分にはまるで経験のない、人間社会の表裏が垣間見えるようだった。見下すような男の言葉を思い出す。あの男、タニルの領主ケツセルトから言われたとおり、自分は世の中を知らない小娘でしかないのだと痛感した。

「……でも、それなら迷う必要なんてないでしょう。向かう先が違
うってことにして断つてしまえばいい。それなら、向こうだって強
くは」

一言毎にメツチの顔が渋面になるのを見て、サリュは言葉を切っ
た。冷たい声音で訊ねる。

「あなた、昨日、私達の行き先場所を誰かに言ったりした？」

「言っていない」

半拍の後に、若い商人は続けた。

「……多分」

「呆れた」

心底から言葉どおりの感情を込めて、サリュは言った。

「なら、最初から断れないんじゃない」

彼女の方でも、昨晩の宴でメツチが下手なことを言わないか気をつ
けてはいた。それでも全ての会話を聞いていたわけではないし、
彼がこれから向かおうとしている町の名前を言っていなかったどう
かなど断定はできない。もし誰かの耳にそれが入っていたら場合、
話が族長に伝わっている可能性は当然あった。相手に言質をとられ
たかもしれない状況で、嘘をついて要請を断るリスクはあまりに大
きいはずだった。

「だって、仕方ないじゃんか。話を盛り上げようとしてるうちにさ、
つい口が滑っちゃってるかもしれないだろ？」

「知らないわよ」

大げさに肩を落とす男を見下ろして、サリュは頭を振った。目の
前の若い商人のあまりに迂闊な言動に、苛々した気分が抑えきれな
い。

「話し合いも何もないでしょう。部族とのことはあなたと、あなた
の商会の問題だもの。私には関係ない」

「寂しいこと言うなよ。リスールまではあんたも行ってくれるんだ
ろ？」

「ええ、行くわ」

ただし、と彼女は付け加えた。

「私が引き受けたのはリストルまでの護衛同行、それだけよ。その後のことは知らないわ。向こうに着き次第、あなたの師匠って人への紹介状を書いてもらうから」

「そりゃあ、いいけどさ。……もし、俺が適当なこと言ったりしたらどうする？」

上目に探る眼差しに、あえて二重の環を持った銀色の瞳を相手へと覗かせて、サリュは言った。

「リストルにはあなたの商会の人がいるでしょ。情報の確認はその人とするわ。このあたりを回っていた行商人なら、他の人だって知っているでしょう」

「なるほど」

「もし、あなたが適当なことを言っていたら。その時は、クアルにあなたの頭を撫でてもらうから」

「そいつは勘弁してもらいたいなあ」

野盗を千切り捨てた猛獣の鉤爪を思い出したのか、メツチが顔を引きつらせる。不承不承に頷いた。

「わかったよ、それでいい。ただ、俺だって、商会に損を出させる為に行動しようなんて思わないんだ。部族の人間を連れてリストルにいったら、あんたが何か聞かれることだってあるかもしれない。」

その時の証言くらい、お願いされてくれてもよくないか？」

旅に同行したのだから、部族の集落でどういうことが起きたのか聞かれることはありえる。それが何か自分に不利をもたらすとも思えなかった。サリュは頷いた。

「……それくらいなら、かまわないわ」

「んじゃ、紹介状を渡すのは商館でってことでいいかい。そこなら、師匠のことを知ってる連中も多いしさ。そんな時についでに証言して

くれば、俺だって助かるし」
「ええ」

後は、部族の人間と共にする旅の中でクアルを呼び寄せることができるかどうかだが、それは難しくなりそうだとサリュは予想していた。その場合、砂虎には単独でついてきてもらうしかない。リスールまでは二日もかからない距離ということだから、決して不可能ではなかった。クアルはひどく拗ねるだろうし、後で存分に甘やかしてならなくてはならないだろうが。

「よっし。くよくよしてたつてしょうがないしな。なら、族長のところへ行こうぜ。早めにここを出て、昼までに少しでも歩いたほうがいいや」

何かを覚悟するように短く息を吐き、決意のこもった瞳でメツチが立ち上がった。空元気にも見える男の様子を窺いながら、サリュもその後続いた。

「おお、引き受けてもらえるか」

「はい。私どももタニルへの道中でしたので。喜んで、リスールまでお供させて頂きます」

「しかしそれでは、いささか遠回りになってしまいが……」

「日頃お世話になってる皆様のお役に立てるのでしたら、いかほどでも。むしろ一夜のご恩を返せる機会を頂き、ありがたいほどでございます」

「嬉しいことを言ってくれる。メツチ殿、感謝するぞ」

喜色を浮かべる族長と、神妙な態度でそれに応える商人のやりとりを白けた気分で聞きながら、サリュは同じ心境にありそうな表情をしている人物に気づいた。半眼で長の隣に佇む部族の少女も、目の前の寸劇のくだらなさには辟易している様子が見て取れる。

族長の娘という立場にある人間が、なぜこの場に同席しているのか。それについてある想像をサリュはしており、実際にその通りになった。

「では、是非に頼みたい。リスールにはこのユルヴが向かう」

「ご息女が？」

気づいていなかったはずもないだろうが、わざとらしくメツチは驚いてみせた。

「今回の件でひどく憤っていな。自分が行くと言って聞かんのだ。若い、話を聞く連中には顔も知れている。弓の腕も立つのだが……」

言葉を切り、族長は顎鬚を揺らした。威厳ある顔つきに一瞬、父親の素顔がかすむ。

「生まれつき、短気な性分なところがあってな。ご面倒をかけることがあるかもしれん。よく言い聞かせておくので、よろしくお願いできるだろうか」

「かしこまりました」

男親の気持ちを汲み取るように誠心のこもった頷きを返し、メツチは仏頂面で立つ少女へと向き直った。

「改めましてご挨拶を。メツチと申します。リスールまでのご同行、よろしく願います」

「……ユルヴ」

目線をあわせずに答え、それきり口をつぐむ。族長が深々と嘆息した。

「すまぬ。……今、旅の間の食料を用意させている。水は、途中の水場で汲んでもらえるとありがたいが」

既に準備が進んでいる手配りの良さが、話が断られるなどと考えもしていなかったことの証明だった。今となつてはそれすら隠す必要もなくなったということだろう。それを聞いたメツチも、表情一

つ変えることはない。

「はい、そのようにさせて頂きます」

「では、よろしく頼む。道中気をつけられよ。ユルヴ、よいか。決して気をはやらせぬようにせよ。万事は砂の流れに委ねるのだ」

「はい。父様」

幼い顔つきを厳しくした小柄な少女が外に向かう。族長に一礼したメツチが続き、その後ろをサリュユが歩く。その背中に族長の声が届いた。

「砂の天意のあらんことを」

幕を払い、サリュユは陽射しの強まった外へ出た。見上げた空に、耳に届く声はまだない。

既に旅の用意は整っていた。荷をまとめ、すぐに出立する。集落を背にしながら、奇妙なとりあわせだとサリユは内心で考えた。

馬に跨り、隣を歩く部族の少女は刺繍布の民族衣装に身を包んでいる。外套を羽織っているが、布防具にしっかりと髪の毛をまとめた頭部は素顔が露になっている。後ろを馬車で行くメツチはだらしなく着崩しているし、一方の彼女は布防具どころか全身を布で覆った不審さだった。砂海広しといえど、ここまで統一感のない連れ合いも珍しいのではないか。

「なあ、荷物、こつちに載せちゃえば？ 馬が疲れるって」

サリユは返事をしなかった。悪意があつてのことではなく、その言葉が向けられたのは彼女ではなかった。それを言われた当の相手は、びっくりとも反応を返さない。

横目で窺った眼差しは相変わらず厳しい。砂の果てを見通そうとするかのような視線が一瞬、サリユを捉え、不快げに外された。

馬の行き脚が早まり、部族の少女が先導する格好になる。代わつて後ろから馬車が追いつき、サリユの隣に並んだ。

「……感じわりー」

男のぼやきにサリユは応えなかった。その彼女へメツチが訊ねる。「で、どうしてあなたはわざわざ歩いてるんだよ？」

サリユの積荷は商人の荷馬車に預けている。手綱を曳くコブつき馬は常の枷から解放されたというのに、機嫌の良さも見せずいつも通りの眠たげな半眼でいるが、せつかく空いたその背に跨らないのは何故かというのは確かに当たり前の疑問ではあった。

彼女がコブつき馬に乗らないのは、今は姿のない砂虎のことを考えたからである。あの若い砂虎にはひどく子どもっぽい部分があって、自分に己以外の匂いがつくのをはびどく嫌うのだった。もう一年以上共に旅をしているコブつき馬の臭いさえ、感づけば鼻を鳴らして何度も頬をこすりつけて臭いを上塗りしようとしてくるから、後のことを考えて彼女は徒歩を選んでいる。

そうした理由を細々と説明するのは面倒だった。クアルという存在は先を往く少女には知られていない。サリュの反応は自然、男の問いかけを無視する形になり、二人ともに返事をもらえなかったメツチはいよいよもってふてくされたように唇を尖らせ、やけばちに唄を歌いだした。

どこかで聞いたことのある唄だった。耳障りのよい曲の調べが途中で転調し、ああ、と思い出した。タニルで食堂の若い女性が一節を口ずさんでみせた、あの唄だった。

唄は男性と女性それぞれから問いかけるように続いていく。背景を詳しく知らないサリュには状況を掴みきれなかったが、それは恋歌であるようだった。

遠くにあつて互いに互いを想い、繰り返される問いかけと恋慕。うっとうしいほどの情感に今ひとつ同調しきれないまま、サリュは足を進める。

反応の悪い二人と数頭を虚しく聴衆に、男の歌声が風によって溶けていった。

集落からすぐの水場で水を汲み、リスールまでの道のりへ出る。

リスールは南を走る河川水路、その手前に細く横たわる砂の峡谷をトマス側から見て入り口近くにある。岩礫が集い、複雑な異観を作るそこは砂海に比べて安定した地盤であり、水路沿いの航路ともなっている。むしろ、その流れ、ぶつかりあつて安定する地層に着

目して近くに河川が作られたという方がこの場合は正しいが、そこを使う商人は決して多くない。

理由は簡単だった。あくまで水路に沿って存在する為、あえて河川を使わない利が少ない。かかる税を免れられることは大きいが、それ以上に入り組んだ地形に潜む獣や野盗から襲撃を受ける危険があった。それでもその陸路を選ぶのは、よほど腕に自信があるか、単純に金がないか。それともただの命知らずかになる。

その峡谷まで降りず、砂海を西に抜けてリスールに向かうという話を伝えられ、サリュは布防具の下で眉をひそめた。

「……危険では？」

「問題ない」

部族の少女の返答は素っ気ない。

「この辺りのことは知っている。迷うことはない」

砂海とは極力、避けるべきものだというのが砂を生きる人間の常識である。例えどれほど精密に描かれた地図でも、それが今なお正しいかどうかはわからない。夜になれば空に輝く星を見て場所を確認することもできるが、そのできない昼間の数刻のうちに、あたりの風景ごとどこかに流されてしまうことすらあるのが、流れる砂の恐ろしさだった。

もちろん、砂海はどこにでもあって、それを避け続けることはできない。しかしだからこそ、安全だとわかる陸路があつてなお、それを選ぼうとしないのには抵抗があつた。

サリュはメツチを見た。男は肩をすくめてそれに応える。部族の人間が砂を侮るはずがない。違和感を抑え、少女の言葉に従おうとしたサリュに、その相手から悪意のこもった声が届いた。

「砂が私も知らない変化をするなら、それならそれで、お前を射る理由になる」

吐き捨て、話は終わりだと前を向く。メツチが首を捻った。

「……なんのことだ？」

短く吐いた息と共に、サリュも黙った。

それからは誰もが口を閉ざして歩き続けた。最も日差しのきつい時間帯に身体を休め、その間にユルヴは方位を調べている。中央に置いた小石から八方に紐を伸ばし、時間が経ってそれぞれの歪み具合から周囲の砂の流れを確認するその手法は古くから知られているものだったが、あまりにも大きな流れの中にあつてはそれを見落としてしまうこともあり、今では使い古されていた。

太陽が空を下り始めた。歩みを再開し、日が落ちる前に彼らは大きな岩陰のもとにたどり着いた。砂海を流れる飛び地のような、そこには多くの人間が夜を過ごした跡が残っていた。

サリュは驚いた。ユルヴが正確にこの場所を目的としていたことがわかったからだ。方位磁器や量傾器といった道具も使わず、ただ砂の流れだけを見て砂海に浮く一片の岩島に辿り着いてみせるなど、普通できることではない。

「井戸は枯れているが、砂海で寝るよりはマシだろう」

誇るでもなく語り、淡々と野営の準備を始める。サリュとメツチもそれぞれ馬を繋ぎ、水と餌をやり終えた頃には夜がやってきた。

黄土が黄金を纏い、赤色に落ちた後に闇が訪れる。固形の燃料から熾した焚火を囲い、三人は夕食をとった。干した肉と野菜をかじるだけの簡素な晩餐の間、ユルヴは険悪な気配を振りまき、サリュも沈黙を貫いている。メツチがげんなりと呻いた。

「あんたらさあ、陰気にもほどがあるんじゃないか？」

夜明け前に歩き出す為、早々に寝入ることになった。火を絶やさないうち一人が夜番について交代で休息しなければならぬが、順番について問いかけても少女が何も答えないので、まずはサリュとメツチが休むことになった。

砂漠で寝るのに、クアルが近くにいないというのはあまり経験がない。毛皮の物足りなさや少しの不安を抱いて、サリュは薄地の毛布にくるまった。昼間の熱を失いつつある砂の感触を覚えながら、意識を落とす。

心配は感じなかった。

不意に耳元を裂いて飛来した音に、サリュは目を見開いた。焦点が混乱する。視界の端に何か細長いものが見えた。先端に鳥の羽が添えられた、それが矢羽であると気づくと同時に飛び上がり、彼女は前方の射手へ短刀を構えた。

「なにを」

たった今放ったばかりの弓を下ろし、不機嫌そうな表情のままユルヴが顔を背ける。追及の口を開きかけ、ふとサリュは地面に突き立った矢の下に蠢く影に気づいた。甲殻に覆われたそれは、赤蠍と呼ばれる砂海の生物だった。長く伸びた尾に毒を持ち、打たれて対処が遅ければ死に至ることもある。

矢はその背中を正確に貫いていた。サリュは焚火の前に座る少女を見た。

「ありがとう」

あれだけ敵意を向けてきていた相手が、自分を助けてくれた理由がわからない。困惑した意識でとりあえずの礼を述べると、ユルヴは憎々しげに答えた。

「見過ごして、後で崇られても困る」

半ば呆れる気分でサリュは瞳を瞬かせた。どうやらそれが相手が自分を助けた、真正正銘の本音であるらしかった。くすりと笑みが漏れ、少女が柳眉を逆立てる。

「何がおかしい」

首を振り、サリュは改めて告げた。

「ありがとう。ユルヴ」

顔をしかめて押し黙る彼女から空へと視線を移すと、右側の欠けた月が一刻ほど移動している。

「見張りをかわるわ」

「必要ない」

「……なら、メツチを起こすから。私が信用できないなら、それで休めるでしょう」

「信用できないのはそいつも同じだ」

ユルヴは言った。

「なぜ？ 彼は、あなた達とつきあいのある商会の人間なのに」

問いかけに、しばしの沈黙の後に少女は答えた。

「奴らは砂を崇めない」

あきらかな蔑みの感情を込めて部族の少女は言う。

「奴らは天意に抗い、砂を騙している。そんな奴らを信じられるものか」

「砂を、騙す？」

「そいつらは砂と生きることを否定した連中だ。誰のものでもない水を独占して、水路などというものまで作ってわたし達を縛りつけて。今度は、新しい水場が見つかったからまた追い出すつもりか？ ふざけるな」

静かな怒気のコもった声を聞きながら、サリュはケッセルトの言葉を思い出していた。流れろという自然の命令に対する反逆。砂に逐われて生きることをやめ、地面に打ち込んで生きていく為の。

今までに出会ってきた人々と、部族と呼ばれる人々の決定的な差をサリュは感じた。

彼らは水にしがみつかないのだ。水源が沸くのも枯れるのも全て自然の意志であり、それを享受する。一方、街に生きる人々はそれらになんとか対抗しようとする。もちろん、砂の圧倒的な暴力は人間の些細な努力など全く介さないが、それでも彼らの生き方は

いつか砂を御そうとするそれだ。

その数少ない成功例の一つが、水源同士を結んで存在する水路だろう。各地の水源を結ぶ長大な河川は、全て人の手によって繋がられている。

二つの生き方のどちらが正しいか、彼女にはわからない。砂に抗おうと考えることは傲慢なのか、あるいは砂に従うのは諦観か。ただ、一つだけ言えることがあった。

丸まって寝息を立てる商人の男を眺めながら、サリュは呟いた。

「……私も、好きじゃない。彼らのような人達は」

脳裏に様々な人々の顔と、こちらを見る眼差しが浮かんだ。そのほとんどが彼女を恐れ、拒絶するものだった。最後に憎悪の孕んだ双眸を思い、瞳を閉じる。

「なら、どうして一緒に旅をしている」

目を開けた。焚火の灯りを受け、赤々と輝く厳しい視線に答える。「今朝も言ったわ。人を探してるの。その手がかりを彼の知人が知ってるかもしれないから、それを聞かないと」

「そういえば、そんなことを言っていたな。なんと人間だ」

「リト。若い、背の高い、茶色の髪と瞳の。……知ってる？」

少女は首を振った。苦い笑みを浮かべ、抱えた膝の上に伏せて、サリュは言う。

「私はそれだけなの。それだけでいい」

焚き火の中で、燃料に使われた干し草が小さく弾けた。

「……お前の名。本名か」

ユルヴが訊ねた。サリュは答えた。

「……ええ」

「意味を知っているのか」

「知ってる」

顔を持ち上げ、焚火を見つめながらサリユは言った。

「死の砂。あなた達はそう呼ぶのね」

信じられないとばかりに顔を歪め、ユルヴは苦々しく首を振った。
「知っていて、よくも名乗っていられる」

「……そうね」

「その目は。……そのせいで、そんな名前がつけられたのか」

「多分。気づいたらそう呼ばれていたから、わからないけれど」

淡々とサリユは答える。それが意外なようにユルヴが首を傾げた。
「憎んでいないのか。名づけた相手のことを」

「ええ」

「理解できない」

即座に反発する口調が微妙に変化していた。食いかかる声から作
った堅苦しさが消え、年相応の素直さがにじんでいる。

「あなた達のところでは、死の砂はなんて言われているの」

「……父様が言っていただろう。砂隠しの後に訪れるものだ。砂が
人を攫い、一人消し、二人消し、最後には集落を覆う。死と病と、
滅びを呼ぶ存在だ」

「アタリアとか、クルルギウ又って知ってる？」

「火と水の神、風と砂の神だろう」

ケッセルトの言った通り、やはりこの辺りの土俗信仰に残ってい
る言葉らしい。しかし、ここから遠くない場所にあった集落に住む
セスクはサリユという言葉の意味を知らなかったのは、何故だろう
か。

「あなた達は、ずっと昔からこの辺りを遊牧してるの？ 彼は、ど
こから流れてきたらしいって言っていたけれど」

「大昔、祖先達は東から来たという話なら聞いたことがあるが……。
変なことを聞くな。何が言いたいんだ」

怪訝そうな少女に、首を振ってサリユは言った。

「ごめんなさい、ちょっと気になっただけ。……やっぱり、休まな

い？ メッチが起きるまで私が起きているけれど」

部族の少女は一瞬、思案する表情を浮かべ、それから焚き火の反対側で眠る男に視線を落としてから、頷いた。

「……休む」

サリユはほつと息を吐く。

「よかった」

「その男に声をかける時にわたしも起こして」

「私の次は彼の番だから、終わるまでそれから一刻くらい眠れるけど」

「わたしはそいつを信用していない」

背を向けて横になる少女の言葉を反芻し、サリユは口元を緩めた。今の言い方はつまり、自分のことは少しは信用してもらえたということだろうか。嬉しいが、それを声に出せばきつと不快に思われるだろう。それでやつぱり寝ないなどとへそを曲げられても困る。彼女は布防具の下で笑みを抑え、天を見上げた。

夜空には降って落ちてきそうな星々が無数に輝いている。

今頃、こうして空を見上げているだろうか。クアルや、あの人も幾人かの顔を思い出しながら、サリユは弱まりかけてきた焚き火の世話に戻った。

一刻半程してからメッチとユルヴを起こし、サリユは彼らと交代に眠りについた。

次に目覚めたのはまだ空が白ける前で、毛布の隙間から忍び寄る寒さに身が震え、それが意識を揺らした。半身を起こした先の焚き火で、沈黙して火を囲んでいる二人の視線が彼女を見た。

「よ。おはようさん」

メッチが焚き火の上から注いだ碗を渡した。受け取った手のひらに温もりが伝わる。白湯を口に含むと、蕩けるような水気が体内に

広がった。

「ありがとう」

「起きるかい。そろそろ日が昇りそうだけど」

晴れの日では太陽が姿を現す直前に最も気温が落ちる。昼間、日差しが強い時間帯を避けて早朝に歩くことは旅慣れた者に多かった。最も睡眠時間が少ないはずのユルヴに向けて、サリユは訊ねた。

「休まなくて平気？」

「大丈夫」

仏頂面で頷き、火の片付けに入る。馬の様子を見に行つたユルヴからサリユへとメツチが視線を向けた。ひどく驚いた表情になっている。

「……なんか、仲良くなつてないか？」

「そう？」

「気のせいならいいけど。いや、絶対そうだって。なんかあつたる」
「商人は信用できないわよねって、少し話しただけよ」

決して嘘を言ったわけではない。その言葉を聞いたメツチが顔をしかめる。サリユは立ち上がり、防寒に巻いていた布を巻き取りながらコブつき馬へと向かった。彼女の後ろで若い商人がぼやいている。

「……これだから、女ってわけがわかんねえ」

餌をやり、水を飲ませた後も、すぐに出発とはいかなかつた。

コブつき馬はともかく、ユルヴの乗る馬は食後すぐの運動は控えさせなければならぬ。横ばいになった馬の腹を優しく撫でる彼女を眺めながら、サリユはコブつき馬のコブを押し弾力を確かめた。コブつき馬の栄養状態はコブに出る。十日以上飲まず食わずでも生きていけるほどの脂肪がそこには貯められていて、栄養が体内から失われる程にそのコブも高さを失っていくのだった。砂漠に出たのはまだ昨日のことでもあり、コブには充分な色つやと硬さがある。

結局、彼らが歩き始めたのは東の地平に炎の星が姿を現した頃になつてからだつた。

まだきつさのない陽光が世界を洗い、刻一刻と闇が払われていった。風はなく、見晴らす視界に動くものもない。既に短草地帯を抜け、穏やかに上り下る砂地を歩きながら、サリュは隣を歩くユルヴに訊ねた。

「今日までに着けそう？」

「そろそろ山岸が見える。その向こうが、リスール」

砂丘を上がつた彼らの視界に遠く黄土色と異なる色合いで連なる丘陵が見えた。

「わたし達は大蛇の通り道と呼んでいる」

流れる砂が集い、盛り上がった地面がそれを形成していた。岩礫と、それに含まれる貴重な鉱物資源が積み重なつてできた地層は、砂海と砂漠を見た目で区別できる数少ない自然の在り方だつた。

航路としてだけでなく学術的な意味でも大きな意味を持つが、砂漠にあつて砂以外の巨大な存在感は、まずそれを目の当たりにする人間に大きな安心感を与える。先日、その蛇の道中を歩いてきたサリュではあつたが、改めてそれを眺めて自然と深いため息が漏れた。「あの丘は、ボノクスまでずっと繋がつてるのかしら」

という質問には、ユルヴは答えなかつた。代わりにメツチが答えた。

「そういうわけでもなかつたはずだぜ。途中で切れたりしてる。けどまあ、かなり長く伸びてるのは確かだな。少なくとも、タニルの近くまではさ」

そして、それに沿って河川が掘られているのだ。自然のものではない、それを成し得るのにいったいどれほどの時間と労力が費やされたのか。サリュにはまるで見当もつかない。

「……人って凄いのね」

きよとんとしたメツチがサリュユを見た。部族の少女は何も言わず、不快そうに顔をしかめている。

その日の夕刻の内、彼らはリスールへ辿り着いた。

峡谷の町と呼ばれるリスールは、トマスからボノクスへと大回りに掘られた河川のほとりにある。元々が水路を行き来する船への物資の運搬と税金の徴収を目的とした関所としての意味合いが強い町ではあったが、水源と水源を結ぶ河川、そこから枝分かれして広がっていく支流の最も“上”にあるということで、規模としては決して小さくない。

部族達が蛇の道と呼ぶ陸路に通じる北部には治水下における様々な制約を嫌う人種も集まっていたが、一方、領主や貴族、名の知れた商会の拠点などは概ね南部に構えられている。

街に入り、雑然とした通りを歩きながら、サリュはメッチからそうした町の特徴について説明を受けていた。頭に浮かんだ疑問を口にする。

「どうして南に？」

「そっちが安全だから」

メッチは答えた。

砂海と砂漠の境目をかたどって盛り上がる丘陵。河川水路はそれに沿って続いている。故に砂の侵食が起こりうるのも、まず丘陵の側からと考えられているのだった。

「金持ちは皆、南側さ。わかりやすいだろ？」

北側から町に入ってから、探るような視線が消えないのはそうした理由もあったのだろう。人の通りはあるが、あまり治安の良い雰囲気ではない。メッチの商会の建物も南側にあるという話を聞き、サリュはふとクアルのことを考えて不安に思った。河川に隔てられ

てしまえば、易々と会えるわけにはいかなくなる。防砂具の奥の表情を察したように、メッチが言った。

「とりあえず宿はこつち側でとればいいか？」

何気ない男の表情を見つめ、サリュは黙って首を頷かせた。メッチは、馬から降りて手綱を曳く部族の少女に視線を移す。

「うちの商会の宿があるからさ、そこでいいかい」

「断る」

ユルヴが言った。

「カハニツタという男の宿がこちらにあるはずだ。そこがいい」
提案ではなく、決定を告げる声だった。

「へいへい。……場所はわかりますか、お姫様」

「わからない」

顔一杯に渋面をつくり、メッチが盛大なため息と共に首を振る。

「んじゃ、ちよつとそのあたりで聞いてくるわ。馬、見ててくれよな。……つたく」

馬車を脇に止め、頭をかきながら歩いていく男の背中を視界に入れながら、サリュはユルヴに訊ねた。

「そこにあなたが話を聞く人が来ているの？」

「そのはずだ」

濃くはつきりとした睫毛を伏せ、やや勢いの落ちた声が続く。

「大切な、友達なんだ。……ノカは」

その名前の人物が誰のことを指すのかは、訊ねるまでもないことだった。行方をくらませた家族と親しかったからこそ、ユルヴは自ら町に出向きもしたのだろう。情報を知る人間がいるなら、一刻も早くそこに向かいたいという気持ちはサリュにも理解できる。もちろん、彼女自身がそうだったからだった。

メッチを商館に連れて行き、彼らしき人物のことを知る相手を紹

介してもらおう　のんびりと通りを歩く男を追いかけ、首根っこを捕まえてすぐにでも彼の商館に駆け込みたい衝動をサリュは必死に抑え付けた。

大丈夫だ、と自分を落ち着かせる。商館は逃げない。たとえ話を聞くのが半刻早まるうと、街に来てすぐに出発しては体力の心配もある。　例えさほどの疲れがなくても、だ。焦るべきではない。

サリュは鼓動を平常のそれに努め、自分と同じように焦慮のただ中にいる少女に向かって言った。

「手がかり、見つかるといいわね」

鋭い視線が見上げるのを感じて、首を振る。

「ごめんなさい。悪気で言ったわけじゃないの」

死の砂の名前を持つ相手から言われたところで、ただ不快なだけだろう。

沈黙が続く、しばらくして通りの一件からメツチが姿を現した。無事に宿の在り処を聞くことができたのか、頭の上で合図をしながら戻ってくる男を眺めながらぼつりとユルヴが言った。

「まだ信用はできない。けど、嘘を言っていないことはわかる」

サリュが省略された主語について考える前に、部族の少女は続けた。

「奴は違う。あいつは嘘をついている」

「……商人だものね」

言葉巧みに商談をかわし、器用な手先口先で儲けを生み出す。砂の大地で物流を担う商人とはしたたかで狡猾な生き物だった。口さがない者の中には、彼らを砂群　コボイと例える者もいる。自身過去に騙された経験を思い出しながら同意するサリュにちらりと見た眼差しで、ユルヴが冷えた言葉を放った。

「昨日の夜、あいつは寝た振りをしてわたし達の話聞いていた」
まさか、と言いかけた言葉をサリュは飲み込んだ。

ないとは言えない。ありえることだった。しかし、それならば、

今朝方何食わぬ顔で話しかけてきたのも全て演技ということになる。彼の態度を見れば、とてもそうは思えなかったが。

彼は、商人だ。

だが、だとするならば

彼のあの態度は、いったいどこからどこまでが作られたものになる？

「お前も気をつけるべきだ。あの男は信用できない」

職業のくくりではなく、個人を指して少女は言った。

二人の少女が顔を向けた先で、笑顔の商人が手を振りながら歩いてきていた。

その宿は河川近く、通りを一本入った先にあった。一般的な建物と同じく、正面は木造でなっている。古びた木板に「カハニツタの宿」と書かれた文字は、かすれて半ば読みきれなくなっていた。

集落や村では移動式住居に継ぎ足す形で改築部分を建てられることが多いが、河川沿いの場合にはどうなるのだろうと考えながら既にコブつき馬を繋ぎ、近くに置かれた水瓶から水を与えておく。それぞれ自分の馬の世話を簡単にすませたメツチとユルヴの二人とともに建物へ向かい、砂避けの布をめくって両開きの戸を押して中へ入ると、暗く窪んだ奥の向こうで一人の男が机に肘をついている。

「いらつしゃい。泊まりかい、休みかい」

確かに宿の外観は一時の密事に使われそうな装いではあった。しかし、連れた二人の格好で商売女だと判断したわけではないだろう。メツチが何か答える前に、硬質の声でユルヴが口を開いた。

「シャコウという男が泊まっているか」

どう見ても三十にも届かない年齢にしか見えない宿の男は、それを聞いてにこりと微笑んだ。

「泊まりかい、休みかい」

「……彼の部族の長からのものだ。わたしはアンカの族長セオイカの子、ユルヴ。シャコウに取りついで欲しい」

たたんだ羊皮紙がとりだされ、卓上に広げられる。それを一瞥もせず、男は微笑のまま答えなかった。肩をいからせて、ユルヴがさらに詰め寄りかけるのを、ため息をつき、彼女の肩に手を置いたメツチが一步前に進み出た。

「泊まりだ。二部屋、続きで」

カウンターの男は笑みを強めた。

「毎度。飯はどうするね」

「夜だけ頼むよ。ああ、部屋で食うから、できたら呼びに来てくれ。取りにいくからさ」

「当然、前払いだろっね？」

「わかってるよ。とりあえず、明日の分まで。サハンコユ銅でいいかい」

「銀貨一枚だつてこつちはいいけどね」

「まだ着いたばかりで、割比も見えてないんだよ。釣りをちよろまかされてたまるかってんだ」

「小銭使いは大成しないぜ、お兄さん」

「貯めた小銭で溺死できたら本望だつつの」

メツチが金を払い、その硬貨の汚れや欠片具合を一枚一枚念入りに確認するようにしてから、男ははじめて卓上に視線を落とした。

「シャコウね。それっていうのはあんたと同じ、部族の人間かい？

「なら、確かに四日前からうちに泊まってるな」

「話を聞きに来た。部屋にいるか？」

「朝に出て行ったきり、まだ戻ってないと思うね」

「嘘ではないな」

声音を抑えたユルヴの言葉に、肩をすくめて男は言う。

「お客に嘘を言っただうする。ま、帰ってきたら話をつけとくよ。

毎晩、帰ってはきてるから、遅くとも夜になったら会えるんじゃないか」

「……頼む」

ユルヴが引き下がり、積荷を抱えなおしたメツチが訊ねる。

「部屋は？」

「二階の奥を使ってくれ。向かい合わせでちょうど二部屋空いてるよ」

「わかった。……随分若いよな。あんたがここの主人？」

二十歳程度のメツチの言葉に、男は微苦笑を浮かべた。

「親がおつ死んじまつてね。おかげで奥さんもまだなのに所帯持ちさ」

「そつか。悪い。短い間だけど、世話になるよ」

「商人さんがわざわざどうも。今後ともごひいきに」

「そいつは今日の夕食次第だな。せいぜい腕をふるってくれよ」

「はは。そうするよ」

二階の廊下で別れ、サリュとユルヴが同じ部屋に入った。

決して手狭ではないが、あまり気の利いた内装ではない。宿泊より一時の密事の為に利用する客の方が多いのかもしれない。すえた臭いはなく、不潔な気配も残ってはいないが、そうした想像をしてしまうとあまり気が良くはない。

部屋の隅にユルヴが荷物を置く、その立てる物音が荒かった。気が急いでいるのだろう。気づかない振りをして自身も外套に手をかけ、サリュはすぐに戻した。扉を叩く音がした。

「暗くなるまでに向こう岸の商館に顔出してこようと思うんだけど」「行くわ」

即答だった。

サリュが受けた仕事はリスールまでの同行、メツチが商館に着くまでの契約になっている。後は彼の師匠の話の聞けば、この町に用事はなかった。出かけ際、サリュは部屋の中央に佇むユルヴに声をかけた。

「一緒に行かない？ 彼の商会に、何か話がきてるかもしれないわ」
部屋にいてもすることはないはずだった。それに、部族の少女を一人で宿に残しておくことにも不安があった。余計なお世話かもしれないが。

怒ったような眼差しがサリュを見た。逡巡の後、頷く。

メツチはユルヴまでついてくることに驚いたようだが、口に出しては何も言わなかった。夕食までには戻ることを一階の主人に告げ、外へ出る。

中央で分断された町は、岸を渡るのに船を利用するしかなかった。河川には大小様々な船が浮かび、岸には向こう岸に渡るために順番を待つ人々の姿が多い。

「橋がないのね」

気づいたサリュが言うと、メツチが首を傾げた。

「橋？ ああ、トマスなんかにあるっていう。そりゃあないさ」

「どうして？」

橋さえあれば、人が船の往復する時間を待つことはなくなる。

「理由は三つかな。ここの深さで橋なんかかけたら、でっかい船が通れなくなっちゃう。それに、なんとかして橋をかけてみたところで、河川のズレとか、砂海が変わったときに対処できない」とまあ、これらが建前。んで、本音としては、あれだよ、あれ」

「あれ」という単語を、“金”という発音でメツチは言った。

「儲からなくなるだろ？ 渡してる人間がさ」

「……それが、本音？」

「連中、ここじゃけっこうな人数がいる組合勢だからな。だれだつて自分達の縄張りを侵してもらいたくなんかないさ。当然、稼いだ金のいくらかは領主にいくわけだしな。まあ、無理に土地を盛つて橋をかけることもできないわけじゃないんだらうけど、そんな時は橋の途中に税関所ができるだけだらうよ」

「どつちにしても変わらないのね」

「いいや。橋と河じゃあ、全然違うね。例えばな。暴動が起きた時、橋の関所なら大勢でかかれれば破られちまうだろ。でも、河ならそもいかない」

彼の言わんとすることを理解して、サリュは眉をひそめた。

船さえ引き上げてしまえば、渡河には直接歩いてするしかない。川の深さが決してそれが不可能ではないものだったとしても、渡るには労力と時間がかかる。それを岸にあがったところであれば、鎮圧は難しくないだらう。あるいは幾らかの船が暴動する側にあつたとしても、一度に渡らせられる数は限られる。河は、その存在だけで強固な防衛線になるのだ。

メツチの口調は、まるでその出来事を前提としている口ぶりだった。サリュの表情を見た若い商人は肩をすくめてみせる。

「ま、河川の上下でだいぶ違つてのは確かさ。上が橋をかけようと努力してないってのもな。それがこの町の商売の幅を増やしてるのも事実だと思つぜ。実際、俺はこつち側の出身だしな。商売するようになつて色々痛感してるよ、そういうのは」

格差が商売の機会を産む。その理屈がどういったものなのかはサリュにはわからなかったが、頭に思い浮かべたのはトマスのことだった。あの水陸最大の商業都市にすら貧富の差はあつた。いや、それこそがトマスの成功の理由でもあると、教師役の相手はそう彼女に教えていた。

サリュには理解できない世界だった。頭ではわかつてても、納得で

きそうにない。自分の生まれた町を感慨深げに眺めている男に彼女は訊ねた。

「あなたはどうして商人に？」

メッチは子どもっぽい表情でまばたきした。笑い出す。

「生きる為に決まってるだろ、そんなの」

どっかの下働きでもしてれば、とりあえずメシにはありつけるしな。まだ若い顔つきで懐かしむように目を細める。

「殴られて、怒鳴られて。師匠に拾ってもらって、ようやく行商で一本立ちできて。生きるためには、稼がなきゃなんないだろ。誰だって死にたくねえし、誰だって貧乏は嫌だ。俺だってもちろん」

生きる為に。

確かに当たり前のことだった。誰だってそうなのだ。人が生きる為には水と食料が必要で、それはただで手に入るものではない。だから、そのために働くことは当然のことで、非難されるようなことでは全くないのだった。

それでもサリュが顔をしかめて目をそらしてしまったのは、メッチの瞳に見覚えのあるものを見つけたからだだった。燃える夕日の赤にも似た、黄金色の輝きがそこにはあった。

「……砂漠で砂を売る、か」

それまで二人の会話をただ聞いていたユルヴが呟いた。メッチが唇の端を歪める。男は大きく頷いた。

「そうとも。そこら中にありふれてる砂だって、手をかえ品をかえ売ってみせるぜ」

「砂を砂金にしてか？」

「ああ、そうさ。黄砂が黄金になることだってあるんだよ。魔法じやなくったってな」

部族の少女の皮肉げな物言いに、商人も引かない姿勢で答える。それぞれの生き方を胸にしたにらみ合いから心を離し、サリュは一

月前に出会った少年のことを思い出していた。砂の吹いた村で彼女が刺した父親の、その残された子ども。

彼女がその手で、黄金に沈めた相手。

黄金の業は既に彼女自身にも関わっている。それを嫌うことはできても、逃げることなどできないのだということもわかっていた。

船で渡る順番が来るまで、しばらくかかった。

岸を渡った先は物と人に溢れている。船着場には山高く荷の積み上げられた船が停泊し、その上に乗り込んだ体格のよい男達が掛け声よく積荷を降ろし、また積み上げていた。棧橋では商人同士のやりあう声が怒声のように響き渡り、降ろされた荷物はすぐに馬車に積み込まれ四方へ運び込まれる。足の早い品物をその場で売りに出す声もあり、それを買いつけに来た人々の姿も見られる広場は祭りの賑やかさだった。

「おい、なにやってんだよ」

先に行くメッチから声をかけられ、サリユはその後を追った。一瞬、トマスにでも戻ったような錯覚があった。

人ごみが渦巻き、二人の姿を見失いそうになる。めまいと息苦しさを覚えながら歩き、ようやく人の流れが落ち着いてほっと息をついた。彼女の隣で、ユルヴもやや辟易した表情でいる。互いの顔を見比べ、二人は首を振った。

「すごい人ね」

「……気持ちが悪い」

メッチが呆れたように笑った。

「市場なんてどこもあんなもんだろ。サリユ、あんたはトマス行つたことあるんじゃないのか？」

確かにトマスの街に滞在していたことはあるが、ほとんど外は出歩かなかつたし、市場に行ったのも一度きりだった。加えて、その時はいなくなつたクアルを探して必死になっていた。周りに気を遣う余裕などなかった。

「ふうん。ま、朝夕が一番込む時間帯だけだな。けっこう美味しいもんどか売ってるぜ。ああ、夕飯、それにしてもよかつたな」

あの人の群れのなかで食事をするなど、考えただけでも食欲がなくなる。沈黙を提案への返事に、サリュは辺りを見回した。

市場を離れ、周囲は大きな建物が立ち並んでいる。倉庫だろうか、と訊ねたサリュにメツチが頷いて答えた。

「そ。まあ大体のそこは、そのまま商館も兼ねてるけどな。とりあえず荷を運ぶためにも、市場の近くのほうが便利だろ」

実際、先ほどよりは穏やかとはいえ、通りにも馬車や人が行きかっていた。それでも河川に面した表通りとは比較にならないほど静かではある。遠くの喧騒を耳に歩き、程なくして三人は古めかしい建物に辿り着いた。

一見して土壁を用いていない木造建物だった。年季の入った造りは長くこの場にあることを示している。それはそのまま、この建物の主の歴史と伝統を周囲に誇っているようでもあった。ほとんど威圧感のある玄関扉には、警句らしき言葉が書かれている。汝、その手に掴むべきを今一度改めよ。

サリュはメツチを見た。商人は肩をすくめる。

「お前は何をしにここに入り、ここを出るのかって意味なんだとき。必死になって稼いだ金貨入りの袋を掴んでも、ノブを掴むためにはそれを放さなきゃならない。人の悪いおっさん共が好きそうない皮肉だろ」

儲けたものを捨てる覚悟を持って、ということだろうか。商人ではないサリュには、その言葉の真意は理解できなかった。ユルヴはどう感じたのかと見てみれば、はじめから理解しようともしていない仏頂面のままだった。

「ああ、もしかしたらうるさい連中がいても、相手しないでくれよな。中、ちよつとした酒くらい出るからさ。仕事終えてご機嫌なやつがいるかもだ」

両者の頷きを確認してから、メツチが扉を開けた。

食堂のような広い空間に、左右に分かれて机と椅子が散らばっている。それぞれ数名の人間が卓に座り、三人の来客に露骨な視線を送っていた。メツチが頭に巻いた布防具を取ると、声があがる。

「おう、メツチじゃねえか」

その言葉を契機に、空気が切り替わった。再びそれぞれの卓での談笑が再開され、しかしその中で幾らかはそのまま三人を捉えたままである。不可解なことに、誰がこちらを見ているのか視線で知ることはできなかった。気配が上手くごまかされている。

「なんだい。お前さんがこっちに顔出すなんて珍しいな。元気だったか？」

「それなりにね。ツアジエこそなんだよ、まだ日も落ちてないってのにもう出来上がっちゃうてるじゃないか」

鼻の頭まで真っ赤にした中年の男が声を掛けてくる。やりかえすメツチに、男は呵呵と機嫌よく笑った。

「さつき船から上がったばかりよ。酔いを醒ます為には飲むしかねえだろ」

「ほどほどにしときなよ」

手を振って応えながらメツチが歩く、その後ろをついていきながら、サリュはその中年の男が酔気のない視線でメツチを見送ったことに視界の隅で気づいた。密やかに息を吐く。容易に悟らせないまま離れない幾つかの視線といい、まるで野生の獣のようだ。いや、それよりも性質が悪い。

広間の奥、受付に男が座っていた。ひどく険しい目つきをした壮年の男だった。野盗にも似た趣と、口元に髭をたくわえた風貌がユルヴの父親にも似た風格があった。

クアガイほど名の知れた商会で一つの街の商館を預かる人間となれば、その職責は部族の長となんら遜色するところはないはずだっ

た。それを勤めあげるためには能力なり、人格なり相応のものが問われることとなる。

やや緊張した気配で、メツチが口を開いた。

「アベド館長。ご無沙汰してます」

じろりと若い商人をねめあげ、次の瞬間、にこりと男は表情を崩した。

「メツチ。よく帰ったな」

大きく両手を広げて言う仕草は、それまでの印象からは想像できないほど友好的な雰囲気満ちている。立ち上がり、男はメツチの頭を乱暴に撫で擦った。

「ちよ、やめてくださいよ。子どもじゃないんだから」

「なに言ってるやがる。ひとり立ちして三年もしないうちは、まだまだひよっこだよ」

「どうせ三年たったら、次は十年積むまではとか言うんでしょようよ」

「よくわかってるじゃないか」

豪快に笑い飛ばし、アベドという男は笑みを収めた。途端、年季の入った商人としての凄みが表情に現れる。男は並び立つ三人を等分に眺め、目を細めた。

「さて。それで、いったいどうした？ メツチ。お前さんの受け持つてる商路じゃ、こつちに顔を出すのは半年程早いはずだな」

この商館に関わる人間がいったいどれほどの数に及ぶのか。その個人個人の行商路を全て把握していることをさも当然のことのように訊ねるアベドに、メツチも居ずまいを直すように姿勢を正した。

「ええ。実は昨日、アンカ族のところで一晚、世話になったんです。

それで

「待て」

低い声で男が説明を遮った。宿屋のときのようにな乗りをあげようとしたユルヴにも手をあげて制し、アベドは周囲を窺う視線を巡らせる。その男の態度でサリュも気づいた。周囲の雑音が、わずか

にだが小さくなっている。

ふんと鼻を鳴らし、アベドは顎をしゃくって受付の奥を示した。

「とりあえず、続きは奥の部屋だ。そっちの二人にも、なにも出さないわけにもいかないしな」

「……わかりました」

男の表情には笑みが戻っているが、口調には強制の響きがあった。それに気づいたメツチの声も固い。

小部屋に通される。扉を閉め、アベドはメツチの頭をはたいた。

「この間抜け。あんなところで本題をいきなり出すんじゃないか。もつとそれとなく伝えられねえのか」

「痛え。殴ることないじゃないですか」

「馬鹿たれ。そんなだからお前はまだまだひよっこだったんだ」

大きく息を吐き、それからユルヴへと顔を向ける。

「まあ、これだけわかりやすい格好なら気づかない奴もいないだろうが。……はじめまして、アンカのお嬢さん」

「……セオイカの子、ユルヴだ」

ほう、とアベドは目を見開いた。

「族長の。これは驚いた。俺はリスールの商館長をしている、アベドだ。お父上にはいつもお世話になってるよ」

扉がノックされる。盆に木碗を載せた女性が三人の前に並べ、退出していった。碗の中には透き通った果汁水が満たされている。

「それで、そのお嬢さんがわざわざ来たってことは、例の件についてということでもいいのかね。ああ、どうぞ飲んでくれ。よく冷えてるはずだ」

「そっだ」

指し示された碗には目をくれず、ユルヴは真っ直ぐに男を見返して言った。

「例の件については、我々も心を痛めている。行方のわからない家

族の搜索については、全力であたっているところだが、それについて話が？」

ユルヴは首を振った。

「今回、私はあなた達に会いに来たわけではない。そちらはそちらで動いているように、こちらはこちらで動いている。それだけだ」

「なるほど。……では経過のご報告は、お父上に直接で？」

「かまわない。よければ、触りの部分だけでも聞かせてもらえると嬉しいが」

「もちろん。といっても、あまり大きな進展がないので心苦しいが、顔をしかめさせて前置きを告げたあとに、男は続けた。

「まず、いなくなった家族についてだが。人相書きを出しているが、今のところそれらしき人間が町に入ったという情報はなくてね。特に水路については注意しているんだが。少なくとも、船でどこかに連れて行かれたりという事態は、まだないな。これについては断言してもいい」

奇妙な自信のようにサリュには思えた。同じことをユルヴが訊ねる。

「そこまで言い切れる根拠は？」

「河で運ぶつてのは、便利で楽だが、その分かりやすくもある。

人の目も入るし、水の上じゃ逃げられない。人を運ぶにはまず使われないやり方だ」

「つまり、陸路と」

男は頷く。

「恐らくは。だがしかし、それだって限界はある。町つてのは

別にここだけの話じゃないが 人は入るのは楽だが出るのは難く、物が入るのは難いが出るのは易いからな。かくまうのにだって場所も食料も、匂いだって。こっちはともかく、北側ならあるいはそれもできるかもしれんが、うちとしてはむしろ町の外を疑っていてね」

「砂賊」

低く抑えた声音でユルヴが呟いた。

男は言葉を切り、手元の碗で喉を潤わせた。サリュも自分の碗を持つ。柑橘系のさっぱりした果汁だった。

「下手人は誰かって話に繋がるが。連中、最近は特に動きがうるさい。今までは手をだしもしなかった大商隊にまで襲い掛かるような暴れっぷりだ。まるで狂ったコボイだよ」

商人という人種はよくコボイに例えられるが、その商人の男が覚えてその言葉を使った。それに面白みを覚えた様子も見せず、ユルヴは質問を続けた。

「そいつらは、町の北にいるのか？」

男は首を振った。

「いいや。まあ、そいつらと繋がってる連中はいくらでもたむろしてるが。奴らの根城は北の峽崖のどこかって話だ。だから今まで手を出せないでいる。それについては、あんたもよく知ってるだろう」

「……現状は変わらずか」

感情を押しつぶすように、ユルヴは呻いた。申し訳なさそうにアベドが頭をかいた。

「申し訳ない」

顔を俯かせたユルヴの膝の上で、両拳がきつく握り締められている。隣に座るサリュにまで、怒りと焦りを抑えつける為の呼吸が漏れ聞こえてくるようだった。少女の静かな憤慨を見て、アベドが言った。

「これは、まだ決まった話じゃないんだがな」

伝えることを悩む表情で、目線をそらしながら口ひげを撫でる。

「今、領主にかけあっている。うちだけじゃなく、幾つかのことで連名でな。確定じゃないが、どうにか動かせそうな按配だ。上手くいけば“正式に”って話ができる」

ユルヴが顔をあげた。目が見開かれている。彼女の反応の意味を、

少ししてからサリュも悟った。メッチは、町側の人間は本質的に物事が大きくなることを避けると言っていた。表立って領主へ掛け合い、それを動かすというのなら、それはその意向と大きく異なる事態だった。

「それ、ほんとですか」

メッチが驚きを露わに訊ねた。

「ああ。今回と似たような件、アンカ族以外でも起きてるみたいだな。どうにもこうにもきなくさい。まあ、今は状況が状況だからな。砂賊のこともあるし、どうにかしておきたいってのはうちらとしての本音でもある」

労わるようにユルヴを見て、男は言った。

「だから、もう少し我慢してくれ。なにか進展があれば、すぐに連絡する」

「……よろしく願います」

ユルヴが深く頭を下げる。娘ほども離れた少女に微笑みかけ、アベドが席を立ち上がった。

「よし。話は終わりだな。メッチ、今夜はいつもの店に顔を出せよ。話も聞きたいし、会いたがってる奴もいるだろうからな」

「あ、はい。わかりました。ああ、ちょっと待ってくださいいつサリュの強い視線に気づいて、あわててメッチがアベドを引き止めた。」

「館長。ここにいる子に、うちの師匠を紹介したいんですよ。紹介状の紙、都合してもらえませんか？」

男が眉を寄せる。

「パデライをか？」

パデライ。その名前を脳裏に刻みながら、サリュは二人のやりとりを注意深く見守った。

「はい。探してる知り合いが、師匠と知り合いらしくって。俺、こ

の子に砂賊に襲われかけるとかを助けてもらったんですよ」

「そりやお前、紙くらいいくらでも用意するがな」

言いながらアベドは歩み寄り、メツチの頭を思い切り殴りつけた。

「命の恩人がいるならそれを先に言え。馬鹿野郎が」

サリュの前に立った男が、卓に手をついて深々と腰を折った。

「礼儀の知らない奴で悪い。我々の仲間を救って頂いて感謝する。

商會を代表して礼を言わせてもらう。ありがとう」

「……いえ」

誰かに頭をさげてもらうことには慣れていなかった。そっけなく答えるサリュににこりと笑い、男が手を差し伸べる。戸惑い、それに応えられないでいるうちに、男が引き戻した腕で頬をかいた。

「ああ、悪い。女性相手に商人の作法を押し付けても悪いな。気にしないでくれ」

「どうしてわかったんです？」

頭を押さえながら訊ねるメツチを振り返り、男は呆れたように言った。

「アホ。子なんて言えば誰だつてわかるだろうが」

「あ、なるほど」

若い商人の迂闊さに、サリュはため息しか出ない。

一度部屋から出たアベドが筆と紙を携えて戻ってきた。

「メツチ。手紙は俺が書けばいいか？」

「あ。それじゃあ、お願いします」

メツチではなくアベドがそれに書きつけ、丁寧に折って封をする。使われた紙は羊皮紙ではなく、すいて作られた製紙だった。

「パデライはこの西、境の町ワームにいる。ついでにその商會連中に、旅に必要なものを全て提供するよう一筆書いておいた。礼代わりに使つてやつてくれ」

紹介はともかく、物資まで無償でというのは思わぬ厚遇ぶりだった。疑問に答えるようにアベドが口元を歪めた。

「仲間を助けてもらった礼さ。あんたが無事、探し人に出会えることを祈ってるよ」

「……ありがとうございます」
礼を言い、サリユは男から手紙を受け取った。

境の町。確か、トマス水源とボノクスからの水源、両方から流れる河川の交わる場所だっただろうか。そこにいけばあの人、かもしれない人物の手がかりが聞ける。自然と鼓動が早まり、手が震えるようだった。

ユルヴの視線に気づく。部族の少女は自身の想いを抑え、サリユへ微笑んでみせた。

「よかつたな」

何かを言いかけて、結局サリユは何も言えなかった。黙って頷く。話は終わりとばかりにアベドがぱんと手を打った。

「さて、お前さん方、今日の夕食の予定は決まっているのかい。よければうちの連中が集まる食堂で宴を開くから、ぜひ参加してくれ。メツチ、場所はわかってるよな」

「あー。ええ、場所はわかりますけど」

メツチがサリユとユルヴを見た。二人の反応が薄いことを確認して、苦笑う。

「すいません、宿のほうで頼んじゃって。それに疲れてるんで」
アベドはまばたかせ、それから鷹揚に頷いた。

「ああ、なるほど。それは無理には言えないな。じゃあお前だけでも来い。まさか来ないなんて言わないだろうな？」

「わかりました。行きますよ」

二日連続での酒宴は気が重いのか、肩を落としたメツチの背中を叩きながら、アベドが部屋を出る。それに続くユルヴの後ろを歩きながら、サリユはふと気づいた。彼女の前にあった碗は、最後まで手を出されないうままだった。

メッチはそのまま商館に残って商人同士の夕食に連れ出され、サリュとユルヴで向こう岸に戻るようになった。

「ったく。なんでわざわざ向こうで宿なんてとってやがる。うちの宿がいくらでもあるだろうが」

「色々あるんですよ、もう」

事ある毎に叩かれる頭をかばうようにしながらメッチが言い、サリュを見た。

「なあ、今日は泊まっていくよな？」

「……どうして？」

「いや、だって俺の方からまだ依頼のお礼渡せてないし。それに、夜から出るのは危険だぜ。砂賊の話、聞いてたろ」

メッチの言葉に同意するようにアベドが頷いた。

「船も夜になれば接岸して休むからな。ここからワームまでは下流だから、急ぐなら朝一番の船に乗ればいい」

言われるまで、サリュはやはり今日のうちに町を出ようかと考えていた。元々、船を使うつもりはなかった上に、クアルにもすぐ会いたい。なにより一刻も早く、少しでも彼の手がかりへと近づいていたいという想いが強かった。

しかし、無用な危険は避けるべきだという商人達の言葉は恐らく正しかった。長旅の疲れがあるわけではないが、これだからそうではないという保証はない。一晩は身体を休めるべきだった。

それに 一人どこかへと遠い視線を投げかけているユルヴを見て、サリュは頷いた。ほっとしたようにメッチが笑う。

「よかった。礼もさせないうちに消えるとかよしてくれよな。そいうの、商人にとっちゃ一番の恥なんだぜ」

それを聞いたアベドが、くつくつと笑った。

「いっちょまえに商人を語るとは、お前も成長したもんだ」

「からかわないでくださいよ。それじゃあ、俺、今日は遅いかも知

んないけど。明日の朝のうちには戻るからさ。水と食料も補充しなきゃだろ？ それまで待つてくれよな」

頷き、サリユは先を歩き出したユルヴの後を追った。

無言のまま歩き、船を待つ人の列に並び、幾ばくか揺られて対岸に着く。最後まで互いに沈黙したまま、宿の建物に入ってはじめてユルヴが口を開いた。受付で暇そうな若い主人に一言、

「帰ったか？」

男は肩をすくめた。

「まだだな。飯を食ってから戻るんじゃないかと思うがね」

「……戻ったら教えてくれ」

無然とした声で言つて、階段をあがっていく。主人に、夕食の準備は二人分でよいことを告げ、サリユも階段へ足をかけた。

部屋に戻ると、ユルヴが頭部の布防具に手をかけているところだった。勢いよくはがされた刺繍布が舞い、豊かな黒髪が波打つ。背中まで流れる髪と、その中にある幼めの容貌を眺めているサリユを、怪訝そうな視線が睨みつけた。

「なんだ」

「ごめんなさい。長い髪つて、あまり見ないから」

良く手入れの届いた長髪となれば、それなりの身分の人間にしかありえない。ユルヴの髪はそうした人々の絹糸のようなそれとは毛色が異なるが、顔の形作りからして異なる味わい深さがあった。どこことなく、サリユはまだ訪れたことのない異国の情緒を思った。

「我々の部族では、婚礼前の女性は髪を伸ばすんだ。それだけだ」
なるほどと頷き、好奇心から訊ねる。

「ユルヴは年、幾つ？」

「……十五だ。なんだ、十五にもなつて一人身で悪かったか」

「そんなこと。やっぱり早いのね」

「お前達が遅いんだ」

部族の婚礼は早い。十代での結婚も珍しくないし、二十にもなれば子を持つているのが普通だと言われている。この時代、早婚は都市部でもまだ多く残っているが、特に部族ではその傾向が顕著だった。

理由は明白で、早くから子を産み、多く成す必要があるからだ。砂漠での生活は厳しい。どれほどの子が生まれようと、その中で何人が長く生き延びられるかはわからない。

「ノカっていう人が、ユルヴの結婚相手？」

「友達だと言っただろう。ノカは女だ」

ぴしゃりと言い、ユルヴはやり返すようにねめつけた。

「……私からすれば、お前の見かけの方がよほど珍しい。その髪、その目」

苦笑しながら、サリュも頭の布防具をはぎとった。短い灰褐色の髪と、同色の瞳、その中の異様な二重の環が露わになる。灰色の髪や褐色の肌はまだしも、その瞳の異常さは際立っていた。遠めにはわからない、しかし近くで見れば誰もが目を疑う異相。

「その外見に名前。どう考えても普通ではない」

ユルヴの言葉を受けて、自嘲するようにサリュは唇を歪めた。

「そうね」

普通ではない。彼女の言葉は文字通り正しかったから、今さら傷つきようもなかった。

「……すまない」

謝罪の言葉に顔を上げると、部族の少女が渋面になっている。言い過ぎたと思っっているようだった。

サリュは笑い、穏やかに首を振った。

「本当のことだもの。それより、お風呂に入りましょうか。河沿い

の町だから、水浴びくらいなら幾らでもできそうだし。私、下で聞いてくるわ」

「いや、私が行ってくる。休んでいていい」

人目につくことを考えてくれたのだろうか。暗がりなら外套を深く被ればそうそう気づかれるものでもないが、少女の申し出には謝罪の意味もあるのだろうと思い、サリュはありがたくその好意を受けらることにした。

しばらくしてユルヴが戻った。薪をくべれば湯も使えるということだった。薪の使用は別料金になるが、既にメツチ宛につけておいたという話を聞いてサリュは笑い、それから湯を炊いて順番に風呂に浸かり、全身の砂を洗い落とした。

サリュにとって町という存在はあまり得意ではないが、やはり湯を使った湯浴みには格別のものがあつた。全身が溶けだすほど湯船につかり、疲れを癒す。上気した肌を外套で隠して部屋に戻ると、先に湯を浴びたユルヴが夕食を取ってきてくれた。

夕闇に傾きだした木窓の明かりを受けながら、二人は食事をとった。

簡素な夕食を終え、食器を片した後にはすることもなく、広くもない部屋には奇妙な緊張感が沈殿している。シャコウの帰りを待つユルヴは木窓にかかった砂避けの布を睨み、腕を組んでいた。その反対側の藁詰め寝台に膝を抱え、サリユは火灯の輝きをぼんやりと眺めている。

「寝ないのか」

顔を向けないうまま、部屋の空気に耐え兼ねたようにユルヴが言った。

サリユはあいまいに頷いて身体を横たえた。目を閉じ、意識を落とすよう仕向けてみるが、眠れない。宿で誰かと同室で寝るといのが珍しいのでそれで落ち着かないのかと思ったが、それだけというわけでもなかった。

卓上に置いた手紙を窺い、手を伸ばして掴み取る。やや崩れ気味の文字が躍っている。クアガイ商会リスール館長アベドよりパデライへ宛てるとあった。

封をしてある中を読むことはできないが、イスム・クでは自分の窺い知れない内容の手紙を運ばされることになったから、彼女も当然そのことには気をつけていた。先ほどこれを書き付けたアベドに不審な様子はなく、書かれた内容は確かに人の紹介と物資の融通を頼む旨のものだった。

これである人に会える、わけではない。はやる気持ちを抑えるように彼女は胸の中で呟いた。メツチのいう相手が、彼と決まったわけでもない。もし彼だとしても、すぐに行方が知れるわけでも。だが、今まで全く手がかりのないまま砂をさまよっていた彼女からすれば、その手紙は闇夜の光明どころではない眩しさであることも事

実だった。

だから寝付けない。獲物を目の前にぶらさげられて落ち着かない砂虎のようだと自分を笑い、彼女は久しく会っていない気がする旅の連れのことを思った。

砂の臭いを懐かしく感じる。宿を抜け出して町の外れまで行つてみよつかと考えたが、昼間のこの辺りの様子を見る限り、日が落ちてから一人で出歩くのは控えた方がよさそうだった。あと半日もせずに再会できるのだから我慢すべきだった。クアルにも、我慢してもらおう。

何度か寝返りを打ち、それでも結局寝付くことができずに起き上がった。呆れたようなユルヴの視線を受けながら部屋を歩き、荷物から本を取り出す。寝台に戻り、適当に頁を開いて読み始めた。

集中のないまま幾らか読み進み、新しく開いた頁で黄金という単語を見つける。苦い気分と共にそれに付随する幾つかの記憶が思い出された。日没前の燃えるような砂漠。黄金の在り処と呼ばれた集落と、そこに生きる人々。それを稼ぐ為に目の色を変える商人人間の業。

想像は、最後にまだ幼い少年の憎しみの眼差しへと帰結した。サリュの口から吐息が漏れた。

「ユルヴ。あなた達の部族にとって、黄金ってどういうもの？」

眉をひそめた部族の少女は迷いなく答えた。

「わたしにとつては、やつらの象徴だ」

「メツチ達の？」

「そうだ。塩と水と、黄金に生きるのがやつらだ。やつらはそれに魅入られている」

「塩と水で生きていくのがあなた達？」

「そうではない」

ユルヴは首を振った。

「塩と水と、砂だ。それが人間が生きていく為に必要なものだ。それを忘れているから、魅入られていると言っている」

「黄金と砂。メツチは砂さえも黄金にして売ってみせるのが商人だと言っていた。」

つまりはそれが彼らの価値観の対極なのかもしれない。砂に任せて生きる部族達と、砂に抗おうと生きる人達の。

「……お前はどうかんだ」

問いかけに、サリュは抱えた膝に額を押し付けた。閉じた目につかの光景を思い出しながら、答える。

「前に、小さな集落に行つて。ある男の子と知り合つたの。そのままちよつと旅をすることになつて。その子が夕焼けの砂漠を見て言つたわ。黄金なんてどこにでもあるつて。それから、色々あつて

私は、その子の父親を殺した」

息を呑む気配はなかった。

顔を上げると、静かな眼差しがサリュを見ている。

「その子が私を睨みつける目が、黄金色だった。私も、その子も、倒れた父親も。何もかもが黄金で」

黄暖の灯りに濃い陰影を浮かべ、彼女は晒つた。

「だから黄金は嫌い。でも、そんな資格なんてないわね。あの子にそれを押し付けたのは、私だもの」

黄金を好むのでもなく、疎うのでもない。

自分はそのどちらにもなれないと彼女にはわかつていた。

「お前は……」

なにかを言いかけたユルヴの言葉を遮り、扉を叩く音が響いた。

「起きてるか。お探しの相手、帰つたよ」

宿の主人の声だった。

「今、開ける」

答えたユルヴがサリュを見て、言った。

「……よかったら、一緒に話を聞いてくれないか」

外套を被りかけていたサリュは意外な申し出に瞳をまばたかせる。

「私か？」

「ああ。眠るところだったら、無理にとは言わないが」

「それはかまわないけど。……いいの？」

「ああ。いてくれると、助かる」

否定する理由もなくサリュは頷いた。どうせ眠れなかったところではある。

ユルヴが扉を開けた先の廊下に宿の主人と、防砂具を纏った精悍な顔つきの男が立っている。

「俺に用があると聞いたが」

砂色にひび割れた声で男が言った。

ユルヴは無言で男に羊皮紙を手渡した。広げたそれを一読して、男は重苦しく頷いた。

「なるほど」

宿の主人を振り返り、手に硬貨を握らせる。

「上の談話室を借りる。しばらく人払いを頼む」

「はいはい、ごゆっくり」

廊下を去っていく背中を見送った男が言った。

「話をするのはここか、俺の部屋か。どちらにする」

ユルヴが片方の眉を持ち上げた。

「上にあがるのではないのか」

「こんなところでの密談に場所の違いなどない。だが、保険くらいにはなるかもしれない。できれば俺の部屋に来てもらえるとありがたい。窓から正面下を見下ろせる」

「わかった。そうしよう」

頷き、男の詮索する眼差しがサリュを見た。

「……そっちは？」

「部族の者だ。わたしの護衛についてきてもらっている」

黙したまま反応を示さないサリュの姿を上から下まで見て、男はふんと鼻を鳴らした。

「お守り付きとは恐れ入る。いいだろう、こっちだ」

シャコウの部屋は一階下の奥側にあった。

内装に違いはない。少ない荷物が全て片隅でまとめられていることにサリュは気づいた。考えるまでもなく、いつでも移動できる為のものだった。二階という選択も、通りを窺える間取りにもそれぞれ意図がある。男は警戒を怠っていなかった。

そうした逃げ道の確保はサリュには慣れ親しんだものだが、普通がそうとは思わない。話し合いのために使いもしない部屋を借りるのはいささか念が入りすぎに思えた。それほどまでにこの町の北側が危険なのか、単に男の性格によるものか。あるいは。外套の下で、サリュは短刀の存在を意識した。

「悪いが立つたままでかまわないか」

「問題ない。こちらで長話をしたいわけではない」

壁際に立ち、背中を預けたシャコウが首元を緩めながら言った。

「それで。聞きたいことというのは、そちらでいなくなった人間のことらしいが」

「お前が姿を見たという話を聞いた。だが、その前に確認しておきたいことがある」

一拍を置いて、ユルヴが言った。

「そちらでは、いったいいつから、何人がいなくなつた？」

長身の男が下から覗き込むような視線を向ける。

「なぜそんなことを聞く」

「どうやら本当のようだ。逆に聞く。なぜ我々にそれを伝えていなかった」

緊迫した空気が生まれた。

「さて。自分の親から、聞いていないだけじゃないか」

「いいのか？　それがお前達の部族としての正式な答えと受け取るぞ」

冷やかなやりとりをサリュは静かに聞き流していた。部族同士だというのに友好的な雰囲気ではないことを意外に思いながら、同時に納得もしている。自分の同席はつまりこの為だったのか。別に荒事になるならないというだけでなく、ただその場にいるだけで圧力に成り得る。

「正式な、とはまた、やつらのような言い草を使う」

吐き捨てた男の表情にはそれまで以上の鋭さがあった。

「二つ前に五人。一つ前に三人が消えた。全て家族ごとな」

「十人近くだと」

さすがに驚きの表情を浮かべ、すぐにユルヴは怒りの色に変えた。

「何故、黙っていた？」

「にべもなくシャコウは答える。」

「我々の復讐は我々で行う」

「お前達がそれを前もって伝えていれば、イクプの一家が襲われることもなかった」

男は薄く笑った。

「さあ、それはどうか」

「……どういう意味だ」

盛り上がった敵意をいなすように男が肩をすくめた。

「話を聞きにきたのではなかったのか。俺は別にどちらでもかまわないが」

「ユルヴ」

サリュが間に入り、少しは頭を冷やすことができたのか。沈黙し、改めて口を開いたユルヴの口調は少なくとも表面上には落ち着きを

取り戻している。

「お前が見かけたという相手について教えて欲しい」

男は懐から焦げ枯れた色の草葉を取り出した。長さのある一枚を何重にも折りたたみ、柔らかく揉んで口の中に入れたそれは噛み草という一種の嗜好品だった。特に部族の男性が好み、火をつけて煙を楽しむ者もいる。

「見たのは三日前だ。場所は渡り船。俺が乗った同じ船で、それと良く似たものを見た」

シャコウはユルヴの羽織った衣装を目で指した。部族が着るものとしては一般的で、特に変わったところはない。それが刺繍のことを言っているということに、続いた男の台詞でサリュは気づいた。

「四角に菱縁でキヨウセンの柄。まさか部族の守り柄を売り物にしているわけではないだろう」

「……他に何か見えたか？ 布地の色は？」

「あまりしつかり見たわけでもなかったからな。特に目を惹く色合いではなかったと思うが、ああ、サハの模様もあつたか」

それを聞いたユルヴが強く拳を握り締めた。吐く息が震えている。呼吸を繰り返して、ユルヴは必死に自分を抑えているようだった。

「船、と言ったな。一人だったのか？ 顔は見えたか」

「俺が見たのは一人だった。といっても離れたところに連れ合いがいたかどうかまではわからん。顔は見えていない。そちらさんのように、上からすっぽり被っていたからな。正直、刺繍布と女らしいというその二点で記憶に残っただけだ」

「部族の女が一人で町に来るなど、妙だとは思わなかったのか」

「一人かどうかわからなかったと言っただろう。それに、今だって女のお前がここに来てる。自分のような交渉役を女が務めるのかとは思ったがな」

「……船を降りてどこに行ったかまでは？」

シャコウは首を振った。

「こちらにも用事があった。悪いがそれきりだ」

「そうか。話を聞かせてくれて感謝する」

頭を下げるユルヴに、男は醒めた視線で応える。

「いや。もしそちらで知っている情報があればと思ったが。期待はできなさそうだな」

「すまない。これから情報が入れば、すぐに伝えよう」

「そうしてくれ」

「これからも、できれば連絡を取り合いたい」

控えめな態度でユルヴの出した提案には、男は首を振った。

「それは我々の決めることではない」

ユルヴが押し黙る。小さく笑い、シャコウは言った。

「明日、俺は一度集落に戻る。その時に長から何かしら話があるだろう。あんたの手紙はそういう意味だろうか？ その後なら、また機会を作ることだってできるだろうさ」

「……そうだな」

話はそれで終わりのようだった。ユルヴが扉に向かい、出る前に振り返って訊ねた。

「もう一つだけ聞かせて欲しい。事件が起きたのは二月前といたな。お前達はずっと犯人を探してきているはずだ。犯人の目星はついていないのか」

「もちろんついているさ。ここにきて、少々意外な展開になっっているが」

意味ありげな答えに顔をしかめて去るユルヴに続いて、サリュも部屋を出た。

部屋に戻ったユルヴは明らかに不機嫌な様子だった。窓際の椅子に腰を下ろし、腕を組んで一人考えに耽る彼女の邪魔にならないよう、サリュは物音に気を遣いながら読書に戻った。頁を次にめくる

前に、声がかかる。

「サリュ」

目を上げると、何かに思い悩んだ視線が彼女を見ていた。

「少し、話し相手になつてくれないか」

本を閉じ、サリュは肩をすくめて言った。

「今の話し合いのことなら、聞いていてもあまりよくわからなかったから。役には立てないと思うけれど」

「かまわない。なんでもいい。なにか気になったことはあるか？」

思考に行き詰つたなら、どんなものでも他人の意見が発想の転換の助けになるかもしれない。頭の中に先ほどのやりとりを思い出し、率直に感じたことをサリュは告げた。

「仲が良くないのね。あなた達と、他の部族」

ユルヴは苦笑いを浮かべた。

「部族というだけで一枚岩ではないのは確かだ。部族も色々だからな。血筋の遠近だけでなく、全く違う氏家とはそれなりに争つてきました」

「さっきの人のところとも？」

「そうだな。……あそこの部族、ロドリ・カミはあまり大きな部族ではない。昔はそうではなかったと聞くが、徐々に人を減らして、最近では親戚中をあわせても我々の一つの集まりに及ばない程度だ」

「戦つて負けたから。そうなの？」

「いや。彼らはこの辺りの数ある部族の中で最も頑固だった。他と馴れ合わず、部族としての生き方を貫いた」

だから衰えた、と続けた。

「彼らは町の人間との関わりを拒んだ。他の部族達は交易を始めた。一方は富み、一方は変わらなかつた。部族にはない知識。部族の持たない鉱物。彼らは戦う前に敗れた」

寂しげな口調が表情に現れていた。ユルヴは部族としての孤高を

選んだ故に衰退した一族に共感しているらしかった。

サリユは奇妙な違和感をおぼえた。そのことにユルヴも気づいたようだった。

「でも、さっきの人もその一族なのでしょう。町に来ているということは、彼らもつきあいがあるのよね」

「……ああ。最近では、彼らも町と関わるようになっていて。そうしなければならなくなったという方が正しいか。しかしそれも今代に入ってからだから、せいぜい十年程度のことだ」

自分自身の答えるその言葉に注意するように、慎重な口調でユルヴが言った。

「彼、犯人の目星はついていると言ってたわ」
不快げに顔をしかめる。

「わたし達のことを言っていたのだろう」
「ユルヴ達？」

「我々は部族の中でも最も早くに町と交易をもった一族だ。彼らからすれば部族の誇りを捨てた者どもになるのだろう。それであまりいい印象を持たれていないというのは、ある」

「ごめんなさい。わからないわ。それだけで何故、犯人に疑われるのか」

サリユは首を振った。彼女の内心では違和感が増すばかりだった。

ユルヴが眉をひそめ、ああ、と深く頷いた。

「そうか。お前は知らないのか」
ため息をつく。

「人をさらってどうなるのか。奴ら風に言うなら、それがどんな利になるか。お前は疑問に思っているのだろう」

サリユは頷いた。

「簡単なことだ。人間がそのまま奴らの利益になる」
眉をひそめる。ユルヴは続けた。

「奴らは奴隷にして使うのだ。我々を」
少女の言葉には冷えた憎悪がこもっていた。

「奴隷……」

聞かされた言葉を確かめるよう、サリユは舌の上で繰り返した。
慣れない言葉だが、聞き覚えが全くないわけではない。

奴隷とは商品にされた人間のことだった。労働力として集められ、売られていく人々とその売買を取り扱う人々。奴隷の命は所有者のものとされ、生殺与奪も他人の関与するところではなくなる。サリユ本人は知らないところではあるが、彼女自身、過去にトマスで魔女の罪に問われた時にはそうなりかけたことがあった。

その話を聞いた時、彼女は嫌な話だと思った。しかし、その奴隷にされる人間がどこから来るのかということまでは考えなかった。
文字通りそれは、遊牧の地で刈られているのだった。

メッチの言葉を思い出した。部族の人権は帝国によって保障されない。だからこそ起こりうる問題はひどく厄介なのだ。彼がその例に殺傷事を挙げたのは意図してのものだろうか。奴隷云々については、知っていて当然のことだと思われただけの可能性もあった。

違和感の元は、自分自身の無知故だった。すつきりしない気分で彼女は苦く考える。確かにそのことを前提とすれば、色々と話が見えてくる。

ユルヴがメッチ達商人や、町の人間を嫌う理由。生理的なものだけでなく、もつと深いところに根付いた敵対心が根底にはあるのだ。クアガイほどの商会ともなれば、奴隷売買をやっていないとは考えられない。例えばそれが、交易を持つアン力族を対象としたものではなかったとしても。

昼間、商会でアベドが言っていた船で運ばれた形跡はないという

話題も、いなくなった人々が商品として運ばれたことだけはまだないということだったのだろう。状況を理解するために前提となる知識がサリュには欠けていた。世間ずれしているという自覚はあったが、それにしてもひどい。タニルの領主の嘲る顔が頭に浮かぶようだった。

「ようするに、あのシャコウって人はあなた達が彼らの部族の人をさらって、町の人達に売りつけているって。その共犯者じゃないかと疑ってるのね」

頷くことさえ不愉快なのか、沈黙でユルヴはその問いかけに応えた。

「言いがかりじゃない」

「わかっている」

ユルヴが唸るように言った。

続きかけた唇の動きを止め、サリュは一瞬考えた。しかし結局は言い切ることにする。無知であることが全ての放言を許す理由にはならない。しかし、ユルヴが自分に意見を求めたのはそれを期待してのことでもあるはずだった。

「……彼らが、そうしているというの？」

敵を睨みつけるように激しい眼差しがサリュを見据えた。

「ありえない」

押し殺した声が否定する。

「彼らは、誇り高い一族だ。部族が部族を売るなどあるわけがない。あるいは、シャコウの一族が、狂言としての失踪事件を装ったうえでアンカ族の人間に害をなしたのではないか。いささか飛躍した思いつきであることは認めるが、彼女が怒りを覚えている理由をサリュは誤解しなかった。

ユルヴは誇り高い性格だ。そんな彼女にとって、他の部族とはいえそれを貶められることは、自分自身が傷つくのにも等しいだろう。恐らくはそうした疑いを抱くことすら、彼女は忌避するはずだった。

だからこそサリュユがそれを告げた意味はあった。そして、これ以上彼女を刺激する必要はない。

「刺繍のこと、言ってたわよね。それで探してた相手だってわかるのはどうして？」

話題を変えた理由を察したのか、ユルヴも感情を抑えて答えた。

「刺繍には部族毎の特徴がある。それぞれに伝わる模様を特に、守り柄という。我々で言えばキョウセンだ。模様、そして家族によっても縫い方は異なる。より細かくいえば縫い手一人一人によって。刺繍布は交易に使う重要な売り物だが、それに自分達の部族の守り柄を入れることはありえない。その柄を身につけている者は、すなわち我々の一族の誰かということだ」

ユルヴは自分の着る衣装にあしらわれた刺繍を示しながら、説明した。

「サハというのも、それじゃ」

「……ノカが好きだった。サハの鳥は、あいつが縫った刺繍に必ず入っている模様だ。あいつのものに違いない」

刺繍の存在が、最もわかりやすい身分証明になる。ユルヴの探す家族の誰かがこの町に入ったことは確かかと思いかけ、必ずしもそうではないとサリュユはすぐに考え直した。独り言のように呟く。

「商会の人は、まだ船では運ばれてないって言ってた。あれは、ここから他の町にはいってないってこと？」

町と外とを出入りする船と、町の北と南を行き来するだけの船ではどちらが多いのか。その実数はサリュユにはわからないが、監視がしやすいのは当然、町の外へと出ていく方だろう。逆に言えば、彼らも町中についてまでは目が行き届いているわけではないということになる。あるいは

「意図的に？」

ユルヴが目を細めた。彼女もその可能性について考えていること

がわかる動作だった。

やはり、ユルヴはメツチ達を疑っているのだ。同じ部族を疑わず、生き方の異なる町の間人を疑う。その理由を知り、感情的な部分でも理解できるが、同時に危険な思い込みでもあるようにサリュには思えた。

「少なくとも、あなたの知り合いの刺繡布を被った人間が町に入ったことは、確かだね」

サリュは本人だと断定しなかった。刺繡に部族や家族、また個人の作り手によつて大きな違いが見られるというなら、そのことを知る人間がそれを利用することも当然ありえるからだ。顔を隠して刺繡布を纏いさえすれば、それだけで部族の間人だと誤解させることができる。そんなことをする理由があるかどうかは、ともかく「……それだけ目立つ刺繡つきの服を着させたまま、町に入らせるかしら」

ユルヴ達の衣装の作り自体はそこまで特異なものではないが、全体にあしらわれた刺繡は人の目を惹く。もし周囲の目を避けようとするなら、その程度の配慮はするのではないかと思うが　これは考えすぎかもしれない。

サリュは息を吐いた。色々と思いつくことはあるが、思いつくだけでどれも確信には至らない。まるで見当違いのことを言っているのかもしれない。明らかに、彼女の経験不足から来るものだった。恐らくは町をよく知らない目の前の部族の少女以上に、サリュは世慣れていなかった。

「ごめんなさい。やっぱり、たいしたことが言えなくて」

「いや、そんなことはない。自分とは違う意見が聞けた。　　ありがとう」

初めて感謝の言葉を言われても、嬉しさより先に申し訳なさがサリュにはあった。誇り高い少女がそんな台詞を使うのは、彼女が知

り合いである人達を深く案じているからに違いないからだった。

「つき合わせてすまない、そろそろ休んでくれ。長旅の前にはよく身体を休めておくべきだ」

「……ええ」

頷き、寝台に向かう途中でサリュは立ち止まった。訊ねる。

「何か私にできることはない？」

部族の少女は穏やかに微笑み、首を振った。

「さっきの話し合いに同席してくれただけで十分だ。あの一族が何を考えているかはわからないが、シャコウが戻れば父様と向こうの族長とで話し合いが持たれるはずだ。その時に、我々が本気だということとは伝わっているだろう。小娘一人でもなく、共謀を疑われかねない町の人間が傍にいたわけでもない。おかげで、わたしの立場をこれ以上なく伝えることができた」

「あなたは、族長から何か言われているの？」

「父様は砂の天意に従えとおっしゃった。わたしはただ自分の思うがままに行動するだけだ。ノ力を救いたい。その行動が天意に沿ったものである限り、それは父様の意志でもある」

家族への信頼。否、もつと大きな連帯感を現す言葉に、サリュはわずかに顔をしかめた。そうした人同士の繋がりが、彼女にはない。先日の件から、特にそのことを痛感することが多かった。

自分のような人間が、手助けできると思うべきではない。先日の思い上がりとそれがもたらした結果を思い出し、彼女は寝台に横になった。

眠れずに薄目を開けた先で、部族の少女は黙して窓の外へと視線を落としている。声を掛けようとして、それが行方の知れない知人に思い悩む彼女の為ではなく、自分の為のものだった。きつく唇を噛み締めて安易な衝動を抑え、サリュは背を向けて身を丸めた。

翌日、日がまだ低くあるうちにメツチは宿に戻ってきた。

一階の食堂で朝食を食べていたサリュの隣で主人から食事を勧められると、青ざめた顔をしかめて断る。聞くまでもなく、昨夜の酒が体内に多く残って居座り続けている様子だった。

「牛乳でも飲むかい。少しは胃が落ち着くよ」

「あー……頼むわ」

主人から受け取った酪漿に口をつけながら、メツチが訊ねた。

「もう一人は？」

「眠ってるわ」

布防具の上に外套を被ったサリュは答えた。

彼女が目を覚ました時、ユルヴはサリュが床に着く前に見かけたそのままの格好で窓際に座っていた。一晚をそこで明かしたらしい少女は、全く睡眠をとっていないわけではないようだったが、サリュは自分がいるうちに少しでも横になるよう勧めた。一刻半後に起こすことを約束して、それからユルヴは寝台で身を休めている。

メツチが言った。

「そか。で、あんたは飯を食ったら、すぐに出るつもりかい」

サリュは頷いた。水と食料の補給をすませた後、そのままこの町を出るつもりだった。

「水とかならうちのほうで安く用意するけどさ。他になんか必要なものはないのかい」

旅に必要なものは最低限だけがあればいい。首を振ったサリュに男は苦笑する。

「正直、積荷を卸せばもう少し金になるんだけどね。あんたがいろいろ言うならそれでいいけどさ。……船は使わないよな？ せめて

その料金くらいつてのも、あれかあ」

「あの手紙だけで十分。ありがとう」

サリュの言葉を聞いたメツチは頬をかいた。

「あんたさ。ちよつと素直すぎると思うぜ。そんなんじゃ悪いヤツに騙されつちまうからな」

世慣れていないのはその通りだが、強引なやり口で自分を護衛に巻き込んだその当の本人に言われることではないなとサリュは思った。

細かく刻んで煮込まれた野菜の吸い物を飲み終え、サリュは席を立った。部屋に戻り、自分の荷物を物音を立てないようまとめかけて、寝台の膨らみに声を掛ける。

「ユルヴ」

返事はなく、ただ小さく吸気する音がその人物の目覚めを知らせた。

「出るのか」

「……ええ」

「そうか」

上半身を起こしたユルヴの表情は頭髪がやや乱れているせいか、普段より幼い。眠気の名残も見せず、彼女は言った。

「砂の天意のあらんことを」

集落を出かけ際、彼女の父親が使ったのと同じ台詞だった。部族に伝わる言葉なのだろうが、サリュが皮肉に思ってしまったのは、それが彼女には異なる意味合いにとれてしまうからだった。

もし砂の天意が自分にあるとしたら、それは一つしか意味をもたらない。死の砂。

なら、すぐに出なければ。今はまだ、砂の声は聞こえていないのだから。

「……探してる人が見つかるよう、祈ってる」
無言の頷きに背中を向け、扉のノブに手をかける。迷う気分を断ち切る為に思い切りよく開けた。

廊下には既にメッチがサリュを待っていた。階段を下り、その途中で旅装の男と遭遇した。

荷をまとめたシャコウが長身から彼女を見下ろした。互いに無言のまま会釈を交わす。立て付けの悪さから音を鳴らす階段を踏みながら、サリュは自分が一人で宿を出ようとしていることについて男がどう捉えるか考えた。

自分と同じように集落に戻るものと思うか、それならなぜユルヴが一緒ではないのか。後ろに立つメッチについて 明らかに部族の人間ではない どう認識するだろう。先を下りる男の表情には変化がなかったことを思い出しながら、その意味について。

一度も彼女を振り返らず宿から出て行ったシャコウの背中を眺め、サリュは頭を振る。愚痴愚痴と考えたところで仕方がない。ユルヴの思惑が上手く相手の心象に影響を与えていることを願うばかりだった。

二人の姿を見た宿屋の若い主人が声を掛けた。

「おや、ご出立かい」

「一人だけな。もう二人はまだ世話になるよ」

「それはそれは。うちの料理は気に入ってもらえたようだ」

「ああ。牛乳、美味かったさ」

舌を出しながらメッチが言った。

外へ出て厩に向かい、コブつき馬に荷をくくりながらサリュは訊ねた。

「あなたもまだあの宿に泊まるの？」

「あ？ ああ、まあな。今から場所を変えるのもあれだし、それにうちの宿に移ろうって言ったってさ、あのお姫様はいい顔しないだ

る」

首を振る。彼女の訊ねた意味はそんなことではなかった。

「タニルに急いでいるんじゃないか？ ユルヴ、昨日の晩に部族の人と話はずませてるわ。さっき、外に出ていった人がシャコウよ」
新しく湧出した水場と、それに伴う新しい航路の開拓。そこで起こり得る商売の機会を男は求めていたはずだった。つきあいのある部族に請われてリスールに来たとはいえ、ユルヴがシャコウと会った時点でメツチはその役目を終えている。

「あ、そうなのか？」

メツチは鼻の頭をかいた。

「ならよかった。ま、それでももう少しここにいるつもりだけど」
早くタニルに向かいたいと言い、そのために危険な陸路まで使つて野盗に襲われた商人が前言をくつがえせば、誰でも不可解に思う。サリユの視線を受けたメツチは照れたように、

「いやさ、これって部族の人間に恩を売れるチャンスだろ。あるかどうかもわかんない新しい水場なんかより、こっちのほうが金になるかもなつて」

男の職業を考えれば、むしろそれは正直な感情というべきだった。善意からほつっておけないなどと商人が薄ら寒い台詞を用いるほうがよほど信用が置けない。

メツチの言葉をサリユは疑わなかった。それに、と考える。ユルヴは町側の人間である彼を信用してはいないだろうが、それでもメツチのような人間がいてくれたほうがいいだろう。本当にそうだろうか。

サリユは自分が気休めにも似た思考でいることに気づいた。吐息を漏らす。

「……いなくなった人達の行方はわかりそう？」

メツチが探るようにサリユを見てから、答えた。

「昨日の今日じゃあな。水周りの情報集めに、町の出入りも気をつ

けてはいるみたいだけど」

「ここから出て行った船にはいないって言ってたわよね」

それだけは自信を持って言えるとアベドは告げた。つまりそれ以外は確約できないということになる。それについて思うところがあるというのは、昨日のユルヴの反応から読み取れることだった。故意に、あるいは失念して。利もなく全ての情報をさらけ出す商人はいない。

「そういう人達を運ぼうとしたら、その時までどこかに集めておくもの？ それとも、少しずつ移動させるのかしら」

「そりゃ、普通に考えれば。積荷はまとめるのが筋だよ。手間も、費用だってな」

人を商品とすることを前提とした話としての物言いだった。そのことについては触れず、サリュは続けた。

「でも、人を大勢匿うようなことなんて、どこでもできるわけじゃないでしょう」

それもまた商館で昨日話し合われていたことだった。食事の世話や、人が生活すれば必ず生まれる排泄物。そこからもたらされる臭いは、狭い場所に大勢が押し込まれば押し込まれるほど、周囲への悪臭も強まるはずだった。

「もちろん。だから今のところ、砂賊あたりの隠れ家が怪しいって話は昨日聞いただろ」

人を運ぶのなら水路ではなく陸路が使われるだろう。それはそれとして、昨日は話を持ち出されなかったことがある。恐らくはあえて言われることのなかったはずの話題について、サリュは一気に話を進めた。

「砂賊が人を攫うのは、どこかに引き取り先があるはずよね」

部族から直接身代金をせびるのでもない限りは。攫った部族の間は商品として、どこかに売られているはずだった。それはどこか。奴隷売買の販売経路を持つ、近くの町の商会のどれかにだ。

あるいは この町の。サリュの言葉の真意を掴み、メッチは露骨に顔をしかめてみせた。

「……まあな」

「領主への口利きは、その為の」

「そうさ。…… 奴隷売買つてのは、組合協定じゃあ別に禁止されちゃあいない。他の商会の売買内容にケチをつけるなんて、そうそうできるもんじゃない。けど、それも領主からの声がかりがあれば話は別だ。商会の不文律だつて飛び越えられる」

「同じ町の間を敵にまわすの？」

方法と、何よりその意志を確認するようサリュは訊ねた。

「当たり前だろ」

メッチの返答には寸分の迷いも含まれていない。

「アンカ族とうちは交易関係にある。そのアンカ族の人間が攫われるつてことはつまり、うちの利益への損失に繋がる。商人つてのはそういう理屈だよ。俺達はいくまで自分達の利益を優先する。それを邪魔する連中は、つまり敵だ。町の人間も部族も関係ない」

仲間や立場でなく、黄金という価値基準で行動する。サリュにはやはり、彼らが別の世界の人間に思えた。ユルヴ達の生き方の方がよほど親近感が沸くのは当然のことだった。加えて、今の彼女が感情的に傾いているのには他の理由もある。

「自分達の利益に関わることなんだ。うちだつて本気さ」

それ以上、言葉をサリュは持たなかった。自分とは異なる生き方だというだけで、相手を否定することはできない。あるいはその影に怯えている自分などより、彼らの方がより真摯にそれに向き合っているのではないかと思える部分もあるからだだった。

水と食料を積み込み、二人は町の出口へと向かった。メッチの口利きで町を出る手続きを終え、門を出る。

「んじゃ、道中気をつけて」

「……ユルヴに、よろしく」

「わかつてるって」

メツチは空を見上げるようにあごを持ち上げた。何かを思案するような表情だった。

「あのさ。これ、余計なお世話だけど。あんまり気にしないほうがいいんじゃないかな」

サリユは目を伏せた。答えを返せない彼女へ若い商人が続ける。

「探してる人がいるんだろ。だったらそのことだけ考えてなよ。あんな、そんなに器用な人間でもなさそうだし。その方がいいぜ、絶対」

外套と布防具の奥に隠れた表情を容易に見通したような声だった。内心を見透かされたサリユは渋面になるしかない。メツチはユルヴのことについて言っていた。

サリユとて、ユルヴのことに思い煩っているのがただの自分の感傷だという自覚はある。それは彼女の未熟さの現われでもあった。彼女はまだ先の集落での一件のことを忘れられないでいた。

「ま、わかつてるんならいいんだけどさ。ああ。師匠にもさ、腰を大事にって言っというてよ」

黙したまま頷き、サリユは町を出た。

一刻ほどで太陽が天頂へと昇ろうとする時刻、蛇の道に彼女以外の姿はなかった。一般的には正午近くの渡砂は控えるものだが、このような場所では野営場所に落ち着く前に暗闇が訪れてしまうことの方が危険性は高い。サリユが体力の消耗が激しい日中に町を出たのもそれが理由だった。

それに加え、河川が流れる近くを歩けば飢えて死ぬ恐れはない。少なくとも、水に飢える恐れだけはなかった。もちろん、一方でそうした安全な航路は、それだけ砂賊などに襲われる危険性も高くなるということでもあったが。

まずはクアルとの合流を図り、サリユは峻険な地形をぐるりと見

渡した。指笛を吹き鳴らし、それから見晴らしのよい高さへと向かって歩き出す。彼女の連れたこぶつき馬が面倒そうにいないた。

盛り上がった地質が重なり、なだらかな傾斜と時に切り立った崖を作る“蛇の道”で、人が歩くのに用いられるのは蛇が腹ばいに這う底の部分である。そこから脇に一步でも出ようとすれば、途端に足場は厳しく、進むのも困難だった。こぶつき馬を曳いての行脚となればさらに難儀で、不安定な足場を嫌がるこぶつき馬をなだめすかしながら、道を見つげるのだけでも結構な時間が必要となる。

陸路を使う人間は少ないとはいえ、メツチのような例外ももちろん存在する。サリュが砂虎との再会に脇道を選んだのもそうした面倒を避けてのことだった。

傾斜を上り、下り、振り返っても町の姿形が完全に景色に隠れた頃にもう一度指笛を吹きかけ、その前に何かの気配が茂みを揺らした。

そこから姿を現した大柄の全身に、サリュは口元をほころばせた。
「クアル」

黄と白の縞模様には砂色をまぶした若虎は声もなく近づき、頭ごと彼女に頬を摺り寄せた。ゴロゴロと鳴る喉の音を耳に聞きながら、サリュも身を屈めてその姿を抱きしめる。たちまち、懐かしい砂の香りが鼻腔に満ちた。

しばらく会っていない後に必ず砂虎が行う臭いの確認とその上付けの間、成されるままに身を任せていたサリュは、ふと砂虎の視線がある方向で定まったまま微動だにしないことに気づいた。ぴんと立った耳が風もなく僅かに揺れている。

何かが近くにいる。サリュは素早く砂虎の毛皮に視線を走らせた。乾ききった赤色が幾らか散らばっている以外、新しい血の跡は見当たらない。別行動の間の狩りは上手くいっていたようで飢えた様子もなかった。砂虎の示す態度の意味は獲物への関心ではなく、

警戒のそれだった。

コブつき馬の手綱を放し、サリュは砂虎の視線の先へと足を向けた。茂みの先はちよつとした崖になっている。小さな石を蹴り落とさないよう、慎重に覗き込んだサリュの瞳が見開かれた。

視界の下に拓けた視界に人の姿があつた。雑に着崩された、薄汚れの布防具。体格のよさから男だとわかる。男がどういった存在かは明白だった。蛇の道を縄張りに旅人を襲い、部族の人間を攫つた下手人としても疑われる砂賊だった。

男の背後には洞穴の暗がりが見えた。男はその手前に立ち、腰に刃物をぶら下げている。商館の主アベドが言つていた、ここがその連中の住み家ということか。

サリュがそれを見つけたのは偶然ではあつたが、必然でもある。単純に利便性を考えれば隠れ家は町から近くあるべきで、一方で人目につかないほうが都合がよい。蛇の道の中、入り組んだ地形を活用した立地だが、それに劣せず出遭えたことが幸運であることには違いなかつたが。

息を潜め、サリュは遠目に見下ろせる男の様子を窺つた。ここが野盗の本拠地だとするなら、あの見張りは常に外を見張っているのだろうか。男はいかにも手持ち無沙汰にしていた。ただ単に気が抜けているだけか、それとも見張りに慣れていないのか。

その前者か後者であるかはこの際、大きな意味を持っている。もしも見張りが普段にはない行為なら、野盗達にそれをさせる理由があるはずだった。例えば、中に誘拐してきた人達を囲んでいる為と聞いたような。

サリュは隣に潜むクアルの顎を撫でた。時に人間に匹敵する程の知性を感じさせる砂虎は、それだけで彼女の意図を察した。サリュが頭が伏せるのと同時に顎を開く。

遠吠えが鳴り響いた。

空間を震わせる一声が岩肌に伝播した。サリュはそつと下を窺った。

野盗の男が狼狽した様子で周囲を見回している。洞穴から何人かが出てきた。その人数を数えながら首魁を探していると、松明を持ったそれらしい男が現れた。その奥からさらに誰かが出てくる。その新しい人影を見て、サリュは驚きに息をのんだ。

布防具に身を包んだ姿は野盗達と大差ない。しかし、周囲の人間達のそれとは明らかに毛色が異なる上に、つい先ほど見覚えのあるものだった。

シャコウと名乗った部族の男。今、野盗の頭目らしき男と言葉を交わしているのは、確かにその男だった。

部族特有の精悍な顔つきが彼女の潜む崖上を見あげた。

茂みの中で身動きもしなければ相手から見えるはずがない。しかしそれを見通そうとするかのような鋭い視線に、息を詰める。サリュは隣をうかがった。彼女の手を頭に置かれたクアルは、耳まで伏せて指示通りに隠れてみせている。

シャコウが頭目らしい男になにかを語りかけ、洞穴から松明が持ち運ばれた。野生の砂虎は火に慣れていない為、火の類を恐れる。見張りの男にそれを渡しながら二言三言、彼女の位置からでは聞き取れない言葉を言い交わし、シャコウと男達は中へと戻っていった。残された見張りの男は松明を掲げ、緊張した面持ちで周囲に気を配っている。その視線が自分達の方角を捉えていないのを確認して、匍匐で安全な後方までさがった。

こぶつき馬の元へと戻りながら、サリュは今見た光景の意味するところを考える。自分達の集落へ戻るといつていた部族の男。何者かの手によって部族の人間を攫われたといつていた男が、その犯人

に疑われる砂賊の男達の巢にいた。捕まったようには見えなかった。交渉、あるいは友好的な　あまりにもわかりやすい回答をむしろ忌避するように、彼女は頭を振った。

昨夜、サリユはユルヴに他部族の人間が犯行に関わっていることを示唆する言葉を告げた。それはただ町の間と部族という範疇で物事を決め付けてしまっている彼女へ警告の意味も含めて言っただけのものだったが、今彼女が目当たりにした出来事はまさにそれを裏付けるような状況だった。

シャコウ達の部族と野盗達の繋がりがどういった種類のものであるか今の段階で断定はできずとも、シャコウ達がユルヴ達に悪感情を持つているらしいという事実を鑑みるだけで、充分以上に嫌な想像が膨らんだ。早急にユルヴに知らせる必要があった。

一瞬、先ほどメツチからかけられたばかりの言葉を思い出したが、そんなことを言っている場合ではないだろうとサリユは頭の中で無視した。蒼く晴れた空を見上げ、耳を澄ましたそこから予兆めいた囁きがないことを注意深く確認して、彼女は急いで先ほど来た道を戻り始めた。

先ほど町を出たばかりの旅人が戻ってきたことに番兵は不審そうに眉をひそめたが、サリユの姿を覚えていた為に町に入ることは難しくなかった。

すぐにサリユは宿へと向かった。あるいはユルヴは出かけてしまっているかもしれない。卓の向こうで暇そうに頼杖をついていた主人に訊ねると、駆け込む勢いで入ってきたサリユの剣幕に驚きながらも、主人は宿泊客がまだ出かけていないことを教えてくれた。

「サリユ」

階段を上り、扉を開ける。部屋にいた部族の少女が驚いた表情で彼女を見た。

「どうした。町を出たのではなかったのか」

息を整えながらサリユは訊ねた。

「メツチは？」

「お前と一緒にだったのではないのか。まだこちらには戻ってきていないが」

商館に戻ったのかもしれない。サリユは頷いた。一拍を置く間に多少は考えがまとまっていた。ユルヴの性格は少しは把握ができていた。慎重に話を伝える必要があった。

「町の外で、砂賊を見かけたの」

ユルヴが目を細めた。

「あなた達の言う蛇の道を、少し入り組んだところ。多分、根城にしているんだと思う。入り口に見張りが立ってた」

「攫った人間もそこか」

「それはわからない。直接、見てはいないわ」

サリユは断定するのを避けた。そうか、とユルヴは頷いた。

「それを教える為に、わざわざ戻ってきてくれたのか。……感謝する」

言いながら、既に弓を手に立ち上がりかけている彼女を手で制した。息を吸い、一息と共にサリユは告げた。

「見かけたのはそれだけじゃないの。野盗とたちと一緒に、シャコウがいたわ」

サリユが予想した反応はなかった。激昂や怒声でなく、ゆっくりと鼓膜に届いた言葉を咀嚼するように、長い睫毛が上下に動く。意外なほど冷静な声が響いた。

「なるほど」

「……驚かないのね」

言えば必ず荒れるだろうと心構えをしていたサリユは、肩透かしを喰らった気分だった。ユルヴは静かな声で答える。

「いや。驚いているとも」

「私の言ったこと、信じるの？」

「嘘を言っていないことはわかる」

そっけなく言い、ユルヴは席を立った。そのまま歩き出す、その手に何気なく弓と矢が持たれていた。握りを掴んだ拳がきつく締められている。

「どこに行くの」

「聞くまでもない」

サリユは自分の脇を通り過ぎかけた小柄な肩を掴んだ。熱のような圧力を感じて、彼女は自分の思い違いを知った。ユルヴは冷静などではなかった。

「待って、ユルヴ。落ち着いて」

「わたしは落ち着いている……！」

感情が奔流となって迸った。飲み込まれかけた言動の矛盾、その発露に顔をゆがめる彼女に、サリユは言った。

「場所も言っていないのに、どこに行こうというの。蛇の道を探し回るつもり？」

「お前が宿を出てせいぜい二刻もない。それで行って帰ってこられるのだ。距離などが知れている。お前が場所を言わずともわたしは行く」

サリユは嘆息した。

「教えないなんて言っていないわ」

「なら、どこだ」

「落ち着いてと言ってるでしょう」

烈火を宿した眼差しがサリユを睨みつけた。身体の中に貯まった熱を発散させるよう、こもった吐息が漏れる。

「どうすれば教えてくれる。条件は何だ」

思考する余裕を全て失っていないという証拠をユルヴは見せた。

こちらの意図を理解した物言いに安堵しながら、サリユは言った。
「一人で向かおうとしないで。行く前に、メツチの商会の人達に伝えておいた方がいいと思う」

ユルヴが眉をひそめる。サリユは続けた。

「砂賊が攫った人達を売ろうとする相手がいるのなら。シャコウ達の部族もそれに関わってるんだとしたら、そうしておくべきだわ」

「部族の同胞を救うのに、わざわざ町の人間から許可を得ると？」

「救うことじゃなくて、救った後のことを言ってるのよ。あなただけじゃない。あなたが助けた家族の為に」

あるいは相手は砂賊と商人、そして部族が結託している恐れもあった。それに対して一人の少女の感情的な行動で全て済ませてしまった場合、もし仮にそれが上手くいったとしても、問題になる可能性が大きかった。部族の人間に部族の理念があり、理由があるように、町の人間にも理念と理由があるはずだからだった。

どんな屁理屈をでっちあげてユルヴや部族に言いがかりをつけてくるかわかったものではない。そうしたもめごとを避ける為に、メツチ達を巻き込んでおくことに意味がある。町の理念と理由を知り尽くした彼らなら、その対処も大いに心得ているはずだった。何よりもまず、自分達の利の為に。

「……伝えること。条件はそれだけか」

「ええ」

サリユは口元を緩める。やはり、激していてもユルヴは冷静な思考力を保っていた。

「ならば勝手に告げて、勝手に行く。それでお前が気が済むというならな」

「かまわないわ。その時は、私も一緒に行くから」

わずかにユルヴは小首を傾げてみせた。疑うのではなく、純粹に疑問を感じた口調で訊ねる。

「なぜだ？」

「……さあ。自分でもよくわからない」

サリユはあいまいに頭を振った。自嘲するような、しかし暗さのない笑みを浮かべて、

「けど、そう言われてる気がするの。あなたと同じだと思う」

「天意か」

ユルヴは質のいい冗談を聞いたように唇の端を持ち上げた。

「そんな大層なものじゃないわ」

答えるサリユの声は乾いていた。

「声よ。砂の声」

南岸へ渡った二人が訪れた商館で、館長を務める壮年の男は二人をにこやかに迎え入れた。その表情が一転したのは、ユルヴから短い一言を告げられた直後である。

「砂賊のもとへ行く」

サリユは外套の奥で苦笑するしかない。確かに告げるだけでいいと宿で言ったが、これでは相手への配慮も何もあつたものではなかつた。

短い言葉が意味するものを考えてか、しばしアベドは思案の表情で黙り込んだ。奥の個室に茶を持ってきた若い女性の去り際に声を掛ける。

「メツチの奴を呼んでくれ」

サリユは入館の際、何名かの商人の中でこちらを見ていた視線を思い出した。若い商人は彼女達を見て驚きつつ、他の商人と同じく油断のない眼差しを向けていた。

静かに目礼した女性が去り、アベドが息を吐いた。

「随分いきなりだが。何の為につてのは聞くまでもないな。どうやって奴らの住み家を？ いやまあ、こちらでも町の近くだろうつてな探りくらいはついてるが」

「そんなことはどうでもいい」

一言でユルヴは切って捨てた。サリユとの取り決めを守つた以上、少しでも早く話を打ち切りたいと考えていることがわかる態度だった。場所を知っているのがサリユだけということもある。

「住み家に見張りがいた。あるいは攫つた人間が逃げ出さない為だろつ」

「……それだけじゃあ、少しばかり性急な気もするが。用心深い砂賊なら、歩哨くらい立ててるかもしれんだろう」
「それを確かめに行くのだ」

アベドは苦い表情で笑った。ユルヴが訪れた目的が、交渉や折衝の類ではないことを理解したようだった。伝聞の形式をとらずに話を進めるユルヴの意図を考えたサリュも、あえて口を挟まずにいた。なるほど。まあいいさ。それで、砂賊達の巢にたつた一人、二人で乗り込もうと？ 部族の人間の勇猛さは知ってるが、にしたって無茶すぎやしないかね」

「できないことをするつもりはない。もし失敗したなら、それも天意だろう」
「なるほど」

諦めの吐息と共に繰り返し、男は表情を改めた。

「話を聞く気はない、と。一方的な通告をわざわざ貴重な時間を使ってまでしに出向いてくれたその事に、まずは商館を預かる者として感謝しよう。話を知っているだけで、こちらとしてもだいが違う」
アベドはサリュを見た。部族の少女にそれをさせた者が誰かわかっているのだった。

「その上で、つきあいのある商会として言わせてもらおうなら、慎重に進めるべきだというのが正直な意見ではある。領主との話もまとまりかけて、商会同士の根回しも上手くいきそうな今、おいおい、ひっかきまわしてくれるのか」という思いもないわけじゃない」
「聞かないというのはわかっているのだろう」
「そうだな」

笑い、男は卓上に膝をついた。顎を寄せ、凄みのある表情になる。「まあ聞きな。今の商談が不味くなりそうなら、次善の手を考えるのが商人だ。さっきはああも言ったが、商人同士の根回しなんざどうとでもなる。全てあんたらが勝手にやったことだ、と言えば事足

りるからな。まさか、それを非情だなんて言わないだろう？」

「わたしが勝手にやることだ。行動の責はもちろんわたしにある。

……話が長い。結論を」

「ああ、つまりだ。俺達の商会の人間も、一人ついていかせてもらいたい」

間を見計らったように扉がノックされる。姿を現した若い商人が、きよとんとした表情で立っていた。そちらを見、すぐにアベドへと戻して、ユルヴが問う。

「何の為だ」

「もちろん、我々の利益の為さ」

アベドは言い切った。

「あんた達の手助けがしたい　なんて人情話じゃあないのさ。残念ながら。砂賊とつきあいのある商会の尻尾をつかめば、それをネタに相手を強請ることが出来る。商会を潰すまでは無理だろうが、幾つかの商権と引き換えに、つてので手打ちにすることくらいは出来るだろう。あんたらの抜け駆けは、我々にしたって願ってもない機会になる」

「黄金に取り付かれた輩の手助けをするつもりはない」

不快そうにユルヴが言った。男は気にした素振りもなく、

「だが、町の人間がいるだけで後始末は随分楽になる。その辺りはこちらで責任をもってやらせてもらおうからな。あんたらも、要するにそれを期待してわざわざ来たわけだろ？」

見透かした眼差しで笑いかけ、男は続けた。

「もちろん、こっちはこっちで、あんたらに勝手についていくってことでいい。全力で守ってやってくれなんて甘えたことは言わないさ。功をあせった若い商人が、商会の意向を無視して同行しちまう　そう　という話でどうだ」

アベドが視線を向けた。つられるようにユルヴとサリュも顔を向

けるその先で、渋面のメツチが口を開いた。

「話がわかんないんですけど。とりあえず、俺は捨て駒ってことですよね」

ユルヴの襲撃が失敗に終わった場合、同行した人間の命は当然危うい。そして、その商人の行動について商会は認知しないという立場をとるということだった。アベドは鷹揚に頷いてみせた。

「ま、そういうことになるな」

「……思っても、本人の前では否定して欲しいもんですけどね」「何をぬかす」

アベドは言った。

「お前、こないだ言ってただろ。手荒く稼ぎたいって。これはチヤンスだぞ」

「わかってますよ。もうちょっと言い方ってもんがあるんじゃないかってことです」

親から説教を受ける子のように口を尖らせる若い商人に、アベドは大きく鼻を鳴らした。

「なら、どうする。別に受けなくてもかまわんど。一発あてる機会を狙って、儲け話に目をギラつかせてる連中は表にいくらでもいるからな」

「受けないなんて言っていないでしょ」

メツチが言った。その眼差しに黄金色の灯火が輝くのがサリュウには見えた。

「なんか知りませんが、やりますよ。成功したら、つまり手柄は俺ってことなんでしょ？」

「そういうことだ」

言質をとり、メツチは満足げに頷いた。首をかしげる。

「で？ 何をやればいいんですか」

「なに、難しい話じゃない。ちよっとしたピクニックさ、野盗の住み家までな」

「……正気かよ」

絶句したメツチが、無理やり押し出すように言った。ユルヴが眉一つ動かさないのに嘆息して、サリユを見る。サリユも無言で見返した。含みのある声でメツチが言った。

「まあ、やり方次第じゃ無茶じゃあないかもしれませんが」

「ほう。頼もしいじゃねえか。まあ、命がけだが、命を捨てるとは言わん。そういうのはメツチ、お前得意だろう」

「どつという意味ですか」

苦笑しながら、ふと強烈な気配を察したメツチが口を閉ざした。

これ以上の時間の浪費は許さないと無言の重圧を発しているユルヴの様子に、アベドが肩をすくめる。

「まあ、それ以上は道中でやるこつた。商売の神様は時間にするさい。乳は午前のあいだに売り切つて、魚は目が濁らないうちに卸しきるべきだ」

部屋から追い出しにかかり、わざわざ商館の外まで見送りに出たアベドは、最後にメツチに向かって付け加えた。

「わかつてると思うがな、俺がお前を選んだ理由を考えると。決して判断を間違えるな。儲けることが一等大事とは言つたつて、それで命を粗末にしるなんて教えは、俺達の商会にはないからな」

軽口で応じようとしたメツチが、アベドの意外なほど真剣な顔つきにそれを留めた。アベドの背後の商会の扉に教訓のような短い文句が謳われている。

「きつちり片手分、掴んで帰ってきますつて。行ってきます」

「落ちた骨は硬貨と一緒に拾い集めてやる。行って来い」
頷き、息を吸ったアベドが突然怒声を張り上げた。

「ふざけるな！ そんな勝手が許されると思つてやがるのかつ」

突然の剣幕に驚くサリユの隣で、メツチが応じる。

「この石頭！ そんなだからあんたは商売がわかってないって言われるんですよ！」

「ケツの青いガキが何をほざきやがる！ この俺に商売を語るなら、金貨の十枚や二十枚稼いでからものを言いやがれっつんだ！」

「だからその為の話をしてるんじゃないか、わからず屋！」

唾を飛ばしてやりあう両者の姿に、行きかう人々の視線が注がれていた。突然の展開に困惑するサリュへ、冷めた声色でユルヴが声をかけた。

「行くぞ、サリュ。　くだらん茶番だ」

ようやく思い至る。後にあくまでメッチが勝手をしたのだという立場をとる為に、わざと周囲に喧伝してみせているのだった。あまりにわざとらしい芝居だったが、必要なことではあるのかもしれない。しかしやはり、サリュの感想としてはユルヴのそれに近かった。空々しいかけ合いを背中中に聞きながら渡り岸へ向かう。空には丁度、天頂まで日が登りつめようとしている頃合だった。

サリュの見つけたその場所に戻るのに、半刻もかからなかった。崖の上から見下ろした先に立つ男は先ほど見かけた相手とは別のようだったが、気が乗らない風情なのは変わらなかった。

恐々と下の様子を窺ったメッチが抑えた声で訊ねた。

「で？　いったいどうするつもりだよ。まさか正面から乗り込むなんて言わないよな」

サリュとユルヴの双方が沈黙して答えないのに声を荒らげかけてあわてて音量を抑える。

「馬ツ　鹿じゃねえの。中に相手が何人いるかもわからないのに、なんの策もなしに突っ込むとかありえないだろ」

メッチを無視したユルヴがサリュを見た。

「まずはシャコウをおびき出す。わたしは弓。お前は剣。それでいいか」

「……ええ」

懐から鰐広の短剣を抜き、サリュは頷いた。

「無視すんなよ。つて、シャコウ？ おい、ちょっと待てよ、なんだそれ。なんで部族の人間がこんなところに」

「うるさい」

弓の弦を張りなおしながら、ユルヴのメッチに対する返答は冷淡を極めている。

「お前には何も期待していない。木の上にも登っている」

「そりゃ、切ったはつたで戦力にされても困るけどな。ああそうかい、なら精々、邪魔にならないように隠れさせてもらうさ。あんたらだつて、戦力は二人つてわけじゃないんだろうしな」

その場にいるのは三人以外になかった。サリュのこぶつき馬やユルヴの馬も宿に繋いだままである。恐らくはクアルのことを言っているのだろう、吐き捨てるようなメッチの言葉にわずかに眉をひそめ、その存在をいまだに知らないユルヴは戯言の類だろうと考えたらしかった。張りなおした弓を持ち、立ち上がる。

「集落に戻る時間が惜しい。やるのはわたし一人でもいいんだ。…

…本当にいいんだな」

崖下に降りる算段をつけながら、サリュは平静な態度で応じた。

「無理なんかしてないから。大丈夫」

「感謝を。わたしはここから狙う、下りたら合図をくれ。その後、こちらから始める」

「わかったわ」

別れ際、メッチが何事か言いたげな表情で見ているのに、サリュは意識して気づかない振りをした。彼の言いたいことは理解している。呆れるような視線だけでそれは充分だった。

土肌の傾斜はなだらかな部分もあるが、概して滑りやすく足場に不安な箇所がほとんどだった。万が一にも砂賊達に気づかれるわけにいかない為、サリユは大回りの道を選んで慎重に下った。

可能性は低いが、斥候が外に出ている可能性もあった。人の気配を探りながらクアルはどこに潜んでいるのだろうと考えた。指笛を吹けば届く範囲にはいるだろうが、隠れた砂虎の気配を探ることなど人間にはもちろん不可能だった。

右回りに砂賊の住み家に近づき、配置に着く。ユルヴ達が潜んでいるあたりへ向けてサリユは大きく腕を掲げて回した。

短剣を手に合図を待つ間、息を整えるサリユの脳裏に先日記憶が閃いた。黄金と血の色。かまうものか、と粘ついた感情を振り払った。自分で選んだ結果に後悔などない。選択したのだから。

私は、サリユだ。その事実を強く自分自身に刻み付ける。声が響いた。

「タージエ・ヤッセ！」

崖上にユルヴが姿を現している。弓に矢を番える格好で、しかし肝心の矢は既にそこにはなかった。視線を向けた先で、一本の矢が見張りの男の喉元に突き刺さっていた。

苦悶の声すら上げられず、砂賊の男が膝を突いて倒れ伏せる。直線距離でさほどの距離がないとはいえ、相当な腕だった。ユルヴが再び透明な声を張り上げた。

「タージエ・ヤッセ、シャコウ！」

サリユには理解のできない言葉を聞きつけたのか、三人が洞窟から飛び出てきたのを視界に認めた瞬間、サリユもまた駆け出している。

先頭の男が崖の上のユルヴを指差し、何かを言いかける前にむき

だしの喉に矢を生やす。それを見て唾然とする二人が我に返る前に、接近したサリュの刃がまず一人目の脚を薙いだ。

男達の注意をひきつけると、サリュは一人目への止めより次を優先した。横を過ぎ、勢いのまま次の相手へと短剣を滑らせ 寸前、恐怖に引きつった顔に見覚えがあることを認識した。

刃の切っ先を変え、男の太股へと切りつけた。そのまま身体ごとぶつかり相手を押し倒す。男の身体の上を転がり砂虎のように態勢を立て直すと、すかさず自身の布防具をはぎとって男の口に押し込んだ。男がくぐもった悲鳴を上げたのは、その直後だった。

轡をかました男をうつ伏せにして膝で押さえつける。振り返ると最初に仕掛けた男は狙い通りにユルヴが始末をつけていた。洞窟の奥へと視線を向け、ひとまず後続がないことをサリュは確認した。続いて見た崖上にユルヴの姿はなく、崖を滑り降りて来ている。

サリュは改めて膝下の男を窺った。シャコウという名の部族の男が、憎悪と怨嗟のこもった眼差しで彼女を睨みつけていた。

「止血するわ。暴れないで」
自分でやっておいてひどい言い分だが、今死なれても困る。切りつけたのは太股の外側を浅めにすませておいたので、その恐れは万一にもないだろうかと冷静に思いながら、サリュは男の外套へと刃を流した。細く裂いたそれを止血帯代わりに男の太股を縛り上げたところで、ユルヴがやってきた。

ユルヴと協力して洞窟の奥から見えない位置まで引きずる。鏃を喉に押し当てたユルヴが男の口から轡を外した。呼吸より先に、何事かの呪いの言葉を吐きだすシャコウの抗議を涼しい顔で受け流し、ユルヴは鏃を持つ手に力を込めた。押し込まれた皮膚から血の一筋が流れる。

「笑わせる。部族の面汚しとはお前達のことだろう」

「何を……」

「賊共といつたいなんの密談だ。まあいい、それを聞くのは後だ。

攫われた者はこの中か」

男は答えない。冷えた眼差しで、ユルヴは男の口に布を押し当てた。もう一方でサリユが切りつけたその傷口のあたりを容赦なく押し込むと、激痛に男が鈍い悲鳴をあげた。

「お前にかまつている暇はない。答える」

「……どっちが野盗だかわかったもんじゃない」

いつの間にかメツチが二人の側に下りてきていた。しかめっ面でその場の惨状を眺めて息を吐くのに、サリユは答えなかった。

こちらが少数での奇襲である以上、砂賊連中に増援を呼ばれるわけにはいかなかった。可能な限り声もあげさせずに無力化する必要があつたが、もちろんそれで行為そのものが許されるわけではないことも理解している。例え相手が野盗で、殺さなければ殺されるだけだったとしても。彼女は赤く濡れた短剣を見下ろした。

その間に、ユルヴが男から情報を聞き出している。やはり部族の人々の中に囲われているらしい。中に残る野盗の数は十人。少なくともないが、思つたより多い数でもなかった。

サリユはユルヴに訊ねた。

「燻りだす？」

洞窟に籠つた相手なら、火を炊き、煙に巻かれて出てきたところを狙うのが安全ではあるだろうが、ユルヴは同意しなかった。

「すぐに誰か様子を見に来るだろう。それに、中にいる人間が心配だ。できればこちらから中に入りたい」

希望という形で言ったのは、その方が危険が大きくなるからだつた。彼女の獲物は弓だった。必然、先に行くのは短剣を持ったサリユになる。狭い洞窟の中では射線を取れない恐れもあった。

「 わかった。それでかまわないわ」

迷いのないサリュの返答に、ユルヴがかすかに気遣わしげな様子を見せた。実際にそれを口にしたのはメッチである。

「おい。あんた、平気か？」

布防具を外したせいで素顔になっている異相を二人に晒し、サリュは瞳を瞬かせた。どうしてそんな風に言われるのか理解できていない。

「私？ ……私なら、大丈夫。行きましょう」

洞穴の入り口に掲げられた松明をとり、サリュは暗がりへと一歩を踏み出した。後ろ手に縛ったシャコウを引きずり上げ、それぞれの表情を浮かべたユルヴとメッチがそれに続いた。

洞窟は、地質の断層が作り出した天然の代物だった。

乾いた空気と砂塵が舞う中を、サリュは足音を殺し中腰で進む。

その次に矢を番えたユルヴがすぐに弓を射られる姿勢で続き、最後尾に嚮を噛ませたシャコウを連れてメツチがついた。メツチも護身の短剣程度なら持ち合わせていたが、実際の戦力は前を進むサリュとユルヴだけと考えてよかった。

洞の幅は二人が並んで通れるほどには広い。互いに斜めにずれて先を進みながら、サリュは押し殺した息を吐いた。今のところ、野盗達と出くわすことはなく、潜入も気づかれてはいない。ほぼ一本道なのが幸いしていた。

入り組んだ地形で土地勘もなければ、挟撃の恐れが高まる。内部にほとんど手が加えられていないようにみえるのは、下手に手を出せば洞窟自体が崩れる危険があるからだろうが、砂賊が住み家に選ぶからには相応の広さがあると考えるべきだった。襲撃への対処にまで頭が回っているかどうかまではわからないが、可能性は捨てるべきではない。どこか違う出口までこの道が繋がっていることも十分にありえた。

あるいは一気に制圧するべきか。その場合、二人ではいかにも戦力が不足してしまうが、クアルを呼べばそれも解決する。しかし、その為にはまずユルヴにクアルの姿を見せておく必要があった。

砂海の猛獣に、もちろん遊牧の部族が好意を抱いているはずがない。多少は自分のことを信じようとしてくれるように思えるユルヴに、いらぬ想いを抱かせてしまうだけかもしれない。ただでさえメツチの商会に立ち寄ったことで時間をとられ、苛ついた気分だったユルヴを相手に時間をかけて紹介する余裕がなかったのは

確かだが、サリュの方でも積極的にそうしようと思欲があったわけでもない。その理由を彼女は他人事のように把握していた。ようするに我俣に過ぎないのだろう。殺すのは自分だけでいいという。

奥から何者かの声が響いてきた。特に憚ばせようと注意を払っていない足音と、会話。声に切迫した気配は薄かった。少なくとも二名以上の気配が近づいてくるのを確認して、サリュは手に持った松明と近くの壁の松明を転がし、ユルヴとメツチに合図してあとずさる。幾らか下がったそこにあつた灯りは地面に置き、足で砂をかけた。

火元が失せ、周囲の暗闇が強まった。

いつでも駆け出せるよう姿勢を低く保つ。サリュの隣でユルヴが狩人の眼差しで弓を構えた。シャコウが呻き声をあげ、メツチが嫌そうに刃物をあてて黙らせる。

うつすらと先の暗闇に灯りが差し、人影が揺らいだ。野盗の姿が現れる。鋭く空気を裂く微音を残して矢が放たれ、悲鳴とともに前方の灯りが地に落ちた。この視界の悪さで急所を狙うのはさすがに難しい。つまりは幸運に恵まれてきた潜伏もここまでだった。

サリュは暗闇を駆けた。うずくまつた男と、相方に視線を落としたり男が顔を上げる前に、彼女は至近まで近づいていた。

身体ごとぶつかるようにした手に鈍い感触を得る。わき腹に差し込んだ短剣を捻ると、絶叫が洞窟内に反響して鼓膜を震わせた。ほとんど痛みすら伴うような音量を無視して短剣を引き抜き、視線を移す。腕に矢を生やした男が、目尻に涙を貯めていた。

「てめえら、いったい」

無言で、彼女は血に濡れた腕を振るった。

洞窟の奥へと向き直る。悲鳴は洞窟中に響き渡ったはずだった。すぐに来るだろう後続に備えて、サリユは少し進んだ先に見えた窪みへと身を潜めた。

硬い地面を駆ける音に被せて怒号が響く。

「おい、どうしたっ」

二人がサリユの存在に気づかず通り過ぎた。間をおかずに生じた悲鳴でユルヴの第二射を知り、飛び出す。砂賊達の身体でユルヴの射線から身を隠しつつ、仲間に駆け寄った男の背中を一突きした。もう一人がサリユへと向き直ったところをその背後から近づいたユルヴが襲い掛かる。

立て続けに四人を無力化し、サリユは更なる増援の気配に注意を向けた。あと半数の存在は、しかし一向にやってくる気配がない。違和感を覚えてユルヴを見る。同じ感想を抱いたらしい少女が頷いた。

「急ごう」

「……ええ」

歩き出す。後を追うメツチは、もはやかける言葉すらなくしたようにでそれに続いた。

しばらく進んでも、野盗達の気配どころか物音さえなかった。静まり返った洞窟に不気味さを感じ、サリユとユルヴの足は自然と急いだものになる。曲がりくねった道を行くと、幾らか開けた場所が彼らを出迎えた。灯りが焚かれ、周囲には卓や椅子などが散乱している。人の生活する名残は数多いが、砂賊達の姿はなかった。

逃げた？ 奥に繋がる通路を見ながらサリユは考えた。相手もまさかたつた三人がやって来たとは思わないだろうから、不意の襲撃を受ければそうしたこともあるかもしれない。それならそれで面倒がなかった。

「ノカ！」

半円状に広がる空間の一方の壁際に、怯えるようにして身を固める数人の姿があった。いずれもユルヴと似たような格好をしたその中の一人が、一歩前に出た。

「ユルヴ……！」

年頃はユルヴと同じ頃の、やや幼い容貌の少女の身体が平衡を崩したように揺れ、それを背後から支えられる。

彼女達の前に深い地面の亀裂が深遠を覗かせていた。幅が一丈以上もあるその穴は人間の跳躍力では超えられそうにない。亀裂によって隔離されたその奥は、まさに柵を必要としない牢獄というわけだった。

近くに投げ捨てられた渡し板にユルヴが駆け寄っていく。人死に慣れていないのか、顔色を悪くしたメツチがサリュへ近づいてきて、言った。

「ようするに、どういうことなんだ？ 捕まっていたのはアンカ族だけで、こっちは狂言だったってことか？」

引き連れたシャコウを顎で指しながら言う。サリュは首を振った。「それは、その人に聞いてみないとわからないけれど。……どこかの商会との繋がりがわかるような証拠とか、残っていたりはしないかしら」

「野盗がそんなマメなことしてるもんかねえ。……ま、そういうのも含みで館長は俺を同行させたんだろうけどさ。ちよっとその辺り探してみる」

ユルヴ達の今後の安全の為に、メツチ達には町での後始末を手くつ付けてもらわなければならない。気安く手を振りながら歩いていく若い商人の背中を見送り、サリュはユルヴの様子を窺った。亀裂に板を渡すことに成功し、仲間達をこちら側へ移動させつつあるのを確認してから、改めて二箇所を通り口へと意識を向けなおす。

そこから何者かがやってくる気配はいまだない。しかし、砂賊達が逃げ出したのだとしても、時間をおけば態勢を立て直して戻ってくることは確実だった。奇襲と攫われた人々の救出に運良く成功した以上、すぐにここを出るのが正しい行動だろう。メッチの証拠探しも重要ではあるが、それほど時間はかけられない。

メッチはシャコウから何か聞き出そうとしているらしく、轡をとって問い詰めているようだった。そちらは彼に任せることにして、サリユはユルヴ達へと近寄った。

攫われていた家族は四人だった。壮年の夫婦とノカと呼ばれた少女に、歳の離れた見かけの男児。全員が衰弱しているが、特に男児の様子が心配だった。母親に抱かれたままぐったりともたれかかって浅い呼吸を繰り返しているその子の様子をユルヴが見ている。

「……どんな具合？」

「悪い。水だけは与えられていたようだが。……すぐに集落へ連れ帰らなければ」

腰の水袋を飲ませながら、怒りに震える声でユルヴが言った。

やはりすぐにここを出なければ。サリユは通り口に駆け寄った。

覗いた先には点々と松明が壁に掛けられてある以外、気配はないがふと遠くの灯りが揺れたように思えて、サリユは目を凝らした。しばらく見て微動だにしないので自分の錯覚かと思い、念の為に地面から手ごろな石を拾って奥へと放り投げてみる。

風もなく、炎が大きく揺れた。

舌打ちして、サリユは反対側の通り口へと走った。そちらではもつとはつきりと、遠くに人影らしきものが揺らめいているのを見ることができた。 囲まれている。

一旦、外に退いた上で態勢を立て直し、両方から反攻する。土地

の利を生かした上手いやり方だった。さすがに根城にしていただけのことはあるらしい。

サリュは忙しく頭を働かせた。こちらの戦力は二人、メツチを入れても三人。体力の落ちた部族の家族は数に入れられない。この場に立て籠もってどうなるものではなかった。二方向から攻められればとても支えきれない。砂賊達がやってくる前に、どちらかの道を強引にでも突き進むしかなかった。

来た道ともう一方なら、選ぶのは当然、そこがどういった道かだけでもわかる前者だった。少しでも時間を稼げるよう近くにある物で障害を作り、片方の出入り口を封鎖しておこうと考え、サリュは手を借りるためにメツチへと向き直った。

眉をひそめる。深刻な事実に気づいたような表情で、メツチはその場に固まっていた。

「どうかしたの」

声を掛けながら、サリュはメツチへと歩み寄った。はっと我に返った様子で若い商人が顔を上げた。メツチの顔色は、先ほどよりもいつそう青ざめているように見えた。

「いや、なんでも。 ない」

男が手に羊皮紙らしきものを持っていることに気づき、視線を落とす。その途中、シャコウが暗い笑みを浮かべて俯いているのがサリュの視界を掠った。

「……それは？」

「いや。これは」

「見せて」

シャコウの態度もだが、メツチの様子がサリュには気になった。何かよほど不味いものを見つけたのか、怯えるように手に持ったものを胸元へ引き寄せる相手に詰め寄る。

眉間に皺を寄せ、メツチが大きく息を吐いた。

「……わかった。でも、あっちのお嬢様にはちよつと見せられない。できれば、こつそり見てくれよ」

「見せられない？」

「ああ。少なくとも、今は　マズい」

どういう意味だろう。疑問に思いながら、サリュはメツチから羊皮紙を受け取った。薄汚れた紙片に崩れた字が並んでいるそれは、品物の売買に関する契約書のようだった。水や、幾つかの食料の品名。そうした書類の形式について詳しくはないが、特にどうというものではない。むしろ気にするべきなのは、その書類がどここの間に交わされたものかだろうと思ひ、斜め読みにそれらしき箇所を探そうとして、

「　くはっ」

息ごと吐き出すような、くぐもった笑い声が響いた。

その声はサリュの至近から発せられていた。目の前のメツチのものではない。身の危険を感じ、サリュが右手を振るおうとする前に、既に相手は動いていた。

反射的に切り上げた短剣を掻い潜り、背後から太い腕を蛇のように首へ回される。そのまま絞められるのを、間に左手を入れてなんとかぎりぎりのところで最低限の気管の自由だけは確保した。万力のような力がかかり、手首ごと潰されそうな激痛にサリュは顔を歪める。

相手は両手で首を絞めてきている。抗えるはずがなかったが、その代わりにサリュの右手は自由だった。短剣を背後の襲撃者へと切りつけようとして、誰かの手に抑えられた。

誰かの手。今まさに、両手で首を絞められているのに？　そもそも

もが、後ろの誰か　シャコウだということは、考えるまでもない
は、両手を縛られていたはずだった。それが自由になっていた
のは何故だ。

焦りと痛みで思考が定まらず、苦悶の表情を浮かべたサリュは、
目の前のメツチがひどく冷静でいることによくやくになって気づい
た。捕まれた自分の右手を見る。それを掴んでいるのはメツチだっ
た。

「何、を」

「悪い。俺もさ、びつくりしたんだけど」

羊皮紙をとりあげ、男は大きいため息をついた。

「ほんとに知らなかったんだ。道理でおかしいと思っただよ。ア
ベド館長が、なんで俺なんかを同行させるのかってさ。　まあ、
こういうこと」

サリュの眼前に突きつける。羊皮紙の最後に、砂賊達からの注文
を受け、その品物を用意した商会の名が記載されている。どこかで
見た覚えのある文字。

クアガイという綴りが、サリュが懐に持つ手紙と同じ筆跡で踊っ
ていた。

「判断を間違えるな。自分が選ばれた理由を考えろ。　そりゃそ
うだ。こんなの、俺にしか出来ないよな。あの人が、若手に儲けさ
せてやるうなんてそんな甘ったるい人情で同行者を選ぶはずがない
んだ。俺達商人はいつだって。自分の利益だけが一番、大切なんだ
からさ」

黄金色の業欲に双眸を焦がした若い商人が血色の悪い顔に浮かべ
たのは、むしろ晴れ渡るように快活な笑みだった。

「サリュ！」

異変に気づいたユルヴが声をあげる。サリュの右手から短剣をもちとり、メツチがそちらへと刃を向けて牽制した。

「貴様……！」

部族の少女は既に弓矢を番えている。シャコウがサリュの身体を盾に押し出した。笑みを収めたメツチはその影に隠れようとせず、傍らのサリュに短剣を押し当てた。

ユルヴが目を細め、言った。

「それでわたしが弓を下ろすだけでも？」

「下ろすさ」

メツチは見透かしたように唇の端を持ち上げる。

「あんたらって、自分達の戦いで部族の血が流れるのは許容できても、そうじゃない相手が傷つくのは嫌がるもんな。義理堅いっていうか。ほら、無理はしない方がいいぜ」

突きつけられた短剣がサリュの肌を刺し、そこから少しばかりの血が流れた。

「……サリュは、お前にとっても恩人のはずだ。自分の恩人に刃を向けるのか」

唸るように言うユルヴにメツチは当然と頷いて、

「礼は返したよ。きっちり契約分、本人も了承済みさ。それに、言ったよな？ 俺」

後半部分の言葉は隣のサリュに向けられていた。哀れむような、蔑みの目線で見下ろす。

「こんなところで他人事にかまけてるなよって。とつととワームに向かつてればよかったんだ。人の忠告を聞かないから、こんな目に遭うんだよ」

不自由な身体では飛び掛ることもできず、サリユは砂虎のように歯を剥いてみせることしかできない。首にはシャコウの腕が絡みついたまま、男の体臭に息が詰まり、苦しさが増した。

「あんだ、相手が嘘を言ってるかどうかわかるんだよな。前に言っただじゃないか。なら、俺が今どっちかわかるだろ？」

ユルヴへとからかうような視線を戻し、メツチが言った。

遠目にもわかるほど苦渋に満ちた表情で、ユルヴが弓を引き絞る。矢を放てないまま下ろした彼女にメツチがにこりと微笑んだ。

「悪いようにはしないからさ。大人しくしといてくれよ」

気づけば、通り口から砂賊達が姿を見せている。それぞれ刃物を持ち、警戒するように距離を詰めるその中から一人が進み出た。

「……仲間割れか？」

サリユがこの洞窟を見つけた時に、周囲に指示を出していた男だった。野盗の頭目。そういうえば死体がなかった。上さえ生きていれば、集団の統率は失われはしない。そんな当たり前のことを思いつかず、倒した野盗達の顔を検分もしなかった自分の不覚を悟り、サリユは唇を噛み締めた。

「クアガイの人間だよ。なんなら身書でも見せるかい」

「その必要はねえが、説明はしてもらいてえな。仲間が何人もやられてんだ。これはいつたいたいということだ？」

「まあ、ちよつと理由ありでさ。説明はするけど、その前に」

面倒そうに頭をかき、男は亀裂の向こう側を指した。
「とりあえず、縛って牢に戻しといてくれよ。話はそれからいいだろ」

疑うような眼差しでメツチを見て、頭目は周囲に顎をしゃくつてみせた。

サリユの首から腕が抜けた。すかさず両手を後ろ手に縛り上げら

れ、それならばと、サリュは息を吸い込んだ。それを吐き出す前に彼女の喉元に短剣があてられる。

「やめとけって」

苦笑するようにメツチが言った。

「メツチ。あなた」

「喉、つぶされたりしたら困るだろ。俺だつてやりたくないぜ、そんなこと」

齒軋りしてサリュは口を閉じた。一か八か、大声を出そうとしていた彼女の考えを見抜かれていた。叫んだところで外まで声が届くかはわからないし、航路から離れた場所で誰かが偶然、それを耳にしてくれる可能性もまずないだろう。しかし、声が届けばそれを確実に聞いてくれる存在に彼女は心当たりがあった。

クアル、あの若い砂虎は必ず近くに待機しているはずだった。それをなんとか呼び込むことができれば　はじめから一緒に連れて来ていれればと思い、考え直す。たとえクアルが側にいたとしても、メツチを止めることはできなかつただろう。問題は彼女の迂闊さにあった。

ならば、過去にとつた行為を悔やむよりも、戦力がまだ外に残されていると考えるべきだ。あとは時機を図り、クアルへの連絡を試みる。野盗達に追い立てられて歩きながら、サリュは前向きな思考を心がけたが、すぐに直前の自分の行動を悔いることになった。

「あ、口に何か縛つといて」

抜かりがない。クアルの存在をメツチは知っているのだから、当然の処置ではあった。道中に見せた間抜けさはどこに忘れたのだと毒づきたくなり、それすらも擬態だった可能性を彼女は疑った。町で、あいつを信じるなとユルヴが言っていたのを思い出す。

睨み上げるサリュの視線をかわし、メツチが彼女の身体に触れた。全身をまさぐられ羞恥に頬を染める。腕や胸、腰から足首まで入念

に触れた後にメッチが身を離れた時、彼の手には一本の剣があった。サリュが隠し持っていたものだった。いたずらを看破したような素直な表情でメッチが笑う。

「やっぱり持ってた。そりゃ、武器があれだけってことはないよな」手にした剣に視線を落とす。売り払う時の為の値踏みでもしているのか、それとも刀身が長く鏢のない特殊な形状を疑問に思ったのか。ひどく真剣な表情だった。

思案顔からサリュの自分を見る視線に気づいて、メッチが肩をすくめる。去っていく途中でその足が止まった。

「ああ。それから」

振り返り、若い商人は野盗達に言った。

「あの男の子に何か食べ物を。消化に良さそうなやつね」

指示を受けた男達が顔を見合わせる。不服そうな連中が言いかけるのを遮って、

「人質つてのはさ、生きておいてくれなきゃちつとも意味がないんだぜ。いいから早く。あんたらの頭目には俺から言っとくからさ」

そう告げた男には、有無を言わせぬ迫力があつた。

部族の家族達と共に亀裂の向こう岸に押し込められ、渡し板を外される。後ろ手に縛られたサリュはその縁に立ち、バランスを崩して落ちてしまわないよう、慎重に下を見下ろした。

亀裂は実際の横幅以上の威圧感を伴って、暗闇が覗いた人間を誘うような恐ろしげな雰囲気があつた。どの程度の深さかはわからないが、落ちてしまえば引つ張り上げることはまず不可能だろう。亀裂のこちら側、奥の空間には何人かが横になるほどの広さはあつたが、亀裂前には助走をとれる距離もない。飛び越えて渡ろうと試してみる気にはなれなかつた。

背後に人の気配を感じて、サリュはそちらを振り向くことができ

ない。声がかかる。

「危ないぞ」

頷いて、サリユは一步足を引いた。振り返った先で、壁に背中を預けて座り込んだユルヴが彼女を見ている。眉をひそめ、苦笑するような声が響いた。

「なぜそんな顔をしている」

頭を振り、サリユは情けない表情を恥じるように顔を伏せた。

自分のせいでユルヴ達を危険な目に遭わせてしまった。メツチを信じるなど、町の間人は信用できないというユルヴに、協力を求めるよう進言したのはサリユだった。

「お前が気に病む必要はない」

まっすぐな眼差しで部族の少女は言った。

「話を聞いたのはわたしだ。実際に行動したのも。わたしのとった行動は、全てわたしに責がある」

そこで微妙に口調をやわらげて、続ける。

「こっちにきてくれ。友達を紹介したい」

しかめ面を無理やり持ち上げ、サリユは恥じる気分のまま彼女の言葉に従った。

「ノカ」

弟の様子を見ていた部族の少女がやってくる。ユルヴよりだいぶ優しい顔つきの、しかし意志の強さを感じさせる相手だった。ユルヴが言った。

「彼女がノカ。わたしと同じ日に生まれて、姉妹のように付き合っている。ノカ。彼女は、サリユだ」

「……サリユ？」

探るような視線を受けてサリユは目を伏せる。布防具を身に着けていない為、彼女の灰色の髪も、同じ色の瞳も、その中で二重に環を描いた異相までもが露になっている。それに加えてサリユという

言葉の忌まわしさを知る者であれば、相手の抱く感情は見るまでもないことだった。自分の名前を受け入れはしていても、それで怯え、不快に顔を歪ませる相手の顔をわざわざ見たくはなかった。

ノカという少女が立ち上がり、去っていった。慣れた反応に、それでも吐息が漏れそうになるが、口に布を詰められてはそれすらできなかつた。すぐに戻ってきたノカから、サリュの眼前に何か差し出された。

「……顔をあげてもらえますか？」

穏やかに言われ、顔をもちあげる。少女の手にあるのは湿った手ぬぐいだった。サリュの頬にできた切り傷を拭い、穏やかに言う。

「ノカです。はじめまして」

怯えや敵意の一切ない表情だった。相手よりも、黒い瞳に映る自身の方がよほど怯えた表情でいるのに気づいて、サリュは顔を反らした。反らした先で、ユルヴが理由知り顔で言う。

「心配するな。ノカはわたしよりよほど肝が太い」

「どういう意味よ、それ」

「違うのか」

「違うわよ」

睨むようにしてから、ノカという少女はサリュに向かって微笑んだ。

「だって、ユルヴの友達でしょう。それなら私にとっても友達よ」

邪気のない顔で言われたサリュはおおいに反応に戸惑い、顔を伏せた。そんなことを言われたのは生まれてはじめてだった。理由もわからない恥ずかしさがあった。

「そんなことを真顔で言うから、肝が太いと言われるのだ」

鼻を鳴らしたユルヴだが、発言の内容を否定はしなかつた。

「とにかく。ノカ、会えてよかった」

「……ええ。来てくれるなんて、思わなかつた」

「サリュがここを見つけて教えてくれた。……格好よく。とはいかなかったが」

「そうね」

ノカがくすりと笑った。サリュのように轡まではされていないが、ユルヴも両手を縛られている。とてもではないが、助けに来た、と胸を張れる格好ではなかった。

「それも天意だ。問題ない。……ナクイの具合は」

ユルヴに問われたノカは、形のよい眉を歪めて首を振った。

「良くないわ。ご飯も、水もあんまりもらえてないから」

「そうか。教えてくれ。お前達を攫ったのは砂賊か？」

沈鬱な気分を払うように顔を上げ、ノカは首を横に振った。

「いいえ。確かに連中も一緒だったけれど。それを手引きしたのはロドリ族」

「……首魁は、やはり奴らか」

ロドリ。シャコウ達の部族の名前だった。

「彼らが一緒だったせいで、私も父さんも油断してしまつて。すぐにナクイが捕まつて。ろくに戦うこともできなかったわ」

物腰に柔らかさのある女性でも部族の人間らしく、口惜しそうに歯噛みする。

「他に攫われた人間はいるか？ 他の部族達は」

ノカは首を振った。

「私達だけ。どこか他の別のところに連れられてるのかもしれないけど」

「最初から、我々だけを標的にしていたと考えるほうが妥当か」

残りの言葉を引き継いで、ユルヴが呟いた。

轡を噛まされたサリュは会話に入ることが出来ない。ノカが応じた。

「部族が部族を売ったの？」

「それならそれで、私怨と報復でわかりやすいが。それだけではな

い。砂賊とロドリに関わりのある商会は、どうやらクアガイらしい」
それを聞いたノカが顔を青ざめさせた。

「私達と付き合いのある商会が、どうして……」

「わからん。本人が得意げに喋ってくれればいいのだが」

皮肉げに言い、ユルヴが視線を向ける。

亀裂の向こう側に、両手に碗を持ったメツチが立っていた。

「メシ、持って来たぜ。そっち行っていいかい」

しばらく待って誰も答えないことがわかると、肩をすくめて砂賊の男に渡し板をかけてもらう。亀裂の上を渡り、メツチは気兼ねしない様子でノカに両手を突き出した。

「ほい。水と、それからこっちは煮炊。味はどうかわかんないけど、食べさせてやって」

受け取るべきか否か、困った顔でノカはユルヴを見た。顔をしかめ、頷く。

「今さら毒でもないだろう。受け取っておけ」

「そんな手の込んだことするかって」

「……ありがとう」

苦笑する商人から碗を受け取り、ノカは頭を下げてから立ち上がった。弟の元へ走っていく彼女を見送って手を振るメツチを刺す様な眼差しで睨み、ユルヴが言う。

「何の真似だ」

「別になんだっていいだろ」

「いいわけがない。貴様ら商人が施しをする時は、必ず見返りがあるはずだからな」

「ま、そりゃそうだけど」

髭の薄い顎を撫でて、男は言った。

「死んだ人間は金を稼がないってだけだよ。別に、俺はあんた達に恨みがあるわけでも、殺したいわけでもないし」

「こちらにはそのどちらもあるがな。後ろにおあつらえ向きの深い穴が開いていることを忘れるな」

脅迫じみた言葉を、メッチは涼しい顔で受け流した。

「それで気が済むならやればいい。けど、言つたろ。俺はそれも含めての人選、ようするに捨て駒だよ。そんなことをしたつてあんたらの立場は変わらない。そういうのを俺達は生産性のない行為つて言ふんだよ。商人じゃ、一番馬鹿にされることさ。部族の人間だつて言つたろ。砂漠に水を撒くとか。言つてる意味、わかるだろ」

不快そうに、しかし男の言葉を否定できずユルヴが沈黙する。

「あんたらもどういふ状況かまるでわかつてないだろ。俺も、連中から話を聞いてようやく把握できてきたところだ。それを話に来ただけど、聞くかい？ 無理にとは言わないけど」

ユルヴがサリュを見た。サリュは頷いた。今は、少しでも情報を引き出しておく必要があつた。恐らくは、会話をすることということ自体に相手の何かしらの意図があるとしても。

「……言つてみる」

ユルヴが言つた。どこまでも相手に媚びる気配のない声だつた。

「ようするに商売の話なんだよ」

小さく笑い、メッチは語りだす。

「町と部族の人間が、大なり小なりつきあいをもつてきたのは知つてるよな。部族からは食料とか毛皮、刺繍縫製なんか。町からは工業品や日用雑貨。まあ色々と問題を起こしたりしながら、町と部族は微妙な天秤で関係を続けてた」

男は講義をする口調だつた。

「その関係が崩れた。原因は 新しい水場さ。あるかどうかもまだわかつてないけど。もしそれがあつたら人の生活圏は大きく変わる。当然、そうしたら交易圏もさ。俺達商売人にとつちや、願つてもないことだけど、一方でそれを嫌う人達もいる」

そこで一度言葉を区切り、ユルヴを見る。

「新しい航路なんていうのは、要は早いもの勝ちさ。東で見つかったっていう水場は、もう他の手がついてる可能性が高い。でも、そういう水場が沸いたってことは、まだ他にもあるかもしれないだろ？ リスールから北の枯渇地帯のあたりにも水源が見つかるかもしれない。もしそれで、新しい航路の中継点になれるようなオアシスをそこに作れば。そこに入ってくる利益はとんでもないものになる。俺達は 俺達の商会の上は、それに目をつけたんだ」

商会の上。サリュの脳裏に一人の男の姿が浮かんだ。それを察したのかどうか、メッチは頷いた。

「アベド館長は古くからつきあいのある部族に声をかけた。砂海のことについて、近所を遊牧する部族以上に詳しい人間はいないからな。道案内に、水場が沸いていそうな場所を選ぶのにも、部族の協力は不可欠だ」

ユルヴが鼻を鳴らした。話が読めたという素振りだった。メッチは言った。

「部族の長はそれを断った。わかるだろ、あんたの父親のことだよ」「当たり前だ」

「……アベド館長も何度も話を持ちかけたらしい。けど、長は決して頷かなかった。まあ、わからないでもないさ。自分の縄張りを侵されるのは、誰だって嫌だもんな」

わかった顔でメッチが言うのに、ユルヴが歯を剥いて唸り声をあげた。

「貴様達と一緒にするな」

「違うのかよ？ まあいいさ。それで、うちの館長は困った。部族の協力は得られそうにない。でも、大儲けの機会をみすみす逃すわけにもいかない。それで考えた。で、思ったわけさ 部族は、他にもいるってね」

「……ロドリ・カミ。それで奴らか」

そういうこと、とメツチは頷いてみせる。

「連中、交易に手を出すのが周りよりだいぶ遅かったせいで、町との交易でもかなり苦勞してみたいだな。そういう流れをつくった部族、つまりあんたらにも恨みを持つてた。あんたらより扱いやすい、砂海の知識が豊富な部族を探してた俺達と、あんたらに成り代わりたいてって思ってた連中の利害が一致したってわけだ」

「ノカ達の誘拐は。あれもお前達の企みだろう」

「この辺りで一番、勢力の強い部族はアンカ族だ。それを、昔はどうだか知らないけど、今じゃ数も減ってきてる落ち目のロドリ族を台頭させようってんだ。町からちよっかいをかける理由が欲しかったんだよ。あんたらが怒って、町に喧嘩を売ったりするように」

そこでメツチは可笑しそうに笑った。

「でも、それでまさか族長の娘が乗り込んでくるとは思わなかっただろうぜ。館長、内心で死ぬほどびびったはずさ。……ほんと、なんであんたを寄越したんだろうな。きな臭いってことくらい、わかってたはずなのに」

ユルヴは黙して答えなかった。メツチは肩をすくめる。

「ま、いいけど。でも、あんたは何も話をわかってないみたいだったから、アベド館長はそれを利用できないか考えたんだ。あんたからアンカ族の長に話を通してそれまでの意見を変えてもらえるなら、それが一番平和だしな。わざわざ今までのお得意様を切り捨てる必要もない」

ああ、とサリュは今この場にメツチがいる理由を悟った。それと同時に、言いようもない不快感を覚える。

「なるほど。結局奴らも、ただの当て馬か」

ユルヴが酷薄な笑みを浮かべた。サリュと同じく、相手の思惑を理解した表情だった。

「俺が言いたいこと、わかってくれたみたいだな」

メツチが言った。真剣な表情でまっすぐにユルヴを見据え、
「まあ、そういうこと。確認したわけじゃないけど、館長の意図はこれだって確信があるぜ。あんたから、父親に話をつけてもらえないか？ そうしたら、あんたも、あの家族も。ここから無事に帰してやれる。契約書を書いたついでいい。誓うよ」

商人としての態度で告げる。そこには確かに彼なりの誠実さがあるとサリュは認めた。商人にとって、交渉と契約は絶対的なもの。様々な手練手管で相手の裏をかくことはあっても、彼らは一度正式に取り決めた契約は必ず果たそうとする。何故なら、商人という業の深い職業の、畜生とも蔑まれる彼らの誇りを維持するのは、ただその一点のみであるからだった。

その商人としての誇りをもって告げられた台詞に、対する返答は簡潔だった。

「断る」

一時の感情に支配されて出された答えではなかった。サリュより年下の、ひどく短気なところがある部族の少女はその時、口元に穏やかな笑みさえ浮かべている。

「お前の言葉には嘘はない。ならばこそ、わたしアンカ族の長セオイカの子、ユルヴも答えよう」

威厳すら感じさせる口調で、ユルヴは言った。

「商人、お前は思い違いをしている」

「……思い違い？」

「お前が説いているのはどこまでも利だ。理ではない。道理ではなく、利益が思考の根本にある。黄金と共に生きる、それがお前達という生き方だろう。それを否定はしない」

だが、と続ける。

「我々はそうではない。我々と共にあるのは黄金ではないからだ。商人、お前は言ったな。縄張りを侵されるのは嫌だろうと。我々はそんなことを言っているのではない」

顔をしかめ、メツチが言った。

「じゃあ。何が理由なんだよ。どうして水源を探すのに協力できないなんて」

「水が枯れるのには、枯れるだけの理由がある」

ユルヴは言った。

「枯れたなら、それが天意なのだ。新しい水場を探し、人が集まり、その果てに生まれるものはただ争いだけだ。商人、それでもいいとお前達は言うだろう。自分達が潤うのならそれでいいと。しかし、それでは砂が悲しむ。砂はそんなことを望んではない」

メツチがわずかに眉をひそめたのは、ユルヴの語り方が、まるで身近な誰かを慈しむような口調だったからだだった。サリュも同じ感想を抱き、隣を見た。気づいた様子もなく、ユルヴは続ける。

「商人、お前は町で言っていたな。砂をも黄金に変えてみせると。その話ならわたしも知っている。だが、それにはまだ続きがあったはずだな。お前達はいつたいどうやって、砂を固めて黄金にする」

渋面になったメツチが、押し殺した声で答えた。

「……血だ。商人は、砂に自分達の血を垂らして　黄金に塗り固める」

「当然、お前達以外の血もそこには含まれる」

ユルヴの声は非難しようとするものではなかった。哀れむような響きがあった。

「それがお前達だ。お前達が利で生きるといふなら、わたし達は誇りで生きる」

は、と小さな笑い声が響いた。

「そんなものが、なんの役に立ってんだよ」

メツチの言葉に強い感情がこもった。商人としての仮面の縁から、若者らしい直情的な素顔が現れている。

「誇りだつて？ そんなもんで食つていけたら、誰だつて苦勞なんかしやしないさ。生きるのに金は必要なんだよ。人間が人間らしく生きるためには、金が必要なんだ。顔をうかがつて、薄汚い連中に尻尾振つて。そうしなきゃ誰だつて生きられやしない……！」

「そこに誇りがあるなら、それでよいだろう。それを問うのはわたしではない」

ユルヴは言った。

「ふざけんな！」

怒号が洞窟に響いた。部族の家族や、向こう岸にたむろする砂賊達までもが振り返るほどの声だった。はつと自分の行為に気づき、メツチが声を抑えて言った。

「死ぬんだぞ。あんたら。このままじゃ利用されて、それから殺されるっていうのに、誇りも何もあるかよ」

「……どうして父様がわたしを送り出したか、さっき不思議に思っていたな。教えてやろう。わたしがどうなるうと、それで答えが変わることなどないからだ。天意に従う以上、わたしの選択と父様の選択は決して違わない。意思を変えるなど、そもそもありえないことなのだ」

「誇りを胸に、死ぬつてのか」

呻くような問いかけに、然りと頷く。

「それが天意なら。そして、同じく天意を抱く者がお前達の前に現れるだろう。お前達の持たぬ矛を手に携えて、必ず報復に訪れる。それが部族というものだ」

「……理解できねえ」

首を振り、メツチは溜め込んだ空気を全て吐き出すような深いため息をついた。頭をかき、鋭い視線をサリュへ移す。

「あんたも、そうなのか？」

「どうだろうか。ユルヴの言葉はユルヴのものであって、彼女達の生き方も彼女達のものだった。決して自分とは違う。ただ、共感するところはあった。元々がサリュの口は自由ではない。答えられる状態でもなかった。」

返答に代わり、サリュは二重の環を輝かせて、暗い表情を見せるメツチをまっすぐに見据えた。

「……そうかよ」

視線から何を拾い上げたのか、若い商人は肩を落とした。再び、深いため息をついて、立ち上がる。

「わかったよ。なんにもわかりやしないけど、わかりあえないってのが。わかった。あんたらの言うとおり、他人の生き方に口出しする権利なんかないしな」

覚悟を決めた眼差しで二人を見た。

「俺は、俺の生き方しかできない。謝りも、言い訳もしないよ。俺はこれから町に帰る。証拠になりそうなものはまとめて引き上げて、館長に報告して今後のことを任せて俺の仕事はおしまいさ。あんたらとも、もう会うことはないだろうな」

一息に言い切って瞼を閉じる。次の台詞を吐き出す瞬間、わずかに表情が歪んだ。

「どつちにしたって、恨みっこなしでいこうぜ。……それじゃあな」
それきり一度も後ろを振り返らず、男は去っていった。

その背中を見送るサリュの脳裏に不意に閃くものがあつた。

彼女が立ち上がった時、すでにメツチは向こう岸に渡り、渡し板は取り払われてしまっている。轡のはめられた状態では声をあげて引き止めることもできず、サリュにはただ男の背中を見守ることしかできなかった。

「ユルヴ」

空の器を持ったノカが二人へと近づいてきた。

サリユはノカに駆け寄り、後ろで縛られた自身の両手を彼女に押し付けた。くぐもって声にならない声をあげ、視線で訴えかける。

「これを……外せばいいの？」

驚きながら、すぐに意図を汲み取ったノカが取り掛かった。なめした蔓を幾重にも結っただけの簡単な代物だが、適当に縛られた分ほどののに時間がかかる。一瞬毎の砂の流れを遅く感じるような心地でサリユは待った。

「できたっ」

開放感を覚え、その礼を示すより先に口を塞いだ布を引き剥がす。大きく息を吸い込んだのは、呼吸が苦しかったからではなかった。

溜め込んだ全てを次の瞬間に吐き出して、サリユは指笛を吹いた。

突然のことにユルヴとノカが顔をしかめている。強く息を吹けば大きな音が出るというわけではない、しかし自分にできる最大の音量で、彼女は澄んだ高音を鳴り響かせた。

笛の音は果たして洞窟の外に届いているだろうか。その途中でそれを耳にしたメツチは、どんな表情をしているだろう。サリユにはそれが想像できるようだった。

「なんだ。いったいどうした」

答えずにユルヴを見る。その両手も後ろ手に回されていた。

「ノカさん。彼女もお願います」

「え？ ええ、それはいいけれど。でも、あいつらに気づかれたら
」

「大丈夫」

サリュは最後まで言わせず、頷いた。

向こう岸で砂賊の数人が向かってくるのが彼女から見えていた。自由になった両手を見れば、勝手をするなと怒鳴りもするだろう。しかし、そんな恐れは必要ないことをサリュはすぐに確信した。

風の音がした。

洞窟の外から響いたそれは、実際には風の音ではなかった。彼女が聞くことのある、あの砂の声でもない。

それは猛獣の雄叫びだった。

応えるように、サリュは再び指笛を鳴らす。そのけたたましい音を聞き、洪面になった砂賊の一人が、亀裂の縁から口を開いた。

「おい。さつきから、うるさ……」

男の言葉は続かなかった。実際には、男が発した以上の音量によって、たちまちにそれはかき消されてしまっていた。

轟音が鳴り響いた。

誰もが今度は風の音と聞き間違えることなどないような、聞けば必ず恐怖と不吉を感じるその音に、砂賊の男がぎよっと後ろを振り返る。果たしてその瞬間、サリュから見て右側の通り口から、それは姿を現した。

黄色と白の縞模様の、人間の大人以上の体躯。砂海で最も恐ろしいといわれる猛獣が、半開きにした顎を威嚇するように歪め、周囲を睥睨している。

「砂虎！」

野盗達の誰かが叫び、それが発端となった。サリュの目の前にいた男の姿が消えた。足を踏み外し、足を滑らせてそのまま亀裂へと

転げ落ちていく。悲鳴が徐々に遠ざかり、途絶えた。それで火がついたように恐怖が増幅し、砂賊達は散り散りに乱れる。腰をぬかす者や外に逃げ出す者が続出した。

砂虎はそれらを一顧だにせず自身の求めるものを見つけ、そちらに向かつて四肢を駆けた。

亀裂の存在など歯牙にもかかけず軽やかに跳躍する。サリュの目の前に着地し、そのまま押し倒す勢いで抱きついて彼女に頬をすりよせた。

「砂虎だと……！」

口元をひきつらせたユルヴが弓に手を伸ばそうとする。乱暴な愛撫でもみくちやにされながら、サリュは手を上げて言った。

「ユルヴ、違うの。……大丈夫」

この有様では襲い掛かられていると見られても仕方がない。サリュはクアルの鼻面を強引に押し返した。情けない声をあげて引き下がる砂虎を撫でながら立ち上がる。

あつけに取られた表情でユルヴとノカ、その奥で目を丸くしている部族の家族達が見ている。なんと説明するべきか迷い、悩む暇などないことを思い出した。頷いてみせる。

「待ってて」

心持ちしょげて見える砂虎の頬を撫でて、今度はサリュからクアルに抱きついた。太い頸を抱えるように手を回し、耳元で囁く。

「クアル」

彼女と長く旅をしてきている砂虎には、それだけで十分だった。人と砂虎が同時に駆け出した。ほとんど助走もない距離を経て、砂虎が伸びやかに後ろ脚を跳ねあげる。それに抱きつくようにして併走したサリュも同時に空を駆けた。

砂虎と共に、彼女は難なく亀裂を飛び越えた。

「……ありがとう」

顎を撫でる。気持ち良さげに目を細め、しかしクアルはいつものように喉を鳴らすことはなかった。そういう場合ではないということとを理解しているのだった。低く構えた姿勢で、油断なく視線を周囲に向けている。

「てめえら、なにしてやがる！」

男の怒鳴り声が響いた。

砂賊の頭目が、狼狽しながら部下達を叱咤している。突然の邂逅に恐慌状態になった砂賊達がようやく落ち着きを取り戻しかけていたが、サリユは気にせず近くに落ちた渡し板へと手をかけた。

「お前ら。はやくあの女を」

わめきながら指で示したその行為が、頭目の残りの人生を決定付けた。

指示ではなく、獣としての嗅覚でこの場において最も危険な相手が誰かを察知して、クアルがその男に襲いかかった。何人かが刃物を突き立てようとするが、大きく、重く、素早い猛獣の動きに、素人に毛の生えたような野盗が対処できるはずもない。蹴散らされ、踏みつけられる。人の壁を飛び越え、上空からクアルは飛び掛った。

斜めに振り下ろされた爪に引き裂かれ、頭目の男は声もなく崩れ落ちた。

砂賊の士気はそれで崩壊した。

蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。再び起こった恐慌の気配を背中に、サリユは亀裂に渡し板を架けた。足場として安定しているのを確かめてから、向こう岸のユルヴ達へ声をかける。

「こっちへ」

戸惑う様子のユルヴがノカと顔を見合わせ、家族を連れて渡って

きた。

「サリュ。お前は……」

問いかける表情がわずかに青ざめている。

「ごめんなさい」

サリュは言った。砂虎が戻ってくる。身体を擦り寄せさせるクアルからぐるるといふ喉の音を聞いて、彼女は既にこの近くには脅威がないことを把握した。

「……友達なの」

端的に過ぎるその説明を聞いて、しばらく声を失っていたユルヴが、堪えきれないように息を漏らした。くすくすと笑い出す。顔を伏せ、肩を震わせた彼女が顔をあげると、目尻に透明なものが光って見えた。

「友達か！ それなら問題ない。そうだろう、ノカ」

からかうように、隣で蒼白になっている少女に言う。

「そうね。友達、だもの」

気丈に頷き、それから苦笑した。

「……すごい友達ができちゃったわ」

「ありがとう」

サリュは微笑んだ。目を瞬かせたノカが笑った。

「名前はあるの？ この子は」

「クアルっていうの」

自分のことが言われていると理解しているのか、ぴんと耳を立てた砂虎が行儀よくその場に座り込んだ。恐ろしげな容貌だが、口を閉じて顔を上向けてみせる仕草には愛嬌がある。

「……触っても、大丈夫？」

「ええ」

恐る恐る手を伸ばそうとするのを、ユルヴが止めた。

「待て。新しい友人への自己紹介は後だ。すぐにナクイを集落に連れて戻らなければ」

はっと思いついたように、ノカが言った。

「そうね。ごめんなさい、そんな場合じゃなかった」

「後でたつぷり撫でさせてもらえ。私はそうする。集落の場所

は、そう遠くまで離れてはいないはずだ。連中が、馬の一頭でも残しておいてくれればいいが……」

ユルヴの馬は、サリュのこぶつき馬と共に町に預けていた。一度戻る手間もだが、今の状況で町に顔を出すことは危険だった。しかし、ノカやその両親はともかく、幼いナクイは歩くこともままならない様子だった。子どもを抱えて砂海を渡るほどの余力もないだろう。

思案顔で腕を組むユルヴに、サリュが言った。

「大丈夫」

「何か考えがあるか？」

サリュは視線を下げた。ユルヴもそれにならい、わずかに顔をしかめる。

「……疑うわけではない。疑うわけではないが、大丈夫なのか」

「ええ」

サリュは母親に抱かれた男児へ近づいた。熱に浮かされた眼差しで彼女を見る。自分の異形を怖がらないでくれるといいと内心で強く祈りながら、サリュは言った。

「おつきいけど。この子、怖くないの。背中に乗れる？」

手招きした彼女に呼ばれたクアルが、ナクイの顔を覗き込んだ。

怖がらせてはいけないとサリュがそれを止めようとする、その前に少年が微笑んだ。

「猫だあ」

ぺろりとクアルが舐めると、くすぐったそうに手をかざす。クア

ルが頬を擦り寄せた。サリユはほつと息を吐いた。

「大丈夫みたいね」

ノカが笑った。隣を見て、先ほどのお返しとばかりに笑う。

「羨ましそうね？」

「……何のことだ」

仏頂面でユルヴが言った。

「ともかく。集落に戻るぞ。少しは日差しも落ち着いてきている頃だ。サリユ、お前も一緒に来てくれ」

「私は、町に行くわ」

ユルヴが眉をひそめた。

「気持ちわかる。荷も馬もあるからな。しかし、一度集落に戻ったほうがいい。それから大勢で町に向かえる」

サリユは首を振った。それでは意味がない。

「今すぐ行かないと、間に合わない」

「間に合わない？」

「部族の人が大勢で行けば、町との争いになる。彼らの企み通りに」

「……クアガイか」

頷き、サリユは続けた。

「この場所にはもう証拠は残ってない。持っていくって言ってたから。だから、追いかけないと」

それが誰を指した言葉であるか、すぐにユルヴは気づいたようだった。

「彼もそれを望んでる」

暗い響きを含めて、サリユは言った。

「あの男が？ ……何故だ」

自分の中の確信を上手く言語化できずにサリュは首を振った。しかし、そうだとしか彼女には思えなかった。交渉が失敗に終わった時の表情と別れ際の台詞。なにより、砂虎の存在を知った上で自分に轡を嘯ませただけで見過ごしたその事実が彼女にその直感を信じさせていた。彼は言った。恨みっこなしでいこうぜ。

「……まあいい。確かに、あの男を捕まえれば連中の企みの証拠にはなるな。余計な火種を潰せるなら、それに越したことはない」

部族の家族を振り返り、ユルヴが言う。

「ノカ。お前はその砂虎とともに集落へ戻れ。お前達が幕を張った、恐らくは東に半刻程度。集落はその辺りにあるはずだ。父様にこのことを伝えて、指示に従え」

「わかった。ユルヴ、あなたはもうするの？」

「決まっている」

部族の少女の瞳に獰猛な光が宿った。

「証拠もだが、証人も必要だ。部族の誇りを汚した愚か者も、どうせ町に逃げ込んでいるだろうからな」

異存はあるまいと言いたげにユルヴがサリュを見た。彼女の意思を予想していたサリュは何も言わず、砂虎へと近づいた。背にちょうどんと部族の子どもを乗せたクアルを抱きしめ、囁きかける。

「護ってあげてね」

砂虎は短く一鳴きして応えた。本当に言葉をわかっているのかもしれないと彼女が思うのはこんな時だった。重さも感じさせないほど小さな子どもを乗せたクアルの表情は、どこか誇らしげにも見える。微笑み、クアルとナクイの頭を順番に撫でて彼女は立ち上がった。

砂賊達が逃げ出した根城のどこから自分の弓を見つけてきたユルヴが、サリュに短剣を放り投げた。受け取って確かめる。彼女の

短剣ではなかった。恐らくそれらを持っているのはメツチだろう。それもまた、彼からの暗黙の伝言かも知れなかった。預かっているから、取り返しにこいという。

言われるまでもなく、またそれが勘違いであつたとしても、もちろん彼女もそうするつもりでいた。あの二本の短剣は彼女にとって大切なものだった。

手になじまない短剣の柄を握り締め、サリュはユルヴに向かって頷いた。

「行きましょう」

町への道を急ぎながら、サリュの脳裏にはとりとめのない思考が浮かんでいる。黄金と砂。それらと共に生きる人々について。

一方は町を作り、一方は砂と流れる。水場から河川を引きそれを利用とする人々。水場の沸くことと枯れることを天意として、それに抗うことのない人々。砂、黄金、砂を血で固め、それを作る者。赤色の黄金。夕焼けのような。人の全てを染め、双眸に輝きを灯す。欲望と憎悪。ここより遠く東、黄金の在る村のあの少年のように。

黄金が人々を狂わせるのか。あるいはそれを求めるのは人間が生来に持つ業欲なのか。黄金を否定する、その部族達も争いでは血を流す。その血は黄金のそれと違うのか。誰かを殺そうと憎み、それを実行する時、ユルヴの瞳には何が映っているのだろう。サリュにはわからなかった。

ただ、そのどちらともが自分は違うということは理解できていた。彼女は黄金を好まない。しかし、自分がそれに浸かっていることを理解していた。ある少年の父親をその手で刺し夕焼けの黄金に身を染めた時から、黄金は既に彼女とともに在った。

砂もまたそれと同じく、彼女は一所に留まらない人間だった。自身の目的もあるが、その奇妙な双眸は必ず人に忌避されるものだった。好むと好まざると関わらず、彼女は人から流れながら生きるしかない。

つまり、自分は外れ者なのだ。彼女は思った。砂と黄金。町の人々と、部族達。そのどちらのようにも生きられない。それは確かな

真実だった。

サリュに自虐の気分はなかった。それでよいと思っっている。彼女が探し求めているのはただ一人で、その為に必要なことならば彼女は全てを受け入れるつもりだった。

自身の名前についてもそれは変わらない。サリュという忌み名で、どれほど恐れられようがかまわない。いや、自分はそうあるべきなのではないか。砂と黄金の、そのどちらをも外れた忌まわしき存在として。

死の砂。　　なら、自分がやるべきことは決まっている。視界に見えた町の姿を映して、異形の瞳が人知れず暗く深く沈みこんでいた。

驚いた様子の門番にユルヴの身書を突きつけて町に入り、二人は一直線に駆けた。メッチが向かう先について思い当たる場所は一つしかなかった。南岸に渡った先、立ち並ぶ建物の一つ、自分達の商館に決まっている。

そこまで逃げ込まれてしまえば、サリュとユルヴに勝ち目はなかった。商売に関わる様々な厄介ごとなど日常茶飯事の商人達のその根城は、下手な野盗の巢などよりそうしたことに手馴れているものだからだった。

なんとしても、それまでに追いつかなければ。人のまばらな通りに抜け、町を二分する河川の岸に着く。無数に浮かぶ大小の船と、それを待つ人々の群れを見て、ユルヴが声をはりあげた。

「いたぞ！」

ユルヴが指したのは岸ではなく、河川に浮かぶ一隻の小船だった。乗り合いではなく、貸切で渡す割高の船だった。そこに乗った男二人の片方が彼女達に気づいた。その口元に困ったような笑みが浮かんでいるのがサリュには確かに見えた。

メツチだった。隣にいるのはシャコウで間違いない。気づいたシヤコウが何か囁き、メツチが肩をすくめている。二人に向かって手を振った。

「馬鹿にしているのか」

吐き捨て、ユルヴが堤防を駆け下りた。サリユもそれを追う。

二人が向かったのは乗り合い船を待つ行列ではなく、メツチ達と同じ貸切り型の渡し船だった。乗り合いに比べて倍以上の賃料がかかる為に人気がないその一帯には暇そうな船頭が座り込み、川面に釣り糸を垂らしている者もいた。手ごろな船に近寄り、ユルヴは船頭に賃金を払う前にそれに乗り込んだ。

「おい、あんた。何勝手に」

「倍払う。急げ、あの船だ」

釣竿を放り出して文句を言いに来た船の主が、それを聞いてあわてて船を繋ぎとめる綱を外しにかかった。

サリユとユルヴが乗った船を男が押す。ほんのわずかに隙間が開いたところに足をいれるようにして、今度は全身を使って差を広げにかかり、程よく離岸したところで飛び移った。重そうな風体には似つかわしくない身軽さだった。

「お待ちせしたな、最速で向こう岸まで渡してみせらあ」

ユルヴから破格といえる料金を受け取り、男が機嫌よく法螺を吹いた。実際には長棹をもち、川底を押して舟に推進力をつけている。

「あの船に近づける」

船の後部に立つ男に向けて、そっけなくユルヴが言った。手に弓を構えている。船頭が顔をしかめた。

「お客さん、うちの船の上でそういう物騒なのはちよつと……」

船の上で起こった騒動には必ず船の持ち主の責が問われることになる。小首をかしげ、ユルヴは言った。

「奴らに追いつけなくなるほど差がなければ射掛けない。差が縮ま

らなければ、射る。気合をいれることだ」

下頬の膨らんだ顔をひきつらせ、男は渾身の力を込めて棹を漕ぎ始めた。

既にメツチ達の船は河の半分を越えている。気の毒な船頭がどれだけ必死になるかと、その差を覆すことは難しいだろうとサリュは思った。先に着いた彼らがどういった行動に出るか、それも予測がついている。

彼女が思ったとおり、岸についた男達は二手に別れた。別々に商館を向かおうという腹積もりだった。

「こちらも二手だな」

ユルヴの提案にサリュは頷く。どちらがどちらを追うかについては、口にして確認するまでもない。

船着き場からは短い棧橋を経て広場になっている。二人の男達が一人はそれを右に倉庫の立ち並ぶ方角へと向かい、もう一人は直進して広場を突っ切りそのまま市場に消えたのが見えた。接岸を待たずに船から飛び移り、サリュとユルヴはそれぞれの相手を追いかけた。

サリュは倉庫に続く裏道へと走った。彼女の追う相手が向かうのはその奥、クアガイ商会が構える商館に違いなかった。

「メツチ！」

市場の混雑を避け、横に沿うようにして小道を目指しながら声をあげる。

遙か前方を駆ける商人が走りながら肩越しに彼女を振り返った。表情に困ったような仕草から、小さく笑う。男の姿が消えたようにサリュから見えたのは、横道に入ったからだった。

商館までの道は以前通ったことがあるが、裏道や小道の類には詳しくない。この町をよく知るだろうメツチを一度見失えば、もう二度と見つけれないだろうと彼女は考えた。ではどうするか。メツチではなく商館を目指すという手もあるが、それもすぐに自分で否定する。あれだけの商館なら、正門以外にも複数入り口があるはずだった。積荷入れや、裏門。関係者しか知らない通用口に、いざという時の非常経路まで用意されていても不思議ではない。

たった一人で待ち伏せなど不可能。つまり、目の前の相手を追いかけるしかない。

即座に迷いを捨て去り、彼女は整備された石畳みを蹴り上げた。

サリユと別れたユルヴは視界に広がる光景に、辟易しきつた様子で息を吐いた。

昼下がりの刻時、市場には多くの人が溢れていた。声や姿、気配が入り乱れて吐き気を伴うほどの熱気があった。そこを逃げ場に男が選んだのは、もちろんそれが意図であることに彼女は気づいていた。

自分が追ってくることまで計算に入れたかどうかは定かではない。しかし、こうも人が密集した場所では気安く弓を射ることができないのは確かだった。

不快な性根を見抜き、ユルヴは唇の端を持ち上げる。

逃げることにまで関係のない人々を巻き込み、それを盾にしようとする。そうした行いは彼女の知る部族のものではなかった。なるほど、あの男はそこまで誇りを失ってしまったているか。

それならば、こちらにもやりようはある。頭を左右に巡らし、高さのある建物を探す。市場の横に併設して並ぶ幾つかの土壁と漆

喰の建物から適したものを見つけ、彼女は駆け出した。

手に届く石壁を片手でよじ登り、そのまま猫の身軽さで次々に高さを稼ぐ。瞬く間に屋根の上まで辿り着くと、市場のほぼ全域を視野に収めたユルヴは、俯瞰の光景を見下ろして満足げに鼻を鳴らした。手に持った弓を構える。

眼下には無数の人々が蠢いている。その中からたつた一人を見つけて出すのは彼女にとっても至難の業だった。

ユルヴは叫んだ。

「タージエ・ヤッセ！」

凜とした声が市場の上空に響き渡る。

透き通った若さのある声は、騒がしさを縫って人の意識に届くには十分だった。しかし、部族とそれに連なるものしか理解できないその言葉に、ほとんどの人は耳に聞こえても反応を示すことはない。その中で一人だけ動きを止めた者がいた。羞恥の表情が振り返り、上空を見上げる。

番えた弓矢を引き絞り、鷹の目で眼下に注意を向けていたユルヴは当然それに気づいた。小さく笑う。嘲りと哀れみが等分にまざった笑みだった。

「一度は捨てた誇りなら、二度と振り返らない方が身の為だったな」
相手が誇りを捨てた以上、これは戦いではなかった。逃げる相手を追い詰める、既に彼女の意識はただの狩りへと変化している。相手が言葉を介する獣でそれにどんな罵声を浴びせようが、気を遣わなければならぬ謂れはなかった。それが自ら畜生に身をやつした輩が相手ならなおのことである。

自分の失策に気づいた男が我に返り、再び人の群れに隠れる前に、

ユルヴは自身の行動を終えていた。わずかに右手三本の指を放すだけの動作だった。

放たれた矢は射手の生き方を現すかのように一寸の迷いもなく空を奔り、シャコウの額を正確に貫いた。

メツチの逃走は手馴れたものだった。

裏道から裏道を渡り、決して長い直線を行くつもりとしない。角を曲がった男の姿を幾度となく見失い、その度に焦りの心境で足を早め、複数の経路の一方を選び、駆ける。もしかしたら見失ってしまったのではないかと危惧した頃に男の背中を見つけ、ほっと安堵の息をもらす。

そうしたこと何度か繰り返すうちにサリュは気づいた。メツチが本当に撒こうと考えていたならば、とっくにそれはされてしまっているということに。彼女がいまだに追いついていられないのは、ただ相手が差が開きそうになる。より具体的には、角を曲がって彼女が姿を見失いそうになる度に、相手が故意に足を緩めているからだった。

男の稚気か、あるいはどこかへ誘い込もうとしているのか。人質が無意味であることはユルヴから宣言されている以上、今さらそれを狙うとも思えなかったが、手を抜かれているという事実が不快であるということとは変わらない。

逃げながらこちらの様子を窺う余裕まで見せて走る相手に、サリュは一計を案じて時機を見計らった。

二人は小道を抜け、倉庫群の密集する大通りを走っている。道の幅は広いが、河川に面して荷物の積載所も兼ねる裏通りの方がはるかに人の通りは多く、どこか閑散とした雰囲気があった。この通りには見覚えがあった。クアガイの商館まではもうほとんど距離がな

い。チャンスは一度しかなかった。

メツチが肩越しに彼女へ視線を送り、勝利を確信したように笑いかける。その瞬間サリュは口を開いた。

「クアル！ 駄目！」

その演技に迫真さがあつたかとはともかく、声はメツチの動揺を誘つた。狼狽も露に辺りを見回し、若い商人が身体の平衡を失いかける。走る速度が落ちたところにサリュは短剣の鞘を思い切り投げつけた。

願わくば頭に直撃しろと投擲したそれはメツチの横を過ぎて虚しく通りに転がった。石畳みに乾いた音を立てるその音と、視界に入ってきた異物に気を取られ、メツチの注意がひきつけられた。著しく速度が落ちた。

足を早め、サリュは一杯に右腕を伸ばした。宙を舞う布を掴む。思い切り握り締め、引っ張った。

「ぐあ！」

着崩した防砂具の裾を引っ張られたメツチが転倒する。サリュもそれに巻き込まれ、中途半端な受身で通りを転がった。頭部を守りながら決して右手は離さず、顔を上げたすぐ側にメツチの顔があった。

互いに息を呑み、同時に動きだす。後ろ飛びに下がろうとしたメツチにサリュが掴んだ防砂具を引っ張って阻止し、態勢を崩したメツチが舌打ちと共に右手を振る。危険を感じてサリュが右手を離れた直後、振り下ろされた短剣が石板を削った。鏝が広く、かわりに刀身の短い一風変わったその短剣を本来の持ち主へと向けて、メツチが油断なく立ちあがった。

サリュも左手に短剣を構え、腰を低く落として相對する。一步踏み出せば相手に届く距離で二人は笑みのない表情を見合わせた。

「ひでえな。ほんとに砂虎に襲われるかと思つたじゃんか」

「あなたなら驚いてくれると思つたわ。クアルのこと、怖がつてたもの」

「ちえ。誰だつて怖がるだろ、あんなの」

サリュはわずかに口の端で笑つた。間近に見た砂虎に怯えもせず、背中に乗つた男児のことを思い出している。もちろん熱で意識が朦朧としていたせいもあるのだろうが。彼らは無事に集落に着けただろうか。さすがにまだ砂海の途上か。

「なんだよ。なんか嬉しそうだな」

意識を切り替え、サリュは目の前の商人へ告げた。

「あなたが持つている、証拠の書類を渡して」

「渡せつて言われて渡すと思つのかよ」

馬鹿にしたように鼻で笑う。サリュは訊ねた。

「どうしてわざと私に追いかけさせたの？」

相手の目尻が小さく動くのを確認しながら、続ける。

「どうして。あの洞窟で、クアルのことを砂賊達に伝えていなかったの。どうして私の喉を潰しておかなかったの」

「そつしておけばよかったのについていう口調だ」

軽口を無視して瞳の奥を覗き込む。笑いの紗幕の向こう側に、男の本心を読み取ることはできなかつた。

「あなたの目的は、何」

洞窟からこちら、目の前の男がとつた行動は全て、自分に追いつかせる為の行動だつた。それはわかるが、その理由がわからない。「変なこと聞くんだな。それであんたのとる行動が変わつたりするのか？」

メツチはからかうように言った。

サリュは答えない。男の言葉は正しかったからだつた。まあいい

けどさ、とメツチは肩をすくめた。

「俺の行き方とあんたらの生き方。わかりあえないんなら、選ばれるのはどっちだって話だろ。言ったじゃんか、恨みっこなし。それだけだよ」

「正々堂々と競争する為に、わざと私達を解放したって言うの」

サリユは呆れたように言った。実際、とても信じられないでいる。相手の裏をかき、騙すというやり口はまさに商人達の十八番だった。騙されたほうが悪い、見抜けなかったほうが悪い。つい先ほど、そうして彼女達を欺いてみせた男が、いきなり何を言い出すのかと思っただ。

「別にそういうわけでもないんだけどさ。それに、なんか勘違いしてるんじゃないの」

苦笑して、男は笑みを消した。

「別に俺、負けてやるなんて言っただつもりはないぜ」

「……慣れているようには見えないわ」

メツチの構える姿は、いかにもそれっぽく構えてみせただけという格好だった。腰が高く、容易に突けそうな隙が見え見えで、重心にも左右で偏りがある。失せ人を探す旅に出て一年、それなりに荒事を経験してきた彼女には、ほとんど素人同然にしか見えなかった。

「まあ、そりゃ切ったはったは専門外だけだな」

正直に白状して、男は不敵な表情で言った。

「やりようなら色々あるさ。例えば、サリユ、あんたはいったいどうしてここにいるんだ？」

唐突な問いに眉をひそめる。

「どうして？」

「ああ。ユルヴ、あのお嬢様はわかるよ。部族の生き方 砂と共に生きる、ってやつ？ その為に、自分達の誇りってやつのを来た。ならあんたはどうなんだ。いったいどうして、ここに」

サリュは答えられなかった。

畳み掛けるようにメツチが続ける。

「答えられないのか？ わからない？ なんとなく？ いいや、違う。あんたはちゃんとわかっている。そうだろ、死の砂さん」

サリュが大きく目を見開いた。砂漠で野営した晩、ユルヴとの会話をメツチが聞いていたらしいことを思い出す。盗み聞きをしていたという事実をいつそ堂々と、男は嘲笑うように口にしてみせた。

「死の砂を、サリュ。そんな風と呼ぶところがあるんだな。あんたの名前でもあるわけだ。因果なもんだな。それで、あんたも“そう”ってわけ」

沈黙でサリュは応じる。

「あんたは俺を殺しにきたんだ。そうだろ？」

「……書類を渡して。そうすれば」

「そうすればなんだよ。そしたら殺さないであげる？ それとも、殺さないでおける？ おいおい、なんだよ。泣く子も黙る死の砂サマが、そんな適当なことでもいいのかよ」

男の言葉は明らかに挑発的だった。それがあまりにもあからさま過ぎて、サリュはすぐに男の考えを看破した。つまりこの若い商人は今、言葉を武器にしているのだった。

息を吸い、吐く。サリュは口を開いた。

「私だつて殺したくて殺すわけじゃない”って？”」

サリュは息を呑んだ。彼女が言葉を吐きだすのに被せるようにメツチが言ったのは、細かい一言一句に違いはあっても、その意味するところは同じだった。

彼女の驚愕した表情を笑い、メツチは流暢な語り口で言った。

「俺さ、ガキの頃から他人の顔色ばかり窺っててさ。貧乏で、親

もなく、そうでもしなきゃ生きていけなかったんだ。それで、なんていうのかな。他人の言いたいことがわかるっていうか、そういうトコあるんだよ。卑しい根性で身についた技ってやつ。まあでも、これが商人やっててもけっこう便利でさ。そのおかげで食いっぱぐれなくてすんでるようなもんなんだけど」

にわかには信じられない話を聞き、サリュは思い出す。野盗に襲われていたところを巻き込まれたあの時から、確かに男にはそうした不可解なところがあった。まるでこちらの心を読んだかのように話を提案し、解決へと持っていく。自分の態度がそれほどあからさまだったのかとサリュは思っていたが、それは商人の得意な眼力によるものだったのか。

あるいは道中に見せるどこか抜けた行いも、それを隠すためのものかもしれない。あまりに鋭すぎる勘は、人に不審を招かせる。

「だから。はじめて会った時からさ、わかったよ。あんたが人殺しだって」

沈黙するサリュに男は言った。

「ま、でもそれはさ。砂海で殺すだの殺されるのだなんて当たり前だし。殺したことがないヤツなんて、殺されてるヤツだろうし。俺だって経験ないわけじゃないしね。ガキの時分から。けど、あんたはちょっと、見てて不思議に思ったんだよ。なあ、サリュ。あんたは一体、誰の為に殺した？ 誰の為に、俺を殺すんだ」

そこで言葉を区切り。冷酷な瞳がサリュを見た。

「もしかしてだけどさ。誰かの為に。なんて思ってたらしんないか？」

言葉の刃が胸に突き刺さるのをサリュは感じた。

息苦しさをおぼえて、呼吸を忘れていたことに気づく。ひきつった咽喉で上手く呼吸ができなかった。か細く肺をあがかせ、ようや

くの末に返した言葉は、自分でも驚くほど小さかった。

「そんなこと。思って……ない」

聞こえないようにメツチは自分の言葉を続ける。

「誰かの為に。それってようするに、誰かのせいで、ってことだよな。砂のせいで。死の砂って呼ばれるせいで。その名前のせいで。ちよつと他人と違う外見のせいで。そんな風に思ったことないか？ 絶対にないって、そう言いきれるかよ」

サリュの脳裏に幾つもの光景が蘇った。

幼い頃の思い出。忌み嫌われ、蔑まれてないものと扱われた記憶。小さな砂虎。毒。水が枯れて、砂が吹いた。そこに現れた男、とても短く終わってしまった旅。人の肌の温かさと冷たい牢。小さかったクアルの体温。自分を囲む大勢の町の人。魔女、魔女。 魔女。 「うるさい……」

「でもそれってずるいな。自分が悪くないって言ってるようなもんだし。誰かのせいなんだ、自分のせいじゃない。誰かの為なんだ、自分のせいじゃない。そう言い訳してるようなもんだろ」

月夜の晩。冷たかった河。熱かった砂。優しい笑顔。泣き顔。心に決めたこと、旅立ち。それからの出会いと別れ。

「人殺しは人殺しだろ。誰かのせいでも、誰かの為でも。それは、ちゃんと自分のものだって、そう思っべきなんじゃないかって思うんだよな、俺」

……小さな村の子ども。黄金色の夕焼け。血に染まった自分の腕、全身。少年が自分を見あげる、その黄金色の憎悪

「うるさい」

男は黙らない。

「なんか、見てて苛突くんだよ。ほんとに殺したくないんです、こ

んなことしたくないんですー、っていうのがさ。酔っちゃってるっていうか。うん、あんまり好きじゃないや。っていうか腹立つ」

「逃げる為に殺して、逃げたから殺すんだろ。しまいにや、そんな私可哀想だなんていい出したら、もう手に負えないよな、実際。巻き込まれた方が迷惑だって話だよ」

「どうせ今までだって、そうやって他人のせいにして誰かを殺して逃げてきたんだろ。人探し？ それも逃げるための言い訳じゃないのかよ。その探してるって相手にも、会ってどうするんだか。殺すのか？ 殺されるのか？ それでまた他人のせいだよ」

「うるさい！」

サリユは怒鳴った。

烈火の如く怒り狂った双眸が、その二重の環を持つ異形さも相まって今や人をも呪い殺せそうな迫力をかもし出している。その彼女の激情を心の底から晒い、メツチが最後の言葉を言い放った。

「……あんまりさ。自分のこと、悲劇ぶらない方がいいぜ？」

意識が白化した。

気づけばサリユは短剣を振りかぶり、目の前の相手に襲い掛かっていた。

怒りにまかせたその動作はあまりに大振りで、微笑を浮かべた男がどれほど素人であろうと、その対処は容易だった。

サリュの細腕をメツチの右手が掴んだ。そのまま身体ごとぶつかり押し倒れる。

仰向けに倒れた相手に馬乗りになる格好で、サリュは男を見下ろした。倒れた拍子に左手が自由になっている。彼女は短剣を振りかざした。

それを眩しそうに見上げたメツチが、穏やかな表情で言った。

「ちゃんと、自分のせいでやれよな」

サリュの動きが止まる。振り下ろそうとした左腕が、何故か動かなかった。男の顔に違う誰かが重なって見える。メツチより幼い少年の顔だった。

「誰かの為とか、せいとかじゃなくて。サリュだとか、死の砂だとか。そんなんじゃない。ちゃんと、あんたが自分の為にやれ。あんたにとって必要だから、やるんだ」

サリュの全身が震えていた。怒りではない。自分でもなんの感情かわからない、混乱した気分が彼女の情動を支配していた。左腕が重い。どうにかしなければならぬ。ああ、でも、今この腕を下ろしてしまえば、自分はきつと二度と持ち上げることができないだろう。

では、振り下ろすか。そうすれば終わる。その後にもまたこの腕を持ち上げる必要もない。

「……どうしたんだよ。やらないのか？ 腕、いつまでもそうしてたら重いだろ」

擲揄ではない口調でメツチが声をかけた。

「あんたがやらないなら、俺、起き上がっちゃうぜ。うちの商館、すぐそこなんだけど。歩いて、着いて、それでおしまいなんだけど、それでいいのかよ」

よくない。

サリュにもわかつている。目の前の相手から町と砂賊、そしてある部族との密約の証拠となる書類を奪わなければ、ユルヴ達の部族は彼らによって陥れられる。誇り高いユルヴ達の一族がその不名誉を受け入れるはずもなく、そうすれば彼らのあいだには血で血を洗う争いが起きるだろう。

何人もの人間が死ぬ。それを回避するためには、この腕を振り下ろせばいい。そうすれば終わる。大勢の命が助かる。目の前の一人の命と引き換えに。

命。死。それはいつたい誰の為のもので、何故自分はそれをしようとしているのだろう。わからない。どうすればいい。誰か教えて欲しい。誰か

リト……。

救いを求めるように彼女はその名前を呟いた。

記憶の中のその男は、感情の窺い知れない醒めた瞳でサリュを見下ろして答えない。彼女は空を見上げた。薄く砂に汚れた天は高く晴れ上がり、しかし砂は彼女に応えなかった。

空虚さが彼女の胸を満たした。名前すら捨ててしまったら、自分にはもう何も残っていないのだと思った。サリュ。死の砂というその忌まわしいはずの言葉に、誰よりもすがっていたのは彼女自身だった。

異形の瞳から涙がこぼれた。頬に受けたそれを冷たそうに目を眇め、メツチがため息をついた。上半身を起こし、呆然として涙を流すサリュの身体をずらして、立ち上がる。

「悪い。あなたにそこまで押し付けるべきじゃないか。ごめん、悪かったよ」

恐らくは聞こえていないだろう少女に告げて、歩き出し。

「ならば、その役はわたしが引き受けよう」

決して大きくはないその声が静かに響き渡り、直後、飛来した矢がメツチを突き刺した。

若い商人が崩れ落ちる様を、サリュは目の前で見た。

一瞬一瞬がひどく間延びして、時間の流れをおかしく感じる。ゆっくりと地面に倒れ、激痛に顔を歪めて、男が悲鳴と吐息の中間のようなものを吐き出した。

「つあつ……！」

そこで時の流れが戻った。我に返り、サリュが声をあげる。

「メツチ！」

矢を受けた腕を抱え、メツチは地面をのたうちまわっていた。その身体にすがろうとしたところで背後に気配を感じて振り返ると、そこにはユルヴが立っている。

「ユルヴ、どうして……」

「決まっている。書類を渡せ」

「はっ。こうなるんじゃないか、とは……思ってたけどよ……！」

目尻に涙を溜め、それでも口元を笑みの形に歪めてメツチが言った。

「書類はどこだ」

「まったく。優しさってものがねえよな……」

懐から羊皮紙の束を取り出した。受け取ったユルヴがそれをつまらなそうに眺めるのに、説明を付け加える。

「それを、見えるだろ。町の奥の、あの馬鹿でかい建物。領主まで届けられたら、……あんたらの勝ちさ。途中で商会の連中に捕

まったら。負けだ」

「メツチ……」

「早く行けよ。まじ、泣きたいくらいさ、痛いんだから」

「サリュ。お前が行け」

ユルヴは羊皮紙の束をサリュに突き出した。

「私が？」

「ああ。わたしは、こちらの始末をつけていく」

底冷えのする眼差しでメツチを見下ろして言った。口を開きかけたサリュに、部族の少女は首を振り、

「我々の受けた仕打ちだ。我々が返す。それはお前に預ける。

頼む、サリュ。我々を救ってくれ」

真摯な表情で言った。

「そういう、こと。早く行けよ」

洪面の男から言われ、それでも踏ん切りがつかずにサリュはうろたえた。感情を揺り動かされることが続いてしまい、一種の混乱状態に陥っている。

「たく」

苦笑いして、メツチが無事な腕を振りかぶった。何か空を飛び、けたたましい音を立てて窓枠の硝子を破った。建物は彼らが三人とも見覚えのあるものだった。

「ほら、これですぐうちの連中が出て来るぜ。とつとつ、逃げろつて」

メツチがサリュに手渡したのは、鍔が広く作られた彼女の短剣だった。それを握り締め、建物から怒号のような声が聞こえたのに反応して、サリュは立ち上がった。

「領主の館の前は、きつとうちの連中が張ってる。夕方だ。領主が公務を終える直前、夕暮れにまぎれて入れ。それまでは、隠れとけ……」

痛みを堪えながらメツチが言った。

「いいな、夕刻だぞ……！ ああ、それと……もう一本は、あとで返すから、さ。もうしばらく。」

後半部分はサリュには届いていなかった。建物から出てきた人々に背中を向けて、彼女は駆け出した。

「メツチがやられてるぞ！」

「逃げた奴がいる。追いかけるっ」

強面の男達がメツチとその横に立つユルヴを取り囲んだ。その輪の中から現れた髭面の男が地面に横たわる若者を一瞥した。すぐに顔を上げ、周囲に号令をかける。

「今の女を追いかけろ！ 向かったのは領主様の館だ。絶対に逃がすんじゃねえ、全員で追え！」

館長の一声に、すぐに男達が走り出す。アベドは苦痛に顔を歪めるメツチを見下ろし、部族の少女を見て鼻を鳴らした。声もかけずに去っていく。

「薄情な連中だ」

呆れ果てたようにユルヴが言った。

「全く、だよ。……ったく」

脂汗を流しながらメツチが頷く。

「捨て駒だったてさ。もう少し優しさがあっても、いいよなあ……」
「知らん。それより、いつまでそうしているつもりだ」

半眼で言われ、男は泣きそうな表情になった。

「いや。マジ、痛いんだって……」

「わざわざ急所を外してやった。腕に一本や二本、矢を生やしたところで死ぬものか」

「これだから嫌だったんだよ、あんたは。」

怨嗟の声を振り絞るメツチに、そよ風を聞き流すようにユルヴは答える。その手にはいつの間にか、新しい矢が番えられていた。

「わたしはサリュのように優しくはない。もう二、三本、どこかに

射掛けられないうちに、とっとと化けの皮をはがしてみせる」

「ったく。どいつも、こいつも……ほんとに、よ！」

世を怨むような深いため息を吐き、メツチは呻いた。睨み上げるその顔には痛みを堪え、血の気を失ってなお壮絶な笑みが浮かんでいる。

サリュは町を駆けた。

見知らぬ建物に人々、土地。勘所がない状態で地元の間人を相手取り、長く逃げ続けることは不可能だと、彼女はまだ混乱の残る頭で冷静に判断した。

メツチは夕方を待てと言っていた。領主の館の前には大勢の人が待ち構えている。それならば確かに昼間より夜のほうが紛れやすいが、日が落ちるとともに館の扉は閉まってしまつから、狙うなら夕闇。それまではどこかに隠れておく。

機先を制して逃げたこともあり、彼女の背後に追手の姿はなかった。しかし、このまま町を彷徨つていてもいずれ連中に見つかつてしまっただけだろう。領主の館からなるべく近い範囲で、彼女は潜伏場所を探した。

領主の館の周辺は街の有力者達の住まいが並んでいる。サリュはその中の一邸、一軒家には広すぎる土地に忍び込み、時を待った。

一刻が経ち、二刻が過ぎようとして、空を差す陽の色合いに変化が生じた。薄やかな朱色の粒子を捉えて、サリュは身を潜めていた場所から外に這い出た。

人の気配を窺いながら、外套を深く被って歩き出す。彼女が隠れていた土地から領主の館まで決して遠くなかった。周囲に人の姿はまばらだが、なんとかそれらに紛れ、近づけるだろうか。いや、近づかなければならない。

ユルヴは無事だろうか。ノカヤ、その家族達は。メツチについてはあえて考えないようにして、外套の中で書類を握り締めた。傍にクアルがないことが心細い。

角を曲がれば領主の館まで一本道という距離まで辿り着き、そつと様子を窺ったサリュは、通りの先に不自然に人が集まっているのを確認した。苦々しく嘆息する。アベド達は、下手に町中を探し回るより、目標の前で網を張ることを優先しているようだった。確かに、そちらの方が効率的ではあった。

どこに隠れようと、結局サリュが向かうのはそこしかないからだった。領主の館が扉を閉める日没まで待ち続けさえすれば彼らの勝利は揺るがない。町の出入り口には当然、手が回っているだろう。夕方を迎えた今、時間はサリュではなく彼らに味方していた。

迷っている余裕はない。サリュは通りへ出た。そのまま横断して走る不審な姿を捉えた男達が口々に声をあげる。

「いたぞ！」

追いかけてくる気配を背に受けながら、サリュは小道へ入った。館の前に待ち構える人数を少しでも引き剥がし、攪乱した合間を縫って館に入るしか手段は残されていなかった。館の敷地内に入ってしまったえば、その時点で領主の客となる。商会の人間が、それを捕まえて外に引きずり出すことは出来ないはずだった。

だが、土地勘がないのだから、小道や裏道を選んでいても袋小路に追い詰められてしまうだけだ。追走劇は不利とみた彼女は無理に走り続けず、物陰に身を隠して男達をやり過ごすと、すぐに元の通りへと引き返した。幾人か減り、しかしまだ半数以上が残っている一団が、彼女を指差して怒号をあげる。

「戻ってきたぞ！ こつちだっ」

サリュは今度は脇道ではなく通りの向かいの屋敷へ向かった。敷

地を囲むように植えられた木々、景観と防砂を目的とした生垣に飛び込んで敷地に入り込み、駆ける。そのまま敷地内を突っ切つて隣の邸宅に移った。

「追え、追え！」

男達の声が響き渡り、何かがサリュの後を追って敷地に乗り込んでくる。騒ぎを聞きつけて外に出てきた家の使用人達が怒鳴り声をあげた。

後ろの騒動を無視してサリュは走り続けた。領主の館の近くまで出たところで通りに飛び出る。豪華な作りの門が目と鼻の先に見える。その前では、十人ほどの男が立ちふさがって彼女を待ち構えている。

「よお、お譲ちゃん」

その先頭に立ったアベドが口を開いた。クアガイ商会の館長、リールでの長としての地位にあるその男は、世間話でもするかのような口調で彼女に訊ねた。

「なんだか、色々忙しそうだが。この先に何か用事でもあるのかい？」

「……ええ。少し」

サリュは油断なく短剣をかまえた。鈍い陽光を反射させるそれを眩しそうに、アベドが言う。

「へえ。それにしても。顔を見るのははじめてだが、変わった目をしてるんだな。お前さん」

走るうちに自然と外套が外れてしまっていた。素顔を晒したままサリュは答えなかった。相手の意図は読んでいる。言葉は、彼らの大きな武器になる。

「通してください」

それに惑わされない為に必要最低限の言葉を告げる彼女に、アベドは頭を振った。

「まあ、待ちなつて。別にあんたの邪魔をしようってんじゃない。

時間を稼ごうってんでもな。ただ、俺はあんたと取引がしたいんだ」

商売用の笑みを浮かべて、男は続けた。

「難しい話じゃねえさ。あんたが懐に持つてるそれ。その書類を、売ってもらいたい。それだけだ」

サリュは答えない。

「いくらだ？ 言い値で買うぞ。金貨か、銀貨か？」

反応がないのを見て、男はふと思いついたように言った。

「ああ そういえばあんたは、ワームに行くところだったっけな。人探しだったか？ なら、それを手伝ってやるうか。水陸中で取引があるうちの情報網を使えば、誰か一人探しだすなんて簡単さ」

サリュの眉が震えた。それを見逃さず、アベドは笑みを強めた。

「悪い条件じゃねえだろう。あんたは、その書類を渡すだけでいい。それで、大金と、探し人が見つかる」

サリュは目を細めた。ちょうど地平に落ちかけた西日が、彼女の両眼に突き刺さる光を向けていた。朱光を背後から受けた男も一色に染まりきっている。その輝きは男の瞳の中にも見えた。

「 黄金」

サリュは呟いた。それを彼女からの要求と勘違いしたアベドが、苦笑を浮かべて言った。

「そりやまたでけえ代金だな」

サリュは小さく笑う。

「あなたは、黄金が好きなんですね」

「俺？ まあ、そりやあな。嫌いな奴なんているのかね」

その言葉に男の全てが集約されていた。黄金を好み、それ以外の価値観を認めない。

「お渡しできません」

きっぱりとサリュは言った。

「……言い値で買うって言うてんだが」

「いりません」

「情報はいらんのかい」

「必要ありません」

アベドの表情から笑みが消えた。野盗の頭目もかくやという険しい視線でサリュをねめつける。

「どうやらお前さんは、物の勘定ができないらしいな」

男が目線で合図を送った。気づけば、サリュの背後にも戻ってきた男達が群れを成している。彼女の周囲に男達が輪を作った。

「できれば平和的にいきたかったんだが。交渉に応じてもらえないってんなら、仕方ねえ。無理やりにも奪わせてもらおうか」

よく言う。白々しい台詞に嫌味を返す気にもなれず、サリュは短剣を握り締めた。十人以上の相手に囲まれて、無事に切り抜けられる可能性はほとんどない。捕まってしまうかどうか。奴隷にして売られるか、それとも殺されるか。

生きる。わずかにその声を聞いた気がした。あるいは空耳だったのかもしれないが、彼女にとってはどちらでもよいことだった。私は生きる。だが、その為に懐の書類を渡すわけにはいかなかった。何故か、とサリュは自問する。既に答えはあきらかだったが、それを意識するのに少し時間がかかったのは、それがあまりにも単純な理由だったからである。

メツチの言葉を思い出す。ユルヴからの頼みと、その信頼。そんなものは関係なかった。

誰かの為でも、誰かのせいでもなく、ただ自分自身の情動が彼女にその選択を選ばせた。そこには彼女の名前も、その意味するところも全く関知していない。

私がこの男の提案を拒絶するのは、それはこの男が気に食わないからだ。

子どものような結論に、我ながら笑いたくなるような衝動に襲われる。だが、それでいいと思った。死がどうのなの、黄金がどうのと理屈をこねるよりはよほどすっきりしている。生きる。リトを探しだす。書類は渡さない。それだけだ。

男が腕をあげた。今にも襲い掛からんとする男達に、サリュが身構える。

「そこまです」

アベドが振り下ろした腕と共に破局が訪れる前に、知らない誰かの声がサリュの耳に響いた。

そこにいたのはサリュがはじめて見る男だった。

彼女を取り囲んでいた男達があとずさって道を作る、そこをゆつたりとした動作で歩いてくる。彼女よりは幾らか年長だが、髭はなく、顔立ちもどこか貴族然とした趣がある。身につけた衣服も垢抜けていて、サリュはトマスの中心部に住む上流階級の人間を思い浮かべた。

サリュの意識は男に長く注がれず、すぐにその隣に向かった。そこに並んでいるのはユルヴとメツチだった。

「ユルヴ！」

部族の少女が、小さく頷いてやってくる。

ユルヴが怪我などを負っていないことを確認して、サリュは訊ねた。

「これは、どういふ……。あの人は」

ユルヴは答えず、あごでしゃくって見せた。サリュが視線を向けたそこでは、突然の乱入に渋面になったアベドが現れた男に詰め寄っているところだった。

「セルジェイ。こりゃあ一体、何の真似だ。お前には、建物での待機を言っておいたはずだな。それが、部族の女まで引き連れて、何の」

「それはこちらの台詞ですよ。館長」

セルジェイと呼ばれた若者は育ちのよさを窺わせる微笑で応えた。「野盗と結託、ロドリ族をそそのかしてアンカ族を襲撃、誘拐拉致とは、いったいどのような理由でそんな暴挙を？」

虚をつかれたように目を見開いたアベドが、一気に顔を歪めた。わなわなと全身が怒りに震えている。

「……てめえ。自分が何を言っただがるのか、わかってんだろっな」
かすれた低音で言う。その迫力ある威を穏やかな微笑のまま受けて、男は言った。

「もちろんですよ。話は全てメツチから聞きました」

はっ、とアベドが鼻で笑う。

「ふざけたことを。そんな若造の言うことの、何が信じられる」

「いえいえ。ちゃんと証拠もほら、ここに」

セルジェイが取り出したのは一枚の羊皮紙だった。

「あなたが野盗とロドリ族とのあいだに交わした誓約書。あなたの署名入りで、しっかりと残ってます」

「馬鹿な！」

アベドが叫んだ。指をサリュに突きつけ、口を開きかけたまま、硬直する。セルジェイの傍らに立つメツチを睨みつけて、男は悲鳴のような声をきしませた。

「メツチ、てめえ、騙しやがったな……！」

既に腕からは矢がぬけているメツチが、顔色の悪い表情で唇の端を持ち上げた。

サリュは男の台詞の意味がわからず、説明を求めてユルヴを見た。つまらなそうな顔でユルヴが言った。

「お前は囿にされたのだ、サリュ」

「 囿？」

「……お前が証拠を持って逃げる。当然、連中はそれを追う。お前に注意がいけばいくほど、他は動きやすくなる」

「他って、それは……」

聞きながら、自然とサリュの目はそちらへ向かう。視線を受けたメツチが小さく笑った。

「でも。彼らは、同じ商会の人じゃないの」

「勢力争いということだろう」

つまらなそうなまま、ユルヴが言った。

「あのアベドという男をよく思っていないかった連中が、少なからずあの商会にいた。今回のことは、奴を引き摺り下ろす充分な理由になるということだ」

「それって。じゃあ」

説明を受ければ受けるほど疑問がわき、目が眩むような気分でサリュは頭を振った。

「別に俺は裏切ってなんかいやしませんよ、館長」

サリュとユルヴの方に歩きながら、メツチが言った。青ざめた表情に不敵な笑みを浮かべ、

「でもね、捨て駒にだって捨て駒なりの考えがあります。捨てるのがそっちの勝手なら、そうされたらどうするか考えるのは、こっちの自由です」

「わざと、こいつに偽の証拠を奪わせたのか……!!」

メツチは首を振った。

「サリュに持たせたのだって本物ですよ。別に証拠が一つじゃないといけないってわけじゃあない。何かあったときのために、財布は二個持っておけ。あんたがよく言ってたことですよ」

アベドが絶句する。

「待つて。それじゃあ、最初からそのつもりで……？」

信じられない気分でサリュは呻いた。いったいいつから。砂賊の洞窟で裏切った時から、あるいは町にいた時からなのか。どの段階でそんな企みを抱いていたのか、見当もつかずに訊ねたサリュに、メツチは肩をすくめて言った。

「もちろん、最初から。　　なんて言えば格好いいんだろうけど。別にそんなんじゃない。俺はただ、上手くいきそうなほうを選んだだけだしな」

「でも、それで。わざわざ　　」

サリュはメツチの腕を見た。そこにあつた矢はもう抜かれているが、応急処置だろう巻かれた包帯に今も赤黒い染みがにじんできていた。メツチはこの為にわざわざ傷をおったのか。アベドの企みを打破して、ユルヴ達の部族を助けるために。サリュの思考は、

「そんなわけがあるか」
淡々としたユルヴの言葉に否定された。

「思い出せ。こいつらは、いったいどうやって砂を黄金に変える？」
問われ、男の言葉を思い出す。

「　　砂に、血を流して」
男の腕の傷に目がいった。

「それじゃあ……」
「この男がそんな芝居をうったのは当然、自分の利益の為だ。そうだろう」

メツチは苦い笑みを浮かべた。

「まあ、年上連中と若手連中の確執つてのはうちにもあってさ。おいしい商路とか牛耳ってる年上連中がいなくなればもちろん、空くだろ？　ほら、今回の件でうまく働けたら、俺にだって分け前あるし。そしたら今より全然稼げるようになるわけで」

心の底から呆れ果てて、サリュは声をあげることできずに黙って首を振った。

そんなことのために、この若い商人は命を賭けたというのだ。自分やユルヴを裏切り、あるいは裏切ったと見せかけて、命まで追わせて。実際に矢傷を受けたそれが全て、金を稼ぐ為の方策だという。「だから言っただろう。こいつらは狂っている」

ユルヴが言った。彼女もサリュと同じように感じているのだった。メッチが口を尖らせる。

「ひでえ言い方だな。自分の血なんだから、別にいいだろ」

「自分の他人のではない。その生き方が既に呪われていると言っているのだ、愚か者が」

「確かに、そうかもしれませんね」

それまで話を見守っていたセルジェイが言った。口元に微笑、表情には沈痛さがあるが、穏やかな眼差しの奥にざらりとした強い光がある。

「アベド館長。あなたは商館を預かる長として、また商人の先達として、我々にとって常に偉大な方でした。それが、今回のように仁義にもとる行為に走られるとは、商会の仲間として残念でなりません」

やや大仰な仕草には微かな嫌味さがあつた。つまりこの男がアベドと商会内で反目していた勢力の一番手なのか、とようやくサリュは思いつく。

メッチからの情報を手に、男はアベドを館長という座から追い落とそうとしている。メッチのような下っ端の商人に足元をすくわれ、内心ではさぞ相手の無様を笑っているのだろうが、少なくとも表面上にはそうした気配は全く現れていなかった。ひたすらに残念そうな気配を全身に帯びて、男は続けた。

「そちらの方のとおり、我々商人は皆、黄金という財貨の奴隷なの

でしょう。その罪は深くその業は重い。ですが、だからこそ守られなければならぬものがあります。それを常々口にしていたのも、アベド館長。あなたでした」

言葉を区切り、顔を俯かせるアベドにセルジエイは告げた。

「私は尊敬する先達の言葉を守り、通告します。アベド館長、あなたの館長としての任を解きます。この決定はクアガイ商会リスール支部に所属するその構成員全ての意思によるものとし、それを代表して私が本部に連絡します。この決定に、異議のある方はいますか？」

反駁の声はなかった。

利に敏い商人達だからこそ、権力の禅譲がこの場に成されたことを理解しているのだった。既に元館長としての立場にあるアベドを擁護する者はいない。恐らくはアベドの派閥に属していた者もこの場にはいたはずだが、それも顔を俯かせ、沈黙をたもったままだった。

「もし異論がある方は、いつでも私にお伝えください。アベド館長、それでよろしいですか？」

勝利を宣言するようなセルジエイの言葉を受け、

「……いいわけが、あるか！」

それまで顔を俯かせて衆目に敗者の姿を晒していた男が怒鳴り声をあげた。

「そんな勝手が許されるか！ この町は、あの商館は俺のもんだ！

俺がずっと守ってきた、俺が面倒を見てきてやったんだ！」

ぐるりと周囲を見回し、顔を伏せた一同に唾を飛ばす。

「お前も、お前も！ 俺が見習いの頃から世話をしてやったんだろ
うが！ その恩を忘れやがって」

憎しみのこもった男の眼差しが、サリュの視線とあった。瞳の中に奇妙な二重の環を持つその異相に息を呑み、

「お前が。　この、……魔女め！」

血走った目で男はサリュを弾劾した。指を突きつけ、

「この女だ！　全てこの女がやったんだ！」

狂ったように叫びだす。眉根をひそめたセルジエイが首を振った。

「館長。何を　」

「うるさい！　この女が全てやったんだ！　俺を騙して、そそのかした！　そうでないという証拠があるか！」

悪魔にとりつかれたような形相で、男は嬉々として言った。

「この女は流れ者だ。こいつの素性など誰も知らない！　こいつのやることなど、全てあてにならない！」

「館長　」

突然の狂乱振りにセルジエイが閉口した様子を見せる。

男の支離滅裂な言葉には、しかし一理があつた。商会に属するメツチや、部族としてつきあいのあるユルヴと違い、サリュは全くの旅の人間だった。アベドの主張するように、その人間に全ての責任を押し付けることも不可能ではない。　前にサリュが訪れた小さな集落で、その領主の男がしたように。　

周囲の男達が顔を見合わせて何事か囁きあいはじめた。アベドの館長職の剥奪に表立って不満は言えなくとも、その場に居合わせた奇妙な見かけの少女を糾弾することはできる。それはアベドの立場を守り、復権の可能性すら残す。少なくとも商会内にはアベドを擁する、あるいはその後を継ぐ者の勢力が残されたままになってしまふ。それを危惧したセルジエイが何か言いかけて口を開きかけ、それより早く声をあげた者がいた。

「あるぜ」

メツチが手に持って掲げたそれは、サリュの短剣だった。鍔がなく刀身が普通のものより長い。全体的に素朴な意匠のその短剣を見

せ付けるようにして、若い商人は言った。

「これはサリュから預かった剣だ。長剣と短剣に、馬。これはアルスタ家の家紋だよ。その娘は、アルスタ家ゆかりの人間だ」

ざわりと周囲の男達が大きくざわめいた。

ツヴァイに仕える貴族の名門アルスタ家の武名は、商人でなくとも一度は聞いたことがある程のもだった。むしろ、その名を聞いた周囲の反応にサリュの方が不思議そうな表情を浮かべている。彼女は自分がごく短期間の間、世話になったその家名についてよくわかっていなかった。

「馬鹿な……」

狂した形相のまま絶句する。そのアベドに、笑みを取り戻したセルジェイが告げた。

「……なるほど、それは何よりの身分証明ですね。いえ、万が一、その短剣がアルスタ家から盗まれたようなものであったとしても

それは直接、あちらに確認してみなければ。当然その間は彼女は客人として我々が身柄を預からせていただくことになります。それでよろしいですか、館長」

アベドはがくりと肩を落とした。

勢いに任せて全ての罪をサリュになすりつけることしか、男に抗う道は残されていなかった。確認の為、サリュの処分を保留するよくなことになれば、どちらにする部族やそれ以外から他の証拠があり、男の罪は確定する。

やがて、全ての望みが絶たれた男は水気がなくなった声で呻いた。「……違わん。好きにすればいい」

憔悴したアベドが連れて行かれ、その場に集まっていた男達も思

い思いの表情で散った。その場にはサリュとユルヴ、メツチの三人に加えてもう一人が残っていた。

アベドから館長職を譲り受けることが内定したセルジエイがまだ留まっている理由は一つしかない。男はユルヴに向き直り、頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

謝罪の態度をとる相手を、ユルヴは半眼で見下ろしている。

「何についての謝罪だ」

「それは、もちろん。この度の私達の愚かな行動について」

男は言った。ユルヴはそれを鼻で笑った。

「お前は自分達の罪を全て理解しているのか」

「いいえ。しかし、その全てを受け取る必要があると思っております」

如才ない言葉に目を細め、ユルヴは不快そうに頭を振った。

「やめろ。そんなもの、我々は求めてはいない」

頭を下げたまま顔を上向け、男は言った。

「それは、謝罪の必要はないという意味で受け取ってよろしいでしょうか」

「無意味な行動だと言っている」

そっけない声音でユルヴは言った。

「我々の受けた仕打ちに、我々は自分達の流儀で返す。お前達が何を思い、何をしようがそれは変わらない」

「……許されることはない。ということでしょうか」

「そう聞こえたか」

緊迫した空気が生まれた。

町の人間と部族との争いを予感させる雰囲気、サリュが思わず口を挟みかけ、なしえぬままに閉じた。ユルヴがサリュに静かな眼差しを向けている。小柄なサリュよりさらに背の低い少女には、サリュに吐き出しかけた言葉を飲み込ませるだけの風格があった。

小さく笑みを浮かべてユルヴは言う。

「金貨はどれほどで、などとほざかなかったことは誉めておこう。だが、商人よ。お前はわかっていない。お前達が算盤でやるように罪を足したり引いたりできるものか」

「罪は罪として。全て受けさせていただきます。もし我々にそれを償うことができるのでしたら。その機会をいただければ、と思う次第です」

「ほう。そこまでしてお前達は望むものはなんだ。今さら、我々に何を求める」

顔をあげ、正面からユルヴを見据えた男は簡潔な言葉を述べた。

「友好を」

「水源はどうする。新しい儲け口の開拓の、道案内をさせようとするのは諦めるか」

からかうようにユルヴが言った。

「……それがあなた達の意思なら、是非もございません」

「随分ともものわかりがいいことだな。儲ける機会を失ってもいいのか？」

男は首を振る。

「先ほどおっしゃられたとおり、我々は黄金に魅入られた生き物です。それを蔑まれようと、それが私達の生き方である以上、それを捨てることはできません」

ですが、と男は続けた。

「自分達がそうであるからこそ　　そうでない人々に何を持って接するべきか、常に商人は考えています。なぜなら、それこそが我々を獣と隔する唯一のものであるからです」

「それは何だ」

「恥ずかしながら。あえて言葉にするようなものではございません」
「ついさっき口にしていなかったか？」

「どうでしたでしょうか。似たような言葉なら、あるいは。しかし、必要なのはそれが何かより、それが胸の内にあるかどうかであると存じます」

互いの本意と真意を探りながら言葉が交わされる。笑みのない視線を絡み合わせ、先に表情を崩したのはユルヴだった。

「……ふざけた男だ。嘘も言わずによくもまあぬけぬけと。詐欺師か、それとも大虚けか。夢でも見ているのではないか、貴様」
「めっそもございません」

微笑で応えたセルジェイが頭を下げる。その男に向けて、心持ち和やかな雰囲気で、

「だが、忘れるというのは無理だ。我らは受けた恨みを忘れな
い」

ユルヴは冷えた言葉を叩きつけた。笑みのまま表情を凍りつかせる男に、

「受けた恨みには、必ず報いる。一人が受けた恨みは全員で。誰かが受けた恨みも全員で。我々は、それを決して違えない。部族とはそういうものだ」

決別の言葉にも聞こえる言葉に、男がやや強張った声で言った。

「それは、アンカ族の次代族長としてのお言葉でしょうか」

ユルヴは冷笑した。

「まだ理解できていない。私の言葉は父様の言葉だ。そして部族の総意でもある」

ユルヴには見えない方向から、頭を下げる男の表情が沈痛に歪むのがサリユには見えた。新しく館長になる男の、最初の仕事が前任の尻拭いともいえる部族との関係修復だった。もちろんそれが自分達の利益の為であるとはいえ、友好的な関係が両者の血を流させない為には必要なことには違いなかった。

町と部族は、争うしかないのか　第三者である自分が口を挟む問題ではないと知りつつ、暗澹とした心地でそれを眺めているサリュに、だが、とユルヴが続ける声が聞こえた。

「恨みに報いるのと同じく　我々は恩にも報いる。それもまた必ずのことだ」

ちらりとユルヴがメツチを見た。

「砂賊どもの洞窟で、苦しんでいる幼子がいた。それに一杯の碗を用意させた者がいる。その者の意図がどうであれ、それは恩だ。ならば我々はそれに報いる必要がある」

セルジエイが顔を上げた。ユルヴの視線に従って、メツチを見る。両者の注目を浴びた若い商人はきよとんと瞬きした。

「メツチ。お前の望みはなんだ。お前は我々に何を望む」

ユルヴが訊ねた。彼女の言葉の意味を悟ったセルジエイが、強い眼差しでメツチを見る。それに気づかないのか、あるいはそれもわざとのことなのか、サリュにはわからない態度でメツチは頭をかい、しばし考えるようにしてから。とぼけた声で言った。

「えっと　今後ともよろしく、とか？」

サリュはため息をついた。セルジエイも渋面になっている。

「了解した」

弛緩しかけた雰囲気を見捨て、ユルヴがセルジエイに向き直った。

「お前達の謝罪を受けよう、商人。一時の誤解や争いで他を全て否定するほど、砂は心狭くない。生き方や生きる場所、胸にある思いは違えども、砂漠で抱く一杯の水の有り難さは町の人間も部族も変わらない。それならば、わかりあうことはできずとも　互いを認めて生きることではできるだけだろう。それが我らの天意である」

砂海に生き、水に縛られず、砂を受容する。将来、その一つの部

族を束ねることになる少女は、言っていたおやかな微笑を浮かべた。

セルジェイが深々と頭を下げた。王侯貴族に礼するのにも劣らない、敬意に満ちた所作だった。

エピソード

それからの数日をサリユはアンカ族の集落で過ごしていた。

自分の照会を待つ間という話ならリスールに留まっておくべきだったが、その話がアベドの言いがかりであることは承知していたから、サリユの行動は誰にも咎められることはなかった。そうしたことは別に、純粋な好意で町での待遇を勧めてくれるセルジェイの言葉もあったが、サリユは部族の集落を選んだ。ユルヴから熱心に誘われたこともあるが、クアルと共にいられるのが一番の理由だった。

ノカの家族と共に部族の集落に向かったクアルは、やはり大いに部族の大人たちを慌てさせたようだが、同行した家族のとりなしで集落を追われることはなかったという。何より、ナクイをはじめとする子ども達がクアルにじゃれついてみせたのが、一番の駄目押しになったとノカから聞いていた。

子を見守る親のつもりなのか、それとも同じ年頃の遊び相手を見つけた気分なのか。今も遠く短草の平原を子ども達と駆け回っているクアルを見ながら、サリユは最後の荷をこぶつき馬にくくりつけた。

いつものようにため息を吐くこぶつき馬の頬を撫でる。その後ろにユルヴが立った。

「……準備は出来たか」

振り返り、サリユは微笑んだ。

「ええ」

「もう少し、ゆっくりしていつてくれればいいのに」

ユルヴの隣に立ったノカが、心から惜しむように言った。

「ごめんなさい。でも、行かないと」

サリユは防砂具の上から手紙に触れながら答えた。

「……うん。わがまま言っちゃだめよね」

「そつだ。子どものようなことを言つな」

したり顔で言うユルヴに、むつと眉を寄せてノカが言い返した。

「何よ。ユルヴだつてサリユにずっとここにいて欲しいって思つて
るくせに。クアルにだつて」

「お前は何を言っている」

仏頂面でユルヴがそつぽを向いた。サリユとノカは顔を見合わせ
て笑つた。

「おーい」

遠くから手を上げながらやってきたのはメツチだつた。商会内
のごたごた 役職異動や、それに伴う担当商路の整理と引継ぎな
どを終えて、男は昨日に部族の集落を訪れたばかりだつた。それ
にはサリユの様子を見に来たのに加えて、もう一つの理由がある。

「……あんたらさ、なんで揃いも揃つてそんなピンピンしてるんだ
よ。昨日、あんだだけ酒飲んでたじゃねーかよ」

頭を押さえながら呻くのに、三人が酒気の残りのない表情を見比
べた。

「あのくらいなら、ねえ」

「貴様が情けないだけだ。軟弱者」

「……この部族の女は、こんなんばつかかよ」

げつそりと肩を落とす。青ざめた顔色がサリユを見た。

「で、準備は？ なんか足りないもんとかないか？」

「大丈夫」

サリユは頷いた。リスールからワームに向かおうと用意したもの
がそのまま残っていた為、改めて準備する必要もないほどつた。

「そつか。ああ、これ。セルジェイさん セルジェイ館長から」

言つて渡されたのは二通の手紙だつた。

「一通は、師匠宛て。まあ大丈夫だとは思っけど、前の手紙だと情報
の行き違いがあったりで誤解があるかもだから」

「以前の手紙はアベドの署名になっている。確かに、なぜ館長を失
職したばかりのアベドの手紙を持っているのか、いらぬ疑いをもた
れることになるかもしれないな」

「こつちは？」

「そつちは、アルスタ家宛て」

眉をひそめるサリュに、メツチは苦笑した。

「まあ、挨拶みたいなものだよ。もし、何かご入用でしたらお声
がけくださいつつう。根っからの商人なんだよ、あの人。別に渡
しても渡さなくてもいいから、気にしないでくれ」

サリュとの出会いを機に、帝国貴族とコネを持つとうという腹づも
りなのだろう。顔に似合わない男の商魂たくまじさに呆れるより可
笑しさをおぼえて、サリュは微笑を浮かべた。

「もし、トマスに帰ることがあったら。渡すわ。……商売のことは
よくわからないけど」

「おう。それでいいよ。あの人だって思いつくことはなんでもやっ
とこつってだけだろうし」

ふとそれで思い出して、サリュはメツチに訊ねた。

「そういえば。どうして、メツチはあの剣のことがわかったの？
あれがアルスタ家のものだって」

「そりゃ、見ればわかるだろ」

メツチはさも当然とばかりに答えた。

「家紋つきだぜ。しかもあのアルスタ家。俺、別に武器のことは詳
しくないけどさ、それってすんげえ高価だぜ。材質も、普通の鉄と
かじゃないし。普通はもつと分厚いだろ」

サリュは腰から短剣を引き抜いて確かめた。

確かに鍰もなく、変わった形状ではある。軽さや薄さ、奇妙な柔

らかさなど普通とは違うと思っではいたが、それらについてあまり深く考えたことはなかった。彼女にとつては、大切な人が旅立ちの時にくれた大切なものというだけの認識だった。

「……家紋の入ったものを預けるつてのはさ。貴族の人間にとつちやかなり重要なことつて言うぜ。あんたとアルスタ家の人達がどんな関係かは知らないけど。あんたが、大切に想われてる証拠だよ」

その言葉に、彼女の胸が詰まった。

望郷の思いが沸く。懐かしい顔ぶれを思い出し、その為にも早く旅立たなければと思った。あの人を探して、そうしたらトマスに帰ることが出来る。またあの人達に会うことができる。

今さらのようにサリュは思った。外れ者のような自分にも帰るところがあるのだ。涙がこみあげてくるのを感じ、それをごまかす為に彼女は笑った。

「ありがとう、メッチ」

その柔らかい笑みを直視した男が、衝撃を受けたように固まった。「……どうしたの？」

首を振る。顔が真っ赤になっていた。

「サリュ。これを」

ユルヴが差し出したのは刺繍布だった。頭部に巻いて布防具として使えるようにやや短い丈のそれには、ユルヴ達の部族を現す刺繍が成されている。そこにキキョウの柄を見つけて、サリュは困惑して訊ねた。

「いいの？」

不機嫌そうに押し黙るユルヴを笑って、ノカが答えた。

「照れちゃって。よかったら、使って。あのね、私がサハの刺繍も付け加えておいたの。ユルヴも何か入れるつて言ったんだけど、こ

の子、昔から刺繍が苦手だね」

「ノカ、お前は黙っている」

険悪な眼差しで睨むユルヴと、穏やかにそれを受け流すノカを見て、サリユはまた目頭が熱くなるのを感じた。いけない。自分はこの人にも涙もろかったのだろうか。

「あー、あのさ。サリユ、ごめんな」

顔をようやく平静に戻したメツチが言った。なんのことかと首をかしげる彼女に言いづらそうに、

「ほら。町で、俺が言ったこと。あれ、嫌がらせで言ったとかじゃなくて。いや、思ってもなかったことを言ったわけじゃないんだけど、別にそういうあれじゃなくて」

要領を得ない言葉を聞きながら、ああ、と思い至る。

「ちよつと思つことを言ってみたってのはほんとなんだけど、別に悪いって意味で言ったわけじゃなくて。あんまり思いつめないほうがいいっていうか、なんていうかさ」

「大丈夫」

いつまでも終わりそうにない弁明を遮って、サリユは男に笑いかけた。

「あなたの言うとおりだと思うから。大丈夫」

「いや、そういうんじゃない」

サリユは頭を振った。

自分が思いつめていたのは、確かにそのとおりだと思うのだった。イスマ・クでのセスクのことが、ずっと頭から離れなかった。いつの頃からか、それを何かのせいにしたいと思っていたのも、恐らくはその通りだった。

それは、弱さだ。そんなものの為に自分はあの人を探していくのではない。だから、

「大丈夫」

きつぱりと言い切るサリュウの表情を見て、メッチは渋面になり、頷いた。

「お前は死の砂ではない。サリュウ、お前は我々に死などもたらしめていない」

ユルヴが言った。

「風は死を運ぶだけではない。香りを、花を、種を運ぶ。そうしたものについて、我々にはサリュウとは違う呼び方がある。……お前さえよければ、それを名乗るか？」

「……ううん。ありがとう。でも、大丈夫」

ユルヴの気遣いに、サリュウは微笑んで答えた。

「私はサリュウでいい。そう私を呼んでくれる人がいるから、それでいいの」

彼が。彼女が。それで十分だと、彼女は思った。

「……そうか」

ユルヴも微笑を浮かべた。

「あー、くそ！ 俺、やっぱりワームまで見送りにいつちやおうかなあ」

突如、頭をかいてメッチが吠えた。半眼でユルヴが言う。

「馬鹿を言うな。貴様は我らの部族との折衝人だろう。そんな暇があるか　ワームにはわたしがついていく」

「なんだよそれ！ 俺だつて行つてもいいだろっ」

「いいわけがあるか。ただでさえ未熟な商人が、せめて一人前の仕事をしてからほざくがいい」

「未熟つて、……あんたらの新しい担当に俺を推薦したの、お前じゃねえか」

「当然だ。相手が未熟な商人なら色々とやりやすいからな。だからといって我らとの取引で何か不手際でも起こそうものなら、即座に首をはねてやるから覚悟しておけ」

「なんだよこの凶悪な女は！　こんなのが長になったらこの部族おしまいだぞ！」

喧々囂々のやりとりを聞きながら、サリユはノカと顔を見合わせ、大きく笑いあつた。

涙が出るほど笑い、その拍子に空が見える。天晴れの蒼が透き通るような高さで彼らを見下ろしていた。

バーミリア水陸最大の商業都市トマス。

その街の中央、立ち並ぶ白亜の建物の一室で、館の主人が封を切つた手紙に見入っている。

「北の国境から半数を？」

信じられん、と金髪の女性　クリステイナ・アルスタは呟いた。

ゆったりとした上衣に包んだ身を拵えの良い椅子に落ち着かせ、長く伸びた髪は緩く編み上げられている。彼女は午前中だけで片がついてしまった公務を終え、先ほどまで自宅の中庭で葉茶を飲みながら読書に耽っていたところだった。

そこに帝都からの便りが届いた。あるいは行方知れずのあの人物について何か連絡が入ったかと急ぎ自室に戻り、目を通した内容がそれだった。バーミリア水陸に四方に広がる、その北の河川域を守備する半数の兵をこの一月の間に移動させる予定だという。

「上はいったい何を考えている……」

兵というのは、ただ存在するだけで多大な費用を要する。広い領土（というより、領水）を持つツヴァイにとって、兵数は常に必要最低限を越えなかった。軍組織を維持するのも人手はいる。いざ戦となれば緊急的に兵を招集することは可能だが、常にそれをできる社会体制には現状、ツヴァイという国家はなかった。

その為、国境に置かれる数は慢性的に不足しがちである。自身、地方での軍務経験を持つ彼女はそのことを肌身で知っていた。そこから半数を抜く。容易に信じられる話ではなかった。

もちろん、組織を成り立たせる為の人員を省いた上での半数ではあるのだろう。西の国境は水陸越しの襲来に備える必要があり、南では今なお領水線を巡った小競り合いが続いている。東に控えるのはツヴァイにとって最も警戒すべき敵対国であるから、どこかから兵を動かすことを考えた場合、現時点で比較的に落ち着いた状況の北という選択は理解できる、が。それでも半数というのは無茶な話だった。

陽動か。真つ先にクリスはそれを考えた。しかし、半数というのはあまりに不自然すぎた。相手を畏にかけるには稚拙で、畏と見せかけて警戒させるのにはお粗末に過ぎる。兵を移動させるのにも金がかかるのだ。そこまでしてそれをするからには、何かの理由があるはずだった。

読み進めると、手紙の末部にそれらしき文が書かれていた。

東に騒乱の気あり。注意されたし。

近年、地域一帯に広がった大規模枯渇からこちら、軍事活動を控えていたボノクスが動き出したのか。しかし、それならそうと書けばいいだけのことだった。あえて騒乱の二文字で書き記した手紙の主の意向について、彼女はしばし考えこんだ。

帝都ヴァルガードとトマスの距離は長く、そこに横たわる溝は深い。政治的に微妙な立ち位置にある両者の間にいるクリスもまた、全ての言動に注意を払わなければならなかった。行動は注目を浴び、言葉には曲解される恐れがつきまとう。許されるなら剣で切り捨ててしまいたい煩わしさは、常に彼女の周囲に纏わりついて離れな

った。

だからこそ、情報の取り扱いには彼女も気を遣っている。政治という代物は彼女の好みの対極にあるが、それをおざなりにして無知を決め込むほど彼女は愚かではなかった。とはいえ、潜在的な敵地と云っていいトマスで心から信用の置ける相手は限られる。帝都から送られる親しい友人からの手紙は、彼女にとって貴重な情報源だった。

「最近の動きは、どうだ」

クリスは櫛机の向こうに立つ執事に訊ねた。彼女の命があるまで室内に溶け込むような自然さでその場に控えていた若い男は、主人の言葉に過不足なく答えた。

「皆様、泰然としておられます。むしろ中堅以降の商家で奇妙な動きがあるようで」

「奇妙な？」

「はい。何がというわけではございません。特に噂といったものもないのですが、近頃は物の値段の上下に少し幅が出ています。何かを知る、あるいは何かがあることに感づいてのことかもしれません」

商業都市トマスは、それを實質に支配する者も貴族ではなく、商人であるといつていい。まず公爵からがトマスで最も大きな商業組合の長であるし、配下の貴族にもそれぞれお抱えの商家が付き従っている。トマスの施政はその商家達の寄り合いによって決められるという話は、決して外れたものではなかった。

情報という生ものについて商人達の手は早い。中堅の商人達の動きには、そこに繋がりのある大商家達の何か大きな事態が絡んでいると考えるのが自然だった。恐らくそれは、手紙に書かれている内容とも関わりがあるだろう。

トマスの商人が騒ぎ、それと時機を同じくして兵が動く。単純に

考えれば戦争という予測に行き着く。戦火は人の命を消費し、商人達は流れた血から私腹を肥やす。決して経済に明るいわけではなかったが、戦争が金儲けになるという程度のことならクリスも理解していた。

だが、それだけではない。ツヴァイは国の興りからして侵略国家であり、その経済の在り方に戦争が深く関わっているのは今に始まったことではなかった。手紙の内容と商人達のざわめきにはそれ以上のものがあるように思えたが、それが何であるか、今ある情報だけでは想像すらことも難しかった。

理由のない焦慮が彼女を苛立たせ、主人の表情からそれを読み取った執事が、控えめに提案した。

「さらに情報を集めてまいります。よろしければ、今回はいつもより手を広げてみたいのですが……」

情報の価値を知る商人は皆、一様に口が固い。しかし、それでも決して抑えきれず、どこからか立ち昇って出回るのが噂というものだった。特に末端にいけばいくほど、そうした傾向は強くなる。

「……できるか？」

クリスが訊ねたのは行動の可否ではなく、その秘匿性についての確認である。彼女は彼女が周囲に目を配る以上に周囲から警戒され、その行動にも監視がついているはずだった。彼女の行動は、ただ個人のものではなく、それが帝都にまで類が及ぶ可能性もある。慎重さは何よりも必要とされるべきだった。

「決して察されるまでには。幾つか心当たりをつついてみようかと思えます」

「では、そうしてくれ」

慎重に、という言葉を使わないのが彼女の男への信頼の現われだった。一礼した執事が部屋から出ていき、彼女は手紙をもう一度読み、そこにニクラスという綴りの記述がないことに小さく息を吐い

た。

引き出しから触りのよい製紙を出し、羽筆の用意をする。クリスが手紙の返事をしたため始める前に、扉が開いた。現れたのは先ほど部屋を出て行ったばかりの執事である。いつもはノックを欠かさない男だが、今それを怠った理由がその顔色に表れていた。いつも冷静な表情に、わずかな動揺が見て取れた。

「クリス様。たった今、お客様がいらっしゃったのですが」

「客？」

クリスは眉をひそめた。

今日の午後、誰かが訪問してくる予定など入っていないかった。前もって伝えずに家を訪れるのは普通、非礼な行為にあたる。そんなことをするのはよほど親しい人間か、あるいは

勢いよく椅子を引き倒し、クリスは立ち上がった。男へ来客の名を訊ねることもせず、部屋を出る。まさか、まさか、と内心で呟きながら長い廊下で玄関へ出た。

そこに立つ人物の姿に、彼女は声を失った。

思った人物ではなかった。ニクラス・クライストフ。一年前から行方を探し続けているその男ではない。だが、見知った相手ではあった。

「おう、久しぶりだな。クリス」

精悍な顔つきに人を食ったような笑みを浮かべ、タニルの領主ケツセルトがそこにいた。

プロローグ

水が巡り、砂の流れる惑星。常に乾き逼迫した地では、水源を手にした者が権勢を振るうのは自明のことだった。

古くは神話の頃から、太古の八ペウス集合郡、ガヘルゼン王国などその時代の寵児がそこに縄張り、その豊富な水源を狙う者の手によって多くの戦が起こり、血が流れた。

いわゆる三大水源の一つ、バーミアア水陸と呼ばれる動植物の貴重な生息地域は、大枠でいってそれがそのまま一つの文明圏でもあるが、とはいえ水陸というのは線引きによってはつきりと示されるものではない。例えば水場の沸き様とそこに生きる人々を、一つの図として遠く俯瞰してみればそう分布して見えなくもないという、その程度のものでしかなかった。

その証として挙げられるものに、バーミアア水陸における人種の違いがある。

水陸には白色や褐色の肌があり、髪は金銀から茶黒まで数多い。東と中央、また西や南など各地域によつては骨格や顔つきにも明らかに趣の差が見てとれた。一個の水源を基としたただ一種が源流とするには、あまりにも多彩に過ぎた。

また、ガヘルゼンの時代、西方よりバーミアア水陸に襲来した勢力は、明らかにそれとは一線を画していた。全く異なる文明圏が惑星に一つ以上あることは確定していた。

水陸に複数あったとされる種がそれぞれに数を増やし、種族となり、集団を組む。そうして他者と出会い、戦い、あるいは交流を育み血を混じらせながら形成されたのが、バーミアア水陸、その文明圏である。

人々はそこで、水と水源を巡って戦いを繰り広げた。

バーミリア水陸で長らく勢力を誇ったガヘルゼン王国が衰退した後、水陸には群雄割拠の時代が訪れた。小国、小勢力が乱れて互いに競い合い、やがて一人の男が中央大水源をその手に掴むまで、その戦乱は百五十年近くの長きに続いた。

元は傭兵を生業としていたその男の名前をアスリと言う。傭兵とは、砂海を渡る人々の中で特に戦いを生業とする者で、聞こえは違えど、野盗の一種といってさほど変わらない。アスリはその傭兵団の一つをまとめる首魁だった。

中央大水源を巡る複数の勢力が絡みに絡んで繰り広げられた戦いに参陣したアスリは、その類稀な統率力で敵を打ち倒し、その後自らの雇い主を殺害して残存勢力を併呑した。そうして大水源を手に入れた勢いのまま周囲の敵勢を屠り、吸収して、あれよあれよというまに一大勢力へと成り果せた。

自らを亡きガヘルゼン王国の志を継ぎ、さらにそれを越える者であると宣言したアスリが、王の上をいく、皇帝という尊称を使って建国したのがツヴァイ帝国である。中央大水源には帝都ヴァルガードが定められ、以降、中央大水源はヴァルガード水源と呼ばれる。

アスリの勇飛を支えたのは第一にその傭兵団の精強さがあったが、腹心の存在も大きかった。特に無二の友として信を得ていたのがジユスターという男で、後にベラウスギという姓を名乗った。政治と謀略に秀でたジユスターはツヴァイ国体の整備に努める一方、南方にあった水源、ヴァルガードにも劣らぬ水量豊富なその地に街を興した。後の商業都市トマスである。

さらに、ジユスターはヴァルガードとトマスを二つの水源から溢れる水で繋ぐことを唱えた。これは点として散在し、沸いては枯れる水場を流れることを当然のこととして生きてきた人々には全く驚くべき提案だった。

周囲を制圧して収奪した財、農奴、そして水場での安定した生を保証するという宣伝に多くの人が集い、八年の年月をかけて水路は完成された。

ジュスター・ベラウスギの偉業としては、商業都市トマスの重要性を見抜いた先見の明はもちろん、この水易路に関する発想と実行力が挙げられる。特に後者については、いまだに謎とされる部分が多かった。

河川水路という発想自体は、豊富な水源を抱いた者だからこそのものである。水源から水を引くという行為も、あくまで人の手に可能な範囲であればそれまでにも為されてきていた。しかしそれが、遠く水源と水源を結ぶほどのものとなれば、まるで尋常な発想ではありえない。

ヴァルガードとトマスの間には当然、砂海があつた。比較的安定した砂漠と流れる砂である砂海の境目は判然とせず、砂海に河川を通そうといくら掘ってみせたところで、砂に押し流されるのでは水路の形など保てるはずがなかった。

当時の技術力はもちろん如何ほど後代になろうが、複雑怪奇な砂海の中で水路として通せるルートを調べる方法などありえないというのが専門家達の一致した意見である。

しかし、現実に水路は完成した。ジュスターがどのような手段でそれを成し得たのか、それは水陸史における大きな謎とされたままだった。一応の定説としては、何も魔術的な所業のものではなく、ただ地道に下の地面の安定性を確かめながら、少しずつ長い年月をかけて安定したルートを構築していったのだらうと言われている。

それまで前例のない空想じみた存在を、恐らくは一国の貯蓄など容易に食いつぶすほどの財を投じてまで行うまでの確信を、どうして持ちえたのか。ジュスター・ベラウスギに関わる謎は尽きない。確かなことは、彼が悪魔的な洞察力を持った鬼才の主であったとい

うことである。

ジユスターの先見は正しかった。ヴァルガードとトマスを繋ぐ一本の線。その河川がツヴァイ帝国の爆発的な繁栄のきっかけとなった。

それまで地表のほとんどを占める砂海にあり、人々はいつ枯れるかわからない水場を頼りに移動していた。点と点を、不安と恐れの中かで行き来するしかなかったのだが、太く長く、確かな河川水路はその常識を覆した。

水路を用いることで、人々は安全に街を行き来することができた。安全に、多く、早い物流が可能になった。人と物の双方がさらにツヴァイへ集まり、その潤った人と財がツヴァイの軍事力を高めた。

ツヴァイは北方の国サシユナに侵攻し、半年でこれを征服した。

後々までの強敵手となる東のボノクスとの間にはじめて戦端が開かれたのもこの頃である。さらには西の大国ナトリアで起こった政争へも介入し、これを属国とした時点でツヴァイはバーミリア水陸における最大国家となった。

もちろん、他国との戦争以外にも多くの出来事があった。その全てが輝かしいものばかりではない。

初代皇帝アスリの後を継いだ二代皇帝シエハンは軍王とも称された武勇の主だったが、ヴァルガード南東ラタルク地方を巡るボノクスとの戦で若くして命を落とし、その早すぎる死が帝国に後継問題を引き起こした。それぞれの御輿を担いだ貴族同士による争いの後には内情不安が訪れ、それを払拭するために水天教が国教に用いられた。そうした帝都のごたごたを遠くに見る形でトマスからは征服した主要水源へ新たな水路が作られていき、最終的には四方に伸ばされたそれらの水路は、ツヴァイの繁栄と共に、トマスの存在価値を危険なまでに押し上げることになる。水天教ではどの宗教も宿命

的に併せ持つ特殊な構造の在り方がやがて内部の腐敗を招き、その暴走が水陸全土を巻き込んだ魔女狩りの大災へと繋がった。

建国から二百年が経とうとしている現在、九代皇帝フリーギ・スキラシユタの治世の下で最近是比较的に平穏が続いていたが、不安の種がないわけではなかった。

内憂外患は大国の常である。怯えはせずとも、それに備えないわけにはいかなかった。砂は常に流れ、栄えるものもまたいつかは滅びる。それは歴史を齧ったものであれば誰もが知る道理だが、しかし同時に、誰もが自らもまたそうなのだとは思わなかった。

あるいは、大水源という豊かな水脈を戴くからこそその傲慢だったとも言える。しかし、いずれにしてもそれは、将来に必ず起こる出来事である。

変容の兆しは既にあった。

長らくツヴァイとボノクス両国の係争地であり続けたラタルク地方。水源が枯渇し、両国ともに手を引いた空白地帯になっているその地で起きた出来事が、その始まりだった。

「ケッセルト・カザロ……」

呆然と呟き、はつと我に返ったクリスは険しい眼差しで突如現れた訪問客を睨みつけた。

「どうして貴公がここにいる」

「数年振りだつていうのに、つれねえな」

ケッセルトは苦笑を浮かべた。

「戦友が会いにきたんだ。少しは喜んでくれたつていいだろう」

「何が戦友だ。自宅を訪ねるのに連絡も寄越さんなどと、無礼にも程があるぞ」

男が精悍な顔つきに軽薄な笑みで答えるのに、クリスは一言で切り捨てた。

「おいおい。俺とお前の仲じゃねえか」

「私と貴公がいったいどんな仲だというのだ」

「決まってる。お互いの命を預けて戦った、背中を預けた同士って奴だ」

「勝手なことをほざくな」

空々しい台詞に短く吐き捨てて、大きく息を吐く。

「……帰ってくれ。せつかく来てもらって悪いが、今は話をするよ
うな気分じゃない」

「葉茶の一杯くらい出してくれよ。せつかく出向いてきたんだぜ」

「どうせ愛人の宅が近くにいくらでもあるのだろう」

「なんだ、妬いてんのか」

ざわりと怒りに身を震わせるクリスに、ケッセルトが両手をあげて降参の意を示した。

「冗談だよ、冗談。つたく、相変わらず冗談が通じない奴だな」

「貴様の冗談は昔からくすりとも笑えん。出直してこい」

「おーおー、怖え怖え。玄関に駆けつけた時はあんなに可愛い顔だったのになあ。いったいどの誰だと間違えたのやら」

クリスの双眸が冷ややかな光を宿した。決して怒りがなくなつたのではなく、度を越したそれが一見して静まつたように見えただけである。

「それ以上低俗な妄言をのたまうようなら、命はないぞ」

「わかつた、悪かつたよ。別に冗談ってわけじゃねえのによ」

両手をあげたまま嘯く男を射殺そうとするかのようにしてから、クリスは勢いよく男に背を向けた。そのまま去ろうとする背中にかかると音がかる。

「いい土産話があつたんだがなあ。砂虎を連れた娘の話とかな」

クリスの足が止まつた。

平静を繕つて振り返つた先で、ケッセルトが浅薄に笑っている。「葉茶の一杯、奢ってくれる気になつたかよ。喉を湿らせれば、それだけ声の通りもよくなるつてもんだが」

「……入れ」

止むを得ぬ、とは彼女は言わなかつた。かわりに表情にありありとそれが表れている。

クリスとケッセルトは帝都ヴァルガードの大学で知り合つた間柄である。

水陸各国の貴族子女を集めて開かれた大学には、有望な若手や才ある職人、学者見習いなども多数が集められており、ケッセルトは年長の者達の中で大学に招かれた一人だつた。

大学では、彼女自身が個人的に特別深い親交があつたわけではない。ケッセルトが在籍したのが一年間のみだつたということもあるが、クリスがよく行動を共にしていた人物と同様、ケッセルトも様

々な意味で目立つ性質の人間であり、それで厄介ごとに巻き込まれたことは多々あった。

クリスがケッセルトと再会したのはその一年後、彼女が大学を出て軍務に就いてからである。

当時、ツヴァイでは南東のラタルク地方での水源不安が囁かれていた。ラタルクの支配権についてボノクスと争ってきたツヴァイは、それを好機と見て出兵した。それまで一貫して内政を重視し、軍事活動を控えていた九代皇帝フーギにとっては初めての積極的な行動でもあった。

軍才を認められていたケッセルトは、部隊長としてそれに参陣していた。一方のクリスは新任仕官として、彼の下についた。

この戦役においてツヴァイは優勢に軍を進めた。水路沿いとその左右の砂海に点在する水場を次々と勝ち取り、ついにはタニル奪還も果たしたところにボノクスからの反抗が始まった。両軍、死力を尽くした戦いが繰り広げられ、その決着がつく前に、不安定だった水場が枯れ果てた。

ラタルク地方の水源が不安定なことは数年来の噂ではあった。その兆しも確かにあったとはいえ、唐突とっていい出来事だった。そこまで急なものだとは両軍ともに予想していなかった。

水がなければ、その地を占有しても全く意味がない。タニルに駐在する兵だけを残してツヴァイは引き下がり、一方のボノクスも反攻作戦の為の準備を全て投げ打って戦線を縮小した。

タニルに兵が残されたのは、そこにはまだ水が沸き続けているからだというのが理由だったが、実際には領土線、領水線を確保する為という政治的な理由であろうと言われている。

実際の理由はともかく、そうしてタニルは国防の最前線となった。既にトマス・ラタルク間の水路は存在していたから、途中の砂海

が枯渇し、航路が途絶えても水路を用いた補給の道はある。しかし逆に、南で行われる小競り合い　河川の領有権を巡った押しあいでもしツヴァイが退いてしまえば、そのまま敵中に孤立してしまう恐れがあった。

そうした事態を招かない為にも、タニルに入る指揮官にはただ一個の戦場での戦術眼だけではなく、もつと高みからの視点が必要だった。タニルを防衛しつつ、必要とならば南の水路戦線にも出向き、さらには長らく敵国の手にあつたタニルの存在を、ツヴァイのものとして作り変えなければならぬ。

戦術、戦略、政治的な手腕まで必要とされるその領主に誰がつくのか、答えは多くの者が驚くものだった。ケツセルト・カザロ。この時二十四歳、異例の人事であつた。

先だつてのボノクスとの戦役で幾つか功績を挙げてはいたが、如何せん若すぎる。戦場働きしか知らぬ若造に、例え補佐官がつくとはいえ、何ができると多くの貴族が嘲笑つた。

彼らの態度は当然のものだった。大国ツヴァイの周囲にどれほど敵が多くとも、その一方の国防の責任者に、中堅に入りかけたばかりの人間を置くなど戦理から外れている。そこまで落ちなければならぬほど、ツヴァイの人材は枯れてはいなかった。

故に、自然と次のような噂が流れた。

皇帝はラタルクをお見限りになられたのだらう、という内容である。どこからのものかわからない噂とはいえ、それにはある程度の信憑性があつた。

この水陸において、支配とはつまり水の湧出する場の制圧に他ならない。大規模が枯渇した地域一帯を征したところで、そこに人は住めない。航路もひけないのではまったく旨みがなかった。

では、そんな枯渇地帯を守る為、そもそもタニルという存在は

必要か否か。その扱いがひいては、皇帝が今のラタルク地方をどのように考えているかの証左になる。

そこに若手中堅の貴族が配置された。万鈞の重みを持つが故に滅多なことを口にできない、それが皇帝からの意思表示であると、重臣はじめとした貴族連中がとつたのは自然なことである。ケツセルト個人にも家にも、大貴族の背景がないこともその後押しとなった。栄転ではなく左遷。あるいは厄介払いか、それとも肅清か。そうしたものであるうと噂された。

様々な噂や勘ぐりのある中、ケツセルトは平然とその任についた。ラタルク地方における領土縮小という方向性に傾いていたボノクスも、タニルに兵があることまで見過ごすわけにはいかない。すぐに兵が向けられたが、ケツセルトは移動直後の彼らの疲れを奇襲してあっさりとそれを撃退した。さらには返す刃で南に軍を進め、一進一退の続く河川占有権の押し合いの最中、敵の後背について蹴散らしてみせた。

疾風の如き軍略で、タニル周辺とその南下はツヴァイの勢力下に落ち着いた。

帝国中央の大貴族達の心情は微妙だった。味方が勝つのは喜ばしいが、勝ったところで大した旨みはない。周辺に水場がない以上、この水路はどこどこまでが自分達のもんだ、などというのは実際にはただの見栄でしかないからだった。

しかし、皇帝からタニルについて直接の言葉はない。恐らくは失つてしまってよいことだろうと思われるが、はっきりとした誣告がない以上、そうとばかりも決めつけられなかった。極論を言ってみれば、明日ラタルクに再び水が沸き始める可能性も無いではない。彼らはいまいな態度のまま、若者の勝利と新しい英雄の登場を賞賛した。

同時に、その存在を危惧する声もあがった。以前からそうしたものはあつたが、その声が大きくなった。

タニルはヴァルガードよりもむしろボノクスに立地的な意味で近くにあり、そこを治めるケツセルトは能力についていまや疑う余地はなくとも、性格の面で様々な悪評があつた。あるいは、ツヴァイを裏切るのではないか。そうした声もある。功を立てなければ責められ、立てればその能力を妬まれ、疑われるのは軍人という生き物の宿命でもあつた。

軍閥化。この当時、ケツセルトを疑う者は決して少なくなかつた。中央から離れた場所に有能な人物がいるということは、そういつた意味を持つ。

そうした者達の不安をさらに刺激する事実があつた。

タニルはヴァルガードよりボノクスに近く、さらに言えば、トマスにも近かつた。

「三年振りか。戦場の砂もすっかり落ちたな」

貴婦人の装いで腰掛ける相手に、ケツセルトが言った。

「貴公は変わらん。今にも戦場に出向きそうな気配だ」

家の者に茶の用意を言いつけたクリスは素っ気ない口調で答えた。

「まあ。くすぶつたりとはいへ、タニルは国境の砦だから。常在戦場つて奴さ」

「趣味と規範を履き違えるな。誰もが貴公のように戦いを好むわけではない」

クリスの言葉は手厳しかったが、ケツセルトは堪えた様子もなく笑い飛ばした。

「そりゃそうだ」

「それより玄関での話だ。何を知っている」

「おいおい。茶もまだだつてのにもう本題かよ」

大仰に手を広げてみせる男に向けるクリスの視線は冷たい。

「聞かされる話によつては、用意が無駄になる」

「なんだ。まず飲ませてくれねえのか」

「答えによつては、溢れる血で喉の渴きを癒すことになるだろう」

堂々とした脅迫に、ケツセルトは口元を綻ばせた。クリスが睨む。

「冗談で言っていると思うか？」

「安心したんだよ。なりはともかく、中身は変わってないようなん
でな。それがタニルを預かる領主だろうが、おかまいなしに斬り捨
てる。それでこそクリステイナ・アルスタだ。あいつの言葉を借り
るならな」

クリスは柳眉を逆立てた。

「わかつてるよ。そう怒るなつて。砂虎を連れだ娘の話だろう」

怒鳴りつける前に機先を制せられ、渋々と口を閉じる。再び口元
を緩め、ケツセルトは口を開いた。

「サリュといったな。やっぱりお前の知り合いか。まあ剣を見てわ
かったが。砂鋼製の鞭剣なんて、どこにでも見かけるもんじゃない」
からかうような物言いに、クリスは沈黙で応えた。

砂鋼。鉄の精錬に砂海のきめ細かな砂をまじえて作られるその鋼
材は、ツヴァイで数年前から用いられはじめている。その素材の特
徴を極論すれば、薄くとも硬い、に尽きた。

薄くするためには素材そのものの硬さが必要であり、それを保つ
為には硬いだけではなく、同時に柔らかさも必要になる。薄くでき
るということは、軽くできるということでもあった。

その素材で剣を作った場合、従来の鉄製のそれに比べて切れ味が
勝るものではなかったが、戦場において切れ味はさほどの意味をも
たない。重量と耐久性、何より生産性が重視される。

この場合の重さには二重の意味があった。持ち運ぶのは軽い方がよいが、相手を切り伏せるのではなく、叩き伏せることを考えた場合には、逆に重さが必要になるからだった。しかしそれもこの素材の重大な欠点にはなりえなかった。従来の大きさを相手を潰すのに軽すぎるのなら、重りをつけるか、組み込むかしてしまえばいい。

この砂鋼が特に喜ばれたのは武器ではなく防具の面である。軽く硬い素材で作られたそれらは歩兵には行軍による体力消耗を抑え、騎兵には人馬両方の助けとなった。

砂鋼は帝都の大学に招かれた地質学者の研究によって生まれ、ある貴族の投資によってその生産の道が拓けた。そのある貴族というのが、クリスの生家であるアルスタ家のことだった。

砂鋼の生産には炉が必要になる。炉は燃やすのに大量の燃料を必要とする。薪や木炭がそれらだが、砂漠地帯がほとんどを占めるこの惑星では数に限りがあった。鍛冶技術の進歩を留めている理由の一つでもあったが、アルスタ家が代々授かる領地では、昔からそれに変わる燃料が使われていた。

石炭。さらにはそれを蒸して作られた蒸炭を燃料として、砂鋼は徐々にツヴァイ領内に広まりつつある。とはいえ、初期生産から五年以上が経つ現時点でも全体にいきわたっているとは言い難いのが現状でもあった。

砂鋼の登場に重要な役割を果たしたアルスタ家では、それを用いた武防具についての研究にも意欲を見せた。

ツヴァイの興国から続くその家には、先代の教えとして奇妙なもの伝わっていた。盾を持つのならもう一振りの剣を持って、というその無謀を守る為、その家の子孫は独自の剣術を身につけている。攻める為の剣技と護る為の剣技。彼らは戦場で片方の長剣をもって敵を討ち、片方の短剣で敵の攻撃を払った。

その左手の護り、護身の剣に若きアルスタ家のクリスは砂鋼を用

いた。

強くしなり、弾き、小回りが利き、近くにあつては相手の鎧を刺し貫く為の短剣。その薄く引き延ばされた形状が鞭のような奇妙な剣。それを成しえる軽さと硬さが砂鋼にはあつた。

クリスは初陣であるボノクスとの戦において鞭剣を用い、大いに活躍した。武の名門アルスタ家ここにあり、と敵味方に宣伝したのは彼女の所属した部隊の責任者、目の前にいるケッセルトである。

そのケッセルトが鞭剣の存在に気づくことに驚きはない。クリスが考えたのは、それをどうやって知ったかということであつた。

「お前があれを他人に預けるとはな。アルスタ家を知る人間にならこれ以上ない身書になるだろうが、よほど大事な相手か。ま、使い方はまるでなつちやあいなかつたが」

ぴくりとクリスは眉を動かした。

「 剣を交えたのか」

返答次第によつてはただではすまさぬといった声にも、男は動じた様子はなかつた。

「殺しちやねえよ。怪我もな。ああ、擦り傷くらいはあつたかもしれんが、まあそれくらいは許せ。俺にも立場つてもんがある」

極寒の眼差しで相手を見やり、クリスは深めの瞬きで感情を抑えつけた。

「……サリュがタニルに来たのだな」

「ああ。人を探してゐるって言ってな」

灰色の髪と不思議な瞳をした少女が、彼女の元から旅立ってから既に一年以上が経つ。旅慣れてもない少女が何か騒ぎに巻き込まれていないか、今日にもトマスに戻ってこないかと待ち望んで心を痛める日々が続いたが、あるいはもしま、と不吉な思いに心を寒

くすることもあった。その消息を得られたことが何より嬉しく、同時に気の抜けた虚脱が彼女を襲った。

それを目の前の相手に見せることが不快だった。彼女は目を閉じ、胸の奥から沸き立つ感情を一時、封殺して瞼を開いた。

「何があった」

「何ってのは？」

「誤魔化すな。もし貴公がサリュと語ることができていたなら、改めて私に尋ねるまでもない。剣をあてたのなら、つまりサリュは貴公と敵対する立場にあったのだろう」

正確な判断だった。学生時代から堅物との評がある彼女だが、頭の回転は早かった。彼女の生涯を決定づけることにもなる欠点とは、そうしたものではなかった。

ケッセルトが口の端を持ち上げた。

「というか、向こうが知らずに巻き込まれてたって形だな。それでまあ、確かに味方とはいえん関係になったはなった」

「無事なら、まずはそれでいい。サリュはどこへ　まさか、ボノクスか？」

確かにサリュの探す人物が、その国に流れている可能性は否定できない。しかし、サリュがそこに行つてしまえば、何かあつても彼女の助けは届かなかつた。クリスはその事態を恐れたが、ケッセルトは首を振った。

「戻ると言つてたな。少なくとも、ボノクスの方角には出ていかなかった。町から見えなくなつてから遠回りしたとかなら知らんが、わざわざそんなことをする理由はなかるうよ」

「……そうか」

クリスは安堵の息を吐いた。戻る、というのなら、それはタニルからトマスの方面になる。あるいは、ここにも寄ることがあるかもしれない。久しぶりの再会の可能性に表情をやわらげる彼女に、ケッセルトが言った。

「俺からも訊くぞ。あいつはお前のなんだ、クリス」

クリスはケツセルトの眼差しを見返し、迷いのない声で答えた。
「家族だ」

ケツセルトが苦笑する。

「初耳だな。また年の離れた妹だ。それとも年の近い娘か。いずれにしても、似なさすぎだろう」

「貴公には関係ない」

「そりゃそうだ」

扉が叩かれ、葉茶の用意を整えた侍女が入ってくる。芳しい香りが立ち、侍女が一礼して部屋を去るまで互いに無言だった。

陶磁の器を持ち上げ、クリスは葉茶の香りを受けた。水面にいつかの光景が蘇った。

「元気にしていたか」

ちらりと彼女の様子を見て、ケツセルトは答えた。

「語ったわけじゃあないが。俺のことを知らないとはいえ、この俺に切りかかってきて、危うく大怪我までしかけた。なかなか大したもんだと思うがね」

「……そうか」

嬉しそうにクリスは笑った。柔らかな笑みだった。

ケツセルトは意外なものを見る表情でそれを眺めた。

昔からつきあいのある相手だが、そうした表情は滅多に見たことがない。特に大学を出た後には一度も覚えがなかった。脳裏に確信めいた閃きがよぎった。

「その表情、大学の頃を思い出すな」

ケツセルトが言った。言われて気づいたクリスが表情を引き締める。

「なんだよ。戻っちまうのかよ」

男は軽口を続けた。

「最近はどうだ？ 誰かいい男は見つかったか。いつまでもいなくなつた相手に操を立てるでもないだろう。なんなら俺が」
「ケッセルト。例え昔の上官だろうが、それ以上は愚弄だ。吐くなら相応の覚悟で吐くことだな」
険悪な顔と声でクリスが遮った。ケッセルトは肩をすくめた。

反省の色がない相手を睨みつけ、クリスは容器に残つた残りを喉に流し込むと、立ちあがった。

「これで失礼する。ゆっくりしていつてくれ」

ケッセルトが顔をしかめる。

「おい、客を置いて主人がいなくなるなよ」

「事前の連絡もせず、家を訪れる輩は客とは呼ばん。勝手に飲んで好きに帰れ」

「待てて。まだ俺の話が終わってないだろうが」

「関係ないと言つたぞ」

「そうじゃねえ。俺がなんでこんなところにいるか、気にならねえのか。東のこと、何も聞いてないのか」

クリスは沈黙した。サリュウのことに気をとられ、帝都の知人から届いた手紙をすっかり忘れてしまつていた。ツヴァイから東といえはボノクス、そしてタニルである。

冷静にならなければならぬ。クリスは息を吐き、そうあるべき立場へと自らの思考を切り替えた。

タニルの領主を務めるケッセルトがトマスに現れる。前線を預かる者が易々と任地を離れられるわけがない。相応の事情と、そして誰かから呼ばれたからのこそのものであるはずだった。

帝都からの召還。

間違いなく、ケッセルトは東の騒乱の中心に関わっている。問題は、そのケッセルトがクリスに何を語ろうとしているかだった。サリュウと出会つたことを伝える為だけではありえなかつた。今さら昔

語りでもない。そうした人物ではなかった。

クリスは相手への返答に慎重にならざるを得ない。彼女は近くアルスタ家の当主を正式に継ぐ身であり、帝都からの名代としてトマスに駐在している。事が政治に関わることなら、そうあって然るべきだった。自分が言った言わないではなく、意があるうとなかろうと聞かされることにも気をつけなければならない。政争とはそうしたものだっただ。

「目的はなんだ」

男は軽い口調で応えた。

「どうせお前もここじゃあ辛い立場だろう。昔のよしみで教えてやるうってだけさ」

クリスは鼻で笑う。

「そうか。ならば聞くべきことは何も無いな」

自分を侮る相手から聞きたい情報などなかった。断言するクリスに、ケッセルトが渋い顔で顎をさする。苦言を呈してみせた。

「そこでぐつと堪えてみせるのが世渡りってもんだと思うがな」

「自分を曲げてまで得るものならそうしよう」

クリスは答えた。

「なら、ニクラスのことについてだとしたら？」

「っ、あいつが何か」

思わず声を荒げたクリスは、男の口元の笑みでそれがはったりであるを知った。唇を噛む。

ケッセルトが笑った。

「相変わらず正直な奴だな。お前さん、そんな生き方で疲れねえか」

「私の生き方だ。貴公から指図をされるいわれはない」

クリスは不機嫌に唸った。

「まあ、そうだがな。とりあえず座れよ。聞いておいて損はないぜ。それに、ニクラスのこと、話にないってわけでもない」

胡乱な目つきで、クリスは深椅子に座る男を見下ろした。

彼女はケッセルトという男を決して好いていなかった。能力は認める。剣を振る者として、その技量に敬意を払ってもいた。将才という意味では、自分と比較にならない器でもあるだろう。

しかし、それと個人的な好意は別だった。飄々とした態度、女へのだらしなさ。その他の言動も含めて全てが彼女の好みの対極にあった。学生の頃、クリスがケッセルトとの間にまがりなりにも親交を持っていたのは、決して彼女の意思ではなかった。彼女がよく行動を共にしていた人物が、どうしたことがこの男と仲がよかつたのだった。変人の周りには変人が集まるというのは本当のことだ、と昔の彼女は苦々しく思ったものである。

クリスがケッセルトを気に入らないのは生理的な反応に近い。性格や嗜好の不一致によるもので、それだけにどうしようもないことだったが、その偏見だけで人物への正当な評価を違えるつもりはなかった。

その上でクリスがこの男に下した判断。それが男への不信である。

ケッセルト・カザロは食えない男だった。本気が冗談か定かでない、思いつきや行動が突飛で、周囲を騒動に巻き込んで平然と笑っている性格の男だった。彼女はケッセルトの悪口を幾つも並べたてることができたが、それらのほとんどが彼女と近いある人物にもあてはまることには気がついていなかった。

その男が何かを自分に聞かせようとしている。クリスは畏の存在を疑った。ケッセルトが、これから起こる政争に巻き込もうとしているのではないか。

ケッセルトは自らの欲望に素直な人間だった。女を好み、闘争を愛し、栄達を志す。警戒は当然だった。

「聞いてどうするかは好きにすればいい。聞かなきゃ、動きようもないぜ」

その言葉には一理あったが、聞いてしまった時点で縛られることもあり得た。

しかし、結局は、クリスは腰を下ろすしかないのだった。ケッセルトがニクラスの話題を匂わせた時点でそれは決まっていた。それを見越した発言であることが見え透いているから、クリスは目の前の男を好きになれなかった。

「聞きはするが、対価を求められても払える保証はないぞ」

「それでいいさ。俺から聞きたいこともあるが、答えるかどうかはお前次第だ」

頷き、男は葉茶を一すすりしてから語り始めた。

「最近、東で水源が見つかった」

クリスは眉をひそめた。ケツセルトは天井の壁画を見上げた姿勢で続ける。

「トマスの南東、タニルからやや西。これまでずっと枯れずにいたっていう驚きの水場だ。つい一月ほど前、岩塩の洞窟と一緒にそれが見つかった」

「新しい水源？ 塩だと。まさか、それは」

口にするのを憚るクリスを見やって、ケツセルトが後を引き取った。

「基水源。かどうかはわからんよ。俺は専門家じゃないしな、調査だってこれからだ。水天教の連中がどんなふうに変色を変えるかもつまり想像どまりってわけだ。何しろ見つかったばかりだからな」

「貴公がタニルから呼ばれたのはその為か」

納得の気分でクリスは頷いた。

ラタルク地方に新しい水源が見つかったとなれば、東の情勢は大きく動く。水場があるのなら、そこはもはや空白地帯ではない。人と物、双方の流れが向かうだろう。ツヴァイだけではなく、それを察知したならボノクスとて黙っているはずがなかった。小康状態にあった東部戦線が動く。

東の騒乱。やはりそれは戦争だった。商人達が動きを見せるのも得心がいく。戦争には多くの物資が消費されるからだ。さらに新しい水源となれば、それは新しい航路、新しい商売の機会でもある。商人達にとっては文字通り夢踊る事態であるはずだった。

ふと、クリスは違和感を覚えた。

家令からの報告にあった商人達の動き。帝都からの連絡。たった

今聞かされたケッセルトの言葉。それらが何かを示している。これ以上なく自然と繋がったようでいて、とても奇妙なその感覚は、ドレスの掛け留めを間違えたかのような気持ちの悪さを彼女に伝えた。ケッセルトがいつもの軽薄な表情を潜めてクリスを見ている。

ややしてから、クリスはその違和感の正体に気づいた。しかしそれを口にしていいものか。黙ってケッセルトの反応を探ると、それを悟ったケッセルトが唇の端を持ち上げた。

「情報が伏せられてる。だろ？ そう警戒すんな。俺がトマスに来てるのにも驚いてたくらいだしな。お前さんが知らされてなかったってことくらい、誰にだってわかる」

男の言葉に道理があることを認めつつ、どういうことだ、とクリスは頭の中で考える。

新しい水場が見つかったのは一月前だという。トマスから南回りに掘られたトマス・ラタルク水路では毎日のように東西の物流があるから、東からの情報が入ってこない理由がなかった。いや、実際に商人達の間で奇妙な動きがあることを考えれば、情報は入ってきてはいるのだろう。その上で、一般に広まらないというのなら、それは口止めされているからになる。

人と物、そして様々な噂が集まるトマスでそんなことが可能な相手は限られていた。大商人、それも一介の商人ではありえない。つまりはトマスの支配者層、その意思ということになる。

「新しい水源を秘匿したがっている？ ……何故だ」

ケッセルトは肩をすくめた。

「さてな。しかし、連中が好きなのは一つだろ」

「金か」

「航路商権の独占。まあ、わからんでもない」

水陸中の物流を扱うとまでいわれるトマスを支配をする人々も全て商人、または商人と繋がりのある貴族達である。彼らが新しい土

地での商売の利益を欲したとしても不思議はなかった。

もちろん、全ての情報を制御することは至難ではある。しかし、何事においても先手をとるといふことはそれだけで大きな価値を持つ。その為に、トマスから先への情報の流布を可能な限り遅らせようという魂胆と考えれば筋が通る。

クリスは脳裏に異物のしこりをおぼえた。そこまで思考すれば当然次に考えるべきことを頭に浮かべるのに、予感じみた拒否反応が起こる。

「俺が気になるのはな、トマスの連中がいったいどこに情報を隠したかったのか、だ」

それを見越したようにケッセルトが低い声を這わせた。

「俺はその水場のある集落を占拠してから、すぐに情報を寝かせた。ボノクスや、あやかろうとする連中に嗅ぎつかれたくなかったからな。それと同時に帝都へ使いを出した。タニルからヴァルガードまで船を急がせて、馬を使い潰し続けても十日はかかる。それで帝都から返事が来たのがちょうど十日前だ」

息を切り、唇をなめる。

「それとほとんど同時、トマスから手紙が届いた。都へお上がりの際は、ぜひともトマスにて一日、歓待させて頂きたいと言ってきてな」

その文章の意味を理解して、クリスはぞつと背筋を凍らせた。ケッセルトが可笑しそうに笑った。

「川沿いに走って十何頭もの馬を乗り潰して、しかも極秘に送った最速の使いの返事を、さも当然という風に知ってその手紙だ。全く、なかなかのもんだよなあ、商人っていうのも」

「……タニルからの商人や旅人から水場の話は聞いたとしても。緘口令が必ずしも絶対ではなかったにせよ、しかし帝都からの召還を知っていたというのは」

クリスの声も自然と抑えめに落ちる。昔から公然の秘密とされてきた、トマスから帝都への間諜の存在を思い浮かべずにはいられなかった。

彼女の背中を震わせたのはそれだけではない。そもそもが、トマスが情報を隠匿しようとした相手というのは、当然ヴァルガードも含まれる。否、あるいは帝都こそがその一番の対象だとしたら、事のきなくさが一段と増す。

「まあ、俺も最初はそう思ったが。考えてみれば、報告に俺が出向くことくらい予想はできるからな。見越しただけかもしれない。それでもそれを、そのタイミングで送りつけてくるのは大した肝の太さだとは思うが」

「それで、貴公はトマスにか」

「せっかく招待してくれるって言うんでな。タニルなんかじゃ食えない美味しいものも出るだろうよ。しかし、俺のことまで聞かされていなかったとは、お前さんの立場も思った以上に窮屈らしいな」

「そのようだ」

同情の視線を向けるケツセルトに、クリスは苦笑するしかなかった。

クリスがケツセルトと旧知であるということは有名だった。数年前のラタルク遠征の際、ケツセルトと共にボノクス相手に勝利を重ねたクリスの武勇は広く知れ渡っている。その上で、ケツセルトの来訪が耳に入らないというのは、いくらクリスが帝都からの駐在であるとはいえ、いささか度が過ぎるようにも思えた。

「あるいは、俺がお前に会いに来ることも計算か」

ケツセルトが言った。

「随分と迂遠なことだ」

うんざりとクリスは首を振る。政治や政争といったものがことごとく彼女は嫌いだった。子どもではないのだから、嫌だから関わら

ないというわけにはいかなかったが。

仲間外れにされるのなら、好きにしてくれという想いもあったが、そういうわけにもいかなかった。彼女は帝都から任を受けて来た身であり、帝国に忠誠を誓った騎士でもあった。

扉が叩かれ、姿を現した執事が一通の手紙を持っている。男からそれを受け取ったクリスは、中を一読して思わず苦笑した。

「今夜、歓宴会があるので可能ならば出席を、と書いてある。手違いがあり、連絡が当日まで遅れてしまったことをお詫びします」と

さすがにケツセルトも呆れたらしく、瞬きして文面を覗き込んだ。「またずいぶんと露骨だな」

「貴公が私の家を訪れたことも、耳に入っているだろう」

クリスは硝子窓から外を見た。そこには庭師が丹精を込めて手がけた緑が溢れ、不審な人物の姿はない。しかし、どこかからこの屋敷を見ている者がいることは確かめるまでもないことだった。

「招待主は？ ベラウスギ公か」

クリスは首を振り、商人らしく書き崩れた筆致をなぞった。

「いいや。ハシト・コーネリル男爵だな」

「男爵？ 俺の招待主もその名前だったな。どういう奴だ」

「評議会の一人だ。まだ入ってから年数は浅いはずだ。公的な宴は持ち回りで行うのが通例だから、あまり意味はないだろうが」

「評議会。ああ、トマスの政はそこで決められるんだったな」

クリスは頷いた。

「トマスで最も権威のある組合でもある。実質、このトマスを支配する人々の集まりだ」

「貴族ではなく、商人が幅を利かす街か。つくづく特殊だな」

「表向きは貴族を立ててはいる。その背後には必ず商家があるがな。いや、商家の表に、それぞれの貴族が立っているだけか」

ケッセルトがにやりと笑った。

「看板か」

「そういうことだ。彼らとうまく折り合わなければ、トマスでの発言力は無に等しい。私のような」

「お前のことだ。理不尽な扱いに文句をつけもしなかったんだろう。帝都の威を使えばそれなりに融通は効いただろうさ」

呆れた口調に、クリスは頭を振った。

「場所にはその場所ごとのルールがある。私が余所者だという事は変わらん。それに、私は偉ぶる為にここにいるわけではない」

ケッセルトは鼻を鳴らした。

「憤み深い淑女は個人的には大好きだがな。そういう態度が周囲を誤解させるんだってことをいい加減にわかるべきだと思うが。だいぶ昔にも似たようなことを言った気がするな」

皮肉げな物言いに、淡白な視線でクリスは頷く。

「覚えている。私が必要と答えたかは覚えているか」

「覚えてねえよ」

「私は偉くなりたいわけではないのだ」

「覚えてねえし、聞きたくもねえな。そんな青臭い台詞」

ケッセルトは頭をかいた。

「それで、どうする気だ。昼前になって連絡するくらいだ、来なくてもいいって言われてるようなもんだろうが」

「当然、行く」

クリスは即答した。

「他に先約があるわけでもないからな。いくら社交から締め出されていても、私は帝都から任を受けてその場にいる。それが公的なものなら、宴に出ることも務めのうちだ」

「ドレスやら何やら、今からで間に合うのか？」

ケッセルトの言葉にクリスは不適な笑みで応えた。

「社交は戦だ。急場を起こることも当然ある。戦から逃げるのも、言い訳をするのも、私は好きではない」

「相手はどうする」
「必要ない」

同伴の者を連れて社交に向かわないのは一般的に非礼にあたる。家の者をそれらしく見立てて取り繕う手もあるが、待ち受ける周囲の視線など気にしないといった潔い態度に、ケッセルトは小さく笑った。

「仕方ねえ。んじゃ、待ち合わせは何時にする？」

ケッセルトが眉を寄せた。

「何故そんなものが必要になる」

「お前と俺で夜会に出るからに決まってるだろうが」

瞳を瞬かせ、ケッセルトは極めて冷ややかな笑みを浮かべる。

「断る」

ケッセルトが大げさに顔をしかめた。

「即答かよ」

「当たり前だ。どうして私が貴公に同伴しなければならぬ」

「いいじゃねえか。俺だって相手が決まってるんだ。昔の上官を立てると思ってくれよ」

「声をかければ捕まる女くらいいるのだろう。その誰かに頼め」

「そりゃまあ、そうなんだが。せつかくのトマスでの晚餐だ。とびきりの相手と洒落込みたいじゃねえか」

「貴様の装飾品になるつもりはない」

冷淡にケッセルトは言い放った。彼女が隣に立つことを望んだ人間は一人だけで、その時にも、飾りではなく剣として在りたいと願っていた。それがもう二度とありえないだろうということもわかっていて。既にそれは、過去にあるだけの思い出だった。

「ただの言葉の綾だろうが、怒んなよ。まったく　それに、お前に

とつてもその方がいいはずだぜ。連中、必ず俺に接触してくるだろうからな」

クリスが一瞬迷いをみせるのを見て取り、ケッセルトは余裕のある口振りで続けた。

「話が聞ける機会をみすみす見逃して、帝都への言い分がたつのか？」

「……相変わらず、不愉快な誘い方をする男だ」

顔をしかめ、クリスはケッセルトを睨みつけた。飄とした口ぶりでケッセルトは答える。

「最初からお前が素直に誘いを受けてくれるなら、こんな言い方はしねえよ。今も昔もな」

「それこそ冗談にもならん。これ以上なく素直に断っているだけだ」
「はいはい。それで、どうする」

長い沈黙を経た後に、クリスは口を開いた。

「条件がある」

「身体に触れるな、か？」

「常識的なエスコートの範疇ならかまわない。それ以上の狼藉に及べばどうなるかは、自分の身で確かめてみればいい。夜会の場で惨殺死というのが似合いの最期と思うならな」

「おっかねえな。それで、条件は」

「一つ質問に答えてもらおう」

「質問？」

「言っていただろう。ニクラスと関わりがある云々と。それがまだ全く話に出てきていない」

「ああ、なるほど」

ケッセルトは忘れていたとでも言いたげな表情だった。

「私を卓につかせる為のはったりだったとでも言うなら、金輪際、貴様と語ることはない」

怒りの予兆をちらつかせるクリスに、ケッセルトは肩をすくめて

言った。

「ちげえよ。というか、ニクラスのことについてはこっちから訊きたいってだけだ」

「訊きたい？」

「ああ。　　クリス。お前が最後にニクラスを見たのはいつだ」

「……なぜ、そんなことを訊く」

「一年前、トマスで街火事があっただろう。その時、魔女騒動で少女の弁護に立った男がいたって話があった。それがニクラス・クライストフを名乗ったなんて噂があるらしいじゃねえか」

覗きこむような男の視線に対して、クリスは平静な態度で答えた。
「そのような噂を信じているのか。あの時は街中が騒動になっていた。様々な風評も流れた。その一つだろう」

「風評、ね」

ケッセルトは面白がるように顎を撫でる。

「まあそうかもしれない。他にも色々あったらいいな。魔女の嫌疑をかけられた娘が、小さな砂虎を連れてたとか。そういうえばつい最近、そういう相手に会っちまったんだが、こりゃただの偶然か？」

クリスは表情を変えなかった。

「もしニクラスがここにいたなら、私があいつを引き止めないはずがないだろう。足の腱を切ってでもな」

さらりと口にした物騒な台詞に、同意するように男は笑った。

「そう言われれば納得するしかねえな。まあいい。つまり、お前もあいつの行方は知らないわけか」

「知っているなら教えてほしいくらいだ。　　それがなんだというのだ」

「いや、個人的な興味ってだけだけどな」

「かまわない。聞かせてくれ」

ケッセルトが呆れたようにクリスを見た。

「あいつのこととなると途端に素直だよ。お前さん」

「戯言はいらない」

「わかつてるよ。……さつき言った水源を見つけた時に、思い出したんだよ。それで会いたくなかった。お前ならあいつが今どこにいるか知ってるかと思った。それだけだ」

「新しい水源に、何故ニクラスの名前がでてくる」

サリュという存在からトマスでの噂を思い出し、そこまで連想したというのか。クリスの疑問に、男は韜晦するような笑みを浮かべた。

「聞いたことがあったんだよ。俺が大学にいた時にな、あいつが言ったことがある。ラタルク一帯が枯れて人々が去る。そこにもう一度人が流れて来ることがあれば、それは水陸中を巻き込むことになるってな。前に引いた分をさあ元通りに、なんて話じゃ終わらないそう言った」

クリスは眉をひそめた。今ある状況を推測していたかのような予言じみたその言葉は、彼女もはじめて聞く内容だった。彼女は大学でよくその男と行動を共にしていたが、もちろん片時も離れなかつたわけではない。

「あいつがそんなことを？」

「ああ。ラタルクが枯れる一年以上前だ。あいつが変だなんてことは重々承知しちやあいるが、これはいつたいどういう理屈だ」

男は言った。笑みの中に、奇妙な気配が忍んでいる。

「なあ、クリス。あいつは変わっていたが頭は切れるやつだった。色んなことを知っていたし、色んなことを考えてた。そんなことは大学連中なら誰だって知ってるさ。それだけじゃないことだって、俺や、お前ならな。その上で聞いてみたいんだがな」

男が言葉を切った。計られた間は、言葉の吟味に使われたのか、あるいは男の思惟に飛んだのかクリスにはわからない。

ケツセルトは彼女が戦場でも見たことのないような表情で彼女の瞳、その中央を見つめていた。

「あいつは一体、何を知ってたんだと思う？」

広大な砂海を征く影は、遠目にすれば容易に砂の中に溶け消えてしまふ程に小さかった。

商隊ではない。見渡す限りがなだらかなそこは砂海の只中であり、安定して人が行き来できる航路からは距離が離れている。風に吹かれた砂の隆起や流れた物の吹き溜まりのない、下が常流の砂地だからこそありえる凪いだ風景は、一枚の絵画のように静かだった。

航路とは人の往来と同義である。足元の大地が安定しているか否かを離れて観測する術がない以上、数多くの人が通るからこそ、そこは航路として認められるからだった。

そうした安全な航路ではなく、あえて危険を選ぶ者の中には存在する。先の知れぬ砂面を前に冒険者や一部の商人が博打を打つのはその先にわずかでも可能性があるからではあるが、人地を呑んでなお圧倒的な砂海においてそれらの行為は、目隠しをしたまま歩き続き、どこかのオアシスまで無事に辿り着けることがあるかという例えに等しかった。

もちろん、例えそこが前日まで多くの利用者がいた航路であっても、その日、その瞬間に道が途絶えてしまうこともある。流れる砂の気まぐれとはそうしたものであり、しかしそれさえも恐れては、この惑星で人は一步も足を進めることはできなかった。

周囲に人影のない砂漠を、三つの存在が歩いていった。荷を積んだこぶつき馬とそれを曳いた旅人。その隣を馬に騎乗したもう一人が闊歩している。二人の人物はそれぞれ防砂具に身を包んでいた。

時刻はもつとも日射が厳しい時間帯を過ぎ、しかし日が落ちるまではまだ長い時間の猶予が残っている。空には曇りなく、更とした地表に吹く風も無かった。一切の音が砂粒の隙間に吸い尽くされ

る中で、踏みしめる人と馬の足音だけが当人達の耳にかすかに鈍っていた。

声も交わさず黙々と歩き続け、やがて空色が茜を迎えた頃になって、ようやく周囲に丘陵が目がつくようになる。馬上の人物が口を開いた。

「このあたりにするか」

若い声の問いかけに、こぶつき馬を曳いた旅人、防砂具から覗く瞳に二重の奇妙な輪を持つサリユは短く頷いた。

「ええ」

頭に巻いた部族刺繍の布防具をずらして指笛を吹く。つい先日から使いはじめたばかりの布は既に砂に汚れ、触れるとざらりとした感触だった。サリユは遙か先を行く連れに合図を送ってから、疲れた視線を遠く前方に投げているこぶつき馬の顎を撫でた。

こぶつき馬がうつとうしげに睫毛の長い眼差しを向ける。早く荷を降ろせ、と言っている表情だった。

苦笑してサリユが荷に手をかける横で、馬から降りた旅人が地面に屈んだ。旅人は中央で結われた六つの紐、先に石の結ばれた道具を砂地に置いていた。

部族の人間がよく使う砂の流れの確認手法だった。砂漠を渡って暮らす東の部族、アンカの少女ユルヴは、伸ばした紐が砂の流れにずれる変化を慎重に見定めてから顔を上げた。布防具の隙間から覗いた眼差しは若く、鋭い。

「そこそこ安定している。この程度なら問題ない」

紐と石を用いた確認方法はもちろん万能ではない。置かれた範囲内での砂の動きしか視覚化できないし、あまりに大きな砂の流れ自体は把握すら困難となる。しかし、その道具と、それを用いて長く砂を渡って生活してきた彼らの経験には全幅の信頼がおいてよかった。何よりもまず、彼らは砂の流れを恐れない。

「ワームとかいう町があつた男から聞いたあたりにあるなら、あと二日もすれば影が見えるだろう。水も充分もつ。それでも見えないようなら、その時は南に向かえばいい。水路などというものには、できれば頼りたくはないが」

ユルヴの言葉に、サリュは小さく笑みを偲ばせた。

商業都市トマスを中心として、水陸の主要水源を繋ぐ河川水路。膨大な時間と労力を使って、それらは人の手によって作られた。水場の沸き枯れるに任せ、砂とともに生きる部族の人々にとっては、それは人の驕つた所業以外の何物でもないのだろう。そうした彼女達の生き方は否定されるべきものではないと彼女は思っていた。

一旦、陽が傾きはじめると砂漠の夜は早い。一時だけの黄金の幕が過ぎ、すぐに暗闇が落ちた。

枯れ草と肥料で固めた乾燃料で焚き火を作り、サリュとユルヴは温めた固形食糧を齧ってささやかな夕餉をすませた。食事の間、二人の間には特に会話はなかった。

夕食をとつてしまえば後は寝ることしかなくなる。その前に少しばかりお互いに時間を寛ぐというのが、二人が共に旅をするようになって自然とできた取り決めだった。

サリュが荷の中から装丁のしつかりした本を取り出し、焚き火の灯りの下で頁をめくりだす。ユルヴは部族の集落から持ってきた弓の手入れをし、その後少し離れたところに楔を打って休ませている持ち馬に向かい、毛づくろいをして戻ってきた。それをきっかけに、サリュは手元の本を閉じた。

「もういいのか」

サリュは頷いた。毛布を取り出す彼女にならって寝る用意を始める。

砂海には多くの獣がおり、航路から離れているとはいえ、人の形をした獣とどこを跋扈しているか知れたものではない。複数人で旅をする場合、誰かが火の番をして交互に身を休めるものだが、彼女達に限ってその必要はなかった。

それまでサリュに寄り添うようにして広がっていた毛皮が、むくりと身を起こした。まだ年若いが、次第に成獣のそれと変わらぬ横幅に近づいてきた砂虎の顎を撫でて、サリュは離れた場所で佇むユルヴを見上げた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

サリュとクアルの横に回りこんで腰を下ろす。それから何かをためらうように砂虎を見た。そつと顎に手を伸ばし、クアルがそれに鷹揚に応じてみせるのにほつと息を吐いて、ユルヴが身を寄せて横たわった。

「まだ慣れない？」

「……うるさい」

自分もクアルの温かな毛皮に寄り添いながら、毎晩のやりとりをからかったサリュの言葉に、ふてくされた口調でユルヴが答えた。

「砂虎が嫌いなわけじゃあないでしょう？」

「好きだ。少し、怖くはあるが。昔は砂虎に乗るのが夢だったし

笑うな。それが急に叶って、いや、乗りたいと言ってるわけじゃないぞ。近くで触れるのは、まださすがに慣れない」

ユルヴはそっけなく努めた声だった。

「クアルは、ユルヴのことが好きみたいだけど」

サリュが言った言葉は嘘ではない。クアルは気に入らない相手に触られるのを極端に嫌がる。前に同行した少年が、添い寝を承諾されるのに手間がかかったことを思い出した。

「……そうか」

応える声に嬉しそうな響きがある。口元を緩め、サリュは目を閉

じた。少年を思い出してよぎった痛みはあつたが、思い悩む振りをして自らを慰めることはしまいと彼女は心に決めていた。

くるとクアルの喉が鳴った。言葉ばかりか、気配まで察してくれているような態度に感謝を込め、サリュはその毛皮に顔を埋めた。「こうして並んで星を見るのも、あと二日か」

昼間降り注いだ陽をそのまま留めている温もりが眠気を誘う。そのまま彼女が意識を落とす前に、隣から声が届いて、サリュは瞼を開いた。長く細い毛先が肌をくすぐる。柔らかな毛皮の隙間から星空が覗いていた。

「そうね」

リスールの町で騒動に巻き込まれた後、しばらく滞在した部族の集落を旅立つにあたり、ユルヴがサリュへの案内をかってでてから既に三日が経っていた。

トマスから南東にあたるラタルク地方では最近、奇妙な動きがある。そのきっかけとなったのはサリュも多分に関わりのある、新しい水源が見つかったという噂だった。それが発端となり、人と物が千々に入り乱れた動きを見せている。先日、サリュがリスールで巻き込まれたいざこざもそうした騒動の一環だった。

そのような状況にあつて、周辺の見聞と、西方の現状を確かめる為に出向くと言うのが同行を申し出たユルヴの言い分だったが、それだけではない理由があることは承知していた。義理固く、無愛想なところがある部族の少女はそれを決して口にしない。だから、そのことについてこれまでサリュは礼を述べてこなかった。不意に彼女はその必要性を強く意識した。

「ありがとう、ユルヴ。一緒にいてくれて」

最初の台詞だけでは無視されるだけだったかもしれない。砂虎の向こうで小さく気配が動いた。

「友人だからな」

淡白な言葉だが、サリユは嬉しかった。彼女にとって友人という存在は縁遠い。クアルは少し違う。今まで知り合ってきた幾人かの顔を思い浮かべてもそれぞれ違和感があった。そんな風に呼べる相手は、今までの人生で彼女ははじめてだった。

「ユルヴは、ワームに着いてからどうするの？」

サリユが訊ねた。答えが返ってくるまで、少し考える時間があった。

「見聞を広める機会は得難い。それに、最近の妙な騒ぎが気になる」と父様もおっしゃられていた。情報を仕入れる必要がある。気には入らんが、町の連中から話を聞いてまわるつもりだ」

「そう」

サリユはユルヴに話していないことを思い出した。先日の騒動のきっかけにもなった、新しい水源の噂が事実であることを彼女は知っていた。黄金の在り処。その名前を持つ小さな集落にそれはあった。

あまり広言することではないと思っていたが、世話になったユルヴには伝えておくべきだろう。彼女が口を開く前に、ユルヴの声が先んじていた。

「お前は どうする」

「私は」

答えながら、サリユは胸元に大事にしまっている手紙に触れる。

「パデライって人に会って。それから、わからない。何か話が聞けるかもしれないし、駄目かも」

「……探し人か」

ユルヴの声に慎重な気配が乗った。

「リト、だったか？ トマスとかいう西の街のことなら私も聞いたことはある。そこから、こちら側に流れているかどうかもわからないのか」

サリユは首を振った。衣擦れの気配を察して、ユルヴの声が息を

吐いた。

「そうか」

相手に心配をかけないよう、サリュは明るめの声を出した。

「大丈夫。今まで、見たって話を聞けることだってなかったから。

私が、こういう見かけだから、あんまり町とかに寄れないからだけ
ど。だから平気」

「一年以上。そこまでしてお前が探す相手か。興味はあるな」

空元氣を見透かした沈黙の後で、ユルヴが言う。相手が意図して
話題を変えてくれたことにサリュは気づいた。

「どんな相手だ？」

意図はありがたいが、困る質問でもある。サリュは言葉に詰まっ
た。

「どんなって」

「昨日も、一昨日も、私が話をさせられた。今日はお前の番だ」

共に旅をするようになってから、毛布にくるまって眠気に落ちる
までの間にサリュはユルヴから部族の風習や、彼らにまつわる伝承
を語ってもらっていた。今夜は語り手ではなく聞き役にまわりたい
とユルヴがいうのは何もおかしくないが、聞かれた内容が難しかっ
た。

「上手く、説明できないと思う」

彼という男について、自分自身でも理解できない気分が心の奥底
にあることを彼女は自覚していた。

「かまわん。私だって話すのは苦手だ」

「無理に話させてたなら、ごめんなさい」

「そうじゃない。お前になら話したいし、だからお前の話も聞きた
いんだ」

自分の気持ちに正直な台詞に、サリュはそれ以上の逃げ道を塞が
れて観念した。息を吐く。

「でも、何から話せばいいのかわからないわ」

「ならこつちから聞く。……そうだな。その男とはどこで出会ったんだ？」

「私の村よ。ここからずっと西の、小さな集落。今はもうないけれど」

「枯れたのか」

「ええ」

頷いて、サリュは自分の生い立ちを語った。

崖に挟まれた水源に柵を囲って作られた小さな集落。記憶がある頃には既に親はなく、周りからは嫌悪と忌避するような視線が向けられていた。水面に映る自分の姿を見て、それが自分のせいであると知った。サリュという名前、それをつけてくれた老婆。そして、その名前の意味するところを知った。

「死の砂」

ユルヴが呟いた。サリュは暗闇に頷いた。

「私は見てみたかった」

「死の砂をか」

「……砂虎を拾ったの。小さい、今のクアルよりもっともっと小さな毛むくじやらの。その子と一緒に村はずれで、ずっと空を見てた。そのうちに村の水源が枯れはじめ、クアル　このクアルじゃない、昔のクアルが毒を食べて死んで。私を育ててくれたお婆さんも亡くなって、水源の枯れかけた集落から皆が出て行って。彼が現れたのは、そんな頃」

「彼？」

「リト。死の砂が吹いた頃、集落にやってきたの」

疑問に答えて、それに対するユルヴの反応がない。

「ユルヴ？」

「なんでもない。それで」

「村にはもう私と、私と一緒に暮らしていたお爺さんしかいな

かった。若い人達は皆、他の水場を探して出て行つてたし、残された人は飢えるのが嫌で毒を飲んでたから。村全体を砂が覆つて、死の砂に関わるのを怖がつて砂賊も近寄らないような状況で、それでも何かお金になるようなものが砂に埋もれてしまわないか何組かはそういう手合いも村には来たけれど。だから最初は、リトもそうなのかと思つた」

「違つたのか」

「……多分。盗賊の類には見えなかつたし、商人でもなかつた。今の私の連れてるあのこぶつき馬をつれて、一人で旅してみたい」

「賊でも商いでもなく、砂海を？……変わった男だな」

変わった男。変人。その言葉は彼を知る人物からも後々よく聞かされた。懐かしさにくすりつとサリュは微笑んだ。

「それで、旅をするようになったのか」

「ええ」

実際にはそれまでに悶着があつたが、さすがにそこまで詳細に話す必要はないだろう。ふむ、とユルヴが言った。

「人の好い男に聞こえるな」

「リト？」

「違つたのか　いや、違つた。ただのお人好しが、砂海を一人で旅など出来ない」

同意の頷きを返しながら、次の言葉が見当たらずにサリュは口を開けない。やはり、彼について説明するのは難しかった。何を話せば最も端的に彼を現すことになるだろうか。砂漠の夜に震えていたことか、暗く沈んだ瞳か。少しだけ交わした会話、それとも今も耳に残る「生きる」の言葉か。

道中はほとんど自分のことを語らず、後になって別の相手から過去について話を聞きはしたが、それで頭に浮かべる男に肉付けされる情報はやはりどこか曖昧だった。リトという存在の枠は容易に定まらず、サリュの中で陽炎のようにぶれている。彼女が毎夜、彼を

知るために本に読み耽ることもその証明だった。砂で絵を描くように、その姿は彼女に漠とした不安をもたらしていた。その中で、彼について抱く確信に近い思いと、彼の残した最後の言葉だけが鮮烈に彼女を縛っていた。

「彼は、探してた」

ぼつりと呟くサリュに、ユルヴが訊ねた。

「何をだ」

「……わからない」

その答えは決して嘘ではなかったが、全てでもない。極めて短い間だけを共に過ごしたあの男について、彼女が持っていた確信を口にすることを迷ったのは、定まらない粹と同様、いざそれに粹を定めようとするにも不安を覚えたからだだった。整合性のない思いに霽としたものが渦巻き、体中を締め付けて、サリュは深い息と共にそれを吐き出した。それでもなお胸にはびこるそれが、苦味のある囁きを残すのを無視して、言葉に置き換えないまま振り払う。

「わからない」

嘆くような呟きが繰り返された。

「わからずに。探しているのか」

ユルヴが言った。責める声ではなかった。

「なら、その相手はきつとお前自身なのだな」

何かの歌を詠うように彼女は言った。

「生まれた時に別れた、もう一人のお前。だからお前はそれを探しているのだ。わかる必要はない。探せと、そう囁くのだろう」

サリュは空を見上げた。満天の星空が降るように瞬いている。砂を渡る旅人が自らの指針とする北の輝星と西の黄星、さらにはその輝きに負けじと季節の星々が無数の光を連ねていた。

「それって、部族の人達の教え？」

「いいや」

ユルヴは言った。少しの間を置いて、やや控えめに続く。

「わたしの個人的な考えだ」

「ユルヴって、ロマンチストなのね」

「なんだ、その言葉は。町の言葉で言われてもわからん」

「可愛いつてこと」

「なっ」

絶句するユルヴの気配に、吹き出しそうになる笑みを押し殺し、サリユは横向きに身体をずらしてクアルの毛皮にぴたりと身を寄せた。さつきから両側でうるさいはずなのに、砂虎は心地良さそうに身体を揺らして落ち着いている。子守唄のように感じているのかもしれないなかった。

「そろそろ休みましょう。……ユルヴ、ありがとう」

慰めてくれた言葉に感謝の意を告げると、ユルヴは機嫌を損ねたらしく、むっつりとした声でそれに応えた。

「ああ、おやすみ」

瞳を閉じ、意識を闇の中に落としながらサリユは考える。

リト。ニクラス。砂漠の夜、あんなにも一人でいることを怖がっていた彼が何を考え、何の為に旅をしていたのか、自分にはわからない。わかるうとするのが怖いのもかもしれない、そうした自分の感情の理由も不明だった。ふと脳裏にある人物を思い出し、サリユは向こう側に眠るユルヴに聞かれないよう気をつけながら、小さく深い息を吐いた。

あの人ならわかるだろうか。自分以上の時間を彼と過ごし、自分以上に彼を知り、自分以上に彼のことを想う彼女なら、少なくとも自分よりは彼のことをわかってあげられるだろう。

自分によくしてくれた金髪の騎士を思い出す行為には、懐かしさとともに痛みが伴った。サリユが自分の我儘で彼女の下を出て行っ

たのは、リトを探し、再び彼女に合わせる為だった。だが、彼女がわかってあげられるのなら、それは彼女だけではなく彼の為にもなる。

そう思って少し心寒く、自分の心情に無理解なまま自身をクアルの身体に一層強く押し付けた。陽の甘さを含んだ獣臭さに意識がまどろむ。望んでそれに溺れるよう、サリュはそれ以上の思考を止めた。

その日、アルスタ邸は大いに忙しかった。

夜会に出るとなればやらなければならぬことは多い。

日頃から鍛錬を欠かさないクリスに体型が急に変わる恐れはなかったが、それでも着替える前には一度全身の寸法をあて計ってみなければならなかったし、細々とした装飾品には常に流行り廃りというものがある。クリスはそうしたものを気にしなかったが、だからこそ彼女を送り出す家中の者の苦勞は大きかった。

侍女達が慌ただしく屋敷を駆け巡り、主人の肌を整え、鼈甲の高櫛で念入りに髪を梳くのを、クリスは苦行を受ける者の面持ちで耐えた。その後には胸部から腰までを強制具で締め付けられ、稼動範囲の窮屈なドレスを苦勞して着込まなければならぬ。その間にも他の家人達は必要な処理に追われている。言葉通り、アルスタ家はまさに戦準備の様相をみせていた。

慌ただしい準備の時間が流れ、約束の頃合にアルスタ邸の前に馬車が着いた。降り立ったケッセルトは、仕立てのよい礼装を彼らしく適当に着崩した格好だった。

扉を叩いた彼を出迎えた侍女の応対は忙しさを感じさせないものだったが、それまでによほど走り回っていたせいか、耳にかけた髪が僅かにほつれていた。ケッセルトは口の端を軽く持ち上げて相手の苦勞を偲んでみせた。

中に通されるまでもなくすぐに屋敷の主人が現れる。ケッセルトが口笛を吹いた。なめらかな光沢を放つビロードを用いて段々に斜め掛けにかたどられたドレスを纏い、磨き上げられた輝きを放つ貴人の装いとなったクリスは不機嫌そうに男を睨みつけた。相手の無

作法が癪に障ったのだった。

「こりや驚いた。どこから見ても一人前の淑女だな」

「私は昔からそのつもりだ」

「いや、昔はなんつうか、ガキ臭さつてのがあつたもんだが。これはまた」

言いながら、舐めるような視線を隠そうともしない。それ以上の言葉を男に吐かせず、クリスは男の喉元に手をあてた。流れるような動作の中で、いつのまにか細身の短剣の刃が手先に光っている。ケッセルトが頬をひきつらせた。

「そこは、扇子とかにしておくべきだろ。上品によ」

「護身用だ。宴の席なら、斬るより刺す方が場にも合うだろう」

幾層の山と谷に折られたドレスの内側に短剣をしまい、クリスはそ知らぬ顔で言い放った。後ろに並ぶ家人達を振り返る。

「皆、ご苦労だった。忙しくさせてすまない」

立ち並ぶ一同が頭を下げた。主人の上掛けを携え先頭に立った若い執事が、家人を代表してアルスタ家恒例の出立の言葉を口にする。

「ご武運をお祈りしております」

「いってくる。さあ、ケッセルト。戦だ。貴公の何よりの好物だろう」

薄絹の掛け物を手に取って羽織り、雄々しい表情で歩き始める。堂にいったその足取りにこれではまるで自分が従者のようじゃないかと苦笑いを浮かべたケッセルトは、ふと主人を見送るアルスタ家勤めの者達の視線に気づいて洪面をつくった。従者のようにと思っ
ているのは彼だけではなかった。誇らしげな表情で見送る家人達の視線を背中に受けながら、ケッセルトは頭をかきつつ先を行くクリスの後を追った。

待たせてあつた二頭立ての馬車に乗り込み、壁をノックして前席の御者に合図を送ると、ゆっくりとした速度で馬車が動き始めた。

歓宴会の席は招待の手紙に書かれたコーネリル男爵邸である。そこには既に多くの人々が集っているだろうと思われた。

石畳を走る馬車に揺られながら、クリスは先ほどのケッセルトの言葉を思い出していた。あいつはいつたい、何を知っていたんだ？ 知るものか。慥然とした思いでクリスは胸に呟いた。

ニクラス・クライストフ。変わり者のニクラス。帝国でそれなりの地位にある者なら、一度はその噂を耳にしたことはあった。

バーミリア水陸で勢力を誇るツヴァイ帝国宰相の次子として生まれた男は、父親と同じく奇矯な人柄で知られていた。好んで目立とうとする性格ではなかったが、生まれながらにして既に彼はそうした立場にあった。自らの立場を唯諾として受け止める殊勝な男でもなかった。水陸各国の貴族子弟を招いて開かれた大学に籍をおいていた男が都を出奔したのは、今から六年前のことである。

親しかったクリスは男から家名を捨て、都を出る相談を受けていた。彼女は驚き、その理由を訊ねたが、相手から確たる答えは返ってこなかった。やがて、彼女から聞き出すことを諦めたのと同様、彼女は自身の抱く想いについても固く封を強いることになった。

男が自らの立場を疎ましく思っていたのは事実だった。大学を近く過ぎたクリスはそれを理解していた。しかし、それだけが理由かはわからない。そうかもしれない、そうではないかもしれない。クリスが知るニクラス・クライストフとは、考えの読めない男だった。

そつだ。そんなことはわかりきっている。あいつの考えがわからないことなど、自分が一番わかっていたのだから。

俺はずっと一人だった。脳裏に声が響いた。一年前、再会した相手が別れ際に残した言葉だった。

唇を噛む。ふざけるな、とクリスは罵った。何を勝手をほざく。

あれだけ周囲を巻き込み、その渦中で平然と自俣に振舞っていた男が吐く言葉がそれか。本当に　ふざけている。

何よりクリスが腹ただしく思えるのは、その台詞が彼女に向けられたものですらなかつたということなのだ。その台詞は、男が連れた奇妙な瞳の少女へと語られた。自分ではなく。

粘りついた感情が沸き起こる直前に、クリスは意識してその流入を防いだ。思考を飛ばす。

サリュは出会えたのか。ケッセルトの話では、一月前にはまだ探しているようだったが、たつた今再会したばかりということも考えられる。あるいはそれとも。

「……ケッセルト」

「あん」

「もし　、もしもの話だ。ニクラスが死んでいたとしたら、貴公はどう思う」

馬車から外へと視線を投じたまま、クリスは言った。男は目をあわそつとしないクリスをしばらく見やった。それから気が抜けた声で言う。

「なんだ。あいつ、死にやがったのか」

「っ、もしだと言っているだろう」

かっとなつてクリスが言い返した。ケッセルトは鼻で笑った。

「もしも何も、死んだら死んだだ。それだけだろう」

「それだけか」

「他に何がある」

からかうような問いにクリスは視線を逸らす。その様子を興味深そうに観察してから、ケッセルトは肩をすくめた。

「まあ、宮廷で毒あおられるよりは、砂地に骨をさらすほうがあいつらしくはあるんじゃないかねえか」

ちらりとクリスが盗み見る。男は唇を持ち上げ、外の景色を眺め

ていた。

「剣を手にとつて華々しく、なんて聞いた日には笑えてくるだろうし、政争に負けて幽閉なんて絵が似合うガラでもねえ。だったら、どこかで野垂れ死にしているほうがよほどあいつらしいな。恨みも悔いもなし、誰にも知られず、たった一人で。悪くない」

クリスは睫毛を震わせた。俯く。男の言葉が、彼女の脳裏にふとした想像を与えていた。黄土色の世界で孤独に朽ちる誰かの姿を思い描いた彼女の口から、感情を押し殺した声が漏れた。

「一人で虚しく死んでいくのが、あいつらしいか」

「そうは思わんのか？」

窓見の硝子に映る彼女の様子を窺いながら男が言った。クリスは答えなかった。呆れ果てたように、ケッセルトが彼女を振り向く。

大仰に頭を振った。

「よくまあ、自分を捨てた男にそこまで義理堅くいられるもんだな」

俗な台詞に含まれた嘲りの風味が、彼女の内心で盛り上がりかけていた激情を逆に冷やす効用を持っていた。クリスは鋭い眼差しを男に返した。言葉はなくとも、並みの男であればただその一瞥だけで心胆を潰されるほどの視線に、ケッセルトはまるで動じた様子になかった。

「いいねえ。その視線、ゾクゾクくる」

「……不快な男だ」

やはりこの男は好きにはなれない。吐き捨て、クリスは話題を打ち切った。ニクラスを知る相手だからと、訊ねてみた己の愚を悟っている。

今の彼女には他にも考えるべき事柄が控えている。東で見つかったという水場、恐らくはそれに呼応する形でトマスの上層部が何かを画策している。それがどういったものであれ、帝都から派遣され

て駐在しているクリスには自らの可能な範囲で事実を知ろうとする責務があった。ともすれば破局を迎えかねないヴァルガードとトマス間に立ち、帝国に生きる人々にとっての災禍が生じないように尽くさねばならない。

表情を引き締める彼女を面白がるような眼差しでケッセルトが見つめている。程なくして、二人を乗せた馬車が目的の屋敷に到着した。

開かれた門を抜け、屋敷の内に入る。馬車が三台は横になって通ることができ、道の両側には広大な庭が広がっていた。

庭は一面の平地だった。窓からの風景には木も花も見えず、家主の趣向を窺わせるものが見あたらないことにクリスは眉をひそめた。

ハシト・コーネリル男爵は商家あがりから爵位を得た新進気鋭の人物という評だが、実際に会って話をしたことは今までにない。能力主義が幅を利かすトマスでは日が替わる毎に無数の成功者と失敗者が生み出されているが、評議会　ベラウスギ公爵が長を務める大商家の組合に参加する為には、沸いては枯れる水島の如き泡沫の成り上がりというだけではさすがに許されない。

今日の宴席の催主を務めることはおそらくただの代わりと思われたが、招かれる相手の人物を知らないことはそれだけで非礼だった。取り急ぎ家人がまとめた書類から得た内容を反芻しながら、クリスはあまりに殺風景な庭の在り方の意味について考えた。

彼女も決して風流を知る人物ではなかったが、ここまで趣のない庭は珍しかった。貴族や財をなした商人なら、まず庭先に泉をつくり、植物を生やす。それが水の貴重なこの惑星でのもっとも一般的な財の見せ方である。何事にも欲深い商人なら、あるいはなんらか

の蒐集に密かに励んでいる可能性もあったが、それにしてもここま
で手をかけていないというのは尋常でない。気のせいか、先ほどか
ら馬車の揺れもひどいように思われた。

この空け広げた空間が家主の趣向というのなら、それはそれで大
したものだった。彼女が読んだ家人の報告書にも、変わり者らしい
という項目があったことを思い出し、変人にも色々あるものだ、と
クリスは皮肉に考えた。

馬車が緩やかに速度を落とす。御者席から降りた男が扉を開き、
先に馬車から出たケツセルトがクリスを振り返った。わざとらしい
仕草で恭しく腰を折り、手を差し出してみせるのをかわして一人で
降り立った。

屋敷を仰ぎ見る前に、彼女は踏みしめた地面へと目を落とす。履
き慣れない踵上靴にそれだけのせいではない違和感をおぼえたから
だった。そこには砂利が敷き詰められていた。

道を均すのに用いられることもあるが、わざわざ屋敷の中に使う
のは珍しい。道理で馬車の揺れが気になったはずだった。

「変わった趣向だな」

「わざわざ石畳ではないものを使う理由があるか？」

「さて。とりあえず、馬車では誰も眠りこけられないだろうが。単に
吝嗇なだけかもな」

トマスの評議会に選ばれる男が吝嗇家というのは、実際はどうで
あれ、体面としては好ましくないだろうと思われたが、そうした体
面を気にしない人となりということであれば、彼女の知る人物にも
似たところがある。クリスは苦い表情になった。事ある毎に誰かと
比較して考えてしまうのは、良くない癖だと自分でもわかっていた。

「……馬の蹄には、悪そうだが」

「ご婦人の足にもな」

ケッセルトがにやりとして言った。苦虫を噛み潰した顔で、嫌々ながらクリスは男の腕をとる。慣れてはいないとはいえそれだけで無様に転ぶようなつもりはないが、だからといって男を拒否したところで、屋敷に入る時にはそうしなければならなかった。

無個性な道のりから続く屋敷も外観的には特徴に乏しかった。決して小さくもなければ雑な作りでもないのが、周囲の殺風景もあつてやけに寒々しい。檜木の扉の前では家人と思われる男が直立して招待客を待ち構えていた。特に変わったところのない身なりをした黒服の老執事がケッセルトとクリスから手渡された書状を確認し、一礼した。

「お待ちしておりました。ケッセルト・カザロ男爵様、クリステイナ・アルスタ女爵様」

古くから続くアルスタ家は子爵の位を持つが、ツヴァイでは女性の当主格がそれを用いて呼ばれる場合、子爵でも男爵でも女爵と呼ばれるのが通例となっている。いまだ正式に家督を継いではいないクリスだが、すでに名代としてトマスも訪れているから、それを公的な場で用いられることもおかしくはなかった。

横に立つ男の襟の歪みに目がいき、口にしかけて、クリスは男の髭が綺麗に剃られているのに気づいて思いとどまった。故意にやっているのなら、指摘するのも馬鹿らしいことだった。

案内役の侍女に先導され、二人は広間に通された。出入り扉に立っている若者が老執事から連絡を受け、招待客の来訪を一同に知らせる。

「ケッセルト・カザロ男爵、クリステイナ・アルスタ女爵！」

向けられる視線にはとりあわず、クリスは部屋の内装へと目をやった。さすがにここでまで卓と椅子、絵画等が不足しているようなことはなかった。奥まった場所で演奏している楽団の姿も見える。

あちらこちらで、既に集まった招待客が歓談を始めている。宴席の開始予定までまだ半刻程の余裕があった。

食事に移る前の社交も重要な会の一部ではある。学生時代、わざと直前に訪問するようなことが多かったクリスマスだった。

「コーネリル男爵はどちらかな」

「あちらでございます」

ケッセルトから訊ねられた老執事が視線を向けた先で、その主人と思われる人物が二人に足を向けていた。

緩く波立った髪を自然に後ろに流した男は、やや目尻のさがった顔のつくりの主だった。表情に甘い笑みを浮かべている。まだ若く見えた。確かコーネリル男爵は今年で二十五だったな、とクリスマスは思い出した。クリスマスよりは年長だがケッセルトよりは若い。社会的には中堅に入ったばかりといった頃合だった。

「初にお目にかかります、カザロ男爵、アルスタ女爵。本日はよくぞいらっしやいました」

「お招き頂き感謝致します」

礼を述べたクリスマスは、コーネリルの視線が何かを求めていることに気づいた。ふとして思い至り、意外に思いながら右手を差し出すと、にこりと微笑んだコーネリルがその手をとって一礼した。貴族式の挨拶だが、相手がよほど高貴な立場でないなら簡略化されることも多いものだった。

「アルスタ様。ご活躍を知りながら今まではお話しする機会がありませんでした。嬉しく思います。今回はとんだ不手際でご連絡が遅れ、申し訳ございませんでした」

「とんでもない。お気になさらずに」

空々しい社交儀礼には、クリスマスも相応に応じるのみだった。頷いて、コーネリルはそのままケッセルトに視線を移す。

「カザロ男爵。遠くから長旅のところ恐縮です」

「かまわんよ。美味しいもの、用意してくれてるんだろ」

粗暴な物言いに眉をしかめたのはクリスだった。催主は人のよさ
そうな笑顔を崩さない。

「精一杯のものを用意させて頂きました。お口にあうとよいのです
が」

「所詮は戦場暮らしの身だ、たいした舌は持ってないさ。ところで
一つ聞きたいことがあるんだが、いいかい」

「なんでしよう」

「玄関前に敷かれていた砂利には何か意味があるのか？」

軽い口調でケッセルトが訊ねると、コーネリルは恥ずかしそうに
眉を寄せた。

「意味などと、大層な考えのものではございません。私、石商を営
んでおりまして、どうしても大量に余るものですから、何かに役立
てることができないうだけで」

「なるほどな。石畳を洗う理由でもあるのかと思ったんだが」

「お恥ずかしい。トマスでは悪目立ちしてしまったようで、馬車を
利用されていらっしやるお客様方からは苦情も頂いているところで
して……」

「トマスは恵まれてる土地だからな。仕方ない　ああ、悪い。別
に文句をつけたかったわけじゃないんだ。むしろ興味があったのは、
あれがこちら向きだったからでな」

「何かご入用の際には、是非」

ケッセルトは肩をすくめた。

「まあ、石や岩ならタニルの周りにいくらでも余りまくっているん
だがね」

「残念です。しかし、それ以外にもお役に立てることがあれば何な
りと」

「そうだな、その時はよろしく頼もつ」

「はい。喜んでお手伝いさせていただきます。　　まだご挨拶できていないお客様もいらっしやいますので、私はこのあたりで。今宵はどうぞごゆっくりとなさって行ってください」

また後ほど、と言葉を残して去っていく男を見送りながら、クリスが感想を述べた。

「社交辞令にまで商売気を見せてくるのは、さすがとしか言いようがないな」

「それが一番わかりやすい自己紹介になるからな」

商人同士ならまた異なるが、貴族相手に自分という立場を売り込むには有効だった。物のわかった人物なら意図を見抜き、もしもそれでこちらを見下してくるような相手だった場合には、いざ商売をするのにも与ししやすい。

「それで。わざわざ聞くまでもないようなことを口にしてまで、何を確かめたかったのだ」

クリスが訊ねると、男は唇の端を持ち上げた。

「人聞きが悪いな。例の件、タニルの名前を出せばがつついてくるかと思っただが。さすがに抑えがきいてるな」

「商人で二十半ばといえはまだ若い。それで店の看板を背負って、トマスの上層に認められた人物だからな。そう甘くはないだろう」

ケッセルトはにやりとした。調子を変える。

「話の種はこちらが握ってるんだ。向こうから切り出してくるまでは、せいぜい楽しませてもらうとしようか」

男の気楽な態度に呆れながら、クリスは内心で慎重に考えていた。タニルから帝都へ上る途中のケッセルトを強引な誘いで宴席に招いたのだから、そこで何かしらの行動に出てこないはずがない。一件の鍵を握るのがケッセルトであることは確かであり、それこそを彼女は注意しなければならなかった。クリスはケッセルトを味方と考えていない。帝都派、トマス派などという括りではなく、男は生粋

の快樂主義者であるからだつた。

だからこそ彼女がこの場所に存在する意味がある。

アルスタはツヴァイの剣である。そこに不逞な企てがあるのなら、それを白日の下にさらし、叩く。幼い頃からそうあるべしと教えられてきた生き方に、彼女は迷いを抱いていなかった。

タニルの領主であるケッセルトと帝都から滞在するクリスの二人は、当然のように目を惹く組み合わせだった。その日の宴席はトマスの上層部といえる人々が定期的に集うものだが、ケッセルトはそこに招かれた主賓である。

立场上、評議会に連なる人々やその他の招待客にケッセルトを紹介するのはクリスの役割となる。開席前の社交を忙しく過ごすうちに、クリスは新たな来客の存在を視界に捉えた。

「なんと。そのようなことが？」

「よくあることです。ボノクスの兵は精強だ。いや、あれはまず在り方が違う」

「なるほど……。しかし、今までにもそうしたお話を聞くことはありませんでしたが、やはりこうして直接聞くと、迫力といえますか、ものの説得力が違いますね」

「語り慣れているのでね。気になる女性を口説くのに、戦場話は使えます」

「それは我々には真似できません」

数人を相手どって口舌軽やかなケッセルトに合図を送ると、男も視線だけでそちらを窺った。

細身の男性とそれに連れ添う若い女性が客間に入ってきたところだった。傍に立つ若者が今日一番の声を張り上げ、誇らしくその人物の来訪を告げる。

「ルートヴィヒ・ベラウスギ公爵！ イニエ・ベラウスギ公女！」

アルスタ家と同じく興国から続く名門。ではあるが、二代皇帝シエハンの早逝により起こった後継問題のあおりを受けて主流から追いやられたアルスタ家とは異なり、常に中央社交の只中に君臨して

きた誠の意味での名家の人物達には、貴ぶ者の気品さが生まれながらのものとして備わっていた。

短い白銀の髪を頭に抱くルートヴィヒ公爵が一足を進めれば、それだけで周囲の目が吸い寄せられる。無数の視線の針を受けて微笑みをたやさない仕草には超然とした気配さえあった。帝国でもっとも高位を戴く大貴族であり、同時に帝国の経済を支配する十数名の大商人の一人でもある。特別といえばこれ以上の特別はない。

だからこそ、帝都とトマスに火種が燦るのだった。特別な存在とはつまり至尊の身、皇帝とその一族を表す言葉でもある。

クリスはルートヴィヒ公爵の傍らの相手に注視した。

イニエ・ベラウスギ公女はベラウスギ家の長女である。ベラウスギ家は長男に恵まれず、ようやく生まれた幼子を流行り病でなくしてしまった公爵夫人は大いに嘆き悲しんだ末に心を病み、ついに怪しげな魔術に傾倒するに至った。夫人が療養の為に遠くの地に出された現在、彼女はベラウスギの血を継ぐ唯一の人物だった。ルートヴィヒ公爵もまだ壮年とはいえ、ベラウスギの次代が一体どうなるかという疑問は、トマスに生きる人々にとって捨て置くことのできない関心事である。

確か歳は十六。過去にはクリスやケツセルトも在籍していた帝都の大学に通っていたところ、故郷で起きた騒動を耳にして一時的にトマスへ戻ってきていた。クリスも何度か話をした覚えがあるが、やはり人並み以上に美しく、聡明な子女であった。

いつの間にか歓談の輪から外れたケツセルトが口元を緩めている。男はクリスにだけ聞こえる声で囁いた。

「ふうん。ありゃ、いい女になるな」

「貴様はそればかりか」

「間違っちゃないだろう。どんな女だっていい女になる。恋して、

憎んで、情念に焦がればな」

「……ふざけたことを考えているのではなかるうな」

「さてね。美味しい酒だからな」

答えになつていないことを言い、男は空になつた杯を掲げて近く
の侍従を呼び寄せた。代わりの酒杯を手に、語る。

「何よりもまず軽やかにあるべきだ。それでいて、飲んだらぐつと
重い方がいい」

「酒の好みなど聞いていない」

「女の話さ。その点、お前さんは飲む前からして少し重すぎるな」

「くだらぬ事を。貴公の前で女であるうとした覚えはないぞ」

「そうだな。そろそろ鎧の一枚、剥いでみせてくれてもいいと思つ
わけなんだが」

苦笑するようにケッセルトが言つて、口を閉じた。男の様子に視
線に向けた視界で、ベラウスギ家の二人が真つ直ぐに彼らの下へと
向かってきているのが見えた。クリスは居ずまいを正した。

「お初にお目にかかります。ケッセルト・カザロであります、公爵

閣下」

「ようこそ、男爵。壮健そうで何よりだ。女爵」

「お久しくあります、閣下」

歳にしては渋みの薄い声音には、それまで生きた年月の長さで深
みがまざつてよく抑揚が効いている。公爵は自らの傍に顔を向けた。

「イニエ。ご挨拶を」

「イニエ・ベラウスギでございます。はじめまして、カザロ様。お
久しゅうございます、アルスタ様」

ドレスの端をつまみ、まだ少女といつてよい相手は優雅に一礼し
た。非の打ち所のない完璧な所作を見ながら、そういえば公女とサ
リュは同じくらいの年頃か、とクリスは考えていた。水と石に守ら
れた貴族令嬢と、恐らくは今も砂に吹かれています。水と石に守ら
れた少女を比べることに意味はないが、人の在り方に思いを馳せ

るきつかけにはなる。いや、やはりただの感傷だ。同齡多彩な人生などどこにでもありふれている。

「会えるのを楽しみにしていた。卿の武勇伝を聞きたがっている者も多い、よければ紹介したいのだが」

ケッセルトはにやりと笑みを浮かべた。

「喜んで伺わせて頂きましょう」

公爵直々に誘いがきたことに多少の驚きを感じ、公爵の案内で室内を歩き出しながら、クリスはふと視線に気づいて自分を見上げている公爵令嬢を見た。

女性としてはやや長身のクリスを眺め、令嬢が羨望の態で言った。「アルスタ様はいつも凜としていらっしやいますが、今夜は特に美しくいらっしやいますね」

「ありがとうございます。イニ工様こそ、大変お綺麗でいらっしやいますよ」

世辞ではなくクリスは本心を述べた。

「嬉しいです。わたくし、アルスタ様とたくさんお話をしてみたかったです。今までいつもご挨拶くらいしかできませんでしたから」「私でよろしければ、いくらでもお付き合致します」

「本当ですか？ 嬉しい、ありがとうございます」

「はい。あまり話が巧くはありませんが、ご容赦くださいませか？」
クリスはケッセルトと交わっていた時とはまるで異なる表情だった。特に意識したものではない。同性のいわゆる良家の子女と呼ばれる人々の相手を苦手としていたのは過去のこと、サリュと同じ年頃、という先ほど頭に浮かべたことも影響してはいるが、年少者への親切は彼女生来のものだった。

「ご令嬢。面白い話でしたら、自分にも少し自信がありますか」

睦まじい様子の二人を茶化すようにケッセルトが言った。公爵令嬢は軽やかに微笑んだ。

「お父様から、悪い男の人には気をつけるよう言いつかっておりますの」

「これはこれは。一目で見抜かれましたか」

「いいえ。けれど男の方とは皆、そうした気分があるものではないかもしれませんか？」

令嬢が可愛らしく小首を傾げる。聡い返答にケッセルトは大きく笑った。

「まさに。世に悪くない男などありませんな、閣下」

「そうだな、男爵。男とはそうあるべきだ。だからこそ親としては心配もする」

穏やかなやりとりを聞きながら、クリスは内心で嘆息を漏らした。いきなりの会話が既に抜き差しならない線上で交わされている。まさに社交の会話と言うべきだった。

公爵が向かった室内の上座に位置する円卓にはクリスの知る顔が連なっている。いずれも高名な商家の人々で、全員ではないが、この場で巷でいうところの評議会が開けそうな顔ぶれだった。

「皆、御機嫌よう。本日の主賓をお連れした」

「ケッセルト・カザロです。ご一同、どうぞよろしく」

居並ぶ人々は油断のない笑みでそれに応えた。ケッセルトの隣でその表情を眺めながら、クリスは自らに刺さる冷やかな視線の存在にも気づいている。

トマスには帝都から訪れているクリスを快く思っていない者も多かった。彼女の態度に、トマスの人々へとおもねり、迎合する素振りがなくともそうした空気を助長している。かといって、悪意があつてそうしているわけではない以上、誤解や風評を気にする彼女ではなかった。

「コーネリル男爵はまだ挨拶回りに忙しいはず。ひとまずささやかな乾杯としよう」

ルートヴィヒ公爵が侍従から酒杯を受け取り、ケツセルトへと掲げた。

「それぞれ、杯の用意はよろしいか。では、遠き地より参られた勇者を歓迎して」

続きを促されたケツセルトが応える。

「トマスと帝国と。平和に」

クリスが平然としていたのは、隣に立つ人物がそういう男であると知っていたからだ。それを知らない周囲の誰もが涼やかな表情のままではさすがだが、自然すぎる反応にかえって不自然さが露わだった。そうした反応こそをケツセルトは求めていたに違いなかった。男は全くもって性格が悪かった。ニクラスもそうしたやり口を得意としていたことを思い出したクリスが不愉快になったのは、二つの理由による。

「トマスと帝国の平和に。乾杯」

声にも仕草にも一分の揺れなく公爵が言った。

唱和が続く。透明な器の中で酒が揺れ動き、室内灯を受けて鈍く煌いた。

歓談は、しばらく他愛もない話に終始した。

トマスを代表する商家の一同が集まっているのだから、場にあがる話も自然とそうした類のものが多かった。物の値段や今年の不作税についての不満や流行りの噂など取り取りの話題が交わされる中で、それを生業としない相手に配慮した話も向けられる。

「カザロ男爵はトマスは久方振りでおられるのかな？」

「先年の戦勝祝いの行軍以来になりますな」

「それはまさしくボノクスとの。そういえば、カザロ男爵とアルスタ女爵はその頃からの知り合いでしたな」

「いえ。はじめて出会ったのはその前に、帝都の大学で。自分は一

年しかおりませんでした」

「お二人の帝都大でのお話でしたら、私も幾つか見聞きしておりますわ」

「悪評ばかりでしたでしょう、イニエ公女」

ぬけぬけと言い放つケッセルトの隣で、一緒にするなと口を挟みたいところをクリスはぐつと言葉を飲み込んだ。

「そのようなこと。国の威信をかけた模擬戦でアルスタ様が他の殿方にまじってお見せになったご活躍など、今でもお茶会の席で語り継がれております」

「おお、さすがはアルスタ女爵でいらっしゃる」

「いえ。お恥ずかしい話です」

「ふむ、その時に俺は何をしていたかな」

「卿なら確か、女性を口説くのに懸命だったと思うが」

クリスが冷ややかに言い、ケッセルトがおどけて肩をすくめてみせた。周囲が笑う中で、クリスは考える。その時にケッセルトが対峙していたのがあのスムクライの女性だったと言えば、彼らの反応は全く異なるだろう。ポノクスを主導する四氏族の一つを知らない者はないが、容易にだすべき名前でもない。道化を演じるケッセルトも同じ考えでいるはずだった。

「では、久しぶりのトマスは如何ですか。今は戦火も落ち着いているとはいえ、国防衛の砦たるタニルとでは色々と違いもあるでしょう」

話題が移ったことに、クリスはわずかに意識を鋭くした。ケッセルトが言う。

「そうですね。やはり人と物の量に目を眩りますが、意外と懐かしいと思えるところもありました」

「ほう。例えばそれは、どのような？」

「今日、ここに来るまでにも感じました。踏みしめた地面から」

問いかけた相手がげんに眉をひそめる。答えたのはイニエ公女だった。

「お屋敷前に敷き詰められた砂利道のことですらっしやいますね」

「左様です、公女」

「砂利の道。ああ、確かに馬車がひどく揺れましたな、あれは」

「細かな石や砂利で道を踏み固めるといふのは、戦場でもよくある手法です。トマスのように、石積みのように、手ごろな大きさの石を選んで運ぶ労力がいらぬのがいい」

「なるほど……。いや、コーネリル卿も決してお金に困っているわけではないのでしょうか」

それを聞いたケッセルトが笑みを強めたのは皮肉のものにクリスには見えた。男は決して、砂利敷きを卑下しているわけではない。持ち上げた唇の隙間に肉食獣の牙が覗いていた。

「なにやら、噂をされているような気がしました」

主催者でもある若者がやってきて話に加わった。

「コーネリル男爵。君の屋敷前の砂利は、いつ石畳に変える予定なのだね。いつまでもあれでは評判もよくないだろう」

「ああ、ですね。確かにそうなのですが」

困ったようにコーネリルが口ごもるのに、ケッセルトが口を挟んだ。

「せめてもつと踏み固めるか。あるいはいつそのこと、馬車の方に手を加えるといふのはどうだろう」

驚いたようにコーネリルが眉をあげる。

「馬車に、ですか？ カザロ男爵の領地では、何か特別な処置があまりになるのでしょうか」

「さて。見方を変えてみるというだけの話だが。トマスのように人も材もあるならともかく、そうでないところなら砂利といふのは有用だ。その道は遥かに容易く、長く伸びる」

ケッセルトが言った。一瞬、真剣な表情になったコーネリルが、

この場の本分を思い出したようににこりと取り繕って微笑んだ。

「発想の転換というわけですね。カザロ男爵にはどうやら軍才だけでなく、商売の才能もおありのようでいらっしゃる」

「なに、考えるだけで実際やるのは面倒になる性質でね」

「まさにそうした方々をお助けする為に、我々のような者がおります」

相手の意図を汲み取った仕草で一礼し、コーネリルが言った。

クリスがちらりと周囲を窺えば、今の話を理解したもの、理解できずにいるもの、それぞれの表情が並んでいる。近く遠くで歓談をかわしながら、ベラウスギ公爵以下からの視線も注がれていた。つまりは役者が揃い、様子見はこれまでということだった。

居並ぶ商人達の中では若いコーネリルが口火を切った。

「時にカザロ男爵。最近、商いをして気になる噂を耳にします」

「いったいどのような噂だろう」

「東にて、新たな水源が見つかったというものです。しかもそれが、なにやら普通の水源ではないと。ラタルクの地を治めるカザロ男爵には、お聞きおぼえがありませんか？」

婉曲な台詞に、ケッセルトは即答しなかった。居並ぶ人々から向けられる視線を受けてむしろ心地良さそうな間をおいた後、口を開く。

「それは確かに、事実だな」

「なるほど。では今回の上都もその件で」

くだらないやりとりではあるが、あくまでケッセルトは極秘に帝都へ報告を送っただけであるから、必要な手順ではあった。ケッセルトは頷いた。おお、と一同が声を成した。

「それは素晴らしい。長く枯渴にあえぐラタルクに再び水が沸くなど、水天の恵みに他なりません」

「ああ。しかもその水源、どうやらなかなか枯れそうになくてね。」

興味深いところだ」

「それは」

コーネリルが意外そうに口ごもった。クリスも驚いている。名言は避けているとはいえ、特別な水源を示唆するケッセルトの言い方はあまりにも開けっぴろげで、話を隠すどころか出し惜しみする気配さえなかった。

高貴な身分の人々が思わせぶりな言葉と仕草で楽しむ恋愛劇のような迂遠な探りあいを予想していた一同は、そのケッセルトの態度をどのように捉えるべきか思考したに違いなかった。その沈黙を破ったのは、先ほど砂利道の話を理解できていなかった某商家の男である。

「何はともあれ、そのような発見があったことは我々にとっても朗報。どうです。詳しいお話は後ほど、別室にていたしませんか」

その発言は場の雰囲気を慮ったものではあったが、あるいは話の主導権をコーネリルから自らに引き戻す目的も含んでいた。

「自分はこの場所でもかまいませんが」

ケッセルトが言った。挑発するではなくとも、からかうような口調である。

「いや、しかしですな、ここにはご婦人方もいらっしやいますので……」

失言だった。評議会といわれる意思決定機関がトマスに存在することは周知の事実だが、だからといってどこか別の席に移すのに葉巻や遊戯ではなく、女性を理由に持ち出すのはいかにも礼を逸している。卓を囲む夫人や同伴した婦人達の眼差しに白けた輝きが掠った。

「水沸く天啓を喜ばしく思うのには男女とも変わりありません。私も是非お聞きしたい話です」

クリスが言った。結果的に、女性だからと話から締め出されるこ

とがなくなつたのは彼女にとって都合がいい。

「いや、しかしですな」

男が助けを求めるように周囲を見回した。迂闊な物言いで外様の存在であるクリスにまで口実を与えた男の無様さに、他の商家達の反応は笑んだまま冷ややかだった。

「あら、わたくしも是非お聞きしたいですわ。フリユグト様。それとも、お邪魔になってしまえますでしょうか」

助け舟をだすように言ったイニエ公女の台詞が駄目押しとなる。少なくとも、現時点で将来のベラウスギ家を継ぐ最有力でもある彼女からそのようなことを問われ、断れる人間はトマスに存在し得なかった。贅沢に慣れた下膨れの顔をひきつらせ、男は頭を振った。

「とんでもございません、公女様、ですが」

「水は奪いあうものではない」
それまで場の推移を見守っていたルートヴィヒ公爵が静かに言葉を挟んだ。

「灼熱の炎罰に焼かれた我らを哀れみ、包み、癒してくれる万丈の地の恵み。それを独占し、己がままにすることは罪でしかない」

公爵は水天の教えを謳っていた。黄金に酔い、富を求めて奔走する商人の一人でもある人物がその台詞を用いることに、クリスはおかしみを覚えた。本音と建前という話ではない。そもそもツヴァイ国教である水天教の人々からして、その教義と立場で多大な利益をあげている。

ケッセルトから聞くまでクリスの耳に入らなかった時点で、トマスが今この場にいる人々が、水源発見の話を意図的に留めていることは疑いようがない。それがわかりきった上で、公爵は続けた。

「ならばそれは奪うのではなく、広める為存在しなければならぬ。トマスはその為に存在しているのだ」

奇麗事のような言葉にクリスは公爵の真意を考える。その台詞はいつたい誰に向けられているのか。居並ぶ商人か、それともケッセルトなのか。自制か牽制、それだけではどちらともとれる言葉だった。

「その機が訪れたのなら謹んで使命を果たそう。話の続きをお聞かせ頂きたい、カザロ男爵」

「かしこまりました、公爵閣下」

応えるケッセルトの表情にクリスは見覚えがあった。戦場であつて、状況が自分の描いた通りに進んでいることを確信した時に見せる表情だった。

百戦錬磨のトマスの商人連中を相手にして、男の才幹は決して不足していなかった。タニルという差配微妙な土地を治めていたケッセルトの有能さをクリスは認めないわけにはいかなかった。

それを理解することだけにこの一晚が費やされるといふのなら、明らかに勝者はケッセルトとなるだろう。帝都からの召還途上にある男は明日にはこの街を出る。トマスが何かしらを企む為に、話を仕掛けるのは今日の夜会以外になかった。

一人の失言で先手をくじかれた形の彼らがどう切り出すか。それを望んで心待ちにするような態度のケッセルトに、呆れまじりの頼もしさと同時に確かな不安を抱きながら、クリスは手に持った杯を傾ける。

夜は長く、ふと顧みれば場には開宴の声さえかかつてはいない。思惑渦巻く社交の真髄はこれからだった。

場が開宴の刻時に至った。

催主であるコーネリルが乾杯の挨拶に立ち、大広間に集った客達が手に碗を持ち声を挙げる。緩やかな楽奏とそれぞれの卓席で再び談笑が再開された。五十人を越える招待客と給仕に働く使用人が入り混じった大広間に息苦しさはなかったが、その上座に位置する円卓には周囲と微妙に異なる雰囲気がある。

「百年？ それは確かに尋常ではない。それこそ水天のご加護ということか」

「しかし、ラタルクの一帯は枯渇していたのでしょう。いったい何故」

「先年の戦の折、あの辺りは確かに一切が枯れ果てましたよ。私の商隊もとんだ目に遭いました。流れる血が水を枯らす。そのような噂も流れましたね」

「ああ、ありましたな。西の中陸が滅んだ話の。あれでしょう」
ケツセルトが語った水源話を肴に、トマスで知られた大商家達が囁きあっていた。

彼らの表情と口調はその発見に大いに興味をそそられてはいたが、色めき立つまでの様子ではなかった。あるいは当然だろうか。彼らが新しい水源の存在をとうに知っていたのなら、今日までに既に仲間内で会合を持ち、それについて語らっていないはずがなかった。

例え内心でどれほど驚喜していても、首から上では平然とそ知らぬ顔をして見せるのが商人というものではある。しかしそれならば彼らにとってこの夜会がどのような位置づけになるだろう。ケツセルトから水源の存在を直接聞き、今後は堂々と口に出れるというだけでも意味はあるにせよ、たったそれだけの為に密使の内容を知らなければ不可能なタイミングで招待の手紙を出すというのは、如何

にもありえない。

催主のコーネリルが卓を離れた後、彼らは近しい者同士で話している。あえて突っ込んだ話をケツセルトに向けようとする相手もなかった。先ほど話の主導権を取ろうと悪手を打った男など、卓の隅で片身が狭そうな有り様である。

公爵の台詞から場の話題がさらに深いものに進むのだろうと内心で身構えていたクリスにしてみれば、いささか拍子抜けの感がある。あるいはコーネリルが不在だからかとも思ったが、あの若輩の商人が場にいなければ何もできないなどという生易しい連中ではない。

できないのでなければ、しない、と考えるのが妥当だった。機を待っているのか、人を待っているのか。これもまた駆け引きというものか、といつまでも慣れぬ空気に彼女は嘆息を押し殺した。少なくとも、周囲の商人達の表情から窺える思惑は僅かもない。ならば目を凝らして力を入れる分、こちらが疲れるだけだった。

クリスは隣に立つケツセルトの様子を窺った。わからないといえはこの男もそうだ。自分の手札を惜しむ様子もなくさらけ出し、今は気分よさげに酒を飲んでいる。帝都に向かう途中でありながら、驚くほど簡単に水源の存在を明かしてみせたものだが、果たして独断でそのような行為が許されるものか彼女には疑問だった。もちろんトマスの大商人達がその情報を知っていたことはほとんど確定と考えてよいが、口外するなという達しがあつたわけではなくとも、まさか口外せよなどという命があつた可能性はありえるだろうか。彼女は男の意を確かめたかったが、宴の席上では難しかった。わからないことばかりだ。自分の社交の不得手を苦々しく思っているクリスに声がかかる。

「クリステイナ様は、あ、失礼致しました」

口元に手をあてて謝罪するイニエ公女に、クリスは首を振って答

えた。

「クリステイナとお呼びください。まだ正式にアルスタを継いだ身でもおりません」

「ありがとうございます。クリステイナ様は、お酒はお飲みになられないのですか？」

「ええ。お恥ずかしながら、強くありませんで」

「そうなのですか。実は私も、あまり……」

頬に手をあてた公女の顔色が赤い。彼女の手にした碗の中身が果実酒の薄さではなく濃い蒸留酒の色あいであることに、クリスは眉をひそめた。

「イニエ様、お加減は大丈夫ですか」

「ええ。平気です。今夜は、少し暑いですね」

確かに人の多い空間ではあるが、そうした感想は特に公女一人の体感であろうと思われた。砂漠の湖上に浮かぶトマス街は、夜には中心部まで緩い風が吹いて身体を冷やすほどだった。

二人の様子を見たケツセルトが言った。

「まだ始まったばかりだしな、少し外で風にあたって来ればいい。なんなら俺が付き添おう」

異を唱えかけ、クリスは考えを改めた。

「では、卿にお願いしよう。すぐに私が冷やを持っていく」

「信用ないもんだ」

苦笑いをしたケツセルトが、上気した表情の公女に恭しく右手を差し出す。

「ではお手を頂けますか。ご令嬢」

「いえ、ですが」

公女が戸惑った仕草で父親を見る。ルートヴィヒ公爵が頷いた。

「ご好意に甘えなさい。手数をかけるな、男爵」

「とんでもない。麗しいご令嬢のお手をひけるといいうなら、役得と

いうもの」

余計なことを口走る男に周囲の男性陣は不快げだったが、ケツセルトは気にも留めずに令嬢の手をとり、見せつけるような態度だった。やはり違う。あんなやつがニクラスに似てなどいるものかとクリスは頭を振った。

近くを通りかかった給仕に冷水を頼み、ふと気づけばクリスが居る卓で、彼女と周囲に微妙な距離感が生まれている。決して露骨ではないが確実に存在する壁は今さらのことではなく、さらに言えばトマスに来てからのことでもなかった。

大学に入ったばかりの頃は中央に戻ってきた過去の名家と嘲られ、トマスに来てからは帝都の目付け役として疎まれた。祖先から血脈として続く彼女の内心、その頑固な在り方が周囲に好ましくなかったのは事実だが、彼女にとってはどうでもいいことだった。

少なくともあの頃、自分は一人ではなかった。何を考えているかわからない男の存在が傍にはあった。

俺はずっと一人だった。

不意にクリスは喉の渴きを覚えた。砂海に投げ出されたような飢えの衝動は、手にした果実水を飲もうと癒されない。彼女が好きでもない酒を欲しくなるのはこんな時だった。だからこそ絶対に飲んでやるものかとクリスは自分に突っぱねた。ろくなことにならないとわかっていた。

視線をあげて、一人の人物と目があう。親子ほども歳の離れた二人は互いに無言のまま視線を絡ませた。クリスを見やるルートヴィヒ公爵の眼差しに悪意はなく、何かの意図が含んでいるわけでもない。その視線は同じ認識を抱いた共犯者としてのものだった。その指すものをクリスも理解している。

公爵はニクラスの存在を知っていた。一年前、公爵夫人の重用した呪い師が起こした魔女狩りの裁判に家名を捨てた男が弁護人として立てたのは、公爵の手配があったからである。もちろん善意ではありえなかった。帝都からの謀略であったかもしれないとニクラスが言った、その始末に利用して都合がよいからこそだった。公爵はトマスの領袖、そしてニクラスの生家は帝都で差配する宰相クライストフ家である。

彼と公爵の間にどういった会話が交わされたのか、裁判まで全て秘密にされていたクリスには知る由もない。ニクラスが街の暴動に巻き込まれて姿を消した後、クリスと公爵が暗黙の了解で互いにその事実を隠したのは政治的な配慮からだった。彼女にとっては不本意だったが、帝都とトマスの関係を思えばそうするしかなかった。自分の存在を明るみにしたくないからと、暴動の収まらない街中に出了た男の意思を彼女は知っていた。

深い色合いをした公爵の双眸と対すれば、憤然として沸き起こる想いが彼女にはある。しかし、クリスはそれが八つ当たりに近いものであると知っていた。少なくとも、男が彼女の元を去ったのに目の前の人物の存在は全く関わりがない。

透明に揺れる碗を持った給仕が戻ってきた。受け取って向こうの公爵に一礼し、クリスはケッセルトと公女の後を追った。彼女がいなくなれば、卓に集う人々はすぐに仲間内で話を始めるだろう。クリスもまた、それを彼らの為と思つてするわけではなかった。

談笑と楽の音と香りが人の気配とまざつて混沌とした場をクリスは歩く。毅然とした美貌を見せる彼女の表情は外向けに凍り、身体は窮屈に拘束されている。心がどうしようもなく乾いていた。

大広間に面した中庭に設けられた石椅子に二人の姿を見つけ、クリスは安堵した。ケッセルトもまさか公女相手に無礼は働くまいが、それでも男の手癖の悪さを知っているから油断はならない。

「クリステイナ様」

彼女に気づいたイニエ公女が顔を向けた。屋敷に到着してからの短い時間の間に陽は落ち、周囲には深い闇が広がっている。室内灯から離れて顔色までは窺えないが、公女は風に晒されたせいか先ほどより口調がはっきりとしている様子だった。

「お水をお持ちしました、イニエ様」

「ありがとうございます」

「もう少しゆっくりでもよかったんだがな」

石の長椅子に座る令嬢の前に護衛よろしく立つケッセルトが言った。令嬢の下には男がどこからか調達したとみえる敷き布がひかれている。

男の言葉を無視して、クリスは硝子碗を令嬢に手渡した。そっと受け取り、上品な仕草で飲んだ令嬢が、それを見守る二人の視線に照れたように首をすぼめた。

「恥ずかしいですわ」

「ああ、申し訳ありません。失礼しました」

「もつと近くで見たいところですよ　睨むなって。冗談だろ
うが」

くすくすと笑みを漏らす。

「お二人は昔からのお知り合いということですが、本当に仲がよ
しいですね」

「いえ、そのような」

「ただの腐れ縁です、ご令嬢」

「戦場の縁は血よりも濃く、水よりも尊いと聞きます」

身体のうちに残った酒精を吐き出すように公女が言った。当たり障りのない答えを探したクリスが答えに詰まる。代わりにケッセル

トが答えた。

「確かに。生死を共にした間柄には、ただその一事で深い繋がりが生まれます。しかしそれは味方に限ったことではない。敵の存在に感じることもありません」

「争っている相手に、ですか？」

「はい」

不思議そうに令嬢が瞳を瞬かせる。ケッセルトはいつになく真剣な表情だった。

「砂海での行軍には、まず相手と接敵する事に大変な困難が付きます。足元は流れ、景色が惑い、喉は渴き目が眩む。一日中を歩いて、野営先であてにしていた水場がないこともある。いくら熟練の兵でも一滴の水を飲まずに歩けるわけではない。戦場まで立えない兵。名誉の為に戦うことすら出来ない兵。冗談でもなんでもなく、本当にそんなものが出てしまう。砂漠を歩くことは苦しいのです。荷を担ぎ、限られた水と食料で、だからいつしか足が止まってしまう。都合のよい幻を見て列を離れてしまう。故郷から距離が離れてしまえばしまうほど、疲れてしまえば疲れてしまうほど、その誘惑は耳元で強く訴えかけます」

「……砂の誘惑」

「我々はそれを、砂の声を聞く。といいます」
ケッセルトは言った。

「だからこそ砂海を越えて敵に会えた時、嬉しい。苦行から解放してくれる存在に巡りあえたことに感謝します。兵は敵への憎しみとそれと等しいほどの悦びで殺し、殺される」

強い言葉に令嬢が絶句した。これ以上は刺激が強すぎるとクリスがケッセルトを諷めようとして、令嬢の表情にためらった。暗がりの中で衝撃を受けた様子だった令嬢は、しかし強い意志の眼差しを男に向けている。

「どちらにしても、死があるのですね」

「そうですね。大いなるものに惑うか、人の手によるか。たったその違いでしかない。しかし、それこそがまさに違うのです。死は常に我々の生の一步前にある。誰にとつても。砂はその象徴だ。そこに踏み出す者に敵も味方もありません。互いにちっぽけな存在として大いなるものに抗う、矮小な一人と一人があるだけです」

「だからこそ、それを経た縁は強い？」

「ええ。同時にひどく脆くもある」

「何故ですか」

ケッセルトは淡々として言った。

「一度飢えてしまえば、ご令嬢。血も水も変わらない」

「ケッセルト、やめる」

クリスが強い口調で遮った。言葉の意味のどこまでを理解してのものか、令嬢が睫毛を伏せた。

「……恐ろしい世界なのです。わたくしなど、想像もつかないほどに」

「トマスは恵まれた地です。考えもつかないのは当然だ。しかし、知るべきではある。トマスであれタニルであれ、誰もが砂の上に生きていくのだから。さて、ご令嬢」

そこで言葉をきり、男はからかうように声の調子を変えた。

「そろそろ酔いは醒められましたか？」

「ええ、おかげさまで、随分と」

公女は気丈に微笑んでみせる。クリスは息を吐き、ケッセルトを睨みつけた。

「貴公。悪趣味だぞ」

「そうか？ 女の趣味は自慢なんだが」

「ふざけたことを」

令嬢が身を震わせた。笑ったのではなく、吹き抜けた風に肩を抱いた様子に、クリスは自らの上掛けを剥いで公女へと纏わせた。

「クリステイナ様。大丈夫ですわ、わたくし」

「酒精の抜けた後には身体が冷えます。風邪など召されないうよう、どうぞ」

「……ありがとうございます」

はにかんで、公女が改めて自身の前に立つ二人を見上げた。

「まだお酒が抜けていないのかしら。なんだか夢のようです」

クリスとケッセルト、それぞれ帝国で名の通った二人を護衛としたかのような我が身を振り返っての素直な感想だった。ケッセルトは口の端を持ち上げ、クリスは薄いが温かな微笑を浮かべた。

「ああ、こちらにいらっしやいましたか」

室内からコーネリルが姿を現した。従えた女中の盆で温かな湯気が立っている。

「お加減は如何ですか、イニエ公女。お茶をお持ちしましたよ。カザロ男爵、アルスタ女爵もよろしければどうぞ」

「ありがとうございます、コーネリル様」

イニエ公女に続いて葉茶を手渡され、クリスもありがたく受け取った。特に嬉しくもなさそうなケッセルトが、碗の数が一つ余ることにはやりとした。

「ホストは大変だな。こんな役回りでもない息をつく暇もない」

「はは。ばれてしまいましたか。イニエ様、どうかご内密に頂けますか？」

「わかりました。わたくしの胸の中に秘めておきますわ」

公女の様子を見に行くと言えば、一時だけでも忙しさから抜け出す口実になる。自分の為なのだから公女が感謝する必要はない。そうした男の気遣いに公女は心得た笑顔で頷いた。四人が温かな碗を手に包み、囲んだ光景に可笑しそうに笑う。

「なんだかわたくし達、不思議な取り合わせですね」

「確かに。若い連中が揃って追い出された格好かな」
ケッセルトが言った。

場で最も年長である男もまだ三十には届かず、訪問客の中では若手である。熟練の業を必要とする工匠と同じく、一人前に認められるまで年数がかかるのが商人で、大店を構えるほどの大商家となればさらにそうだった。客の顔ぶれはほとんどが壮年期の後半から老齢に至っている（平均的な寿命が四十年程度であったこの時代、四十を超えれば既に老齢といつてよかつた。そして実際の寿命年齢には環境差が大きく関わってくる）。

誰もが成功し、また転落しうる商売の街トマスにおいても。あるいはだからこそ、上層部と呼ばれる人々はそうだった。伝統ともちろん才幹があつてではある。富める者はその富を用い、さらなる儲けを企む。

そうした意味では、この場の四人で最も特殊なのは養生中の夫人に代わり父親に付き添うイニ工女でも、異例の人事と評判になつた東境タニルの領主ケツセルトでもなく、次期女当主として名代でトマスに駐在するクリスでもない。二十半ばでトマスを支配する大商家達の一人として 例え末席とはいえ 肩を並べるハシト・コーネリルという存在こそが異色だった。

男は穏やかな笑みを浮かべている。一代で財を成したやり手の商人というよりは、二代目、三代目あたりの気のいい跡取りといった感があつた。当然それだけではありえない男の優しげな顔を皮肉るように、ケツセルトが言った。

「商売上でもそれ以外も、嫉みやつかみ。さぞ気苦労も多かるうよ」
コーネリルはやんわりと首を振った。

「とんでもない。私の不徳と致すところですよ」
クリスはコーネリルについての噂を思い出した。確かにその中には悪意じみたものも多く含まれていた。

ある噂は、コーネリルの婚約について相手の爵位こそが目的だつ

たと語っていた。名はあれど貧困にあえぐ貴族の未亡人を娶ったのはてつとりばやく家名を手に入れる為で、夫婦仲ははじめから冷え切って別居同然であるという。それどころか夫人は与えられた金で何人もの愛人を囲い、氏もそれを黙認しているのだそうである。下卑た噂が世に流れるのは常のことで、それを鵜呑みにするのは愚かしい。しかし今宵、催主を務めるコーネリルの傍に夫人の姿はなかった。

そうした事実の一片だけを誇張して、また新たな噂が広がるのに違いなかった。真偽について本人に尋ねられるはずもなく、クリスは今は闇に落ちる周囲に目をやった。庭園や屋敷周りの景観にはその家の主人両名の嗜好が表れるというが、屋敷に來た時のことだけを考えれば、日が昇ったそこには閑散とした風景が想像できてしまふ。

「まあ、向こうからしてみれば、若い連中が悪巧みをしてるって図にも見えるかもしれん」

「悪巧みですか」

「そうとも。例えばさっき、あんたに活躍の場をとられたあの男なんて、内心どう思ってるか。悪意に理由はいらない。生み出すことも、捻じ曲げることだってできる」

ケッセルトが言った。コーネリルは小さく苦笑を刻んで男の冗談半ばの悪意をやりすごそうとするが、ケッセルトが追い込んで続ける。

「評議会とやらに入りはしたらしいが、そんなもの砂上の楼閣だろう。一代で財を成した者は、一代で消える。このトマスでは特にそうだ。それを超越した立場にはなれない」

挑発の言葉に、コーネリルは表情の笑みをそのまま首を振る。

「カザ口男爵が何を仰りたいのか、わかりかねます」

「商談をしようと言ってるのさ」

男は素早く左右に視線を動かした。動揺というよりは、困惑に近い反応だった。

場にはイニエ公女とクリスの姿がある。トマスを支配する評議会と揶揄される組合の長でもある大貴族の令嬢と、帝都から送られてきた人物を前にして、確かに口にする話題ではなかった。やっかいな相手に絡まれた男に同情する気分で、クリスはそ知らぬ顔を通すことにする。

「……この場であえてそのようなことを仰る魂胆、やはり私には計りかねますが」

「そういう男だつていう風には、調べはついてなかったかい」

「お噂は数々。色々と計り知れないお方であるということでしたが、実際そのようで。先ほどから驚いてばかりであります」

「そりゃよかった。で、返答は？」

からかうような声だが、本気が冗談かわからないのがクリスの知るケッセルトという男の手口だった。何も考えていないような態度で、相手を悪辣な罠に嵌める。

イニエ公女とクリスという存在もある状況での唐突な申し出。それらの意味するものと、自らの置かれた立場について即時の心算を計り、コーネリルが笑みを収めた表情で答えた。

「私は商人です。どの場であろうと、商いのことでしたら喜んで承ります」

しかし、と続ける。

「一つだけお聞きしたい。何故、この私に？ まさか歳が近いから共感して頂けたというわけではないでしょう」

「そりゃ違う。いや、案外近いかな。だが理由はある」

「お聞きしても」

「砂利、届けてくれるんだろ。タニルまで」

ケッセルトが言った。言葉の意味を掴めずにクリスは眉をひそめ

た。イニエ公女も不思議そうにしている。

しばらく反応のなかったコーネリルが、堪え切れなかったように笑みを漏らした。

「なるほど」

今度ははつきりと苦笑を浮かべ、感嘆と嘆息が混じった息を吐く。「タニルまで手前の石が運べるというなら、商人としてこれ以上の喜びはありません。どれほどのことができますか、非才非力な身ではありませんが、お手伝いさせて頂きましょう」

「よく言う」

ケッセルトが唇を歪めた。コーネリルが笑顔でそれに応える。

コーネリルはイニエを見た。この場で彼が商談を行う意図を、わざわざ口にして伝える意味はなかった。公女もそれを理解した表情でいる。男はクリスには一瞥もなかった。クリスは黙して場の成り行きを見守った。

「さて、カザロ男爵。商談ということですが、具体的には一体どのようなお話でしょう」

「なに。教えて欲しいだけだ。うちの近くで見つかった水源で、いったい何をたくらんでるんだ？」

言い放ったケッセルトは、まるで振舞われる酒の銘柄を訊ねるように気楽な口調だった。暴言としか思えない男のやり口にも多少慣れてきたのか、コーネリルは余裕のある笑みを崩さない。ちらりとクリスを見て微笑んだのは彼女を馬鹿にしたのではなく、内心で冷静であるよう努めている心情を察してのものだった。

「……正直に申し上げれば、もう少し具体的なものを要求されるかと思いましたが」

「今はそんなもんよりよほど必要なもんがあつてね」

「私は若輩であり、まだまだ至らぬ身です。先ほどカザロ男爵のおっしゃられたとおり、組合にもつい先日認められたばかり。その私

が、身内の情報を売ると？」

「別にトマスを売れなんて言っちゃないさ」

ケツセルトは言った。

「敵対しろとも言ってるねえ。そんな馬鹿な話をする奴がいるか？

いるわけない。俺が言ってるのは、円滑に話を進める為の手伝いをお前さんにしてほしいってことさ」

「物は言いようと申しますが……」

コーネリルが困ったように視線をそらした。ちよつどその先に佇むイニエ公女が男の視線を受けて口を開く。

「それがトマスの益を損なうものでないのでしたら、コーネリル様どうぞ貴方の思うがままになさってください」

コーネリルが無言で頭を下げた。見守るクリスはその意味を正確に把握した。

トマス領主であるルートヴィヒ公爵の長女であるイニエ公女の前で、トマスに叛旗を翻すことなどできるわけがない。ケツセルトの言ったとおりだった。ここで交わされる会話はイニエを通して必ずルートヴィヒ公爵の耳に入ることになる。

それでいて、この場であえて話をする理由。ケツセルトはコーネリルと、イニエを通してルートヴィヒにも言葉を向けているのだった。公女という立場はそれだけで社会的なものになる。そして彼女は聡明だった。そのことは返答の内容に表れている。トマスの益を損なわなければ、と彼女は言った。

「どうする。卿にも悪い話じゃないと思うが」

コーネリルは熟考するように沈黙した。無理もなかった。トマスがケツセルトを招待して働きかけようとしていた何らかの企みについて、コーネリルが他の評議会の面々のないところで話をするということとは、もし企みが成功したなら彼の功績は多大なものになるが、逆に失敗の責も全て背負い込むことになってしまう。相手がケツセ

ルトなどという型破りな男である以上、慎重な性格なら二の足を踏んで当然だった。

男の答えを待つケッセルトは未来を知っているかのような表情だった。その表情を嫌らしく思いながら、クリスもケッセルトと同じ想像を抱いている。

「わかりました。お話ししましょう」

男はゆっくりと頷いた。にやりとケッセルトが笑んだ。

「さすがに話がわかる」

「大きな商機を前にして踏み出せないのなら、商い人とは言えません」

「危機を察して自重するのも才能だと思っぜ？ 我ながら、自分が優良品とは思えないんだ。売値が下がる程度ですめばいいが」

「もしそれで損なうようなら、私の器量がそこまでだったということでしょう」

男の言葉にクリスは潔さを感じた。若くして大店を構える器だった。

「お察しの通り、我々がカザロ男爵をお呼びしたのは意図があつたこと。長く枯渇していたラタルクに水が沸いたという噂を聞き、我々はその情報が正しいものであるかどうか急いで人を使い、話を集めました。全ては先ほどベラウスギ公爵のお言葉通り、この事態にトマスとして出来ることを考えてのものです」

クリスは皮肉な感想を抱いたが、口には出さない。

「東の大河川、トマスからボノクスへと繋がる商水路は大きく南に弧を描いています。その弧円の中、水源の枯れた彼の地から人が去り、無数にあつた陸路が途絶えて既に久しい。今、その場所に水場が沸いたということは天佑に他なりません。水あるところに人は集い、物は流れる。そうした状況を我々は望んでいる。いえ、そうした状況を作れると思っっています」

「ほう？ 作るとは、つまり」

心躍らせた気色でケッセルトが促す。頷いたコーネリルが厳かに告げた。

「ここトマスからラタルクに向けて伸びる新たな河川水路を築きたい。それが我々トマスの商人の抱いている大きな望みです」

ジュスター・ベラウスギが唱え、帝国内に長年をかけて整備されてきた河川水路は、文字通りツヴァイの骨格を成す建造物である。

トマスを中心に伸びた水路は流れる砂海の中で惑うことのない確かなしるべとして一本の道を示し、それを利用した安全な物流を可能とした。水陸一の大国と成り果てたツヴァイにとり、もはや水路の存在なしにその国体を維持することすら困難である。

最も古い水路が建造されてから既に二百年が近い。帝都ヴァルガードから南南西のトマスへ、さらにそこから河川は北、西、東へと伸ばされた。一つは北方、冷砂の地サシュナへ。西はナトリア公国の抱く水源へと繋がり、南から弧を描いて東へと掘り進められてタニルの南を抜ける水路の一端がボノクスに至る。それは東の水源クシファを征していた時期に設けられたもので、その地は現在ボノクスの手にあった。征服というか奪還というかは各々の立場で異なるが、その水路が両者のいわば密接な敵対関係とも呼ぶべき関係の基にあることは確かだった。

ツヴァイ・ボノクス間の目に見える境、すなわち領水線として、今も河川の途上では両国が睨みをきかせている。そうした状況で重要な意味を持つてくるのが水路の北部拠点であるタニルの存在だった。迎撃、遊撃、どちらも可能な前線地としてタニルは東国境防衛の要となる。

「河川。水路。ラタルクにか、大事じゃないか」

そのタニルを預かるケッセルトの口調はからかうようなままだった。相変わらず世間話でもしているかのような軽さで、事の重大さを理解していないのではないかとクリスは一瞬疑いそうになった。

それに対する男は商売人特有の慎重さに塗り固められた笑みで、二人の男はそれぞれの態度のまま視線だけを互いから外さなかった。

「トマスからナタリアへの水路が完工して以降、実に百年近く振りになります。事はトマスの総力を挙げた一大工事となるでしょう」

「素晴らしい。河川作りとなれば大量の石材が要る。お前さんの店も随分と潤うことになるだろうな」

「そのような事態になれば嬉しい限りではありませんが。しかしラタルクー帯に活気が戻るのです。その地を治めていらっしやるカザロ男爵にこそ喜ばしいことではございませんか？」

コーネリルが言った。

「おいおい、勘違いしてくれるな。俺はあくまでタニルの領主ってだけで、ラタルクを治めてるわけでもなんでもない」

数年前にトマス東部、南から弧を描いて伸びる円弧の内水源は枯れ果てている。人は去り、航路は滅びた。水源なき土地を治める者がいないのは、それに何の意味もないからだった。ツヴァイ帝国においてその周辺一帯は今現在、誰の領化でもない微妙な空白地と化している。

「今現在、ラタルクの平穏がどなた様の手によるものか知らぬ者はおりません。少なくともこのトマスにおる者は皆そうでしょう」

「世辞としちゃ下手だし、餌だってんなら埒外すぎてな。総じて言えばうさんくさい」

ケッセルトの反応は愉しげだった。いつの間にか両者の間で会話の受け攻めが交代していることに、クリスはコーネリルの静かな口調の裏側に潜むものを確かめようと神経をとがらせた。

コーネリルが柔らかく答える。

「とんでもない。そうあるべきではないかと、あくまで私個人が思う次第。せつかく活気が戻ってもそこに争いが絶えぬようではあまりに悲しすぎます。私ども商人は何よりそのことを危惧しておりま

す」

男の言い様は既にラタルク地帯の復活を前提としているようにもとれた。クリスが眉をひそめ、ケッセルトは目を細めて見下した表情をつくる。

「どうにも見え透いてやしないか。まだ見つかったばかりで調査も入っていない水源に、いくらなんでも見込みが早すぎる。一応、お前さん方はさつき俺から聞いて水源のことを知ったってことになってるんじゃないか」

「我々商人の間では常々、物事には鮮度が大切だといわれておりますが、それは何も生きているものだけではございません。思えば砂吹く前に成せとも申します」

「ごもつともだが。心算は神のものならず、神算は人の手によらずとも言うんだがな。俺から聞いたわけじゃなくて、それが水源が見つかってからの話だとしても早すぎる。ある日、トマスの大商連中が全員で啓示でも受けたつてののか？」

「もちろんのこと、我々罪深き商人どもも皆が水天の御意思のもとにあります。全てその許し癒しがあつてこそと心得ております」

「そう言いながら金貨何枚で背を向けてみせるから、俺は商人つて連中が好きなのさ。人それぞれ必要な重さは違うんだろうが。“心の測り”とはよく言ったもんだ。黄金の崇拜者。教会の連中から指差されて非難されるのも道理だな」

コーネリルは心外だとばかりに沈痛な顔を作った。

「誠に悲しむべき誤解です。我々どもほど彼の方々の在り方に共感している者はありませんのに」

「そりゃそうだ。連中こそ、大した商売人だからな」

ケッセルトが大きく笑った。神職にあるものを工商人と同列視するなど、相手によれば眉をひそめられるだけではすまない。異端審問員に聞かれなどしたらどうするのかとクリスは素早く周囲を見回したが、まるで気にする素振りもなかった。

男はコーネリルの切り返しがひどく気に入った様子でしばらく腹を抱えた後に息をついた。

「なるほど」

得心した様子で言う。

「最近、こつちじゃてんで動きがないからな。南の小競り合いに、執心とばかり思っていたが、そういうことか。人と物も、確かに戦争どころじゃない規模だよな。小さな国の蓄え程度では賄えない程の。つまりはそういうことか。それにしてもあまりにタイミングがよすぎるが」

コーネリルは答えず、口元に笑みを浮かべた沈黙を返した。

「自分達の商いの為ならなんでもやる。巷に溢れてる噂にしちゃあ、まだ穏便か。なにせ水路だ。それで誰かが死ぬわけじゃない。そのはずだ」

「男爵のおっしゃられている噂というのはよくわかりませんが、河川水路の存在は多くの人にとって幸になるかと存じます」

「よく言う。まあ、面白そうな話ではあるな」

「カザロ男爵なら必ずそのように言っていただけのもと思っておりました」

「地元まで水路が繋がるってんだ、悪い話に聞こえるわけがないな。しかし、あの砂海に川を渡すなんざ正気の沙汰とは思えんが」

砂海には流れがあり、その流れは一定ではない。場所や時期、またはそれらと全く無関係に思える不定周期で姿を変えることが、砂海の何よりやつかない性質だった。そこに沸いては枯れる無数の水島は、恐らく地下で何かしらの動きが常態として行われていることの証かと思われたが、それ以上のことはわかっていない。

「しかも場所が枯渴したラタルクだ。他のところみたいに水島が点々とあるわけじゃない。やはり無謀なようにしか思えんね。何の目安もなしにどうやって掘り進めようってんだか」

「それについては私からはなんとも申せません」
ケッセルトが鼻を鳴らした。

「ベラウスギ家門外不出の技か。とつくに廃れたもんかと思っ
たが、考えてみればそんなわけがないよな」

二百年の昔に初代ベラウスギ公爵が成し、代を重ねながら今
までに四本の開通をみた水路工事で、砂海の流れを縫う道のりをいかに
見出したか、その計測技術は公にされていない。帝都ヴァルガード
には水陸中から学者が集った大学があり、その魔術的な所業の実際
について研究もされていたが、彼らをもつてしても解明できてい
なかった。帝国の最高権威者である皇帝にその技術が召し上げられ
ていないという事実が、まずベラウスギ家の特別な待遇を示している。

トマスとタニルの間には結ばれる、新しい河川水路。耳にした言葉
の実現性について、クリスはそれがどの程度の公算がたつものなの
か考えようとしたが、まるで見当がつかなかった。人も物も、考え
もしたことがない規模で動くことになることだけは確実だった。ト
マスの、いや、ツヴァイ中の資源が利用されるだろう。戦争どころ
ではない、といったケッセルトの言葉の意味を彼女は理解した。こ
れはそんなもの以上の、商人達の一世一代の商いなのだった。

そうした企みが容易くこの場で明かされたことに素直に驚きなが
ら、内心にはどこか釈然としない違和感がある。その糸を探ろうと
してクリスはふとイニエ公女の姿に目がいった。

令嬢は無言で目の前の会話を聞き届けている。公爵令嬢とはいえ、
彼女が父親達の考えを知っていたとは考えにくかったが、驚いた表
情も露わにせず静かだった。先ほどケッセルトに戦場話を聞いてい
た時もだが、とても普通の令嬢とは思えない胆の太さがある。

視線に気づいたイニエ公女がクリスに小さく微笑んだ。クリスは
目を逸らした。

「まだまだ聞きたいことはあるが、とりあえずこのくらいか。独断でお前さんが話せるのは」

「ご理解がはやくて助かります。私どもとしてもタニルまで河川を通そうとするのなら、カザロ男爵には是非にもご協力をいただきたいと考えております。お話はまた後ほど、しかるべき時と場所に、しかるべきお方からあるかと」

「そうしてもらえると助かるね。これでも帝都に上がる途中の身だ。またタイミングよく、招待状で届けてくれるんだろう？」

「カザロ男爵のご趣向に沿えるよう努めさせていただく所存です。さて、少し冷えてまいりました。中へと戻りましょう、そろそろ舞踏の時間になります。ここにいらっしゃる方々を心待ちにしている方も大勢でしょうから」

「ということだが。ご令嬢、お加減は如何かな」

「もうすっかり大丈夫です。クリステイナ様、ありがとうございますました」

「恐れ入ります」

イニエ公女の手から上掛けを受け取りながら、クリスは先立って歩き出した男達の背中を見やった。一寸の戸惑いを振り切り、口を開く。

「コーネリル男爵、少しよろしいだろうか」

「　　　　　。なんでしょう。アルスタ女爵」

振り返った男は微笑を浮かべていたが、それまでにない冷ややかさが含まれていた。

今までケッセルトとコーネリルの交わしてきた会話は全て、自分が蚊帳の外に置かれることで聞くことができたものだという事はクリスも理解している。今ここで口を開くことは、そうした暗黙の了解と相手の善意を裏切ることになるが、それでも彼女は立場上、男に訊ねないわけにはいかなかった。

「ご令嬢。四人が同時に戻るよりは目立たない。先に我々だけ参り

ましよう」

「ええ。ですが……」

ケッセルトがイニエ公女と共にその場を去ってから、クリスは改めて口を開いた。

「無礼を承知の上でお聞きしたい。なぜ貴方がたは水源の情報を隠していたのですか」

「隠匿？」

「誤魔化さないでほしい。今日ケッセルトの口から聞くまで、私はそのことを知らなかった」

「……偶然、女爵のお耳に入らなかったというだけでは？」

「それはありえない」

男の台詞は明らかに冗談としてのものだったが、クリスは応じなかった。コーネリルが苦笑を浮かべた。

「そちらの立場は理解しています。私は帝都から駐在する身だ、決して好まれていないということも承知している。しかし私はトマスで何か異変があれば報告しなければならぬ。不要な摩擦を起こしたくはないからこそ、お聞きしたい」

「お噂どおり、随分と開け広げな物言いをなされるのですね。カザロ男爵とは少し違います」

呆れたように言い、コーネリルは小さく息を吐いた。

「真つ直ぐ。といえば聞こえがいいが、あまりに余裕がなさすぎるのも問題でしょう。恐れながら、少しばかり女爵より長く生きてきた人間として申し上げさせていただきますが」

クリスは黙ったまま反論しなかった。二十年を生きて、自分の性格の愚かしさなど今さら言われるまでもない。その彼女の態度に男はもう一度嘆息を吐いた。

「しかし、だからこそアルスタ女爵なのでしょうね。個人的には、貴女のような方は嫌いではありません。商いをしてはまずお目

にかかれなからこそというのもありますが」

「では」

「残念ながら。私からお伝えすることはできかねます」

目を伏せかけた彼女に、ただし、と続ける。

「あくまで商売の中で起こりうる一般的なことについてなら。宴席の中でお話すこともあるでしょう」

「……感謝致します」

「あくまで商売でよくあるお話です。感謝される謂れはありませんよ。確か、商人同士の間で噂が留められていることがあった場合、でしたか」

クリスは頷いた。男は肩をすくめた。

「商人がするからにはそれは儲け話の類でしょうね。では女爵、何か設け話があった時、商人はどういった行動に走ると思いますか。つまり、その儲け話について」

「それは。自分が儲かる為の行動を、とるのでは」

「その通り。たとえば何々が売れるらしいと聞けば、すぐにそれを買い占めようとします。そうするとどうなります」

「物の値段があがるのではないだろうか」

商人ではないクリスだが、その程度の知識は持ち合わせていた。アルスタ家の治める地では御用利きの商人もあり、そうした話を行ってもいる。いずれは彼らとも折衝しながら領地の経営も行わなければならぬ身だった。

「はい、商売とは需要と供給、それを見極めて捌くことです。簡単なようでこれがなかなか難しい。売れると聞いて買い漁ったものが実際にはまるで売れず、ただ破滅と混乱を招くようなことも多々ある。だからこそ情報、質、速度、それら全てが重要となるわけですが」

男はちらりと屋敷の中を窺うようにしてから続けた。

「問題なのは、その破滅と混乱が一人だけでなく、周囲にまで影響を及ぼすことです。考えてみてください。ある商人が嘘の噂にのっかり、ある果物を買ひ占めたとする。当然、その値段は上がります。高くとも買ひ人は買ひますが、買ひない者もいる。金があつても買ひない場合もある。ない物は売れませんか。それが嗜好品の類ならいいが、食料などであつたらそれで飢えてしまひ人が出る場合もある。それでいてその食べ物が高く売れなかつたら？ 品物は売れもせずに倉庫で腐るだけでしょう。これはいささか極端な例ですが」

「つまり、今回の いえ、そのような場合、混乱が起きないようにする為の？」

コーネリルはにこりとして言つた。

「もちろん、需要を見抜いて利益を稼ぐのは、商人の本懐ではありません。しかしながらその悪影響がとつともなく大きいような場合、例えば商人同士で慎重に事を運ぼうと話し合うようなことはあります」

「自分の儲けの機会を捨ててまで？ 失礼かもしれませんが、少しばかり意外に思えます」

思つたとおりのことをクリスは言つた。男が首を振る。

「少し違います。大きな儲けの機会を捨て、小さな儲けをとる為でしょうか。抜け駆けをすれば一攫千金の可能性はありますが、リスクをとらないでも儲けられるというなら、そちらを選ぶ商人もおりましょう。むしろ、大きく富んだ商人であればあるほど、賭けなどという不確定なものは嫌ひものですよ」

大きく富んだ商人。つまりトマスの大商家達のことだと悟る。

男がたとえ話にまぎらせて語つてくれた話の内容について、クリスはゆつくりと頭の中で咀嚼に努めた。儲け話、つまり河川水路の建築。国規模で人と者が動く、その中で自分の想像もできないほどの商ひが執り行われる。それを誰かが抜け駆けしない為には商人同士で連携をとる。ここまでがいい。しかし、それで何故情報を隠して

おく必要があるのか。

少し考え、唐突に思い至って彼女は呟いた。

「 中小商家の、抜け駆けを防ぐ為に」

コーネリルは答えなかつたが、表情が正解だと伝えていた。

トマスの大商家達がいくら足並みを揃えようとしても、トマスに
いる商人全てが大人しくしているはずがない。一攫千金の儲けを狙
い、暴走する輩も必ず存在するだろう。トマスには成功を夢見る人
々と、それに失敗して再起を図る人々が星の数ほどに存在する。

彼らの暴走を防ぐ為、まず情報の出所から口止めを敷く。トマス
の東で商いをする者、東から街に入って来る者を水際で把握して、
その時点で抑えることができたなら。一度噂が蔓延してしまった後
に比べれば、物事の制御ははるかに容易い。

納得はできる。商売話の類は専門外だが、道理のある話だと
クリスは感じた。しかし、と考えてしまうのは偏見がこびりついて
いるからかと思ひながらクリスは訊ねた。

「では。私から帝都への報告に水源の話があがっても、問題はない
ということだろうか」

トマスにいる大商家達が情報を隠していたのは余計な混乱を招か
ない為というが、そればかりではないように彼女には思えた。そう
した内側の理由だけではなく、外側の理由もあるのではないか。さ
すがに今聞いたもので心から納得するほど単純ではありえなかつた。

男は頷いて言った。

「それはもちろん。カザロ男爵もその為に都に上がられるのですか
らね。我々は不確定な情報のまま、混乱を起こしたくなかつただけ
です」

「ならば、ケッセルトから水源の存在について確証が取れた今、情
報を留めておく理由もないように思えますが」

「そうですね。今日の宴席を機に、水源の話も多くの耳に届くよう

になるでしょう。私どもが男爵をお招きしたのには、そういった理由もあります」

中小商家の抜け駆けを防ぐ為の手段を講じたという意味だった。その為の時間稼ぎとしても、情報を隠匿しておくことは必要だったという。それを自然に解消するきっかけとしてケッセルトのトマス訪問を用いる。

一々納得できる話だった。決して嘘ではないだろうが、しかしやはりクリスは微妙だった。ケッセルトの言ったことを思い出す。あの男も何か気になる部分があるようなことを言っていた。ケッセルトが言っていないかったことも思い出した。全てあっさりと言ったように見えた男だが、彼女には語り、まだ宴席の間では口外していないことがあることに気づき、そして目の前の若い商人の表情を見やっつて、つまり自分はまだ肝心なところを聞かされていないのだとクリスは確信した。

「……河川水路。件のことも、報告しても？」

「ああ。それは少し、困ってしまいますね」

あっさりとコーネリルが言った。

「水路については、まだカザロ男爵も知らないはずのこと。私どもがそうしたいと希望しているというだけです。それを水源についてすら男爵から報告の入っていない帝都の方々が知ってしまいますと、私達が危惧した以上の混乱が起こってしまう」

「それならば、どうして私に聞かせて頂けたのでしょうか」
単純に不思議に思えたので彼女は答えた。コーネリルが眉を寄せ
る。

「それを私にお聞きになるのも、少々困ってしまいますが」

「確かにそうだ。失礼致しました」

「いえ。アルスタ女爵が、トマスとヴァルガードの間を穏やかにされようと注力されているということはお聞きしています。無用な混乱を起こすようなことはされないと信じております」

ぬけぬけと言われ、クリスは思わず苦笑いを浮かべかけた。

「無用な災いは望むところではありません。しかし、それがヴァルガードの、ひいてはツヴァイに大災を呼ぶ企みであったならば、私は黙っていることはできません」

「さすがはアルスタ女爵。ご安心ください、ベラウスギ公爵の仰られたお言葉の通り、私どもトマスの商人は水を奪うのではなく、広めることを目的としております」

「それを聞いて安心しました」

社交じみた笑みで応えながら、クリスは考える。あるいは自分に話を聞かせることで、身動きをとれなくすることが目論見かもしれない。しかし彼女が日頃トマスで置かれた立ち位置では、今夜のように河川水路の話を聞くことは不可能だったに違いなかった。その点は認めたくないが、ケッセルトに同行したからこそその成果だろう

いや待て。今さらのように彼女は思いついた。私を連れてきたことで、あの男にはいったいどんな得があつたというのか。

善意、気まぐれ。いずれも彼女は納得しかねる。あの男は己以外の何者の味方でもないはずだった。自分を連れてきたのにも何か意図があつたのではないか。

クリスは自分を見るコーネリルの視線に気づいた。

「では、女爵。そろそろ中に戻りませんか」

「ええ。ありがとうございます、コーネリル男爵」

「ただの世間話ですから。私も些事から逃れられましたしね。……もしこれ以上の話を求められるのでしたら、それなりの相手をあたってみるべきでしょう」

男の横顔をちらりと窺って、クリスは答えた。

「そうしたことが苦手な性分です。自分の立場も理解しています」

「私どもは商人です。商談すら話を聞かないという者は少ないでしょう。それにアルスタ女爵ほどのお方なら、商売抜きでお付き合いしたいと考える方もおりますよ」

一瞬、不快になりかけて、男の表情に厭らしさがなくことにクリスは気を落ち着かせた。確かに商人なら、使えるものならなんでも利用するに違いなかった。つまりは自分は商人には向いていないのだらうと結論づける。

「ご忠告感謝致します。お返しにというわけではありませんが、ケツセルト　カザロ男爵の物言いはあまり気にされないことをお勧めします。昔から、冗談か本気かわからない男です」

「不思議な方ですね。豪胆というか、ただの軍人ではない、と評すべきか。いえ、失礼しました。忘れてください」

実際、確かにケツセルト・カザロは尋常な男ではなかった。クリスはそのことを十分に知っているつもりだったが、改めて痛感することになった。

クリスが戻った時、室内では既に舞踏が始まっていた。中央に開かれた場所に男女が対になり、ゆったりとした輪舞曲にあわせて身体を揺らしている。彼女の同伴相手であるケツセルトの姿もその輪の中にあつた。

社交舞踏は、決まった一人とだけ踊るわけではない。同伴した相手と必ず踊らなければならないというような決まりもなかった（できればそうすべき、というマナーは当然ある）。男の女好きな性格を知っていたクリスは、特に何を思うわけでもなく壁の華になってその時間を潰すことにした。

いくらか舞踏の誘いがきたが体調が優れないことを理由に全て断った。こうしたところがいけないのだろうか、とも思ったが、今は考えなければならぬことが多々あった。

トマスのこと、水源のもたらずもの、ケツセルトの意図について。帝国の将来とその憂慮に考えを巡らせるうちに時間が流れ、ふと彼女は自分を呼ぶ声に顔をあげた。目の前に見知らぬ若者が立っている。侍従姿のその男が緊張した態で告げた。

「カザロ男爵様より、お言伝です」

「ケッセルトから？」

「はい。先ほど、一緒に送られていたご婦人が体調を崩され、お連れの方が見つからなかったので、自分が見送つてくると。戻りが遅くなるようなら、その、よろしくと。その旨、お伝えするようにとのことでした」

「な」

クリスは絶句した。すまなそうに侍従の若者が顔を伏せた。

婦人を看病するのはいいが、それを自宅にまで送っていく。さらには同伴してきた相手に先に一人で帰れなどというのは、あまりに礼を逸した行為だった。あのケッセルトならありえるか、と苦々しく考えたところでふと思いつく。

いつの間にか舞踏は終わり、再び歓談の時間になっている。室内にいる人の数が少なく見えるのは、室内球技や煙草を目的として別室へ移動した人々がいるからだだった。見ればその中に主だった商家連中がいない。ルートヴィヒ・ベラウスギ公爵もその一人だった。

残った人々の中にイニエ公女とコーネリルの姿を見つけ、そのコーネリルが彼女に気づいてにこりと微笑んだ。それを見てクリスは自分の失態を悟った。

ケッセルトが女性を介抱することも、それを見送るというのもありえる話ではある。だからこそ、同伴した彼女と別行動をとることも納得せざるを得ない。

その男が、今この場から姿を消して大商家達と共にいないとは限らなかった。気分を悪くした婦人というのがそもそも男を誘うための小芝居かもしれない。この時代、室内球技や煙草は男性のものとされていた。そこに女性がまじることはできない。自分が物思いに耽っているうちに、宴席の始まり頃に牽制できていた別室での密談という状況をまんまと作らされたことになる。

痛恨の思いでクリスは齒噛みした。あるいはこうした状況を初めから考えていたのか。それは誰の意思によるものか。ケツセルトかコーネリルか、それともルートヴィヒ公爵かはわからない。唯一つはつきりと理解できたのは、今夜の敗者は自分をおいて他にはないだろうという苦い思いだった。

徐々に夜が深まり、招待客達がぼつぼつと帰り支度を見せ始める。ホストであるコーネリルに挨拶を残して去っていく人々の中で、クリスは大商家達が戻るのを辛抱強く待ち続けたが、彼らは一人として帰ってこなかった。ルートヴィヒ公爵も、ケツセルトもそうだった。

「……それではコーネリル男爵。私もそろそろ失礼させて頂きます」
「アルスタ女爵。左様ですか。かしこまりました、カザロ男爵がお戻りになられたら、私からお伝えしておきますので」
「よろしく願います」

平然とした男の口振りにクリスは一言もなかった。ケツセルトが今どこで何をしているのか確証がない以上、相手に何を問いつめることは不可能である。

唇を噛み締めるしかないクリスの目前で、ホストとしての役割を全うした男は柔らかな表情を崩さなかった。それが商人としてだけではない、人としての力量の差を思い知らせるようで、彼女は表情を隠すように頭を下げた。

「今夜は。色々勉強になりました。ありがとうございます」

「とんでもない。私こそお話できて嬉しかった。しがたい石商ですが、なにかお役に立てることがあればいつでもお声がけください」

「はい。その折には、是非に」

「クリステイナ様。外までお見送りしてもよろしいでしょうか。父がまだ帰ってきませんで、寂しくて」

二人の側にいたイニエ公女が言った。クリスは頷いた。

「恐れ入ります。それでは、コーネリル男爵。失礼します」

「はい。またお話できる機会を心待ちにしております」

男はにこやかに答えた。

広間から玄関へと短くない廊下を歩きながら、イニエ公女が不満をもらした。

「わがままを言って申し訳ありません。お父様だったら、室内球技となると私のことなんてすぐに忘れてしまうのです」

「男の方にはよくあることでしょうね」

答えながら、内心では彼らが話題にしているだろう話の内容に憂いでいる。結局、肝心なところでは見事に蚊帳の外に置かれてしまった。誰を恨むでもなく、ただ自らの未熟さを悔いている彼女を見上げたイニエ公女が言った。

「クリステイナ様。なにかおありになったのですか？」

「いえ。なんでもありません。夜会には慣れないもので、少し疲れしているのかもしれませんが」

「先ほど、外で少しお話になったことでしょうか」

イニエ公女は心から案じている表情だった。年少の相手に心配される自分を情けなく思いながら、クリスはあいまいに微笑んだ。

「自分が如何に物知らずか思い知っただけです」

「それをいうなら、私の方こそ。カザロ男爵のお話にも、ただただびっくりするだけでしたわ。自分がどれだけ恵まれている立場にいるのか、胸が痛くなりました」

「あの男の話が大げさなだけです。……決して、嘘ではありませんが」

戦場での苦労は彼女自身経験してきている。男が語らった全てを否定することはできなかった。

「……私、時々怖くなるのです」

細く長い睫毛を伏せた公女が言った。

「怖い？」

「自分でもよく、わからないのですが。トマスのことや将来のこととても不安になることがあります。父はいつも忙しいですし、母は今、遠くですのぞ」

「ああ、それは」

クリスは苦い気分で答えに詰まった。イニエ公女の母、公爵夫人が療養の為に遠く離れることになったのには彼女も少なからず関わっている。呪い師に入れ込み、結果的にトマスの暴動にまで発展した事態の原因でもある彼女へ同情するつもりはなかったが、一人娘であるイニエ公女の心痛については別だった。

「私でよろしければいつでもお話を伺いますよ。口下手で、何を言えるわけでもありませんが」

もう少ししましな言い方はできないものかと自分に呆れてしまい、クリスは渋面になる。イニエ公女が嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます。嬉しいです」

「はい。先日、帝都の友人から変わった茶葉が届いたのですが、それがなかなかいい香りのものでした。是非味わってみて頂きたいので、今度お暇でしたら我が家においでください」

「本当ですか？ ふふ、嬉しいです。近いうちにお邪魔しますね」

「ええ、どうぞ。お待ちしております」

こういった会話ならまだできるのだが。クリスは嘆息したが、この場合、トマスの最大権力者であるルートヴィヒ公爵の令嬢と特別な知己になる機会を得たという風には考えない彼女だった。彼女の社交の不得手は能力というよりは、思考そのものの差によるものといえた。

大半の招待客が去った後の玄関口からは人気が失われていた。冷やりとした外の気配を肌を感じながらクリスは振り返り、口を開いた。

「では、イニエ様。わざわざお見送りありがとうございました」

「はい。すぐにお手紙をお送り致します。ご訪問できる日を楽しみにしております」

用意された馬車に乗り込み、胸元で小さく手を振る可憐な令嬢の姿を見て口元を緩め、一礼する。走りだした馬車が景色を変え、車窓から覗く暗闇に浮かび上がる自分を見た彼女は表情から笑みを消した。

社交の夜が終わろうとしている。疲労感はあるが、それ以上に自分の不手際と聞き及んだ物事への様々な想像が勝った。水源、河川水路。例え自分が聞いたものが話の瑣末に過ぎなくとも、なんの成果もなかったわけではない。悔やむならそれは次へと生かすべきだった。

何はともあれ、トマスで起きようとしている一片は知りえた。ならばこれからも自分はいくまで自らの役割を果たし続けるだけだと心に決め、明日からの行動予定を立て始める。まずは明日、都に上がる前になんとしてもケツセルトと接触しなければならない。

実際のところ、この時点で彼女が知る事実は少なかった。タニル近辺で見つかった水場の詳細についてはもちろん、それが発見された状況に自分の知人が深く関わっていたことも知らず、またこれからも関わっていくことも当然知りようがない。

しかしそれは、知っていたところで恐らく意味がないことでもあった。クリステイナ・アルスタは器用な人間ではない。人並み以上に情が深く、人より思い悩むことが多いと、それで人を超えた以上の何事かができるわけではなかった。

彼女はあくまでツヴァイに仕える騎士として、その生き方は愚直を貫いて曲がりようがない。今はいない彼女の古い知人は過日そうした彼女を、笑いながら評したものだ。それでこそクリスだ、と。

今も耳に残るその言葉を、彼女は忘れることができなかつた。そ

れは生涯に渡って彼女の中に深く在り続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4128o/>

砂の星、響く声

2012年1月14日23時58分発行